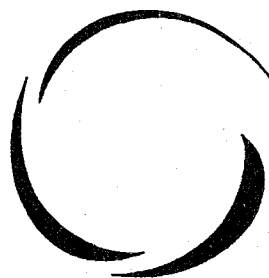

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

小田村 四郎（ 元行政管理事務次官
元拓殖大学総長 ）

オーラルヒストリー



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

小田村四郎オールラルヒストリー

目次

小田村四郎 略歴	6
----------	---

第1回 誕生から終戦まで（一九二三～四五）	9
-----------------------	---

誕生（一九二三）、関東大震災直後	11
------------------	----

小田村家とその家系	11
-----------	----

（1）父・有芳とその兄弟	
--------------	--

（2）楫取素彦と吉田松陰	
--------------	--

白金尋常小学校時代（一九三〇～三七）	14
--------------------	----

府立中学時代	16
--------	----

（1）二・二六事件直後の府立中学入学	
--------------------	--

（2）七年制中学	
----------	--

兄・寅二郎と日本学生協会	18
--------------	----

戦争勃発	20
------	----

東京帝国大学法学部入学（一九四二）	22
-------------------	----

召集から終戦まで	23
----------	----

（1）召集、野砲連隊に入営（一九四三）	
---------------------	--

（2）幹部候補生教育隊	
-------------	--

（3）陸軍経理学校に入校	
--------------	--

（4）陸軍航空本部経理部（一九四四）	
--------------------	--

（5）昭和二十年八月十五日	
---------------	--

（6）八月十五日以後	
------------	--

第2回 終戦から国税庁勤務まで（一九四五～五〇）	35
--------------------------	----

〔補〕吉田松陰親族系図	39
-------------	----

大学への復学と卒業（一九四五～四七）	40
--------------------	----

（1）大学への復学	
-----------	--

（2）新憲法の印象	
-----------	--

（3）高文合格、大学卒業	
--------------	--

大蔵省入省と理財局勤務	44
-------------	----

（1）大蔵省入省	
----------	--

（2）理財局国庫課への配属	
---------------	--

（3）外資一課への異動	
-------------	--

（4）為替三課への異動	
-------------	--

（5）大蔵省職員組合	
------------	--

（6）芦田・片山内閣とGHQ	
----------------	--

東京財務局勤務（一九四八）	53
---------------	----

主税局・司令部要員	54
-----------	----

国税庁の発足（一九四九）	56
--------------	----

GHQでの徴税業務	57
-----------	----

第3回 天王寺税務署長として替局資金課時代（一九五〇～五六）	61
--------------------------------	----

〔補〕GHQと国税局	65
------------	----

天王寺税務署長時代（一九五〇～一九五二）	65
----------------------	----

（1）大阪・天王寺	
-----------	--

第4回 防衛庁経理局と防衛局時代Ⅰ（一九五六～五九）

(2) 所得税関係	85
(3) 国税局との関係	89
(4) 朝鮮動乱とシャウプ勧告	90
独立の回復と警察予備隊	91
為替局資金課時代（一九五二～一九五六）	92
(1) 外貨予算	93
(2) 輸出と貿易外収支の予測	93
(3) オープン勘定と外貨危機	93
アメリカ行き、IMFコンサルテーション	93
神武景気の始まり	93
防衛庁出向まで	93
防衛庁経理局時代（一九五六～五七）	93
(1) 防衛庁経理局への出向	93
(2) 経理局会計課での仕事	93
(3) 経理局長と防衛庁長官	93
(4) 昭和三十二年予算概算要求	93
(5) 防衛分担金と安全保障諸費	93
(6) 防衛予算と米軍、MSA	93
防衛庁防衛局時代（一九五七～五九）	93
(1) 防衛局防衛一課への異動	93
(2) 防衛一課長・海原治氏	93
(3) 長期計画と年度業務計画	93
(4) 防衛庁の省昇格論議	93

第5回 防衛庁防衛局時代Ⅱ（一九五七～五九）

〔補〕防衛分担金	109
〔補〕国防会議事務局の誕生	113
統合幕僚会議の強化	114
次期防衛力整備計画	116
(1) 赤城構想の計画立案	117
(2) 陸上自衛隊	117
(3) 海上自衛隊	117
(4) 航空自衛隊	117
(5) 赤城構想の発表	117
FX問題（一九五八～一九五九）	125
(1) グラマンF11Fの内定	125
(2) 白紙還元とF104の採用	125
(3) 白紙還元以後	125
〔補〕人造米の話など	130

第6回 為替局と名古屋国税局と主計官Ⅰ（一九五九～六四）

〔補〕北海道出張、砂川事件判決	133
赤城構想、その後	137
六〇年安保	138
(1) 安保改定をどう見たか	138
(2) 自衛隊出動問題	138
為替局資金課（一九五九～六〇）	141
(1) 外国為替管理法の改正	141
(2) 国際収支統計	141
(3) 為替局の人々	141
名古屋国税局直税部長（一九六〇～六二）	145
(1) 国税局の仕事	145
(2) 直税部長の仕事	145
(3) 名古屋国税局の管轄	145

(4) 総務部長代行と対組合交渉	152
法規課主計官（一九六二・六～一九六四・七）	152

- (1) 法規課主計官とは
- (2) 農地報償問題
- (3) 予算関連法案の審査

第7回 主計官時代Ⅱ（一九六二～六六）	157
---------------------	-----

〔補〕資料紹介	161
主計局人物群像	162

(1) 石野信一、佐藤一郎、村山達雄	162
(2) 谷村裕、村上孝太郎、相沢英之	165
予算決定の仕組み	165

(1) 査定	165
(2) 内示から概算決定まで	165
(3) 歳入・歳出のやりくり	165
(4) 族議員、応援団、陳情	165
主計官時代の仕事	171

- (1) 国立大学
- (2) 核燃料再処理施設
- (3) ロケット、原子力船
- (4) 大学移転、教科書無償など

第8回 法規課長と大臣官房調査企画課長（一九六六～七〇）	179
------------------------------	-----

〔補〕特殊法人、財団法人	183
主計官から見た人物像	184

- (1) 文相（灘尾、愛知、中村）
- (2) 佐藤内閣・田中角栄蔵相
- (3) 選挙に出馬する官僚
- (4) 文部省官僚群像

法規課長時代（一九六六～六八）	188
-----------------	-----

- (1) 財政硬直化問題

- (2) 総定員法

- (3) 在外財産補償問題

- (4) 国債整理基金、国庫債務負担行為

- (5) 国会説明員、国立病院特別会計

大臣官房調査企画課長時代（一九六八～一九七〇）	195
-------------------------	-----

- (1) 大臣官房調査企画課の仕事
- (2) 経済企画庁、日銀との連携
- (3) 円切り上げの研究
- (4) 福田蔵相「財政演説」原稿
- (5) 経団連東欧視察団同行
- (6) E C A F E 総会出席

第9回 名古屋国税局長と内閣審議室長（一九七〇～七二）	205
-----------------------------	-----

〔補〕大蔵省百周年（一九六九）	209
-----------------	-----

- (1) 百周年記念講演
- (2) 『百年史』編纂

名古屋国税局長（一九七〇～七二）	211
------------------	-----

- (1) 国税局機構改革

- (2) 国税不服審判所

- (3) 対組合交渉

- (4) 三島由紀夫事件（一九七〇）

内閣審議室長（一九七一～七二）	216
-----------------	-----

- (1) 総理府と内閣官房
- (2) 災害対策基本法
- (3) 公式制度問題の研究
- (4) 沖縄返還とニクソンショック
- (5) 次官会議
- (6) 雫石事故と生田の崖崩れ

- (7) 海原治氏と防衛庁人事
- (8) 山中貞則総務長官
- (9) 防衛庁への異動

第10回 防衛庁経理局長時代（一九七二～七四）

〔補〕三島由紀夫と福田赳夫……………235

防衛庁経理局長時代（一九七二～七四）……………235

- (1) 四次防1——防衛庁原案策定
- (2) 四次防2——大蔵・防衛合意案
- (3) 四次防3——PXLの中止
- (4) 四次防4——10・7国防会議幹事会
- (5) 四次防5——10・8国防会議前日
- (6) 四次防6——10・9国防会議当日
- (7) 四次防7——後日談
- (8) 「文民統制の強化に関する措置」
- (9) 「平和時の防衛力」
- (10) 兵力定員とインフレ
- (11) 山中防衛庁長官
- (12) 防衛庁の意志決定
- (13) 単年度主義と長期計画
- (14) 継続費と総額変更
- (15) 日商岩井との契約問題
- (16) 為替リスク負担の問題

235 235 231

第11回 防衛庁経理局長Ⅱ・日銀・行政管理庁Ⅰ（一九七二～七六）

防衛庁経理局長時代（続）……………261

- (17) 雫石事件1——対応
- (18) 雫石事件2——論点
- (19) 雫石事件3——展開

261 257

第12回 行政管理庁時代Ⅱ（一九七四～七八）

〔補〕日米同盟という言葉……………285

行政管理庁行政管理局長（続）……………285

- (20) 長沼ナイキ裁判1——経緯
- (21) 長沼ナイキ裁判2——判決
- (22) F4空中給油装置問題
- 日銀政策委員会大蔵省代表委員（一九七四）……………270
- 行政管理庁行政管理局長（一九七四～七六）……………272
- (1) 行管庁の組織と権限
- (2) 行管庁の人員
- (3) 国家公務員数の削減
- (4) 特殊法人の問題
- (5) 局の増減問題

272 270

- (6) 行管庁長官の印象
- (7) 国家公務員定員削減計画
- (8) 訟務局
- (9) 週休二日制問題
- (10) 個人情報保護問題
- 行政管理事務次官（一九七六～一九七八）……………290
- (1) 事務次官として
- (2) 松澤、荒舩、西村長官の印象
- (3) エネルギ―省構想
- (4) 外務省中南米局
- (5) 国立学校定員の除外
- (6) 府県単位機関
- (7) 定年制の問題
- (8) 地方事務官制度
- (9) 事務次官人事1
- (10) 事務次官人事2

290

農林漁業金融公庫副総裁（一九七八～八五）	302
----------------------	-----

第13回 一九八〇年代から現在まで（一九七八～二〇〇四）

「補」防衛庁時代、行管庁時代	305
個人情報保護問題の推移	309
日本戦略研究センター	311
（1）活動	
（2）功績	
日銀監事（一九八五～九三）	315
（1）日銀の監査役	
（2）プラザ合意、バブル崩壊、BIS規制	318
天皇ご訪中反対運動（一九九二）	319
戦没者追悼平和祈念館を考える会（一九九四）	321
拓殖大学総長（一九九五～二〇〇三）	
（1）就任の経緯	
（2）拓大創立百周年	
（3）教科書正常化国民会議	
（4）大学内の諸問題	
「日本会議」の発足と活動	326
「昭和の日」「建国記念日」関係の活動	328
「日本女性の会」の活動	329
最後に――来し方行く先	329
追記「台湾との交流」（小田村四郎）	332

小田村四郎著述・寄稿目録	335
--------------	-----

登場人名一覧	351
--------	-----

あとがき	365
伊藤 隆	

小田村四郎（おだむら・しろう） 略 歴

年	月	事項
大正 12 (1923)	10月	東京、青山南町に生まれる
昭和 5 (1930)	4月	東京市立白金尋常小学校に入学
昭和 12 (1937)	4月	府立高等学校尋常科に入学
昭和 17 (1942)	9月	府立高等学校高等科文科乙類を卒業
昭和 18 (1943)	10月	東京帝国大学法学部政治学科に入学
昭和 19 (1944)	2月	東部第十二部隊（三宿）に入営
	12月	東京師団経理部幹部候補生教育隊（溝の口）に派遣
	7月	陸軍経理学校（小平）に入校
	11月	同校卒業、命経理部見習士官
昭和 20 (1945)	12月	陸軍航空本部経理部に勤務
	8月	命陸軍主計少尉、召集解除
	10月	東京帝国大学に復学
昭和 22 (1947)	3月	東京帝国大学卒業
	5月	大蔵省入省、理財局国庫課
	8月	理財局外資一課
昭和 23 (1948)	11月	理財局企画課（のちに為替三課と名称変更）
	7月	東京財務局経理部徴収第一課
	11月	大蔵省主税局（GHQ派遣）
昭和 24 (1949)	7月	国税庁総務部総務課（同右）
昭和 25 (1950)	5月	天王寺税務署長
昭和 27 (1952)	8月	大蔵省為替局資金課課長補佐
昭和 30 (1955)	7月	IMFコンサルテーションに随行して渡米
昭和 31 (1956)	9月	防衛庁経理局会計課

年	月	事項
昭和32 (1957)	3月	防衛庁防衛局第一課
昭和34 (1959)	11月	大蔵省為替局資金課
昭和35 (1960)	7月	名古屋国税局直税部長
昭和37 (1962)	6月	大蔵省主計局主計官 (法規課)
昭和39 (1964)	7月	大蔵省主計局主計官 (文部・科学技術担当)
昭和41 (1966)	8月	大蔵省主計局法規課長
昭和43 (1968)	6月	大蔵省大臣官房調査企画課長
昭和45 (1970)	5月	名古屋国税局長
昭和46 (1971)	8月	内閣官房内閣審議室長兼内閣総理大臣官房審議室長
昭和47 (1972)	6月	防衛庁経理局長
昭和49 (1974)	6月	日本銀行政策委員会大蔵省代表委員
昭和51 (1976)	10月	行政管理庁行政管理局長
昭和53 (1978)	10月	行政管理事務次官 (昭和53年7月)
昭和60 (1985)	7月	農林漁業金融公庫副総裁 (昭和60年7月)
昭和60 (1985)	10月	総務庁「行政機関における個人情報に関する研究会」メンバー
昭和60 (1985)	8月	日本銀行監事 (平成5年)
平成5 (1993)	8月	東京短資株式会社顧問 (平成7年)
平成6 (1994)	8月	「戦没者追悼平和祈念館を考える会」呼びかけ人
平成7 (1995)	6月	拓殖大学総長 (平成15年)
平成15 (2003)	1月	政策研究院でオーラルヒストリー (平成16年4月)

小田村 四郎

オーラルヒストリー

第 1 回

誕生から終戦まで（1923～1945）

【2003年1月22日（水）14:10～16:40】

（於：政策研究プロジェクトセンター）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

記録・編集：丹羽 清隆

■誕生（一九二三）、関東大震災直後

伊藤 今日はお生まれのところからお役所に入られるところぐらいまでのことをザッと伺おうと思っっていますが、よろしいでしょうか。

小田村 けっこうでございます。

伊藤 気軽にお答えいただければと思います。そこから後は、私の方で少し調べて、手がかりになるような質問をつくりますので、あらかじめお考えいただければと思います。こんな質問をしているけれどもこれには関係ないよ、ということも出て来るかもしれませんが。それをつくらせていただいて、お送りして、それで進めていく、ということにしたいと思います。先生のところには速記録が届きましたか。

小田村 海原「治」さんと天城「勲」さんのものが届きました。まだ拝見していませんが。

伊藤 だいたいあんな具合、ということですので、ご参考になさってください。読んでくださいというわけではなくて、一問一答のような形でやっているという形をもらいただければと思います。

小田村 はい。

伊藤 それではさっそくよろしいですか。

小田村 昔のことは記憶が間違っているかもしれませんが。

伊藤 それは誰でもそうです。そんなものを正確に覚えていたら、いま生きていられませんから（笑い）。先生は関東大震災の年にお生まれですね。大正十二「一九二三」年十月ですから。

小田村 震災直後です。だから震災のときは、母親のお腹の中にいました。

伊藤 青山ですね。

小田村 青山南町です。

伊藤 お宅は危なかったんじゃないですか。

小田村 いや、大丈夫でした。大震災は九月一日ですから、おそらく

学校の始業式で、子供たちが学校に行って帰ってきていたのかな、わかりませんが。

伊藤 お兄さんたちですか。

小田村 はい。

伊藤 先生は四男でいらつしやいますね。

小田村 そうです。家にて学校に行っていないのは、私のすぐ上の姉ぐらいいで、あとはみんな学校に行っていますね。三番目の兄が私より六つ上ですから、もう学校へ行っておりました。

伊藤 どなたも何の被害もなかったんですか。

小田村 ええ、被害はございませんでした。

伊藤 青山あたりはひどかったと聞きますが、そうでもないんですか。

小田村 青山はまだ山の手ですから、それほどありませんでした。母の話ですと、グラツときたときに猫がサツと庭に飛び出していったというんですね。やはり靈感が働くんでしょうか。

伊藤 震災のときには、いろいろな話がありますね。

小田村 そうでしょうね。私の父「小田村有芳」は、田村町、当時は桜田本郷町といったんですが、そこに会社がございまして、そこに行っておったんですね。伯父と将棋を指していたらしいんです。

伊藤 昼ですからね（笑い）。

小田村 昼ですから。グラツと来たので、伯父が将棋盤を抱えたという話があるんです（笑い）。あのへんはちよつと危なくて、消火を一所懸命やったようです。

伊藤 それだけのご家族で、どなたも何もしないことはなかなか幸いなことでした。

小田村 そうですね。ありがとうございます。

■小田村家とその家系（一）父・有芳とその兄弟

伊藤 お父様は会社を経営なさっていたということですか。

小田村 ええ、伯父の会社におったんですね。伯父は磯村音介と申しまして――。

伊藤 なんて姓が違うんですか。

小田村 私の父が養子なんです。

伊藤 お父様が養子なんですか。

小田村 はい、そうなんです。

伊藤 じゃあもともとは磯村家なんですか。

小田村 磯村家なんです。磯村音介というのは、明治四十二年に日糖事件（*1）というのがありますが、そのときの大日本精糖の専務です。それに連座したというか、中心者かもしれない（笑い）。収監されて、出て来たんですが、そのときに財産を全部なくした。それで弟たちがあちこちに勤めていたのをみんな呼び戻したんです。

私の父は大学を出ましてから、明治鉱業、安川「敬一郎」さんのところ（*2）に行っておったんですね。福岡県におったんです。ところが呼び戻されたものですから、会社を辞めて東京に戻ってきたんです。

父は大学のときに大病をいたしました。塩田博士というえらいお医者さんに、もう見込みがないと言われたぐらいの大病だったらしいんですが、塩田先生に手術していただいて治りました。そのときに、長兄である音介に大変世話になった恩がありましたので、兄が言うのならどうしても協力しなければいかんということで、戻ってきて一緒に事業を始めました。父の次の兄は眞鍋十蔵と申しまして、これは裁判官です。朝鮮総督府の大審院長をやったかと思ひます。それは役人でございましたから辞めませんでした。あと、その次の兄の秀策、私の父、弟の利水がいますが、この四人で事業を始めました。その会社が桜田本郷町にございました。

伊藤 何の会社でございますか。

小田村 あれは磯村合名といっておったんですが、初めは何をやっていたんでしょうか。あとになって、炭坑で使うカンテラなんかをつくることを始めたようです。

伊藤 製造業ですか。

小田村 主として製造業ですね。父は工学部を出ておったものですから、弁理士の資格を取りまして、弁理士もその頃ちよつとやつておったようです。もう一つ、兄の残った最後の財産として群馬県に山林がございました、その植林事業もやつていました。音介というのは、日本で初めて曹達工業を起こしたんです。保土谷曹達を創立したんです（*3）。

伊藤 技術者なんですか。

小田村 技術者ではないですね。

伊藤 経営者なんですね。

小田村 ええ、経営者ですね。

■小田村家とその家系 （2）楫取素彦と吉田松陰

伊藤 先生は、物の本によりますと、楫取素彦とずつつながっているということですが。

小田村 ええ、そうです。楫取素彦が曾祖父になるわけです。

伊藤 うまくつながらないんですが、どういうふうになるんですか。

小田村 「正論」の一月号に「まほろばの末裔」ということで撮らせてくれというので、写真を撮られました（笑い）。そこに簡単な系図を出しておきましたが、楫取素彦の年譜を今日本箱から出して置いておいたんですが、出て来るときに持つてくるのを忘れてしまいました。伊藤 だいたいどういうご関係なんですか。

小田村 楫取素彦というのは、もと小田村伊之助といっておったわけです。

伊藤 もともと小田村家なんですか。じゃあ、楫取家に養子に行ったということですか。

小田村 いやそうじゃなくて、慶応三年に、「楫取家文書」（日本史籍協会叢書、東京大学出版会）に書いてあるんですが、毛利の殿様から改姓を命じられて、楫取という名前に変えたわけです。楫取に変え

たのは、小田村がもともと水軍だったからなんです。

伊藤 そうですか、瀬戸内海ですね。

小田村 ええ、瀬戸内海の三田尻で、元は大内家に仕えていたようです。その後、三田尻から萩に移りました。萩では儒家として明倫館

(＊4)に勤めています。

伊藤 儒家というのは侍なんですか。

小田村 ええ、侍です。士分です。小田村の家の家伝の書き物がありますが、年々楫取りでご奉公しておったと書いてあるわけです。どうも、それで楫取という名前にしたようです。そのときまでは小田村素太郎「伊之助」といつていたんですが、そこで楫取素彦になるわけです。

伊藤 改姓したら、小田村家はどうなるわけですか。

小田村 なくなるわけです。それで困るものですから、明治十二年に小田村家を再興し、素彦の二人の男の子のうち、長男に小田村家の家督相続をさせまして、楫取を次男に継がせたんです。だから両方は同じ家なんです。

伊藤 それで長男の小田村「篤太郎」さんの息子さんが、「先生の」お父さんになるわけですか。

小田村 祖父は子供がおりませんでしたので養子をとったわけです。その養子を磯村家からもらったんです。

伊藤 磯村家というのもまた山口なんですか。

小田村 ええ、山口市のほう。長門ではなくて周防のほうですね。吉城郡です。

伊藤 やはり侍ですか。

小田村 やはり士族です。どういう関係かといいますと、楫取素彦が群馬県令をしておったんですね。磯村音介の父が磯村応というんですが、同郷の関係があったんでしょうね、素彦が群馬県令のときに、県の土木課長をしていたんです。ですから碓氷峠の県道なんかはそのころつくったらしいんですね。その「磯村応」には「子供がたくさんいたわけなんです。それがよくできるというので、私の父は五番目なんです。

すが、それを「素彦の長男の小田村の」養子にとった。父は明治十二年生まれなんです。素彦が県令をしておりましたのが明治七年から明治十七年までですので、県令時代に決めておったんですね。実際に養子に入籍したのが、明治二十年、「父・有芳が」小学生の頃です。

伊藤 それで、吉田松陰との関係は？

小田村 素彦が「松陰の」義弟になるわけですね。松陰に妹が三人おりまして、一番上が千代、二番目が寿、それが私の曾祖母になるわけです。

伊藤 この血は先生までつながっているわけですか。

小田村 つながっているわけです。というのは何故かというと、私の母「治子」が、楫取のほう、つまり「素彦の」次男の娘なんです。次男の次女になるわけです。「素彦の次男は」楫取道明と申します。

それ「松陰の妹・寿」が小田村伊之助のところに嫁に行きました。姉の千代は児玉家にいきました。

伊藤 児玉伯爵家ですか。

小田村 伯爵ではありません。また別です。源太郎さんではないんです。松陰の「父の」杉百合之助の奥さんが杉滝子、松陰の母親は、児玉家から来ているんです。その寿の次が文子ですね。これが久坂玄瑞のところに「嫁に」行きました。

伊藤 なにか、すごい家ですね。

小田村 玄瑞が蛤御門で戦死して、「久坂文子」その後未亡人だったわけですね。ですから、これまたややこしいんですが、小田村「楫取素彦」の次男、楫取の跡を継いだ道明は久米次郎といっておったんですが、それが初めは久坂家の養子になったんです。だから一時は久坂久米次郎といったんです。ところが、明治になりましてから、玄瑞が京都にいたときに子供ができていたことがわかったものですから、それならその人を久坂家の跡取りにしようということ、久米次郎はまた楫取のほうに戻ったんです（楫取道明）。それで文子のほうはずっと未亡人だったわけですが、寿子が明治十四年に亡くなるわけです。亡くなったあとに、未亡人だった文子が後妻として楫取家のほうにき

たんです。文子は美和子と名前を変えました。

伊藤 ずいぶん入り組んだ関係なんですね。

小田村 そうですね。

伊藤 やはり子供の頃からそういうことをお聞きになっておられましたか。

小田村 少しずつですね。あまり詳しいことはよくわかりませんでしたね。

■白金尋常小学校（一九三〇〜三七）

伊藤 先生は四男だとおっしゃいましたが、下にまだいらっしゃるわけですね。

小田村 ええ、もう一人、五郎というのがおります。全部で九人兄弟です。

伊藤 お母様一人で。

小田村 はい。

伊藤 当時はそんなに珍しいことではないんでしょうね。

小田村 ではないんですが、九人産んで、誰も病気をしないで大きくなったというのは、わりに珍しいようです。

伊藤 そうですか。子供のときに死んでいるのが多いんですね。

小田村 そうなんです。

伊藤 青山でお生まれになって、あとで白金に引っ越すということですが、これは多少景気がよくなったということですか。ずっと白金でお育ちになったんですね。

小田村 育ったのはだいたい白金です。白金に家を建てたのが大正十四年で、十四年にそちらに引っ越しました。

伊藤 まだ二、三歳ですね。

小田村 そうですね。ですから青山の頃はことはほとんど覚えていません。女中さんの背中でお祭りに行った記憶がちよつとあるんですが、

それ以外ありません。

伊藤 小学校は白金ですか。

小田村 そうです。

伊藤 当時は何という名前の小学校ですか。

小田村 白金尋常小学校です。

伊藤 「高等」はついていないんですね。

小田村 「高等」はついていません。東京市立ですね。

伊藤 子供の頃のご記憶はいろいろありますか。

小田村 そうですね、僕は初め学習院の初等科を受けました。というのは、私の兄がみんな学習院だったものだから。

伊藤 寅二郎さんもそうなんですか。

小田村 寅二郎もそうです。初等科は学習院です。一番上の嘉穂も学習院です。

伊藤 楫取家は爵位を持っていたんですね。

小田村 楫取は男爵です。小田村のほうは普通の士族です。

伊藤 でも「小田村は楫取の」長男の家系ですからね（笑い）。そういう縁戚があれば、みなさん「学習院に」行ったようですね。

小田村 兄たちはみんな行っておりますので、普通は採ってくれるはずなんです。とにかく幼稚園も行っておりますから、試験が――。

僕の記憶では、いろいろな面白そうな物が出されるわけです。面白い物がたくさんあるなと思ったら、その箱を閉じて、「何があったか？」というんです。ほとんど覚えていないというか、あがつちやうんでしょね。そんなことで、この子は駄目だということになった（笑い）。

私のすぐ上の姉が白金小学校に行っておりましたので、ちよつと区域外になるんですが、通って行けるものですから、そこに入りました。昭和五年です。

伊藤 小学校時代はどんな子供でございましたか。

小田村 とにかく全然世慣れしておりませんで、最初は遊ぶことを知らなかったんです。

伊藤 でも兄弟がたくさんいたら――。

小田村 顔を見知っている人は構わないわけです。従兄弟――磯村のほうですが――も隣に住んでおりまして、私と同じ歳でよく遊んでいました。それは構わないんです。だけど、学校に行ったら全然顔見知りがないものですか、わからないので、休み時間になっても教室の中で一人で座っていた。

佐道 一人で何をしておられたんですか。

小田村 何をしていたんでしょう。何もしていなかったんでしょう。

佐道 本を読むとか。

小田村 本は学校で初めて教わるわけですからね。それで先生が心配して、「おまえはどうしてそんなに元気がないんだ？」と言いました。でも親切な先生でした。そのうちだんだん「友だちの」顔を覚えてきて、家に帰るときに一緒になったりすると、だんだん慣れてくる。そうすると遊ぶようになるんです（笑い）。

伊藤 昭和に入った頃ですが、子供たちの遊びというのはどういうものでしたか。

小田村 一番簡単なのは相撲ですね。それから、外ではメンコなんか流行っていましたが、メンコはしちやいかんと言われまして、私はしませんでした。それから、けん玉は流行っていましたね。

伊藤 そのときどきで子供たちの流行りは違いますからね。僕らのときはベイゴマとかが流行っていましたからね。

小田村 ベイゴマとかメンコは、その頃でもやっていましたね。

伊藤 家によつては、ああいうものはいけない、と言うんですね。取りっこしますからね。

小田村 そうなんです。

伊藤 僕も駄目、と言われましたね。自分一人で遊ぶのならいいけれど。

小田村 学校では何をしていたのかな。何かあまりはつきりした記憶はないですけど、ゴムボールを転がして手で打つ野球のようなものやっていたようですね。体操のときはドッジボールなんかをやらさ

れましたね。

伊藤 そうですか、ドッジボールなんかやっていたんですか。

小田村 やっていましたね。騎馬戦は運動会のときですね。

伊藤 当時から白金は高級住宅街でしたか。

小田村 いや必ずしもそうではありません。目黒通りにはずっと店がありました。そういう商店街の人たちがずいぶん来ていました。

伊藤 では階層としても、いろいろな家の子供たちが来ているわけですね。

小田村 それから二本榎「現・高輪」のほうですね。猿町「現・猿町」の辺りからも通っていました。区域外からの通学がずいぶん多かったですね。私なんかは区域外にはほとんど入らない、歩いて通っているわけですから。

伊藤 それは白金小学校はいい「学校だ」ということですか。

小田村 受験校だったんですね。ですから、大岡山、洗足、田園調布、そういうところから「通ってくる人もいました」。

伊藤 定期を持って電車に乗ってくるわけですね。あれは子供心に羨ましいんじゃないかと思うんですが（笑い）。

小田村 いや、私の友人で中目黒に住んでいるのがいまして、これは私と同じ学年なんです。最後まで絶対にバスに乗ってはいかんとやられて、歩き通したと言っていました。

伊藤 電車に乗らないで、ですか。

小田村 電車に乗らないで。

伊藤 ずいぶん距離があると思いますけれどね。小学校の高学年になりますと、どここの学校へ行くかということが問題になりますね。それはかなり意識されておられましたか。

小田村 それはもう当然です。五年生から。私のときにはひと組六十人で、初め五クラスあったんですが、一つは男女組だったんですね。

ところが五年生のときに、男女別々に分けまして、男三組、女三組。全部で三百四十く三百五十人ぐらいになっていたんだと思います。五年生になると学校で補習授業をやりました。ですから五年生になると、

受験体制に入るわけですね。補習授業は初めは少なかったんですが、終わり頃になると、二時か三時頃に「正規の授業が」終わってから、五時、六時までやっていました。だから学校の先生は本当に大変でした。

伊藤 いつの世も受験競争ですが。

小田村 「学校の先生が」自分で問題をつくって子供たちにやらせたり、ときどき刷り物を配って模擬テストをやらせたり、いろいろありました。

■府立中学時代 (1) 二・二六事件直後の府立中学入学

伊藤 それで「小田村」先生の狙いは一中ですか。

小田村 そうですね、一中でした。あのころの受験先としては、普通の中学のほかに七年制があるわけです。これがわりあい試験日が早いです。

伊藤 七年制というのはどこですか。

小田村 七年制は、私のころはまず東京「東高」、それから府立、これが官公立ですね。あと私立として、武蔵、成蹊、成城。

伊藤 かなりあったんですね。

小田村 ええ、ありました。ですから小学校からは、東高、府立、武蔵、そういうところが受験校としては多かったです。これがわりに試験が早いものですから、七年制の尋常科と、府立の中学と、私立中学、これをみんな受けられるわけです。ですから願書は全部出して、ということですね。

伊藤 一般的に一中・一高とよく言われますが、必ずしもそれがプライオリティの一位になるようなものでもないんですか。

小田村 そうではないんです。むしろ七年制のほうが競争率が高かったです。私の場合は、一番上の兄と二番目の兄が一中だったものですから、だいたい一中を中心に考えていたんですが、七年制のほうも受けよう

ということ、家からは府立が一番近いものですから、府立高校を受けました。府立高校のほうが先だったんですね。後でお話しますが、ちょうど二・二六事件のときです。武蔵高校の受験日はちょうど二・二六と重なったんです。それでも、試験は予定通り行なったようです。府立高校のほうが三月の何日だったか、上旬だったと思うんですね。

伊藤 それは受験日ですか。

小田村 受験日です。

伊藤 ずいぶんギリギリですね。

小田村 ええ、二・二六のあとですからね。収まってからです。なんでも覚えているかというと、国語の試験問題で、こういう言葉を使って文章を作れという問題が出まして、僕は生意気なものですから、「やつと事件が収まったのに内閣は組閣がなかなかできない」というようなことを書いた記憶があるんです(笑い)。

武田 すごい受験生ですね。

小田村 だから試験を受けた日は、組閣が難航しているときだったんですね。それが府立です。その試験が終わって、次に一中の試験があったわけです。しかしその前に府立の発表がございまして、府立に合格したんです。だけど一中のほうも受けておいて、あとで考えようということ、一中も受けました。そうしたら一中の先生が「この受験生の中で、七年制のほうに合格している人間がいたら、少なくとも一中に入るのじゃなければやめてもらいたい。よく両方入ったと威張る人間がいるが、やめてくれ」と言っていました。だけど僕はどっちに行くかよくわからないものですから、受けたんです。

それで両方通りまして、家でどっちがいいか、ずいぶんいろいろ議論をしておったんです。母もずいぶん悩んだようですが、父は、「四郎はとにかく体が弱いから、体を作らなければいけない。それには普通の中学校に入って、また高校の受験をしたのでは駄目だ。だから七年制に入れ」ということでした。ところが上の兄二人は、二人とも一中から高等学校に行っているものですから、やはり一中のほうがいいという(笑い)。そういうことで、ずいぶん家の中で議論したようにで

す。母は、どうもよくわからないものですから、学校に行つて先生に聞いたんですね。そうしたら、校長先生は七年制の方がいいと言い、担任の先生はあの子なら一中でも大丈夫だと言う。

武田 決まらないですね。

小田村 それで結局、兄も父の意見に折れまして、「とにかく府立に入れ、その代わり体をつくるんだぞ」ということになりました。

■府立中学時代 (2) 七年制中学

伊藤 七年制というのは前期と後期に分かれるんですか。それとも予科になるわけですか。

小田村 尋常科と高等科なんです。

伊藤 尋常科は旧制中学に当たる部分ですね。

小田村 そういうことです。

伊藤 それで高等科が高等学校。

小田村 そうです。本当を言いますと、高等学校令をもらいになるとわかりますが、七年制が本則なんです。大正七年に新しい高等学校令の制定がございまして（大正七・十二・六勅令第三八九号 高等学校令第七条Ⅰ「高等学校ノ修業年限ハ七年トシ高等科三年尋常科四年トス」Ⅱ「高等学校ハ高等科ノミヲ置クコトヲ得」）、本来高等学校は七年制だということになったんですね。だから東京高校が一番早かったのかな、官立では東京と台北が七年制ですね。だから一貫教育なんです。

伊藤 切れ目がないんですね。

小田村 しかしそこがまた面白いところで、尋常科のほうは、先生は教諭なんです。高等科のほうは先生は教授なんです。ですから、そこで分かれている。ただ高等科の先生も尋常科を教えましたし、尋常科から高等科のほうに上がりますから、高等科の学生が尋常科を指導するということもあります。そういうところはいいところですね。

ね。

伊藤 尋常科だけでやめれば、中学卒業と同じ資格になるんですか。

小田村 たぶんそうじゃないかと思いますが、私のときはほかの高等学校に行つた人間がいなかったのでわかりません。おそらく受けようと思えば、受験資格はあったと思いますね。

伊藤 府立高校というのは、前の都立大学のあった、あそこですか。

小田村 あそこでした。校舎ができてまもない頃だったと思います。学校ができたころは、永田町の府立一中の校舎をしばらく借りていたんです。二、三年借りていたんじゃないでしょうか。昭和四年にできまして、新しい校舎に移つたのが三、四年後だと思います。

伊藤 校舎が新しくできてからしばらくして入学されたんですね。

小田村 ええ。

伊藤 やはり府立高校は、東京の人が多いんですか。

小田村 ほとんど東京です。ただ、横浜、湘南から通っていたのもおられます。

伊藤 制限があつたわけではないんですね。

小田村 制限があつたわけではありません。私の同級では逗子から二人入ったかな。鎌倉からも通っていました。

伊藤 通うんですか。

小田村 通うんです。

武田 遠いんですね。

小田村 いや、そんなに遠くないです。横浜から東横線で一本です。から。

伊藤 それはそうですが、まず横浜に出なければ。

小田村 逗子、鎌倉からですと、横浜に出て、横浜で東横線に乗り換えて、いまの都立大学で降りるわけですから、そんなに遠くないです。伊藤 先生の場合はどういう交通経路をとるんですか。

小田村 私はバスで通っていました。白金の目黒通りから品川に行くバスです。

伊藤 途中、渋谷に出るんですか。

小田村 いや、渋谷には出ません。目黒を通って、目黒通り真っ直ぐです。柿の木坂の先ですから。終点がどこだったかな、自由が丘でしたか。

伊藤 じゃあ便利なんですね。

小田村 そうです。近かったんです。しかし、そうすると渋谷に降りられないものだから、高等科に行ってから、電車に切り換えました。伊藤 当時は渋谷はすでに盛り場でしたか。

小田村 盛り場ですね。いまみたいなことはありませんけれどね。

伊藤 もちろんそうでしょうけれどね。私は戦後の渋谷しか知らないんですが、たしかに賑やかなところではあるけれど、ずいぶんうらぶれた感じでしたよ。

小田村 まあそうですね。新宿や銀座とは違いますね。

伊藤 それで尋常科、高等科で、高等科を卒業なさったのが昭和十七年ですか。

小田村 十七年九月です。

伊藤 もう戦争が始まっているわけですね。

小田村 そうです。その前年に戦争が始まりました。十六年十二月に開戦になりました、そのときに学年短縮があったわけです。ですから十七年の三月卒業が三カ月短縮されて、十二月卒業になった。これは大学のことですが、三カ月短縮になりました。高等学校はそのときまでは別に動きはなかったんです。

伊藤 先生は、七年間無事におやりになったわけですか。

小田村 いや、七年間やっていないんです。

伊藤 じゃあ、十八年に卒業なさるはずなんですね。

小田村 十八年の三月に卒業するはずなんです。それが十七年の九月の卒業なんです。つまり半年短縮になったわけです。

伊藤 短縮というのはどういう形になるんですか。

小田村 結局、大学令、高等学校令は全部改正されたんですが、高等学校は二年半ですね。

伊藤 三年のところを。

小田村 三年「生」が半年になったんですね。

伊藤 中学が減らされたわけではないんですね。

小田村 中学はそのままです。高等科三年生が半年になったんですね。それから大学のほうも同じく半年短縮されたわけです。ですから、十八年三月に卒業する大学生は十七年九月に卒業したわけです。この場合大学のほうは、十七年の四月に入学した学生は、十七年九月に一年が終わってしまう。

伊藤 半年ですか。そうしないと次に入ってくるのが――。

小田村 次に入ってくる学生の授業ができない。だから大学在學生は一年生なり二年生なりの期間が、それだけ圧縮されたわけです。高等学校の方はそうではなくて、三年生だけが半年になったと思います。

伊藤 高等学校時代、戦争が間近だという感じはおありだったと思いますが、覚悟はされておられたんでしょうか。

小田村 まだ十六年の秋頃までは、そこまで考えていませんでしたね。十六年の秋にちょうど教練で、習志野廠舎で三泊ぐらいの教練があったんですが、そのときに近衛内閣が総辞職して東條内閣が成立しました。十月十八日でしたか。これはいよいよ最後になるかな、という感じはそのとき持ちました。それまでは、近衛・ルーズベルト会談が実現するとかしないとかいうことがありましたが、まだそこまでの緊迫感はなかったですね。

■兄・寅二郎と日本学生協会

伊藤 元に戻りますが、尋常科と高等科で、生徒・学生というのはどういう呼称になりますか。

小田村 こうなっております。尋常科は甲組と乙組で四十人ずつ。ですから一学年八十人ですね。それが高等科では、文科甲乙、理科も甲乙、私のところは丙がございましてしたので、甲乙でそれぞれ四十人ずつ。ですから半数は中学からとっていたんです。ただそれが四十

人ずつになったのはいつからだったかな。十二、三年頃までは高等科が三十人ずつでした。ですから外からとるのは――。

伊藤 ――そんなに多くはないんですね。

小田村 そうです、一学級が四十人でずっと来ておりました。それで尋常科からの進級生には、優先的に希望を認めてくれたんです。ですから、文科でも理科でもどちらでも行かれる。文科、理科の中の甲乙も自由に選択できる。

伊藤 自由ということは、自分で決めなければならないということですね。これは大変ですね。

小田村 私はどっちがいいのかよくわからなかったんですが、これも父と兄とが意見を異にしました（笑い）。父と長兄はもともと工学部ですから、理系がいいと言うわけです。次兄は例の法科で問題を起こした方ですから、文科の方がいいということでした。ただ私は手先が非常に不器用でございまして、わりあいに理屈っぽいほうですから、文科の方がいいのかなという感じで、結局文科にしました。

伊藤 もう、お兄さんの寅二郎さんは、さかんに大学で活躍なさっている頃ですね。

小田村 大学で停学処分を受けて、まだ退学にはならなかったときですね。十五年ですから。

伊藤 そういうことはごらんになっていたわけですか。

小田村 私は見ていました。パンフレットなんかも見ておりました。

伊藤 それであのグループの人たちのおつき合いも、先生ご自身はあったんですか。

小田村 そのときはまだありませんでしたが、「私が」高等科にまいりましてから、兄が日本学生協会というのをつくりまして、その設立の講演会が一橋の共立講堂であつたんです。それを聴きに行きました。大変勇ましい講演会でした。それから、夏に兄から、「全国から学生を集めて合宿をするから、おまえも来ないか」と言われて、私も行きましようということ、菅平で合宿をやりました。ずいぶん長い合宿でした。

伊藤 菅平では、いまでも国民文化研究会はよくやっていますか。

小田村 やっていません。そのとき映画に撮ったフィルムがあります。

武田 合宿の映画ですか。

小田村 合宿の映画です。

伊藤 珍しいですね。

小田村 全部で四百人ぐらい集まったんじゃないでしょうか。

伊藤 一度機会があつたらぜひ。

小田村 よその学校の学生と交際したのはそこが初めてでしたね。

伊藤 その日本学生協会はお兄さんが中心ですか。

小田村 伊藤先生はご存知かと思いますが、田所広泰さんが中心です。

伊藤 田所さんが実際のリーダーですね。

小田村 田所さんがリーダーです。

伊藤 お兄さんは東大のリーダーですか。

小田村 リーダーというより、論文を外へ書いたものですから、それが問題になって停学処分になって、事件になったんですね。むしろそれまでは、リーダーというわけでもなかったと思います。兄は、一高が本郷から駒場に移転するときの全寮委員長をやっておりました。ですから護国旗をもって――。

伊藤 先頭行進ですか。

小田村 執銃行進をして駒場に行った。あのときの委員長ですね。

伊藤 お兄さんの影響もずいぶんあつたんですね。

小田村 ええ、それはあります。

伊藤 田所さんという方とも接せられたわけですか。

小田村 はい、その後よくお目にかかりました。

伊藤 さつき伺つておこうと思つたんですが、高等学校は学生ですか、生徒ですか。

小田村 高等学校は、尋常科は生徒です。高等科は学生です。

伊藤 やはり呼び方が違うんですね。それで先生は文科をお選びになつて、甲ですか、乙ですか。

小田村 乙です。

伊藤 乙というのはドイツ語ですか。

小田村 ドイツ語です。私のころはナチス全盛時代で、文乙で中学から来たのは全部で七、八人だったと思います。三十人以上が尋常科から行ったんです。文甲はその逆なんです。甲類をとったのが、尋常科からは七、八人で、あとは中学出ということですね。それだけドイツの人氣が高かったんですね。

伊藤 それは先生の影響もあるわけですか。

小田村 いや、先生の影響はありません。

伊藤 自然に世の中の風潮として、そうだったんですか。

小田村 世の中の風潮ですね。あれは音楽の時間ですが、外国語の歌を少し教えてくれたんですね。そうすると生徒たちがドイツの国歌を教えるというんです。それでドイツの国歌を音楽の先生に教えていたのだ、というような状況でした。ヒトラー・ユーゲントなんかも来ておりましたしね。

■戦争勃発

伊藤 府立高校でもそういうグループはあったんですか。

小田村 府立高校に兄のちよつと先輩で、高木尚一さんという非常に温厚な方が、講師で来ておられました。その方は、私が高等科に入る一年前に来られた。私の一年上から教えたんですが、法制経済を教えられました。私は教わりませんでしたから、教えた期間は一年か二年ぐらいだと思います。その方の影響で、理科の人が多かったんですが、一信会という会ができました、私も入れといわれて、そこに入ったりしたことがあります。

伊藤 しかしお兄さんたちのグループは統制経済なんているのはいいかんのじゃないですか。

小田村 そうなんです。実は菅平の合宿に山本勝市さんが来られたんです。それで統制経済批判を痛烈にやられたわけですね。ところが、

あのころああいうところに来る学生は、どちらかというと右の方の人が多いですね。そうすると、どうも先生が言っていることはおかしい、国家統制でなければいかにのじゃないか、と漠然と考えている学生が多かったんです。それでいろいろ質問が出たわけですが、山本先生は懇切に回答しておられました。あとで田所さんだったと思いますが、「ここは非常に重要なところで、実は山本先生が言われることが正しいんだ。諸君は安易に統制というようなことを考えてはいかん」というようなことを言われました。だから私もどちらかというと、これからどんどん統制に進んでいくんじゃないかと思っていたんですが、その山本さんの話を聞いた後で、山本さんが『笠信太郎氏「日本経済の再編成」批判』〔原理日本社、一九四一〕というパンフレットを出されたんですね。それを読みますと、なるほどと思いましたね。ですから、経済についての見方は、ある程度その影響を非常に受けております。

伊藤 一種の自由主義経済ですね。

小田村 自由主義経済です。あとで『計画経済の根本問題』〔理想社出版部、一九三九〕というのを山本勝市先生が書かれましたね。あれを読みますと、いかにソ連がひどいかということがわかるものですから、なるほどと思いました。

伊藤 でも学生の中の、いわゆる当時の革新的な動きは、統制経済に傾斜する人もかなり多かったんでしょね。

小田村 それが多かったと思いますね。

伊藤 だから田所さんのグループというのは、いわゆる右とはちよつと違う存在のような気がしますね。

小田村 そうですね。だからあのころの革新官僚、岸「信介」さんなんかもある程度そうだったんですが、一番対立したのが奥村喜和男さんですね。電力統制をやりましたからね。電力国家管理の批判なんていうのがあった。よく父が――。父は喘息があつたんですが、電車に乗っていると喘息の具合がいいというので、葉山に家をつくりまして、葉山によく通っていたんです。休みに葉山に行きますと、父が駅でパ

ンフレットを買うんですね。駅でパンフレットを買うと、そういうものがあるんです。池尾芳蔵さんという方ですか、『電力国家管理論批判』というパンフレットがありまして、そんなものを葉山に行ったときにチラチラ読んでいたこともあります。

伊藤 池尾さんのパンフレットは僕も見たいことがあります。

武田 そういうパンフレットは駅の売店とかにあるんですか。

小田村 そうだと思いますね。

伊藤 そうですね。一冊十銭とかいうパンフレットがいっぱいあったでしよう。国会図書館では、そういうもので納本されたものをいままで図書扱いにしていなかったけれど、最近になって図書扱いにして、今度データベースをつくったわけですね。これは非常によかったんですね。

武田 デジタル化したんですね。

小田村 面白いものがずいぶんありましたね。

伊藤 ええ。ちよつと怪しいものもありましたけれど（笑い）。高等学校の終わり頃はもう戦争になつていっているわけですから、これは戦場だなと思つておられましたか。

小田村 まだどういふことになるか、よくわかりませんでしたね。

伊藤 自分自身についてですか。

小田村 自分自身についても、戦争の行く末についてもですね。

伊藤 まあ、勝っているわけですからね。

小田村 勝っているんですからね。そうですね、十六年十二月八日は、ちよつと『諸君！』にも書いたんですが、教室の中は大変な興奮で、そのときの授業が何だったか、私は全然覚えていないです。授業はちやんとやつていました。この大戦争で学校は何もしないのか、ということが学生の間から言われたものですから、学校はやむなく全校生徒を集めたんですね。そして校長が訓辞をしたわけです。その校長が大変評判が悪い校長でございまして、文部省の視学官をしていた人です。独文出身なんですが、宇野喜代之介という方で、われわれのあだ名ではポリキヨといっていました。ポリスですね（笑い）。それが訓辞を

して、「諸君は興奮しないで、ちゃんと学業をしつかり勉強していなさい」と言うだけなんです。せめて、これからどういふ覚悟でいなければいけないとか、諸君としてもしつかりしろという激励が本来あるべきだというのが学生一般の空気でございまして、みんなカンカンに怒つたわけです。それで翌年秋に記念祭をやるんですが、記念祭の夜に学生とOBで校長に鉄拳制裁をした（笑い）。

伊藤 校長にやつちやつたわけですか。

小田村 校長にやつちやつたんです。私は卒業した後ですけれどね。でも戦争は勝っていましたから。学業短縮になつて、びっくりしましたね。私は一年間ゆつくりできるだろうと思つていたんですが、とにかく大学の入学試験が九月だといふものですから。

伊藤 半年早まつたわけですね（笑い）。

小田村 これはしょうがない、ほかのことを全部辞めて、とにかく受験勉強をしなくてはいけない。それで紅露文平さんというのはドイツ語のよくできる人です。あの人が塾をやつていて、そこに通つたりしていたんです。その頃たしか、ソロモン海戦が十七年八月、ですか、大戦果を挙げて喜んだ記憶があります。ミッドウェーでやられたことは報道されませんから。

伊藤 全然報道されておりません。勝つたことになっておりますので。

小田村 ですからまだいいということでしたね。そう急に、徴兵猶予が停止になるなんていう考え方は全くなかつたんですね。

伊藤 それはすぐよく理解できます。

小田村 ただ大学でも、ガダルカナルへ行つて来た平出「英夫」さんなんかも大学に講演に来たことがありますし、新聞記者で、朝日だったか毎日だったか、ガダルカナルから帰つてきた方が大学で講演をしまして、非常に凄惨な戦いなんだということを言っていました。でもまだ「ハワイ・マレー沖海戦」なんていう映画ができてまして、ちゃんと大学で上映してくれましたよ。二十五番（教室）だったか、三十一番（教室）だったか忘れちゃったけれど。

■東京帝国大学法学部入学（一九四二）

伊藤 先生は昭和十七年の夏に受験勉強をなさって、九月に入学試験があつたんですね。これはかなり倍率が高かつたんですか。

小田村 どのぐらいだったか、二倍ちよつとあつたかもしれませんね。

伊藤 これを万が一しくじつたらどうなるんですか。

小田村 そうすると都落ちしなければいけないわけです。

伊藤 そうですか、京都の法学部とか。

小田村 まず二つ選択肢があるわけです。一つは専修大学に入るんです。徴兵の関係で、要するに大学生であればいいわけです。専修大学はいくらでも入れてくれたんです。

伊藤 いくらでもというのは、入学試験は。

小田村 入学試験なしで入学できたわけです。

伊藤 いまのあの専修大学ですか。

小田村 そうです。私のすぐ上の兄が、学習院から京都の土木に行つたんですが、東大に失敗しまして、一年間専修大学生だったんです。

伊藤 専修大学というのは、もしかしたらそれでもついていたんですかね。面白い学校だな（笑い）。

小田村 だいたい専修大学でしたね。それでも一回挑戦するというやり方です。それと、そんなことをしているとどうなるかわからないから、とにかく都落ちして行こうということで、東北と九州ですね。

京都は、法学部は満員ですから。九州帝大と東北帝大ですね。両方とも法文学部です。

伊藤 それでは都落ちしないで、無事にお入りになったんですね。

小田村 一番上の兄が仙台が好きで二高から東北だったんですが、寒いし、九州の方がいいだろうと思つていたんですけれどね。

伊藤 いや、九大も寒いですよ。日本海側ですからね。

佐道 冬は寒いからです。

伊藤 法学部にお入りになって、将来をどういうふうにお考えですか。

小田村 私は友だちにも、「おまえは絶対に商売人には向かない。だから役人にしかねないんだ」と言われました。だから初めから高文を受けるつもりでおりました。

伊藤 しかし入学されて、二年半に短縮ですね。

小田村 大学はそのときは三年が予定されていたわけです。つまり高等学校が半年短縮された。私の一年上の学生は、大学を半年短縮されたんです。その連中は二年半になっている。私のほうは、三年間行けるはずだったんです。

伊藤 そこから先、どういうことになったんですか。

小田村 十八年十月に学年進級しますね。二年生になる。たしか九月二十何日に東條「英機」さんが演説をしまして、「学生の徴集猶予を停止する」と放送されたわけです。これは大変なことで、そうするともう十二月に入営しなければいけなくなります。それで十月一日か二日に、特例は停止になります。

伊藤 もう二十歳になっているわけですね。

小田村 はい、二十歳になったちやうどその年です。ですから、さっきの話に戻りますが、私どもと同じで、七年制あるいは四修で出た人は、早生まれの人間はもう一年ゆつくり浪人できたわけです。ところが私どもは遅生まれで、十二月に満二十歳になっていますから、どこかに都落ちするか、専修大学に入らなければならぬ。

伊藤 しかし「徴兵」延期がなくなったら、二十歳を超えていけば無条件で「徴兵で」すね。

小田村 ええ、無条件で行くことになります。

伊藤 理科系は別ですか。

小田村 あれは徴兵猶予の停止はされたんですが、もう一つの特例として、「入学延期」ということで、「学業を」続けることができる。ただし、農学部のは大半は駄目だったんですね。

伊藤 工学部、理学部ですか。

小田村 工学部、理学部、医学部は、そのまま学業を続けるということになりました。

伊藤 そういうことになると、普通の国民と同じように二等兵として軍隊に入ることになりますか。

小田村 それはこういうことなんです。十八年九月までに卒業した人たちは、海軍でいいますと短期現役というものがございまして（伊藤 短現と言われていた）、ええ、短現と言われていました。法経ですと主計の短現ですね。これはすぐに任官して中尉になります。大変な特典なんです、それを今度は認めない。いままでは二等兵からやるのは陸軍だけだったんですね。陸軍も短現ではなくて丙種学生といって、すぐに正規将校になる制度がありました、そのほかは全部、二等兵から始めて幹部候補生にならなくてはいいけない。そうすると、徴兵猶予を停止して実際に採るに当たって、海軍だけ短期現役や予備学生を残したのでは不公平だということになりました。海軍はそれまでは短期現役かすぐに予備学生になる。予備学生になると、少尉に任官するわけですね。それは不公平だということで、予備学生になるにしろ、主計の士官になるにせよ、全部二等水兵から始めろ、ということになったんです。それで全部、陸軍は従来通り各部隊へ、海軍は海兵団に入ることになりました。

伊藤 そうですか、じゃあ選択の余地はないわけですね。

小田村 選択の余地はありません。いづれにしても、いわゆる学徒出陣のときは選択の余地はなかったですね。

伊藤 あとでまたいろいろコースがあるんでしょうけれど。

小田村 ええ、特別甲種幹部候補生（特甲幹）のようなものが出て来たかと思っています。

伊藤 先生は東京のご出身ですが、本籍は山口県ですか。

小田村 本籍は、もとは萩にあったんですが、明治の頃に東京に移してあるんです。

伊藤 そうですか。そうすると東京の部隊に入られるんですね。

小田村 はい、東京の部隊です。

伊藤 でも二等兵として入隊するということは、それまでのご経歴からは全然予想できないわけですね。びっくりされたんじゃないかと思

います。

小田村 それは、「徴兵猶予が」停止になればそうなるかと覚悟しておりましたから。それからいわゆる短期現役のようなものも、私は目が悪いから駄目だと思っておりました。だから兵隊に行くとすれば、変な志望をするよりは、はっきり陸軍に行った方がいいと思ってい

伊藤 行ったら即日お帰りということにはなかったわけですか。目が悪いとか、いろいろなことがあると、即日帰隊ということがあるのでは。

小田村 もうあのころになりますと、よほどのめくらでない限りは採りました。昔は、私ぐらいの近眼ですと、兵役検査は丙種で駄目だったんです。あのときは少し範囲を広げまして、いままで甲乙丙だったものが、途中で乙が第一乙と第二乙とに分かれたんです。私のときに第三乙というのができたんです。これは以前の丙種なんです。そしてそのあとは丁種ですね。丁種まで採りました。ですから、第一、第二乙までが徴集兵ですね。第三乙以下は召集兵、補充兵なんです。私は第三乙でしたから、補充兵として召集されたんです。まあ、身体もわりあい貧弱でしたからね。

伊藤 徴兵検査みたいなのは、どの段階でやるんですか。二十歳になつて入隊する前ですか。

小田村 私のときは入隊する前ですね。たしか十一月だったと思います。

伊藤 それで十二月に入隊なさる。

小田村 そうです。徴兵検査をしてしばらくすると、兵種と、どの部隊に入営するかという召集令状が来たと思うんです。

■召集から終戦まで

（一）召集、野砲連隊に入営（一九四三）

伊藤 入営されたのはどこなんですか。野砲連隊ということですが。

小田村 「昭和十八年」十二月一日、三宿の東部第十二部隊です。いまの昭和女子大学のところですよ。そこに東部第十二部隊と十三部隊とがありまして、十二部隊が近衛、十三部隊が第一師団でした。

伊藤 近衛師団の中なんですか。

小田村 近衛師団なんです。ですから帽章は近衛の帽章をつけていました。ただ十二部隊のほうは、近衛師団の予備師団になるんですかね、東京師団といっておったんです。東部第十三部隊は第一師団でした。

だから師団がちよつと違いました。東京師団は、私のときは主計の幹部候補生教育隊でほかの部隊と一緒にりましたが、佐倉の歩兵連隊などですね。佐倉、甲府。

伊藤 甲府も歩兵連隊ですか。

小田村 甲府も歩兵連隊です。それから溝の口に一つ、六十二部隊がありました、これも東京師団でした。それから習志野の近くに野戦重砲連隊がありましたが、あれも東京師団です。それから大橋の上に、公務員宿舎、機動隊はなくなったかな、そこに東部第十七部隊、輜重連隊があつて、これも東京師団でした。そういうところを集めて東京師団をつくっておりました。歩兵はもう一つ、赤坂松町の連隊が東京師団でした。

伊藤 あれは近衛じゃないんですか。

小田村 近衛の補充隊ですね。東部第六部隊と云っていました。

伊藤 野砲連隊ですから、兵種としては砲兵になるわけですか。

小田村 砲兵です。六個中隊ありました。

伊藤 野砲連隊というのはなかなか大変なんじゃないですか。

小田村 いや、歩兵よりはらくです。歩兵は大変です。重い背囊を担いで駆け足しなくてはいけませんからね。

伊藤 取り扱う野砲というのは？

小田村 野砲というのは、一番大変なのは馬です。挽馬野砲ですから、馬の手入れをしないといけない。これが一番大変なんです。あとは馬に砲身を曳かせるわけですから、体力としては歩兵ほどは使わない

です。それから銃も、騎銃と申しまして騎兵銃で、これは軽いんです。

伊藤 歩兵の銃よりも軽いんですか。

小田村 歩兵の銃より軽いんです。だから、私が教育隊に行ったとき、歩兵の連中は重い鉄砲を持っているのに、騎銃でらくをしました。ただ中で一個中隊だけ山砲中隊があるんですね。この山砲は、分解搬送しなくてはいけません。

伊藤 担がなければならぬんですか。

小田村 担がなくてはいけません。これは歩兵より大変です。

伊藤 砲兵が大変だという話は、その山砲なんだ（笑い）。

小田村 山砲は大変です。

伊藤 これで初年兵としての訓練を一年間ぐらいするんですか。

小田村 いやいや、そんなにないです。「昭和十九年」二月十四日に、もう教育隊のほうに派遣されましたから。

伊藤 じゃあ二、三ヶ月ですね。

小田村 ええ、二ヶ月半です。一番寒いときでしたが、一月末ぐらいに幹部候補生の試験がありました。

伊藤 これは誰でも自由に受けられるんですか。

小田村 これは中学卒以上は自由に受けられます。

伊藤 募集があるわけですか。

小田村 そうですね。中隊ごとに志願します。

伊藤 いかなるテストを受けられるわけですか。

小田村 何を受けましたかね。『軍人勅諭』は当然出るわけですね。これはそれまでに全部暗誦して、ある程度書けなければいけなかったわけです。あとは操典類の中から多少出たかもしれませんが、『砲兵操典』とか『軍隊内務令』とか、そういうものから出たように思います。

伊藤 そういうものは勉強されていたんですか。

小田村 そういふのは勉強しなければいけません。

佐道 入営されてから勉強されたんですか。

小田村 そうです、入営してからですね。それだけは勉強させてくれ

ました。

佐道 野砲連隊のときには、山砲とかいろいろな種類について――。

小田村 いや、三八式野砲といひまして、日露戦争のあとでつくった野砲なんです、それを使っていましたね。

伊藤 旧式ですね。

佐道 訓練は――。

小田村 訓練は、私が出るまではまだ本格的な訓練にはなりません、もっぱら徒手教練と、大砲の場合は照準点というのを決めるんですね。その照準点と、大砲の弾の込め方とか撃ち方とか、そういうことをやります。

伊藤 そこまで行ったんですか。

小田村 そういうところは教えてくれました。たしか三カ月経ちますと、一期の検閲があるわけです。その頃になると本格的になるので、それまでにはある程度のことをしなければいけないんですが、途中でした。それから馬手入れまでで、乗馬もさせてもらえませんでした。それももう少し経つてくると、馬に乗ることもさせるわけです。

伊藤 まだ弾を撃つたことはいないですね。

小田村 撃つたことはないですね。忘れちゃいましたね。

■召集から終戦まで (2) 幹部候補生教育隊

武田 試験の勉強は、夜されるんですか。

小田村 試験の勉強は夜です。

武田 宿舎で勉強するわけですか。

小田村 そうです。宿舎というか、兵舎の中ですね。

伊藤 寮監の人は一応目をかけてくれるわけですね。

小田村 そうですね。そういうところがあります。上官というよりも、軍隊で一番大変なのは古年兵の世話なんです。親切な古年兵がいるとたいへん助かるわけですが、意地悪なのがいるといじめられるんで

す。私は初め山砲中隊に入りましたが、これはちよつと無理だと思われたんでしょうね。それで五中隊というところに転属させられました。そこは特別訓練班といって、よくわからないんですが、身体の悪いものとか、特別な人が入っていたようですね。私の同僚で、立花君といって、立花子爵なんです、悪いところはどこにもない人がいた。当時の教官に二、三年前にお会いした時に聞いてみると、「どうもあの班には特別な人間を集めたい」というんですね。

だから身体が悪いだけではなくて、例えば嶋中鵬二君の兄さん「嶋中晨也」、これは初めほかの中隊にいたんですが、その後私の中隊に来たんです。彼はずつと病気をしていたんです。私は食事なんか持つていったんですが、嶋中君のお兄さんは特別扱いをされていたらしいんですね。あとでその教官がこぼしていましたが、「幹部候補生を乙幹と甲幹に分けるときに、どうしてもあれは甲幹にしろ」という命令が出た」という。だから『風にそよぐ葦』の石川達三とはまったく正反対だというんですね。あの小説はいじめられるわけですが、そうじゃなくて、ああいうのは非常に大切に扱ったんだという。

伊藤 それはうまいところに入れていただいたですね(笑)。よく考えてみれば、古年兵からすれば、「いじめた相手が」教育隊に入つて経理学校に行ったら、自分よりも階級が上になるわけじゃないですか。

小田村 ですから教育隊が終わりまして、いったん原隊に戻るわけですよ。『昭和十九年』六月二十日に教育隊が終わって七月一日に経理学校に行きますが、経理学校の場合は転属で原隊と縁が切れるわけですから、ところが教育隊は派遣ですから、元に戻るわけです。戻つてくると、中隊では昔の古年兵がいい顔をしないんですね。こちらは一所懸命尊敬してつき合っているんですが、とにかく嫌なことを言うんです。大学を出て幹部候補生を受けない人もいますからね。「あれも同じ学生様なんだよ」とか言っていましたから(笑)。

伊藤 教育隊は何をするところなんですか。

小田村 これはだいたい、歩兵教練です。

伊藤 幹部候補生の問題とは関係ないんですか。

小田村 幹部候補生の教育隊ですから。

伊藤 さつきおっしやった甲乙はどうなんですか。

小田村 さつき申しあげたのは特別訓練班といって、特別の初年兵の班をつくっていた、その話なんです。一方、教育隊は東京師団経理部幹部候補生教育隊と言って、師団直轄でつくっていたわけです。多摩川の先、溝の口の奥、いまはすっかり住宅街になっていますが、山の中に廠舎がありました。溝の口に演習場があったわけです。今は「川崎国際」ですか、ゴルフ場になっています。その演習場で訓練するための廠舎があつて、そこに教育隊を置いて、そこで教育をする。だいたい歩兵教練と剣道と、いろいろな体育関係ですね。それに座学がございまして、座学は東京師団から主計の将校が来て、経理規程とか糧秣関係の講義をしておりました。

伊藤 経理学校の予備教育みたいなものですね。

小田村 予備教育ですね。

伊藤 経理学校というのは、試験を受けて入るんですか。

小田村 教育隊の途中で、幹部候補生を甲種と乙種に分けるわけです。それで、甲種の方は士官候補生になるわけですね。乙種の方は下士官候補生になるんです。ですから、そこで分けられて乙種になりますと、下士官になる。甲種の方は、主計でしたから経理学校に行く。兵科の場合は、甲種は予備士官学校に行くわけです。乙種の方はまた原隊に戻って下士官になる。それから先はわかりません。

伊藤 経理の方に行くのではない幹部候補生も一緒の教育隊なんですか。

小田村 いや違います。これは経理部幹部候補生の教育隊です。ですからほかの部隊も全部集めてきて、師団として教育を受けさせたわけです。ご存知かもしれませんが、東大の法学部長や法務大臣をした三ヶ月「章」君なんかも同じ教育隊です。それから、新日鉄の社長になった武田豊氏、中隊が違ったので知りませんでした、それもしました。この人はちよつと歳をくっていましたけれどね。

伊藤 それが終わって、原隊に戻って、経理学校に入学する。この甲乙に分かれるときはなんらかの選抜があるわけですか。勝手に決められてしまうんですか。

小田村 選抜の試験はありませんね。ですから訓練状況を見て、区隊長が分けたんだらうと思います。

伊藤 区隊長というのはどれぐらいの――。

小田村 区隊長は私のときは少尉で、幹部候補生出の歩兵の少尉です。

伊藤 年齢的にはあまり変わらないでしょう。

小田村 あまり変わらないです。私もより二つ三つ上ぐらいじゃないでしょうか。いまでもその区隊の会はやっています。区隊長はまだ元気です。

■召集から終戦まで (3) 陸軍経理学校に入校

伊藤 それで経理学校に行かれるわけですが、もう十九年も七月ですから、だんだん敗色が濃くなった頃ですね。

小田村 そうですね。六月に「アメリカ軍が」サイパンに上陸しましたね。あれは六月二十日頃でしたか。その前に区隊付の下士官が、「敵の空母群がサイパン沖を遊弋中である」というような情報をちよつと伝えたんですが、本当だとは思わなかったですね。というのは連合艦隊が健在だと思っていましたから。

伊藤 そうですね、みんなそう思っていたわけですからね。

小田村 ええ、ですから敵の空母群がサイパンまで来るとは夢にも考えなかったですね。そういう情報を聞いて、「連合艦隊はどこに行っただんだ？」という声が候補生の中から上がりましたよ。

佐道 報道だけ聞いていれば、健在のはずですからね。

小田村 トラックでやられたのは、ちゃんと報道に出しましたが。

伊藤 いちおう報道されましたね。

小田村 報道されましたが、損害の大きさははっきり言わないですか

らね。

伊藤 この経理学校は小平にあつて、卒業なさるまで――。

小田村 五ヶ月です。七月から十一月の末までですから、五ヶ月ですね。途中で南方に行かなくなるといふことで、九月の初めに南方要員を選抜しまして、南方に送り出したんです。

伊藤 船ですか。

小田村 船です。あのとき経理学校に何人いたのかな。六個中隊でしたから千人位いたのではないかな。

伊藤 それは経理学校を卒業する前ですか。

小田村 前です。三分の一ぐらい、候補生の中から抜き出して。

伊藤 これは任官させたんですか。

小田村 いや任官させません。だから階級はまだ軍曹だったと思います。「経理学校に」入校したときが伍長で、九月頃に軍曹になって、その階級のままでした。だから幹部候補生のままですね。それで昭南、シンガポールに行くといふことになりました。昭南に経理学校をつくらせて、そこで教育する。いまでも昭南の経理学校の会がごいます。私も一回話に来てくれと言われて、行ったことがあります。

伊藤 先生は残留の方なんですか。

小田村 残留の方なんです。

伊藤 その人たちは向こうに到達できたんですか。

小田村 到達できたようですね。

伊藤 それはラッキーでしたね。

小田村 ラッキーですね。一足違いでやられるところだったという話もありますしね。フィリピンに寄つて、マニラから向こうに行ったようです。

伊藤 当時は潜水艦にだいぶやられていますからね。

小田村 ええ、十九年九月ですから、台湾沖、レイテ戦は目前に迫っていた頃ですから。

伊藤 卒業なさるまでに、経理学校では実際に各部隊なりで経理を担当することができただけの訓練を受けるわけですか。

小田村 一応そういうことになっていますね。だから教育隊の続きで、経理関係の法規とか糧秣の補給とかをやりました。それから現地戦術といひまして、甲府に行つたんですが、甲府盆地を中心にして部隊の運用の訓練をしました。課題、情況を出して、その答案を書いて、採点するという訓練ですね。それから飯盒炊さんの実習とかそういう関係のもろもろのことをやりました。現地自活の方法もあのころは教えてくれたと思いますね。畑とか豚とか、そんなこともありました。しかし半分は歩兵訓練です。

伊藤 経理学校を卒業すると、士官として任官するんですか。

小田村 見習士官になります。

伊藤 准尉ですか。

小田村 准尉ではないんです。要するに階級は曹長の位なんです。ですからここ「左肩を指す」は三つ星で、まだ下士官の襟章なんです。ただし座金がついているわけですね。座金がついていると見習士官といふことになるわけです。

伊藤 現実には士官としての待遇を受けるわけですか。

小田村 士官としての待遇を受けます。見習士官ですが、そこがまた難しいところで、ただそれだけでは准尉よりも階級は下なんです。ですから准尉が通ると敬礼しなくてはいけないんです。

伊藤 准尉というのは、下士官から上がつてきた連中ですね。

小田村 はい、昔の特務曹長ですね。ところが将校勤務という制度がございまして、黄色い印章をつけるんです。その将校勤務をとりますと、准尉より上になるんです。

伊藤 階級社会ですから、大事なことですよ（笑い）。

小田村 敬礼をするかしないか、大変なことですからね。

伊藤 間違えたら大変ですね。

小田村 小野田「寛郎」さんは少尉ですが、服装は完全に見習士官の服装ですね。将校は個人の服を着ていますからね。准尉も同じです。

伊藤 卒業して、どこに行くかというのは、原隊とは全然関係ないわけですね。

小田村 関係ありません。原隊から離れちゃうものですから、あとの配属は学校の方で決めます。どこと話して決めるのか知りませんが。

伊藤 あちこちにばらまかれるんですか。

小田村 ばらまかれます。

伊藤 経理学校第何期とかいうんですか。

小田村 経理学校にはいろいろございまして、士官候補生もおりますし、準士官から上がってくるのもありますし、いろいろあるんですが、私どもは東京の幹部候補生の十三期ということになっていきます。それぞれあちこちにありまして、例えば新京の経理学校何期生とか、さつき申しあげた昭南の経理学校何期生とか、あるわけです。

伊藤 それで、それぞれ会があるわけですか。

小田村 そうですね。しかし東京の経理学校は多すぎて、ちよつと開けないですね。中隊の会は前にもときどきやっておりますが、これも大勢ですからね。いまやっているのは、溝の口の教育隊の同じ区隊でやる程度ですね。あとは面白いことに、溝の口の教育隊と経理学校の同じ中隊の有志が集まりまして、勉強会を始めたんです。それはずいぶん年が経ってから、昭和四十七年頃からですか。それは十年ぐらいやりました。いまは年に一回の顔合わせをやっていますけれど。

伊藤 いろいろな勉強ですか。

小田村 いろいろな勉強です。政治、経済、途中から少し近代史の勉強をしようということですね。

伊藤 講師を呼んできたりするんですか。

小田村 初めは講師を呼んできたんですが、その後それはやめて、自前でやりましょうということをやっていましたけれどね。

■召集から終戦まで

(4) 陸軍航空本部経理部 (一九四四)

伊藤 先生は航空本部の経理部に行かれるわけですが、あそこに行け、

ということですか。

小田村 そうです。

伊藤 これは、辞令をもらうんですか。

小田村 辞令をもらいます。行けといわれて、着任の申告をいたします。そこで辞令をもらうわけですね。

伊藤 その辞令は誰の名前なんですか。

小田村 航空本部長の名前だったと思いますね。

伊藤 航空本部というのはどこにあつたんですか。

小田村 市ヶ谷です。市ヶ谷の大本営の中にございまして、このあいだ壊されちゃいましたが、ずいぶん最後まで建物は残っていましたね。陸軍省の大きな建物がありますね。あの陸軍省の建物の、正面から見て右の方に三棟ほどコンクリートの建物がございましたが、そのうちの二つを使っていたと思いますね。

伊藤 あれはもともと士官学校でしょう。

小田村 士官学校ですね。隊舎だったんでしょうか、何かよくわかりません。

伊藤 航空本部の経理部というのは、そんなに大きな組織ではないんでしょう。

小田村 そんなに大きくはないんですが、経理部には、経理課と施設課というのがございまして、施設課の方が大きかったわけです。施設課の方は航空基地の整備に行きましたから、これはわりあい人間も多かった。ただし、そこ「本部」にいるのはごく少数で、あとは全部現地にばらまかれるわけです。

伊藤 先生がおやりになった経理部でのお仕事はどんなことですか。

小田村 そう大したことではないですね。経理課の中に、庶務班と衣糧班と調弁班とがありまして、調弁班は資材・装備品の調達ですね。調達の原価計算等が中心になるわけです。私は衣糧班というところで、衣糧班は被服と糧秣と需品と三つあるわけですが、その需品を担当しろといわれました。

伊藤 需品というのはどういうものですか。

小田村 需品というのはこんなものですね「テーブルを指す」。

伊藤 机、椅子。

小田村 ええ、そういう諸々の雑品が全部、需品なんです。

伊藤 それを調達するんですか。

小田村 調達といいますか、買うということはまずなくて、需品本廠というのが府中にあつたんです。需品本廠からあちこちの部隊に回してやるという割当みたいなことですね。部隊というのはそんなにございませぬ。航空本部と航空総監部というのは同じ組織なんです。だから両方やっているわけです。ただ、航空総監と航空本部は別になつたこともありまして、一緒だったこともあります。航空総監部というのは航空関係の学校ですね。熊谷の飛行学校とか、明野の飛行学校、大刀洗もそうです。そういう飛行学校を管轄している。それから航空本部の方は、例えば航空廠。各務ヶ原とか、あちこちにありました。航空技術研究所もそうです。そういうものが航空本部直轄でしたね。そういう部隊への需品の配分です。

伊藤 飛行機は直轄でつくっているところと、発注して、ということころはないんですか。

小田村 航空機それ自体は航空兵器総局だったかな。兵器それ自体は兵器行政本部というのが河田町にございまして、「兵本」といっていたんですが、航空関係は、遠藤さんという中将がいましたでしょう。

伊藤 遠藤三郎ですか。

小田村 戦後中国なんか——。あれがたしか航空兵器総局だったと思いますけれど、そこでやっていたんじゃないでしょうか。

伊藤 なかなか複雑なつくりですね。

小田村 ええ。航空本部の中に当然兵器部もありましたが、そこでどういうことをやったか、あまり詳しくは知りませぬ。

伊藤 行かれたのは、まだ任官なさる前ですね。

小田村 行ったのは、経理学校卒業してすぐですから見習士官です。しかし将校勤務をとりますと、待遇は将校と同じになるんです。ただ任官にはなりませんので営内居住です。任官は二十年九月一日の予定

だったんです。

伊藤 それで戦争に負けたので、繰り上がったわけですか。

小田村 繰り上がったわけです。

伊藤 いわゆるポツダム少尉ですね。

小田村 ポツダム少尉に入つたわけです。

伊藤 経理部にお入りになつても、末端でしょう。全貌は見えないですね。

小田村 見えないですね。ただ面白いことに、陸軍省、参謀本部、航空本部、そういうところが全部一緒になつて、昼飯は将校食堂、士官食堂に入つて食べるわけですね。それで、見習士官も末席に席がありました。そうすると参謀が毎日戦況の説明をするんです。宮様もおられますから。その戦況の説明が、まったく面白くないんですな。ウルシーを出た敵の船団がどうだこうだということを言うんですが、結局それでどういふふうになっているのかわからない（笑い）。

伊藤 航空本部に行かれた頃は、これはもういかな、という時期じゃないですか。どう感じておられましたか。

小田村 本当に敗色濃厚になってきましたか。

伊藤 しかし神州不滅だという感じでおられたんですかね。

小田村 そうですね。どういう形で終わるのか、戦争に負けるというのがどういふことか、まったく想像がつかないんですよ。

伊藤 経験のないことですからね。

小田村 ええ。戦争は不利だけれど、どうにもしようがないということですね。

武田 同僚の方とかと、そういうお話をするようなことはございましたか。

小田村 そういう話はするんですが、とにかく最後までやるしかないという感じはみんな持っていたと思うんですね。

伊藤 実際に戦争終結ということにならないうちは、結果として玉碎になるかもしれないけれど、やるだけはやるんだという感じでしょうね。

小田村 ええ、そういう感じですね。それで、情勢が変わってきましたのは、ポツダム宣言が出まして、文面を見る限り、とてもものめるものではないなという感じはしたんですが、一応条件が出たということは、一つの指標のようなものが出たという感じはいたしましたね。ただ、いずれにしても続けざるを得ないということだったんですが、例の広島原爆がありましたね。八月六日、新型爆弾、何のことかよくわからなかったですね。だけどだんだんあれはアトムにちがいないということがわかってきました。

それから班長が尾田源行さんという主計少佐で、これは東大出の方で、戦後——水野「成夫」さんの国策パルプですね——、国策パルプに入りまして、山陽国策パルプの会長になった人です。この方が「将校以上集まれ」と言って、集められたのが八月九日だったと思います。ソ連が参戦したという情報です。長崎原爆はまだ報道されておりました。ソ連の参戦はすぐ伝わりました。そうしたら、同じ衣糧班におりました、市来さんという少佐が、「いよいよドッペル・ブリンクトですな」と言ったんです。そうしたら尾田さんも、黙っていましたが、頷きました。さていよいよ最後かな、と思ったんですが、私もはまだ営内居住で——。

伊藤 これは営内居住なんですか。

小田村 営内居住です。それを申しますと、初めは市ヶ谷に住んでおったんです。薬王寺門に近い方の建物に泊まっていたんですが、四月に航空総監部を改編して、航空総軍司令部になったわけです。航空総軍司令部になりますと、今度は直轄部隊が少し増えてきました、その主計の幹部候補生を教育しなければいけないので、教育隊を総軍直轄でつくる。その教育隊を若松町の成城中学校に置いた。ちょうど夏休みだったものですから。その前に航空総軍、航空本部も七月に疎開したんです。市ヶ谷から引越しまして、戸山ヶ原に行っただけです。戸山学校の隣、いまの戸山ハイツのところですね。あそこに半地下の三角壕舎をたくさんつくりました。そこへ、疎開したんです。

伊藤 疎開といっても——（笑い）。

小田村 見習士官は昼間は戸山ヶ原で仕事をして、朝と夜の「航空総軍直轄の教育隊の」内務指導だけやってくれというので、成城中学校に寝泊まりすることになりました。

■召集から終戦まで (5) 昭和二十年八月十五日

伊藤 そうですか。では終戦のときは、そこにいらしたんですか。

小田村 そうですね、終戦のときはまだ成城中学校におったわけです。それで八月十日の朝の新聞を読んだんです。そうしたら、下村「海南」情報局総裁の談話が載っていました、「国体護持を最後の一线とする」と、見出しもそうなっていました。これはいよいよ最後だなど思ったんですが、戦争目標を最後はここに絞ったとすぐにわかりました。

市ヶ谷に住んでおったときには、同じ室に通信の見習士官も一緒に住んでいたんです。その通信の見習士官から、実は通信の方から連合国に電報を打ったという情報が入ってきました。しかし詳しいことはよくわかりません。八月十四日の朝だったように思うんですが、夕方だったかもしれません。B 29が上空に飛来しまして、成城中学校で朝礼をやっていたのか、夕方の礼をやっていたのか、飛来してビラを撒いたんです。伝単ですね。それに日本側の回答と、いわゆるバーンズ回答が全部載っていました。そのときに、これはいよいよ最後だなど思ったんです。そこに「日本国政府の最終形態は日本国民の自由に表明する意思によつて決定される」と書いてあったわけですね。これはとんでもない話なんだけれど、考えてみれば、日本国民が自由に決められるんだから、それならそれで目的は達せられるかなと、そういうふう思ったんですね。それから十四日の夕方、若松町から市ヶ谷の方を見ると、煙が見える。

伊藤 書類を燃やしているんですね。

小田村 だから十四日から始まっていたわけですね。それで、これは

いかん、と思って、明日になるとどういうことになるかわからないと思ったものですから、今晩は家に帰って泊まろうと思って家に帰ったんです。

伊藤 それは自由なんですか。

小田村 もう見習士官は外出外泊自由です。それは見習士官の特権なんです。

伊藤 ちょっと変な話ですが、お兄さんは。

小田村 一番上の兄は家におりました。二番目の兄は父の会社に入りまして、掛川工場というのをつくっておったので、掛川に行っていたんですね。そこで生活していました。

伊藤 それが寅二郎さんですね。

小田村 寅二郎です。それから三番目の兄は海軍に行っておったんですが、これは佐世保におりました。

家に帰ろうと思って、夜遅くなつて新宿駅に出たら、壮士風の男が寄つてきて、さかんに憤慨するわけです。私が軍服を着ているものですからね。「まことにけしからん、君側の奸、重臣どもが勝手に降伏を決めて、六百万の大軍を擁するに拘わらず降伏するとは何事であるか」というんですが、相手にするわけにもいけません。そういうことがありましたね。だから情報があちこち飛んでいたんだろうと思うんです。

それで家に帰って、翌朝起きましたら、また部隊に帰らなければいけません。そうしたら、私の隣の家、といつても自分の家を貸していたんですが、鈴木首相の令弟で一番上の兄の岳父になる鈴木孝雄大將が住んでおられたんです。当時靖国神社の宮司でした。父が教えてくれたんですが、「実は夕べ、総理の丸山町の自宅が焼き討ちされた。それでこちらに避難している」という話を父から聞きました。「日本で一番長い日」という本に出て来ます。あれは私のところだったんです。

伊藤 そうですか。

小田村 そうしますと、ラジオを聞いているのが変な感じでした。

「敵一機房総方面に向かっている」とか言っているんですが、なんだか変な気がしてきました。戸山ヶ原に行きました。そうしたら課長が課員を全部集めてくれて、前夜阿南「惟幾」陸軍大臣が陸軍省に高級将校を全部集めて、御前会議の状況をお話しされた、その内容を正確に伝えてくれました。そういうことで、今日昼に陛下の玉音放送があるということです。ですから、だいたいそれでわかったんです。そのときはもう阿南さんが自決されたということも課長が話してくれました。あとで、当時陸軍航空本部長というのが別にありました（航空総軍司令官は河邊正三大将）。寺本「熊市」中将は航空本部長が、戸山ヶ原の執務室で自決されたんですね。それが十五日だったと思います。そんなことで玉音放送の方は昼間に、営庭にラジオを備え付けまして、みんなで拝聴しました。

伊藤 反応はどうだったんですか。いろいろな方にお聞きすると、憤激とか、非常に静かに終わったとか、部隊によつてずいぶん違うように思いますが。

小田村 私どもは衣糧班だけで拝聴しましたからわかりませんが、だいたい非常に静かだったと思います。班長の尾田さんがあとで大変いいことを言われたんです。「諸君は、これからどういう時代になるかよくわからないけれど、一つ教育の問題を考えてもらいたい。今後、たとえば『忠孝』というようなことは教えられなくなるかもしれない。そういう時代になったときにどうしたらいいかということを考えてほしい」ということを言われました。私はまったくよくわからなかったんです。「忠孝」とポツダム宣言とどういう関係があるのか、見当もつかなかったし、まさか教育勅語が廃止されるなんていうことは考えてもいませんでしたが、そういう心配をしておられたようですね。

■召集から終戦まで (6) 八月十五日以後

伊藤 もう時間を超過しましたが、八月十五日から召集解除になるま

でのあいだは何をされていたんですか。

小田村 何もしてないんです。十五日から八月二十六日まで。

伊藤 後始末とかやっておられたんですか。

小田村 多少の後始末はしましたが、後始末のしようがないんですね。経理課の衣糧班は立川に倉庫を持っておりましたから、立川の倉庫の荷物を新宿の方に移したんですが、その程度のこと、何をしていたかという記憶はあまりないですね。部隊ですと整理するのが大変なんです、官衙ですから、特別にやることはあまりなかったように思いますね。

伊藤 召集解除は徐々に徐々にやっていくわけですか。それとも航空総軍で――。

小田村 部隊によつて、それぞれの部隊長の判断だったと思います。だから一律ではないですね。おそらく、総軍司令部のほうで、召集将校の処理というようにことで相談して決めたんじゃないかと思うんですが、よくわかりません。

伊藤 先生のところは相変わらず経理部なんでしょう。

小田村 経理部ですね。

伊藤 その経理部が、突然みんな解除になるというのではないんですよ。

小田村 そうじゃありません。見習士官だけは一斉に解除されました。伊藤 先生は早い方ですか。

小田村 早い方です。たしか八月二十六日だったと思います。すでに任官している将校は幹部候補生出身で予備役であつても、現役の将校ももっと遅かつたと思いますし、下士官も遅かつたと思います。衣糧班に沖「武夫」さんという中尉がおられたけれど、この方のお宅に泊めていただいたこともあるんですが、まだあのときは召集解除になつていませんでした。ですから、予備役でも一部だったと思いますね。

それで辞令が面白いんです、まず先に任官させるんです。一番初めの辞令が、陸軍主計少尉に任ずるというものです。その次に、即日予備役編入を命ずる。それから即日召集をして、そして召集解除です。

武田 なんといったらいいか（笑い）。

小田村 いや、本当にびっくりしました（笑い）。

伊藤 そういうふうになるということはわかっておられたんですか。小田村 いや、わかつてはいなかったですね。わかつていたのかな。いずれにしても、解除になるとは思っておりませんでした。それがその日だったか前日だったか忘れしました。

伊藤 召集解除になつて、お帰りになる。それで白金のお宅は空襲にも遭わなかったんですか。

小田村 そうですね、近くまで来ましたが、助かったんですね。

伊藤 何かラッキーですね。みんな帰るところがないという人が多かったようですけれどね。

小田村 友人の見習士官が三人一緒にいたんですが、しばらく私の家に泊まっていました。一人は静岡ですね。これも家をやられたのかな。もう一人は名古屋です。これは完全に家をやられた。それでお父さんが福岡の方に行っておられたんですか、彼が一番長かったです。もう一人は小樽で、家は大丈夫だったんですが、小樽に帰るまでのあいだ、二、三日泊まりました。名古屋の友人が一番遅くまでいたと思います。

伊藤 食い物が無い時代ですから、大変だったんじゃないかと思いますが。

小田村 でもそれはしょうがないでしょう。

伊藤 なんとか食べられたわけですか。

小田村 ええ、それはなんとか食べました。

伊藤 ここでまた復学なさつて、ということから始まるんですが、召集解除になったところから、復学なさつて、大蔵省にお入りになるところは、すみませんが次回にお願いしたいと思います。そして大蔵に入られてからしばらくのことをまた伺いたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

小田村 わかりました。

伊藤 私には軍隊経験がございませんので、あの時期にいったいどう

いう仕掛けで物事が動いていたのかとか、みなさんはどういう感じをお持ちだったのか、よくわからんです。たいへん参考になるお話で、ありがとうございます。

まだお聞きしたいと思うことがたくさんあったんですが、あとでまた聞かせていただきます。記録がなくなつてからお聞きするとまたもう一度ということになりますので。ありがとうございます。あとあと、内閣審議室とか行管のこともありますし、大蔵、防衛といいろいろありますから。

小田村 防衛のところがわりあい面白いかもしれません。

伊藤 私どもも防衛は、海原さんとか、伊藤圭一さんとか、いま夏目「晴雄」さんに伺っているんですね。こちら側から聞いているわけですが、大蔵から行かれた方のことも話に出ますね。非常に大蔵からは優秀な人を派遣してくれているということをおられますが、ちよつと複雑なんだろうと思いますね。先生は大蔵から行かれて、必ずしも経理だけをおやりになつたわけではないでしょう。

小田村 はい。

伊藤 そういう絡みもあつて、伺いたいことがいろいろございますので、ひとつよろしくお願いいたします。

小田村 はい、わかりました。

一同 ありがとうございます。

〈以上〉

*1【日糖事件】……明治四十二（一九〇九）年、大日本精糖株式会社の重役が、「輸入原料砂糖戻税法」の延長を巡って代議士を買収した事件が発覚。日糖側は専務磯村音介などが有罪、収賄側も大物代議士を含めて二十名以上が有罪となつた。その後、日糖の相談役渋沢栄一が社長を藤山雷太に託し、日糖は再建の軌道に乗ることになった。

*2【明治鉱業】……明治二十二（一八八九）年、安川敬一郎は、平岡浩太郎と共に筑豊の赤池炭坑を開坑。明治四十一（一九〇八）年、明治炭坑と赤池、豊国炭坑を合併して明治鉱業株式合資会社を設立した。

*3【保土谷曹達】……大正五（一九一六）年、磯村音介が「株式会社程谷曹達工場」を発足させ、日本最初の電解法カセイソーダの製造を開始。大正十四年、社名を「保土谷曹達株式会社」と変更、昭和十四年「保土谷化学工業株式会社」と改称し、現在に至る。

*4【明倫館】……萩藩の藩校。一七一九年設立。朱子学、徂徠学の両派が関与。一八四九年に小学舎、医学所、洋学所等を付設し学科を拡充した。一八六三年藩庁の山口移転に伴い同地には山口明倫館が設立。

小田村 四郎

オーラルヒストリー

第 2 回

終戦から国税庁勤務まで（1945～1950）

【2003年3月7日（水）14:00～16:20】

（於：政策研究プロジェクトセンター）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

記録・編集： 丹羽 清隆

第2回質問項目

前回、第一回目のインタビューでは、生い立ちから終戦までのお話をお聞かせ頂きました。今回は、昭和20年から27年まで、つまり東京帝大に復学されてから、占領下の大蔵行政に関わられる間の約七年間のお話をお聞かせ頂ければと思います。以下に、簡単な質問事項を並べました。これは先生がご記憶を思いだされるきっかけですので、先生のお話の都合で取捨選択して頂いて構いません。また、この質問にないことも是非お話頂ければと思います。よろしくお願い申し上げます。

〈復学から大蔵省入省まで〉

1. 昭和20年8月に終戦を迎え、10月に東京帝国大学に戻られますが、軍隊生活から学生生活への切り替えは、気持ちの上で、スムーズにいきましたか。
2. 当時の学生生活はどのようなものでしたか。また、どのようなことを勉強されましたか。
3. 昭和21年秋に高等試験を受けますが、受験勉強はどのようにされましたか。例えば憲法などは、新憲法も勉強されたのですか。またこの時再開された試験はどのような様子でしたか。
4. その後、大蔵省に入省されるまでの経緯について教えてください。他の省庁へ行くこともお考えでしたか。

〈入省直後〉

5. 昭和22年5月に入省されますが、大蔵省の同期はどのような方でしたか。また、前後の入省の方で、親しくなった方やご記憶に残った方などいらっしゃいますか。
6. 当時の大蔵省の幹部（石橋湛山、池田勇人、愛知揆一、森永貞一郎、櫛田節男各氏など）のご印象は如何ですか。また、特に先生が薫陶を受けたような方はいらっしゃいますか。
7. この頃の大蔵省は、インフレや戦争の後始末などの課題を抱えていたと思います。大蔵省の雰囲気は如何でしたか。

〈理財局時代（22.5～23.6）〉

8. 最初に配属されたのは理財局国庫課ですが、当時の理財局の人員構成や雰囲気などはご記憶にございますか。また先生は、国債の減債制度と外資償還の調査をされたとのことですが、具体的な調査の内容など、ご記憶にございますか。
9. 三ヶ月ほどで、外資課に異動になります。具体的なお仕事は何でしたか。また、日米会話学院に通われたとのことですが、当時の英会話の勉強はどのようにされていたのでしょうか。

10. 外資課と貿易庁（商工省）、GHQ などとの関係や交渉の様子などでご記憶にあることはございますか。

11. その後、外資三課に異動になりますが、具体的なお仕事は何でしたか。先生は、この時期、インフレ対策の文献の翻訳などをしていらっしやつたとのことですが、当時のインフレの状況や政策論争についてのご記憶はございますか。また、辣長の石野信一氏についてのご印象は如何でしたか。

12. この間、政権は、芦田・片山の中道連立政権の時代でしたが、当時の政治の雰囲気などについて、ご記憶はございますか。

〈東京財務局時代（23.7～23.10）〉

13. その後、東京財務局に異動になりますが、この経緯についてお教えてください。具体的なお仕事は徴税事務とのことですが、シャープ税制前の徴税行政はかなり混乱していたと聞きます。実際にはどのようなものでしたか。

〈主税局（GHQ 派遣勤務）時代（23.11～24.6）〉

14. その後、GHQ の主税部へ派遣されますが、この経緯についてお教えてください。また主たる仕事は何でしたか。

15. GHQ のカウンターパートは誰でしたか。、また、実際に占領行政の仕事に協力されて、特に印象に残っていることはございますか。

16. シャープ来日とシャープ勧告は、戦後税制の出発点だと言われていますが、先生の実務のご経験から、占領期の税制について、どのようなお考えをおもちですか。

17. このあと、先生は新設の国税庁総務部に異動されたという記録があるのですが、お仕事の内容は変わられましたか。それとも、仕事内容は継続していたのでしょうか。

〈天王寺税務署長（25.5～27.8）〉

18. 天王寺の税務署長になられます。当時の大阪、あるいは関西の雰囲気はどうでしたか。

19. 税務署長の生活とはどのようなものですか。また、比較的若い年齢で長となられるわけですが、ご苦労されたこと、注意されたことなどありましたか。

20. シャープ税制直後の徴税行政を実際に担当されて、変化などは感じられましたか。

〈占領・独立について〉

21. 占領行政の一端を担われた立場から、先生は占領についてどういうご印象をお持ちですか。

22. また、講和・独立の動きをどのように見ていらっしやいましたか。

今回は以上のような点を参考にしていただければ幸いです。

■「補」吉田松陰親族系図

小田村 前回の話ですが、これは『歴史読本』「昭和四十八年七月号」に載ったもので、古川薫さんがつくったものです。「吉田松陰親族系図」を示す。これはわかりやすいんです。

伊藤 これはいただいてもよろしいですか。「系図を見て」こうなっているのか。楫取家があつて、小田村家があつて。小田村希家（ひさいえ）のところは、どうなっているんですか。

小田村 小田村希家ですが、「妻の」たかというのは日野家から来たんですね。有芳が「希家・たかの」養子になりました。「楫取道明の娘の」治子が結婚するということになるんですね。ですから、これはこういうふうにつながるわけです。「小田村希家の下に小田村治子・有芳がつながる」。

伊藤 点線でつないでおいでなければいいのに。

小田村 そうですね。それで「楫取道明の妻の」美寿子というのが私の祖母になるんですが、京都の千種家ですね。明治天皇の千種局の妹になるわけです。

伊藤 楫取家は三家あるんですか。

小田村 ええ、三つあるわけですね。

伊藤 これをつくっておかないとわからなくなりますね。しかし吉田松陰の関係はずいぶん広いですね。杉道助の関係だな。

小田村 杉さんは子供がいないものですから、跡は杉丙三さんが継いでいると思います。

伊藤 児玉秀雄という人がいますね。

小田村 それは違うんです。伯爵家の児玉さんではないんです。

伊藤 同姓同名ですか。びっくりした。こんなところにあるわけはないから。玉木というのも、向こうにある姓ですね。

小田村 玉木文之進がこの「吉田松陰の」叔父さんになるわけですね。この「吉田松陰の」上に杉百合之助がありまして、吉田大次郎が次の

弟で、その次が玉木文之進になるわけですね。玉木文之進「の家系が」が、玉木正誼のところに行くわけですね。

伊藤 乃木「希典」大將と関係のある玉木は、これとは違うんですか。
小田村 これです。玉木文之進ところに、乃木さんが子供の時に修行に行かされるわけです。乃木さんの弟の正誼が玉木家の養子になって前原一誠の萩の乱で戦死します。玉木文之進はその責を負って自決します。吉田小太郎が松陰の跡を継いだわけですが、これも萩の乱で戦死するわけです。

伊藤 それでは、吉田家はなくなってしまうんですか。

小田村 そうです。それで跡を継ぐためにここ「松陰の妹・千代の家系」に来るわけです。吉田庫三です。この人は横須賀中学の初代校長です。小柴「昌俊」さんとか小泉「純一郎」さんも横須賀中学ですね。

伊藤 これはあとが続くんですか。

小田村 それで、こども子供がいなくて、こちら「松陰の兄・梅太郎の家系」に来るわけです。これが養子になるわけです。

伊藤 これは夫婦養子なんだな。じゃあ吉田家は一応続いているんだ。
小田村 そうです。この吉田武さんというのは広島におられまして、

一度お目にかかったことがあるんですが、亡くなられたようですね。
吉田基子さんという方はおられるようですが、あとは誰がおられるのか、ちよつと知りません。それからこれが『楫取家文書』です「本を示す」。

伊藤 私、持っております。

小田村 この後ろに手紙の類があるんですが、年譜があります。ちよつと間違っているところもあるんです。名前や、私の母の生まれた年もちよつと違っているんですが。それで藤井貞文先生が解題をしておられまして、これに詳しく書かれています。

伊藤 藤井貞文さんはしっかりした人だからな。いや、ありがとうございます。さいました。前回のものを読み返しさせていただいて、非常に面白くて。

小田村 ちよつと間違ったところもありましたので、訂正しました。

伊藤 特に補充されることはございますでしょうか。手直しされていれば、もうけっこうです。

小田村 だいたい手直ししております。

■大学への復学と卒業 (1) 大学への復学

伊藤 それでは今日は、終戦になってお帰りになつてから、だいたい昭和二十七年あたりまで、占領下の大蔵行政にかかわられた時期のお話を伺いたいと思います。まだ、おそらくぺえの時代でしょうかから、見る事ができる範囲も狭いだろうと思いますが、狭いところでもいいので、お話をいただければと思います。

八月に終戦で、十月に東京帝国大学に復学されるということになるんですか。

小田村 そういうことですね。

伊藤 「陸軍に」お出かけになるときは、休学をされたわけですか。

小田村 形式的には、休学だったかもしれないですね。入営ですから、陸軍に行っておったということです。手続きはどうだったのか覚えていません。復学の時は復学の届けみたいなのは出したと思います。伊藤 軍隊生活から突然大学生活に戻られて、いかがでございましたか。

小田村 とにかく八月末に家に帰りましたが、あのころ「虚脱状態」という言葉が流行りました。本当に何もする気がなくなっちゃうんですね。家の中の掃除の手伝いとかをやっていましたけれど、しょうがないので少しずつ、昔の友人あるいは軍隊のときの友人などとき合うようになってきました。そうですね、あのころちょうど友達の家にいったら、文学全集みたいなものがありましたから、そんなものを借りてきて小説を読んでおったり、そんなことをしておりました。友人と交流を復活していくのが初めて、だいたい九月中はそんなところだったと思います。

ただ、そういうときからだんだん、かつての発禁本が古本屋などにぼつぼつ出回ってきていましたし、左翼の連中の雑誌・新聞等の言論活動がだんだん大きくなってきました。昔の高等学校の友人と、少しそういう方面を勉強しようかということでも勉強会を始めたことがあります。何を勉強したのかな。羽仁五郎さんがだいたいぶちやほやされてしまったね。羽仁五郎さんの明治維新についての岩波新書「『明治維新・現代日本の起源』一九四六」があったと思いますが、そんなものとか、それに類したものを読んで書評をしよう、というようなことを始めたことがあります。

伊藤 ミイラ取りがミイラにはなりませんでしたか。

小田村 ならないですね。どう考えてもおかしいものですからね。だいたい友人も「こういうところはどうか考えてもおかしい」というようなことを言っていました。でもそれだけ一緒に勉強をして、本を読んだ、ディスカッションしたことは大変良かったと思いますね。『資本論』を古本屋で捕まえました。高島素之の昔の本です。あれを読み始めました。

伊藤 おわかりになりましたか。

小田村 まあ、読みましたけれどね(笑い)。

武田 政治学科のお仲間と一緒に勉強会をされたんですか。

小田村 高等学校の時の友人です。それから、そうは言っても、こういうことになるとう学校の方にもちよつと行ってみなくてはいけないというので、大学へ行きました。そうしたら十月から新学年、新学期が始まるというので、それに行きましようというので、大学に戻ったわけです。

伊藤 十月は新学期ですか。

小田村 新学期でしょうか。いずれにしても二年生の途中で、「昭和十八年」十月、十一月はほとんど授業があつたかなかつたか、あまり覚えていません。途中でですから、今度は「昭和二十年」十月から、第二学年の授業を受けるということになったわけです。

伊藤 それなら継続したという感じでございますね。

小田村 継続したわけですよ。そうしますと、だんだん講義にも慣れてきます。それから大学では特別講義みたいなものがありました。公開講座なんですか。宮沢「俊義」さんの話は僕は聴かなかったけれど、「帝国憲法の制定過程」というような講義をしました。そういうものは活字になって、あります。

それから横田喜三郎さんが、芦田均さんを連れてきてまして、芦田さんが講演をしました。わりあい面白かったですね。芦田さんだったかな、満州事変の例の柳条溝事件について、「あれは本当にかすり傷みたいなもので、列車は無事に通過したんだ、どうもあれはおかしい」というようなことを言っていましたね（笑い）。

それから、ほかにもときどきそういう特別講座がありました。大塚久雄さんが何か講演してくれました。資本主義の初め、プロテストンテイズムのことだったか、ちよつとはつきり覚えていないんですが、そうしたら川島武宜さんが、終わったあとで「大塚さんと」大変親しそうに話し合いをしていましたね。そんな記憶があります。

伊藤 じゃあすっかり学生生活に戻られたんですね。

小田村 ええ、だんだん戻ってきましたね。

伊藤 ただ当時は食べ物がない時代でしょう。先生はそれはあまり心配なかったんですか。

小田村 食べるものは、結局コメは少なかったですね。配給と、主としてイモですね。食堂はやっておりませんからね。外食券がないと食べられません。それで弁当を持っていた。弁当はだいたいイモです。サツマイモをふかしたものを弁当箱に入れて、三四郎池の上の土手のところで、一緒に食べました（笑い）。

伊藤 みんなそんな状態だったんでしょうね。

小田村 ええ。

佐道 授業には比較的真面目に出られたんでしょうか。

小田村 授業はわりあい真面目に出ましたよ。

伊藤 あのころは、生活が苦しくて「授業に」出られないという話をよく聞きますが。

小田村 やはり買い出し。アルバイトはどうだったんでしょうかね。伊藤 先生はアルバイトをなさらなかったんですか。

小田村 アルバイトはしておりません。

伊藤 お父様がお元気だったんですね。

小田村 そうですね。

佐道 個人的に親しくされた先生とかはいらっしゃいますか。

小田村 親しくした先生というのはないんですが、そういえば、川島さんのゼミがありまして、希望者を募っていたものですから、それに数回出たことがありますね。川島さんは『法社会学の基礎理論』というエーデルリッヒの本をテキストにしていました。あとで総長になった加藤「一郎」さんが大学院の特別研究生か何かでおられました、あの人は素晴らしかったですね。翻訳などみたいへん見事なので、びっくりしました。

伊藤 もう一年、三年目をおやりになって、将来どうするかというときには、いろいろな選択肢があり得たのでしょうか。

小田村 ええ、だいたい一年終わったところで、大学のほうは通常の入学した学生と、復員で帰ってきた学生と両方ですから、満員で、早く追いつかなくてはいけないわけですね。

武田 そういう時代だったんですね（笑い）。

小田村 それで、たしか十八科目が卒業要件だったんですが、それを減らしまして、十二科目か何かで卒業を認めるということになったんです。一年生の時に三、四科目取っておりますから、あといくつを取れば、卒業できたわけです。だから、早く卒業しようと思う人は、二十一年で、一年経ったところで（伊藤 卒業要件を満たすんですね）、卒業要件を満たすので、卒業する。

伊藤 卒業しなくてもいいんですね。

小田村 しなくてもいいわけです。私の友人の高橋元君は後に大蔵省に入りますが、早生まれなものですから、仮卒になっているわけです。私より入営が一年遅いものですから、二年を終わって仮卒で二十年の秋には正式の卒業になってしまうわけです。卒業してどうするかと

思ったら、彼は法律学科だったので、政治学科に学士入学いたしました。一緒に勉強しておったんです。高文も一緒に受けたんですが。

伊藤 高文を受けようというのは、つまり役人になろうということですね。

小田村 そういうことですね。

伊藤 高文はこれが最後というわけではないんですね。

小田村 最後というか、戦時中は十七年にあつたんですね。十八年の初めだったかもしれませんが。いずれにしても、十八年卒業の人までは高文があつたわけです。ところがそれからと高文はストップしまして、戦後二十一年になつて高等試験を始めるということになりました。それで最初の高等試験があつたものですから、それでは受けてみようということにしたわけです。

伊藤 それは、前の高文と同じような仕掛けなんですか。

小田村 前の高文よりも若干範囲が広くなりました。前の高文はだいたい法律中心だったんですが、そこに多少経済関係の科目が入つて、それが選択で取れることになっていました。それだけ受験科目としては緩くなったと言えるかと思いますが。

■大学への復学と卒業 (2) 新憲法の印象

伊藤 二十一年秋というのは、憲法は(武田 公布された年ですね)、施行されていませんね。

小田村 十一月三日公布ですね。試験は十二月だったと思うんですが、憲法については、帝国憲法でも新憲法でも、答案はどちらを書いてもいい、ということでした。

佐道 先生はどちらをお選びになりましたか。

小田村 僕は両方書いたような気がするんですが。

武田 新憲法の勉強はどういうふうになされるんですか。

小田村 私は新憲法が嫌いだつたのであまり勉強しなかったんですが、

高文があるので、多少やりましたね。慶應の先生でなんとおっしゃったかな、新聞に解説を書いておられた方がありました。それは大変参考になりましたね。

佐道 いま新憲法が嫌いだというお話でしたが、新憲法を初めてごらんなつたときのご感想というか、印象はいかがでしたか。

小田村 それはどこかに書いたことがあるんですが、だいたい帝国憲法が改正になるなんていうことは全く考えていなかったんです。ところが、近衛「文麿」さんが十月四日でしたか、マツカーサーに憲法のことを言われて、佐々木惣一さんをお願いして、憲法改正案をつくる。ところがそれに対して政府のほうは、それは憲法の国務の補弼の範囲内であるからおかしいということで、憲法調査委員会をつくりましたね。幣原内閣の国務大臣、松本蒸治さんですね。それがどういうことになるか、人選したメンバーから見ても、美濃部「達吉」さんや宮沢「俊義」さんが入っているんだけど、そういう方々はもともと帝国憲法尊重論者ですから、まあ変なものにはならないだろうと安心しておつたんです。

二十年の暮れの臨時議会で、松本さんが憲法改正についての基本原則を答弁されて、「少なくとも第一条から第四条までの骨格は変えない」ということを明言されましたから、それじゃあいいだろうと思つておりました。

それから、各政党がいろいろ憲法草案を発表しましたね。あのころは、いろいろな政党が続々できてきたものですから、私はその設立の総会をよく聴きに行つたんですよ。自由党は鳩山「一郎」さんですね。社会党が誰でしたか(伊藤 片山「哲」さん)。そうですね、片山さんですね。ところが社会党の時には、右派と左派とが正面から対立していましたね。それから進歩党にもたしか行きました。あれは幣原「喜重郎」さんだったかな、わりあいに面白かったですね。そういう政党がいろいろ憲法草案を発表しましたね。いまは高野「岩三郎」案が言われるんですが、高野案なんていうのは本当に新聞の隅っこにあったぐらいで、こういうことを言う人間もいるかな、という程度の感

じでしたね。

ところが「昭和二十一年」二月一日に毎日新聞が「憲法調査委員会案は立憲君主制が基本という」スクープをしました。それは大したことはなかったんですが、それから憲法についての報道が全部止まりましたね。新聞でもラジオでもまったく何も言わないんです。

三月六日になって、突如として例の発表「憲法改正草案要綱」の発表があつたわけですね。びっくりしまして、何のことかさっぱりわからなかったわけです。松本さんが答弁したのと同じく違うものですか、何事が起こったのか本当にびっくりしたんです。それが三月六日の夜で、七日の朝に新聞で活字になりました。そのとき、大学に行きまして、ちょうど労働法の講義がありました。末弘厳太郎さんが講義をしておられた。末弘さんの講義はわりあい面白かつたんですが、そのときに、「とにかく政府は何でもぐずぐずしている。見てごらんさい、あまりぐずぐずしているものだから、とうとうGHQから憲法案を突きつけられちゃったじゃないか」ということを言われたんです。そのとき講義教室で聴いていたのは五十人ぐらいいたかと思うんですが、ちよつとどよめきが起きました。そうだったかな、ということ、だいたい全部わかつたわけです。しかしそれは学校の中だから言えたわけでして、外には一切発表はありませんでした。憲法案というのは、そういうことで初めて知りました。ですから、あまり興味がなかつたわけです。

■大学への復学と卒業 (3) 高文合格、大学卒業

伊藤 高等試験というのは、発表があると順番がわかるんですか。

小田村 ええ、順番はわかります。発表の時にはわかりませんが、あとで内閣法制局に行きますと、順番を教えてくださいませんか。

伊藤 そうですか。高文に通つて、それから各省庁を選んで試験を受けに行くわけですか。

小田村 そういうことです。私のときは、「試験は」二十一年十二月でしたか、発表はいつだったかな、二十二年三月頃だったと思うんです。

伊藤 そんなに遅いんですか。

小田村 わりあい遅かつたです。

伊藤 じゃあ卒業する間際なんですね。

小田村 いや、実はまだ卒業していません。まだ残つておるつもりでおつたものですから。それで高文の口述試験が四月にあるんです。三月の末から四月にかけてだったかな、たしか四月の初めだったと思うんです。四月に口述試験がありまして、最終発表は、口述試験が終わつたあと一週間か二週間経つてからでした。五月入省というのはそういう関係なんです。高文の発表が遅かつたんです。

伊藤 高文の発表があつて、それから卒業なさるんですか。

武田 順番がおかしいですね（笑い）。

小田村 いや、卒業しなかつたんですよ。役所に入るときに、無給嘱託という制度がありまして、翌年採用になるという話を聞きました。とにかく無給嘱託ですから、そのあいだは大学に通つていいわけですね。採用も翌年になるわけです。そういうことができないか、と言いましたら、「そんなこと言わないで、早く入った方がいいぞ。そうすると同期生のつながりもできるし、役所に入つたつてそう忙しいわけではないんだから、勉強したければ勉強もできる」ということを言われました。

さてどうしようかと思つて、大学に行きました。我妻「栄」さんが法学部長だったんですが、我妻さんがおられたものですから、そこに行きまして、「実はこういうことで大蔵省で採つてくれるんだけど、遡つて卒業させてもらえるか」と言いました。四月の末だったと思うんです。そうしたら、「それはいいよ」といって、すぐ事務を呼んで、「こいつ、大蔵省に入るそうだから、卒業させてやれ」といって、卒業させていただきました。だから三月末で卒業ということになりました。

伊藤 もう卒業要件は満たしていたわけですね。

小田村 満たしていたわけですね。そうしたら、同じようなやつがいたんです。大蔵省と一緒に受けた嶋崎均という、後に代議士になって法務大臣をやった男です。嶋崎は体が大きいので、すぐわかるわけですね。ちようど法学部の事務室の掲示板のところにいまして、「おまえ、どうするんだ」と言うから、「遡って卒業させてくれるよ」といったら、「それじゃあおれもそうしよう」と言う（笑い）。

佐道 そんなことがあるんですね。

伊藤 このころは何でもありですからね。

■大蔵省入省と理財局勤務 (1) 大蔵省入省

伊藤 ほかの省庁ではなくて、大蔵省だというのはどういうことなんでしょう。

小田村 それで高文を受けて、どこの役所に入るかということですが、私は昔は内務省を考えておったんですが、内務省はその直前に解体されてしまったわけですね。もともと、内務省の試験はやったようですね。内務省は試験をやって、そして厚生省、労働省、地方財政委員会、警察、そういうところに分けたんですね。試験は内務省としてやったようです。まあどうせ解体されることがわかっていましたから、「私は行くのを」やめました。それなら経済官庁を考えようと思いました。

大蔵、商工、農林、厚生ですね。このときはまだ労働省は分かれていなかったかな。

伊藤 一緒かもしれませんがね。

小田村 あとで分かれたんですね。

伊藤 片山内閣の時に独立したんですね。

小田村 分かれることになっていたと思います。それで、一番上の兄が会社におりまして、「商工省は誘惑が多いからやめろ」という。

伊藤 許可がいっぱいありますからね。統制ですから。

小田村 統制経済ですからね。それから農林省も考えたんですが、農林省はあのかときは農地改革も進んだんですが、農地改革というのは左翼系統がわりあい強かったわけですね。それから事務官と技官の対立がありますし、そんなことで農林省もやめました。それから厚生省は、労働問題がこれからいろいろあるから多少興味もあったんですが、どうも初めてのことです。統制はいずれ外れると思っておりましたから、そうすると財政と金融が今後の経済の中心になるだろうと思って、大蔵を受けたわけですね。

伊藤 大蔵はどういうふうになんて採ったんですか。一斉試験ですか、面接ですか。

小田村 面接です。筆記はありません。あそこで採るのは、大学の成績と高文の成績の両方ですね。僕の高等学校の一年先輩で大蔵に行っていたのがおりましたから、そこへ高橋君と一緒に聞きに行きました。様子も聞いて、それじゃあ大蔵省にしようということにしたわけですね。

伊藤 大蔵はそのときはどこにありましたか。

小田村 四谷第三小学校です。

伊藤 占領軍に取られていたんですね。

小田村 そうです。こっち「霞ヶ関」は進駐軍に取られていたわけですから、四谷の小学校にありました。小学校で面接がありました。各局の総務課長がずらっと並んでいたように思います。それから先輩のところに行ったときに、「誰か知っている人がいるか」というから、「紹介してもらった方がいいか」と聞きましたら、「それはしてもらった方がいい」という。それは何かといったら、人間の保証のようなものなんですよ。そこで、迫水久常さんを紹介してもらいました。

私の兄の「妻である」義理の姉が鈴木孝雄大將の娘さんで、そのお兄さんの鈴木英さんが海軍にいたんですが、その奥さんが岡田啓介さんの「娘」、迫水さんの奥さんも岡田啓介さんの「娘」。そんなことで姻戚関係がありましたので、ちよつと紹介してもらいました。それで迫水さんのところに行ったら、「おれの子分が秘書課長（石野信一氏）をやっているから」と言っ

からもう一つは、官房長が愛知揆一さんだったんです。愛知揆一さんが私の一番上の兄と府立一中で一緒だったんですね。そんな関係もございました。

伊藤 いろいろな人間関係があるんですね。

小田村 そうですね。

伊藤 最初に「大蔵省に」お入りになっても、上の方は見えないわけでしょう。

小田村 上の方は見えません。

伊藤 やはり「見えるのは」直属の上司とか。

小田村 役所に入りますと、最初に講習をしてくれるわけです。省内のシステムとか事務の内容とか、各局の総務課長が話をしてくれました。

伊藤 何人ぐらい一緒にございましたか。

小田村 一緒に入ったのは二十五人でございました。そのうち二人が専売局に配属になったんですね。専売局に入ったうちの一人は、「せっかく大蔵省に入ったのに現業に行くのではつまらない、現業だったら国鉄の方がいい」ということで、いったん入省したんですが、国鉄に替わりました（笑い）。だから二十四人になったんです。もう一人が、翌二十三年に結核で亡くなりました。だから実質的には二十三人ですね。

初めに集まったときに、森永「貞一郎」さんが文書課長だったんですが、「よく背広が揃ったな」と言っていました。私はおやじのお古を借りて着てきたんですが、みんな背広を着てきました。どこで調達したのかわかりませんが。

伊藤 きつと無理したんでしょうね。

佐道 大蔵省に入るちよつと前、東大に復学されたときの話なんです。が、「小田村」先生は入営される前に大学にお入りになっておられますね。戦争が終わって、大学が再開されて復学されたとき、大学の中の雰囲気は変わっていましたか。「東大の」先生が追放になったり、出入りもあつたりしているわけですね。

小田村 法学部では追放ではありませんが、小野「清一郎」先生がお辞めになりましたね。

伊藤 矢部「貞治」さんもお辞めになりました。

小田村 矢部さんもお辞めになりましたね。「小野先生の」刑法は一年のときなんです。「矢部先生の」政治学も一年です。だから二学年としては、そのためにお辞めになった方はいなかったと思うんですね。経済関係では、前は経済政策を田辺「忠男」さんがやっていたのかな、替わったかもしれません。行政法は田中二郎さんがやってくさいましたし、民法は川島さんと来栖「三郎」さんでしたかね。それから経済政策を中山伊知郎さんと東畑精一さんがやつておられましたね。これは両方とも面白かったですね。社会政策を大河内「一男」さんがやつておられました。そんなところですか。私は外国法はやらないけれど、訴訟法でも少し勉強しようかと思っていたんですが、ちよつとそれはできなくなりました。

佐道 さつき、勉強会で左翼の本などもお読みになったという話がありました。が、戦争が終わって論壇も復活しました。大塚さんの名前が出ましたが、丸山真男さんが新進で出て来て『超国家主義の論理と心理』をお書きになったりしているんですが、そういうものをお読みなつたりとか、丸山さんの講義に出られたとかしましたか。

小田村 丸山さんの講義は、どこかでやつておられたかもしれませんが、私は聴いておりません。たしか東洋政治思想史を担当しておられたはずですが、あれは何年生かな、二学年にはなかったと思います。前に『国家学会雑誌』にずっと連載しておられましたので、それは見ていたんですが、むしろ『世界』という雑誌がありましたが、それに書かれたものは読みました。

佐道 お読みになって、どういうご感想でしたか。

小田村 たいへん鋭い分析ではあると思いますが、どうしてもしつくりしないところがありましたね。ゲーリングと比べて、日本の指導者はだらしがないというようなことを言っていたんですが、それもおかしいな、と思ひましてね。

■大蔵省入省と理財局勤務 (2) 理財局国庫課への配属

伊藤 先ほど先生は、入省したからといっても勉強する時間はあるから、と言われたというお話をされましたが、実際はどうでしたか。

小田村 こういう話も言われましたよ。「夏になると官庁は半ドンになるんだ。大蔵省の若い連中は逗子に借りているところがあって、そこに行つて寝泊まりしたり、十分優雅に過ごせるから」という話だったんですね。夏休みの半ドンは、二十二年、私が入省した年復活したんです。たしか一週間ぐらい、例年通り半ドンをやったと思うんですね。ところがマスコミから叩かれまして、役所だけ半ドンというのはけしからん、ということで、一週間ぐらいで中止になりました。

武田 約束と違いますがね(笑い)。

伊藤 とりあえずは、入つてすぐにめちゃくちゃに忙しいということではないんですね。

小田村 その後入ってきた人たちはだいたいぶき使われるようになったようですが、私どもの時はまだそこまでいっていませんでしたね。忙しい局でも適当に勉強したりしていたと思いますね。

伊藤 各局の総務課長がいろいろガイダンスをおやりになったということです、その期間はどれぐらいなんですか。

小田村 それは一週間ぐらいですね。

伊藤 そうすると、すぐに配属が決まるということですか。

小田村 配属は先に決まっています。

伊藤 それはどの段階で決まるんですか。

小田村 もう、入省したときです。

伊藤 先生は理財局の国庫課ですか。

小田村 ええ、国庫課というのは総務課ですね。当時総務課がなかったものですから。

伊藤 総務課的な役割のところですか。そうすると、人事とか会計と

かをやるんですね。

小田村 おそらく、それもやっていたんでしょうね。レクチャーの中で特徴的なことを申し上げますと、愛知さんが官房長ですから、最初に講話をされたんです。そのときに、こういうことを言われました。

「いますべての行政が、全部司令部に握られているんだ。国会では乱闘事件などがあつて、新聞ではいろいろ書き立てておる。君たちはそういうものを読んで、ともに政治活動ができていると思っているかも知らんけれど、我々から見れば茶番劇にすぎない。ああいう争いがあつても、全部GHQにお伺いを立てて、そこからOKがでなければ何も決まらないんだ」ということでした。

それから、長沼弘毅さんが管理局長をしていたんですね。この人はよほど自信がある人だと見えて、「私が見るところ、このごろの役所に入ってくる人間、あるいは大学卒業者は、だいたい勉強しておらん学力が落ちておる。だいたい諸君の中で、マルクスの『資本論』を原語で全部読んだ人間がいるか」ということを言っていました。全部読んだんですかね(笑い)。あと、いろいろ面白い話もありましたけれど。

伊藤 そういうレクチャーで、だいたいイメージがつかめるという感じですか。

小田村 どんな仕事をしているかということが、だいたいわかりますね。

伊藤 先生は国庫課に配属されて、最初から課員というか、課の事務官なんですか。

小田村 ええ、課の事務官です。事務官といっても昔で言えば属ですね。高等官ではありません。昔は属官(判任官)があつて、その上の高等官を事務官といったんですね。二十一年、私が行政法の講義を聴いていたときに、田中二郎さんは名称の変更をおっしゃっていましたから、二十一年には、属官・高等官の名称をやめて、全部事務官にした。たしか二級事務官と三級事務官だったかな。たしか級で、全部事務官という呼称に統一したんです。

伊藤 それは高文を通っている人も通っていない人も、ですか。

小田村 そうです。事務官の下は雇員ですね。

伊藤 理財局自体は大蔵省の中で中心なんでしょうね。

小田村 理財局というのは、財政と金融との結節点なんですね。だから膨れたり縮んだりしております。もともと為替管理のようなことは理財局で始めたんです。大きくなるとそれが為替局とか金融局になるわけです。銀行局も、もともとは理財局から分かれたわけですね。そういうことで膨れたり縮んだりしていったんですが、そのときはまだ為替局はできておりませんでした。だから、それは「理財局」の中に含まれておりました。

あのときは理財局では、国庫課が国庫の出し入れ等で、ほかに経済課というのがありました。これは戦時中は資金統制その他をやっていたんですが、当時は企業の再建整備をやっていました。それから証券課、むかしは商工省でしたが、それが戦時中に大蔵省に移ったものです。それから外資課がありました。

伊藤 国庫課のほかに、ですか。

小田村 そうです。それから調査課がありました。調査課はその後官房に移りましたが、内国調査と外国調査の両方をしていました。それが理財局ですね。

伊藤 先生が属された国庫課は、具体的にはどういうことをやっていましたか。

小田村 国債関係も国庫課で持っていたわけですね。ただ、国債発行は当時はありませんでしたから。復金債、復興金融公庫は銀行局でした。国庫課は財政収支の動きと、国債の管理と、金融の調節関係も多少やっていったのかな。私は実務をほとんどやっていないものですからね。

伊藤 それじゃあ何をやっていたんですか。

小田村 何もしないんです。要するに座っていて、向かいの方と雑談しているとか、自由に本でも何でも読んでいいんです。

伊藤 勉強しろ、ということですか。

小田村 何を勉強しろ、というわけでもないんですね。勝手に勉強すればいい。そうすると課長に呼ばれて、課長から「減債制度を調べてくれ」と言われました。減債制度なんてあまり聞いたことがないし、汐見三郎さんでしたか、財政学の教科書があって、そこに減債制度のことが書いてありましたので、それを少しまとめました。それから国庫課にあった文献などもまとめて、課長に報告したわけです。

伊藤 むかし減債基金というのがございましたね。

小田村 ええ、いまでもあります。このときもありました。あつたんですが、実際にはほとんど動いていないわけですね。

伊藤 あと、本当に少しの期間で外資課に替わられますが、国庫課のときにも外資の関係があたりだったわけですか。

小田村 いや、ありません。ただ国庫課にいたときに、「外債の償還制度がどうなっているか調べてくれ」と言われました。これは、「日銀に行けば資料がたくさんあるから、日銀で調べて来い」と言われて、日銀に通いまして、それを整理して出したことがあります。

伊藤 いろいろな外債があると思いますが、外国資産の問題も含まれるわけですか。

小田村 それは、古いものは、日露戦争の時のものは戻っていません。たのかな。

伊藤 借り換えして、まだ少し残っていたかもしれませんがね。

小田村 残っていたかもしれませんが。主として電力債がありました。震災当時に出した外債とか、電力会社が外国で起債して、それを国が管理していたものがありましたね。そういうものが多かったと思います。

武田 そういうものは、報告書としてまとめられるわけですか。

小田村 外債の発行の目論見書というんですか契約書というんですか、そういうものがありまして、それを見てまとめたわけです。でもこれはまとめ方が難しく、ずいぶん苦労しました。

伊藤 三ヶ月ばかりのあいだに、そんなことをなさっていたわけですか。ではけっこう勉強になったといえれば勉強になったんですね。

小田村 勉強にはあまりならなかったですね(笑い)。

■大蔵省入省と理財局勤務 (3) 外資一課への異動

伊藤 それで外資課に異動になるということですが、同じ理財局の中で、おまえあっちに行けということですか。

小田村 ということですね。国庫課は、そんなに動態的なところではないものですから、外資課のほうが、これから貿易が始まると忙しくなるだろうということで回されたんだと思います。五月に「国庫課に」入って、「外資課に異動したのは」八月でしたかね。八月に外資課が二つに分かれまして、外資一課と二課になったわけです。二課のほうは直接実務をやっていたわけです。これは主として金(きん)の管理が中心だったと思うんですね。一課のほうは企画的なことだったと思うんです。その課長が石田正さんというかたです。

伊藤 先生は一課のほうに行かれたわけですか。

小田村 そうです。一課に行きました。そこに一年上の学士と、私と、同期生がもう一人おりました。ですから三人ですね。それから補佐に十五年「入省」の方と十六年「入省」の方がいました。それから、前の正金が東京銀行になって、その東京銀行から派遣されて来ていた方もおりました。要するに、IMF(国際通貨基金)が発足して、世界銀行もできたということで、そういうものについての勉強、研究、今後の本格的な貿易に備えての研究準備だったのではないかと思います。伊藤 とにかく外資を何かの形で持たないと、何もできないわけですね。

小田村 ええ、外貨の管理は二課のほうでやっていたのかな。まだ外国為替管理委員会ができる前でした。事実上は日本銀行が外貨の管理をやっていたと思います。その指導監督をやっていたと思いますが、それにはタッチしておりません。

伊藤 先生が外資一課に行かれたときには、具体的には何をされてい

たわけですか。

小田村 ここでも何もしていないんです。そういう勉強をしるという課長のご命令ですね。ただ昔の方はたいへん面白いんですね。口述筆記をさせるんです。「小田村、ちよつと来い」といって、机の前に座らせて、課長がしゃべるわけです。それを筆記せよという。石田課長はいつも筆を使っていましたね。鉄砲玉のようにパリパリ言う方ですが、風格のある方で、面白かったですよ。

伊藤 何を筆記するんですか。原案とか、そういうものですか。

小田村 原案ではなくて、論文ですね。

伊藤 論文ですか、じゃあすごく勉強になるじゃないですか。

小田村 まあ勉強になったんでしょけれど(笑い)。あのころ、貿易が開始されまして、綿花基金ができたころなんです。貿易庁には渡辺誠さんという方が行っていました、ときどき石田さんのところに来ては、報告をしていました。綿花基金でしたか、綿花借款でしたか、そういうことについての論文を書かされたような気がします。筆記するわけです。

伊藤 さっきの愛知さんのお話にあったように、すべてはGHQでないと決まらないんだということは、こういうお仕事をしても感じられましたか。

小田村 それはあるんですが、細かい実務までは干渉しませんからね。貿易それ自体は、全部制限貿易ですから。

伊藤 向こうが管理しているわけですね。

小田村 向こうが管理しているわけです。だからごく局部的なことしかできないわけです。

伊藤 外資課あたりでは、GHQとの直接の関係とか交渉という場面はないんですか。

小田村 あまりなかったように思いますね。石田さんもあまり行かれたようには思わないんですが。

伊藤 いま貿易庁とおっしゃいましたが、これは商工省ですね。

小田村 ええ、商工省の外局です。

伊藤 これと大蔵とは非常に近い関係なんですか。

小田村 当然、外貨決済がありますから、近い関係にありました。

伊藤 向こうに行っていたとおっしゃいましたが。

小田村 出向しているわけです。

武田 このころ、もう安本^{あんぼん}「経済安定本部」もありますね。安本との関係はどうなっていたんですか。

小田村 安本との関係は、あまり記憶がないです。「関係していたのは」主計なんでしょうかね。もと物価庁というのがありまして、物価庁にもずいぶんいろいろ行っていたわけですが、私のころは物価庁はどうなっていたか、ちよつと記憶がないですね。

伊藤 外資一課にいらつしやる時も、まあ大したことはないんですね。

小田村 ええ、でもときどき、外資課におりまして、課長のお宅に遊びに行ったことがあるんです。二、三回ですね。二十二年でしたか二十三年でしたか、課長はアメリカに出張されたことがありました。あのころはパスポートといつても、「Occupied Japan」とかいふものですが、アメリカに行かれたお話も伺いました。

それから、これはたいへん面白い話なんです。東京裁判がだんだん進んできまして、弁護側の反対尋問だったか、検察側の尋問のときでしたか、東條「英機」さんがいろいろ発言されて、ずいぶん東條さんの株が上がったんです。よく言ってくれた、というわけですね。そうしたら石田さんが、「いづれ東條さんも神様になって神社に祀られるんだらうけれど——東條神社ができるということですね——、しかしやつぱり軍のいろいろな昔の問題については、忘れちゃいけないぞ」ということを言われたことがあります。

伊藤 そういう雰囲気ですか（笑い）。

武田 お仕事のあとに、飲みに行かれたり、ということもけっこうあったんですか。

小田村 いや、それはないんです。ないんですが、仕事のあとで送別会とか、そういうことがときどきあるんですね。酒を飲ませてくれたのかな、そういうことはありました。それは役所の中です。外に飲み

に行ったことはないですね。石田さんという方は浪花節をやられるんですね。玉川勝太郎の天保水滸伝をやる。「課長、どうやって勉強したんですか」と聞きましたら、「いやそれは、おまえたちのような見習いのときにお濠端を歩きながら一所懸命勉強したんだ」という（笑い）。

佐道 いろいろなことが勉強できるんですね（笑い）。

伊藤 小田村先生は、さっきのようなご勉強以外のことは何かないましたか（笑い）。

小田村 いえ、全然やっていません。

■大蔵省入省と理財局勤務（4）為替三課への異動

伊藤 それでいつの間にか外資三課に異動になるんですね。

小田村 このときに、外資課の名前が変わりまして、外資課が為替一課、二課、三課になったんです。ここには、石野「信一」さんが秘書課長から替わって来られて、為替第三課長になりました。

武田 これは名前が変わったということですか。

小田村 ええ、名前が変わって三課ができたということです。

伊藤 また、具体的なお仕事は無しですか。

小田村 こころも無しですね。

伊藤 さつきちよつと「見習い」という言葉をお使いになりましたが、見習いなんですか。

小田村 ええ、見習いなんです。

伊藤 まさに、見て習うわけですね。

小田村 みんな見習いなんです。任官するまでは見習いということですね。このとき三課では、司令部からのメモランダム^{メモランダム}の翻訳をやらされましたね。国庫課でもちよつとやったと思うんですが、メモランダムがしよつちゅう来るんですね。

伊藤 先生は英語は大丈夫なんですか。

小田村 いや、英語は駄目ですから、一所懸命字引を引いてやったわけです。

伊藤 何か会話学校にも通われたということがありますね。

小田村 そうそう、ちょうど「日米」会話学院に派遣することになりました。

伊藤 派遣ですか。

小田村 派遣なんです。ですから、役所に行かなくていいんです。

武田 直接、会話学院に行つて帰ってくるんですか。いいですね。

伊藤 将来のGHQとの交渉要員にしようということですかね。

小田村 どういうことか、よくわかりませんが、交渉要員というよりも、少し英語を勉強しておけ、ということでしょうね。

佐道 どのくらいの期間、通われたんですか。

小田村 三ヶ月だったか、六ヶ月だったか。あるいはその中間で、四ヶ月だったかもしれません。そのとき一緒に行ったのが、あとで次官になった大倉真隆君ですね。彼はもとと非常に英語ができるんです。だから行かなくてもいいだろうと思つたんですが、一緒に行ったんです。それから松川「道哉」君。このあいだ亡くなったんですが、財務官をしてアメリカとの折衝をやっていました。これはドイツ語なんです。英語もよくできましたね。そういう人たちと一緒に行ってたものですから、そういう意味では勉強になりました。僕はやっぱり駄目でしたね。語学というのは音感がないと駄目なんです。子供の頃からやっていたらいいんですけど。音楽の才能がある人は上達が早いです。大倉君もピアノがうまいし、松川も音楽が好きで、コーラスなんかやっていましたから、そういう人は上達が早いんですね。

佐道 先生は音楽はおやりにならない。

小田村 音痴だから駄目なんです。

佐道 通われているあいだは、英語漬けというか、英語中心になるわけですか。

伊藤 今度は実践で鍛えられるということですね。

武田 日米会話学院というのは四谷ですね。当時まだ大蔵省も四谷の小学校ですか。

小田村 日米会話学院は四谷ではありませんでした。神田の方だったように思います。

伊藤 教えている先生はアメリカ人ですか。

小田村 アメリカ人もいましたが、アメリカ人よりドイツ人が教えたりにしていましたね。まあ、全部外国人ですね。いまでも日米会話学院はやっていきますね。だから為替三課にも行きましたが、働いていた時間は短かったと思いますね。二、三ヶ月ではなかったかと思っています。

伊藤 さっきの翻訳の話は、三課のときですか。

小田村 はい、為替三課のときです。このときは、当時の安本あんぼんなんかといろいろ交渉がありました。石野さんが「中間安定論」というのを唱えたんです。中間安定論というのは、インフレを抑えるのに一氣に抑えるというよりはいろいろ副作用が大きい、一時的にインフレのスピードを緩めて、中間的な安定期をつくるべきだということなんです。それを石野さんが言い出されたんです。この意見は新聞にもちよつと出ていましたが、中間安定論というのは石野さんが震源地だったわけです。そんなことを石野さんはやっておられたんですが、これも役所の意見ということではなく、当時のインフレ対策は全部司令部が握っておりましてから、司令部に対する一つのジェスチャー的なものではなかったかと思えますね。

伊藤 とにかく当時は、すごいインフレでございました。インフレになったら、お役人は月給が上がるのが追いつかないわけですから、これは大変ですね。

小田村 そうですね。

■大蔵省入省と理財局勤務 (5) 大蔵省職員組合

小田村 それからもう一つ、外資一課にいたときに、労働組合をちょっとやらされました。

伊藤 大蔵省職員組合ですか。

小田村 大蔵省職員組合。職員組合は、各局から代表が選ばれるわけですが、みんな行きたがらないんですね。若い見習いがちようどいいということ、押しつけられるんですね（笑い）。しょうがない、しばらく行きました。だから組合の雰囲気も多少わかるんです。いい経験になりましたね。

伊藤 大蔵省の組合は、別に左翼的な組合というわけではないんですよ。

小田村 いや、だんだん左翼的になっていくわけですよ。私がいた頃はそれほどでもなかったんですが、当時は「定時退庁」ということをさかんにやっていましたね。ストライキ権がありませんから、五時が来たら帰ろうといって鐘を鳴らす。

武田 先生が鐘を鳴らすんですか（笑い）。

小田村 僕はやりませんでしたけれどね。文書課にいた植松「守雄」君というのが、定時退庁についてこれを批判する大論文を書きました。まだあのころはそうではありませんが、あとでだいぶ尖鋭化してまいりまして、クビを切られた人たちがいるんです。そういう人たちも、初めに入ったときは非常に純粋な人たちでしたね。ところが入って、上部組合とか関係組合とかとつき合っているうちに、だんだん左の方に行ってしまうんですね。ある若い人なんです、もともと野球チームなんかを作っていて、「組合の左の方の連中が来たら、そういうものは全部排除する」なんて言っていたんですが、本人が組合に入られちゃうと、結局あの子は最後は尖鋭化して、整理されちゃったと思うんですね。だから気の毒な人たちがずいぶんいますよ。あれもそうなんです。鈴木哲太郎君といって、バリバリの見習い学士で、貫太郎さんのお孫さんなんです。鈴木さんの息子さんですね。私の次の次だったかな、二十三年四月に役所に入られた。ところが組合をやられまして、あの人には真面目なものだから、一所懸命やっているうちに

動きが取れなくなつて、結局自分で辞めましたね。大学に戻ったんですね。組合というのは、僕にとっては貴重な経験だったんですが、いろいろな被害者がありましたね。

伊藤 当時の全官公は強いですからね。左翼組合が多いんだ。しかし先生は、仕事がない、見習いだとおっしゃって、ずいぶんいろいろなことをやっていますね（笑い）。

■大蔵省入省と理財局勤務 (6) 芦田・片山内閣とGHQ

伊藤 いまお話に出ました課長の石野さんは、かなりユニークな方なんです。

小田村 石野さんは非常に温厚な方ですが、私はずいぶんお世話になりました。迫水さんが最初に紹介してくださったのが石野さんなんです。麻布の筈（こうがい）町「現・西麻布」におられまして、お宅も近かったものですから、よく伺ったことがあります。ただお子さまがおられない。ですから石野さんはときどき課員を自宅に集めて、ご馳走してくださったり、いろいろしてくださいました。ただその後、胸をやられるんですね。外に出てからだと思いますが、二年ぐらい療養しておられたと思うんです。でもまた調査部に復活されて、すっかり元気になられましたね。

伊藤 大蔵省の中で目立つ存在だったんですか。

小田村 そうですね。どちらかというと調整肌のほうだと思います。先頭に立っているいろいろなアイデアを出すというよりも、調整肌の方ではないかと思っています。

伊藤 さっきのお話を伺っていたら、もしかして論客なのかな、と思います。

小田村 論客は論客なんです、一本で進むというよりは四方に目を配る方です。石野さんが言っておられたことでどうしても忘れられないのは、当時やたらにメモランダムが来るんですね。それで、「これ

では日本の役人は駄目になってしまふ。企画能力がなくなる。だから早く占領を終わらせて、日本の役人が自分で政策の企画をするような体制をつくらないといけない」ということを言っておられましたね。

伊藤 メモランダムをどんだんやらされたというお話ですが、どういふメモランダムですか。記憶に残るものがありますか。

小田村 ちょっとないですね。

伊藤 その前のお話では、おおもただけで、些末なことはあまり云々ということでしたが、いまの話を伺うと、次々とメモランダムが来るということですね。

小田村 メモランダムがいろいろなアイデアを出してくるわけですね。そうするとそれに対する対策をどうするかということに追われるんです。例えば石野さんの言われる中間安定のような発想が役所の中から生まれてこないようになっていくわけですね。もうちょっと後になります、ドッジが来るわけですね。ドッジが来ると、ドッジラインということで、全部向こうの指導のもとに行なわれますね。そういうものが来るたびに、それに対する対策に追われてしまふ。

伊藤 シヤウプが来れば、税制はそうなるということですね。

佐道 外資三課にいらつしやったときに、メモランダム等の翻訳をされていたわけですね。ということは、外資三課に回ってくるメモランダムということですか。

小田村 そうですね。

佐道 GHQのほうも、経済科学局とか、だいたいある部署からのものが来るということですか。

小田村 あのころはどういうふうになっていたのか私も知りませんが、渉外部というのがありまして、そこに来たのか。あるいは文書課のほうで配ったのかわかりませんが、役所に来ますと、それぞれ担当のところに戻すわけですね。

武田 一日に何通も来るわけですか。

小田村 どうでしょう、よく知りません。

伊藤 渡辺武さんが、たしか渉外部長をやっていましたね。

小田村 渡辺さんは比較的長かったですね。

伊藤 そういうところにドーンと来るんでしょうね。

小田村 そうですね。

伊藤 ちょうどこの時期は、芦田内閣、片山内閣という中道連立内閣の時代ですが、政治をごらんになって、お感じになったことはございますか。社会党が首班をもった最初ですね。この前の村山内閣が最後ということですが。

小田村 私が入ってすぐ、吉田内閣が総辞職をして――。

伊藤 新憲法に基づく最初の総選挙が行なわれますね。

小田村 そうですね、「昭和二十二年」四月に総選挙がありました。社会党が第一党を取ったんですね。それで片山内閣になりました。だから石橋湛山が大蔵大臣だったのは、私が入ってごく短い期間だったと思いますね。そのときの次官が池田「勇人」さんで、池田さんもそれで辞めているんですね。ただ片山内閣というのは、社会党は社会党ですが、右派ですね。それと、芦田さんが連立で加わっていましたから、そうですね、社会党だからどうこうという感じはありませんでした。ただ、吉田内閣に比べて、片山、芦田両方ともそうなんです。当時「イエスマン」という言葉が流行しました。要するに全部司令部の言いなりになっているということですね。片方の吉田さんの自由党のほうは、司令部に対しても、はっきり物を言うということで、その次には自由党が大勝することになるわけです。民主自由党でしたかね。伊藤 いっぺん自由党で、それから連立して民自党になるんですね。それで民自党の時代に多数派になるんですね。

小田村 そうですね。石野さんがそのとき、誰かに民主党から選挙にも出たらどうですかと言われて、「いや、僕は民自党のほうがいい」と言っておられたことがありました。

伊藤 石野さんにはそういう気持ちがあったんですか。

小田村 いや、ないでしょうね。ただ、そういうことであれば、どちらかと言えば民自党が好きだということだと思えます。

伊藤 まあ、中道連立政権だといっても、特に行政に大きな変化があ

ったというわけではないんですね。

小田村 大きな変化はないですね。

伊藤 むしろ社会党出身の大臣なんているのは、経験もないし、行政の言うなりになる以外にしようがない。行政は行政で、GHQの言うなりにならざるを得ないわけですから、大した変わりようがないということですね。

小田村 はい。

■東京財務局勤務（一九四八）

伊藤 そのあと、東京財務局に異動になるということですが、これはいつでしょうか。

小田村 これはだいたい判任学士というのは、一年か一年半ぐらいすると、もう外に出して、昔は税務署長をやらせたわけですね。ところがすぐ税務署長というのは、組合との関係もありますし、少し優遇しすぎるといふことで、署長になる前に少し実務の勉強をさせるといふことになりました。私たちよりも一年前に入ったクラス、二十一年組が上にいたものですから、それを出すわけですね。

そうそう、見習いがだんだんかたまってきたんですよ。二十一年十月に一回採りますね。その次に二十二年五月が私たちです。それから二回目の高文がありました。この高文を二つに分けてまして、九月に卒業している者は二十二年十二月に採る。それから三月卒業の人間は三月に採るといふことで、二十二年十二月に採って、また二十三年四月に採ったんですね。ですから、だぶついたわけですね。

それで、先ず二十一年組と二十二年前期組をみんな外に出すということになった。外に出すについては、すぐ税務署長というのとはよくないので、少し勉強させるといふことになりました。あちこちにばらまいたわけです。各財務局——財務局というのは昔の税務監督局、いまだという国税局——、それから経済企画庁とかほかの役所を含めてばら

まいたわけです。いちおう希望を出せということだったので、どうもさっぱりインフレのことがよくわからない、だから税金を少し勉強した方がいいだろうということがあったものですから、東京財務局に行きたいといったわけです。

伊藤 希望が通ったわけですか。

小田村 そうですね。ですからこのときには、ほかの財務局とか安本あんぼんに行った者もあります。

伊藤 その人たちがいろいろなところに異動しても、大蔵省人事で動いていくということですね。

小田村 そうです。財務局は全部大蔵省ですからね。安本あんぼん出向者も全部、大蔵省人事で動いています。

伊藤 このときに任官されるんですか。まだ見習いですか。

小田村 事務官ですから。高等官制度がなくなったので、高等官のことを二級事務官といったかな。一級が勅任官で、二級が昔の奏任官、課長と課長補佐ですね。三級が属官という判任官なんです、このときは、まだ三級だったように思います。

伊藤 じゃあ、まだ一人前に——。

小田村 一人前になつていなかったと思います。ちよつと私も正確な記憶がないんですが、まだ三級のままで、税務署長になるときに二級に昇任したと思います。

伊藤 でもご自分の履歴はお持ちじゃないですか。

小田村 ええ、あります。調べてみますかな。そうだ、「大蔵省人名簿」といふのがありますが、あれには出ています（小田村注・そこまでは書いていない）

伊藤 あれで見ればわかりますかね。

小田村 ちよつと見当たらなかったのを持ってくるのを忘れたんですが。財務局に行くときには、「おまえたちは実務、特に調査事務を勉強しろ。非常に練達の人たちがいるから、税務調査、所得調査というのはどういふことをやるのか、それを勉強しろ」といふことなんです。それは、当時まだ調査査察部がありませんので、直税部と間税部とい

うところですね。だいたいほかの財務局では、直税部に回して営業調査とか農業調査とかをやらせたわけですよ。東京財務局に行ったところ、総務部長が言うには、そんなにいっぺんに全部直税部というわけにはいかない。私の前のクラスも一緒に二人行きましたから、おまえたちは直税部で調査をしるということになりました。

私は同期生と二人、塚本「石五郎」君と行ったんですが、塚本君は主税局にいて取引高税を勉強していたから、間税部に行かせてくれということ、間税部に行つて取引高税の調査をする。私はどこでもよかつたんですが、経理部長がたまたまそこに来ていまして、総務部長が「経理部長、おまえの所で判任学士を欲しいか」といったら、「ぜひください」というので、「じゃあおまえはそこに行け」ということで、経理部に行きました。経理部というのはわりあい広いところで、経理関係と、国有財産もやっていたのかな。それから徴収ということですね。

伊藤 徴収というのは、税金を徴収するということですか。

小田村 ええ。「おまえ、一つ徴収課に行つてくれ」ということで、私は徴収課に行きました。そうしたらその課長さんが、「じゃあまあ一つ経験ということで、滞納処分を一回やってみろ」ということでした（笑い）。

武田 一人で行けということではないですよ。

小田村 一人では行かれないです。

伊藤 向こうは海千山千だから（笑い）。

小田村 これも大学出の方だったんですが、前からいた人がいまして、その人が連れて行ってくれたんです。「とにかく税金を払ってください。納められなければ差し押さえます」という。差し押さえるというのはどういうことかよくわからなかったんですが、要するに紙を貼るんですね（笑い）。それに一、二回連れて行ってもらったんです。

そうしましたら、「若い連中に少しレクチャーをするので、法学通論を講義してくれ」という。法学通論のテキストを書きましたね。講義はしたのかしなかったのか、とにかくテキストはつくって、それは

置いてきたんです。「講義は」一回やったかもしれませんが。

もう一つ、課長から「これを検討してくれ」という面白い事件がありました。新宿の中村屋さんなどだったと思うんですが、たしか尾津組というテキヤの親分に焼跡を不法占拠されて訴訟になっていたわけですね。それで地主の方の税金が滞納になっていたわけです。徴収課長から、それを役所としてどうすべきか研究しろ、という宿題が出ました。でも、どう考えても地主が気の毒ですから（笑い）、強制徴収は難しいという法理構成をして課長に提出したわけです。課長は大変ご不満でございまして、どういうふう処理されたか知りませんが、そういうことがありました。

■主税局・司令部要員

小田村 そのうちに財務局は主税局の監督下にありますから、主税局から、「司令部のほうで要求があるから、そのために戻れ」というわけです。それが司令部要員ということで、主税局に戻ったわけです。

伊藤 戻ってから派遣されるわけですね。

小田村 そうなんです。

伊藤 東京財務局は数ヶ月じゃないですか。

小田村 そうです。三ヶ月ぐらいですね。

伊藤 足かけ四ヶ月ぐらいですね。GHQ派遣というのはどういう立場なんですか。

小田村 これはどうもよくわからないんですが、司令部のほうで、どうも日本の徴税関係が弱体だ、それをデコ入れしよう、ということなんです。もうちょっと後になって、二十四年になってからだと思うんですが、向こうのインターナル・レベニュー（国税庁）の税関係の専門家をこちらに寄越すという。それがハロルド・モスという方で、とてもいい方でしたが、その方が親玉で、来られるわけです。その人がスタッフも一緒に連れてくる。そうすると、こちらとして対応する

のに、いちいち交渉していたのでは時間がかかってしょうがないから、中に入って向こうの手伝いをしながらやってくれということ、司令部の中に机を置いて、そこに入ったわけです。

武田 それは場所はどこだったんですか。

小田村 場所は、日比谷の農林ビルというのがありまして、農林中金があったのかな、その中に司令部があつて、そこだったと思うんです。その前はどこだったかな。あるいは東拓ビルに暫くいたかもしれないね。たしか途中で引越したように思いますから、初めは東拓ビルだったかもしれません。

武田 自分は主税局にあつて、場所はそちらなんです。

小田村 ええ、場所は向こうです。そんなところに行つたつて、とても私なんかにはわかりませんし、言葉もよくわからない。岸本「謹之助」さんという十八年「入省」の方、岸本商店の御曹司で、あとで役所をやめて吉右衛門として社長になる方が親玉でおられて、とてもいい方でした。この方も胸の病気をされたんですが、そこに私と、二年前に入つていた本間「英郎」君、高等学校は同年なんですけれど、その二人がまず行つたのかな。それからだんだん増えていったのかな。一期あとの前田「多良夫」君とか、和歌山の税務署長を終わつてきた安川七郎さん——辞めてから不動産銀行の頭取になります——、そんなところだったかな。そういう人がそこに集められたんです。それで近藤道生さん、博報堂の社長は、もう少し後ですが、横浜の税務署長を終わつてから、そこではなくて軍司令部ですな。

伊藤 第八軍か何かですか。

小田村 そこに派遣されたんですね。

伊藤 これは連絡将校みたいな感じなんですか。

小田村 連絡将校みたいなものですか。

伊藤 大蔵省の出先がGHQにある。どっちの出先だかわからないですね。

小田村 まあ連絡将校でしょうね。

武田 机も、向こうの人と同じ場所の一角にあるんですか。

小田村 そうですね、机も似たようなものでしたね。

伊藤 GHQの一部になっているんですか。

小田村 場所だけ借りているという感じなんでしょうね。

伊藤 向こうの人はいい給料をもらつて、豊かに暮らしているんじゃないが、日本人は別に向こうから給料をもらっているわけではないから——。

小田村 アメリカのスタッフが出張するわけですね。インターナル・レベニュー、デイヴィジョンといいましたが、そのスタッフが各財務局を見に行きます。それに一緒について行く。一人で行くこともありますが、向こうの特別列車（伊藤 進駐軍特別列車ですか）がありますね、それに乗せてくれるんです。これはありがたいことはありがたいんですが、恥ずかしくてね。

武田 それは通訳のような形で行くわけですか。

小田村 そうですね。

伊藤 向こうとの連絡ということなんでしょうね。じゃあ、このころまでにはだいたい英語に練達されたんだ。

小田村 いや、練達しないんですよ、それが。

伊藤 でも用は足りたわけでしょうから。

小田村 半分しか足りませんでしたね。

佐道 その過程で、困つたこととかトラブルとか、ございましたか。

小田村 だいたい来ていた人たちはみんな、それほどの優越感を持つて来たわけではありませんので、一般的に人柄は良かったですね。ただ、日本の経済はよくわからなかつたと思います。日本はインフレになつたでしょう。だから例えば一〇〇万円の所得者がいても本当は大したことはないんですが、連中から見えてワン・ミリオン・イエンといえば、膨大な高額所得者のように見えるんですね。その錯覚は最後まで残つていたような感じがしますね。だから、昭和二十四年当時の税制は非常に超過累進課税できつかつたんですが、どれほどきつい税制かということとはわからなかつたんじゃないでしょうか。

伊藤 ただ、前年度所得に対して税をかけるわけですから、年初と年末ではだいぶ貨幣価値が変わってくるわけですね。

小田村 そうなんですけれど、実際に税を源泉で取られているときはわからないんですが、年末になったら、それまでにみんな食べちゃいますからね。食べちゃったものをあとで納めると言われても、それはなかなか大変なんですね。

■国税庁の発足（一九四九）

伊藤 そのモスさんのグループが来られて、政府に国税庁なるものをつくるということになるわけですか。

小田村 そうです。国税をいまのように大蔵省の中でやっているのは税務行政は徹底しない、独立したはっきりした行政組織をつくれ、ということになりました。それで二十四年に国税庁が発足するわけですね。そうすると私たちの身分も、主税局から国税庁に移管になったわけです。

伊藤 国税庁というのは内閣に直属の機関になるんですか、それとも大蔵省の外局なんですか。

小田村 大蔵省の外局です。

伊藤 人事は大蔵省がやるわけでしょう。

小田村 人事は大蔵省がやるわけです。

伊藤 それじゃあ独立といっても大したことではないですね。

小田村 独立といってもね。ただ国税庁のほうにも人事課はありましたし、中の人事はやりますから、両方で協議してやるということになりますね。もともと主税局の中に独立論はかなり前からあったらしいんです。あれだけの大きな組織ですからね。税務関係はそれぞれ昔からの伝統がありますので、独立したいという気持ちがあったようですから、ちやうどそれに乘ったような形ではないでしょうかね。

伊藤 身分はそうなったんでしょうが、場所はGHQの中におられる

わけですね。

小田村 場所はGHQの中です。

武田 インターナル・レベニューというのは大きな課なんですか。

小田村 わりあいには大きかったんじゃないでしょうか。経済科学局の中のデイヴィジョンでしたから。何人ぐらいいたんでしょうか。私どもがタッチしていたのはだいたい税務行政のほうなんです。税制のほうもインターナル・レベニューで別にありました。こっちは主税局が直接交渉する。シャウプもだいたいそっちのほうなんですね。

伊藤 先生のほうは徴税なんですか。

小田村 徴税ですね。税務行政です。

伊藤 徴税というのは非常に厄介な仕事だろうと思います。国税庁のほうに移ったら、だいたい税金のほうでずっと行くわけですか。

小田村 そうでもありません。

伊藤 大蔵省の中をぐるぐる回るんですか。

小田村 回ります。

伊藤 あれは主税とか主計とかの流れというのはあるんですか。

小田村 だいたいある程度まで行くと専門になつてきますが、初めのうちはぐるぐる回っていますね。

伊藤 定着するのは、もつと後になつてからですか。

小田村 後のほうですね。

武田 先生はGHQの方が徴税をするお手伝いをするわけですか。

小田村 税務行政についてのいろいろな意見を出しますね。その手伝いなり交渉をするという形です。例えば査察制度なんていうのは、このころにできたわけです。ミスター・ペランといったかな、これは検察庁のほうとも連絡を取って調査査察部というのができて、査察をやりました。査察は戦後新しく導入された制度ですから。

昔は、直接税の脱税は刑事罰ではなかったんですね。だからいまのように、脱税で金丸信を検挙するなんていうことは、昔は全く考えられなかったことなんです。

佐道 そうなつたのはいつ頃からなんでしょう。

小田村 刑事罰ができたのはいつからでしょう。昭和二十二年に申告納税制度が採られた後からです。昔は間接国税反則取締りでしたか。

要するに間接税は、消費者が買って、それをちよろまかすということになりますから、酒にしても砂糖消費税にしても罰則はつくわけです。

ただ通告処分というのがありまして、反則を犯したからこれだけ払え、払えばそれでおしまいにする、払わなければ刑罰になるという制度だったんですね。ところが直接税のほうは、納税告知をして納めさせるというやり方で、申告納税ではありません。納税告知をするまにこうがごまかしたということがあるわけですが、こちらが言った税金を納めれば、それで勘弁してやるということだったと思いますね。昔、誰が言っていたかな、小林一三さんの脱税問題というのがあったそうです。それは相続税ではなかったな、なんだったか、昔の方で言っていた方がありましたね。「小林一三の脱税問題というのがあったんだぞ」と言っていましたね。相続税とか、そういうものだったのかもしれないが、いずれにしても刑事罰になることはなかったんです。

伊藤 相続税は直接税なんですか。

小田村 相続税は直接税ですね。

伊藤 そうすると納税告知をする。

小田村 その頃は、納税告知をしたんだろうと思いますね。相続のなにかの書類を出したのかもしれないが。

伊藤 だいたい地租とか――。

小田村 だいたい地租、家屋税が中心でしたね。

伊藤 あと所得税ですね。

小田村 あれは直接税ですね。地租、家屋税はたしかシャウプ勧告で地方税に移されたんです。固定資産税ということですね。

伊藤 財産税をかけられたのは――。

小田村 財産税は二十一年です。

伊藤 あれは一度限りのものですか。

小田村 あれは一度限り。財産税というのは減多にかけることができないですからね。あれは財産税と預金封鎖と一緒にやったんですね。

嘸み合わせてやったわけですね。

伊藤 シャウプの税制改革勧告というのは、もう戻られてからですか。シャウプは二十四年に来て、二十四年に一度勧告を出していますか。

小田村 二十四年に来て、二十四年から二十五年にかけていろいろ調査をして――。

伊藤 二十五年に第二次税制勧告を出していますが、そのときに平衡交付金の問題が出て来ているんですね。これは税制ですから、主税のほうですか。

小田村 主税が中心でやりましたね。

伊藤 では、GHQの中にいる先生としては、あまりこれには関係がなかった。

小田村 そうです。私もがやっていたのは税務行政のほうですから、直接はタッチしません。ただモスさんは一緒に一所懸命やっていたと思います。

武田 シャウプ勧告が実施されるのが二十五年からですね。

小田村 そうですね。二十五年からです。

伊藤 先生がGHQから解放されるのはいつですか。

小田村 二十五年五月です。

伊藤 天王寺税務署長になられるときですか。

小田村 そうです。それまでいたわけですね。

伊藤 じゃあ、けっこう長い期間ですか。

小田村 わりあい長かった。一年半ぐらいいたんですね。

佐道 その前が短かったですからね。

■ GHQでの徴税業務

伊藤 でも私はお話を伺って、GHQの中にあつて、どういふふうに住事をしていたのか、全然イメージが湧かないんですが。ご自分ではこういうふうにやったんだということは。

小田村 あまりないですね。

武田 日本語はほとんど使わないで、日常は英語でやるわけですか。

小田村 向こうとは、そうですね。

伊藤 こっちに日本人がいるんでしょう。

小田村 いますからね。

伊藤 向こうの真ん中に置かれたら、それは英語は上達しますよ。

小田村 いや、あまり上達しなかったんです。

武田 よく一緒に仕事をされた向こうの方はいらっしゃいますか。

小田村 一緒にやった人はいました。デービスさんとかラッシュュさんがいました。二人ともいい人でした。

伊藤 それは徴税の専門家なんですか。

小田村 両方とも徴税の専門家です。向こうで税金をやっていた人たちですね。

武田 軍人ではないんですね。

小田村 軍人ではないんです。全部そうです。

伊藤 その人たちは状況が違ふところで、徴税といつても、ずいぶん違ふでしょうね。また、日本のこれまでの慣例とか税制を理解するだけでも大変なんじゃないかと思ひますけれどね。

小田村 そうですね。デービスが言っていたかな。あちこち出張したり旅行したりして、「日本というのは本当にきれいなところだ、もう少し道路を整備して交通機関をよくすれば、本当に素晴らしいんだけれどな」と言っていましたよ。ずいぶん遠慮したんじゃないでしょうか。

伊藤 ドルでお金をもらつていれば、ずいぶん良かったでしょうからね。

小田村 そうですね。岸本さんが一番親しかったんですが、モンローさんというのがいて、この方はその後台湾に行きまして新高山に登つて、遭難して亡くなつちやったんです。そういう方もいましたね。

伊藤 それは一種の使節団ですか。

小田村 まあアドバイザーですね。

伊藤 そんなにきついことはないんだろうと思いますが、あの人たちもそれほど、ああやれ、こうやれ、ということではないでしょう。

小田村 そうではないですね。ただ、そういう人たちはいいんですが、ドッジラインの前、二十三年十二月に「九原則」というのが出たんです。「ナイン・ポイント」と言っていました。これが現地のいわゆる軍政府の金科玉条になりまして、その頃は国税局に目標額を割り当てるんですね。その目標額を、各国税局が税務署に割り当て、その目標額を達成するために署長を督励するわけです。それは日本人がやれば、そうめちやくちやなことをしないんですが、軍政府が行つて署長に命令するものですから、これは苦勞したようです。それは軍人ですからね。

伊藤 融通が利かないわけですね。命令通りやれというわけですね。

小田村 徴税で恨みを買つたのは、それがかなりあると思います。共產党の民主商工会の力がついたのは、それもあるんですね。

伊藤 しかし税収が悪いと、占領軍の経費を払う「ことに響く」ということもありますからね。彼らもしっかり集めたいと思つたでしょう（笑い）。

武田 占領軍の経費は値切れないでしょうからね（笑い）。

伊藤 値切れないでしょう。とにかく当時の国の財政からいつたら、占領軍に支払うお金はべらぼうに大きいでしょうからね。

小田村 大きかったですね。だから駐留軍経費がなくなつたときに、安全保障諸費というのをつくつたんですね。

伊藤 基地関係のものですか。

小田村 安全保障諸費というのは何かわからないけれど、突つ込まれたんですね。二十七年予算ですか。

伊藤 それは袋に入つたような感じなんですか。

小田村 要するに将来、彼らの考え方としては、これを防衛費に切り換えようという気持ちがあつたようですね。これは一つの見識だと思ふんですが。

伊藤 そうですね。時間ですので、ちょうどGHQから、突然天王寺の税務署長に移るところから次回お話を伺いたと思います。税務署長としてもまたいろいろご苦心があつたのではないかと思います、まだ昭和二十五年ですからね。

佐道 これ「天王寺税務署長」は二年ぐらい行かれるわけですね。

小田村 そうです、通常は一年なんですけれどね。

伊藤 あまり長くいると良くないということですかね。

小田村 私は据え置かれちゃった。そこが長くなつたのは、二十二年に一緒に入つた連中のうち、半分は二十四年に税務署長に出ているんです。あれはどういう区分けをしたのかな、歳の若い方を据え置いたんじゃないかと思うんです。だから、一期前の二十一年組と二十二年組の半分が、二十四年七月に税務署長に出ているんです。

伊藤 大蔵省に入つて、まず税務署長になるというのは一つのパターンですね。これはならない人もいますか。

小田村 外国に派遣された人は、税務署長になつていないんですね。ですから私が仕えた石田さんも石野さんも税務署長をやつていないですね。迫水さんもやつていないでしょう。

伊藤 だいたいの方はおやりになるんですか。

小田村 だいたいの方はやるんです。昔は財務書記といつておつたんですが、それはロンドンとニューヨークに行きますね。それは税務署長をやらなくて、そのままなんです。

伊藤 それは財務官の下にいる人ですか。

小田村 そうです。

伊藤 それは勉強にはなるんだろうけれどな。

武田 その「天王寺税務署長の」あと、今度は為替局に行かれるんですか。

小田村 そうです。署長が終わりましてから、為替局ですね。

武田 だいたいそのぐらいまでですかね、昭和三十一年までですね。

伊藤 ちょっとしつこいような聞き方をしますが、よろしくお願いいたします。

佐道、武田 たいへん勉強になります。一同 ありがとうございます。

（以上）

小田村 四郎

オーラルヒストリー

第 3 回

天王寺税務署長～為替局資金課時代（1950～1956）

【2003年4月25日（金）14:00～16:00】

（於：政策研究プロジェクトセンター）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

記録・編集：丹羽 清隆

第3回質問項目

前回、第二回目のインタビューでは、終戦後から東京理財局時代までのお話をお聞かせ頂きました。

今回は、天王寺の税務署長になられてから、為替局資金課課長補佐をされている時代のお話をお聞かせ頂ければ存じます。

以下に、簡単な質問事項を並べました。これは先生がご記憶を思いだされるきっかけですので、先生のお話の都合で取捨選択して頂いて構いません。また、この質問にないことでも是非お話頂ければと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

〈前回の補足〉

1. 前回の補足がございましたら冒頭をお願いします。

〈天王寺税務署長（25.5～27.8）〉

2. 昭和25年5月に、天王寺の税務署長になられます。近畿にお住まいになったのは初めてではないかと存じますが、当時の大阪、あるいは近親の雰囲気は如何でしたか。
3. 税務署長の生活とはどのようなものですか。また、通例、比較的若い年齢で税務署長となられるわけですが、ご苦労されたこと、特に注意されたことなどございましたか。
4. シャウプ税制後の徴税行政を実際に担当されて、徴税業務の変化などは感じられましたか。

〈占領・独立について〉

5. また、27年4月に本省に戻られる直前に占領行政が終了します。占領行政の一端を担われた立場から、先生は、占領についてどのようなご印象をお持ちですか。
6. また、講和・独立の動きをどのように見ていらっしゃいましたか。

〈為替局資金課課長補佐（27.8～31.9）〉

7. 為替局は、外国為替管理委員会から業務を引き継ぐ形で大蔵省に新設されますが、外為委員会についてご存知のことなどはございますか。また、当時の為替局にはどのような方がいらっしゃいましたか。
8. 配属になられた資金課で、貿易関係を担当されたとのことですが、具体的なお仕事はどのようなものですか。

〈オープン勘定について〉

9. 外貨の日本政府への移管が済んだのは、27年4月とされていますが（昭和財政史11巻）、その後もいわゆる「オープン勘定」が延長されたと言われます。この「オープン勘定」とは具体的にはどのようなものでしょうか。また、オープン勘定の実際の運用など、ご記憶のことがあれば教えてください。

10. お仕事では、通産省や外務省との接触などもございましたか。やり取りでご記憶のこととはございますか。

〈外貨予算制度について〉

11. また、お借りした速記録で、先生は外貨予算のお仕事をされたとおっしゃっていますが、この外貨予算の制度はやや込み入っており、難しいところがございます。しくみそのものについて、お教え頂けると助かります。

〈昭和28年の外貨危機〉

12. 28年には外貨危機が襲いますが、輸出振興やデフレ的金融政策などでこの危機は早期に克服されたと言われます（日本財政史11巻）。このときのご記憶をお聞かせください。

〈IMF加盟問題〉

13. 30年にはIMF加盟後、初のコンサルテーションがあり、先生はアメリカにご出張されます。アメリカでのご経験を是非お聞かせください。

〈もはや戦後ではない〉

14. この時期は「もはや戦後ではない」と言われる時期に当たりますが、当時の政治・社会・経済各面で、先生は時代の変化をどのようにお感じになりましたか。

今回は以上のような点を参考にいただければ幸いです。

■「補」GHQと国税局

伊藤 それでは始めさせていただきます。まず、前回の補足は何かございますか。

小田村 一つ忘れておりましたが、司令部におりましたときに、向こうから言われたものとして、そう大きな問題ではないんですが、二つありました。その当時、司令部は「財務局」が何だかわからなかったんですね。英語に翻訳しますと「Financial bureau」ということで、もともと戦前は税務監督局だったんですね。向こうは税の専門家の人たちですから、税務監督局であるということをよく説明すればよかったんでしょうが、「財務局」なるものの存在がよくわからないわけです。どうして国税庁ができて（国税局になりましたが）、中央から各税務署に一本で指令を出さないのか。必ず局にいつて、局長が管下の税務署に指令するという仕組みになるのか、あの先生方によくわからない。それで国税庁直属の監督官、監察官（監察官は職員の非行の監察です）をつくれと言われて、監督官、監察官というのが国税庁派遣ということになりました。身分は国税庁に置いておいて、各国税局に駐在する、という形のものが一つできました。あまり意味はなかったんですが、そういうことがありました。

もう一つは、課税と徴収が別々になっている、ということをやなかなかよく理解してもらえませんでした。どうして課税した人間が徴収しないのか、ということなんです。それで賦課・徴収の一元化ということでしたが、「こちらは」それはとても困るという言ったわけです。一つやってみるということで、各局に一つずつ基準税務署といういましたか、そういうものをつくりまして、それとほぼ同規模の比較税務署と比べてみるということをやらされたことがあります。結局これは、二、三年で取りやめになったと思います。先生たちから見れば、税金を自分で調査したんだから、すぐに徴収してくれればいいじゃないか、という考え方だったようですね。

伊藤 それを二つに分けるといのは、納税者であるわれわれから見てもわからないわけですね。

小田村 そうでしょうね。これは所得調査技術と徴収技術と、専門がかなり違うということがあります。それから、課税をして徴収するというのは、一つには、徴収面を考えると課税が緩やかになってしまいう、手控えるようになるということがあるわけですね。もう一つは、現金を扱いますと、それが非行につながるおそれがあるということで、ずっと昔から分けてあるんですね。それがなかなか理解してもらえなかったということがございました。

伊藤 人を分けることによって不正とか情実を防ごうということですね。

小田村 ええ、そういうことですね。

■天王寺税務署長時代 （1）大阪・天王寺

伊藤 先生は昭和二十五年五月に天王寺の税務署長になられます。この税務署長というのはいったい何をするのでしょうか。われわれは確定申告で各税務署に申告の用紙を出して、預金通帳から差し引くというようなことでしかおつき合いがないわけですが、税務署はずいぶんたくさんさんのいろいろな税を取っている。直接税も間接税もここですね。

小田村 そうです。全部税務署で扱います。

伊藤 納税告知をするのも、徴収をするのも、ここでやるというまとまった一つの単位になるわけですね。

小田村 そうです。

伊藤 それではある区域があるわけですね。

小田村 はい、管轄区域があります。

伊藤 それはだいたい行政区域と重なっているわけですか。

小田村 行政区域によって分けています。ただ、税額が非常に大きくなった場合は、分割するところが出てきますね。分割ではありません

が東京では行政区の合併のときでも例えば千代田区の神田、麹町や文京区の小石川、本郷や、港区の芝、麻布などは昔の税務署のままです。また一つの市で一つ「の税務署」では足りないという場合には、それを北と南に分けるとか、そういうことはございます。

伊藤 天王寺はどういう区域ですか。

小田村 天王寺は大阪の中の行政区です。

伊藤 ということは、大阪の中にはたくさんさんの税務署があるということですか。

小田村 たくさんあります。これは、はじめ南区の南税務署が管轄しておったんですね。ところがあれは区を分割したのか、もともと一つの税務署で三つの区をやっていたものを分けたのか、昭和二十三年に税務署を増やして、天王寺と浪速を南税務署から分けたんです。ですからこの二つは、昭和二十三年にできた新しい税務署なんです。

伊藤 では、いちおう区に対応しているわけですね。

小田村 区に対応しております。警察も一署でした。

佐道 「天王寺税務署には」何名ぐらいの署員がいるんですか。

小田村 私が行きましたときには、わりあいに多くて百二十人ぐらいいたかと思うんです。その中にはアルバイトとか臨時雇いもいたわけですが、だんだん減ってまいりまして、私が二年いて出た頃には、百人を少し切ったと思いますね。だんだん人員を減らしていききましたから。

伊藤 なんで人員を減らしたんですか。

小田村 戦後、税務行政が非常に混乱しまして、税目も多くなりまして。それで「署員を」うんと増やしたんですね。それを逐次減らしていくということで、二十四、五年頃から本格的に減らしていったと思います。

佐道 百名規模というと、大阪の中でも比較的大きな方になりますか。小田村 中どころではないでしょうか。いまではもっと少ないと思います。どのくらいでしょうか、五十、六十人ではないかと思ひます。

伊藤 「いまは」機械化もされたことでしょうか。

小田村 それと、国税局に集中したり、困難なところに多く出すとか、いろいろなやりくりをやっております。

伊藤 税務署の大きさというのは、その地域の税の取れ高によって違うんですね。

小田村 そうですね。それと課税物件ですね。

伊藤 物件の数ですか。

小田村 課税対象ですね。

佐道 天王寺ということだと、商業地域になりますか。

小田村 あそこは商業地はごく一部で、比較的少ないですね。阿倍野と上六（うえろく）と申しまして、近鉄の発着点だったところ（いまは難波まで延びましたが）と、南の国鉄関西線の出る天王寺駅の二つが比較的繁華なところで、あとは住宅地だったんです。『細雪』の主人公はあそこだったんですね。それから、お寺が多いんです。お寺と住宅と学校ですね。

伊藤 そうするとあまり税を取るようなところでもないですね（笑い）。

小田村 ですから比較的小さい方ですね。

伊藤 ちよつと変な話ですが、いままでのお話を伺うと、だいたい東京近辺でお過ごしになっておられますが、突然関西に行かれると、ちよつと風土が違ふんじゃないですか。

小田村 それは全然違いますね。一番びっくりしたのは、東京だと電車に乗るときに行列して乗りますね。それが、赴任するときに京都で下りて、京都から奈良に行ったんです。京都始発で、初め並んでいたんですが、電車が着いたら全部それ「行列」がなくなつてしまいましたね（笑い）。

佐道 電車に並ぶか並ばないかが西と東の分岐点、ということになりますか（笑い）。

小田村 それが最初にびっくりしたところなんです（笑い）。

伊藤 最初に遭遇するカルチャーショックですね。

武田 先生は、向こうにお知り合いの方とかいらつしやいましたか。

小田村 ほっといなかっただんです。それで、まずどこに下宿しようかと思っていたんですが、ちょうど私に発令があつて、国税庁の方が送別会をしてくださったんですね。そのときに、船後「正道」さんという十八年「大蔵省入省」の方がおられまして、生駒の出身なんです。「天王寺なら近鉄線で一直線に行けるから、僕の家に泊まったらどうだ」というお話がございまして、それはありがたいということで、船後さんのお宅にずっとご厄介になっていました。

伊藤 それは最後まで、ですか。

小田村 途中で結婚しましたので、結婚して阪急線の夙川に移りました。

伊藤 結婚なさった方は向こうの方ですか。

小田村 向こうなんです。

伊藤 ああ、そうですか。カルチャーショックが——。大丈夫でしたか。

小田村 いや、大丈夫でないですよ（笑い）。

伊藤 やっぱり税務署長となると、結婚相手を探して、いろいろ持ってくる人がたくさんいるわけですか。

小田村 いや、そんなにいないですね。そういうのは地元から持ってくるというのはいらないです。船後さんのところに持つてこられた方があつたようですが、船後さんはお母様一人で、それはお断わりしたんです。

佐道 税務署長といえ、その地域では警察署長などと並んで大変な名士になりますね。いろいろ呼ばれたり、会に出てくれという話があるわけですか。

小田村 それはあまりなかったと思いますね。役所のつき合いは、警察署と、府の税務事務所というのがございました。これは事業税です。それから区役所が住民税ですね。事業税は税務事務所がやっていたものですから、区役所の区長さん、税務事務所長さんという方々とのつき合いがありました。

伊藤 どうやってご結婚なさったんですか。

小田村 ああ、結婚ですか。結婚は国税局長からの話なんです。伊藤 そんなに偉いところから声がかかってくるわけですか。

小田村 そうですね。塩見俊二さんという参議院議員になりました方が「大阪国税」局長をしておりました。その塩見さんが、「おまえちよつと来い」と言うわけですよ。それで、「これはどうだ」ということで、うちで相談して決めました。

伊藤 おいくつのときでいらっしゃいますか。

小田村 数えて三十ですから、二十八歳ですか。

伊藤 それで新居を構えられたということですか。

小田村 新居というか、借りたんですが、夙川のほうで、日本銀行の人が前に借りていたというので、そこを国税局に来ていた若い人が紹介してくれました。それならそこをお借りしようと——。結婚してから五ヶ月ぐらいいちかおりませんでした。

伊藤 奥さんが向こうの方だったなら、今度はこちら「東京」に移ったら、奥様のほうがカルチャーショックがあつたわけですね。

小田村 そういうことですね。

伊藤 日本の東西文化の融合みたいなものです（笑い）。いや、違うというのはいいことだと思います。

■天王寺税務署長時代 (2) 所得税関係

伊藤 それで、まことに変な話なんです、具体的な税の徴収とか、そういうことはほとんどご経験がないわけですね。

小田村 国税庁の司令部関係の仕事をしたのと、財務局に二、三ヶ月おつたという程度ですから。実際の調査はやらせてもらえませんでしたからね。

伊藤 そういうことは長年経験を積んだ人たちがやるものですか。

小田村 そういう人たちがやるわけです。

伊藤 「税務署長は」それを監督するという役目になりますか。

小田村 そういうことになります、はい。

伊藤 署長以下の人たちはベテランなんですか。

小田村 そうですね。みんな叩き上げたかたばかりです。

伊藤 そうすると、その上にひよいと乗っかるような形になるわけですね。

小田村 そうですね。

伊藤 なんとなく妙な感じがするんですけれど。

小田村 これは代々そういうことになっているので。

伊藤 そういうものだ、ということですね。そういうときはどういう振る舞いをすればよろしいわけですか。

小田村 どういう振る舞いをするか、私もよくわからないわけです。

とにかくまず、どういう人たちがいるのか把握しなければいけませんね。いまは定型物としてできているんですが、その頃は何もなかったものですから、いわゆる身上調書の型をつくりまして、それに書いてもらって、全部一人ずつ署長室に来てもらって、それについていろいろ話を聞くことにしました。そうしないと、人間と名前がよくわからないものですからね。要するに部下の掌握ということが一番大事なんです。それを一番先にやりました。それから、異動がございまずと必ず送別会があるんです。

大阪には納税協会という外郭団体がありました。ほかの国税局では青色申告会と法人会とに分かれているんですが、大阪では以前から両方一緒にしたものができていました。それが私的寄付金を募って事務所をつくったんですね。それが税務署の敷地の中にあるんです（笑い）。厳格に言えば不適当ですが。

伊藤 半官半民みたいだ（笑い）。

小田村 いまから見ると妙な話なんです、たいへん便利でして、その二階がちょうど畳の間になっていたものですから、そこで送別会をやりました。そこでお酒を飲むこともできます。それから旅行会があるんです。それが年に一回それぞれ課ごと、あるいは係ごとにやるんですね。そのときに「署長さんどうぞ」と誘いが来ますから、だい

たいそれについていくということで、だんだんわかってきます。

それから税金のほうは、一番大変だったのは所得税関係です。これはまだシャウプ勧告が実施される前です。昭和二十五年五月に行ったものですから、二十四年度の所得税ですね。それで提出された申告に對して、営業所得はほとんど大部分が更正決定しておったわけです。

まだ申告指導や相談があまり行われていなかった時代です。その更正決定に對して審査請求と申しまして、ほとんどみんな再調査の要求が出てくるわけです。その審査請求で「税額を」少し下げまして、それでだいたい折れ合うということをやっていました。したがって、非常に滞納も多かったわけですが、これが一番大変でしたね。五月に「天王寺税務署に」来まして、それが六月いっぱい続いたんじゃないでしょうか。七月になると今度は予定申告になります。

伊藤 いま所得税とおっしゃったのは、法人所得税ですか。

小田村 個人所得税です。その頃はいまのように法人が多くなかったんですね。個人所得が中心だったわけです。

伊藤 それはサラリーマンではないんでしょう。

小田村 サラリーマンではないんです。営業所得です。

伊藤 サラリーマンの場合、よく天引きされていますが、あれはどういう仕掛けになっているんですか。

小田村 あの源泉徴収は昭和十七年でしたか、戦時中にできたんです。これは給与の支払いをするところが源泉徴収義務者ということで法律で義務づけられまして、計算をして天引きするわけです。それを税務署に毎月納付するという形なんです。ですから、源泉所得税の納付が遅れたものに対しては、源泉徴収係が年がら年中督促をしていました。「あんたのところ、まだひと月遅れていますよ」とかですね。先ほど申し上げた大阪地方の「納税協会」という団体は、この源泉徴収事務に協力するために戦時中にできたということです。

伊藤 例えば会社があつて、その会社の社員が所得税を払うときに、自分の住所で払うわけですね。

小田村 住所地です。ただ納税地を住所地以外に設ける場合もありま

す。源泉徴収の場合は、税金は徴収義務者＝会社の所在地の税務署に一括して払いまして、それを個人のほうは年末に源泉徴収票をもらいまして、ほかに所得があれば合算して申告するというもので、これは所在地に行きます。源泉徴収票がありますから、それだけもう国庫に納まっているということになります。

伊藤 それは所在地の税務署を通して、国庫に入ってくるわけですか。
小田村 その通りです。それで税務署は、住所地の区役所、市町村役場に通知するわけです。そうすると市町村役場が、それに対して住民税をかけまして、それをまた源泉徴収義務者に送ってくるわけです。それで住民税を「源泉徴収義務者＝会社が、所得税と」一緒に徴収するということになるわけです。

伊藤 それは一年遅れますね。

小田村 一年遅れます。こちらのほうは、所在地の区役所のほうに、税金を納付するわけです。

伊藤 やはり地方税というのは、税務署が非常に関わっているんですね。

小田村 関わっているんです。申告が出てきますと、昔は区役所がそれを写しに来ました。いまはコピーで送っていると思います。

伊藤 天王寺の税務署ですと、どういう税が一番大きなものですか。

小田村 あのとときは法人税が大きかったかな。たしか近鉄が、納税地を天王寺管内に置いたと思うんですね。だからこれが一番大きかったと思います。

伊藤 そういう大きな会社は、どこか納税地を決めるわけですか。

小田村 そうです。納税地を決めます。いまは変わっているかもしれないし、しかしそれは、大きくても手数はかからないわけですね。

伊藤 一件で済むわけですね。

小田村 大きい会社は、そのころ制度が変わりまして、国税局の調査査察部というところが調査するわけです。ですから税務署は所得についてはノータッチ。源泉徴収だけは監査します。

伊藤 地方の国税局がそれをやるわけですか。

小田村 国税局がやります。いまはどうなっていますか、たしか資本金一億円以上は国税局所管ということになります。

伊藤 それ以下の分は管轄税務署でやるわけですね。

小田村 ええ。そのころはもつと限度が低かったと思います。

■天王寺税務署長時代 (3) 国税局との関係

伊藤 署長さんとしては、毎日の日常業務はあまりないわけですか。

小田村 日常業務は、課税の審査請求の調査結果が決裁で上がってきますから、その書類を全部見なければなりません。

伊藤 それはめくら判でもいいわけでしょう。

小田村 めくら判でもいいんですが、私はいちおう全部見ることにしました。

伊藤 それは勉強ですか。

小田村 勉強です。法人税もほとんどいままでノータッチのようだったので、これはよくないと思ひまして、法人税のほうもいちおう決裁書を見る。不審なものについては付箋をつけて返す、ということをやりました。そのころは帳簿が充分についていないものですから、帳簿がないものに対しては、どうしても推計課税になるわけです。売り上げを推計しまして、利益標準率を国税局でつくってしまして、粗利益が売上げの何割ぐらいということで、それをかけて、若干の経費を引いて所得を出すというやり方をしていたのが非常に多かったわけです。その算定の仕方があまり機械的だと、どうもおかしくなってくる。それを注意しました。

それから問題のあるものについては、署員のほうから説明に来ることもありましたし、陳情もあるわけです。

もう一つ、これは私のときは大したことがなかったんですが、共産党の民主商工会というのがありました。大阪では「生活擁護同盟」と言っていましたが、これが集団申告、集団陳情をやるわけです。その

場合には、いちおう警察のほうに連絡いたしまして、不法行為等に出ないように警戒をしていた。

伊藤 やはり民商の力はかなりあったんですか。

小田村 ありましたね。ただ不思議なことに、生活擁護同盟の親玉は戦前の共産党のベテランだったようですが、生活協同組合をつくりまして、民商の会員をその協同組合の会員にしてしまったわけです。ですから、民商の会員はそこからの給与所得ということになりまして、源泉徴収をされてくるわけです。あとは法人税を納めるという形になりました。それは私が行ってから二年目ぐらいでしょうか、そういうふうに変えてしまいました。そうすると何かおとなしくなっちゃいましたね。

伊藤 それはしかし、彼らの節税になったんですかね。

小田村 彼らにしてみると、なったようですね。

伊藤 節税になっても、税金を取る手間が省けるんだったら、効率はいいですね。

小田村 それは偽装というか、法人の実体を成していないということで、否認した場合もあるんですね。私のところではそれをやらなかったんですが、全国の税務署の中では否認して、個人課税に戻した、というところもあるようです。

伊藤 実際に多くは協同組合の実体はないわけですからね（笑い）。

佐道 天王寺の近鉄のような大きいところ以外の事業でいえば、職種が多いとか、そういう特徴はありましたか。

小田村 職種では、あとで大きく伸びた電機会社がありました。たしか布施のほうに工場があつて、本社だけこつちにあつたのではないかと思います。タツタ電線でしたか、そういう会社が、のちに大きく伸びたようです。あとは特別大きなものはないですね。むしろ飲食関係、旅館ですね。旅館はわりあい多かったですね。

伊藤 それは単なる所得税ではなくて、いろいろな税がありますね。飲食税があるんじゃないですか。

小田村 飲食税は地方税です。

佐道 署員にはベテランのかたがたくさんいらつしやつたということですが、それは天王寺の税務署でずっと、ということになりますか。

小田村 税務署の人事は国税局がやるんです。ですから二、三年経つと、だいたい転属になるわけです。

伊藤 要するに地域とあまり密接にならないように、ということですね。

小田村 そうですね。異動の時期には国税局に行つて署の方の希望を伝えておきます。

佐道 では全国的に異動するわけですか。

小田村 他局に動くことは殆どありません。だいたい「各地域の」国税局の中で動かすわけです。だから国税局長が任命権者になっているんですね。

伊藤 署長以外は全部そうですね。

小田村 署長以外は、任命権者は国税局長です。

伊藤 天王寺の地方国税局はどこになるんですか。近畿ですか。

小田村 大阪国税局です。二十四年に国税局と財務局が分かれまして、財務局のほう有近畿財務局になり、国税局が大阪国税局になりました。伊藤 それがカバーする範囲は。

小田村 畿内六県です。三重は名古屋「国税局」に入りますから、

「大阪国税局の管轄は」和歌山、奈良、大阪、京都、兵庫、滋賀ですね。昔は四国と福井まで含んでいたようですね。ところが四国は独立し「高松国税局」、北陸も独立しました「金沢国税局」。

佐道 戦争が終わつてほしい五年経っているわけですが、まだ占領中ですね。戦争からの立ち直りは、関西のほうはいかがでしたか。

小田村 戦災の跡は、バラックみたいなどころもありましたが、ほとんどなかったと思います。だいたい普通の営業活動、生活ができるような状況になっていたと思います。ただあのときは、料飲の禁止があったかな、もう終わっていましたかね。昭和二十五年だと、だいたい統制はなくなっていたかもしれせん。前は料飲禁止で、私が国税庁におつたときには、地方に行きますと、「各地域の国税」局長以下、

料亭で会食ができないものですから、何か警察の目をごまかしながら寮などを使ってやっておった時代です（笑い）。もう二十五年にはそれはなくなっていたような気がしますね。

伊藤 でも二十五年というとまだ外食券のある時代ですからね。

小田村 そうですね、外食券がありましたね。

■天王寺税務署長時代 （4）朝鮮動乱とシャウプ勧告

佐道 先生は昭和二十五年五月に「天王寺税務署に」赴任されましたね。お仕事とは直接関係はないんですが、六月には朝鮮で動乱が始まります。これは関西の商業などにも影響があったと思います。

小田村 だいぶ影響があったのではないのでしょうか。とにかく朝鮮動乱が始まって、活気がついてきました。ですから税金の滞納もずいぶんあったんですが、経済的にはかなりそういうことで良くなってきたと思いますね。

伊藤 闇市なんていうのはなかったですか。

小田村 あのとときはだんだん統制が解けてきたので、闇市の取締りというのはなかったように思うんですけどね。

伊藤 闇商人というのは課税対象としてなかなか把握しにくいわけでしょう？

小田村 そうなんです。そのへんでも非常にやりにくかったと思うんです。でも二十四年頃まで、私が着任する前までは、まだ軍政府がいろいろ権限をもっていました、目標額をつくらせて、目標額を達成するために督促したり、いろいろやっておったようです。

伊藤 でも、あの人たちが前面に出たわけではないんでしょう？

小田村 いやかなり全面に出ていたようです。

伊藤 それはすごい脅しになりますね。

小田村 だから大変だったんですね。例えば法人税で大きいのがボカシと入る税務署は、目標額が達成しやすいんです。小さな税務署は困

ったわけです。

伊藤 地方の軍政局と天王寺の税務署というのは、何か連絡があるんですか。

小田村 私のときには何もありませんでした。進駐軍が来たこともなかったと思います。だから、それは二十四年頃までだったかと思えます。天王寺というのは都会の税務署ですから、農業所得がないんです。これは非常に残念でした。もう一つは、酒屋（酒造業）さんがないんです。ですから地方を見る上で重要な酒屋とか農業関係が見られなかったことが非常に残念でした。

伊藤 あとは税務関係はおやりになっていませんね。

小田村 あとは昭和三十五年に名古屋の直税部長をやりました、それから四十五年に「名古屋」国税局長をやりました。だから、あと二回やります。

伊藤 そのときどきの変化というのも、そのお話のときに伺いたいと思います。シャウプ勧告はこのときに実施されるんですか。

小田村 シャウプ勧告は、二十五年分の所得税から実施されるわけです。

伊藤 二十六年に支払うものですね。それはだいぶ変わったんですか。

小田村 かなり税率が緩和されましたので、良くなりました。それと、法人関係では、資産再評価が認められましたから、いままでのように取得価額と簿価でずっと低く抑えられていたために減価償却ができず名目上の利益だけが上がってくるということがなくなりまして、合理化されたわけです。ですからシャウプ勧告にはいろいろな批判もあります、あの当時としては非常に喜ばれた税制です。

伊藤 徴税の仕方なども変わってくるわけですか。

小田村 青色申告ができたのが、このときからなんです。帳簿をつければ青色申告を出して、それを更正する場合には理由をつけなければいけないということになりました。それから審査請求のほうも、それまではだいたい税務署長限りだったんですが、税務署でいったん再調査をして、それで不満な場合には国税局に行きまして、国税局に協議

団ができて、そこでもう一回審査をするという形になりました。

伊藤 僕はよくわからないんですが、商売をやっている人たちが査定する基準のような仕掛けがいろいろございますね。ああいうものはベテランの人たちが調査をして、それを全体として国税局が見ていつて、基準を示していくということなんですか。

小田村 利益率等は標準率ということで、税務署で調査したものを国税局に上げていつて、そこで合理的な基準を一つ作るんですが、売り上げの推計は税務調査官の腕ですね。ただ、これは弊害が大きかったんですが、外形から売り上げを推定する方式を大阪の国税局でつくっていたことがあるんです。それは、例えば従業員が何人いるからこの職種については何々という形で、それを法人税のほうで利用しすぎるくらいがありました。ですから、これはもうちょっと実態を調べるということで、少し是正させたこともあります。

伊藤 さつきシャープ勧告の実施によって少し税率が下がったというお話でしたが、あがってくる税の額が、トータルして下がるということとはなかったんですか。

小田村 それはなかったですね。結局、税率が高かったものですから、所得の査定をかなり抑えていたのだと思います。一つは朝鮮事変で景気がよくなつて、所得が上がったということもあるんですが、もう一つは、シャープ税制になつて税率が穏やかになつたので、課税がしやすくなつたという両面があると思いますね。

伊藤 そういうものなんですね。

小田村 そうだ、シャープ税制で取引高税も廃止したんですね。

伊藤 それまで取引高税というのはどうやって徴収していたんですか。小田村 あれは酒と同じように買手に税金を転嫁するものですから、間接税として間税課が扱いました。しかし間税課は売り上げの推計は慣れておりません。一番はじめは証紙を貼らせたんですね。これが評判が悪くて、証紙はたしか一年ぐらいで取りやめになつていっているんですね。その後は帳簿を調べて、ということだったんですが――。

伊藤 徴収しにくい税なんですね。

小田村 しにくいんですね。間税課が扱ったということがちよつと無理だったかもしれませんね。

■独立の回復と警察予備隊

伊藤 昭和二十五年に「天王寺税務署に」行かれて、お帰りになるのが二十七年ですから、ちよつと丸二年おられたわけですね。

小田村 一年で帰してくれるかと思つたら帰してくれない。二年目に、異動が六月頃にあるものだから、今度は帰してくれるかと思つたらまだ据え置かれたので、だいぶ不満だったんですね。

武田 一年ぐらいというのが通例ですか。

小田村 だいたい一年で帰るのが普通です。私はせっかく近畿地方に行つたものですから、できるだけ社寺を見て回りたいと思ひました。ちよつと署員にそういうことの好きな男がいました、毎週日曜日に案内してくれるわけです。もう一つありがたかったのは、近鉄本社があったものから、近鉄の無料パスをくれたんです(笑い)。それは近鉄全部ではなくて、名張以西だったんですが、あの辺をただでどんどん回れるわけですね。バスその他ありますけれどね。それを極力活用いたしました。

佐道 じゃあ、ずいぶんお回りになつたんじゃないですか。

小田村 ずいぶん回りました。京都、奈良は大半廻つたと思います。海南の署長と一緒に出た友人と、新宮の税務署長はベテランの方ですが、本省から行ったかただったんですね。その新宮の署長に頼んで、熊野川の上流から筏下りをしようじゃないかといつて、それに行つたことがあります。それから夏休みに、学校の友人が別子鉱山におつたものですから、別子に遊びに行つたりもしました。それから舞鶴に、友人がやはり税務署長で行つたものから、夏休みに山登りをしようといつて、大台ヶ原に登りました。一晩泊まつて、宮川の大杉谷を通つて帰つてきたこともあります。それから大峰山に登つて、洞川

(どろがわ) から夜中に登って、ちようどご来光を拝みました。私は吉野がわりあいに好きで、何度も行きました。秋のみじも素晴らしかったですね。

伊藤 それは結婚後も、ですか。

小田村 結婚後は、夙川からですとちよつと遠いので、あまり行かれませんでした。それまでの間は大いにあちこち歩きました。

伊藤 本省に戻られる前に占領行政が終了ということになりますが、それは何か感慨がありましたか。

小田村 そうですね。私が大阪にいたときに、上本町に古本屋がありましたので、ときどき寄りました。お寺の本も買ったんですが、あの頃出た本で面白い本がありました。一つはジョージ・オーウェルの『一九八四年』『新庄哲夫訳、一九四九年、早川書房』、もう一つがルーマニアのゲオルギウの『二十五時』という小説「河盛好蔵訳、一九五〇年、筑摩書房」です。この二つが大変評判だったんです。それを読んだら大変面白くて、特に『一九八四年』は、要するにスターリン治下のソ連を書いたものなんですが、これは占領時代とまったく同じじゃないか、という感じがいたしました。

伊藤 それだけ占領時代というのは、鬱屈した感じだったんですか。

小田村 そういうことですね。

伊藤 私はまだ若かったもので、あまり占領ということを意識しないで生活していましたが、先生はGHQに派遣されたりしたわけですね。小田村 GHQのほうは、占領政策を転換した後ですから、そんなことはなかったし、向こうも人柄のいい人でしたからよかったんですが、初期のページ、賠償から太平洋戦争史観と東京裁判はまったくけしからんと思っていたものですから、これ「『一九八四年』」はまったくあのと「日本の占領時代初期」と同じではないかと思っただけです。

伊藤 じゃあ独立を回復したということはないか。

小田村 たいへん嬉しかったです。確定申告のときにチラシをつくっていたんです。前の年からチラシをつくりまして、新聞に挟んで、「納税者の皆様へ」ということで配ってもらったんですが、二十六年

は「シャープ勧告が今年から実施されて、税額も下がりましたから、正確な申告を出してください」というチラシだったんです。二十七年は「今年は占領が終わって、待望の独立を回復します。日本の国をわれわれで運営できるようにしました」というチラシをつくって、配ってもらいました。

佐道 占領が終わる前に、朝鮮動乱の影響を受けて、日本にも警察予備隊ができるわけですね。先生は後で大変関わることになっていくんですが、これができるときに、これは再軍備だと思われましたか。それとも、これは警察の延長だな、という感じだったでしょうか。

小田村 再軍備ではないか、と思いました。実はそのときに、大阪の国税局長は窪谷「直光」さんというかただったんですが、この方は警察予備隊の初代の経理局長に替わられたんです。それから間税部長に高柳「忠夫」さんというかたがおられました。この方も一緒に警察予備隊に行かれたんですね。ですから、予備隊の指令それ自体はあまりよくわかりませんでしたけれども、いずれにしてもこれは軍隊ではないか、という感じはしました。

それから私のすぐ上の兄が京都の土木を出まして、海軍に行っていたわけですが、就職先が満鉄だったわけですね。満鉄がつぶれたものですから、復員してからはじめ西松建設に行って、それから千葉の市役所におったんですが、これが警察予備隊を志願しまして、予備隊に入っただけです。

伊藤 それは軍人として、ですか。

小田村 軍人として、です。もともと軍になるであろうということで、本人も志願したわけです。だいたいあのとときは、予備隊というのはいずれ軍隊になるという感じが一般的だったのではないかと思います。

伊藤 あのとときに日米安保条約が結ばれるわけですが――。

小田村 これで米軍がいなくなつて、日本も本格的な独立国になれるかな、と思っていたんですが、安保条約に対してはちよつと残念だな、という感じはいたしましたけれどね。しかししょうがないでしょう、朝鮮で戦争をやっていましたから。

伊藤 そうですね。日米安保がなければ日本はどうやって自分を守っているかわからないですね。

小田村 当然軍備をつくらなければいけないわけですから。

伊藤 いくら大蔵も、それだけのお金を出すわけにはいかんでしょう。
小田村 そういうことなんですね。

■為替局資金課時代 (1) 外貨予算

伊藤 それで東京にお帰りになりまして、為替局になるわけですね。

小田村 為替局です。

伊藤 この為替局というのは外為委員会が占領終結後に、こういう形に変わったものでしょう？

小田村 そうです、占領が終わって、外為委員会が解散になりまして、大蔵省と通産省及び各省に権限が配分されるわけですね。まあ、大蔵省が中心になるわけです。

伊藤 資金課の課長補佐になられるわけですが、為替局の中で資金課というのはどういう役割でございますか。

小田村 資金課は、大まかにいって、資金係と外貨予算係の二つに分かれているんですね。資金関係のほうは、外国為替特別会計の管理、保有外貨の運用という二つが主な仕事です。それから予算のほうは、外貨予算です。これは、輸入や貿易外支払の枠を決めるもので、年度の前半期と後半期に年二回つくります。これを決定するのが閣僚審議会という組織で、首相（これは出席しません）、大蔵、農林、通産、運輸、外務の各大臣と日銀総裁で構成します。その閣僚審議会関係の事務をするのが一つ。この審議会に課長レベルの幹事会があって、その会議室は日銀を借りていました。それから貿易外関係は大蔵省が予算をつくって、割り当てをするというシステムなんですね。それから貿易関係については、だいたい通産省が中心で、物資によって農林省、運輸省等が入るわけです。その総括的なことを大蔵省で見るというシ

ステムでした。私は外貨予算の貿易関係を見ろということで、やらされたわけです。

伊藤 では通産と非常に深い関係があるわけですね。

小田村 そうです。通産省の通商局に予算課というのがありまして、島田「喜仁」さんというかたが課長でした。十四年「商工省入省」の方で、できる方でした。だいたい島田さんの課とタイアップしてつくるということでした。

もう一つ、外貨予算をつくる場合に、外貨がどれくらい使えるかというところで、国際収支を見なければいけないんですね。その国際収支の予測を、資金課で担当しておったわけです。正式には、職務上、官制上は総務課だったのですが、実質的には外貨予算の関係があるものですから、国際収支はもっぱら資金課のほうで見るという形でした。

伊藤 経済安定本部は、このときは企画庁になっていませんか。

武田 経済審議庁ですね。

伊藤 それとの関係はどうなるんですか。いまおっしゃった国際収支の見通しというのは。

小田村 それは政府としての公式の経済予測は、安本「経済安定本部」あるいは経済企画庁でつくるわけです。しかし大蔵省としての、つまり外貨予算の前提になるための国際収支見通しですから、それは政府としての公式の予測ではなくて、公表もしませんでしたから私のほうでやっておったということですね。国際収支見通しは主として通産省、日銀、大蔵省の三社で協議して決めていました。あのとき、企画庁もたしか加わっていたように思うんですが、何課がやっていたのかな。ただ省内では省議で説明もしましたし、大蔵省の政策立案上重要な資料になった筈です。外貨予算関係でもっぱら折衝したのは、通産省と農林省、運輸省の三つぐらいでした。

伊藤 外貨予算というのは、だいたいどういう感じなんですか。

小田村 割り当ての根拠です。物資ごとに予算が立っていたものと、自動承認制品目といって個別の枠を決めずに全体の総額だけ決めるものがありました。

伊藤 例えば綿花なら綿花、というようにですか。

小田村 ええ、綿花なら綿花ということで需給関係から積算するんですね。羊毛なら羊毛ですね。たしか屑鉄のようなものは、自動承認品目だったはずですね。だから割り当て予算と自動承認品目とがありまして、自動承認品目というのは承認という行政行為があることになってるんですが、実際は自由品目なんです。木材もたしか自由品目だったと思うんですね。自動承認品目に入れるものは、全体の枠を決めるわけです。

伊藤 枠を出たらどうなるんですか。

小田村 枠を出ると承認がもらえなくなります。ですから例えば二十八年の外貨危機のときには、枠をはみ出したので自動承認をストップするということがあったわけです。

伊藤 その枠の中では自由なんですか。

小田村 枠の中では自由です。承認申請すればいい。外国為替銀行のほうでそれを認めて、すぐにおろすという形ですね。

伊藤 それは業界で統制するわけですか。

小田村 業界で統制しません。まったくしません。だからまあ、自由化されていると見ていいんですね。ただ全体の枠があるということなんです。綿花の場合には、例えば輸出が増えて綿花の輸入が必要だということには、外貨予算の変更追加、ということをしていくわけです。この予算追加は割合に頻繁で、月に二、三回幹事会を開いていました。自動承認制の枠の追加もたびたびありました。

伊藤 だいたいそういう仕掛けは、外国為替管理委員会的时候可以にできているわけですね。

小田村 できているわけです。それを引き継いだわけです。

伊藤 人員も引き継いでいるわけですか。

小田村 人員も一部引き継ぎました。為替局では総務課、企画課、資金課、管理課、調査課、外債課とかいろいろありましたが、資金課と管理課がいちばん引き継いでいるのではないのでしょうか。管理課長は通産省からの出向者でしたし、天谷君なども管理課に補佐で来ていま

した。また資金課の資金係の補佐は農林省からの出向でした。

伊藤 あのと、外国為替管理委員会の委員長が木内信胤さんで、実は私も大学で木内さんの資料を全部お預かりしております。その中に、外国為替管理委員会の議事録が全部入っております。これからちよつと研究しようということでございます。

小田村 あれは誰がいいのかな、大蔵省の人間では、私の同期の川口「嘉一」君というのが委員会にいたと思うんですね。通産省からは、私の学校の同級生ですが、横山「康夫」君というのが行っております。そのへんに聞けば、誰がいいかわかると思います。

伊藤 外国為替管理委員会というのは、各省庁から「人が出て」行っているわけですね。

小田村 各省庁から行っていたんです。

伊藤 いちおう大蔵が一番強い影響力を持ったと思いますが、独立機関としてあるということで、大蔵としては自分の中に入れないということだったわけですね。

小田村 はい。各省から集まっていたんですが、実質的にはかなり日銀がやっていたのではないかと思います。「外国為替」管理委員会の事務所も日銀の中にあつたわけですから。

■為替局資金課時代 (2) 輸出と貿易外収支の予測

伊藤 外貨予算の場合、日本が外貨を増やしていく、外資導入もする、そうすると外貨の量が増えるわけですね。そういう全体の予算ですか。だいたい今度こういう借款が取れそうとか、こういう援助がありそうとかということとを予測する。収入の部はそういうことですか。

小田村 そうですね。だいたい輸出の予測と貿易外収入の予測。ただ借款や援助は国際収支の面では余り大きなものではありません。貿易外収入の中で大きいのはいわゆる特需でしたね。

武田 「特需は」貿易外収入になるわけですね。

小田村 ええ。当時は簡単に申しますとこういうことなんです。輸入と貿易外の支払いを合わせて、だいたい二十億ドル。輸出が十二億ドル。特需が八億ドル、という構造なんですね。

伊藤 じゃあ特需はかなり大きなウェイトを占めますね。

小田村 特需が大きいです。ですから当時の役人にとっては、一体いつになったら特需依存経済から脱却できるか、経済自立がいつになったら可能になるか、ということが一番の問題だったわけですね。

伊藤 その特需は、増えることはなくて、減る一方ですね。

小田村 ええ。ところが、米軍の円セールと言っていました、アメリカの軍人さんの個人消費がけっこう多かったんです。物資の調達、つまり軍需品の調達だけではなくて。

伊藤 それで外貨が入ってくるわけですね。

小田村 外貨が入ってくるわけです。

佐道 日本に駐留している軍人の消費ですね。

小田村 そうです。

佐道 そうすると、安保条約で米軍基地があることが経済的に意味があったんですね。

小田村 経済的にはプラスになっていたんです。だから、あのころ国際収支の表を僕らがつくって持っていくと、東条猛猪さんが「為替」局長だったんですが（拓銀の頭取になりました）、「ああ、日本という国は情けない国だな」とこぼしておられましたよ（笑い）。

武田 先生のお仕事は、各省庁との接触ということが主たることですか。

小田村 そうですね。それが主たる仕事です。あとは国際収支の見通しをつくって、上に説明するということですね。

伊藤 具体的な許認可の事業には、直接はタッチなさらなかったんですね。

小田村 それはしておりません。外貨予算は資金課でつくりますが、貿易外の支払関係の許認可は管理課でやっておりました。具体的には、日本銀行でやっているわけですけれどもね。

伊藤 例えば貿易商社が綿花を輸入したい、外貨の割り当てが欲しいという場合には――。

小田村 割り当ては通産省です。農林物資は農林省、自動車は運輸省だったと思います。外貨の支払いになりますと、外国為替公認銀行ですね。

伊藤 外貨を確保するということは、業者にとって非常に大きなことだったのではないかという気がするんですが。

小田村 そうですね。それは、割り当てさえもらっていけば、銀行のほうで自動的におろしてくれましたから。

伊藤 そうすると、ある種の利権の発生は考えられませんか。

小田村 考えられました。あの頃の利権のもとには砂糖とバナナだったかな。砂糖はキューバと台湾だったと思うんですが、これが割り当てでございまして、高く売れるわけです。

伊藤 輸入さえすればいいわけですからね。

小田村 バナナはもっぱら台湾だったと思うんですが。

伊藤 政治家の群がるところですね。

小田村 そういうことですね。

伊藤 そういう局面には、先生はおられないわけでしょう。

小田村 そうです。あと自動車もそうだったかもしれないね。外車ですね。

武田 製品を輸入するんですね。

小田村 製品の輸入です。国産車はまだほんの微々たるものでした。あれは昭和二十九年頃だったと思うんですが、これではいかん、ということ、外車の技術導入をしたんですね。イギリスとフランスから

オースチンが日産、ヒルマンがいすゞ、ルノーが日野。ここで技術導入をしまして、国産を始めたんです。

伊藤 ノックダウンというものですか。

小田村 ノックダウンから始まって、徐々に国産化していく。これがずいぶん出るようになりました。タクシーなんかはだいたい「国産

が」多かったと思います。

伊藤 これは外貨の節約になるわけですね。

小田村 なるわけです。

武田 外務省とのやりとりもあつたんですか。

小田村 外務省とは、私としてはあまり記憶がありませんね。

伊藤 外務省は経済局ですかね。

佐道 経済局が関わりますが、この当時は経済局にいた人は、大部分が通産から出向した人でしたからね。

小田村 貿易協定、通商協定になりますと、外務省になるわけです。ですから、面白いんですが、ポンド問題というのがありまして、二十

五、二十六、二十七年頃はポンドがどんどん溜まってくるわけです。ポンドはドルに交換できませんので、ポンドが溜まるばかりで、しよ

うがない、どうやって使ったらいいか、ということが一つ問題だったんです。

伊藤 チェンジできないんですか。

小田村 チェンジできなかったんです。まだ交換性がなかったんです。ところが、二十八年頃ですか、今度は逆にポンドが枯渇してまいりまして、イギリスとその間の交渉をやったことがあるんです。そういう交渉は外務省がやるわけですね。それと駆け引きをするのが、大蔵省の総務課でやっていたと思います。二十八年ぐらいだったと思いますね。

■為替局資金課時代 (3) オープン勘定と外貨危機

武田 『昭和財政史』を読んで質問の準備をさせていただいたんですが、「オープン勘定」という言葉がたくさん出て来ます。いろいろ読んでみたんですが、いまひとつわからないところがあるんですが。

小田村 それは要するに、外貨を決済しないで勘定だけつけるということです。

伊藤 その意味がよくわからないんです（笑い）。

武田 それがわからないんです。勘定だけつけて――。

小田村 ですからドル建てで外貨を――。例えば日本がインドネシアに輸出すれば、インドネシアのオープン勘定の債権として記帳しておくわけです。輸入するときには、今度はそこから引き落としていくという形にするわけです。

武田 そこから引き落とすんですか。外貨を使わなくてもいいわけですね。

小田村 使わないんです。それで外貨が一番貯まったのがインドネシアなんです。

伊藤 貯まったんですか。

小田村 貯まりました。石田「正」さんが東条さんの次に為替局長になられたんですが、石田さんが言っておられました、「おれはインドネシアのオープン債権はまったく心配していない」と。何を心配しているとおっしゃったか、南米（ブラジル）だったように思います。というのは、インドネシアは賠償交渉をやっていますからね（笑い）。

武田 わかりやすい理由ですね（笑い）。

伊藤 相殺すればいいわけですね。

小田村 相殺すればいいわけですね。実際、相殺したんです。

伊藤 いまのお話でわかりましたが、外為問題というのは賠償問題とも絡むんですね。どうも木内さんの文書を見ると、このあとどうも賠償問題に非常に深く関与しておられるので、あららっと思つたんですが。

小田村 なるほど。

武田 木内さんは為替局には全然出入りしていないんですか。

小田村 ほとんど出入りされませんでしたね。

伊藤 木内さん自身は外務省の人ですかね。

小田村 木内さんはもとと正金「横浜正金銀行」ですね。

伊藤 でも、あとで外務省の顧問になっておられるのではないかと思います。

小田村 そうかもしれませんね。

伊藤 そのへんから賠償問題にも関わっておられると思うんですが。

小田村 大蔵省で渉外部長をしていた期間は比較的短かったはずですが、二十一年の途中ぐらいいまでじゃないでしょうか。あとは渡辺武さんがやられましたからね。

伊藤 渡辺武さんは長いですね。木内さんとはあまりご接触はございませんでしたか。

小田村 木内さんとの接触は私はあまりございません。木内さんと直接話すようになったのは、木内さんが国民文化研究会の合宿においてになった頃からではないかと思うんですけれどね。あとは国語問題協議会ですね。

伊藤 そういうことをあとで熱心になさいましたからね。通産では相当お親しくなられた方が多いわけですか。いまのお話だと、仕事上は絶えずつき合っておられるわけですね。

小田村 そうですね。島田さんの次「の通産省通商局予算課長」が高島「節男」さんでしたか。この方は経済企画庁にも行かれましたが、非常な読書家で、独身だったんですね。仕事と勉強しかやっておられなかった。なかなか紳士で、立派な方でした。補佐は、はじめ越智さんという方で、その次は本田「早苗」さんでした。これも立派な方でした。通産省からは、資金課に見習いに来てもらっていたんです。それがはじめ小松君という方で、あとで亡くなりました。その次が平松君ですね。大分県の知事の平松「守彦」君です。彼は資金課に二年ぐらい来てくれました。

伊藤 そうするとお役所は省益云々といっていますが、意外と接点もあるわけですね。

小田村 そうなんです。それから拓大の私の前の総長の小村「康一」君というのは、やはり外務省から資金課にちよつと来ていたんです。資金課には運輸省と農林省からも補佐が来ていました。

伊藤 そうですか、外務省からも来ていたんですね。

小田村 それは資金係のほうでしたけれど。

伊藤 いろいろなところに接点があるんですね。

小田村 外為委員会の引継ぎだったということもあると思います。

伊藤 そうですね。昭和二十八年の外貨危機というお話が出ましたが、どういふことでそういうことになったんでしょうか。

小田村 一つは、日本のほうが多少インフレ気味になってきたんです。輸入がうんと増えまして、輸出が落ちてきたわけですね。それから、もう一つの大きな要因は、二十八年が大凶作だったんです。それでコメをあつちこつちから掻き集めて輸入したわけです。

伊藤 いまは考えられないことですね（笑い）。

小田村 そういふことで、国際収支がガクンと悪くなりまして、自動承認制を一時ストップするとか、外貨予算をギョツと締める。締めれば締めるほど物価が上がってしまうわけですけれどね。

伊藤 これはそんなに長くは続かなかったんですね。

小田村 ええ、このときに何をしましたかといいますと、当時の資金課長が佐々木庸一さんという方で、これは亡くなられたんですが、この方が「外貨予算、外貨予算というけれど、金融を締めなければ駄目じゃないか」ということで、金融の引き締めを省内に働きかけて日銀にやってもらった。それから、これは本当は邪道なんです。外貨予算の外貨を申請するときに預託金を積ませるというのをやりました。要するに思惑的な輸入を防ぐために、一％か二％か忘れましたが、預託金の率を引き上げて、それを積ませる。それまでは証書をもってくればよかったんですが、そうではなくて、現ナマを積み、ということにしました。そういうことをやって、輸入を抑えたわけです。

それからもう一つは、前にお話ししました石野「信一」さんが、官房の調査部長をやっていました。その頃は調査部は理財局から分かれて官房のほうにいらっていたんですが、調査部長をやっておられまして、国際収支の状況を聞かれて、「わかった、じゃあ二十九年度の予算は徹底的に引き締めさせよう」と言われました。それが一兆円予算なんです。

伊藤 要するにインフレを抑えれば、物価の上昇がなくなりますから、

輸出が増える。そして輸入を抑えればバランスが取れるということですね。

小田村 そういうことですね。その頃、下村治さんが病氣から回復されまして、官房付きとして調査部におられたんですね。だから日銀政策委員になれる前だったと思うんです。その方が、たしか二十八年頃だったか、「三六〇円レートを死守せよ」という論文を書かれまして、省内に配られたんです。これは要するに、「いま特需依存とかいつているけれど、これは特需が突如として上から降ってきたのじゃないんだ。そうじゃなくて、二十四年頃、朝鮮事変が始まる前に、日本の国際収支はほぼバランスしかけてきたんだ。輸出も伸びていた。そこに特需がガンと来たものだから、輸入がうんと増えた。したがって、日本の貿易構造、経済構造というのは決して低いものではない。これなら充分自立していけるんだ。だから無用な為替の切り下げはやるな」という意見でした。大変説得力があるご意見でした。

武田 下村さんはカリスマ的な魅力がある方だ、というご印象ですか。小田村 そうですね。本当に素晴らしい方ですね。

■アメリカ行き、IMFコンサルテーション

伊藤 ちょっと先に進みたいと思いますが、昭和三十年に先生はアメリカに行かれますね。これはIMF加盟ということですか。

小田村 実はIMFにつきましては、為替局ができて、IMFに加入いたしましたときに、IMFに大蔵省から派遣したんです。湯本武雄さんが理事でおいでになって、事務のほうで、尾崎「英二」さんという十六年「入省」の方が資金課から行っておられました。その方が二十九年に帰って来られるんですね。そのあと、「小田村、今度はおまえを行かせることができるかもしれんよ」と課長に言われていたんです。しかし日本銀行が、「今度はこちらから行かせる」ということで、日銀と取り合いになって、交替で行くことになって、そのときには日

銀から行くことになったんです。

IMFのコンサルテーションというのは、それまで日本に来ていたんですが、三十年に初めて向こうでやることになったんですね。それで、「おまえ、今度行け」ということで、随行して行くことになりました。

伊藤 随行なんですか。

小田村 随行です。メンバーは、団長が主計局次長の宮川新一郎さんという方です。それから主計局で外務省を担当しておられた谷川「宏」さんが行かれて、大使館は渡辺武さんが公使で、上田克郎さんが一等書記官でした。IMFでは湯本さんが理事で、十八年組の堀太郎さんが職員でおられました。派遣団の方はあと、通産省からは高島さん、経済企画庁からは通産省から行かれていた白石国彦さん、この方はお父上の跡を継がれて名古屋の倉庫会社の社長にされました。あと日銀ですね。全部で十人足らずだったかと思うんですが。

伊藤 どれぐらいの期間、おやりになるんですか。

小田村 コンサルテーションそれ自体は一週間ぐらいワシントンでございまして、あとは自由なんです。ひと月ぐらいいいよ、ということでした。

武田 先生は初めてアメリカに行かれたんですね。

小田村 初めて行きました。まだジェットではありませんから、ウェーキーで給油して、ハワイでいったん降りました。ハワイでは数時間休息したと思うんですが、それからサンフランシスコに行きました。サンフランシスコで一晩か二晩泊まって、それから大陸横断の飛行機でワシントンに行ったと思います。

伊藤 初めてのアメリカのご印象はいかがでしたか。

小田村 やっぱ大きいですね。それから何でも豊かでしたね。

伊藤 とにかく「日本との」格差が大き過ぎるでしょう。

小田村 そうですね。

佐道 戦後のアメリカが輝いていた時代ですね。

伊藤 帰って来られたときに、向こうの状況を見たあとで日本に着い

たら――。

小田村 向こうで絵ハガキを見たらビルが林立しているんですね。ところが日本に帰ってきて、東京駅に新日鉄のビルができていましたね、東京にもずいぶんビルが建っているな、という感じがしましたね（笑い）。

伊藤 やはり朝鮮戦争のあと、非常に東京が大きく変わった時期なんですね。

小田村 そうですね。それからもう一つ、コンサルテーションで私気がついたんですが、向こうはアメリカ人だけではなくて、いろいろな国の人が入っているわけです。それで、「日本はビッグ・カントリーなんだ。だからこれから大いに伸びるはずだ」ということを、向こうは言ったんです。その「ビッグ・カントリー」という言葉が非常に印象に残りました。つまり戦後、日本は駄目だ、駄目だということや、島国で小さいとか、スイスみたいな国だとか、そういうことが一般的でしたでしょう。しかし世界的に見ると、人口からしても、ビッグ・カントリーだというふうに世界が認識しているということが非常に印象に残りました。

伊藤 このコンサルテーションというのは具体的にどういう形で進められるわけですか。

小田村 だいたい日本側が現状を説明をしまして、それに対して向こうから質問がある。経済情勢、生産、財政、金融、雇用、そういう経済全般の問題を説明して、国際収支の動向を説明して、それに対して向こうからいろいろ質問があつて、それに答えるという感じでした。詳しいことはあまり覚えていないんですが。

伊藤 向こう側はIMFの――。

小田村 IMFのスタッフです。

伊藤 理事クラスではなくて、スタッフですか。

小田村 理事クラスが一人ぐらいいたかもしれませんが。

武田 先生は何か特別に担当されていたわけですか。

小田村 していません。

伊藤 じゃあ少し気楽なことは気楽なんですね。

小田村 ええ、気楽なんです。

伊藤 本来行くべきところに行かせられなくなったから。

小田村 それからニューヨークに行きました。ニューヨークに総領事館があつて、そこに大蔵省からも行っていますから。ただ財務関係は総領事館とは別の日銀支店と同じ場所に事務所があつて、大島「寛一」さんが一等書記官としておられました。あと若い方で吉本「宏」君が書記官で来ていました。そこでいろいろお話を伺いました。邦銀の方のお話しも聞かせて貰いました。あとはもう自由なんですね。ですから、人によつてナイアガラに行ったり、あちこち回られました。私はボストンにちよつと行つて、ボストンの美術館とハーバード大学を見てきました。それからあとは、シカゴに友人がおつたものから、シカゴに行つてその友人に会いました。一番上の兄が亡くなつたあとだったんですが、昔GEに派遣されていたときの兄のお友達のマツキンツシュさんというかたがおられて、そこに一晚泊していたできました。それからニューオーリンズに行つて、ダラスに行つて、ロスへ行つて、それで帰ってきたんです。

武田 いろいろ回られましたね。

小田村 自由に回らせてもらいました。主に東銀の方のお世話になりました。

伊藤 そのとき東海岸から西海岸への移動は何ですか。

小田村 移動は全部飛行機ですね。

武田 南部も見られたんですね。

小田村 その前に、同期生の後藤「甫」君が専売公社から葉たばこの買付でワシントンに駐在していましたので、彼に案内してもらつてヴァージニアの田園地帯を通つてウィリアムズバーグを見学しました。建国時代の陳列もあり、アメリカは短いけれども歴史を大切にしている国だということを実感しました。南部も見ました。シカゴで友達と歩いていましたら、やっぱりゴロツキみたいなのがいるんですね。ああいうのに係わりあいになつては駄目だと友達が言っていました。

伊藤 でもアメリカの一番いい時代ですから。いままたアメリカはい時代ですけれど。

小田村 そうですね。ワシントンもニューヨークもきれいでしたね。それで帰ってきましたら、すっかり日本が、ひと月のあいだに景気がよくなっているんですね。

武田 アメリカにはいつごろ行かれたんですか。それがちよつとわからなかったんですね。

小田村 三十年の八月です。暑いときでしたから。これに書いてあると思いますが『大蔵省人名録』を調べる、——ありませんね。

武田 時期としては重光「葵」訪米の頃ですね。

伊藤 このころは、身分としてはずっと為替局の資金課の課長補佐を続けておられるんですね。

小田村 そうです。おかしいな、六月になっているな。

武田 六月後半ですと、わりと暑いかもしれませんね。

小田村 書いてありませんが、八月頃だったように思います。

■神武景気の始まり

小田村 アメリカから帰ってきたら、三十年は二十八年と段違いの大豊作だったんです。ですから農村も景気がよくなるし、国際収支も輸出が大幅に伸びてグンとよくなりまして、いわゆる神武景気の始まりだったんですね。

伊藤 日本の経済はいつも国際収支の壁でガクンとなると言われておりましたが、まだそういう状態はしばらく続くわけですね。

アメリカで日本は大国だからと言われたというお話がございました。たしかにこの時点で、日本かなり復興して、『経済白書』で「もはや戦後ではない」と言われたわけですが、それは実感としては、どうだったんでしょうか。

小田村 実感として、三十年に帰ってきて、すっかり景気がよくなっ

て明るくなっていました。「もはや戦後ではない」というのは三十一年の『経済白書』ですが、三十年の実感だったと思います。

伊藤 ただ、前に経済企画庁の宮崎勇さんのお話を伺ったときに、「『もはや戦後ではない』というのは、元来は、アメリカの援助ではなくて自分で立つていかなくてはならないのだ、というむしろ厳しい状況を言い表したはずだ」とおっしゃったんですが、そういう面もあったんでしょうか。

小田村 宮崎さんが起草したんでしょうから、起草者はそういう趣旨だったかもしれませんが、実感としては、先ほど申し上げましたいわゆる特需依存経済からほぼ脱却しつつあったわけです。そういう意味で、完全に日本も自立経済になったという感じがありました。それで思い出すのですが、前に申し上げた下村治さんが、前の年に資金課の部屋に來られて「国際収支の危機は終わった。これからはどんどん良くなるから、金融は緩和すべきだ」と言われていたことがあります。実に先見の鋭い方でした。

伊藤 この時点で輸出はどういうふうに変わりますか。

小田村 このころは、アメリカに行きましたら、一ドルブラウスが大評判になっていました。これは向こうで聞いたんですが、一ドルブラウスがなぜ問題かという点、値段が安いことは当然なんですが、質が非常に良いということです。それで、これは大変だということで、向こうからいろいろ批判されたということでした。

それから、通産省から行っておられた方が、「アメリカ人にこういうものを見せたいんだ。アメリカの綿花畑をテレビで見せて、これが日本に大量に輸入されているんだということをPRしたい」と言っておられました。ですからあのころ大きく伸びたのは繊維関係だと思えますね。

伊藤 まだ機械工業ではないということですね。

小田村 機械工業ではないですね。機械工業としては、造船ですね。

伊藤 船はまた外貨の問題と非常に関わってきますね。

小田村 そうなんです。船がダンピングというか、輸出船の外貨を二

重為替レートみたいに使おうような話もあったんですが、船は十分競争力がありました。

伊藤 結局、貿易外収支の中で、運賃の問題が出てくるわけですね。

小田村 運賃は出て来ますね。この貿易外収支はずっと赤字でした。船は輸出でもっぱら稼ぎましたね。

伊藤 つくったときは日本の商船団を再建するということが謳い文句だったと思いますが。

小田村 でも、もっぱら輸出船が多かったと思いますね。郵船会社はまだそこまで力がなかったと思いますね。

伊藤 やはり大国だと言われて、だいたいそんなものなんだな、という感じでございましたか。

小田村 本当にそのつもりでやらなければいけない、という感じがいたしましたね。

伊藤 ちょうどこの昭和三十年というのは、保守合同と社会党の統一がございました。そういう外側のことはいかがでしょうか。

小田村 鳩山内閣が成立したのが昭和二十九年の暮れですね。大蔵大臣が一萬田「尚登」さんになって、一萬田さんは評判としてはそれほどでもなかったんですが、閣僚審議会なんかで掻き回していたのは河野さんですよ。

伊藤 河野一郎さん「農林大臣」ですね。

小田村 あの方が、例えばコメの自由化問題だったと思いますが、「とにかくそう簡単なものじゃないんだ」ということをさかんに言っていましたね（笑い）。

佐道 ちよつと戻るんですが、まだ吉田内閣の時代に、アメリカのMSAの援助の問題がありますね。

小田村 MSAは昭和二十九年ですね。あれは私がいたときに、外貨の特別収入として承りました。MSAという援助がある、中味はあまり詳しく知りません。むしろMSAの問題は、防衛庁に行つてから、「ああ、あのときのあれはこうだったのか」と思ったわけです（笑い）。

佐道 それでは、そのときの関連でぜひ詳しく伺わせていただきたいと思っています。

伊藤 昭和三十年あたりに貿易黒字ができて、外貨予算も黒字になるということになりますね。

小田村 はい、ですからだんだん自動承認品目を増やしていったわけです。ただそれが昭和三十二年だったか、スエズ動乱のときに、今度は思惑輸入がドカンと増えて、一時ストップしたことがあるんです。

伊藤 また外貨の天井ぶつかりですね。

小田村 ちよつと大変でしたが、これは比較的短くして終わりましたので、ホツとしたんですが。

伊藤 先ほどのお話でポンドが貯まったとか、ドルが貯まったというお話がございましたが、これはどうなさるんですか。運用するんですか。

小田村 運用するわけです。だいたい外貨預金が中心ですが、ドルはアメリカの債券を買うわけですね。短期証券ですから、いつでも現金になります。

伊藤 そういうことは日銀がやるわけですか。

小田村 これは外為会計ですから、大蔵省がやります。大蔵省が日銀に委任しているわけです。

伊藤 實際行為だけ日銀がやるわけですか。

小田村 實際行為を日銀がやるんです。

伊藤 決めるのは大蔵省ですか。

小田村 決めるのは大蔵省です。

伊藤 それは先生がいらっしゃった資金課でおやりになるわけですか。小田村 ええ。私はもう一度資金課に戻りましたが、そのときは外貨の預金先をどこにするかとか、証券をどのくらい買うかということを、資金課と日銀で相談してやっていました。

伊藤 黒字がかなりあって、それを外貨債にして、利子が付けばもつと貯まるということですね。

小田村 そういうことです。だから金（きん）にしてしまうと、何も

儲からない。

伊藤 しかし不安定なところに投資したらアウトになりますね。

小田村 そうですね。

■防衛庁出向まで

伊藤 だいたい昭和三十年までで、翌年は防衛庁に行かれますので、防衛庁に行かれる前まで、ということでは今日は準備をしました。

小田村 三十一年に出るんですね。スエズ動乱は三十二年ですね。

武田 三十二年です。三十二年にも外貨危機がありましたね。

小田村 そうですね、そのときは私はもういなかったわけですか。じやあ「スエズ動乱のときに自動承認をストップしたという先ほどの話は」伝え聞いたんでしょう。

伊藤 防衛庁に行かれても、別段大蔵と切れるわけではないんですね。

小田村 出向ですから、切れるわけではないんですね。

伊藤 大蔵のどこかに所属している、というわけではないんですね。

小田村 そうではありません。官房付きになって向こうに出向するということですよ。

伊藤 防衛庁に行け、という内示があるわけですか。

小田村 そうです。三十一年だったかな、霞ヶ関の建物が返還になり

まして、四谷の小学校から移ったんですね。

武田 そうですか、それまでずっと四谷なんですか。

小田村 そうなんです。

伊藤 独立してからもですか。

小田村 独立してからもそうです。

伊藤 じゃあ独立してからは何に使っていたんですね。

小田村 まだいたんです。だから三十年か三十一年です、引っ越したのは。

武田 そんなときまでいたんですか。

佐道 占領が終わって何をやっていたんでしょうね。

伊藤 しかしもうGHQはないわけですね。

小田村 ないんですが、まだ残っていたんじゃないでしょうか。あるいは空いたところの補修とかをしていたのかもしれないですね。

伊藤 あの大蔵省の建物は立派なものです。

小田村 ただ外壁ができていなかったんですね。あれは昭和十五年にやる予定だったものが戦争になってしまったものですからストップして、外壁がないままだったんです。

伊藤 うちっ放しみたいな感じだったんですか。

小田村 うちっ放しだったんです。そのままずっとしまして、それを直して外壁をつくりしたのは四十年頃です。

伊藤 中も天井は高いし、堂々たる建物ですね。

小田村 昔の建物ですからね。

伊藤 いかにもコンクリートの壁は厚そうですしね。東大の建物と同じで、コンクリートで固めているという感じですね。

小田村 資金課におりましたときに、海堀洋平さんという方が防衛庁から資金課に来られたんです。もともと大蔵省ですけれども、それで海堀さんが隣におられたものですから、いろいろ防衛庁の話を聞かせてもらったんです。それで、私も一度行ってみたいと思ったんです（笑い）。

佐道 希望みたいなものを出されたんですか。

小田村 課長には、行かせてくれと頼みました。

伊藤 じゃあ念願だったんですね。いろいろお話を聞いたというのは、どういうお話を聞かれたわけですか。

小田村 陸海空それぞれの話ですね。空はできたばかりでしたけれどもね。彼は行って、「陸というのは大したものだ」とほめていました。それは例えば北海道に行けといったときに、思い切って全部動かしただけなんです。実際にはじめに北海道に行った人たちの話を聞きますと、本当に道も家もないようなところに行ったということですよ。もちろん米軍の宿舎はあったわけですけどね。「そういうこと

は、陸というのは思い切ったことをする」と言っておられました。

こんなことも言っていました。「敵から何かあったときに、戦争しても降伏してもいい。どっちでもいいんだ。ただし、それを考える余裕だけは持たなくてはいけない。どうするか。そのための防備というのは、絶対に必要なんだ」ということを海堀さんは言っていましたね。伊藤 ということは、日本の自力だけではよう守り切らんということですね。

小田村 いや自力もあるんですが、それよりも、まだあの頃は非武装論が強かったですから、それでは駄目なんだ、ということでした。海堀さんというのはたしか高文がトップだったと思うんですが、酒が強くて、私もよく一緒に酒を飲んだものですから、いろいろ教えてもらいまして、面白かったですよ。

伊藤 だいたい防衛庁というのはもともと警察予備隊ですから、昔の内務官僚系統の人が非常に多かったように思いますが、大蔵省からも最初からかなり行っていますね。

小田村 最初から行っています。あのときは、窪谷さんのあと「石原周夫氏をはさんで」、北島武雄さんが経理局長で行っていました。海堀さんは初め経理局におって、それから防衛局ですね。だから海原「治」さんの下にいたんです。海原さんのところに、一緒に行ったことがあります。正月に、海堀さんが「海原のところに一回行こう」というので。

佐道 それは先生がまだ大蔵省の時代ですか。

小田村 どっちだったか、ちよつと覚えていないんですけれどね。大蔵省の時代だったか、あるいは経理局にいた時だったかもしれませんね。

伊藤 どこに行かれたんですか。

小田村 お宅です。東山です。都立大学の裏の。

伊藤 われわれが行ったところだ（笑い）。まだ建てられたばかりの頃かな。

小田村 そうかもしれませんね。

武田 先生のように、防衛庁に行きたいという大蔵省の方は多いんですね。

小田村 うくん、いるかもしれませんよ。

伊藤 先生も経理局だけではなくて、防衛局に行かれますね。

小田村 ええ。

伊藤 何回か出入りなさっているんじゃないですか。

小田村 防衛庁は二回ですね。

佐道 防衛局と、経理局長ですね。

小田村 そうです。

伊藤 最初は経理局ですね。

小田村 ええ、経理局に半年です。

伊藤 では今度はそのところを中心に伺わせていただきます。

小田村 わかりました。そうすると、海原さんのオーラル・ヒストリーをちよつと読まないといかんかもしれませんね。

伊藤 先生は海原さんとはどうなんですか。

小田村 そうですね、だいぶ因縁が——（笑い）。

武田 一回では終わらないかもしれませんがね。

伊藤 海原さんについては、いろいろな人がいろいろなことをおっしゃいますね。非常によかったんだけれど、あとで決裂したとか。

佐道 最初から憎さも憎しという方もいて、いろいろな方がいます。

伊藤 非常に個性的な方ですね。われわれがインタビューをやっているのもそう思いましたけれど。

小田村 個性的ですね。

伊藤 面白い方でもあるんですが。

佐道 今回は防衛庁時代の話を中心にお願いします。

伊藤 また質問要項をお送りいたしますので、よろしくお願いいたします。どうもありがとうございます。

〈以上〉

小田村 四郎

オーラルヒストリー

第 4 回

防衛庁経理局～防衛局時代 I（1956～1959）

【2003年6月4日（水）14:00～16:00】

（於：政策研究プロジェクトセンター）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

記録・編集：丹羽 清隆

第4回質問項目

1. 先生は1956年9月、防衛庁経理局会計課に移られます。防衛庁は先生ご自身が希望されたという前回のお話でしたが、異動の経緯についてもう少し詳しくお願いします。
2. 先生が移られたとき、経理局長は大蔵省から来られた北島武雄氏、会計課長は岩男一氏でした。両氏の印象や、経理局での他の同僚の方々についてお願いします。
3. 56年（昭和31年）9月に移られたということは、57年度（昭和32年度）予算のお仕事をされたのだと思いますが、当時担当されたのはどういったことでしょうか。
4. 先生が防衛庁に移られた時期は、12月に石橋内閣が誕生、防衛庁長官は当初石橋が兼務して翌年2月に小滝彬が就任。そして同じ2月には石橋内閣が総辞職して岸内閣が誕生するというあわただしい政局でした。こういった政局をどのようにご覧になっておられましたか。
5. このときに限りませんが、防衛庁長官は大体一年、場合によって数ヶ月で交代します。防衛庁に勤務されたご経験から、防衛庁長官というのは防衛庁にとって、あるいは防衛政策を作成する上でどのような存在であると考えればよいのでしょうか。
6. 鳩山内閣の緊縮財政以来、防衛予算は日米関係上も大きな問題となっていました。この問題について防衛庁はどのような考え方だったのでしょうか。
7. 1957年3月に、防衛局第一課に異動されます。その経緯をお聞かせ下さい。海堀洋平氏が、防衛計画策定段階から見る必要があつて経理局から防衛局に移ったと回想しておられますが、同様の問題でしょうか。

8. 先生が異動されたすぐ後、その後の防衛政策作成に大きな影響を与えた「国防の基本方針」（5月20日）が決定されています。これは海原氏が中心となったといわれていますが、「国防の基本方針」策定に先生は関係されたのでしょうか。
9. 上の質問とも関係しますが、岸首相が訪米に当たって策定を急がせた「第一次防衛力整備計画」も6月14日に決定されています。「第一次防衛力整備計画」には予算が関係しますので、先生も関係されたのではと思いますがいかがですか。
10. 先生が防衛一課に異動された時の課長は海原氏でした。海原課長の下での防衛一課の雰囲気、あるいは海原課長の仕事の進め方などについてお願いします。また、海原氏はその後在米大使館勤務となり、高橋幹夫氏に課長は交代します。高橋課長についてもお願いします。
11. 当時、統合幕僚会議の権限強化問題が再浮上し、麻生茂課長の下で検討が進められていました。すでに防衛庁における内局・制服組の関係がいろいろと議論されていたわけですが、この統幕権限強化問題についてご記憶はございますか。
12. 「第一次防衛力整備計画」は三年間の計画でしたので、早速その後の計画策定が必要になります。これがやがていわゆる「赤城構想」というものになっていくわけですが、先生はこれについてはどういった問題を担当されたのでしょうか。
13. 「赤城構想」については、制服組の意見をかなり取り入れた計画であるという評価があります。この点についてのご意見をお聞かせ下さい。
14. 先生は59年11月に大蔵省に戻られます。その後、防衛庁では、海原氏が防衛局にもどって「赤城構想」をつぶすべく奔走します。この件については当時、先生はどのように見ておられたのでしょうか。

■「補」大蔵省為替局長・資金課長

伊藤 始めさせていただいてよろしいでしょうか。

小田村 その前に、ちょっと前回のところで補充をさせていただいたと思います。まず、為替局に行きましたときの局長、課長の話を全然しなかったものですか、それを補足しておきたいと思います。

為替局ができましたとき「昭和二十七年八月」に、初代「局長」に就任されたのが東条猛猪さんです。東条さんはもと主計畑の出身です。たしか主計局次長から為替局長になられたと思います。この方は土佐のご出身で、しかし非常にすっきりした、いい方でしたね。専門家ではないんですが、非常に気持ちのいい方で、あとで銀行局長になられて、それから北拓「北海道拓殖銀行」の頭取になられました。その頃は「拓銀も」よかったんですけれどね。

伊藤 そうですね。あとが大変でしたけれど。

小田村 私はお宅に伺ったことがあるんですが、お子さまが四、五人おられたと思うんですね。ですから障子や襖なんかがボロボコになっていました（笑い）。非常に生活も質素で、立派な方でした。

「東条氏は為替局長を」二年ほどされて、その次は石田正さんです。この方は私が見習いの時にお仕えた方で、為替の専門家です。官房長から替わられたんですが、本当に立派な方で、たしか奥様が長州の萩の玉木文之進の系統の方です。ですからお宅も松陰神社の近くでした。あの辺はだいたい長州藩の方が多かったようです。この方もたいへん立派な方でした。この方は、国体学会を創始されました里見岸雄さんの父の田中智学さん、「国柱会」を作った方で、日蓮宗の方ですが、その人からいろいろ教えを受けたと言っておられました。そういう点で、漢学等にも理解があったんですね。

伊藤 いちおう日蓮宗だったんですね。

小田村 それはよくわかりません。この方も銀行局長になられて、それから次官になりましたね。そのあと、私が防衛庁に行くときの局長

がサカイトシヒコさんです。

伊藤 サカイトシヒコですか。昔の社会主義者「堺利彦」と同じだな。小田村 いや、酒井俊彦ですから（笑い）。この方は非常に温厚な方で、私は最後だった「防衛庁にすぐ行った」ものですから、それほど印象には残っておりません。

東条さんが局長の時に、賀屋正雄さんが財務調査官でした。財務調査官というのは次長役です。これは非常に温厚な方で、賀屋興宣さんの息子さん、養子になりますかね。奥様がたしか「興宣さんの」お嬢さんですね。

それから課長は、資金課が外為委員会から分かれたときが渡辺誠さんという方でした。この方は、大蔵省から外為委員会に行っていて、また戻って来られた方です。ですから貿易・為替は専門なんです。のちに為替局長にもなられるんですが、資金課長になってから半年ぐらいで、前から悪かったんでしょうが、胸を痛めました。

伊藤 結核ですか。

小田村 結核です。当時はなかなか結核は治りませんでした。ペニシリンかストマイで治られたのですが、保険というのは有難いな、と言っておられました。あと、佐々木庸一さんという方が来られます。これは非常に兄弟が多くて、九人兄弟でしたか、長男なんです。ご両親を亡くしておられたものですから、だいたい自分一人で面倒を見てこられたらしくて、結婚も遅くなりまして、資金課長になられたときはまだ独身でした。資金課長になってから結婚されました。なかなか豪放な方で、気持ちのいい方でしたね。麻雀も好きでした。佐々木さんは二年ぐらいやられて、あとで総務課長になったかな、いずれ関税局長になって、それからたしか住宅公団の副総裁になられています。この方も次官候補の一人と言われていたわけですね。

それから片桐「良雄」さんです。このあいだ亡くなったんですが、この方は奥様が前田多聞さんのお嬢さんでしたか、非常にざつくばらんで、明るい方なんです。戦前も米国勤務で交換船で帰られたと思うんですが、あとでアメリカ駐在の財務官になるわけですね。私がIM

Fに行つたときは大島寛一さんだったんですが、そのあとが「渡辺誠氏を挟んで」片桐さんです。資金課長が終わってから行かれたんですね。そういうことで国際的な感覚の非常に強い方でした。ソニーがまだ東京通信工業といっていたときに、「自分の友人が新しい事業を始めて、これは将来伸びるんだ、だから君らも日本の産業を決して馬鹿にしてはいけないぞ」というようなことを言っておられましたね。

伊藤 先見の明がありますね。

小田村 先見の明がありましたね。それがだいたい私がお仕えた方々です。

伊藤 上司には恵まれたということですね。

小田村 たいへん恵まれたと思います。

■「補」通貨別外貨予算と外貨預託

小田村 もう一つ、外貨予算は通貨別になっていたんです。前回申し上げるのを忘れました。ドルとポンドとオープン勘定ということになっていました。

伊藤 国際通貨としては、ポンドと――。

小田村 国際通貨としては、ドルとポンドなんですね。しかしドルとポンドは交換性がありません。ドルは何にでも交換できますが、ポンドはドルには交換できなかったんです。ですからそれは別々になっていました。オープン勘定はまた国別になっていました。

伊藤 それは紙の上の話なんですね。

小田村 紙の上の話です。

伊藤 それは通貨としては何になっているわけですか。

小田村 通貨はドル建てです。ドル建てで勘定をつけているんですね。伊藤 黒字になったからといって、別に外貨があるわけではないんですね。

小田村 本当はドルで決済しなくてはいけないわけです。それがだん

だん貯まっちゃうわけですね。インドネシアなんかはどんどん貯まったわけです。石田さんはしかし、「インドネシアは心配しない」と言っていました（笑い）。

伊藤 フィリピンとかビルマとかベトナムとか、全部あとで賠償で――。

小田村 そうですね、賠償で。フィリピンもそうだったんです。オープン勘定で債権が貯まってしまいました。ビルマはポンド現金決済でした。

伊藤 南米は？

小田村 たしか石田さんは南米を心配していましたね。

伊藤 ときどき破産のような状態になりますからね（笑い）。

小田村 ポンドが足りなくなったときは、通貨別になっていますから、そうかといって、ドルの外貨保有はあるんですが、ドルをポンドに交換することを「アウトライト」というんですが、それはもつたない、なるべく一時しのぎをやる、ということ、IMFから借り入れをしたり――。

伊藤 それはポンドで借りるわけですか。

小田村 ポンドで借りるわけです。それからイングランド銀行から借りるとか、そんな交渉を総務課長がやっておりましたね。

伊藤 あとでポンドで返せばいいわけですね。

小田村 そういうことなんです。だけど結局足りなくて、ドルを売ったことがあります。アウトライトというんですけれどね。以上が外貨予算関係です。

それから外貨預託ですね。外貨を何に使っていたかということです。結局金（きん）にはほとんど使わないで、米国債、短期証券を買っていたんです。そのほかに日銀が持っているものと、大蔵省で持っているものがある。大蔵省の特別会計で持っているものが一番大きいわけですが、その相当部分を外国為替銀行に預託していたわけです。

特に東京銀行、外国為替専門銀行ができました。東京銀行は正金「横浜正金銀行」から一般銀行になって、一般預金も取り扱っていたわけ

ですが、それをやめまして、その部分は原則としてやらないということで、外国為替専門銀行になったわけです。その代わり、専門銀行に対しては、預託面で大蔵省が面倒を見るということだったんです。ですから、東銀に相当額を預託しました。

伊藤 東銀はそれを運用するわけですか。

小田村 運用するわけです。ですから外貨準備がこれだけあるといっても、実際には各為替銀行が使ってしまっているわけです(笑)。政府の預金としてはあるんですけれどね。それを木内「信胤」さんがあとで発見したというわけです。「外貨準備がこれだけあるというから安心していただけ、まったく騙された」なんていうことをお書きになったことがあります。

伊藤 つまり紙の上の計算ということですね。いや、おかしい(笑い)。

■「補」「偉大なる大蔵省の先生」香川鉄蔵氏

小田村 それからもう一つ、閣僚審議会の各省の方で、農林省は経済課長だったと思うんですが、中西一郎さんでした。これはなかなか大した人物でした。あとで国会に出られて総理府総務長官をやられていますね。

それが役所関係の方ですが、あと、その頃官房調査課に香川鉄蔵さんという方がおられたんです。これが香川さんの追悼録なんです

「『香川鉄蔵』と題された追悼録(書籍)を示す」。大変な学者でして、東大の哲学科を出られたんです。和辻「哲郎」さんとか天野「貞祐」さんと一緒に一緒だったみたいですね。一高から東大に行かれました。哲学科で何か気に入らないことがあって、中途退学されたんですね。

それで、大蔵省の嘱託になりました。そういう学者ですから、若い人たちをよく鍛えてくれたんです。ですから、石原周夫さんとか原純夫さん、石野信一さん、こういう方々は、見習いの時代に香川さんに

ずいぶん鍛えられたんですね。そういうことで、石野さんなんかも非常に香川先生を慕っておられて、それがずっと受け継がれているわけです。石野さんは、「偉大なる大蔵省の先生」ということで、「文藝春秋」に出されています。

伊藤 「追悼録の目次を見て」錚々たる顔ぶれが並んでいるじゃないですか。

佐道、武田 すごいですね。

伊藤 天野貞祐さんが書いている。岩動さんもいる。海堀「洋平」さんはこの前名前が出ましたね。河野一之さんも書いている。これはお貸しいただけますか。

小田村 どうぞ、お持ちください。この「香川鉄蔵」先生が理財局から官房に移りましたから、官房の調査部にときどき来ておられて、いろいろお話を伺いました。この方はドイツ哲学が専門なんです、スウェーデン語をやらせて、スウェーデンのノーベル賞作家、セルマ・ラーゲルレーヴの『ニルスの不思議な旅』を翻訳されました。スウェーデンのことに非常にお詳しいわけです。この本はニルスの旅の中で、スウェーデンの地理、国土の自然を子供達に覚えさせ、祖国に対する愛情を育てている、ということも言っておられました。

大蔵省の嘱託をお辞めになってから、たしか石原さんが防衛庁の経理局長をしていてときに、もったいないからといって、防衛庁の嘱託に使っていただいて、一所懸命スウェーデンの防衛関係の論文を翻訳して経理局長に出しておられたんですね。あまり活用されなかったようなんですが、ですからスウェーデンの軍備というものについては非常に関心がおありになった。

私らの若いときに、この先生にお近づきしていただいて、家に来いと言われるわけですね。私の一期下で亘理彰君というのがいます。これは防衛次官になりますが、亘理君とよく立川のお宅に伺いました。お宅に伺うと、夜まで離さないんです。ずっとお話をしてくださって、夜必ず飯を食っていけと言われました。昼過ぎから夜九時頃まで、ときどきおじやましてはお話を伺いました。そういうことで、この方も

大変防衛問題に関心がありで、香川先生から、もっとしつかりしなければいかん、というようなことを伺っていました。この先生は海空重視で、「陸の十八万というのは多すぎる」ということを常におっしゃっておられました。この先生に教えていただいたことが非常に大きな影響になるわけです。

伊藤 ちようど、先生が防衛庁にいらっしゃる頃に嘱託になられていますね。

小田村 そうですね。

伊藤 しかし、哲学から大蔵省の外資局にこういうふうにつながるのかな、と思いますね。

小田村 調査課に内国調査関係と外国調査関係とあるわけです。初めはその外国調査の関係のほうをやっておられたんだと思います。満州国にも行っておられるんです。

伊藤 満州国にも行っておられますね。政府の嘱託ですね。

小田村 嘱託で、満州国政府の職員にもなっておられるんです。

伊藤 参事官になっていますね。

小田村 それから大同学院の教授もやっておられます。これは満州国の星野直樹さんの前に行かれたのか、そのときに行かれたのか。

伊藤 しかし哲学をやっていて、突然経済になって、防衛になって。

佐道 経済学も教えているわけですね。

小田村 経済学も教えていますね。

伊藤 何でもできる人なんですね。

小田村 本も必ず全部お読みになって、読んだあとの感想を本の裏に書いておられるんです。だから、むしろ感想のほうが貴重なんです。あの蔵書はどうされましたか。哲学の本は最後まで読んでおられましたね。誰だったか、「哲学史をずっと前から求めていたのが、やっと見つかった」といって喜んでおられたことがありましたね。

伊藤 これはちよつと読ませてください。思いがけないことでした。ちよつとコピーをさせてください。

■「補」「三十会」の人脈

小田村 どうぞ。それからもう一つ、これはまったくプライベートのほうなんです。軍隊で同じ部隊から経理学校までずっと一緒に一緒に志垣「民郎」君というのがおるんです。これが内閣調査室にいました。文部省にちよつと入っていたんですが、文部省から経済調査庁に移って、それで内閣調査室に行ったんです。内調の初代が、村井順さんですね。村井さんのときに内調に行ったんですね。しよっちゅう軍隊の関係で話をしておったんですが、連れていってやるというので、「三十会」という会に連れて行かれたんですね。支那料理屋の上で何か安い夕食を食べて、いろいろな議論をするという会だったんですが、そこで末次一郎さんとか、いろいろな人に会うことができました。

伊藤 それは、主宰しているのはどなたなんですか。

小田村 主宰しているのは誰でしたかね。そこはよくわからないんですけれどね。

伊藤 誰かがスピーチをなさるといふ会なんですか。

小田村 そういうこともありましたね。伊沢甲子麿といつて、伊沢修二さんの孫ですが、三島由紀夫さんと非常に懇意だったんですね。だから三島さんが亡くなったときに、僕はすぐに伊沢さんところに電話をしたんですが、そういう関わりもありました。そのほか、奈須田敬さんもそれに出ていました。そんな顔ぶれですね。

伊藤 どういう会なんですか。

小田村 要するに、戦中派というんです。いまの二十歳代は駄目だ、それから四十歳以降になると、これも駄目だということ、三十代の人間がやらなくてはいけないというようなことで、「三十会」ということにしたんですね。

伊藤 何か面白い会ですね（笑い）。

小田村 それは二、三年で、防衛庁に行つてからはあまり出られませんでした。あと、伊達宗義君も入っていましたね。あのときはまだ陸

上自衛隊の自衛官でした。いろいろな人がおりました。それがちよつと追加の部分です。

■防衛庁経理局時代 (1) 防衛庁経理局への出向

伊藤 小田村先生は一九五六(昭和三十一年)九月に防衛庁の経理局会計課に移られますが、この前のお話ですと、防衛庁に行ってみようというご希望もあったというお話でございましたね。防衛庁の経理局は大蔵のポストだということで、指定席としてあるわけでございますか。

小田村 まあそういう感じだったと思います。それはだいぶ後まで続いていたと思います。

伊藤 むしろ拡大したではありませんか。

小田村 拡大というわけでもないんですね。

伊藤 防衛庁は混成軍ですね。

小田村 ええ、混成軍です。

伊藤 内務省出身の方が一番多かったんじゃないかと思いますが。

小田村 そうです、内務省、特に警察系ですね。

伊藤 そういう人間関係というのは、どういうものなんですか。別のシマみたいな感じになっているんですか。

小田村 そうですね。そういうところが多いですね。防衛局はだいたい警察系統ですね。官房もそうです。それから経理局は、局長と会計課長が大蔵から。装備局は、初めはどうだったかな。

佐道 あとになるとずっと通産からですね。

小田村 あとで通産に変わるんですが、通産の前が運輸だったかな。

ちよつと忘れましたが、石原さんは、運輸省出の装備局長が前からたいへん昵懇な方だったので、それじゃあおれも行こうということで行かれた、と言っておられました。初めは通産ではなかったんです。私が行ってからしばらくしてから、ずっと通産になりました。小山「雄

二」さんが装備局長になられて、これが通産で、それからあとずっと通産になりましたね。

伊藤 役人同士で、そうごくしやくした感じではないんでしょう。

小田村 あまりごくしやくした感じはありません。

伊藤 先生は、いまおっしゃったように局長・課長が大蔵出身ですから、その下につかれるわけですね。

小田村 その下の「部員」というんです。

伊藤 筆頭の部員ですか。

小田村 会計課では筆頭部員になります。私の前任者は村田「博」さんといって、二十年「大蔵省入省」の人だったんですが、そのあとに行くことになりました。

伊藤 僕は役人の経験がないので全然わかりませんが、日常的にこういう業務をやるんですか。

小田村 三つ課がありまして、会計課と施設課と監査課です。監査課はだいたい会計検査院の検査に対する対応です。あとは自分のほうの検査ですね。施設課はご存知の通り、施設全般についてですから、一番大きな問題になるわけです。施設課の下に建設本部というのが東京にありましたね。建本(けんぽん)と言っていたんですが、建本を使つて工事をやらせるのが施設課です。建本はのちに調達庁と一緒になつて防衛施設庁になります。会計課は、庁内の会計事務もありますが、主として予算の編成と予算の執行ですね。それを会計課で所掌していたということになります。

■防衛庁経理局時代 (2) 経理局会計課での仕事

伊藤 防衛計画があつて、来年度の装備をこうするということが決まらないと、予算は組めないわけですね。

小田村 組めないわけです。そこで私が行ったとき、防衛局に入つてからのことを申し上げますが、業務計画というのがずっとありました。

伊藤 年度業務計画ですね。

小田村 年度業務計画です。その前に長期の計画があるわけですが、それに基づいて、年度業務計画をつくるわけです。年度業務計画を防衛局のほうでつくる。

伊藤 それは経理局とは相談なしですか。

小田村 相談なしです。これは各幕僚監部の防衛部に、業務計画班というのがありまして、そこでその年度の計画をつくって――。

伊藤 各幕の、ですか。

小田村 各幕です。それを五月頃から防衛局に出してくるわけですね。それで防衛局のほうでは、だいたい課長は直接には出て来ないんです。部員がそれを聞いて、査定していく。そういうふうに防衛業務計画の概要、特に定員と装備を決める。修理その他は直接タッチしませんで、新規の調達などはだいたい業務計画の中で決めていくというシステムになっていました。それに基づいて幕僚監部が予算化しまして、それを会計課のほうに持ち込んでくる。

伊藤 もうある程度予算化して持ってくるわけですか。

小田村 予算化して持ってきます。それを今度は会計課のほうでまた査定しまして、そして概算要求書をつくって、大蔵省に要求する。

伊藤 でもそうすると、かなり専門的な知識が必要になるということになりませんか。例えば飛行機を考えても、これはいくらだ、ということになりますね。

小田村 飛行機は、概算要求書をつくるときには、装備局はタッチしていると思いますが、それぞれ各幕僚監部に専門家がいますので、そこで積算をするわけですね。修理などは工数その他がいろいろあるんですが、新品の場合は、日本で新規に開発するというのは比較的少なく、アメリカのものが多いわけです。そうすると、アメリカの価格とそれを製造する場合の価格ということになります。ノックダウンですと部品の価格ということになりますし、それをだんだん国産化していきますと、国産化の単価を決めてそれを積算していくということになります。ただ、MSA協定で米国の援助がついていましたから、初

めは全額供与で、だんだん何割負担ということで、協定を結びます。

伊藤 援助は予算の中で――。

小田村 援助を除いた額を予算に計上していたと思います。だから供与品はまったく予算化されないわけですね。援助分は援助額を除いて、日本側の負担分だけが予算計上されるということでした。

伊藤 大蔵との折衝は、経理局でやるわけですか。

小田村 経理局でやるわけです。

伊藤 でも具体的な、飛行機がどうだとか戦車がどうだという話になったら、専門家を連れて行かないとまずいんじゃないですか。

小田村 そうです。要するにそんなことは部員にはわかりませんから、幕僚監部が全部説明に行くわけです。

伊藤 それは、経理局とは別に、ですか。個々にやっているわけですか。

小田村 いえ、大蔵省に概算要求を出しますね。そうすると九月一日から、大蔵の主計官のところに陸海空の主査がおりますから、その主査のところに行って説明するわけです。その説明をするのは幕僚監部なんです。会計課の部員はそこに立ち会っています。ですから予算時期になりますと、大蔵省の廊下に制服がいっぱいになるんですね。

伊藤 主計局の担当の人も、相当勉強していないと駄目ですね。

小田村 そうですね。むしろわれわれよりも勉強しているんですよ（笑い）。細かく査定しますからね。

伊藤 でもなんとなく、ある程度予算化されたものを査定するというのは、隔靴搔痒な感じですね。つまり元のところは、経理局では十分にはわからないわけでしょう。

小田村 武器の性能その他については、会計課ではそんなに詳しくはタッチしていないですね。いちおうそういうことは防衛局でだいたいやっておりますからね。ただ、例えば車輛なんかもありますね。ジープその他です。こういうものは汎用品が多いですから、そういうものについては見ると思いますし、油はどれぐらい必要かという維持費などは一応チェックしないといかんわけです。あと施設整備もありま

すね。あれは業務計画との関係かな。

伊藤 例えば飛行場をつくるとか兵舎をつくるという話ですね。

小田村 それは大きいものは当然業務計画の中で要求しなければなりません。そうすると土地代とか施設の建設費などは、査定は会計課のほうでやるということですね。

伊藤 やはり大きいのは最先端の兵器ということになるんでしょうか。

小田村 そうですね、兵器と、施設はやはり大きいですね。それは例えば飛行場の格納庫とか演習場の取得もありますからね。

伊藤 それは相当お金が要りますね。これは米軍との関わりはどうなんでしょうか。経理の面ではほとんど関係がないんですか。

小田村 あまり関係がなかったんじゃないでしょうか。直接折衝することはほとんどなかったと思いますね。

伊藤 あとで防衛施設庁になると、いろいろあるんでしょうけれどね。小田村 そうですね。

■防衛庁経理局時代 (3) 経理局長と防衛庁長官

伊藤 先生が防衛庁に行かれたときは、北島「武雄」さんが局長ですね。

小田村 局長は北島さんで、たしか二年目でしたか。課長は、私が着任する直前に替わりまして、前は松永「勇」さんという方だったんですが、岩尾「一」さんが行かれたわけですね。岩尾さんというのは小學校は広島島の附属で、そこから大阪の北野中学に行かれて、高等学校が七高なんです、造士館。

伊藤 珍しいですね。

小田村 それで「大学は」京都なんです。非常にすっきりした面白い人です。わりあい無口な方ですが、よく目の届く方で、熊本の直税部長をしていたときに、私は国税庁にいたので出張してお目にかかったことがあります。あまり無駄口はきかない方でした。軍隊はたしかビ

ルマでした。

伊藤 大変なところじゃないですか。

小田村 ええ、陸軍主計中尉です。ポツダム中尉だと思うんですけどね。ですから、岩尾さんは岩尾中尉というあだ名がついていたな、防衛庁では。

伊藤 昔の位（くらい）が生きている（笑い）。

小田村 「人名録を見て」インドシナか。ビルマもちよつと行かれて、それから仏印に行かれたのかもしれないね。やっぱりビルマですね。ビルマの第十五飛行場大隊付で第五飛行師団の経理部と書いてありますからね。

伊藤 大蔵省は主計経験者がだいぶ多いんですね。

小田村 多いですね。陸軍はわりに少ないんですね。

伊藤 ある意味では軍隊のことはよくわかっていうことですね。この頃はまだ装備が全然違います（笑い）。

小田村 このあいだお話しした海堀さんは海軍です。海軍が多いんですね。

伊藤 海軍が優秀な人材を積極的に集めましたからね。

小田村 そうですね、短期現役がありましたから。みんなその方がいいものですね。

伊藤 経理局で、特にそのほかには――。

小田村 岩尾さんはさかんに、単金をつくれ、ということ言われました。私も何のこともよくわからなかったんです。とにかく予算は初めてなものですから。それはこういうことのようにです。例えば国立大学ですと、教授一人当たり積算公費とか学生一人当たり積算公費というのがありますね。軍隊でも定型的なものが多いから、そういうものをつくったらどうか、ということなんです。単価ではなくて、単金と言っていましたね。それを大蔵省に認めさせると、あとは非常にらくになる。

伊藤 次の年はらくだということですね。

小田村 そうなんです。あとで私も文部省の予算をやりましたけれど、

そういうことをやっていたものですから、これは文部省でも非常に喜ばれましたね。それはもうできていたわけです。そういうものをつくっておくと将来いい。どの辺までできたか、私もよくわかりませんがね。

伊藤 例えば兵隊一人当たり、というような計算なんですね。

小田村 そうです。車輛一台どうこう、ということだと思いますね。

伊藤 物価の変動がありますから、いろいろあるでしょうけれどね。

小田村 そういう計算式をつくるということですね。

伊藤 ちょうど先生が防衛庁に行かれた時期は、石橋内閣ができるまでですね。

小田村 そうですね。総裁選挙がありました。総裁選挙は初めてだったんじゃないでしょうか。

伊藤 そうですね。

小田村 自民党ができました。

伊藤 大騒ぎの総裁選挙だったはずですよ。かろうじて石橋さんが当選という段階ですね。しかしじきに石橋さんが病気になるので岸内閣ができるという、動きとしては激しい時代だと思いますが、そんな政局はあまりお感じになりませんでしたか。

小田村 政局が仕事に直接影響するということはほとんどなかったですね。

伊藤 たぶんそうですね。内閣もそうなのですが、防衛庁長官もしよっちゅう替わります。一年もてばいいほうで、数ヶ月で替わりますね。

小田村 防衛庁長官は、私も部員としてはあまり関係なかったですね。

伊藤 たぶんそうですね。どのくらいまで直接接触はあるわけですか。

小田村 接触しますのは、あの当時次長といていたんですが、次長までですね。

伊藤 次長というのは、つまり次官ですね。

小田村 ええ、次官です。

伊藤 次長ぐらいになると、ちょっと来い、ということはあり得るわけですか。

小田村 あまりなかったですね。

伊藤 でも一応そのくらいまでは顔見知りという感じでございますか。

小田村 そういうことです。庁議に出ますからね。

伊藤 やはり自分の地位によって見える範囲は違ってきますね。

小田村 そうですね。ただ、防衛庁に行ったときにこういうことを言っていました。「防衛庁では、誰が大臣になるかということを非常に気にする」というわけですね。大蔵省はだいたい大物に来ていただけ。関係があるかもしれませんが、大蔵省は大臣にどういふ人が来るかということとは、それほど大きな騒ぎにはならない。ところが防衛庁のような役所になりますと、誰が大臣になるかということが非常に大きな影響があるので、全員が注目する、というんですね。誰が言っていたのか忘れたんですが、大蔵省から防衛庁に行った人間がそういうことを言っていました。

伊藤 先生が行かれたとき、石橋内閣の時ですが、「防衛庁長官は」最初石橋さんが兼務していて、小瀧「彬」さんが防衛庁長官になりましたが、小瀧さんなんて全然覚えていませんね。

小田村 そうですね。あまりそれほど大きな仕事はされなかったんじゃないでしょうか。

伊藤 実際、防衛問題を熱心におやりになる防衛庁長官はそんなにいらっしやらなかったと思いますし、防衛庁長官というのはだいたい國務大臣になり始めですね。

小田村 ええ、そういう人が多かったですからね。

伊藤 自分で志願してなるような人はあまりいないだろうと思うんですね。だからかなり翻弄されることになるんだろうなと思いますね。

小田村 あとになりますと、大臣もいろいろ言われる方が多くなりしました。それからその前の、例えば木村篤太郎さんはずいぶんご発言になったようですね。

伊藤 あとで赤城「宗徳」さんの問題もありますけれど。

佐道 船田「中」さんとかがなられたこともありますね。

小田村 船田さんは木村さんのあとですね。私の時ではないんです。船田さんというのは、法制局長官としか覚えていなかったんですが（笑い）。

伊藤 船田さんというのは、法制局長官と野球の——（佐道 江川「卓」の作新学院ですね）、それで有名なんです（笑い）。

■防衛庁経理局時代 （4）昭和三十二年度予算概算要求

伊藤 九月に移られたということは、次年度予算、つまり昭和三十二年度予算の仕事から始めるという意味なんですか。

小田村 そういうことですね。

伊藤 だいたい九月というと、下の方から上がってきているわけですね。

小田村 概算要求はほとんど出来上がっていたわけです。九月一日に大蔵省に提出しますので。ただ、僕が行ったときはちよつと技術研究所の予算が遅れておりまして、まだ会計課で査定をやっていたんです。私はわからないものですから、前任者の村田さんが手伝ってくれまして、彼が一所懸命査定してくれていたんですが、海原「治」さんが途中から出てきて、何か身分のない人間がやっているんじゃないかと（笑い）。

伊藤 海原さん登場、か。

小田村 それが少し遅れていたんですが、あれはどういうふうにしたんですかね、了解を取って、あとから出したのかもしれない。

伊藤 そういうことはあり得るんですね。

小田村 あり得ますね。その概算要求をまとめた表にして「概算要求の概要」という刷物をつくって部内や大蔵省に配りました。

伊藤 あの技研というのはなかなか難しい問題を含んでいるところで

はないんですか。

小田村 技研も、装備局でいちおう業務計画をつくったんですね。それを持つてきたんですが、それまた会計課でうんと査定したものですから、だいぶご不満があったようです。ちよつと私もあまり実質的なことはわからないんですが、あの頃は技術水準が低かったですからね。伊藤 技術水準が一般的に低いということと、自分たち自身がどう思っているかということとのギャップがあったんじゃないですか。かなり技術水準はあるんだ、と。

小田村 自分たちはね。そうかもしれませんね。

伊藤 そこはなかなか難しい問題だと思うんですね。いまのお話を伺っていますと、防衛庁長官がどうこうしたからといって、予算がどうこうなるということは当面はないですね。

小田村 それは全くないんです。当時はもっぱら会計課長と主計官、経理局長と主計局次長、最終的には主計局長ですが、そのあいだでやって、ちよつと私もはつきり記憶がないんですが、次長の増原「恵吉」さんが最後に行かれたように思います。石原さんが当時主計局長ですね、岩尾さんに「とにかくおまえ、あんまり中で絞るなよ、少し切りしろを残しておけ」と言っていました（笑い）。

武田 「切りしろ」ですか（笑い）。

伊藤 じゃあ、大臣折衝というものはないんですか。

小田村 大臣折衝まで行かなかったんじゃないかと思えます。

伊藤 何か大臣のためにちよつと残しておいてやるというのは——。

小田村 そういうことはあるので、あるいはあったかもしれませんが、あの時はなかったと思います。

伊藤 あまり記憶にないところを見ると、大したことはない。

佐道 大した問題ではないということですね。

小田村 そういうことですね。ですから結局、岩尾さんにしても北島さんにしても、主計局がどういうふうに見るかということが関心の的だったんですね。「だいぶ厳しいから」ということはよく言っておられました。それに対して、政治家のほうはほとんどタッチしてくれな

いんですね。

伊藤 応援団がないわけですね。

小田村 応援団がないんです。応援団は米軍しかいなかったわけですね。

武田 応援団は米軍になるんですね。

■防衛庁経理局時代 (5) 防衛分担金と安全保障諸費

小田村 それで、当時は「防衛分担金」というのがございました。私も経緯は知らないんですが――。

伊藤 これは予算の中なんですか。

小田村 防衛庁予算とは別なんです。二十七年に講和が発効しまして、そのときに「終戦処理費」がなくなったわけですね。終戦処理費の代わりが防衛分担金となり、その他に「安全保障諸費」というのを米軍がつけたわけです。これは何だかわからないです。何かわからないんだけれど、とにかく安全保障関係で、おそらく自衛隊にも使い、あるいは米軍の施設の整備その他もあったんだろうと思うんです。予算の制度として、明許繰越費というのがあって安保諸費はそれになりました。その明許繰越費ですと、翌年度に繰り越して使えるんですね。本来は年度限りなんです。それでもまだ使い切れない場合に、これこれこういう事情があつて、どうしても使えなかったという理由を述べて、大蔵大臣に認められるという事故繰越という制度があるんです。

伊藤 事故が起こつたわけですね。

小田村 何か特別な事故があつて、こういう特別の事情があつて使えなかったということですね。二十七年度だったと思いますので二十八年度に繰り越して、二十八年度でも使えないで、事故繰越で翌年に繰り越した。そこで、そのころ石原さんが「防衛庁経理」局長をしておられた。二十八年度だったかと思いますが、事故繰越になって、最後に建物をつくらうということになった。いまの通産省のところに防衛

庁の建物がありましたでしょう。あの防衛庁の建物は、事故繰越の安保諸費でつくつたんです。

伊藤 それは日本側でも使えるものなんですか。

小田村 安全保障諸費はそうです。日本側の予算ですから、いろいろなものに使つたんだらうと思います。

伊藤 それは防衛分担金とは違うものですか。

小田村 別のものだったようです。私も防衛分担金のことをあまり詳しく知りません。あるいは当時の調達庁が管理していたのかもしれない。

伊藤 そうすると、防衛分担金というのは防衛庁予算の中に入っていないわけですね。

小田村 防衛関係費という分類の中には入っていましたが、防衛庁費には入っていません。私は三十二年度予算で、これはいつできたルールかわかりませんが、「防衛庁費の増額の半額、防衛分担金を減らす」という協定が米軍とのあいだにできたんです。ですから、防衛庁費が一〇〇億増えると、防衛分担金が五〇億減ります。ということで、総額の予算としては、五〇億円の予算の増で済むということで、防衛庁の予算を増額しやすくしたんですね。その制度がございました。

伊藤 これは結局アメリカの占領の継続みたいな形ですかね。

小田村 占領の継続といいますか、アメリカとしては――。

伊藤 それだけ日本の防衛に尽力しているということですね。

小田村 そういうことでしょうかね。

佐道 防衛予算を増額して、防衛分担金を減らすということは、防衛庁云々というより、大蔵省、あるいは政府全体でそういう問題に当たっていたわけですね。

小田村 そうです、政府全体です。

伊藤 これはアメリカとの交渉だから、外務省がやったんじゃないか。佐道 外務省も大蔵省も入って、鳩山内閣の時にやっていますね。

小田村 これは三十二年度、三十三年度だったかもしれませんが、主計官が吉村「真一」さんから船後「正道」さんに替わりまして、船後

さんの時に、「防衛庁の庁費の増額分の一〇〇%、防衛分担金を減らすということをするんだ」と言っていました。私は「そんなことできるんですか」と言ったんですが、「いや、やるんだ」と言って、とうとう実現しましたね。それは防衛庁としてはたいへん助かったわけですね。

伊藤 しかしアメリカ軍としてはたいへんだっただけでしょうね。

小田村 もつとも、三十三年ぐらいからアメリカ軍は大幅に撤退しています。ですからそういう芸当ができたんじゃないかと思えます。

伊藤 結局、日本の自衛力を増加させることと、アメリカ軍が少しずつ撤退していくことが並行するわけですね。

小田村 そうですね。だから私も当時のことをすっかり忘れたものですから、防衛庁費の予算を見たんですが、あまり増えていないんですね。どうしてかな、と思ったんですが、一つは当時、三十一年度予算が使い切れなかったんです。というのは、整備のほうがずっと遅れてきているものですから、油にしても修理費にしても大幅に余ってしまった。それが岩尾さんが部員を集めまして、「これを使うのはやめて不用に立てて来年度予算で新しく取ることにするのがいいか、それともこれは繰り越してその分だけ来年度の予算を減らす方がいいのか、どっちがいいか」ということで意見を聞いたんです。私は捨ててしまうのは何かもったいない（笑い）気がしたものですから、「繰り越した方がいいんじゃないですか」と言ったんですけれど、岩尾さんは予算屋の感覚なんですね、「不用に立てて、来年度予算を取ったほうがいい」という。

予算屋というのは、やはり前年度の予算に対してどうなるかということを見るわけですから、来年度の予算の枠を取っておけば、また再来年度は助かるわけですね。来年度予算を小さくしてしまうと、さ来年度も減る。私は予算の経験がなかったから、そういうふう思ったんですね。それで三十二年度予算は増額が少ないんです。海堀さんもそういうことを言っていました。それは何かというと、要するに安全保障諸費ですが、何かわからないので大蔵省でも非常に評判が悪かつ

たんです。やはりアメリカはその点をよく考えていたんだ。つまり、終戦処理費がなくなるけれど、将来防衛費が増えてくるんだから、その枠だけはつくっておく、とっておきたいという気持ちで、安保諸費を押しつけたんだらう、と言っていましたね。これは予算をやった人間でなくても感じているわけですね。

伊藤 いまおっしゃった安保諸費はどこについている予算なんですか。小田村 どこについていたんですね。

伊藤 防衛庁ではないんですね。

小田村 防衛庁ではないと思いますね。でも防衛庁の建物をつくるのに使ったんですから。

佐道 防衛庁に扱う権利があったんですね。その諸費は、先ほど先生がおっしゃったように、建物をつくるということで、一応なくなつたわけですね。

小田村 それでもう繰り越しの期限が来ますから、それ以上は使えない。

伊藤 それは防衛分担金とは別なんですね。

小田村 そうなんです。

■防衛庁経理局時代 (6) 防衛予算と米軍、MSA

伊藤 防衛予算の編成で、毎年重点とか、そういうことはあるわけですか。多少メリハリをつけないと、予算取りはなかなか難しいというのが一般的な考え方だと思いますが。

小田村 ただ、既定の計画がありましたから。閣議決定になった整備計画はまだだったんですが、既定ラインがあったものですから、それほど大きなものはあつたかな。もう飛行機の国産は進んでいましたし、P2Vがいつからでしたか、あるいはP2Vが新しく入ったかもしれませんね。三十二年度に入ってからのように思うんですが。

伊藤 さっきおっしゃったMSAの援助というのは、どの段階で誰が

決めてくれるんですか。これはアメリカ側にこちらが要求するんですか。

小田村 そうなんでしょうね。

伊藤 話し合いをするのかな。

小田村 話し合いだと思いますね。

伊藤 やはり各幕がやるんですかね。

小田村 幕僚監部がやると思います。それは渉外関係の参事官、あのときは誰だったか、青木さんの前だった。

伊藤 防衛庁の参事官ですか。

小田村 防衛庁の参事官です。このかたが、M A A Gという顧問団としょっちゅうやつておられたわけですね。防衛局では、沢田君といって、沢田廉三さんの息子さん部員できておりました。彼は英語が非常に達者なものですから。

伊藤 どこから来ていたんですか。

小田村 ほかの省じゃないと思うんです。防衛庁で採ったんじゃないかと思うんですが。

伊藤 沢田何というんですか。沢田廉三さんの息子ですか。

佐道 当時の名簿を見ればわかります。

小田村 彼はもっぱら米軍関係を担当していました。

伊藤 おやじさんもアメリカとの関係が密接ですからね。

佐道 防衛局にいらつしやったわけですね。

小田村 防衛局防衛一課にいました。

伊藤 ちよつと面白い存在ですね。

小田村 あとは各幕僚監部がそれぞれ米軍のほうとやっていましたね。

伊藤 希望を出すわけですか。

小田村 どういうふうになっていたのかよくわかりません。

伊藤 そうすると、経理局にいても全部見えるというわけではないんですね。

小田村 ないんです。あるいは、局長のところにはそういう情報が来っていたのかもしれませんが。

佐道 M S Aの金額と、それによってどういう装備品が日本に入るかということについて、これは先ほどおっしゃったM A A G、日本にいるM A A Gの段階で、かなりのものが決定されるということになるんじゃないか。

小田村 そのへんはよくわかりません。私が行ってから新しく出てきたのは対潜哨戒機です。P 2 Vをアメリカが供与してくれた。

伊藤 これは完全供与ですか。

小田村 初めはそうです。あとは生産です。その所用機数をどうするかといつて、防衛局に住田正二君がしまして——運輸次官になりましたが——、海を担当していて、一所懸命計算していました。

伊藤 計算したらわかるものですかね。

小田村 要するに、何機にするかというのを弾くだけです。日本からサイパンまで護衛をする、その上を飛行機が哨戒して、警戒するんですね。船が進んでいくあいだに、何回行つて帰ってくるかということ、機数を決めていました（笑い）。実際にそういうことになるわけではないんですが、なんらかの根拠をもって大蔵にも説明しなければなりませんから、機数をそんなことで計算したんです。初めは供与だったと思いますが、あとは国産になりました。

伊藤 供与になつても、それを維持していくための費用とか、そういうものがあるわけでしょう。

小田村 維持の費用は日本がつけるんですね。

伊藤 そうすると、M S Aの援助がどのくらいあるかということがまずわからないと、予算が組めないということもありますね。

小田村 そうなんです。修理部品も初めは供与してくれたと思いますが、あとは自分のほうで調達しなければなりません。だんだんM S Aがなくなつてきますと、あれはエムダップとかマップとかいっていましたが、それがなくなつてくると日本の予算が増えてくる、必要になつてくるわけですね。

伊藤 最初は完全にお仕着せの装備ですね。

小田村 そうですね。

■防衛庁防衛局時代 (1) 防衛局防衛一課への異動

伊藤　そして一九五七「昭和三十二」年三月に、今度は防衛局のほうに移られるということになりますが、経理局から防衛局に移るというのは異例ではないですか。

小田村　これは海原さんと岩尾さんとの話し合いで決まったんです。

岩尾さんとしては、私はだいたい予算は素人ですから、私がいなくても十分なんです。陸担当の佐藤「直衛」君というベテランの大蔵省から来た人間がいて、それにやらせればできるからと岩尾さんは思っ、そう言っておられました。

そして「防衛局第一課で」長期計画を担当していたのが、村上信二郎さんという部員だったんです。村上さんがアメリカに留学することになったんです。二年ぐらいかな、留学が決まりました。そうすると後任を置かなくてはいけない。防衛一課の部員の中には適当な人間がない。だから計数に詳しい人間が欲しいということで、「海原さんは」岩尾さんと相談されたらしいんですね。だから村上さんの後任として行くことになったということです。

伊藤　そうですね。防衛局の第一課の中で長期計画担当ということになるわけですか。

小田村　そういうことです。長期計画担当です。

伊藤　何かいままでと全然また違ったことですね。

小田村　岩尾さんも、「おまえ、その方が向いているぞ」と言っておられました。

伊藤　そうですね。いままでのお話を伺っていると、税務のお話が多かったの、予算というのはあまりなかったように思いますね。

小田村　予算は初めてなんです。

伊藤　前々から防衛そのものにご関心はあったんですか。

小田村　はい。ですからどういう考え方で防衛力を考えていくか、決

めていくのかということに非常に興味がありました。海堀さんがもともと長期計画をやっていましたから、海堀さんの話を聞いたり、香川先生からいろいろご意見を伺ったりしていましたから。

伊藤　それが「国防の基本方針」や何かになっていく元なんですか。

小田村　元というか、「国防の基本方針」は海原さんがつくったんです。それと一緒にやっていた、第一次防衛力整備計画、当時は「防衛力整備計画」といつていたものです。

伊藤　一次防ですね。

小田村　まあ、一次とは言っていないでしたけれどね。

伊藤　最初ですから、一次防とは言わないんでしょうね。

小田村　それをつくったんです。それをつくるための要員だったわけです。ですから村上さんでいいでいてきていたわけなので、もう一回計算をし直して、経費を立てて、正式なものに持つていくということだったんです。

伊藤　あれは三年「計画」ですか。

佐道　一次防は三年です。

伊藤　三年でここまで行くぞという計画なんですね。

小田村　そうですね。いままで防衛庁の中ではそういうものができていましたが、政府レベルのものではなかったわけですから。

伊藤　その前はどうかっていたんですか。

小田村　前は私もよくわからないんですが、制度調査委員室という部屋が別にありまして、そこでやっているわけですね。そこには会議室がありまして、その奥に小さな事務室があるんですね。そこで書類を見てみたんですが、よくわからないんですね。要するに文章の説明が全くなくて、第一次案から第何次案、何次案というのがたくさんあるんです。私どものときには第十次案でしたか。

伊藤　それはやはり長期計画なんですか。

小田村　長期計画です。第一次案というのは膨大なものです。これができるのはいつなんでしょうか。よくわかりませんが、二十七年頃かもしれません。例の池田・ロバートソン会談は、防衛庁は脇で見てい

たというんですが、あれが公式のもののような形になっていたようですね。おそらく政府も大蔵省も、あれで行くんだということだったんじゃないかと思うんですが、いずれにしてもそれは単に会談でこういうことになったという話があるだけです。

伊藤 取り決めがあるわけではないんですね。

小田村 何でもないわけですね。政府部内でもこれで行くんだ、ということを決めたものは何もないんです。ですから政府レベルとして何か決めておかなければいけない。その前に国防会議が発足しているわけですね。国防会議は前年に発足しているわけです。その国防会議の最初の課題として、政府レベルの防衛力整備計画があった。あれは国防会議の設置法にたしか書いてあったと思います。

伊藤 そこで議するわけですね。

小田村 そうです、そこで議論するということになっていました。そこで、じゃあそれを出そうということになったんだと思います。それで海堀さんが始めておられて、それを引き継いでまとめられるということですね。それを村上さんが後を引き継いでやってもらった。村上さんは一次防を決定したときにはまだ「日本に」いたんじゃないかかったかな。もう留学に行かれるか、直前だったか、どちらかだったと思うんですが、だいたいずっとやっていたわけですね。

主に向こうに行つて「私が」手を着けたのは、三年計画の経費の計算です。これはもともとは三十一年度から三十五年までの五ヶ年計画だったのですが、すでに二ヶ年度は終わっていますので、残りの三年計画になったわけです。もう一つは、三ヶ年計画だったんですが、一つの大きな新しい事態が起こりました。それは航空自衛隊が三十五年年度までに完成する予定だったんですが、それができないということがはつきりしてきたことです。それは何かというと、飛行機のほうがどんどんできています。飛行機はできているんですが、パイロットの養成が間に合わない。だから三十三スクオードロン（飛行隊）が目標なんだけれど、とても三十五年までにはできないということがはつきり出たんです。それをやり直したわけですね。それで結局、航空自

衛隊は三十七年度まで完成を延ばすということになりました、その間の計画を作り直したわけですね。

伊藤 パイロットの養成というのはずいぶん時間がかかる仕事ですし、アメリカに行かせなければいけないわけでしょう。

小田村 そうですね、アメリカにも行きます。基地の問題もあったんですが、それ以上にパイロットの問題で、できないということになりました。

佐道 航空自衛隊の幹部の方は早く飛行機も入れて、形を作りたいと思つておられたんでしょうけれど。

小田村 初めから、三十五年までに目標を達成するという計画だったんです。

佐道 乗り手がいなくてはどうがいですね。この一次防に關して

は、岸さんが訪米をされるので、そのときに持つていつてアメリカに見せたいということがあるから、それに間に合わせるように策定も急いだ、ということだったんですか。

小田村 おそらくそうだと思います。

佐道 そういう感じでございましたか。

小田村 そうでしょうね。そこまで私は詳しく知りませんが、岸さんの時には、たしか海原さんが同行したんですね。

佐道 そうですね。

伊藤 このとき海原さんは防衛課長ですね。

小田村 防衛第一課長です。

伊藤 先生との接触もしょっちゅうあるわけですか。

小田村 課長ですから、上司です。

佐道 直属の上司ですね。海原さんが直接、こういう方針でやれとか、おっしゃるわけですか。

小田村 それはありません。だいたい村上さんのところに来ていますから、既定方針通り計算をしました。ただ計算をしたところが、どこでも同じなんです、三十二年予算が決まっています、計算は陸海空のそれぞれの自衛隊でやつてもらいます。幕僚監部がやるわけ

す。翌年度はボコーンと跳ね上がっちゃうんです。翌々年度から比較
的なだらかになる。これはしょうがないですね。要求ですからね。そ
れとさつき申し上げたように、三十二年度予算で前年度の繰越が大き
かったために表面の予算額は実質よりも小さくなっていたこともあり
ます。ところが経理局のほうは、これでは困るというわけですね。と
いうことで、無理をしないでいぶん金額を落としまして、やっと会計課
のほうも了承してくれまして、それで最終案にしたということですよ。
そのときは陸海空では、陸は第三部の業務計画班というのがやって
いまして、これは和田二佐が担当で交渉をやっていました。海が石田
捨雄さん、幕僚長になりましたね。空が山口「二三」二佐ですね。あ
とでバツヂ問題のときに自殺されます。石田さんも山口さんも非常に
立派な方でした。和田さんも非常に人が好かった。

■防衛庁防衛局時代 (2) 防衛一課長・海原治氏

伊藤 海原さんはいかがでございましたか。

小田村 海原さんは、何というかな、この基本計画のところでは、そ
れほどのことはありません。一回、新富町のおでん屋に一緒に連れて
行ってくれまして、いろいろお話を聞かせてくださったんですが、一
課の中では海原さんのあだ名は先任下士官でした。村上さんなんか
つも、「先任、先任」と言っていましたね。

伊藤 先任下士官は一番怖い存在ですね（笑い）。あとで海原天皇と
いわれるのとはだいぶ違いますね。

小田村 そうなんですよ。あとで聞きますと、昔は「海原天皇、海堀
皇太子」と言っていたということですよ。

佐道 海堀さんは皇太子ですか（笑い）。

小田村 当時は、そう特別にはなかったような気がしますね。「国防
の基本方針」を作るから意見を出せということだったので、「やっぱ
り基本は国民の防衛に対する心構えが一番重要なので、それをなんと

かしないと文章を書いてもしようがない」というようなことを言っ
たら、「いや、おまえの言う通り」というようなことを言っておられ
ました。

「国防の基本方針」は海原さんが自分で書きまして、「ちよつとこ
れを見てくれ、どうだろう」という。「たいへんけっこうじゃないで
すか」と申し上げたんですが、いまから見ても、なかなかよくできて
いますね。

伊藤 海原さんは非常に勉強される方だと思いますが。

小田村 そうですね。たしかに「基本方針」の中の国際連合はちよつ
とおかしくなってきましたが、いまでもあまり変える必要がないよう
な感じがしておりますね。

伊藤 海原さんを慕う人もまた、周りにいたわけでしょう。

小田村 どうか。

伊藤 おしなべて、さつきまでおっしゃっていたようなお役人たちと

小田村 どうでしょうかね、その点はちよつと、よくわかりませんね。
伊藤 先生はさつき、この人は穏やかな人で、とかいろいろ人物評を
なさいましたけれど。

小田村 まあ鋭い人ですけれどね。たしかにあれだけいろいろ厳密に
考えたり、武器の性能に対しても研究される人は少ないと思うんです
が、どうなのかな。「オーラルヒストリー」にざつと目を通しました
が、ところどころ間違いもあります。あつちに行ったりこつちに行つ
たりするものだから、なかなかトレースしにくい。

伊藤 そうです。話はどうしてもそうなります。

小田村 例えば階級呼称のことをだいぶ批判しておられましたが、あ
れは間違いなんです。「陸上自衛隊一佐」なんて言わないです。正式
の呼称は「一等陸佐」ですからね。だから階級呼称を大将・中將にし
なければ、陸上大将、陸上中將にすればいいわけで、自衛隊をわざわざ
つける必要もないと思つたんですけれどね（笑い）。

伊藤 僕らも、海原さんはずいぶんよく話してくださったんですが、

一般的には、まあとにかく怖い人だと言われる人が多いんですね。

小田村 それは非常に鋭いですからね。あの人は合理的なんです。僕はあまりに合理的すぎるんじゃないかと思う。そこが欠陥じゃないかなという気がするんですが。

伊藤 「海原さんの」お話を伺っていると、あれは駄目だ、これは駄目だ、とおっしゃるんです。「結局、あなたの防衛方針はどうなんですか」ということを聞きましたら、ウンとか言って、ご自分がこうすればいいというよりも、これは駄目、あれは駄目、とおっしゃるのがメインだったんですが、そういう傾向はありになるんですね。

小田村 そういう傾向はありますね。

伊藤 だけどもおっしゃったように、「国防の基本方針」なんていうのは積極的に自分でお書きになるという形でやっておられるわけですね。

小田村 そうですね。それから第一次防衛力整備計画の文章がありまして、それはこれにもちよつと残っているんですが、あれを「骨幹防衛力」と名づけているんですね。これはなかなかいい言葉なんです。まだ本当の骨幹だけであって、あとの枝葉ができていないということ、これからだんだん充実すべきだということですね。

もう一つ、これに落ちていいるとか、おそらく決定にならなかったんだろうと思いますが、海原さんのつくった文章には金額のことが書いてあったんです。あの当時はまだ国民総生産という言葉を使いませんで、国民所得といっていましたね。「国民所得の二%をメドとする」という言葉がたしか入っていたんです。それに対して、国防会議で大蔵省が突つついたということです。

伊藤 それを政府決定にすると拘束されますからね。

小田村 そういうことですね。それで海原さんは怒っているわけです。「そんなことを言ったって、国防費二%なんていうのは本当に些細な要求であって、本来から言えば、五%も六%も要求していいはずじゃないか」と言っていました。

伊藤 そうですか、「オーラルヒストリーでは」あまりそのことはお

つしやらなかったように思いますが。

佐道 おつしやらなかったですね。昭和二十年代は三%台とか、初期の頃はあるんですね。パーセントで決めていたら、八〇年代とかすごいですね。

伊藤 三木内閣で一%なんて言うから（笑い）。

佐道 あれがずいぶん縛ってしまいましたね。海原さんということで言うとおつしやというイメージのほかに、制服の方たちとの関係で、それをずいぶん抑えたということが一般的に言われるんですが、それはいかがですか。

小田村 制服の個人個人とは、決して悪くはないんです。例えば空では防衛課長は浦茂さんでしたか、浦さんとも決して悪くなかった。海は西村「友晴」さんだったかな、それとも悪くはなかった。陸は三部長は誰でしたか、防衛班長の田中兼五郎さんは一番良かったと思います。個人的には悪くないんです。しかし陸海空の、特に海が悪かったのかな。

佐道 「陸原」と言われていましたからね。

小田村 全体の意見になりますと、これは徹底的に爆撃する。だから嫌われるわけです。

伊藤 たしかに言い方が激しいですね。

小田村 激しいです。それから政治家のことは、私も経理局長のお供をして国防部会というのに出たことがあるんです。あの頃、予算の話なんかまったくないんです。こういう要求をしようという説明ですね。あの頃の国防部会のご関心は機密保護法です。機密保護法をなぜ早くつくらないんだということ、官房長以下叱られていました。「おまえら、何をグズグズしているんだ」ということでした。

伊藤 その頃の国防部会だと、誰なんだろうな。

佐道 保科「善四郎」さん、船田「中」さん。

伊藤 保科さんとか、そういう人たちかな。でもそういう人たちが一応防衛庁の応援団ではあるわけですね。

小田村 応援団ではあるわけですが、お金のほうはさっぱり応援して

くれない。まあ、自民党全体がそれほど――。

伊藤 要するにアメリカにおんぶしてもらっているからいい、ということでしょうね。

小田村 まあ、そういうことなのでしょうね。

■防衛庁防衛局時代 (3) 長期計画と年度業務計画

伊藤 その海原さんが在米大使館勤務になりました、高橋幹夫さんが課長になってこれますが、高橋さんはいかがですか。

小田村 高橋さんはそれまでは総務課長をしているわけですね。高橋さんに替わられて、海原さんはアメリカに赴任されたんです。ですから私はもっぱら高橋さんの下で長期計画をやったんです。海原さんが目の敵にしている、いわゆる「赤城構想」をつくったわけです。

佐道 高橋さんは海原さんと比べて、という大変ですが、お人柄とかはどうですか。

小田村 私は高橋さんという人は非常に尊敬しているんですけどね。非常に視野の広い、立派な人ですね。だから陸海空の制服の人とも非常に良かったし、課の中もみんな、ついていったのではないでしょう

か。

佐道 海原さんから高橋さんに課長が替わる。課長が替わると課の雰囲気も変わってくるということになりますか。

小田村 そうですね、課の雰囲気はある程度変わったかもしれませんが。海原さんは八月頃までおられたのかな、秋に替わられたんですかね。村上さんはその前にアメリカに行かれて、それでも海原さんはわざわざ横浜の船出するところまで見送りに来られましたよ。二人でさかんに喧嘩していたんですけれどね。村上さんは「前任、前任」と言っていたんですけれど、わざわざ見送りに来られた。

それで、村上さんのあと、会計課にいた玉木君というのを私のところにもらってきました。玉木君は怒っているわけです。その前日に会

計課が防衛一課を招待したんですね。それでさんざん接待側に回ってサーブしたのに、翌日になったらおまえ防衛局に行けと言われたという(笑い)。

佐道 玉木さんというのは、のちに官房長になられた方「玉木清司氏」ですね。

小田村 そうです。

伊藤 しかし、小田村先生は防衛一課の中でもまた別なんですか。

小田村 部屋が別なんです。制度調査委員室というのが別にありますから。

伊藤 制度調査委員というんですか。

小田村 いや、そういう部屋の名前なんです。「制度調査委員室」と書いた看板がかかっているわけです。あそこは秘密の部屋で入っちゃいけない、ということになっていたらいいですね。

伊藤 そうですか。そこに部下が何人かいるんですか。

小田村 部下は吉田君という一等海曹の方と――。

伊藤 それは武官の方ですか。

小田村 ええ、武官ですね。でもあのときは制服を脱いでいたかな。まだ脱いでいなかったんじゃないかと思いますが、海上自衛隊の曹長、一等兵曹です。それから女性が一人。それだけです。

伊藤 それはセクレタリーみたいなものですか。

小田村 事務だけをやっていました。

伊藤 じゃあずいぶん小さい組織なんですね。

小田村 小さい組織です。あとは何もないです。そこに村上さんの机と私の机がありまして、そこで各幕僚監部の担当者が来て、会議を開くということですね。

伊藤 そうすると、防衛一課のほかの方とはいちおう隔絶されているわけですか。

小田村 そうですね、向こうのルーチンのほうとは隔絶されているわけです。

伊藤 年度業務計画は。

小田村 年度業務計画は一緒になってやるわけです。ですから、陸海空も全部立ち会いました。ただ、陸は中井「亮一」さんという警察から来た人がやっていたとして、海は住田君ですね。空が高橋「儀一」君というのがやっていたんです。業務計画を聞いて、空が一番定員に苦しんでいたんです。三十二年度予算でも空のほうは最大の要望が定員増だったんですね。ところが、経理局長が折衝の時に向こうに行ったときに、定員のことを言わなかったんです。それで定員だけ、たしか次官折衝になったと思います。いやそれはちよつと残念だったな、といつて岩尾さんは非常に嘆いておられたんですけれど。ある程度次官のところでもらいました。だから空のほうはまた翌三十三年の業務計画でも定員要求が激しかったんですね。それを積み上げていくとだんだん増えちゃいまして、全部で一人近くの増員になっちゃったんです。だけど、積み上げてきた高橋君というのは相当いい加減な男でして、予算要求で会計課に持っていくますね。岩尾さんがびっくりして、これはひどいじゃないか、といつて、岩尾さんが海原さんと話したわけです。海原さんはそれを聞いて「初めて知った」、だから高橋君からは課長には報告してないんですね（笑い）。

伊藤 それは怖かったんだ（笑い）。

小田村 「いや、それは申し訳ない。僕がなんとかするから」といって、またやり直させました。

佐道 怒られたんでしょうね。先ほどからお話が出ている制度調査委員会なんです、防衛問題をずっと取材していた例の堂場「肇」さんが書かれた本などでは、制度調査委員会が自衛隊あるいはその前の保安庁時代にできて、次長とか統幕議長を主なメンバーにして、大きな構成で始まった。それに旧陸海軍の方々も参画したりして、先生が先ほどおっしゃった一次案という大きいものができて、それがやがて細かくなつていくんだ、ということを書かれています。その堂場さんがお書きになっている初期の制度調査委員会と、先生のお話で部屋があったということは、かなり実体が違うものだと思うんですが、小田村 そうですね。だからなんでその部屋の名前が制度調査委員に

なっているのか、よく知らなかったんです。

伊藤 別段、それに任命されたわけではないでしょう。

小田村 ええ、何も任命されていないです。ただ部屋の名前が依然として残っていたということですね。

佐道 制度調査委員会というのが厳然として存在するということは、当時はなかったわけですね。

小田村 もう全然ありません。

伊藤 何かほかの人が、「小田村先生は別の部屋で、われわれの知らないところで何か」という感じで話されたので、あれ何か怪しいことでもやっているのかな、と思ったんですが（笑い）。

佐道 その長期計画は、あとのいわゆる二次防とかになりますと、計画官という方が――。

小田村 計画官「ができたの」はたしか三十五年、私がいなくなつてからですね。そのときには、計画官というのはなかったんですね。それで三十四年の要求、三十五年度予算で出したのかな。これはなかなか難しいんです。要するに計画官になりますと、書記官といったかな、課長クラスになるんですね。課長クラスになるんだけれど、高橋課長が言われるには、「しかし防衛一課長の下に置くようにしてくれ」ということでした。それはなかなか難しいと思ったんですが、どういう形にしたのか、私もちよつと覚えていないんですが、そんなものをでつち上げて、要求してつくったんだと思います。

佐道 立案の時は先生がおやりなつたわけですね。

小田村 私もしました。高橋さんの要望はそういうことだったんです。計画官をつくりたいんだが、しかし課長の下になつて、一課長の指揮下に置くようにと。ただ考えてみると、こういう職はその後多くの省でできています。

佐道 先生は実質的に、その計画官のちに担当する仕事をなさつていたということになりますか。

小田村 まあそういうことですね。それで、玉木君が来て次期計画をつくることになるんですが、会計課に当時おつた西廣「整輝」くんと

いう、まだ部員になっていなかった人をアシスタントとしてもつけてまして、彼に手伝わせた。玉木君が胸を痛めて、しばらく郷里の高知で療養していたということもありました。その時には代りに伊藤「圭一」君が来ていたように思います。

伊藤 一次防をつくって、国防会議を通して決定して、閣議決定もやる。そうするとすぐ次の長期計画に入るんですか。

小田村 はつきり覚えていませんが、おそらく次の年度の業務計画が始まっていたと思います。ですからその業務計画にずっとかかっておって、業務計画が終わって、新しい課長の高橋さんが来られてから次の計画にかかったように思います。

伊藤 やっぱり長期計画というのは、かなり年月をかけてつくって行くわけですね。

小田村 そうですね。

■防衛庁防衛局時代 (4) 防衛庁の省昇格論議

小田村 これも言うておきますが、業務計画に必ず情勢見積りというのがあるんです。これはたしか一課で起案するんですね。その中の一つに、今年の国内情勢のことが出てくるわけですね。「紛争の危険性はないが、憲法改正は来年度中はできないであろう」ということが必ず載っているんですね。当時まったく可能性はないですね。岸さんが憲法調査会をつくるかどうかというときですから。

これがあとで私はわかったんですが、増原さんがあとで大臣として来られましたね。そのとき私はちょうど局長をしていたんですが、

「だいたい憲法改正なんていうのはとつくの昔にできているはずだったんだ」ということを増原さんが言っていました。憲法改正が今年も無理だというのが毎年例文になっていて、何だと思ったんですが、自衛隊創設の頃は、だいたいそういう感じだったんだと思います。

伊藤 まだあの頃は、改正ということは政治日程としていちおう掲げ

られる段階ですね。

小田村 そうなんです。保守合同がそうでしね。

佐道 憲法改正もそうなんです。先生が行かれた頃に、防衛庁の省への昇格という問題が話題としてずっとあったと思うんです。当時、これはいかがでしたか。実感としてございましたか。

小田村 省昇格の話はあったのかもしれませんが、あまり大きな話にはなりませんでした。省昇格に僕がタッチしたのは、大蔵省に戻ってからです。昭和三十九年頃だったと思います。

佐道 池田内閣の時ですね。

小田村 そうです。池田首相、黒金「泰美」官房長官のときです。

佐道 自民党総務会でも要望事項として決定して、法案として出してくれという話になって、結局出なかったという、あの時点ですか。

小田村 ええ、その時点です。それで僕は法規課主計官をしていたんです。課長が誰だったか、相沢「英之」さんだったと思います。そのとき局長は石野さんでしたか。要するに上の方から、国防省昇格についての反対論を書いてくれというんです。それを僕に書かせるというのはとんでもない話なんだけれど。

佐道 本当は賛成ですからね（笑い）。

小田村 要するにそれは黒金さん、官房長官から来ているんです。その趣旨はシビリアンコントロールの問題なんです。つまり総理府の主任の大臣である内閣総理大臣の、防衛庁長官は下にあるわけですね。そうであるから、総理大臣が指揮監督できるんだ。これが内閣の一員である国防大臣になってしまうと、総理大臣としては、内閣の長として監督するだけになってしまう。

伊藤 そうか、内閣法があるんだ。

小田村 だから閣議決定が必要になるわけですね。それは好ましくないと趣旨で書いてくれということだったんです。僕は反対ですから、総理大臣の特別権限として法定すれば、それはなんら問題ないというように書きました（笑い）。

伊藤 そうですか、省昇格反対は、いちおう意味のある議論があるん

ですね。

小田村 そうなんです。たしかにそういう考えはあり得るわけです。

伊藤 それはいままで僕もちよつと聞いたことがなかった。時間です
ので、ここで切りましょう。

小田村 次は、赤城構想と、もう一つFXがあるんです。

伊藤 それでは次回、赤城構想とFXでお話をいただいて、もし時間
がありましたら、そのあとのほうに進ませていただくことにいたします。
ありがとうございます。ではまた次回よろしくお願い申し上げます。

〈以上〉

小田村 四郎

オーラルヒストリー

第 5 回

防衛庁防衛局時代Ⅱ（1957～1959）

【2003年7月7日（月）14:00～16:10】

（於：政策研究プロジェクトセンター）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

記録・編集：丹羽 清隆

第5回質問項目

1. 今回も防衛庁時代のお話をお願いします。当時、統合幕僚会議の権限強化問題が再浮上し、麻生彦官房考査官の下で検討が進められていました。すでに防衛庁における内局・制服組の関係がいろいろと議論されていたわけですが、この統幕権限強化問題についてご記憶はございますか。
2. 「第一次防衛力整備計画」は三年間の計画でしたので、早速その後の計画策定が必要になります。これがやがていわゆる「赤城構想」というものになっていくわけです。先生はこれの作成にあたられたということですが、計画立案にあたっての基本方針や作業の進め方についてお願いします。
3. 「赤城構想」については、制服組の意見をかなり取り入れた計画であるという評価があります。この点についてのご意見をお聞かせ下さい。
4. 赤城長官は、59年7月に長期計画について記者に話し、それで「赤城構想」として話題になりました。記者に話すタイミングは事前に考えておられたのでしょうか。また、その後の同構想への評価について、先生はどのように考えておられますか。
5. 先生が防衛庁に在籍しておられた当時、FX問題がありました。航空自衛隊の次期戦闘機の選定問題ですが、当初ノース・アメリカン F100 とロッキード F104 が候補とされ、後者が有力視されていました。ところが、57年8月の永森調査団の派遣後、グラマン F11F が急遽浮上し、58年4月の国防会確でグラマン F11F の採用が内定しました。その後、59年6月にはその決定が白紙還元され、同年11月にはロッキード F104C の改造型が採用されることになります。グラマン F11F が採用されたいきさつや、それが白紙還元されロッキード F104 の採用となった経緯など不可解な点も多く、「1000億の喪中戦」とグラマンとロッキードの激しい商戦が繰り広げられたと伝えられています。前回、この問題に関係している旨のお話がありましたが、どういう点について関与されていたのかをお願いします。

6. 59年6月、グラマンF11Fが採用白紙還元された後、その年の一月に就任したばかりの伊能繁次郎氏が赤城宗徳氏に交代します。伊能氏は白紙還元の責任をとったとも言われていますが、いかがでしょう。
7. 先生は59年11月に大蔵省に戻られます。その後、防衛庁では、海原氏が防衛局にもどって「赤城構想」をつぶすべく奔走します。この件については当時、先生はどのように見ておられたのでしょうか。
8. 日本の防衛政策の基本には日米安保体制があります。岸内閣は、その改正を目指して米国と交渉し、改正を実現しますが、60年には国民の反対運動に直面し、岸内閣は総辞職に追い込まれます。反安保の運動が激化してからは先生は大蔵省に戻っておられたわけですが、この安保改正問題については当時どのように見ておられたのでしょうか。
9. 上の質問とも関係しますが、反安保運動が激しくなったとき、岸首相は自衛隊の治安出動を考え、それが赤城長官に拒否されるということがありました。これも60年に入ってからのことではありますが、先生ご自身はこの問題について何かお聞きになったりしたことはありますか。あるいは当時、自衛隊出動の可能性についてどのようにお考えでしたか。

※今回は以上のような点についてお願いします。

■「補」防衛分担金

伊藤 今回も防衛庁の時代のお話をお願いしますが、何か前回のことで補充なさることはございますか。

小田村 ちょっと補足もしたいと思います。一つは会計課長の岩尾

「一」さんのことで追加です。この方は、七高・京大でラグビーをやっていたんですね。防衛庁に來られましてからも、防衛大学のラグビー部を育てまして、長らく監督兼顧問みたいな形でやっておられました。これは大蔵省に戻ってから継続してやっておられました。この方は国税から主計畑に行かれて、主として厚生省關係を担当しておられたんです。ですから厚生労働關係に大変造詣が深かったし、知人もいたわけです。防衛庁のほうも、人事關係の問題、例えば年金などですが、そういうときには必ず岩尾さんに頼んで、いろいろ委員になっていただいたり、教えてもらったりしておりました。ですからそういう点ではいぶん防衛庁に貢献しておられると思います。

伊藤 この前、各省からの出向者の雑軍だというような言い方を私はしましたが、それはメリットでもあるんですね。

小田村 そうなんです。そういう点ではメリットなんです。それからもう一つ、よくわからなかった防衛分担金ですが、これは国会図書館で調べてきました。

佐道 それはすみません、申し訳ないです。

小田村 『国の予算』という、主計局がつくって毎年出している厚い本があります。それを見ますと、こういうことなんです。昭和二十七年度の予算は、占領中に原案を作ったわけですが、このときに防衛支出金として六五〇億円計上されています。この六五〇億円の積算基礎ですが、終戦処理費が二十六年度に九九九億円だった。それに物価上昇率三〇%をかけて一・三倍すると、約一三〇〇億円になる。六五〇億円というのは、つまり二十七年年度の終戦処理費に該当すると思われる

額の半額を防衛支出金として計上したものです。だから半分は米軍駐留軍がもちなさい、ということだろうと思うんですね。

その六五〇億円の内訳は、駐留軍施設の借料が九二億円、差し引き五五八億円（一億五五〇〇万ドル）が防衛分担金になったわけです。そのほかに、わけのわからない安全保障諸費五六〇億円というのがついたんです。その安全保障諸費は何かというと、當舎とか通信施設とか、そういうものに充てる予定だった。

伊藤 それは米軍の、ですか。

小田村 米軍です。そういうことになっています。ただ、最後には防衛庁の建物に使ってしまうわけですから、そのへんがよくわからないです（笑）。これは二十七年年度の予算に計上しましたが、二十七年使用中に使用したのは五六〇億円のうち二九億円です。

伊藤 あまり使っていないんですね。

小田村 ですから、使い途がなかったわけですね（笑）。それで残りの五三一億円は二十八年度に繰り越した、ということです。

伊藤 繰り越すことができるんですか。

小田村 明許繰越になっていました。それは自動的に繰り越しができるんですが、そこでも使い切れないで、結局二十九年度の終わりになつて、庁舎をつくったということです（笑）。

伊藤 初めから計画してたんじゃありませんか（笑）。

小田村 いや、そういうことではありません。これはたいへん評判が悪かった。二十七年年度の警察予備隊費が五四〇億円で、二十六年度の三一〇億円に比べるとかなり膨らんでいる。分類としては当時から「防衛關係費」と称しておったと思います。

伊藤 「防衛費」ではないんですね。

小田村 「防衛費」ではなくて「防衛關係費」。

伊藤 さっきおっしゃった防衛分担金というのはどこのお金になりますか。

小田村 これは米軍に使うものです。

伊藤 所管はどこでしょうか。

小田村 所管は、私もよくわからないんです。そこまで調べませんでしたが、たぶん調達庁ではないかと思えます。

伊藤 その当時は、調達庁は防衛庁とは別ですね。

小田村 別です。総理府直轄ですね。それで二十八年度になりますと、五五八億円の防衛分担金はそのままで、施設提供等諸費というのが三〇億減って六二億円になります。ですから、防衛支出金としては三〇億円減って六二〇億円になった。このときには保安庁になります。保安庁経費が六一四億円で前年よりも増えております。警察予備隊費が二十七年当初予算五四〇億円なんですが、どうも補正で五〇億円膨れています。安全保障諸費から流用したのかもしれませんが、何かよくわかりません。

防衛分担金を防衛庁費の増加額の半分を減らすという問題ですが、防衛分担金はその後、二十八年度が五五八億円で前年度同額。それが二十九年度は三五億円ほど減りまして、五三三億になるんですね。三十年代はそれから約一五〇億円減って三八〇億、三十一年度は三三〇億円になる。どうも毎年、これを減らすためにアメリカと折衝していたということのようです。どうもこれは、毎回そういうことは好ましくないもので、ルールを作ろうということで、三十一年一月三十日に、「防衛分担金削減に関する日米共同声明」というのが出ています。これは重光外務大臣とアディソン駐日大使です。

これで、防衛庁費と米軍用の施設費の増加額の半額を防衛分担金から減らすという約束ができました。それで三十二年度予算は、結局、防衛庁経費が一〇一〇億円で、前年度から八億円しか増えなかったものですから、防衛分担金は前年の三〇〇億円から四億円減って、二九六億円になったということです。施設提供等諸費のほうは九九億五五〇〇万円で前年度と同じ。軍事顧問団経費も六億一〇〇〇万円で、これも前年度と同じ、ということになっております。

それで三十三年度ですが、またアメリカと折衝しまして、三十三年一月に政府声明が出ております。「昭和三十三年度の防衛分担金について」ということで、米政府は去年の半額削減に加えて、三〇億

の追加削減に同意するというところでございます。それはどういうことかというと、防衛庁費が三十三年度予算は一二〇〇億円になった。ですから前年より一九〇億円増えたわけですね。ただし施設提供等諸費が七〇億円で、約三〇億円減ったものですから、合計で増加額は一六〇億円。一六〇億円の半額の八〇億円プラス三〇億円で、結局一一〇億円を減らして、一八六億円になった、これが防衛支出金です。そういう内訳になっております。昔のことは忘れていたんですが、思い出しました。

それから繰越額が非常に多かった。例えば前年度からの繰越額が、二十八年度は二八九億円、これは防衛庁費です。二十九年度が二五七億円、三十年度が二三四億円、三十一年度が二二八億円、三十二年度が二三六億円。そのために三十二年度の予算の増額が非常に少なかったわけです。ただ支出済額で比べますと、だいぶ増えているわけですね。三十二年度の予算消化は順調で、翌年度への繰越が三十三年度で減ったものから、三十三年度の予算はそれだけ増えたということです。ですから長期計画の計算をしてボコンと膨れたというのは、三十二年度予算がそういうことで抑えられたという点もあったわけですね。

伊藤 防衛分担金の問題は、たしか鳩山内閣のときに重光さんが訪米して、交渉をして決めたんだと思います。鳩山さんの回顧録にもその点が出てまいります。

小田村 そうすると、向こうで話をしたんですね。ただ、共同声明はアディソン駐日大使との合意ということで発表されています。また、三十四年度には防衛庁費の増額分の全額を削減することが認められたと記憶します。

■「補」国防会議事務局の誕生

小田村 もう一つは面白い話ですが、海原「治」さんのオールヒス

トリーを読んでみましたら、「防衛一課は『暴力一課』と言われていた」と書いてあるんですね。勇ましい人間がたくさんいた。あるいは前から言っていたのかもしれませんが、会計課と防衛一課の慰労会を会計課がやってくれたときに、とにかく勇ましいので、「あれは防衛一課ではなくて暴力一課だ」ということを、会計課の中川「正義」君という部員が言っていたという記憶があります（笑い）。

伊藤 それは元気が良すぎるわけですか。

小田村 そうですね、手も出すし（笑い）。それから、このあいだ高橋「儀一」、住田「正二」、中井「亮一」の三人は申し上げましたけれど、あと総括担当というのか、渉外関係といったほうがいいかもしれませんが、沢木正男さんというフイリピン大使をやられた方が筆頭でおられました。それから、陸の中井さんの下にもう一人、松橋忠光という人がおりました。警察なんですけど、あとで警察に反旗を翻して変な回顧録を書きました（伊藤 はい、有名になりましたね）、あれがおったんです。私も一緒に出張したりして、仲が良かったんですけれど、これも酒がずいぶん強かったですよ。

佐道 危ないところですね（笑い）。

小田村 それから海原さんについて噂ですが、高橋君という空を担当していた部員は、海原さんが知り合いだから連れてきたという話も聞いています。彼は「クモ」と言われておって、糖尿病なんです。だから年がら年中ウイスキーを机の下に隠しておきまして、ときどき飲んでる。それで、決裁とか報告事項があるときに、「いまちよつと駄目だ、いま先任はヒステリーだから」というようなことを言っていた。だから時を見計らっていく（笑い）。

伊藤 糖尿にはウイスキーがいいわけですか。

小田村 どうなんですかね。糖を要求するので、それで飲むんじゃないでしょうか。よくわかりません。

それからもう一つ申し落としたことで、私が防衛局に行きましたのが昭和三十二年三月ですが、その前年、三十一年十月頃に、国防会議の事務局ができました。そこに専任の参事官が一人行ったわけです。

それが堀田政孝さんという方で、内務省十五年「入省」の方です。これは後ほど山形から選挙に出まして、衆議院議員になりました。この方は、来られてから知り合ったんですが、私の高等学校の先輩なんです。

それから兼任参事官は、そのときは海原さんが防衛庁から、それから通産省からは赤沢「璋一」さんが行ったと思います。大蔵省は主計官の吉村「真一」さん、外務省は安川「壮」さん。そういうメンバーだったと思います。堀田さんの下に、専任の補佐として、このまえ香川「鉄蔵」先生のところでちよつと申し上げた亘理「彰」君が行きました。ですから私は、国防会議の状況は亘理君からよく聞いておりました。例えば防衛力の整備に関係して、池田「勇人」さんが懇談会で「核は安ければ入れた方がいいじゃないか」とおっしゃったという話も聞いていました。

武田 ええ、そうですね。

小田村 そういう話も聞かせてもらいましたね。

伊藤 安ければ、ですか。

小田村 安上がりになりますね。例えば、これは制度調査委員室に村上「信二郎」さんと二人でいたときに、空の山口「二三」二佐、あとで自殺しましたが、たいへん立派な方がいました。その山口さんが夕方来まして、「いや、米軍に聞いてみるとF86Fでも核を積めるんだ」と言うんですね。「まあ、懸吊下がちよつと問題があるけれど、搭載することは大丈夫だという話なので、仮に北海道にソ連軍が上陸した場合、それを使うことは可能であるという話だった」ということを秘かに言ってこられたんです。それならば、陸の十八万は要らんじやないか（笑い）。

佐道 そうなりますね（笑い）。

武田 本当に安上がりですね（笑い）。

伊藤 そういう意味ですか（笑い）。それは「核が」小型化されているということですか。

小田村 ええ、そういうことですね。

伊藤 しかし買うとなったら、そう安いものでもないでしょうね。

小田村 もちろん、アメリカからもらうという意味だと思いますよ。

佐道 常時十八万人いるよりは安いんじゃないですか。

小田村 そういうことですね。それから会計課に、三十一年の十一月か十二月に大蔵省から二人若いのをもらったんです。一人は、岩尾さんが大蔵省と話してもらってきたんですが、矢崎新二、あとで防衛次官になりました。それから檜崎泰昌、これは私が経理局長のときに会計課長で来てもらいまして、その後、参議院に出まして、しばらく参議院議員をやった男です。この二人に来てもらって、非常によく働いてもらいました。

伊藤 大蔵から防衛に来て、防衛で終わりを迎えるという方もいらっしゃるわけですね。

小田村 それは後ほどです。田代「一正」さんになってからだと思います。矢崎君というのは東大の土曜会といったかな、佐々「淳行」君とか、亡くなりましたが若泉敬、ああいう人たちと一緒になんです。それで、先月お話ししました内調の志垣民郎君が基が強くて、矢崎も基が強い。それで基の相手をよくしているということ聞いておりました。だいたい以上が補足でございます。

■統合幕僚会議の強化

伊藤 それでは、一九五七「昭和三十二年」、年統幕の強化という問題が浮上していますが、これはお聞きになっておられましたか。

小田村 私はこのときの話はあまり知らないんです。ただ、統幕からもヒアリングをいろいろしていました。私としては、とにかくいまの統幕では弱い、むしろもっと権限を強化したらいじゃないか、特に仮に有事になって作戦を実行するということになるバラバラになってしまふ、と考えていたわけです。

担当の陸海空に聞いてみましたら、陸と空は賛成なんですね。とこ

ろが海、これは石田「捨雄」さんが担当しておられたので石田さんに聞きましたら、賛成しないんです。「統幕が強化されると、それぞれの幕僚監部としての独自性が減って、いろいろな面でぎくしゃくする。それからもう一つは、文民統制という意味からいってもあまり適当ではない、みなさんは三つ置いておいて、それぞれ喧嘩させておけばいいですよ」というようなことを石田さんは言っておられました。

要するに統幕強化については、海はたいへん消極的だったということです。海がそういうことだったら、実際無理だろうと思って、私もそれ以上詳しいことは聞いておりません。

伊藤 どこでも陸海空の統合は非常に難しいようですね。

小田村 難しいんですね。

伊藤 言うべくして行ない難い、という問題のようですが。

小田村 しかし今度は何とかなるんじゃないかと思えますけれどね。伊藤 やっぱ海があまり積極的でないというのは、戦前に海軍が陸軍の下に置かれてしまった、ということもあるんじゃないかな。

小田村 ええ、陸海対立の経験もあったと思いますが、旧海軍の伝統を伝えていきたいという気持が強かったと思います。もう一つ大きいのは米軍との関係だと思えますね。陸海空の中で、米軍と一番密接に連絡、協力して、共同演習などもやっているのは海ですね。作戦構想から、「陸海空の」統合よりも、日米連合を海としては重視していたので、米軍との関係で統合強化がどういうことになるのか心配だったんじゃないかと思うんです。

伊藤 陸は在日米軍とはあまり関係ないわけですか。

小田村 関係ないです。在日米軍も、陸軍は撤退しましたので、残っているのは海兵隊だけです。これも海軍ですからね。空は府中に司令部があつて、これとは密接にやっておりますが、空はどちらかというと、比較的そういう主張が薄いほうでした。

■次期防衛力整備計画 (1) 赤城構想の計画立案

伊藤 一番大きな問題である防衛力整備計画ですが、計画策定の場面は、手続としては年度計画とあまり変わらないわけですか。各幕から今後三年間にやりたいことを上げてくるわけですか。

小田村 三年計画の三年ですが、もともと三十一年度から三十五年度までの計画だったわけです。ところが、三十一年度、三十二年度はもう予算が決まっておりますから、残りの三十三、四、五年度、ということになったわけですね。ただ空だけは、パイロット養成の関係で二年延びたということでございます。そうすると、三十六年度からの計画をつくっておかないと、その次の予算編成ができなくなる。これができるのが三十二年ですから、あと部内で調整して、国防会議にかけるには相当時間がかかるということで、三十二年の秋頃から取りかかるとにしましたわけです。そのときにはもう海原さんはアメリカに行かれて、高橋「幹夫」さんが課長になっていました。私は、かなりの分量の「次期防衛力整備計画の構想」という、極秘か機密かどうかだったか忘れたんですが、文書を書きました。情勢分析から、それに対してどう考えるかということを書いておいたわけです。

伊藤 やはり情勢から見ても、演繹的にこういうことが必要ではないか、というふうになって行くわけですね。最初にお書きになったものは。

小田村 最初に書いたのは、まだ具体的な整備ではなくて、方針・考え方の整理でした。具体的な内容については、各幕で自由に構想を出してきたもらいたいということで、幕僚監部に依頼したわけです。そうしましたところが、それぞれから持ってきたものはたいへん膨大な構想だったわけです。例の整備計画の第一次案みたいなものですね。

ああいう膨大なもので、とても手に負えない。一つずつ海原さん流に叩いていけばいいわけですが、それをやるととても大変です。そうしましたら陸の松金「久知」さんから、「それは小田村さん、一つ一つ理論的に説得しようとしても無理だ。これは要するに金の枠を出しな

さい。その枠の中で考えさせればいい」という忠告がありましたので、「わかった」ということで――。

伊藤 何か大蔵省の発想ですね。

小田村 それで枠をつくることにしまして、課長と相談したんです。いままでの計画を見てみると、陸はあの方向でいいと思う。それから空は次期戦闘機とか地对空誘導弾がありますね。誘導ミサイルの問題がありますし、レーダーサイトも返ってくる。そういうことで相当経費がかかる。これも重点に置かなければいけない。そして高橋さんと一致したのは、どうも海が少な過ぎるのではないか、ということなんです。海は、作戦構想自体がどうもみみっちい構想である。もっぱら船団護衛と港湾防備と対機雷作戦だけだ。言わば米海軍の補完部隊といった色彩が濃い。船団護衛は内航護衛・外航護衛がありますが、内航護衛は大したことはない。外航護衛はサイパンまで一千カイリという考え方なんです。サイパンから先はどうするのかというと、その構想は全くない。「どうもこれはおかしいんじゃないか。もう少し構想を別に考えさせたらどうだ」というのが高橋さんのご意見で、私も全く同感でした。

それで少し細工いたしましたして、伸び率を加減しまして、海の金額が大きく伸びるような形で枠をつくりました。全体の枠は、経済成長率を何%にしたか、当時まだ池田内閣ができておりませんでしたから、比較的緩い経済成長だった。少しそれを大きくしまして、傾向線を引っぱった。したがって防衛関係費もそれと共に少しずつウェイトが高くなるというようにしました。どれぐらいだったか私は覚えていないんですが、いちおう枠を与えて、その中で作業をしてくれ、ということにいたしました。

それを課長と相談して、だいたい固めていきました。初めは私は「第二次防衛力整備計画」と言っておったんですが、高橋さんが、

「どうも二次となると、今度は三次、四次というのが出てきて、どこまで続けば終るのかという感じを持たれるから、『次期防衛力整備計画』としたほうがいいのではないか」というので、それから「次期防

衛力整備計画」という名前にしたんです。

当時、統幕会議のほうでアメリカの長期計画の研究会がございました。そこで話を聞きますと、アメリカはローテーション方式なんですね。これは一番いいんですが、アメリカの場合は科学技術の動向から始まって、十年、二十年先のことを考えていくわけです。それはわが国ではとてもできませんから、せめて少しづつ、三年ぐらいでローテーションしていくような考え方がいいのではないかとということで、「次期計画」という名前にしたわけです。

■次期防衛力整備計画 (2) 陸上自衛隊

まず陸のほうから申し上げます。陸が言ってきたのは、例の六管区隊、四個混成団を十三個師団に編制替えすることです。これは課長と一緒に話を聞きまして、それはたいへん結構じゃないか、ということでした。あのとき、田中兼五郎さんが業務計画班長になったんです。初めは渡辺利亥さんという一佐が計画班長をしてもらったんですが、この方が転出した後任です。田中兼五郎さんというのはなかなか立派な方で、こういう追悼録があります「『田中兼五郎追悼録』を示す」。私も一文を書いてくれというので、書きました。ニューギニアの十八軍の参謀をしてもらった方です。

それから五個方面隊です。あの当時はまだ北部しかなかったんですが、五個方面隊をつくりたいということですね。これは海原さんのオーラルヒストリーを読みますと、「いない間にやられた」と書いてありました。それから、第七師団を機甲師団にしたり、特車という名前を戦車に変更したりしました。階級呼称もやりたかったんですが、ちよつとそこまでは、ということ、やりませんでした。そういうことで、従来の陸の構想をそのまま延長するというような形でしたから、これはあまり問題がなかったんですね。

伊藤 その階級呼称の問題というのは、どこが引っかかったんですか。

小田村 どこということになしに、階級呼称の問題になりますと、防衛局よりは人事局の問題になりますのでね。ただ、ちよつとそこまでは陸幕としても元氣が出なかったのかもしれない。

伊藤 何か手直したりして、旧軍のことを思い出されたりすると具合が悪いという配慮があったんじゃないですか。

小田村 あつたのかもしれませんが。上等「兵」とか「軍」曹という呼称にひっかかったのかも知れません。従つて兵科の普通科(歩兵)、特科(砲兵)もそのままでした。でも師団までつくつたわけですからね。

■次期防衛力整備計画 (3) 海上自衛隊

小田村 それから海は、結局こういうことでした。どうも対潜作戦だけに特化してしまっているわけですね。これはなかなか簡単には直らない。あの頃はまだ李承晩ラインの記憶が生々しいときですから、李承晩ラインに対しては海上保安庁もありますけれど、もうちよつと海上自衛隊も考えなければいけないだろうということで、魚雷艇、それから潜水艦ですね。だいたい潜る潜水艦は、当初は攻撃兵器だからということで、自衛隊はあまり考えていなかったんですね。「くろしお」というアメリカから供与を受けたものがありますが、これは、対潜作戦をやるには潜水艦がなければ訓練ができないじゃないか、ということでもらつたわけです。

伊藤 じゃあ標的のわけですね。

小田村 標的なんです。そのほかに、新しく新造の第一艦ができましたかね。たしか川崎重工の神戸で造つたと思うんですが、潜水艦をもつと重視すべきではないかということがありました。それから、できれば魚雷艇が欲しかったんですね。魚雷艇を置いておけば、対上陸作戦にもいい。それから私が言ったのは、「敵の上陸作戦がある以上は、やっぱり雷撃が必要ではないか。雷撃機というものを考えないのか」

ということですが、したがって雷撃機もちよつと入れておいたと思うんです。ただこれについては、空の浦「茂」さんが、「これをもしやるとすれば、航空自衛隊にやらせてくれ」ということでしたが、それはまあどちらでもいい、ということでした。

海が何を出してきたかという、皆さんにたいへん叱られたヘリ空母なんです。海は、護衛艦が船団を護衛するだけで、まったくの専守防禦なんです。ね。「これではあまりアピールしないし、何か考えろ」と言っていたんですが、それは課長が直接言われました。防衛課長は西村友晴さんだったか、あるいはそのあとに來た山本啓志郎さんだったかもしれません。北村謙一さんが先任防衛部長で、北村さんの発案だと思えます。それで「対潜掃討作戦」ということを考えた。つまり、敵が来るのを待つてやつつけるというのではなくて、敵を発見して、それを掃討するという積極的な方向に転じようという構想を持ってきたわけです。これならば多少世間受けはするかな、という感じがしたものですから、「それじゃあそれを詰めてくれ」ということで、そこで出てきたのがヘリ空母なんです。対潜作戦をやるにはヘリコプターが一番有効であるということ、それではヘリコプター空母をパイにつくる。ところがパイ造るだけでは足りないんですね。護衛艦がつかなくてはいけない。護衛艦六パイでしたか、そうすると膨大なものになるんですね。対空防衛も当然持たなくてはいけないわけです。そうしますと、経費としてはずいぶん大きくなってしまいます。

このヘリコプター空母というのは、世界にもあまり例がないし、果たしていいのかな、という疑問はずつとあったんですが、海幕の山本さんや北村さんが言われるには、「これは平時の場合でもずいぶん役に立ちますよ。例えば災害救助のときとか、難民救助とか、そういうときにも使えるので、いろいろな意味で多用途があるから、無駄にはならない」ということでした。

だいたい対潜作戦については、合理的に考えると、まことに難しい問題があるんです。それをちよつと申し上げますと、海原さんもおそらく同じような意見だと思うんですが、亘理君からもらった文書があ

るんです。当時主計局次長だった村上孝太郎さんが書かれた四、五枚の論文で、どういふ場合に対潜作戦が必要になるかということでした。第一次大戦のときもUボートがアメリカの船を攻撃して、その結果アメリカが参戦することになった。潜水艦を何に使うかということ、結局、軍艦攻撃ではなくて商船攻撃である。だからもしそういうことで交通線がやられることになる、攻撃するほうはその船がどこの国であるかわからないですね。だから潜水艦攻撃をする場合には無差別攻撃にならざるを得ないというわけです。そうしますと、当然アメリカが参加してくる。そうなると必ず全面戦争になる。したがって、潜水艦による海上交通線の攻撃は、全面戦争を覚悟しない限り実際問題として起こり得ない。これが村上論文の骨子なんです。一方、海原さんは、そういうこともあるんですが、むしろ広い太平洋で潜水艦なり海上交通線を確保するなんていうことはもともと無理な話だ、というお考えだと思ふんです。

村上さんの意見はたいへん合理的です。これはたしかに一理あると思います。海幕の西村防衛課長に、「こういう意見があるが、どうだ」と言ったら、さつそく反論を書いてきました。「そんなことを言っても、仮に一隻国籍不明の潜水艦にいたずらをされたら、日本の交通は干上がってしまう。誰もそんな危険を冒して動く船はなくなってしまう。そういう理論に惑わされてはいけません」ということでした。私は、対潜作戦上だけでは有効かどうか説得する自信はないけれど、やはりシーパワーというのは、「アルフレッド・セイヤー・マハン」ではないんですが、平戦時を含めてどうしても必要なものだ。だから有事における戦術的合理性ばかり考えるのではなく、しかも対潜作戦だけということではなくて、軍艦というものは造っておけば平時においても非常に役に立つものではないかという感じがしていたわけです。それはなかなか書き表わしにくいので、表には出しておりませんが、おそらく高橋課長も同じような気持ちではなかったかと思ひます。

そうだとすれば、ヘリ空母に六パイの護衛艦がつくというのは少し大袈裟すぎるけれど、船をたくさん造るのはいいだろうということで、

それを認めましょうということにしたわけです。これがヘリ空母問題です。ですから、これは戦術的に合理的かどうかということを詰められたら、おそらく駄目でしょうね。

伊藤 どのぐらいの数のヘリを積み込むんですか。

小田村 私もはっきり覚えていないんですが、八〇〇〇トンで、海原さんのオールヒストリーを読みますと八機ぐらいだと書いてありますね。このヘリコプターの問題はちよつと先に延びますが、これを引き継がれたのが村上信二郎さんで、そのとき、ダッシュという無人ヘリを積む護衛艦ができました。そういうふうになり換えられたんです。そういう意味で、ヘリコプターは使えるようになりました。

伊藤 無人で探査するわけですか。

小田村 そうですね。無人で探査して、攻撃するんですか。私はおりませんので、詳しいことはわかりませんが、その後、例のヘリコプター搭載の護衛艦ができましたね。「はるな」と「しらね」ですか。あれは私が経理局長の頃に出来上がったんです。

伊藤 やはり海上自衛隊というのは対潜というのがメインになるわけですか。

小田村 対潜重視は、アメリカとの関係なんです。要するに米軍は空母機動部隊が中心ですから。あとは潜水艦のポラリスですね。そうすると一番怖いのは潜水艦です。ソ連が潜水艦王国でございましたからね。

伊藤 当時は原子力ですか。

小田村 当時はまだ原子力じゃなかったと思います。原子力は逐次出てきました。それから特に旧海軍が一番軽視していた補給問題なんですね。『海上護衛戦』という本を大井篤さんが書いておられますが、潜水艦を軽視しておった、ということですね。

伊藤 潜水艦による攻撃ですね。

小田村 そうです。そういう意味で、海上自衛隊は普通の海軍とやや違って、対潜作戦に特化しておったわけです。だから例えば、昭和五十何年かに江藤淳さんも、「海は海上戦力としての構想が少し足りない

んじゃないか」ということを書いておられました。私も素人を見て、これは海軍としては中途半端といいますが、一つに偏りすぎて、ほかの守りがおろそかになっているという感じがしておったんです。潜水艦の増強と、魚雷艇の方はうまくいかなかったんですが、そういうものに少し力を入れてみたんです。

■次期防衛力整備計画 (4) 航空自衛隊

空は、一次計画でFXの整備に着手することになっていましたから、FXは決まるものという前提でした。問題は誘導弾ですね。この誘導弾というものは一体どういうものかということが、当時はまったく誰にもわからないわけです。ちよつと誘導弾の話を申し上げますと、海原さんの本にはアメリカからと書いてありましたが、スイスなんです。スイスのエリコン社というのがありまして、三十二年度の予算で、エリコンというミサイルを技術研究所が買ったんです。技研が実物を買って研究しようということになったわけです。

買ったのはいいんですが、どこに持って行って、どこで実験・研究をするかということ、いろいろ候補を当たった結果、新島にしようということ、新島に実験場の基地を造り始めたわけです。国有地があつたんだらうと思います。そうしましたら、新島が左翼の攻撃の的になりました、東京からいっぱい押しかけて、「ミサイル基地になる、こんなものができたらいっばい核攻撃されるかわからない」ということで、大騒動になってしまったんです。結局どうなったんですかね、充分な研究ができなかったんじゃないかと思えます。そういう騒動がありました。ですから誘導弾というと、世間ではミサイルということ、すぐ核に連動するわけですね。そういう情勢だったので、どうも誘導弾についてはなかなか表に出しにくい。

実はアメリカから、ターターという艦上ミサイルを供与してくれるという話がありました。有償で供与してくれるという話があつて、そ

れはたいへん結構だということで、三十四年度の予算だったと思うんですが、入れることにしました。経理局長の山下武利さんはいたいへん喜びましたが、「これはいい話だが、表にミサイルと出すと、予算が通るか通らないかわからない」という。ですから、電子部品というような名称にして一部をつける、残りを翌年度搭載用機器としてまた持つてくる。そんな小細工を弄して予算をつくったことがあります。そんな世の中の空気だったんですね。

それで、当時はナイキとホークとボマークというものがありません。ボマークは相当長距離の防空ができるという話でした。それで空幕に、こういうものはどうなんだと聞きましたら、これはたいへんいいので、自分たちとしてもぜひ使いたいということでした。それは防空用だからいいんじゃないかということで、ボマークとナイキとホークの三つを考えたわけですね。それをどこに配属するかということですが、これがなかなか陸と空で取り合いをしてうまく行かないんです。それで統幕で研究会がありまして、三十二年春でしたか、「とにかくナイキ、ホーク等の地对空ミサイルを早く導入しなければいけない」というわけです。配属についてははっきり言わないけれど、早くやる必要がある、というわけです。早くやる必要があるというのは陸なんです。陸はある程度の体制ができていますが、空はまったく体制ができておりませんから、とてもそこまで手が回らないんです。

それで三十三年度の予算でしたか、ロケット実験訓練隊が千五百人だったか、数百人だったかもしれませんが、予算でつけました。それが編成されていたんですね。陸と空との取り合いになるわけです。そこで、どうも私も時期はつきり記憶がないんですが、これはなんとかケリをつけましょうということで、誘導弾の配属問題を検討する委員会ができました。ちょうど村上さんが三十四年頃に留学から帰って来られましたから、村上さんに担当していただいたと思うんですが、キャンプに防衛研究所の佐伯喜一さんになってもらいました。佐伯さんはいたいへん喜んで、これは面白いと言っておられました。そこでどうも、ナイキは空で、ホークは陸にする。つまり広域防空は空で、自

隊防空は各自衛隊。船はもちろんターターがありますからね。こういうことになったんじゃないかと思うんです。加藤「陽三」さんの本「『私録・自衛隊史』」に、このように出ております。

「三十四年十月に次のような長官指示が出された。

(一) 全般防空は航空自衛隊、自隊防空は各自衛隊がそれぞれ計画する。

(二) 原則として高高度及び長距離の地对空ミサイルは航空自衛隊（これはボマークとナイキのことだと思うんですが）、低高度のものは陸上自衛隊、艦船用のものは海上自衛隊の担任とする。

(三) 高高度は航空自衛隊が建設し、航空自衛隊の全般防空用及び自隊防空用の低高度のものは陸上自衛隊においてそれぞれ建設を担当する。

(四) 当面の地对空ミサイル部隊の建設は既設のロケット実験訓練隊を母体として行なう。自隊防空上所要のナイキ・アジャックス部隊は陸上自衛隊において建設する」。

だから陸上自衛隊が建設して空に渡すというだいたいの手順が決まったように思っていたんですが、どうもその後を見ますと、その後も揉めていたようです。最終的には、三十六年か三十七年に決まったと思います。しかし三十四年に、こういうものができていたわけですね。

それからボマークが核を使うということで、これは「全面戦」だ、という話が出ていますが、核を使うということは全然知りませんでした。それぐらい、何もわからないわけなんです（笑い）。核を使わなければできないということなら別なんです。通常弾頭で役に立つものなら核が使えても構わない、という気持ちでしたが、核の問題はその後いろいろ問題になったときに私は初めて聞いただけです。

もう一つ、バッジというのがございますね。これはリーダー組織で、当時アメリカにセイジというのができておりました。北米大陸の防空のためですね。初めはセイジと書いていたんですが、空幕は、「米軍の話によるとセイジというのは膨大なものなので、もっとこぢんまりしたものでバッジというのがある。バッジがいいんじゃないか」とい

うことでした。バッジの話はちよつと聞いたんですが、いくら聞いてもよくわからない。空幕の装備課長だったか、高木作之さんという方がおられました、これ『田中兼五郎追悼録』」にも、田中さんと同期生ですから書いていますが、その高木さんが言うには、「あれはわれわれが聞いてもわからないから、神棚に祀っておけばいいんだ」ということでした（笑い）。「わかりました、それじゃあそれは神棚に祀りましょう」と言っただんですが。

伊藤 バッジはどこになるんですか。

小田村 これは当然、空です。加藤さんのこの本「『私録・自衛隊史』」にちよつと出ておりますのは、加藤さんが三十四年五月にアメリカの軍事事情の調査に行ったというんです。これはたしか沢田君がついていったと思います。そのときに、コロラドスプリングスの北米防空司令部（NORAD）を訪ねて、司令官パトリック大將と会談した。このときにセージを持っていたわけですが、加藤さんは「今後防衛庁で考えなければならぬ地対空ミサイルの配属問題に関連して、ナイキ部隊と邀撃機部隊との統一指揮がどのように運営されておるか」を調べたかった。この点の私の問いに対して、パトリック大將は、このやり方を親切に説明してくれた。そして建前はこういうようになっておるが、演習をやってみるとどうもうまく行かない、有人機と米陸軍ナイキ部隊とをいかにうまく使うかということが、自分のいま一番大きな悩みのタネである。日本において、もし防空を防衛上優先して考える立場をとるならば、いま米国のやり方を採用することは不適當であろうと思う、と述べた」と書いておられます。ですから加藤さんもナイキは空に渡すべきだということですね。

そういうことで、誘導弾とかバッジとかいうのは、まったく手探りの状況であつたということです。それが第二次防衛力整備計画、「次期防衛力整備計画」ですね。この経費を弾きまして、構想をつけて、課長に説明して、局長は加藤さんになっておられましたので、加藤さんにもご説明をしております。

■次期防衛力整備計画 (5) 赤城構想の発表

小田村 さて、これをどう扱うかということで、国防会議への出し方は高橋課長にお任せしたわけです。「赤城構想」が発表になったのは三十四年七月ですか。高橋さんは「いままでの作業、ご苦労だった」といって、「これをストレートに国防会議に持っていくてもなかなか難しいし、一回大臣「赤城宗徳防衛庁長官」から外にぶち上げさせて、それで反応を見てはどうかと思う」という。

伊藤 そうですか、そういうことで「赤城構想」になるんですね。

小田村 それが「赤城構想」です。これはですから、高橋さんの発想です。もちろん、これが全部通るとは毛頭思っていないわけです。

伊藤 それが一九五九「昭和三十四」年七月の赤城「宗徳」さんの発表なんですね。

小田村 はい。

佐道 そのタイミングは何を見計らったのか、と思っただけなんですが、そういうことだったんですね。

小田村 そうですね。三十五年度の予算はよろしいとして、三十六年度からですから、三十五年度中に固めたい。そうすると、これから大蔵省、国防会議でいろいろ説明をして、ごちゃごちゃやっていくにはまず初めにやっておくのにちようにいい頃だ、ということですね。

佐道 これから揉んでいくのに、ということですね。

小田村 そうです。

伊藤 じゃあ赤城さんも喜んでおやりくださったわけでしょうね。

小田村 だと思えますね。私は赤城さんにご説明していないものですが、わからないんですけれど。

佐道 赤城さんは「防衛庁長官として」来たばかりなんですね。

伊藤 でもそういうのをボーンとぶち上げるというのは、防衛庁長官としてはいいでしょうね。

佐道 気持ちいいでしょうね。六月十八日に長官になって来られて、

その約ひと月後ですからね。

小田村 それからもう一つご説明しておかなくてはいけないのは、海原さんなり、ほかの方からも、「これは全面戦争を想定しているのではないか」という話がありますね。それはまったく考えていないんです。ただ、こういうことがございます。三十三年度の業務計画の「情勢見積り」、これは私がいつも書いていたんですが、その「情勢見積り」の中で、「今年も米ソの全面対決が起こる可能性は殆んどないであろう」と書いたんですね。あるいは「極めて少ない」だったかも知れません。そうしましたら、外務省から来ておられた青木盛夫参事官に呼ばれて、「この『極めて少ない』というのは駄目だ。というのは（しよっちゅう米軍とつき合っておられますから）、米軍は常にあらゆる事態に警戒している。それに対して日本側から水を差すような考え方は書くべきではない」と言うわけなんです。

伊藤 外務省がそんなことを言うのかな。

小田村 いやそれは青木さんのお考えかもしれません。「非常に米軍の誤解を招く言葉である」という。

伊藤 じゃあどう書いたらいんですか。

小田村 ですから「極めて」ではなくて、「比較的少ない」とか書けば、問題はないわけです。

佐道 その「極めて少ない」と書かれた文書は、一般には出されないものです。

小田村 出されません。部内だけです。

伊藤 それは「情勢見積り」というわけですね。

小田村 「情勢見積り」です。

佐道 米軍が見ることもないわけですね。

小田村 米軍は見ることもないと思いますね。

佐道 そうですよ。何をそんなに気にしていたのかよくわからないですけど、そこまで内部検閲をするものですか。

武田 何か言いたかったのかもしれませんがね。

佐道 そう、青木さんから。

小田村 そういうお話がありましたから、全面戦争というのをまったく否定してしまつては具合が悪いということで、どんな事態になろうとも何らかのことはしなくてはなりませんから、そんなことが書いてあるんだろうと思うんですね。「いかなる事態になろうとも」どうだこうだ、ということですね。しかし全面戦争対応の力は全くないですからね。

佐道 ヘリ空母のところでもちよつと伺いたいことがあるんですが、海上自衛隊の目玉としてヘリ空母を考えるということですね。海上自衛隊自体が期待することは非常によくわかるんですね。あとで海原さんがそれを目の敵にするというののもわかるんですが、当時の文書によりますと、造るのにかなり膨大な費用が要るので、米海軍にかなり協力を仰いで、実質的に建造費も出してもらうという交渉を相当進めているところがあるんですが。

小田村 私もそれはまったく知りませんでした。海原さんのヒストリーを読みまして、すでに海幕と米軍との間で、そういう話が進んでいたと書いてあるんですが、そのへんは私はまったく知りません。

佐道 そうですか。それじゃあこれは独自に海幕のほうでやっていたということですか。

小田村 赤城構想を大臣が発表して、海幕としてぜひやりたいということに進めたのではないか。ただ、赤城構想で出たものを、大蔵省に持ち込みましたら、渡部「信」君は主計官になっていたかもしれないんですが、カンカンに怒りました。そのとき初めて私はこういう話を聞かされたんです。全部で何兆円になるということを言ったんですね。それは五年間ですから、毎年毎年の金を積み上げて全部合計すれば何兆円ということになるわけですが、これは維持費も全部入っていますから、おかしいなと思ったんです。でも、どうもその後、総額を合計して金額として考えるという癖がついちゃったようですね。大蔵省が始めたんですかね。私はびっくりしたんです。

伊藤 年度割りではなくて、ということですか。

小田村 年度割りではなくて。後ほど僕は四次防もタッチするんですが、四次防のときも、四兆六三〇〇億円というのは結局、総体合計してなんです。そうすると、これは年度予算がせいぜい八〇〇〇億ぐらいのときですから、四兆六三〇〇億といったら膨大なものになるわけですね。たしか田中総理に説明するときには、「四兆六三〇〇億といっても、今年の予算を五倍すれば四兆円以上になるんですよ、だからそんなに大した額ではないですよ」と話したんですけれどね。ただ一般の人にはたいへんな金額に見えてしまうわけですね。それを言われたものだから、びっくりしました。私もFX問題その他と一緒に、替わったものですから、その後の経緯は聞いていないんです。

その後これがどうなったかということなんですが、私のあとは玉木「清司」君が健康を回復して戻ってきておったんです。その前に伊藤圭一君がやっております、私のあとは高瀬忠雄。これは昭和二十年卒ですが、この人が担当したはずです。高橋さんが持つてこられたと思うんですね。前は総務課の補佐をやっていたんです。

伊藤 まだ計画官になる前ですか。

小田村 なる前で、その後なつたと思います。初代の計画官です。あともう一人、監査課にいた銅崎「富司」君というのがその下についていると思います。これは玉木君と同期生です。その後どういうふうにしたかよくわからないんですが、あとで玉木さんに聞きますと、「きみがいなくなつてからあとは、計算ばかりやっていたようだよ」ということです。外との折衝はあまりやらないで、なにかごちゃごちゃやっていたのではないかと思います。ですから、この時から、海原さんが局長になられて、村上さんが計画官になれるまでは、一年か一年半ぐらいあいだがあるんですが、ちよつとよくわかりません。

伊藤 大蔵省に持ち込んだとき、大蔵省はかなりびっくりしたということですが、それだけで終わりなんですか。

小田村 それで当然、国防会議に持ち出さなければなりません。国防

会議に持ち出して、それから議論が始まるということです。まだ正式の案ではございませんので。

伊藤 手順としてはどうなるんですか。国防会議で決めてから、最終的には大蔵とやるんですか。

小田村 国防会議で議論するわけです。国防会議の中で大蔵と防衛が対立しますから、両方の折衝ということになるわけです。

伊藤 じゃあ、出すことが先なんですね。

小田村 出すことが先です。大蔵省は別にそういう権限はないので、説明を聞いて、同意するかしないか、ということだけです。だから予算要求とは違うわけです。国防会議は決定権がありますから、そこでとにかく両省庁が合意しなければ、上にあげられませんから。伊藤 国防会議でそれを決定して、金額が仮についていたとしても、毎年また予算折衝でやらなければいけないわけですね。

小田村 当然そういうことです。

伊藤 絶対の錦の御旗というわけにはならないんですね。

小田村 ならないんです。そうですね。

伊藤 それで一方で大蔵は、先生を「防衛庁に」出してにおいて、あとは自由にやれということですか。

小田村 それはしょうがないですよ（笑い）。立場が違いますから。

佐道 それはすごいところだと思いますが、大蔵省からしたら、大蔵省から行っているのになんだ、ということになりますね。

武田 それで余計にびっくりされたのかもしれないですね。

伊藤 赤城さんの構想発表に対しての、世間あるいはジャーナリズムの反応はいかがだったんですか。

小田村 私もあんまり記憶がないんですが、どうだったのかな。

伊藤 それじゃあ当時の新聞を見てみる以外にないな。

佐道 「ジャーナリズムの反応は」あんまりないんですよ。

小田村 あんまりないでしょう。

佐道 赤城さんがこの構想をぶち上げられたときに、これこれこういう構想だ、というものはあるんですが、そのあとがない。

小田村 防衛問題にあまり関心がなかったんじゃないですかね。あるいはFXのほうに集中していたのかもしれないですね。

伊藤 しかしこの段階で社会党が何も言わないということはないでしょう。

佐道 このころは、そろそろ安保の問題とか、いろいろありますからね。

小田村 そうですね。安保ですね。警職法の騒動が三十三年に終わって、それから安保になってくるわけですね。

伊藤 安保が一九六〇年で、これは五九年の話でしょう。そうしたら防衛問題もワーツとなるんじゃないかという一般的な感じですけど、そうじゃなかったんですかね。そこがどうもよくわからないんですけれど。

佐道 警職法で騒いで、安保に行くまでの息継ぎの期間だったかもしれないですね。しかし制服組の意見を、先生のお立場として聞くべきところは聞くということで、先生以後と先生以前では、かなり制服組への対応が違うと思うんですが、彼らはかなり喜んだというか、一所懸命やったんじゃないでしょうか。

小田村 やってくれたと思います。高橋さんも加藤さんも、非常に評判がよかったですからね。

伊藤 だって、海はちよつと少ないんじゃないかといって、こちらから手を差し伸べてやるぐらいだから。

佐道 それは「以前とは」ちよつと違いますよね。

小田村 しかし私の考え方は間違っていないかったので、今度のテロでもイラクでも、この前の湾岸の掃海艇派遣でも、動くのは海なんです。そういう意味では、理論的に戦争が起こる可能性は少ないから海は要らない、というののはちよつと極論だと思っんです。

佐道 本土に上陸されてくるようだったら、もうだいたい終わりですからね。それを言ったらおしまいなんです（笑い）。

■FX問題 (1) グラマンF11Fの内定

佐道 まったく違う話で、先生が大蔵省に戻られてからの話になるんですが、先ほどのナイキとホークの件です。海原さんの「オーラルヒストリー」の中にもちよつと出てくるんですが、自民党の国防部会との関係で、昭和三十五年十月の参議院の決算委員会で質問が出ているんです。自民党の国防部会で、「三菱重工にナイキを、東芝にホークを造らせるという決定をさせたということがあるけれど、それはご承知ですか」と社会党の議員が聞いて、佐々木「達夫」経理局長が「承知しております」と議会で答弁されているんです。そういう国防部会がらみの問題をお耳にされたことはございますか。

小田村 いやナイキ、ホークはまだそこまで行っておりません。私のときはもっぱらFXで、これをどこへ決めるかということが最大の問題でした。

佐道 まさにFXの問題で、これは二転三転するわけですね。本当に混乱していて、最初にF104とF100が出ていて、F104が有力視されていたのに、永盛調査団が戻ってきたら、今度はグラマンが浮上してグラマンに決まった。決まったと思ったら、翌年にはこれが取り消されるということで、外側から見ていると不思議な事態だったんです。前回先生は、このFXの問題にもかかわりがあったとおっしゃっておられたんですが、これはどういう関係ですか。

小田村 私は協役で、主役は初めは海原さん、その次は高橋さん。担当部員は、高橋儀一君という空の担当です。それで、最終的には加藤局長と高橋一課長でお決めたになったと思うんです。すでに日本ではF86FとT33の国産をしていたわけですね。F86Fがノース・アメリカンで、T33がロッキードなんです。その後継機として100と104の両方が上がってきたんです。ですから当然100のほうは三菱、104のほうは川崎ということになるわけです。

空幕は当初、104だということではほぼ一致していました。浦防衛

課長もそういうふうで発言しておられました。ただ問題は104は安全性がまだ自信が持てないということでした。というのは、異常があったときにパラシュートで脱出しますね。その脱出装置が下向きに出ていたわけです。下向きだと非常に危険なわけですね。事故もありましたし、そのへんが問題だと浦さんも言っておられたんです。

これはまたちよつと雑談ですが、三十二年の初め頃ですか、私が防衛局に行つてまもない頃、空幕が防衛一課を招待してくれたんです。空幕の防衛課長の浦さんと装備課長の高木さんですね。呼んでくれたのは小料理屋ですから大したことはないんですが、そこで冗談ができて、「どうもこれは金の出所がおかしい。さんずいじゃないの」という。いや、酒の上の話ですよ。「さんずいだとすれば、縦か横か」という。私はなんのことかさっぱりわからないですよ。要するに縦というのは川崎で、横というのは三菱なんです。「縦か横か」ということなんです。

伊藤 「川」と「三」か(笑い)。

小田村 三菱の顧問か嘱託をしている方で、お名前は忘れたんですが、元陸軍少将の方がいまして、私はその方から、一緒に飯を食つてくださいと言われました。「どこか銀座の小料理屋で一晚説明を聞いてくれ」と言われ、「私はその担当じゃないんですよ」と言ったんですが、「とにかくこういうことで、ぜひ一つ100にして欲しい」といって、100の説明をいろいろされました。そして、「104はこういうところが悪い」というお話をされました。

ちようど私はそのころ葉山に住んでいたんですが、夏休みに海水浴で海岸にいましたら、ちようどその方も泳ぎに来ておられて、見つかつちやいました。そのときに言っておられたのは要するに、「なんでもいいんだけど、104でなければいいんだ」ということなんです。商社も、ロッキードのほう丸紅で、ノース・アメリカンは三菱商事でしたかね。とにかく熾烈な争いがあったわけです。きつとあちこちで陳情合戦があったんだと思います。

それで八月に永盛調査団が行かれました。そのときの記録は、加藤

さんが書いておられる通りです。私もそれでやつと思ひ出したんですが、五つの機種でした。三十二年八月に行きまして、100と104と、このときにグラマンのF11Fが出てくるわけです。それからN156、F102。この五機種について検討しました、ということですね。この中で、結局100と104とF11の三つが候補になったはずなんです。N156は後ほどまた出てくるんですが、これはまだ木型しかできていなかったんですね。だから到底、間に合わないということです。この中で選ぶとすれば、100はいろいろな面で古くなっている、グラマンが一番優れている、というのがこのときのだいたいの結論でございました。これは優劣を比較したもので、加藤さんが書いておられる永盛委員会の報告の通りです。

このとき加藤さんは慎重に考えたいということで、誰も言う方がいないんですが、「一回、第一線のパイロットの意見を聞いてみたい」ということでした。ちようど源田「実」さんがあのときは航空総隊司令官でしたかな。まだ総隊はできていなかったかもしれませんが、いづれにしても現地の司令官をやっておられました。源田さんは自分で操縦されますから、源田さんに来ていただいて、防衛局長室でお話を伺ったんです。その席にいたのは、加藤さんと高橋さんと高橋儀一君と沢田君と私の五人です。そのときに源田さんがなんとおっしゃったかというと、「自分は海軍でずっと実戦を経験してきた。その経験からいうと、なんといいても足が長くないかん」ということなんです。上昇性能とかスピードということよりも、航続距離のことを一番強調しておられました。

伊藤 航続距離はちよつとタブーなんじゃないかな。

小田村 まあ、それもあるかもしれませんが。戦闘機の上でも当然必要になるわけですね。しかし邀撃機としては先ず上昇力とスピードが問題になるはずなので、それを言われたのはちよつと意外だったんですが、たいへん印象に残っています。航続距離ということで言えば、グラマンが一番すぐれているわけです。そのことはやつぱり加藤さんもちやうど頭の中に残ったんじゃないかと思ひます。そんなことで、内

局としてはグラマンがいんじゃないかということになります。空幕のほうも、また佐薙「毅」さんが翌年向こうに行かれるわけですね。佐薙空幕長も同意されて、五八年四月に国防会議で内定するということになるわけです。

ところが、それがいつまで経っても国防会議の正式決定にならないということ、加藤さんは非常に不思議だと言っておられるんですね。伊藤 内定というのはどういう感じなんですか。

小田村 正式の、国防会議議員懇談会での内定ということだと思えます。ですから正式の国防会議での決定ということではないと思います。というのは、いろいろ準備もあるものですから、議員懇談会で内定したということになっていますね。

伊藤 正式の会議ではないんですね。

小田村 正式の会議ではなくて議員懇談会ですね。

■FX問題 (2) 白紙還元とF104の採用

小田村 ところがこれに対して巻き返しが始まりました。政治家からです。当時の決算委員長は田中という札付きの男でした。河野派だったと思います。

伊藤 田中彰治ですか。

小田村 田中彰治だったと思います。これがつるし上げを始めたわけです。つるし上げは防衛庁ではないんです。国防会議事務局です。国防会議事務局に堀田さんもまだおられたと思うんですが、大蔵省から前の主計官の吉村さんが専任で行っておられたわけです。もう一人外務省から来ていたかもしれませんが。それで国防会議事務局長の廣岡謙二さんと吉村さんをつるし上げたわけです。何をつるし上げたかとい

いますと、当時天川という人がおりました。

伊藤 天川勇。

小田村 勇ですか。『矢部貞治日記』に出てくる人ですが。

伊藤 そうです、天川勇です。

小田村 その天川氏が、防衛の研究会をやるということで、主として大蔵関係の連中を呼んでいたわけです。何か会食をして、いろいろ説明して、研究・議論をするということで、吉村さんがだいたいそれに出ておられたんですね。あと後任の船後「正道」さんときどき行かれたかもしれませんが、空の担当の主査の田中敬君、そういう連中が呼ばれていっていった。防衛庁からは行っていないです。誰か忘れましたが、行った人に聞きますと、これは飲んで遊ぶというような会ではなくて、非常に真面目な会で、天川が講義をする真剣な会だったそうです。天川と三菱とがつながっていたように思います。そこで100がいいという話がずっと出ておつたらしいんです。ですから、それが途中でグラマンに変わってきましたが、104ではないわけですから、当然三菱が取れるわけです。結局グラマンが出てきまして、グラマンに決まった。「田中彰治は」天川が主催していた研究会をつるし上げたわけです。

伊藤 防衛庁は関係ないんですね。

小田村 防衛庁は関係ないんです。国防会議事務局ですね。これが何度何度もありまして、吉村さんは結局そのときのことを非常に憤慨しておられたようですね。吉村さんという方は、相沢「英之」さんに聞きますと、国防会議に行ったあと、主計局の総務課長に持ってきたかったと言っていました。私が税務署長をしておつたときに、高岡高商卒業の税務署員がおりまして、その方が新京の経理学校で吉村さんと一緒にいたと言っていました。例の財務官の柏木「雄介」さんも新京の経理学校です。その人が、吉村さんを非常に褒めておりましたね。ですから大蔵省としては将来を期待していた人なんです。これでしくじったんです。あとで役所を辞めてから四国銀行の頭取になられました。部下の人から聞くと、「一回このときの真相をばらしてやりた」と言っておられたそうなんです。もう亡くなっちゃいましたから、わかりません。そういう事件がありまして、新聞でも書き立っています。このときは河野派が動いたんじゃないでしょうか。

伊藤 天川という人は矢部さんの『日記』にも出てきますが、高木惣吉の海軍のブレーンで、実際の動かしをやっていた人なんです。そのときもちよつと問題がありまして、最終的には海軍から退けられるという事態になりました。僕はいつ頃だったか、彼が亡くなるちよつと前ですが、インタビューにお宅に伺ったことがあります。かなりフアナティックな感じがする人で、またペダンティックだったように思います。自分が実際にいろいろなことに力があるんだということを、さかんに私に言っていました。

佐道 そういう方がこういうところで動いておられたわけですね。

小田村 そうなんです。それで高橋さんに、「天川というのにお会いになったことがありますか」と聞きましたら、高橋さんは、「いや、おれも実は誘いを受けたんだけど、これはくさいと思ったから、行かなかったんだ」と言っておられました。さすがにやっぱり警察ですね。

伊藤 たぶんわかっていたんだと思います。

小田村 そうかもしれませんね。

伊藤 矢部さんなんかもとで非常に注意しているように思います。小田村 石原「周夫」さんなんかよく知っていて、「ああ天川か」と言っておられましたから、ご存知だったようですね。そういうことで、一年経ってから白紙還元されたということですね。そのことで、あとで高橋さんが述懐しておられたんですが、加藤さんのご本にはこう書いてあるんです。

「新しい戦闘機を三十五年九月から三十七年九月までの間に取得する計画になっていた（これは一次防ですね）。そのためには生産のリードタイムを考えると、遅くも三十四年九月から生産に入るために、その前に製作会社の決定、米国との交渉が必要なので、三十三年四月にはどの機種を採用するかを決めなければならないことになる」。

ということですから、いちおう内定をして、それから製作会社を決めて、アメリカとも交渉する。それで国防会議で決定するという流れだったと思うんですね。三十四年九月から生産に入るといことがF

X問題の眼目なんです。これを逃すと、なんだかわからなくなるんです。つまり高橋さんがあとで言っておられましたが、「あのときはどうしてもこのときまでに決めろということだったので、これはこういうふうに決めたんだ。それをあとで時間をかけてゆっくり検討しろということなら、それは話が別なんだ」ということです。それを高橋さんは強調しておられたことがあります。ですからおそらく、官邸のほうから、あるいは岸さんからもかもしれませんが、そういう指示が来ていたんだらうと思うんですね。

そこで、白紙還元されて、十一月にロッキードに決まる。これは源田さんが向こうに行きまして、実際に操縦をして、最終的に決めたということです。だから源田さんもちよつとおかしいんですよ。初めの言い分と――。

佐道 変わったわけですね。実際に乗ってみたら。

小田村 当初検討したのは、F104Aなんです。これがそのときにはF104Cになっていた。ですからその間に改造がありまして、エンジンも変わっているし、脱出口も上の方になるようになっていたし、良くなっていたわけですね。だから結局は104でいいんだらうと思うんですが、もともと早く決めろ、ということだったんですからね。ということで、最終的に104に決まりました。

ただ海原さんがさかんに言っておられるように、滑走路が一つの問題なんです。日本では三〇〇メートルの滑走路なんてありませんから、どうしても短い滑走路でなくてはいけない。それをこのときには二四〇〇メートル（八〇〇〇フィート）で大丈夫だということで、それが非常に大きな条件だったわけです。日本側としては。そのへんがあとで海原さんが指摘しているように、ちよつと問題になるわけですね。私も104の初飛行を見ましたよ。ちよつど名古屋に行っているときに各務ヶ原でやったんですね。招待をもらいましたから、じゃあぜひ見に行きたいといって行っただんですが、やっぱり素晴らしかったですね。

伊藤 あそこは滑走路は長いんですか。

小田村 まだ増槽しておりませんで、タンクをつけておりませんから、飛ぶだけだったら八〇〇〇フィートで大丈夫なんですね。

■FX問題 (3) 白紙還元以後

小田村 それでいろいろ問題がございまして、内局としては裏切られたという感じを持つているわけなんですね。高橋さんも「自分もこれで辞める」といって、警察に戻るわけです。加藤局長も辞任を決意されたようです。それは高橋さんが言っておられましたが、「そんな、局長、それはおやめなさい。こんなことでせつかく防衛庁の中心になる方に辞められたらあとが困るし、そんなことを気に病まないで、「辞意は」撤回してください」ということで、高橋さんがとめたんだ、と言っておられました。

私は、前に大蔵省から誘いが来たんです。これは文書課の補佐に来てくれということで、佐竹「浩」さんという方が高橋さんのところに持つてこられたんです。佐竹さんが文書課長のときですね。そのときはまだ次期計画をやっている最中でしたから、それはお断わりしたんです。しかしだいたい次期計画もやっただし、FXもそういうことになった。ちょうどその前に、武藤謙二郎さんという方が為替局に変わっておられて、ちょうど資金課長をやっておられて、また高橋さんのところに誘いに来られたんですね。

考えてみると、自分も防衛庁に三年ちよっとおりましたから、本省の仕事は、人間も替わってしまっているし、少し浦島太郎みたいになるので、あまり長居をしてもいいかなと思いました。そう言ったら、高橋さんが、「おまえ、ひとつ警察に來ないか」と言うんです。それで「ちよっと考えさせてください」と言っで、いろいろ考えてみましたが、やっぱり役人というのは、いろいろ先輩・後輩・同期生のつながりがありまして、それで仕事を進めているわけですから、突然よそに入ってもなかなかうまく行かない。やっぱりそれは無理をしない方

がいいと思っで、「せつかくそういうことであれば、私も帰らせてください」と言いました。そうしたら、「自分もこのFXの問題でこういうことになったから、長居をするつもりはない」と高橋さんも言っでおられたんです。だから高橋さんと同じぐらいに、両方とも替わった、ということになるんです。

佐道 そこでもし警察に行かれていたら、警察庁長官への道を歩んだわけですね。高橋さんはのちに警察庁長官になりますね。

小田村 この人は、僕がお仕えた上司の中では一番尊敬する人ですね。目の付け所が違うんですよ。制服組ともよく一緒に飲んだり話をしたりしてましたけれど、こういうことを言っていました。「東京帝大の法学部と陸士卒業というのは、水と油で絶対に合わないんだ」ということです。よくわからないんですが、そういう雰囲気はあったんじゃないでしょうか。高橋さんは十六年卒業ですが、そう言われてみると、海原さんとか後藤田さんなどの言動は、わからないでもないということですね。中曽根さんは法学部ですが、海軍はちよっと違うんですね。海軍にいた人はみんなだいたい海軍シンパになりますから、そういうところは多少違うんですが、陸軍に対しては多少あれがあるんじゃないでしょうかね。

伊藤 まあ、そうですね。

小田村 しかしそういうことをよく心得た上でやっておられましたから、惜しい方でしたね。この方はなんで比較的早く亡くられたかというところ、戻られて、警視庁の警備部長から警察庁の交通局長になって、そのときに交通事故を起こしちゃうんです。高橋さんは体重が百キロの巨体で、ビール樽の「樽さん」という愛称だったんですが、歩くときには多少気をつけないといけないけれど、赤坂で歩いているときに、車にぶつけられちゃったんですね。それでちよっと入院されて、その後遺症があとまで残ったようですね。そんなに車もスピードを出していないんですが、一回そういうことがありますとね。

伊藤 次は防衛庁長官の問題ですね「質問項目は「五九年六月、グラマンF11Fが採用白紙還元された後、その年の一月に就任したばかり

の伊能繁次郎氏が赤城宗徳氏に交代します。伊能氏は白紙還元の責任をとったとも言われていますが、いかがでしょうか」。

小田村 はつきり覚えていませんが、確かにそのような記憶があります。伊能さんが赤城さんに替わったということですね。海原さんもそう言っていますね。ですからこれは赤城さんに代わり、佐藤さんは源田さんに替わりますね。ロッキード人事じゃないか、と言われていました。岸・佐藤連合によるロッキード人事という話もありましたけれどもね。

伊藤 白紙還元といっても、内定が白紙還元ですね。

小田村 そうです。

伊藤 いったん決定したものを白紙還元したわけではないですね。

小田村 そうではないですね。

伊藤 でも、「内定」というのはよくわからないですね。なんで「決定」ではなくて「内定」なのか。

佐道 「内定」は閣議報告なんですね。

小田村 閣議報告になっていますか。

佐道 「採用内定」は閣議報告です。

伊藤 かなり大きな動かしをしたということですね。

佐道 「決定」は閣議了解ですね。

伊藤 小田村先生のいまのお話は、いろいろな方から伺った話とか、周辺の話ですが、どこかで関わった部分もあるんですか。

小田村 関わった部分はございません。直接担当したわけではないですから。担当はさつき申し上げた高橋儀一君ですね。

伊藤 その周辺にいますと、先ほどおっしゃったようなアプローチがあったり、というようなことですか。

小田村 そういうことなんです。だからだいたい事情はわかります。それでもう一つ、ロッキードに決めた。ロッキードといえばT33やP2Vもやっていましたから、川崎になるはずなんです。製作会社は三菱にしたんですね。それがこのときの決定の一つのミソだったんです。機種がなんであろうと三菱にする、という方針が、あるいは決

まっていたのかもしれないね。

伊藤 そのへんは防衛庁マターではないのですか。

小田村 そうですね、おそらく防衛庁マターではないでしょう。防衛庁がもちろん責任者ではありますが、そうとう上の方、国防会議で決めなければなりません。

佐道 国防会議で、どこにつくらせるかまで決めることになるんですか。

小田村 国防会議はそこまで決めるわけではないんですが、機種決定までですからね。ですが、だいたい了解はそこで取っていると思いますね。

佐道 そのへんは藪の中になるのでしようが――。

小田村 ただ常識的に考えても、F86Fで三菱のほうは後継機がなくなっている。川崎のほうはT33のあとで、P2Vをやっていたということがありますから、相手はいなかったわけですね。

それからもう一つ言い忘れました。そのとき海原さんはどういうふうに言っていたかといいますと、これも私は直接聞いたり見たりしたわけではないんですが、高橋儀一君から聞いたんです。海原さんはN156、ノースロップが一番いいということを言っておられました。

「これは日本というか低開発国用につくった飛行機なので、これを選ぶべきである」とおっしゃっていたということです。ただなんといつても木型で、T38もまだ飛んでいなかったたので、それは先ほど申し上げた時間的「スケジュール」から言って無理ですから、初めから問題外ということでしたね。

■「補」人造米の話など

伊藤 どうでしょうか、大蔵省に戻られてから、この問題の継続とどうか、どういうふうにごらんになっていたかというのはこの次の回にしましょうか。特に六〇年安保の問題もありますので、それをどう

見ておられたとか、大蔵省に戻られてから外をどう見られていたかということ伺いたいと思いますし、大蔵省でのお仕事も質問させていただきますか。

小田村 本省に帰ってから、翌年の七月に名古屋にまいります。

伊藤 名古屋は何年ですか。

小田村 名古屋は二年です。それから主計局に戻ります。それからあとは、官房に行きました。

伊藤 けっこう部署が移るんですね。

小田村 移ります。だいたい二年ぐらいですね。

伊藤 その頃から二年ぐらいで動く形なんですかね。

小田村 そうですね。

佐道 ということは防衛庁は三年ちよつとですから、少し長いんですね。

小田村 ちよつと長かったですね。三年二ヶ月ですから。

伊藤 それは長い、ということですか。

小田村 長いほうですね。

伊藤 今日のお話を伺って、よくわかったな。

佐道 わからないことがずいぶんわかりました。初めて伺う話がたくさんありました。やはり伺ってみるものですね。

武田 当時の報道では、天川さんの名前は新聞にも出たんですか。

小田村 いや新聞には出ていないんじゃないでしょうか。

伊藤 天川さんの資料もちよつと獲得したいな。

武田 お話を聞かないとわからない。

伊藤 いろいろなものをたくさん持っておられたから。

佐道 そんな人が暗躍しているんだから、すごいですね。

伊藤 知らなかったな。言葉なんかは非常によくできる人らしいですよ。

小田村 もう一つ言い落しました。その田中彰治ですが、前に自衛隊に人造米を食べさせたことがあるんですよ。人造米はご存知ないで

しょう？

伊藤 知らないですね。

武田 人造米って何ですか？

小田村 人造米というのは、前回の話のときに、コメがたいへん不作で、あちこちから掻き集めたということをお願いしましたね。まだコメを輸入しなければならなかった時代なんです。やはり外貨節約のために、コメに左右されては困るので、小麦粉からコメを作ろうということでした。というのは、小麦粉に味の素みたいなものを入れるのかもしれないが、そういうものができました。私がまだ為替局にいたときですが、農林省から「人造米ができた、ひとつ試食してくれ」というので、試食したことがあります。ですから、主計局の農林係なんかも一緒に食べたんだろうと思いますね。そんなに味は悪くなかったんですが、資金課に農林省から、小暮「光美」さんという方が来ておられて、「これはなんといってもコメではないんだから、コメに代わることはできないんだ」と言っておられたんですけれどね。

その人造米を自衛隊に食べさせろということ、自衛隊でそれを一時使わされたことがあるらしいですよ。それでたいへん評判が悪くて、防衛庁では札付きの男だとされていました（笑い）。

佐道 なんて自衛隊なんだろうな。

小田村 やっぱりその業者との結びつきです。

佐道 自衛隊なら、大量にそれがはけるだろうということですね。

小田村 そういうことですね。

伊藤 いちおう粒になっているわけですか。

小田村 いちおう粒になっているんですね。だけど、ぐちゃぐちゃになっちゃいますからね。

佐道 そうすると糊状のようなものですか。

小田村 そこまでいかないんですけれどね。

武田 ちゃんと炊けるんでしょうかね。

佐道 そんなものがあつたんですね。

伊藤 その話は僕は全然聞いたことがなかった。そのころちゃんと生

きていたはずなのに。

佐道　そうですよ。しかしそれはいまだこに行ってしまったんでしょね。

小田村　いまはコメが余っているわけですから。

佐道　そうですね、わざわざ人造米をつくらなくてもいい。

伊藤　しかしおかしい話があるものだね。

佐道　いろいろなことをする人がいるんですね。

小田村　そうだ、防衛費のところで、防衛関係費はだいたい、あの頃ずっと国民所得に対して二%ぐらいだったんです。だから海原さんの一次防の当初の原案の中に、「約二%をメド」という言葉があつて、それは不思議でもなかったんです。大蔵省はいやがりましたけれどね。

伊藤　当時は全体の規模が小さいですからね。

小田村　そうです。国民所得というと、だいたいGNPの八割ぐらいですね。それではどうも、失礼いたします。

一同　どうもありがとうございます。

〈以上〉

小田村 四郎

オーラルヒストリー

第 6 回

為替局～名古屋国税局～主計官 I (1959～1964)

【2003年8月6日（水）14:00～16:00】

（於：政策研究プロジェクトセンター）

[インタビュアー]（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

記録・編集：丹羽 清隆

第6回質問項目

1. 今回は防衛庁から大蔵省に戻られたころのあたりからお願いします。先生は59年11月に大蔵省に戻られます。その後、防衛庁では、海原氏が防衛局にもどって「赤城構想」をつぶすべく奔走します。この件については当時、先生はどのように見ておられたのでしょうか。
2. 日本の防衛政策の基本には日米安保体制があります。岸内閣は、その改正を目指して米国と交渉し、改正を実現しますが、60年には国民の反対運動に直面し、岸内閣は総辞職に追い込まれます。反安保の運動が激化してからは先生は大蔵省に戻っておられたわけですが、この安保改正問題については当時どのように見ておられたのでしょうか。
3. 上の質問とも関係しますが、反安保運動が激しくなったとき、岸首相は自衛隊の治安出動を考え、それが赤城長官に拒否されるということがありました。これも60年に入ってからのことではありますが、先生ご自身はこの問題について何かお聞きになったりしたことはありますか。あるいは当時、自衛隊出動の可能性についてどのようにお考えでしたか。
4. 先生は大蔵省に戻られた当初、為替局資金課（課長補佐）に在籍されました。戻られて為替局資金課に勤務される経緯をお願いします。
5. 為替局資金課で担当されたのはどのような仕事だったのでしょうか。また、防衛庁に行かれる前も同課におられたわけですが、同課の仕事等で変わったことなどはございましたか。
6. 先生は60年7月、名古屋国税局直税部長に就任されます。一年弱で異動されるのは少し短いかなと思いますが、就任の経緯等をお願いします。また、直税部長のお仕事の内容（管轄の範囲、主管する事項等）についてもお願いします。
7. 先生が名古屋に出られるころ、政権が交代し池田内閣が成立します。大蔵官僚出身で、経済中心・所得倍増を唱えた池田内閣の登場は、大蔵省内でどのような印象で迎えられたのでしょうか。

8. 名古屋は四大工業地帯の一つでもあります。経済的に見た場合どのような地域と言えるのでしょうか。また、前年の伊勢湾台風の影響などはどうだったのでしょうか。
9. 62年6月、主計局主計官として本省に戻られます。主計局では法規課に行かれたとのことですがその経緯等お願いします。また、先生が主計局に在籍された時代の主計局長は、最初は石野信一氏、翌63年4月佐藤一郎氏、65年4月谷村裕氏、67年1月村上孝太郎氏と、それぞれその後次官になられた方々ばかりでした。また、主計局法規課に入られた当時の法規課長も、後に次官になられた相沢英之氏でした。各局長や課長についてのご印象などもお願いします。
10. 主計局における法規課の役割等についてお願いします。また、先生ご自身はどのような仕事を担当されたのでしょうか。
11. 64年7月から、文部・科学技術担当の主計官になられます。主計官というのは、各省の担当者以上に担当の問題について勉強し精通すると言われますが、予算査定の実際の様子についてお話いただけるのでしょうか。
12. 先生が主計官として予算を担当されていた時期は、「岩戸景気」が終わって景気後退期に入り、財源難が問題にされていたころでした。その中での文教予算の全体での位置づけなどはどのようなものだったのでしょうか。
13. 先生が文部・科学技術担当をされていた当時、どのような事項が予算関係で問題になっていたのか、また、とくに先生のご印象に残る問題というところのようなことでしょうか。
14. 文部大臣は、灘尾弘吉、愛知揆一、中村梅吉と変わりましたが、それぞれについてどのようなご印象をお持ちでしょうか。また、先生と予算折衝を行った文部官僚について、とくにご印象に残る人物などはおられますか。
15. 64年11月、池田首相が病気で辞任し、佐藤政権が発足します。蔵相は田中角栄氏の留任でした。佐藤内閣成立についてはどのように見ておられたのでしょうか。

※今回は以上のような点についてお願いします。

■「補」北海道出張、砂川事件判決

小田村 加藤さんについては、『加藤陽三追想録』といものがあります。海原さんについてはいろいろ言う人がたくさんありますが、加藤さんのことを悪く言われる方はほとんどありません。防衛庁で私が一緒に仕事をおった人たちも、「加藤さんがいるから防衛庁にいられるんだ」と言っているように、人格者なんですね。

それから西広「整輝」君の追想録にもちよつと書いておいたものですが、昭和三十二年三月の初めに、北海道に出張したんです。「私が」防衛局に替わる予定でその直前でしたか。途中で発令されることになったんです。そのときに、西広君が会計課におりましたから、一緒に北海道を回りました。札幌から帯広に出まして、第五師団で雪の訓練を受けました。自分でもスキーに乗ってみました。それから北見に行きまして、北見でL19という軽飛行機に乗せてもらって、流水観測をさせてもらいました。国後もよく見えました。

伊藤 L19というのはどれぐらいの大きさの飛行機なんですか。

小田村 あれは二人乗りぐらいですね。

伊藤 別に寒いわけではないんですね。

小田村 寒いわけではありません。陸上自衛隊の連絡機でしたが、本当に小さな飛行機でした。

伊藤 そんな小さな飛行機で、怖くないんですか。

小田村 天気が良ければ、いや、大丈夫ですよ。私はL19と同じような海上自衛隊の飛行機で、鹿児島から宮崎の新田原に飛んで、そこから阿蘇を越えて熊本まで飛んだことがありますから、大丈夫ですよ。

それから網走に行きました。網走はちょうどリーダーサイトの返還が終わった直後ぐらいのところでしたね。だからまだ十分体制ができていなかったんです。それから名寄に行きました。ちょうど雪が深いですから、雪中露営をさせてくれといって頼んでおきました。それで

雪の中に泊まったんです。ちゃんと部隊のほうで設営をしておいてくれましたので、テントで雪の中に寝たんですが、ストーブを焚いておいてくれたんですね。ところが暖かくなつてくると、だんだんストーブが雪の中に落ち込んでいくわけですね。これはどうも具合が悪い。西広君と一緒にいましたので、彼が木の板をどこかで拾ってきたので、それをストーブの下に差し込んだら、下に落ちなくなりました。それで寝たんですね。ぐっすり眠っていたら、夜中に西広君が気がついたんですね。「起きろ！」と言います。ちよつと目を覚ましたら、煙がもうもうとしていて、息ができません。慌てて靴を探して、それを突っかけて外に逃げたんですが、もうしばらくしたら窒息死をしていましたね（笑い）。

伊藤 何が燃えたんですか。

小田村 結局、その差し込んだ木が燐り出したんですね。

伊藤 それがあだになったんですね。

小田村 そんな話がありまして、それは西広君の追悼録の中に書いておきました。

それから、FXのところ、ちよつと「言い」忘れましたが、児玉誉士夫が囁んでいたようです。当時新聞にF11に内定したということで、航空自衛隊、空幕の若い連中が大変憤慨して、児玉誉士夫のところ、それを打ち明けたという記事が、何かの新聞に出ていたことがあります。ですから、田中彰治、児玉誉士夫、そういうところが、ひっくり返す原動力だったのではないかと感じますね。

それからもう一つ、このあいだのところ、落としましたのは、昭和三十四年に砂川事件の東京地裁判決、伊達「秋雄」判決がございました。三月でしたか、「米軍の駐留は違憲だ」という判決で、検察側がこれを直ちに跳躍上告したんですね。

最高裁の判決があったのは十二月十六日ですから、その時は私はもう防衛庁にいなかったんですが、その前に検察側が最終論告をしているんです。最終弁論のときに、検察側の陳述書では、僕が読んだ記憶ですが、「憲法で自衛のためであれば軍隊は持てるんだ、自衛軍なら

保有可能である」ということを言っていたように思います。これは例の芦田解釈なんですね。ところが政府のほうはそうではなくて、

「軍」ということは言わないで「自衛力」という言葉を使っていたわけです。ですから芦田解釈は採っていないわけですね。最高裁の判決も芦田解釈は採っていないわけですね。そのへんがあとでまた混乱が起こる一つの原因だったかな、という感じがするんですね。

それと関連しまして、たしかその頃だったか、もつと後だったか、ちよつと記憶がないんですが、当時海幕の防衛課長、山本啓志郎さんに替わる前の西村友晴さん——海上幕僚長になりました——が、「憲法解釈は芦田解釈を採ってくればいいんだ」ということを言っておられたことがあるんです。ですからそのへんのところが、当時からいろいろ問題があったということではないかと思えます。それを申し落としたんですけれどね。

■赤城構想、その後

伊藤 わかりました。ありがとうございます。さて、この前のところで、先生は防衛庁から大蔵省に戻られたわけですが、防衛庁では、この前先生がお話くださいましたいわゆる「赤城構想」を海原さんがつぶします。あのオーラル「海原氏のオーラル」でも得々とつぶされた話をされているんですが、その問題について先生は外からどういうふうにごらんになつていたのかな、というのが最初の質問でございます。小田村 その後は、あまり私は防衛庁の中の動きにはタッチしておりません。ですから、情報も入って来ておりませんし、あとはみなさんが適宜やつてくれるんだろうと思っております。高橋「幹夫」さんのあと「防衛一課長」は、たしか栃内「一彦」さんじゃなかったかと思えます。これは運輸省の方です。栃内さんが、しばらくしてから久保さんになったのかな。栃内さんはわりに短かったかと思えます。

それで、海原さんは帰られてから、たしか審議官だったと思えます

が、局長になるのは少し遅れていますね。ですからそれまでのあいだはあまりよく知りませんし、三十五年七月に私は名古屋に行っていますから、二次防がどういうふうになったかということは、まったくトレースしていないんです。あとで、出来上がってから何かの機会に村上信二郎さんにお会いしたことがあるんですが、村上さんが言われるには、「二次防がやつとできた。それはおまえが土台を作っておいてくれたからよかつたので、突然できたのではなくて、あれの上にいるいろいろ修正をして作つたんだ」ということでした。

伊藤 何か海原さんのお話を聞いていると、「赤城構想」をガランとひっくり返したような言い方ですが、一つの目玉であるヘリ空母がなくなるとか、いくつかのことはありましたか——。

小田村 ヘリ空母とかボマークとかは、当然問題になるべきものなんですね。だからそれは落とされたと思うんですが、そのほかのところは、そんなに大きな変化はないと思えますね。

伊藤 私どもも、「赤城構想」をまるでつぶしたというのはちよつと言い過ぎじゃないか、と思つて伺つていたんですが。

小田村 村上さんはそう言っておられました。それでヘリコプターの代わりにダッシュという無人機を積むことにした、ということでした。

■六〇年安保 (1) 安保改定をどう見たか

伊藤 わかりました。それで先生が「大蔵省に」戻られた頃あたりから、日米安保の改定問題というのが出てまいります。六〇年に安保騒動という盛り上がりがございますね。そして結局、岸内閣がアイゼンハワーの訪日を断念するというところで退陣することになります。反安保の運動がどんどん大きくなって来るということは、大蔵省の周辺もずいぶんデモが通るわけですから、ごらんになつていたと思いますが、どういう感想をお持ちだったのでしょうか。

小田村 私は、反対論というのはまったく根拠がないし、どうしてそ

んなに煽動されるのかな、と思っていたんです。ただ外務省も準備がちょっと足りなかったんじゃないか、という感じを持ちました。それは新安保条約に出てくる「極東条項」です。極東という言葉は、一番先に予算委員会で作られるわけです。それに対して、当然これは準備ができていなければいけないですね、役人の常識としては。そういうことで最初から躓いてしまうというのは、ちよつと国会対策として準備が不足だったのではないかという感じがいたしました。外務省はあまり国会に対して、各局共同してやっていないのか。これは条約局だろうと思うんですが、ちよつとそこがどうか、という感じがありました。

ただ、審議をいつまでもぐるぐるやっているんですね。これはずいぶん長い間やっているんです。予算を通してから、安保条約案の審議に入ります。それが四月からなんですが、それまでに予算委員会でもつぱらこればかりやっていたわけです。そのうえで条約の審議に入ると、また同じことばかりやっている。

一つは「極東条項」で、巻き込まれるという話ですが、もう一つ問題になったのは、「自助能力を維持発展させる」という言葉があったこと、つまり防衛力漸増路線ですね。それが明記されているということで、その点が大きな問題になったと記憶しているんです。あの漸増路線というのは、旧安保条約にも、アメリカはそれを期待すると書いてあるんですね。それから、ちよつと条文が見当たらないので正確かどうかかわらないんですが、昭和二十九年のMSA協定のときにも、その言葉が入っていたんじゃないかという記憶が私はあるんです。

伊藤 それは当然入っているはずですね。

小田村 ええ、だから何も新しくここで問題になることではなくて、MSA協定は国会審議を受けているわけですから、それで決着済みの話ではないかという気持ちがありました。どうもマスコミの論調はおかしい、なんでそのことを言い出さないのか、という感じを持っていました。

伊藤 いまになってみれば、あれはソ連、中国からの社会党・共産党

に対する軍資金の援助ということもあったと思うんですね。

小田村 ああ、そうかもしれませんね。

伊藤 だけど最初から、「安保は重い、これはなかなか反対が難しいんだ」ということを社会党の連中は言っていたわけです。

小田村 おそらくそうだと思いますね。

伊藤 だって現行の条約より良くなるわけですからね。それに反対してどうするんだ、という議論が一方であつたわけです。だけど、あれよあれよという間に広がってしまう。強行採決なんていうことが一つのきっかけにはなっていると思いますが、強行採決だって、それ以前にもいっぱいあるわけですからね。あれは完全に総括ができていない問題です。なんであんなに大きくなったかということですね。

小田村 それで朝日新聞なんか、初めからずっと「安保」反対で、最後になつて――。

伊藤 そうですよ。「暴力を排し議会主義を守れ」ということを各社連合で出したんですね。

小田村 各社連合で出しましたね。あのときに初めて、やつと抑制的な論調に戻ったんですが、それまではもつぱら煽動ばかりですからね。伊藤 行け行け、という感じですからね。

小田村 あのときの論説は誰でしたか、政府はけしからん、という論文を書いた人がいたものだから、僕は癪に障って手紙を書いたことがありますけれどね。

伊藤 多少ご存知の方だったんですか。

小田村 いや知りません。あれは六月何日でしたか。電車がストップするという噂が立ったのかな、役所で半分は宿直させることになつてとにかくひと晩役所に泊まったことがあるんです。それで、馬鹿なことですが、けしからんと思ったものですから、その時間にそういう手紙を書いたんです（笑い）。

■六〇年安保 (2) 自衛隊出動問題

伊藤 この安保の騒ぎの最後のところで、自衛隊出動問題というのがございました。これは当時からそういうことがあったと言われておりましたが、何かお聞きになっておられましたか。

小田村 それはだいぶ前からありまして――。

伊藤 前からあったんですか。

小田村 前からあったと申しますのは、国鉄ストです。それで鉄道連隊をつくれという話が、私が防衛庁に行った頃、あるいはその前から自民党筋からずっとあったわけです。

伊藤 鉄道連隊ですか、それは初めて聞いた。

小田村 結局、党の方に押し切られて、海原さんがおられた頃だったか、鉄道なんとか部隊という準備部隊なるものを五百人ぐらいの規模で、とりあえずつくられたことがありました。海原さんがいつでしたか、いったいどんなになっていたかと思つて実際に見に行つた。そうしたら「まことにかわいそうだった」と言つていた記憶があるんです。そういう考え方がずっと自民党の方にあったんです。

ですからこの騒動のときに、おそらくまた治安出動という声が出てくるのも当然だと思います。ただ、それじゃあいったい治安出動してどうなるかという、やはり一種の市街戦になりますから、それは到底考えられないということで、当時の赤城「宗徳」長官が拒否したのは当然だと思います。防衛庁全体がそういうことだったと思います。

それから、前の課長の高橋さんは警視庁の警備部長だったわけですね。それで高橋さんにもちよつと電話して伺つたことがあるんです。そうしたら、「治安出動なんかやつてもこれを抑えられるものではない」と言つておられました。あのときはハガチ事件が先にありまして、あれはヘリコプターで救出したわけですが、今度はアイクの立ち往生になってしまうわけですね。まだ高速道路ができておりませんから、アイクが来られて、宮城まで行かれる道路の警備が警視庁として一番大変だったようです。高橋さんもそれを一番心配しておりました、「これは人海戦術で行くよりしょうがない。だからアイゼンハワ

ーが来たときには、ひとつ君たちもみな一緒になつて歓迎の旗を持つて、沿道に出てくれ」ということを言つていましたね。

伊藤 實際上、警備はとても無理だということで、中止に追い込まれるわけですね。自衛隊は、もとはといえば警察予備隊として出発するわけですが、警察的な存在ではありませんね。

小田村 初めからそうなんです。

伊藤 海原さんもそうおっしゃつていたかな、最初から軍隊としてアメリカが育成したということですから、ああいうときに出動したら軍隊として行動する以外にないわけですね。そうすると内戦ですからね。小田村 まだあの頃は――。その後のデモに対しては、だんだん警察の方も装備を固めていきましたからね。

伊藤 そうですね、機動隊が充実しましたからね。

小田村 機動隊が充実していましたが、あの頃はまだ十分ではなかったんですね。

伊藤 弱かったですね（笑い）。

小田村 弱かったです（笑い）。

伊藤 学生でも組合でも、棒を持つていけば適当に戦えるという感じでしたからね（笑い）。

武田 実感がこもつている（笑い）。

佐道 もう、その頃は伊藤先生も闘つてはいなかったですね。

伊藤 もう闘つてはいなかった（笑い）。見ていた方ですから。

小田村 いろいろな知つていらっしゃる先生がずいぶん全学連の応援をされるものだから、がっかりしておりましたね。

伊藤 あのときは本当に、あれよあれよという間に、どんどん広がつていきましたね。いろいろな人が参加しましたからね。総括というのも変だけれど、あれはいったい何だったかということを引きちんと分析したものはない、という感じですね。いろいろな要因が複雑に重なつてああいう事態になったんだと思いますけれどね。

小田村 そうですね。それから、この前お話しした、「三十会」でお目にかかった伊沢甲子磨さんという方は、三島由紀夫さんと非常に親

しかつたんですね。伊沢さんの話ですと、三島由紀夫が霞ヶ関で鉢巻きを締めて、デモ隊ではなくて、警察、機動隊を応援していたという話を聞きました。

武田 初めて聞きますね。

小田村 私は三島さんというのはあまり知らなかったんです。知らなかったといつても一期下だから、知らないわけではないんですが、そんなことをするとはまったく知らなかったので、びっくりしました。

伊藤 そうですね。当時大蔵省においでだったと思いますが、あの盛り上がりに対しては、危機感をお持ちだったんじゃないですか。大したことはない、という感じでは必ずしもなかったんでしょう。

小田村 そうですね。たしかにアイゼンハワーが来られなくなったのは大変だと思ったんですが、岸さんがテレビで言っていました。「いまプロ野球だってみんな見に行っているし、映画館も満員だし、何が問題なんだ」ということでした。これは大騒動にはなっていましたけど、一般庶民とはかけ離れていたんですね。

伊藤 テレビがかなり普及し始めていたわけですね。だから映像が非常に影響を与えたということもあると思うんですね。たしかに岸さんがおっしゃっているように、後樂園にはいっぱいだったんですね。普通の街を見ていたら、なんということはないわけです。それは七〇年安保のときもそうですけれどね。そういう点では、楽観していた人は楽観していたようですね。

小田村 そうですね、はい。

伊藤 また、あの評価についても、共産党は勝利したと言ったのかな、社会党は敗北したという言い方をして、両方が合わなかったんですね。社共共闘がうまく行かない。安保の問題はそういうことで、また何かありましたら、お話しください。

■為替局資金課 (1) 外国為替管理法の改正

伊藤 それで大蔵に戻られて、為替局の資金課ですから、元のところに戻られた、ということですね。

小田村 そうなんです。

伊藤 この前資金課のお話を伺いましたが、おいでにならなかった三年数ヶ月のあいだに、何か変わりましたか。

小田村 中味はあまり変わっていないかと思いますが。ただ外貨の方もだいぶ準備ができてきて、国際収支の危機はかなり遠のきました。そういう点ではだいぶ経済情勢は良くなっていったんですね。

伊藤 岸内閣の途中あたりから景気がガーンと良くなりますね。

小田村 はい、神武景気ですね。

伊藤 神武景気がさっきの安保騒動にも影響があると思うんですね。どね。こういう形で影響したかは別として、ですね。

小田村 そうかもしれません。

伊藤 やっぱり外貨も貯まってくる。当時はよく「外貨の壁」ということを言っていました。

小田村 「国際収支の壁」ですね。

伊藤 それが少しは緩和されたということですね。

小田村 だいぶ緩和されておったわけです。それでこのときに、為替局で外国為替管理法の改正をぼつぼつ考えようということで、その作業が始まっておりました。当時の為替管理法は、原則として取引を全部許可制にしてそれを解除していく、ということだったんですが、それを原則自由にして必要なものに対して管理をする、ということに方針を転換しようということで、為替管理法の改正案をつくりかけておりました。

伊藤 まだ実現はしていないんですね。

小田村 このときは、まだです。

伊藤 外為の特別会計の円貨資金繰りというのはどういう意味なんですか。

小田村 円貨資金繰りというのは、外貨が貯まってくると、為替銀行が日本銀行に外貨を売るわけです。そして円貨を供給する。日本銀行

行は外国為替特別会計の代理をやっているわけです。ですから円資金が要るわけです。そこで、外国為替証券という短期証券、短期国債を発行します。これは日銀引き受けでしたか、市中に売り出すようになったのはもう少し後のことになります。外為証券を発行して、円貨を調達します。それを、外貨を売りに来た為替銀行に渡すということです。ですから円資金が要るわけです。そのへんのことが円資金繰りというわけです。

伊藤 トータルで円の供給は多くなるわけですか。

小田村 多くなります。輸出が増えれば、当然それに見合いの円貨が国内にばらまかれるわけです。

伊藤 そうすると、多少インフレ気味になるということですか。

小田村 そうです、当然インフレ気味になりますね。

伊藤 当時は戦後の苦い経験があるものですから、インフレに対して非常に警戒的であったことはたしかだと思っんですね。

小田村 それは日銀の市場操作、マーケット・オペレーションで、国債をまた売り出して吸収するというをやっていたんですね。

伊藤 この前、外貨資金を運用されるお話がございましたが、外貨が貯まってきましたと、また運用の問題が起こるわけですね。外銀に預けるとか――。

小田村 二つありまして、米国債を買うのが一つですね。そのほうがたしか金利が高かったと思います。それから外国の銀行に預金するということがあります。これは例えば、バンク・オブ・アメリカなどが多かったと思うんですが、そういうところに直接預金しておくことによって、外銀と日本との取引が全体として円滑になるということ、一種のPR効果みたいなものがあるわけです。あとは日本の為替銀行に預託する。東銀が一番多かったわけです。東銀はそれを運用して、運用益を稼ぐということで、決済資金にもするわけです。ほかの、三井、三菱、住友というようなところにも少しずつ預託をしています。伊藤 そうすると、その資金運用で少しは利益は上がるわけですか。小田村 もちろん利益は上がります。その利益によって、発行してい

る外為証券、短期証券の金利を払っていくわけです。

伊藤 安全に儲かるというわけではないですね。

小田村 それが結構儲かっていたんです。だから外為会計には積立金がありあいにありまして、これはあまり知られていなかったんです。このときの課長が武藤謙二郎さんという方で、この方は前に主計局にいたものですから、「ここにこんな金があるのか。これは使えるな」と言っていました。その後、外為特別会計から一般会計に繰り入れをするようになりました。

伊藤 そろそろ右肩上がりの時代になってくると、そういうことになるんですね。

■為替局資金課 (2) 国際収支統計

伊藤 それからもう一つ、国際収支統計の問題ですが、これについて先生から前にお話があったように思いますが。

小田村 実は、正式の国際収支統計は取引の時期からだいぶ遅くなつてからつくったんです。たしか一年ぐらい経ってからではないでしょうか。何が速報値かといいますが、外国為替統計というのがありまして、日本銀行で出しております。これは要するに、外国為替の決済を集計しまして、貿易の輸出入と貿易外の受払いと分けて、それを統計にしていたわけです。

伊藤 それでプラスとマイナスが出るわけですね。

小田村 プラス・マイナスが出て来ます。これは一番正確で早いわけですね。あと無為替の通関の輸入がありますが、それはそう大したことではありません。いちおう為替管理が行き届いておりましたから、だいたい全部そこに集中してくるわけですね。

ところがだんだん、海外に商社、メーカーの支店ができてきますと、本支店勘定で送金したりするものが出てくるわけです。これは外国為替銀行を通さないでやるものですから、その統計が取れなくなる。こ

れもまだ、そう大したことがないんです。

もう一つ一番困ったのは、ユーザンス (usance) という支払猶予手形、期限付手形です。船積みされた積荷が到着して通関手続を終えると、その手形を決済して向こうに支払うということになるわけです。ユーザンスは、それをふた月なり、み月なり猶予するわけです。そうすると、この月に支払ったものが、ふた月前の通関あるいはみ月前の通関かもしれない。だから輸出入の統計自体が実態を反映しなくなってきたんです。

だんだんそれが一般化してきて、どうもめちゃくちゃになってきた。これではしょうがないということで、日本銀行の管理局と相談いたしまして、とにかく直そうということになった。国際収支は全然わからなくなってきたけれど、通関はすぐに出て来ますから、それを土台にして手を加え、貿易外関係はまた別に報告を取って、国際収支統計をつくろうということにしたわけです。それが、私が「為替局資金課に」帰っているあいだにした、一番実質的な仕事だったかもしれませ

ん。

伊藤 その方式はいまでもずっと改良しながらやっているわけですか。

小田村 そうです。改良されながらやっています。

伊藤 そうすると、その前の外国為替統計とはスツとはつながらないわけですか。

小田村 そうですね、つながらないですね。もっともそういう方式の国際収支統計というのは、前から続けてはいたんです。ただ時間的に非常に遅かったものですから、外国為替統計のほうが簡単でわかりやすいということ、そちらが使われておりしました。

伊藤 国際収支統計も速報が出るということになったわけですか。

小田村 ええ、だんだん最近では速くなってきましたね。

伊藤 先生の頃は、数ヶ月なり――。

小田村 そんなにはかからなかったと思います。推計値を使ってやっておったと思います。

伊藤 これは経済界の人々にとっては非常に大事な仕様のわけですね。

小田村 そうなんです。それがわからないと経済見通しその他が立たないわけですから。

伊藤 これは日銀の仕事なんですか、それとも大蔵省なんですか。

小田村 日銀と大蔵省で共同です。

伊藤 日銀の協力がなかったらできないわけですね。

小田村 ええ、できないですね。実働部隊は日銀と考えていただいていいですね。

伊藤 日銀と為替局というのはかなり密着しているわけですか。

小田村 密着していますね。

伊藤 日銀全体ではないだろうと思いますが、日銀のあるセクションと人的な交流などもあるんですか。

小田村 人的な交流はあまりないですね。

伊藤 でも絶えず接触している、ということですね。

小田村 ええ、しょっちゅう接触しています。

■為替局資金課 (3) 為替局の人々

伊藤 戻られてから、「為替局資金課に勤務されるのは」そんなに長い期間ではないんですね。

小田村 そうです。「為替局には一九五九年」十一月に戻りまして、翌年七月「には名古屋国税局勤務になるわけ」ですから。

伊藤 ちょうど安保が終わった頃ですね。

小田村 池田さんが総理大臣になった直後ぐらいですね。

伊藤 これは役人の異動としては、ごくありふれたことなんですか。

小田村 ありふれたコースです。このぐらいだと、まだ在外勤務には足りないところでしょうね。

伊藤 いちおう為替局資金課では課長補佐なんですね。

小田村 課長補佐です。為替局にまた戻ったのは、この前もちょっと申し上げましたが、武藤謙二郎さんが一高で高橋さんの一年後輩で、

「もうぼつぼつ戻してくれないか」というお話があったからです。武藤さんという方は、奥さんが神川彦松さんのお嬢さんなんです。大変頭のいい方で、このあいだ話した香川「鉄蔵」先生と関係があった方なんです。そんなことで私も存じ上げていて、わりあいに幅の広い方ですね。

例えば、先ほど申し上げた為替管理法の改正は、竹腰君というのが起案をしておったんですが、その時に管理の要件として、安全保障が入っていないからなんです。そうしたら武藤さんが、「これは世界どこの国でもやっているんだから、安全保障ぐらい入れておいたらどうだ」ということを言われましたね。竹腰君は「私は防衛は嫌いなんで」なんていうことを言っていたんですけれどね（笑い）。しかし武藤さんは非常に常識的なことを言われました。

それから面白いと思ったんですが、ちょうどその頃、アメリカが偵察衛星を上げたんです。武藤さんと食事をしていましたら、「どうもアメリカはスパイということに対して、あまり倫理的な観念がないのかな」と言われるんですね。つまりあれは「スパイスター」という呼称なんです。スパイというと、日本では正攻法から外れた（伊藤 非道德的な）感じがするんですが、「アメリカにはそういう感じがしないのかな」と言っておられました。

それから武藤さんはその頃、朝日新聞から出ておりました『太平洋戦争への道』という本を読み始めていまして、「自分は陸軍が全部悪いんだと思うけれど、統帥権問題、ロンドン条約で、海軍がもともと元凶だということが判った」と、そんなことを言っておられたこともありまして。なかなか面白い方です。

前に私が扱っておった外貨予算関係は、私の一期下で久光「重平」君というのがおりまして、そちらで全部やっております。私は外貨預金の関係と、国際収支統計の関係を主として見ておりました。ちょうどその下に、補佐で吉本「宏」君というのが来ておりました。これは前に私がニューヨークに行きましたときに、ニューヨークに書記、見習いで来たおった男です。あとで理財局長から日銀の副総裁になり

まして、日銀でも一緒になったんですが、これも非常に良くできる人です。そういう人がいたものですから、わりあいにゆつくりと仕事をすることができました。

伊藤 ちよつと一般的なことですが、大蔵はその時点では、優秀な人材を吸収する一番のトップだったんですね。戦前で言えば、内務省が一番優秀な人材を集めたわけじゃないですか。

小田村 大蔵と内務と両方ですね。

伊藤 それで内務がなくなりましたからね。

小田村 内務がなくなつて、いくつかに分かれてしまいましたからね。伊藤 そうするとやっぱり大蔵が人材の宝庫になったんですね。

小田村 そうなんでしょうね。あと、通産省がその後かなり優秀な人材を採るようになってきました。それからこれはちよつと別格なんです。農林省ですね。これは、気風として、伝統的に風格のある人が多いですね。あそこもなかなか面白い役所だと思いますね。

伊藤 昔の農商務省以来の伝統でしょうか。

小田村 農商務省以来の伝統があるんだと思いますね。

伊藤 農商務官僚というのは、農林省と商工省になりますからね。商工省というと、すぐに岸さんを思い浮かべますが、岸、椎名さんの伝統がありますね。戦前の内務省がなくなったということは、内務官僚にとっては辛かったんだろうと思いますね。

小田村 そう思いますね。いまでも有事法制とか市民防衛ということ言うんですが、あれは内務省が復活しないとできないよ、いつも言っているんですね。

伊藤 いま自治省も総務省になってしまいましたからね。

小田村 自治省というのはまたちよつと違うんですね。

伊藤 建設省も国土交通省になったし、いろいろなところに紛れ込んで、どこに行つたかわからないですね。ちよつと変なところに「話」が行きました。

■名古屋国税局直税部長 (1) 国税局の仕事

伊藤 それで、「昭和三十五年七月に」名古屋国税局の直税部長に就任されるわけですが、一年経っていないですから、ずいぶん短い期間ですね。

小田村 しかしだいたい異動の時期になっておったものですから、そういう意味ではちょうどいい時期に帰れたのではないかと思うんですね。そうしないと、こういう異動に引つかかなくなるわけです。

伊藤 要するに、防衛庁にいたのがちよつと長過ぎた、ということですね。

小田村 長過ぎたということです。だいたい外に出るのは二年ぐらいが普通なのに、私は三年三ヶ月おりましたので、ちよつと長かったわけですね。外に一回出てから、本省の課長に戻るとというのがだいたいのルートだったわけです。

伊藤 名古屋に行かれるということになりますと、ご家族はどうなされたんですか。

小田村 家族も連れて行きました。まだ葉山に父の家がありまして、自衛隊に行っていたすぐ上の兄が住んでいて、それが転任で空けたものですから、そのあとに住んでいたんですね。そこで兄と相談して、部下におつた自衛隊の人に、留守のあと住んでもらうということにして、いちおう空けました。

伊藤 特に異動のときというのは、名古屋とか希望を出すわけではないんですね。

小田村 このときは希望は出しておりません。

伊藤 出すこともあるわけですか。

小田村 出すこともありますね。あとで局長で行ったときは、もう一回名古屋に行かせてくれと言ったんですね。すけれどね。

伊藤 前にいらしたのはたしか大阪ですね。今度は名古屋だから、あれっと思ったんです。ここは、直税部長のほかに部長はいるんですか。

小田村 部は、当時は総務部と直税部、間税部、徴収部、もう一つ調査査察部という五つの部がありました。もう一つ、それとは別個に協議団というのがありました。これは課税に対する不服申し立ての処理です。最初は税務署でやるわけですが、税務署の裁定にまだ不服だというのが国税局に上がってきたまして、それを協議団が扱うわけです。これはシャウプ勧告でできたんですが、それが別にございました。

伊藤 団というのは変な名前ですね。

小田村 司令部の連中は「compromise」ということをさかんに言っていました。何か向こうの直訳だろうと思います。

伊藤 いまでもあるものですか。

小田村 いまは協議団ではなくて、協議団を国税局から分離して不服審判所というのをつくったんです。不服審判所ができたのは、たしか昭和四十五年頃でしたかね。

伊藤 それはどこに属しているんですか。

小田村 これは国税庁長官直轄ですか。しかし独立性をもった機関で、この不服審判所長には、裁判官の方などにも来ていただいています。

伊藤 でもある程度税務に詳しい人でないと困りますね。

小田村 そうですね。

伊藤 直税部長というのは、直接税ですね。

小田村 直接税です。ですから、所得税と法人税と、資産税つまり相続・贈与税、だいたい税目としてはそんなところですね。ただ課税の中心ですね。間税はその頃は、酒税と——。いろいろな消費税が減りましたから。

伊藤 固定資産税は？

小田村 固定資産税は地方自治体に回しました。固定資産税はもともと地租家屋税といって国税だったんですが、それをシャウプ勧告によってだと思いますが、全部地方に移譲したんです。ですから、当時土地台帳、家屋台帳というのは全部税務署にありましたが、それを全部市町村、あるいは区役所に渡したわけです。

伊藤 自治体に渡したわけですか。

小田村 はい。ですからいまでも固定資産税「の通知」は区役所から来ますね。

伊藤 でも市町村税なんかは、国税の直税に基づいて来ますね。

小田村 それは住民税ですね。住民税は、所得税の課税標準を市町村に渡して、それを市町村で計算して納税通知を出すということにしています。

伊藤 そうすると、地方の自治体と国税局というのは非常に密接な連絡があることですね。われわれは三月に申告をいたしますが、別に市町村に出すわけではないですね。

小田村 税務署にお出しになると、それを税務署が市町村の方に「渡す」。いまは機械化されていると思いますが、昔は市町村が写しに来ました。それに基づいて、納税告知を出すということです。これが住民税の場合ですね。

伊藤 さつきカン税とおっしゃったのは、税関を通るお金ですか、そうではなくて間接税ですか。

小田村 間接税です。

伊藤 間接税の部長がなんで必要なんですか。

小田村 昔から間接税というのは、税金の相当大的部分を占めていましたからね。

伊藤 間接税としては何があるんですか。

小田村 いまは酒税がそうですね。

伊藤 酒税はどこから取るんですか。

小田村 酒税は醸造元から取ります。昔は砂糖消費税とか織物消費税とか、いろいろあったんですが、そういうものがみんなシャウプ勧告でなくなりました。取引高税も廃止になりました。酒税のほかには――。

伊藤 タバコはどうなんですか。

小田村 タバコは専売公社ですから、専売でやっていました。いまはJTですが、専売公社で定価の中に入れて、税金部分を国庫に納付する。専売納付金と言っていましたけれどね。

伊藤 納付金なんですか。

小田村 納付金ですね。だけど、いまは税金になっているかもしれない。

伊藤 タバコ税と言っていますね。

小田村 じゃあ、民営化されてからタバコ税に変わったんですね。そう、タバコは株式会社になったんですね。それで税金になったんですね。

伊藤 一本一円ずつ上げると相当なシェアになるという話を、竹下さんから伺いましたけれどね。

小田村 間接税は忘れしましたね。揮発油税、軽油取引税や、あと細かい骨牌税、カルタですね。

伊藤 骨牌税というんですか！

佐道 漢字で書くとわかりますね。

小田村 そんな細かい税金がいろいろありました。

伊藤 あれは地方税ではないんですか。

小田村 たしか国税だったと思いますけれど、最近は忘れしました。

■名古屋国税局直税部長 (2) 直税部長の仕事

伊藤 直税部長というのは、日常的にはどういう業務なんですか。

小田村 日常的には、普通は課税の運営についての方針を作ります。どういうところに重点を置くかということです。だいたい国税庁でつくりますが、国税庁でつくったものをこちらの土地に見合ったものにするために若干手を加えまして、それを税務署のほうに流すという通達行政ですね。

それから法令の解釈の問題があります。例えば所得税法、法人税法の解釈問題がなかなか難しいんです。それで解釈通達をその頃から国税庁で始めまして、「国税庁通達〇〇」ということで、ずっと出しております。たとえば所得税でいうと、所得の種類で一時所得というのは何々とか、営業所得は何々とか、営業所得にするのか給与所得にする

るのか不動産所得にするのかとか、そのへんの解釈がいろいろございまして、そういうものについての解釈通達が国税庁から出ているんです。それでもまだいろいろな疑問が税務署のほうから上がってきますから、それをまた解釈してやる。問題がある場合にはまた国税庁のほうに伺いを立てるということになります。

伊藤 それは昔からやっていますね。たしか明治初年の頃も、そういう伺いが出ていますね。

小田村 しょっちゅうあります。また法人税になりますと、損益計算あるいは原価計算等々で難しい問題が出てくるんですね。それについても税務署に質問が出て来ますから、そういう解釈の問題点について説明会を開いて、それに対して一つ一つ答えていくという会合がときどきありました。これは会社の経理担当者が集まって、国税局に質問してくるわけです。

伊藤 何か節税なのか脱税なのか、境い目は非常に怪しいところがあるじゃないですか。

小田村 そうですね。なかなか難しい問題があります。例えば土地取引がございしますね。土地取引で不当に低い価格で譲渡した場合には贈与と見做す、ということがありますね。それじゃあそれはどの辺のところからそういうふうになるのか、とかですね。今度は例えば、本来一〇〇万円のところを一〇万円で渡した。それはおかしいというので、一〇〇万円として課税をするというようなことがあるんですね。贈与した場合にも譲渡所得を取っていたのかな、徴収面からいうとこれはちよつと気の毒だな、と思われるようなケースがときどき出てくるんですね。そういうのをいちいち聞いてはおつたんですが、長いあいだ積み重ねてきた解釈ですと、なかなか簡単に変えられないということがありました。

伊藤 前の人のやり方と、次の人のやり方が別だったら、また問題でしようしね。

小田村 それからもう一つ、所得税でも法人税でもそうなんですが、特別調査班をつくって、「特調」と言っております。一定の資本金

なり所得金額以上のものは、調査査察部の調査課で調査して課税するわけですが、それ以下のものでは、しかし税務署だけでは課税調査が難しいという案件については、国税局から直接に出かけ行つて調査するんです。それをやっていました。

伊藤 それは下から上がってくるんですか。

小田村 上がってきます。それから特調班の中でもいろいろと情報調査をやっておりますから、これは局のほうで調査するからと署に申し渡して、こちらから出かけていくわけです。そういう課税に関する調査の決裁書類が出てきますから、それはいちおう目を通します。そんなことがありましたね。

伊藤 国民の生活に一番密着した部分ですね。

小田村 そうですね。

伊藤 国民の個々人のプライバシーにも非常に触れるところですね。

小田村 そうなんです。

伊藤 だから危ないといえ、危ないですね。

小田村 危ないんです。一番プライバシーに触れるところですから、税務署員はそれだけの気構えを持たなくてはいかん、ということはよく言っております。

伊藤 部長のところとか地方の国税局長のところに、投書とか、そういうものはあるんですか。

小田村 投書もありますね。しかし投書で、それほど実のあるものは少なかったと思います。

伊藤 苦情は直接税務署に言うんですね。

小田村 ええ、税務署に言いますね。それから、災害のようなことがございしますと、災害に伴う免税措置を早急にとらないといけないわけです。これは全国的なものもありますが、だいたい国税局が中心となつてやります。伊勢湾台風がそうだったんです。

伊藤 地域を限定しなければいけないんですね。

小田村 そうですね。

伊藤 そうすると、「災害指定地域に」入るか入らないかでずいぶん

違ってくるということですね。

小田村 しかし災害の被害を受けた個所は決まっています、わかっていますから。

伊藤 でも境目というのがありますからね（笑い）。

小田村 それから非行問題がありますね。税務署員の非行問題。これは監察官というのを置いております。

伊藤 軍隊でいえば憲兵みたいなものですか。

小田村 そうですね。それが警察としようちゅう連絡をとって、情報をとって、非行があつた場合にはそれを調査して、処分を決めるということがあります。

伊藤 それはしばしば起こるんですか。

小田村 それはしょっちゅうではありませんが、ときどきそういうことがありますね。

伊藤 接待を受けて、というようなことですね。

小田村 接待を受けたとか、横領したとか。横領は直税部の場合には少ないかもしれませんがね。

伊藤 直接にお金をいじるのは――。

小田村 徴収のほうですね。そういう案件が上がってきた場合には、監察官と協議することになります。

伊藤 懲戒免なんでするときは、あまりいい感じじゃないだろうと思いますけれど。

小田村 警察は、辞めれば立件しないでやる、という場合も比較的多くあるんですね。そういう場合は、辞めさせられれば、ということになるわけです。

伊藤 もちろん弁償はさせるんでしょう。

小田村 もちろん弁償はさせます。

伊藤 国税の査察が入るということと、警察が入るということが新聞によく出ますね。先生のご在任中にはそんなに大きな事件はなかったですか。

小田村 大きな事件はございませんでした。白タクを取り締まって

くれということが陸運局からありました。中村大造さんという、後に運輸次官になった人が担当していました。それは税金をかけてくれということでした。そういう希望もあるんです。これは陸運局が、白タクが横行して困るというんです。

伊藤 一時期白タクというのはずいぶん騒ぎましたね。

武田 いまだにありますね。

小田村 部長の仕事は、各署を回ることなんです。それで税務署を回りまして、その署長さんと直税課長さんと会って、その人物をよく見る。それから仕事ぶりを見ておく。これが一番重要な仕事です。おかげさまで、この四県についてはあちこち回ってきました。

それからもう一つは、私が税務署長時代にできなかった農業所得ですが、これも面白いんです。「坪刈（つぼがり）」と申しまして、田んぼの一部の実際の収穫状況を検査して、だいたい今年の収穫はこれぐらいだということで、面積あたりの所得金額を計算するんです。これを標準率と申しまして、各税務署に渡すんです。それについてはもちろん農協と打ち合わせをして、了承をとった上で渡すわけです。それによつてだいたい農業所得については課税する。

これは米ですが、静岡・愛知にはみかんがわりに多いんですね。みかんの山に行きまして、どれぐらいなっているかというのを、目見当でだいたい見るんです。それを実際にやった標本を一つ見まして、これはこれぐらいの分量だということで、この山はこれぐらいだという。みかんの場合は、坪刈ではなくて「検見（けんみ）」と言っていましたね。

伊藤 昔の言葉ですね。

佐道 「検見法（けんみほう）」とかありましたね。

伊藤 そういうことをするのは、ベテランがいるわけですね。

小田村 ベテランがおります。

伊藤 あの人に見られて、こうなったらしょうがないという信頼がないと、相手は納得してくれませんからね。

小田村 それから、特定のところを決めておいて市街地をずっと歩く

んですね。そして店構え等々から、この家の所得金額はこれぐらいだという見当をつけてみるわけです。それを実際に調査したものと照らし合わせてみる。勘を養うんですかね、そういうこともやったことがあります。

武田 それで当たるものなんですか。

小田村 どうですかねえ（笑い）。

伊藤 当たるようになる頃には定年になるかもしれない（笑い）。ちょうど名古屋に行かれた頃は池田内閣の所得倍増論で、その前から経済は少し上がっているわけですが、勢いづいた時期でございますね。

小田村 名古屋は、伊勢湾台風が前年「一九五九年」にございましたから、私が行きましたときには、その爪痕がまだだいぶ残っていました。まだ倒れたままになっていたところもあります。国税局の署員で犠牲になった人もありましたから、一周忌にお見舞いに行ったこともあります。伊勢湾台風のとときは、局長は上田「克郎」さんといったんですが、大変迅速に処理をされて、評判がよかったんですね。

■名古屋国税局直税部長 （3）名古屋国税局の管轄

伊藤 名古屋国税局というのは、どれぐらいの範囲をカバーしているんですか。

小田村 名古屋は東海四県です。愛知、岐阜、三重、静岡です。これはほかの役所とほぼ同じなんです。静岡が東京に属したり、名古屋に属したりしているんです。

伊藤 国の出先機関ですね。

小田村 静岡は、法務関係はたしか東京ではなかったでしょうか。そういうところがあります。三重はだいたい東海ですね。昔は北陸二県が名古屋に属していたんです。福井は大阪ですか。

伊藤 じゃあ、富山、石川が「名古屋国税局の管轄に」入っていたんですね。

小田村 ええ。それから長野県がむかし名古屋に属していたことがありました。だから当時の国税局の人で、「私はむかし長野の税務署にいたんだ」という人もおりました。それはその当時長野にいて、名古屋に移ってきたわけですね。

伊藤 そうすると東海四県にこの出先があるんですね。

小田村 全部税務署がありますから、その税務署を統括しているわけですね。

伊藤 各県ごとに統括しているところはあるんですか。

小田村 それはありません。

伊藤 そうすると名古屋の国税局があつて、あとは税務署ということになるわけですか。

小田村 そうです。

伊藤 税務署の数は生半かな数ではないでしょう。

小田村 税務署は全部で四十八だったかな。増えたり減ったりしているんですが、まあ五十ぐらいですね。だいたい全国で五百、名古屋はその約一割です。職員も、当時は全国に五万人で、名古屋は五千人でしたから、だいたい一割という感じでした。

伊藤 当時はまだ電算ではないですか。

小田村 電算は使つてはいたんですが、あの頃はどうかねえ。

伊藤 電算処理をするようになると、またやり方がだいぶ違ってきましたね。

小田村 そうですね、だんだん機械化されてきたので、どこまでがどうだったか、私もあまりはつきり覚えていませんね。

伊藤 藤波「孝生」さんの話でしたか、中京圏は名鉄と東海銀行と中日新聞、トヨタ、大きな企業はそういうものがあるという話をされていました。

佐道 そのぐらいだ、という話でしたね。

小田村 松坂屋もそうですね。

伊藤 しかし三河のあたりは中小の織物業が多いんじゃないですか。

小田村 中小企業は多いですね。織物は昔からあったんですね。特に一宮、津島あたりが多かったと思うんですが、織物はだんだん減ってきました。でもまだ綿紡と毛織がありましたね。

伊藤 このころはまだ良かったんじゃないですか。

小田村 そうですね。まだ織物の景気はよかった頃ですね。

伊藤 岐阜も少しありますね。あと、まだ東海臨海工業地帯という形にはなっていないわけですか。

小田村 東海製鉄はどうだったかな。東海製鉄を始めたかな。二回行ったものですか、ちよつと忘れたんですが。

武田 もうちよつとあとかもしれないですね。

小田村 東海製鉄をそこで始めたときだったかもしれません。富士鉄になりましたけれどね。

伊藤 あと名古屋には造船もあるんじゃないかな。そういう大企業は、それほど多くはないんですか。

小田村 造船は三菱名古屋と鋼管の津と、静岡県の清水にいくつかあったと思います。企業としては中小かもしれませんが、陶磁器がわりあい多いですね。

伊藤 瀬戸をはじめ、岐阜にもありますね。

小田村 岐阜にもあります、多治見と瑞浪ですね。それから渥美半島の常滑、あと四日市にもありますね。

伊藤 巨大企業はあまりないんですね。まだあの頃は、トヨタはそんなに大きくないでしょう。

佐道 トヨタはまだそんなに大きくないですね。

小田村 浜松が自転車、自動車ですね。

佐道 ヤマハ、河合。

小田村 ヤマハの楽器と自転車ですね。鈴木は自動車、ホンダがありましたね。

佐道 結構ありますね。

小田村 結構あります。そうか、造船は三菱重工がありますね。

伊藤 三菱名古屋というのがあったと思います。

小田村 三菱重工は飛行機ですね。それから川崎航空機が岐阜になかったかな。

伊藤 岐阜にありますね。しかし本当に日本を代表するような大企業は、そんなに多くはないですね。

小田村 名古屋の財界というのは堅実なところだったと思いますね。

伊藤 いまは地盤沈下と言われていますけれど。

小田村 でもトヨタがありますからね。名古屋はたいへん仏壇が多いんです。立派な仏壇が多いんです。

伊藤 名古屋というところ、仏壇も聞いたことがあるような気がするけれど、結婚式が（佐道 派手だといいますね）。トラックにいっぱい乗せて見せて歩くという話ですから、娘を持つと大変だといいますね。でも伊勢湾台風は、大企業にはそれほど大きなダメージを与えているわけではないでしょう。

小田村 そうですね、大企業はそれほどではなかったと思いますね。あれは材木が障害になったんですね。材木が溜まって（伊藤 木曾川とか）、それによって氾濫したんですね。

伊藤 あれは流木ではなくて、実際に木を流していたんですね。

小田村 流木ではなくて、積んであったものじゃないですか。

伊藤 貯木場か何かがあったんですね。名古屋の時代は、そうするとけっこうお忙しいけれど――。

小田村 忙しかったんですが、まああの時期ですね。

■名古屋国税局直税部長 (4) 総務部長代行と対組合交渉

伊藤 池田所得倍増政策で、少し景気がよくなったな、という感じは受けておられましたか。

小田村 受けました。やっぱり、みなさん非常に明るい時代でしたね。

まだ役人も気楽な時代で、勤務時間中にゴルフをしても叱られない。

佐道 よろしかったんですね（笑い）。

小田村 ところが国税庁長官に原純夫さんという方がなられて、「綱紀を肅正せねばいかん」とおっしゃって、勤務時間中のゴルフは厳禁するということになりました。原さんは大変厳しい方で、「絶対に芸者を入れるな」というんですね。原さんが北海道に出張されたときに、地元では気を利かせて持ってくるわけですね。そうしたらあとで、「あれはいったい何だ」というので、「あれは仲居です」といつてごまかしたとか（笑い）。

佐道 ずいぶんきれいな仲居さんが出て来たんでしょうね（笑い）。
伊藤 やつぱり経済的によくなっていると、それだけ税収も上がるということだと思いますね。

小田村 そうですね。

伊藤 税金の支払いを巡るゴタゴタも、ちよつとは減るでしょうしね。

小田村 減りました。それからもうひとつ、一年経った三十六年、「名古屋国税局の」総務部長は田宮「良策」さんといって台湾から帰って来られた方ですが、この方が熊本の本国税局長に替わられて、後任の総務部長に、私の前任者の直税部長の人がまた来ることになったんですが、そのあいだがひと月ぐらい空いたんですね。それで代わりに総務部長の代行をやってくれと言われて、しようがないからやっただけです。総務部長の代行をやりますと、署長の人事から、一番面倒くさいこととしては組合交渉をやるんです。組合交渉をいたしまして、人事をずつとやりました。その頃の組合は「全国税」といって、一番先鋭的でした。

伊藤 そうです、共産系でしょう。

小田村 共産系です。交渉のやり方もその頃教えてもらったんです。総務課長が少し精神的におかしな男だったものですから、ちよつと手こずったんですが、しかしいい経験をさせていただきました。

全国税対策というのはどういうことをするかというと、結局異動なんでしょうね。税務署はたくさんありますから、そういうのが固まっているとよくないからということで、分散させる。それから小さな税務署もあるんですね。だんだんなくなりましたが、十五、六人の税務署が

あります。そういうところは山の中が多いんですが、闘争のしようがないわけですね。家族的な関係になりますからね。そういうところではばらく——（笑い）。

伊藤 英気を養ってこい、みたいな感じですね（笑い）。

小田村 ですから役所でも、いろいろな勤務地のある役所はわりあいやりやすいんです。ところが勤務地が限られているところ、あるいはそこだけしかないところは、そういう人がいると大変ですね。

伊藤 しかし共産党の連中がいれば、民商との関係とか、いろいろ厄介ではないですか。

小田村 それはしかし、なかなかわからないです。民商もありましたが、民商からも質問書が出てくるわけです。民商は民商で、国税庁でまた会見、交渉がありますし、国税局でもあります。例えば「国税庁長官がこう言ったけれど、おまえどう思うか」という。そんなところ、ちよつとでも引つかかると具合が悪いわけですね。「国税庁長官というのはわれわれの上司なんだから、それについて部下の人間がとやかく言うべき問題ではない」ということで蹴らないと駄目なんです。なかなかそのへんの手管に注意しないとかんわけですね（笑い）。
伊藤 全国税というのはけっこう強力な組合だったと思いますけれど、国家公務員ですからストライキをやるわけにはいかんでしょう。団体交渉権はあるんですか。

小田村 正式の団体交渉権はないんです。ただ交渉を申し出たときには、引き受けないといけないんですね。

伊藤 要求するといっても、法令に縛られているわけですから。例えば日教組なんかの場合だと、ヤミ給与とか、ヤミ休暇とか、法律スレスレのところでは何かやる以外にないんですね。

小田村 そうですね。そういうものはできませんから。

伊藤 だからいくら過激でも、要求できることは限られているわけですね。

小田村 要求事項は結局限られてきます。忘れましたが。
伊藤 でも先生は組合との交渉はその時だけですか。

小田村 そうですね。

伊藤 あのご経歴ではないように思いますが。

小田村 組合交渉をやったのは、名古屋の直税部長のときと、国税局長のときですね。

伊藤 局長でもやるわけですか。

小田村 局長もやります。局長は出なければいけないんです。

伊藤 拓大の総長はいいんですね（笑い）。

小田村 拓大の総長はやりません。

■法規課主計官（１） 法規課主計官とは

伊藤 そして一九六二（昭和三七）年六月に、主計局の主計官として本省に戻られるということですが、今度はずいぶん違ったところにお戻りになりましたね。

小田村 主計局は初めてですね。

伊藤 これは上の方の配慮なんですか。

小田村 これはこの前ちよつとお話しした、香川先生のところによく一緒に行っておった亘理「彰」君に会ったときに、「主計局というのも一回行ってみたいな」という話をしたことがあるんです。そうしたら亘理君が、村上「孝太郎」さんに話したんでしょうか、どなたかに話したんですね、では主計官として採ってやろうということになりました。初めは防衛担当ということを考えていたようです。

伊藤 防衛庁に行っていたからですね。

小田村 行っていたから詳しいですからね。ところが、総務課長がたまたま岩尾「一」さんで、防衛庁のときにお仕えた会計課長でした。岩尾さんがたいへん配慮してくれまして、「おまえは防衛庁のことをよく知り過ぎているから、かえってやりにくいだろう」ということで――。

伊藤 そうでしょうね。「攻守とところを変える」という言葉もありま

すからね。

小田村 そうです。それで法規課ならば予算のことを勉強するにも、法律をみるにもいいので、法規課の主計官ということになりました。

伊藤 法規課の主計官というんですか。

小田村 法規課長がおりまして、その下に主計官がいるんです。これはいぶ前からですね。たまたまさつき申し上げた亘理君が主計調査官といいましたか、事業予算の關係か、ちよつと特別の任務を与えられて来ておったんです。だから課長クラスが三人いるという形になったわけです。課長は当時は上林「英男」さんという方で、この方は私が前に為替局にいたときに総務課の補佐をしておられた方です。その後主計官もやられたと思うんですが、ちよつと法規課長をしてもられたということ、みなさんよく存じ上げていたものですか。

伊藤 主計官というのは各省庁の予算を査定する人間かと思っていたものでしたから、法規課に主計官がいるのか、と思ったんですが。

小田村 法規課の主計官というのは、なんといいましたか――。

伊藤 課長がいて、課長補佐――。

小田村 課長補佐でもないんですね。

伊藤 ランクとしては課長補佐の上なんですか。

小田村 課長補佐の上なんです。管理職になるんです。管理職手当ももらいます。あのときは課長と分担していたわけでもないですね。ですから重要な事項になりますと、全部課長のところで相談いたしますね。それからあとは、課長補佐の総括的なこと、といったほうがわかりやすいかもしれませんね。

伊藤 法規課には主計官は一人なんですね。

小田村 一人です。

伊藤 それで課長補佐が――。

小田村 課長補佐が何人かいるわけです。

伊藤 先生のこれまでのご経歴で、法律というのはあまりなかったのではないでしょう。

小田村 法律はあまりやっていないですね。それまでは、税法は署長

と部長のときにかなり勉強しましたが、それ以外では法律はやっていませんね。でも法律というのは条文を読めばだいたいわかりますから。法規課というのは主管する法律が二つあるんです。それは財政法と会計法なんです。これが自分の主管の法律で、この法律を改正するときには起案をして国会への提出その他全部根回ししなくてはいいということになるわけです。

伊藤 それはめつたやたらに改正しないんでしょう。

小田村 めつたに改正しません。ちょうど私が着任したときに、会計法の改正が終わったところだったんです。会計法の契約部分で、一般競争契約と指名競争と随意契約と三つあったわけです。一般競争のほうをなるべくさせたいということで、一般競争を指名ではなく、資格基準を作って、その資格に合格したものは誰でもよろしいという条文を付け加えた、という改正をやりました。それが終わったところだったんです。

あと財政法のほうで、財政制度審議会というのがございまして、これが財政法、会計法を審議する機関だったんです。ところがこれは後ほど、あまり財政法、会計法について規定を変える必要性が比較的小ないものから、むしろ予算の諮問機能的なものに変えてしまおうということになりまして、福田大蔵大臣、佐藤一郎主計局長の頃に、そういうふうに性格を変えました。

■法規課主計官 (2) 農地報償問題

伊藤 ちょっとまた別のところでお書きになっているんですが、農地報償問題なんです。これはどこかの担当の主計官になれる前の話ですか。

小田村 そうです、法規課時代です。

伊藤 農地報償問題はなんで法規課なんですか。

小田村 結局、予算農林係でやるべきものかもしれませんが、これは

もともと農地の買収価額が非常に安すぎた。しかも交付公債で、そのうちほとんどインフレで大損してしまつた。その補償をせよ、ということですから、もともと一種の法律問題だということで、両方でやっておつたんですね。結局農林係はとも手に負えないからということで、法規課のほうで主としてやることになったわけです。

伊藤 これは立法をするわけですか。

小田村 立法するわけです。このときは農林省ではなくて総理府で担当しました。農林省は、これはおれの仕事じゃないというんですね。総理府に農地報償室ができてまして、そこへ農林省から、なんとか、非常に真面目な方がおいでになって、それと大蔵省の法規課とのあいだで交渉して決めたということです。このときの法規課長は相沢「英之」さんです。相沢さんは前に農林省を担当していましたから、農林関係が非常に詳しいんです。それでやりやすかつたんじゃないかと思います。

伊藤 これは旧地主さんたちの団体がかなりプレッシャーをかけたわけですね。

小田村 そういうことです。

伊藤 それで議員さんを通じて、議員連盟が何かをつくって、やったわけですか。

小田村 要するに法規課の立論としては、在外財産もそうですが、「占領下において行なわれた諸々の立法は日本の一存でできるものではなかった。ある程度損害を受けたものについても国民全般に受忍義務がある。しかも当時としては一応明確な基準に基づいて補償金を支払っており、最高裁の判決でも容認されている。したがって、改めて補償することはできない」。

ただ、なんでこういう問題が起こってきたかというと、その後小作から自作農になった人たちが、それを必ずしも農業用に使わないで、宅地化してしまつたし、しかもその地価が猛烈に上がったということで、大儲けしたということがあるわけです。それだから「国の政策に対して協力してくれた」という意味でなんらかの報償をいたしましよ

う」というような理屈をつけたのではなかったか、と記憶しています。

伊藤 最初は買収ですね。

小田村 そうです。

伊藤 ですからその買収価格に対して補償するということですか。

小田村 そうではないんです。補償するというになると、ほかのことにも波及してまいりますからね。いったん買収したもののについてですね。だからそうではなくて、その功績に対して報償金を渡すということなんです。

伊藤 報償なんですか。言葉がちよつと違うんですね。それはいまお話がありました在外財産の問題も同じですか。

小田村 在外財産も同じなんです。

伊藤 それは支払っているわけではないですね。

小田村 在外財産はすでに見舞金を出しているんです。これは昭和三十何年かに一回出しているんです。それで片づいていたわけですね。ところが農地報償でまたもらえたということで、また騒ぎ出したんです。それが在外財産です。これはまた私があとで法規課長になったときにやらされるわけです。

伊藤 問題としてはここからスタートしているわけですね。

小田村 そうなんです。ここで多少金を渡しちやつたものだから。このときに面白かったのは、金額が固まりますね。いままですべて全部交付公債で、たしか十年償還で渡すんですが、それを角さんが大蔵大臣で、無利子というのをやっただけです。国債ですから当然利子がつかなくてはいけないんですが、無利子にすると額面がそれだけ大きくなるんです。つまり一〇〇万円で年利五分だとしますね。そうすると結局総額で一二〇〇一三〇万円になるわけですね。それをやめまして、一二〇〇万円で無利子。そうすると額面が大きく見えるわけです。

佐道 利子の分を織り込んで、額面に入れているわけですね。

伊藤 見せかけの問題なんだな。

小田村 見せかけなんです。しかし見せかけが非常に喜ばれるわけですね。

佐道 人間心理をよく見ていますね。

伊藤 朝に三つ、夜に四つのたぐいだな。交付公債で実際に農地報償をやった金額はそれほど大きなものではないんですか。

小田村 そう「大きなもの」ではなかったと思います。私も覚えておりませんけれど。

伊藤 きちんと計算できたんですね。

小田村 ですから農地を面積あたりで決めたと思います。それから、北海道は単価を低くしたんじゃないかと思えます。北海道の買収面積は大きかったですから。たしか本州は自作農の限度が一町歩だったと思いますが、北海道は三町歩まで認められた。ですから北海道はそれに応じて単価を低くしたんです。そういう意味で、ある程度面積に応じた報償金を渡すことができたということですね。

【農地報償法成立経緯】……一九六四年六月、政府は農地報償に一、四五六億円の交付公債支給を決定。一九六五年五月一日、衆院内閣委員会で農地報償法案強行採決、一四日衆議院本会議で可決、二五日議長職権で参議院本会議開催、社会党牛歩戦術などで抵抗するも二八日可決。六月三日公布。

■法規課主計官 (3) 予算関連法案の審査

小田村 それからもう一つ申し落としましたが、法規課の主計官ですが、予算関連法案が出て来ますね。予算を伴う法律ですね。その法律を、ここで全部審査するんです。だから各省から言わせますと、法制局でも当然全部審査するわけですから、その法制局の審査の前に、予算を伴うものはここに持つてこなくてはならない。ということで、非常に嫌われるところなんです。

伊藤 昔の枢密院みたいなものですね(笑)。

小田村 法制局はほかの法律との整合性とか、憲法との関係ということとを調べるんですが、ここは予算を伴うわけですから、それが妥当か

どうかということを見ます。観点がちよつと違うんですけれどね。あまり細かくやりますと、そういうふうに悪口を言われるところなんです。

伊藤 それは非常に難しいものだと思います。あとで先生は聞われますが、例えば大学で定員増をするという、予算を伴うわけですね。そうすると大学の講座改変ということも関係するわけですか。

小田村 講座はたしか大学設置法の改正ではないですね。学部学科は改正になってきますが、講座は文部省令ぐらいではないでしょうか。

そのへんになりますと、法律・政令以下のもになりますから、ここでは見ません。ただ教官の増員ということになりますと、公務員の増員になりますから、当時としては文部省設置法の改正が必要でした。

伊藤 大学で新しい部局をつくるということになると、これは駄目ですね。

小田村 学部になりますと、こちらで一応審査します。しかしそういうものはだいたい予算のほうの査定に任せますので、こちらで見るのは形式的なことになります。

伊藤 そこをパスしたからと行つて、錦の御旗になって堂々と予算が取れるということではないんですね。

小田村 それは予算のほうが先になります。

伊藤 それは主計官のところを通つてくるときの問題ですね。

小田村 そうです。こちらはその時は形式的な問題です。

伊藤 それは委員会みたいなものをつくつて審査するんですか。

小田村 そうではありません。それぞれの係でやります。私が見たのは、例の義務教育の教科書ですね。教科書無償法を私が法規課の主計官のときにやりました。このときは主計官が赤羽「桂」さんだったかな、向こうでもいろいろ言つておったわけですが、無償措置をどうするかという問題です。例えばこれは予算というか閣僚折衝で決まってるのでしようがないんですが、無償の教科書をどういうふうに配るかとか、教科書の採択の問題、教科書法の問題もあったと思うんです。はつきり覚えておりません。これは、私立学校も全部無償にしちゃつ

たんです。これはけしからんじゃないかということで、文部省とだいぶやり合つたことがあります。それから、採択を県単位にするか、市町村単位にするかということで、県単位にしないということもだいたい言つたんですが、それは採択範囲を市町村よりも広げるということとで、いまの採択区域ができていくわけです。そんなことが法規課としては関係してきます。

伊藤 そうすると結構いろいろなものが引つかつてきますね。

小田村 ええ、いろいろなものがかかつてきます。細かい問題ずいぶんこちらでやりました。法規課でやつてくれ、と予算のほうから言ってくるものもずいぶんあるわけです。

佐道 実質的に政策の中味にも踏み込んだ形になりますね。

小田村 中味にもある程度踏み込まなくてはならないですね。それから特別会計の設置があります。これは全部ここにかかつてきます。私がいいたときには、車検の特別会計というのがありました。検査料を特別会計にしてくれというわけです。各省は、そういうものを特別会計に弾き出しますと、一般会計の予算がそれだけ減りますから、ほかのものを増やしやすくなるわけですね。だからなるべく特別会計をつくりたがるわけです。

大蔵省としては、予算の一覧性とか、余計なものが増えるということとで、特別会計はできるだけ抑えるというのが建前ですから、これは予算係と喧嘩するわけです。だけど車検はそういうことで認めることにしましたけれどね。おかげさまで車検場を見せてもらいました（笑い）。

伊藤 さて、四時を過ぎました。主計官の時代の人のことも伺いたいし、今度は文部・科学技術担当になられてからのお話も伺いたいと思います。それは次回にお聞きしたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

（以上）

小田村 四郎

オーラルヒストリー

第 7 回

主計官時代Ⅱ（1962～1966）

【2003年9月12日（金）14:00～16:00】

（於：政策研究プロジェクトセンター）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

記録・編集：丹羽 清隆

第7回質問項目

1. 前回、主計局法規課に移られたことや法規課のお仕事についてはうかがいました。今回はその続きからお願いします。先生が主計局に在籍された時代の主計局長は、最初は石野信一氏、翌63年4月に佐藤一郎氏、65年4月に谷村裕氏、67年1月村上孝太郎氏と、それぞれ後に次官になられた方々ばかりでした。また法規課長も後で次官に就任された相沢英之氏でした。各局長や課長などのご印象をお願いします。
2. 64年7月から、先生は文部・科学技術担当の主計官になられます。主計官は、各省の担当者以上に、担当の問題を勉強し精通するといわれますが、予算査定の実際の過程や状況についてお聞かせください。
3. 先生が主計官になられた時期、「岩戸景気」が終わって景気後退期に入り、財政難が問題にされていたころでした。その中で文教予算の全体での位置づけなどはどのようなものだったのでしょうか。また、当時で文教族といわれる有力議員にはどのような方がおられたのでしょうか。実際、そのような方の「影響力」というのはどの程度で、どのように「影響力」を行使されるのでしょうか。
4. 先生が文部・科学技術担当をされていた当時、大学の学部・学科改編をされたとのことですが、どういう改革だったのか、何に重点を置いていたのかなどをお願いします。
5. 同様に科学・技術関係では高速増殖炉にともなう核燃料再処理施設建設・宇宙ロケット開発・原子力船処理問題など、巨額の経費が必要になるとともに、現在でも注目を集める問題を担当されています。これらの問題についてどのような方針であたられたのかをお願いします。
6. 文部・科学技術担当として、その他で印象に残る問題がありましたらお願いします。

7. 先生が文部・科学技術担当だった当時、文部大臣は灘尾弘吉、愛知揆一、中村梅吉と変わりましたが、それぞれについてどのような印象をお持ちでしょうか。また、先生と予算折衝を行った文部官僚について、とくに印象に残る方がおられましたらお願いします。

8. 64年11月、池田首相が病気で辞任し、佐藤政権が発足します。蔵相は田中角栄氏の留任でした。佐藤内閣成立についてはどのように見ておられたでしょうか。また田中蔵相は山一証券危機問題では評価されていますが、先生はどのように見ておられましたか。

9. 先生は66年8月に法規課長に就任されます。当時主計局総動員で財政硬直化問題に対応され、その結果、総定員法もできたとのことですが、その経緯など詳しくお願いします。

10. 法規課長時代には、在外財産補償問題も担当されたとのことですが、この問題の経緯や内容・結果などについてお願いします。

11. 法規課長時代で、他に何かご印象に残る問題はございましたか。ありましたらお願いします。

※今回は以上のような質問を中心にうかがいます。よろしくお願いします。

■「補」資料紹介

小田村 これは堀田政孝さんの遺稿集なんです。「『激動期に生きる―堀田政孝遺稿集―』」。ちょうど堀田さんは国会会議におりましたから、FX事件について当事者だったので、詳しく書いてございます。私はうっかりしておりましたが、加藤陽三さんのことで、ロッキード、グラマンの話があります。だから加藤さんの本とこれを突き合わせると、だいたいの全貌がおわかりになると思います。

このあいだFXのことで申し落とした中に、それに出てくるんですが、森脇将光の「森脇メモ」というのがあります。これが国会での議論の導火線になっているんですが、それを忘れておりました。そのことが書いてあります。

伊藤 何かというと森脇さんという人が出てくるんですね。先生はご面識はございますか。

小田村 いえ、全然知りません。

伊藤 どういう怪しげな人かよくわかりませんね。

小田村 それから、これは話には直接出ておりませんが、下村治さんの追悼録です。「『下村治（追悼録）』」。ご参考になるかもしれません。

伊藤 先生も何かお書きですか。

小田村 私はこれには書いております。下村さんは大蔵省におるときに、いろいろご指導いただいておりましたから。

伊藤 みなさんこういうものをお出しになっているんですね。いろいろな方から伺わないと、わからないですね。

佐道 そうですね。こういう貴重なものがなかなか知られていないんですね。

小田村 それからもう一つ、私は直接お仕えはしなかったんですが、これは石原周夫さんの追悼録です。「『石原周夫追悼録』」。主計局長、次官「を歴任されました」。これには私は書いておりませんけれど、

この中に写真があります。「『香川鉄蔵三先生を囲んで』という写真のページを示す」。香川先生、石野「信一」さん、石野夫人、原純夫、石原さん、私、海堀洋平さん、亘理彰君が写っています。

それから、吉田茂子さんもいます。吉田松陰の吉田家を継がれた方です。ご主人が吉田庫三さんとおっしゃって、横須賀中学の初代校長です。原さんは横須賀中学の出身ですから、吉田庫三さんに教わったほうなんですね。吉田茂子さんはご主人を亡くされて、未亡人で立川に住んでおられたんです。そして香川先生のお嬢さんに、能のお謡（うたい）を教わりに来ていたんです。

伊藤 これは香川先生のお宅なんですね。どこにあったんですか。

小田村 立川です。

伊藤 何かの記念で写したのですか。

小田村 これは何でしたか、私もそのところははっきり覚えていないんですが。

伊藤 特に記念ということではなくて写したんですかね。

小田村 特に記念ということではなかったと思います。それから、これが杉山「知五郎」さんという方ですね。石原さんと同期の昭和九年の方ですが、アメリカ駐在に、一番初めに行かれた方なんです。たしか、ケインズの『一般理論』が出たときに最初に訳した方です。塩野谷九十九さんの翻訳が出る前に訳したので一番早かったと思うんですが、大変な学者だったんです。これは下村さんも同期ですね。

伊藤 「『石原周夫追悼録』には」すごい人たちが書いていますね。亡くなった方もいます。宮崎勇さんも書いていますね。こういうものがあると、この人たちのオーラルをやるときにずいぶん楽なんです。こういうものにアプローチするチャンスがないんですね。図書館にはありませんね。国会図書館にでも納本してくれればいいんですが、していませんね。すみません、これもお借りします。

小田村 はい、どうぞ。原純夫さんのものもあつたかもしれませんが、ちよつとまた探してみます。西広「整輝」さんと久保卓也さんのものもありますので、この次に持ってきます。

■主計局人物群像 (1) 石野信一、佐藤一郎、村山達雄

伊藤 それでは前回の続きを始めさせていただきます。前回、「主計局」法規課でのお仕事について伺いましたが、今日はその続きです。

この前、お仕事のお話を伺って、そこでの人についてお話を伺おうということでは最後は結んであったと思いますので、ちよつとお願いいたします。法規課でのお仕事をされていますと、上はどのくらいまで接点があるんですか。

小田村 上はだいたい「主計局」次長までが多いですね。局長はときどき局議や個別問題で行くことがあります、だいたい次長を中心にやっています。

伊藤 そうすると局長とお話ししたり、警咳に接するということはありませんか。

小田村 そうですね。しかしときどき懇親会のようなものもありますからね。

伊藤 仲間うちでの人物評価もあるでしょうね。質問要項に、局長の方の名前を挙げたんですが。

小田村 石野「信一」さんは、最初にお話ししましたように、私が入省するときの秘書課長でした。家も麻布の赤十字病院下、堤「康次郎」さんの屋敷の隣なんです。そこに住んでおられたものですから、よくお宅にもおじゃましました。石野さんも、課の人を集めて食事をするのが好きで、よくお宅に呼ばれたことがあります。たしか香川先生も、石野さんのお宅に一緒に呼ばれたということがございました。非常に温厚な方で、全体の調整ということについては非常に優れた方だったと思います。ただ前にも申しましたように、例えば占領中のインフレが収まって、ドッジラインのちよつと前ぐらいのときに「中間安定論」を言われたりした。そういうアイデアもある方です。

それから昭和二十八年に国際収支が悪かったとき、その前に胸「を

病んで」でしばらく休んでおられたんです。一年か二年ぐらい休んでおられたんですが、治ってこれると非常に元気で、その点ではみんなびつくりしていました。財務調査官といって、いまでいう官房の調査部長をやっておられたんですが、そのときに、国際収支の状況はこうだ、今後非常に危険である、という話をしましたら、「それじゃあ来年度の予算を徹底的に締め上げよう」と言われました。それが二十九年、三十年のいわゆる「一兆円予算」なんですね。そういう行動力が非常にあった方です。池田さんとわりあいにかつたと思います。主計局長はこの石野さんで、次長は、あのときは村上「孝太郎」と谷村さんだったと思います。

伊藤 次長というのは二人なんですか。

小田村 その頃は二人だったんです。その後三人になりました。

伊藤 じゃあ、上席があるわけですか。

小田村 そうですね。上席といいますが、谷村さんが十三年「大蔵省入省」で、村上さんが十四年なんです。そういう意味では谷村さんのほうが上席ですね。分担は平等なんです、それぞれ主計官ごとに分担いたします。そのほかのことについてはだいたいその担当に任せるという分業体制なんです。谷村さんは、次長「として来たの」が、主計局「の経歴として」は初めてでしたかね。だいたい官房と金融関係が多かったですからね。「それに対して」村上さんはもっぱら主計局育ちですから、そういう意味では同じ次長でも、横合いから意見を言われるということがあったかもしれません。

伊藤 何かわかるような気がします(笑い)。

小田村 石野さんが主計局長のときに、佐藤一郎さんが官房長をやっております。

伊藤 官房長から主計局長「になったわけ」ですか。

小田村 たしか、そうだったと思います。

伊藤 主計局長は筆頭局長なんですか。

小田村 主計、主税が筆頭局長ですね。

伊藤 官房長よりも――。

小田村 防衛庁では官房長が一番えらいんですが、大蔵省ではどちらかというと官房長は若い方がなるという状況でしたね。

伊藤 本場に官房の長なんですね。

小田村 そうですね。もちろん全体の調整もやりますけれど。このときに臨時行政調査会というのができました。第一次臨時行政調査会ですね「一九六二年」。これは、佐藤「喜一郎」さんという三井銀行の方「が会長」だったかな。そこでいろいろ大蔵省の主計局のあり方についての議論がされて、大蔵省分割論というんですか、主計局の内閣移管という問題が議論されたことがあるんですね。

伊藤 それは昔からよく出る議論ですね。

小田村 昔からよく出ているんですね。そのときに佐藤「一郎」さんが官房長で、いろいろそれに対する対策をやっておられたようです。一回何かのことで、それについてのご意見を伺いに官房長のところに行ったことがあります、そのときに、佐藤さんはこういうことを言われました。「大蔵省というのは、もともと本来の使命は税金なんだ。税制を作って税金を取ることが最大の使命だ。その税金の使い方をどうするかということで、予算という問題が出てくる。どれだけ取るかという問題もある。それが予算との関係になる。それからその金の使い方と関連して、民間にどのように流れていくか、それをどう調整していくかということで金融問題がある。それで理財局とか銀行局ができてくるんだ」という話をされて、大変明快でした。「だから主税と主計を分離するのは絶対によくないんだ」ということの理論構成をしておられたようですね。

伊藤 そういう議論は結構あったものですか。

小田村 内閣移管論はかなり前からあるんです。

伊藤 内閣移管論の場合は、主計ですね。

小田村 主計だけです。主税はほかのところからどうこう、ということはないわけです。ただ税制と賦課徴収の現場とは分離すべきだという議論があつて国税庁ができたわけです。この佐藤さんという方は、あだ名を「えん兵衛」といいました。昔からそう言われていました。

その「えん兵衛」の「えん」というのはどういう字だということになって、あれは「猿」だということですね。ところがご本人は、「いやそうじゃない、あれは『艶』なんだ」と言っていました（笑い）。

伊藤 ずいぶん違いますね（笑い）。

佐道 「猿」と「艶」ですからね（笑い）。

小田村 この方もなかなか豪放な方でした。「第三次」佐藤内閣でしたか、企画庁長官にられましたね。この方も次官を辞めてから選挙に出られました。しかし、相沢「英之」さんに言わせると、「豪放に見えるけれども、けっこう細かい人なんだ」ということでしたけれどね。こういう方は昔の官僚気質というのがあつて、役所に出たり出なかったり、どこにいるかわからない、所在不明ということもよくあるんですね。あちこちに発展されるものですから、そういうことがありました。

佐藤さんと同期生で、村山達雄さんという方がいますが、村山さんのほうがもっとひどいんです。佐藤さんはどちらかというと「神出鬼没」というんですか、村山達雄さんになると「神没鬼没」だった（笑い）。

佐道 それじゃあ全然出て来ないんですね（笑い）。

小田村 問題があるとすぐ出てくるんですね。よくわからないんです（笑い）。村山さんはそういうことだったんですが、政治家になったらすっかり真面目になっちゃって、逆なんです。役人のあいだは真面目で、政治家になるといろいろする人が多いんですが、村山さんというのはまったく逆だったんです。だから役人には村山さんは非常に信望があつたんですね（笑い）。

佐道 村山達雄さんという方に対する見方が変わりますね（笑い）。

■主計局人物群像 (2) 谷村裕、村上孝太郎、相沢英之

小田村 それから谷村さんは本当の秀才で、包容力のある方ですね

(伊藤 そうですね)。石野さんともたいへん近い方です。私の高等学校の友人で、戦後の物価庁にいた男がおりまして、谷村さんが物価庁で上にいたんだそうですが、「あんな立派な人がいるというのは本当にびっくりした」と言っていました。ただ谷村さんも石野さんと同じように胸を傷めまして、二、三年療養しておられましたね。しかし谷村さんは非常に人当たりもいい方ですし、悪く言う方はほとんどおりません。非常に人望があつた方ですね。

伊藤 私も数年間おつき合ひさせていただいたんですが、本当に素晴らしい方ですね。

小田村 そうですね。それから、海軍史を――。

伊藤 そうです、そのときなんです。

小田村 海軍史をつくられたのは谷村さんが中心になってやられたんですね。

伊藤 そうです。あの方が委員長で、私も委員でしたので。

小田村 そうですか。そういう意味でも非常に幅の広い方でした。

伊藤 あの方だからまとまった、という感じがありますね。

小田村 そうでしょうね。

伊藤 局長にしてもそうですが、だいたい二年、二年、二年ですね。

小田村 そうですね。だいたい二年です。だから私が法規課の主計官のとき「一九六二・六―一九六四・七」、最初の一年間は「主計局長が」石野さんで、二年目のときには佐藤さん。文部の主計官になってからは、一年目が佐藤さんで、二年目が谷村さんということになります。

村上孝太郎さんは、最初の一年間は法規課担当の次長だったものから、法規課の関係で、村上さんのところへときどき行ったことがございます。この人は法律も経済も非常によくできた方ですが、有名なことは非常に豪腕というんですか。ですから政界の人たちも一目置いていたと思いますね。例の財政硬直化問題が出てまいります、これを取り上げたのが村上さんですね。村上さんの遺稿集がございますので、今度持ってきて来ましょうか。当時の財政硬直化について、い

ろいろ出ております。外で話した役人の話ですから、どうしても堅苦しい話にはなっておりますが、なかなか勉強された方ですね。

それから、ほかの省に対しては非常にきつい方でした。局長になったときですかね、各省の会計担当者に集まってもらつて、概算要求から予算折衝についての事前の話をするわけですが、そのときに村上局長だつたと思いますが、「要するに一言だけだ。それは役人として考えろ、ほかの外野席のことは無視しろ」と一言だけ言つたという話を聞いたことがあります。ですからこの方が局長のときに財政硬直化問題を全面的にやられたわけですが、そのときによその省の連中は、「あれは財政硬直化じゃなくて、主計官硬直化じゃないか」と言っていました。主計官が局長室に行くのに、硬直しているというんです(笑い)。そんなことを言つていたことがありますね。

伊藤 課長はずつと相沢さんだつたわけではないですね。

小田村 初めは上林英男さんという方で、私が前に為替局におりましたときに、総務課の筆頭補佐をしていた方です。IMF関係とか、全体の統括等をやつておられて、それから主計官になられたんでしょうか。主計官をどこかやられて、それから法規課長になられた。非常に性格の明るい方で、法規課の中でも評判がよかつたと思います。法規課長が終わつてから関税局の総務課長になられ、最後は関税局長だつたと思います。

それから相沢さんも上林さんと同期生で、十七年「大蔵省入省です」。二人とも一高ですね。そうそう、石野さんは大阪高校です。それから佐藤、谷村、村上、これは三人とも一高ですね。村上さんは私の兄の寅二郎とたしか一高で同期です。同学年だつたと思います。谷村さんは一年以上ですね。兄も谷村さんのことは非常にほめていました。相沢さんはスポーツマンで、野球のピッチャーをやるんじゃないかな。ゴルフもお上手でした。相沢さんはシベリア帰りですから、いまでもシベリア抑留問題をやつておられますが、帰つた早々の話をよくされていました。「やつとシベリアから帰つてきたと思つて、役所に出たらそのまま徹夜させられて」というようなことです。まだ奥さん

とやと一緒にになった頃で、奥さんが着替えをわざわざ届けに来たとか、そういう話をよくしておられましたね。とにかくその頃は人使いが荒かったですね。

それで、法規課長になる前は農林担当をやっておられたものですが、農林関係は非常に詳しくあったですね。それから文部については、文部省の予算の主査をやっていたことがありまして、文部関係も非常に詳しい方ですね。私が文部の予算担当になるときに「国立大学は応援団がないからよく面倒を見てやってくれ」と言われました。国立学校特別会計も相沢法規課長の時に作りました。運輸省とか文部省とか、そういうところからは非常に評判のいい方です。よく相手の役所の面倒を見る方でしたね。

法規課長のときに奥様を亡くされたんですね。ですからお葬式は、奥さんがクリスチャンだったんですね、教会でやったことを覚えております。前からお体が悪かったんですね。結局、息子さんが遺されて、だいぶ苦労されたと思いますね。宝塚の方と結婚するのはもうちょっと後になります。再婚されたのは、昭和四十二、三年頃ですかね
〔注・四十四年〕。

武田 司葉子さんですね。

小田村 司葉子さんです。

伊藤 だいぶ大きな話題になりましたね。

小田村 そうですね。あれは電電公社の武田さんという方が相沢さんの学校時代からの友人で、司さんの親戚だったんですね。それでお世話をされて、たいへん気に入って――。

伊藤 どっちが気に入ったんですか（笑い）。

小田村 いや、どうも両方らしいですよ。

伊藤 大蔵でそういう艶っぽい話は、そうたくさんはないという気がします。どうでしょうか（笑い）。

■予算決定の仕組み (1) 査定

伊藤 さて話を次に進めさせていただきます。昭和三十九年七月に文部科学技術担当の主計官になられます。いままで文部、科学技術には全然ご関係がなかったもので、だいぶ勉強なさったのではないかと思います。

小田村 法規課にいたときに、例えば教科書無償措置法や国立学校特別会計法などをやらされました。そういうところで、法律関係は横から多少見せてもらいました。

伊藤 文部の特色というのがありますね。国立大学をたくさんもっていますからね。

小田村 国立大学がたくさんありますね。予算折衝でも国立大学が非常に多いですね。

伊藤 この主計官の下に――。

小田村 主査がいるんです。私のときの主査は、文部関係が宮下創平君ですね。「小淵内閣で」厚生大臣をやつて、今度引退するようです。宮下君はたしか前に、国防会議ができたときに、国防会議の事務局に見習で行っていたことがあるんです。そんなことで、前から知ってはおりました。それから香川先生のお宅にも一緒に伺ったことがありますので、たいへんやりやすかったんです。

伊藤 お話を伺っていますと、香川先生人脈というのは非常に大きいんですね。ちよつと驚きました。

小田村 ですから、先生なんでしょう。石野さんが「大蔵省の先生」と言っていましたから。それから科学技術担当の主査がいます。

伊藤 別々なんですか。

小田村 別です。文部省と科学技術庁の二つを担当しておりましたから。科学技術庁のほうは、通産省から児玉「勝臣」君というのが来てくれていました。この方は華族でしたかね。源太郎さんじゃないと思うんですが。この人が主査として科学技術を担当しました。二年目は中村「守孝」君になりました。この人は一度、通産省に帰ってから後に科技庁の次官になりました。

伊藤 そういふ人事交流はあったわけですか。

小田村 人事交流があったわけです。例えば外務省からも誰か来ていたことがあります。

伊藤 でもその人が外務を担当することはないんでしょう。

小田村 それはありません。それはまた別のことをやるわけですね。

伊藤 そういう主査の人たちが、実際には文部省なり科学技術庁から上がってきた概算要求をこなすわけですね。

小田村 そこで査定するわけですね。そして、査定の内容を主計官に説明してくれるわけです。それで主計官段階の査定案をつくりまして、次長のところで局議をやるわけです。次長のところに持っていくまして、そこに総務課から総括の補佐が立ち会って審議をするわけです。これが一番大変なんですね。次長のところでの審査で、だいたい認めるものとアウトにするもの、金額を査定するもの、そういうものを固めていくわけです。

伊藤 それは個別にやるわけではないんですか。

小田村 三段表というのがありまして、忘れてしまいましたが、要求額と前年度の予算額と査定額とを書き入れていくわけです。

伊藤 それはどれぐらいのレベルまでなんですか。

小田村 かなり細かくやります。積算基礎までやります。

伊藤 それは大変だ。新規の場合とか――。

小田村 新規のものとか、前年度と同額とか、増額されるもの、それから当年限りで落ちるもの、とかですね。ずいぶん昔のことなので忘れましたが、その三段表を印刷しまして、次長のところに出して、そこでまた再査定をしていくわけですね。

伊藤 次長のところには、それを補佐する人がいるわけですか。

小田村 補佐するのが総務課から補佐を一人持ってくるわけです。これはベテランの人が担当します。そこで再査定をするわけですが、それが一番大きな会議です。

伊藤 それはもう「会議」になるわけですか。

小田村 次長と主計官と主査と係員、それから次長の補佐として総務

課の補佐、それだけで一つ一つ見ていくわけです。

伊藤 それは各省別に、ですか。

小田村 省別です。

伊藤 では会議といっても全体ではないんですね。

小田村 全体ではないんです。

伊藤 そうすると、それまで文部省なら文部省といろいろなやり取りをやって、このへんで行こうということの上であげて――。

小田村 いや、文部省からは説明を聞くだけです。

伊藤 そうですか。それで一応の査定案をつくるということですね。

小田村 そうです。

伊藤 そうすると、ある意味では説明を聞いていますから、自分が文部なら文部の側につくような感じになるんじゃないですか。

小田村 そうなんです。だから次長のところで議論をするときには、完全に要求官庁の姿勢になるわけです。

伊藤 あつち「文部省」を向いているときと、こつち「主計局次長」を向いているときと、人格が別になりますね。

小田村 そうなんです。私の文部のときは、次長が一年目が中尾博之さんという人で、翌年は防衛庁で仕えた岩尾一さんでした。中尾さんは十五年「入省」で、主計局生粋の人でした。昔、行政管理庁にいたこともあり、法規課長もしていましたから、行政組織や法律には精通していました。佐藤さんが局長で、次長がこの年から三人体制になって、澄田「智」、中尾、鳩山「威一郎」の方々でした。中尾さんは、「給料が変わらずに仕事が楽になる、こんな有難いことはない」と言っておられました。二年目は佐藤さんは次官になり、谷村主計局長、次長は鳩山、岩尾、武藤「謙二郎」さんになります。

一年目は文部・科学技術関係は中尾さんの担当でしたので、中尾さんのところで査定会議をやるわけですね。そこでだいたい固まりますと、総務課の補佐がいますから、金額を計算しながらだいたいの枠を固めていくわけですね。そして、それがまとまりますと、各省の査定額を集計して大蔵原案を作るといふことになります。

局長のところでは重要な事項は局長に説明して了承を頂きますが、あまり細かいことは局長には説明しなかったと思いますね。次長のところで固めたということだったと思います。

■予算決定の仕組み (2) 内示から概算決定まで

小田村 いまはちよつと違っておりますが、私の頃は予算折衝が始まる前に、概算要求に対する大蔵省の査定原案をつくりました。大蔵省原案枠の中で、最初の内示案というのをつくるわけです。内示案をつくりまして、概算閣議が終わりますと、それを各省に示す。

伊藤 閣議ですか。

小田村 大蔵原案を閣議に報告するんですね。大蔵原案を報告して、閣議が終わると各省に内示していくわけです。各省が内示を受けると、今度は復活要求が出て来ますから、そこでずっとやり合って、だんだん固めていくわけです。

伊藤 今度は違う顔になるわけですね。

小田村 そうです。主査が細かい内容を聞きます。初めは主査のところで第一次内示をやります。復活要求が各原局から来て、主計官は重要事項を局長、会計課長から聞き、また外部の陳情に応対します。そして主査が主計官と相談して、第二次内示案を作り相手省に示します。これに対し相手省は会計課長が問題を絞ってまとめていくわけです。最後に問題が残りますから、その残ったものは局長折衝で、主計官のところでもやります。次官折衝になりますと、今度は次長のところに行きます。主計局長は直接には折衝に出てきません。次官折衝が終わりますと、最後に残った問題は大臣折衝になります。

伊藤 政府が予算原案を最終的に固めるのは、その後になるわけですね。

小田村 そうです。大臣折衝が終わったところで最終的に決まるわけですね。そこで概算決定ということになりまして、皇室費から始まる

んでしたか、社会保障費とか、文教及び科学技術振興費とか、主要項目別に計数を整理して、閣議に持っていくって、そこで最終的に決まります。

伊藤 閣議に上がった段階では、そこで揉めて、ということはありませんね。

小田村 閣議では揉めません。

伊藤 何か、予算閣議というのは大変だといいますが。

小田村 もう一つありました。大臣折衝が終わってから、大臣折衝での積み残りが出るわけです。その積み残りは三役折衝になるわけです。伊藤 今度は党のほうになるんですか。

小田村 党になるんです。例えば公共事業の配分というのはだいたい三役折衝になっていましたね。慣例ですかね。公共事業の枠は決まるんですが、枠の中で、道路がいくらか河川がいくらか農業基盤がいくらか、そういうことはいつも三役折衝になっていましたね。

伊藤 文部ではそういうことはあまりないわけですか。

小田村 文部はほとんどありませんでした。これはあとで行政管理庁で出てくるんですが、部局の新設とか特殊法人の新設はだいたい三役折衝にかかるんです。

伊藤 そうですか。政治決着ということになりますね。

小田村 それが終わって、閣議が終わって、政府原案決定ということになりますね。それで概算決定をして、それが終わってからもうひとつ、計数整理というのがあるわけです。これは「落穂拾い」と言っています、計数整理をしていると端数が出てくるんですね。それを細かいものに積んでいくんです。概算決定は主要項目別ですから、主要項目に入らない雑件というのがあるんです。枠だけ決まっています中味が決まっていらないようなものがあるので、それを詰めていくんです。

「計数整理」と言っております。それは年末までにだいたい片付ける。それからあとは、予算書に組合わせる作業になりまして、これは総務課でやるわけです。各予算係はもちろんそれを手伝います。これは一月になってからです。その計算がいろいろあり、印刷などもあるも

のですから、予算書の国会提出はいつもだいたい一月二十日過ぎになる。最近は電算化されていますから、ずいぶんやりやすくなったと思うんですが、昔はみんな算盤でやっていましたからね。

■予算決定の仕組み (3) 歳入・歳出のやりくり

伊藤 計算間違いなんていうこともあるわけですか。

小田村 いや、それで有名な話なんです。むかし植木庚子郎さんという局長がいて、石原さんがよく言っておられたんですが、「植木さんが主計局長のときに、とにかく一銭どうしても違うというのできりきり舞いしたことがあるんだ」という話でした。植木さんというのは大変厳しかったらしいです。

伊藤 先生がご自身で関わっておられたときに、計算間違いということで揉めたことはなかったんですか。

小田村 揉めたことはなかったんですが、折衝しているときに、宮下君が「主計官がいいと思うものはどんなふうにやって結構です」と言うんです。ある程度見て、適当だと思われるものは、文部省との折衝で決めていきますね。そうしたら宮下君があとで「いや、大変だ」と言うんですね。「計算をちょっと間違えた。枠が足りなくなっちゃった」と言うんです。次長のところからもらっていた枠の中で収めていくわけなんです。それで、「主計官、申し訳ないけれど、局長のところに行つて、枠をもらつてきてくれ」と言う。しかし、いまごろいつてもしょうがない。佐藤艶(猿)兵衛さんが局長だったので、佐藤さんのところにおそろおそろ行きましたら、「いまごろそんなこと言つてきたつて困る」と言われて、すぐご戻つてきました。しかしあのときは相沢さんが総務課長だったんですね、総務課のほうで適当にうまくごまかしてくれました(笑)。目分量でやっているものからね。

伊藤 一番最初に、文部の枠はこれぐらいとか、そういう数字が上か

ら来るわけですね。

小田村 そうだろうと思えますね。だいたいの見当ですね。

伊藤 そうすると次長のところである程度の袋を持つていて、復活のときにそれをうまく配分するということですね。

小田村 そうです。これは文部の場合悪い癖なんですけれど、義務教育費国庫負担金というのがあるんですね。これは義務費なんです。要するに給与が決まつて、教員定数が決まりますから、当然出さなくては行けない。あの頃は、毎年毎年ベースアップがございましたので、必ず足りなくなるわけです。そうすると、足りなくなった分は補正予算を組むわけです。その補正のときに辻褄を合わせてしまう。つまり初め多少少なく組んでおいても、補正がありますから、補正で埋め合わせをしてもらえばいい。自然増収がどんどん出ていましたから、やりやすかつたんですね。

歴代の主計官は、相沢さんもむかし主査でやっていたそうですが、僕の時にも義務教育の国庫負担金を財源にしていたんですね。だからいろいろな細かい要求が出て来ますね。そういうものはなかなか局議で認めてもらえないわけです。次長のところでは、ですね。しかしどうしても必要なものが折衝段階で出てきますので、義務教育の国庫負担金で正確な計算をして、ちゃんともらつておくわけですね。もらつておいたものを、こつちへ回していたわけです(笑)。そうすると、向こうも喜びますし、その枠の中に収まる。足りない分は、どうせベースアップがありますから、補正で穴埋めする。

伊藤 決算では大丈夫なんですか。

小田村 大丈夫です。ちゃんと穴埋めしてありますからね。これは文部ですが、どうもそういうようなことは、ほかでもあったんじゃないでしょうか。そういう義務的な経費がありますからね。

伊藤 義務的な経費はこの時点だと、子供の数も増える、学校も増える、先生も増える、という時期ですね。国庫として義務的なものが増えていくわけですね。しかし、ちょうどこのころ、景気が悪い状況ではなかったでしょうか。

小田村 景気は、三十九年から四十年にかけて悪くなりました。四十一年に福田さんが大蔵大臣になりました。たしか四十年か四十一年です。それで福田さんのときに初めて国債を発行するんです。

武田 四十一年ですね。

小田村 それまでは国債を発行しなかったんです。福田さんが決断されて国債を発行して、それで景気はよくなったんです。それまで災害もあつたんですが、景気が悪くなりまして、三十九年頃に税収が足りなくなりました。そのときは赤字決算を処理する法律がなかったものですから、税収を操作したんですね。たしか、その年度の歳入に計上するのは、酒税など一月に庫出しして三月に納税する納期が三月までの収入だったと思いますが、それを四月まで収入を伸ばす。つまり翌年度の四月収入の分まで、その年度に入れてしまうという操作をやりました。四月は出納整理期間といつて、前年度の分の収入がある関係でこれは政令でできたものですから、そういう操作をやつて、赤字を防いだということがあります。

伊藤 要するに国債を発行したくないということからですか。

小田村 そうですね、赤字決算になつてしまうわけですから。それがもつとひどくなりますと、あとで、昭和五十年代に入つてからだったと思うんですが、こういうことをやりました。法人税の三月決算がありますね。前年度の三月決算は、納期が五月か六月になるわけです。それから九月決算の場合は、納期が十一月になるんですね。年度分はそこまでだったんです。ところが足りないものですか、三月決算でその翌年度の五月に入ってくる税金を前の年の歳入にしてしまう。これはいまでも続いているんです。一回それをやつてしまうと、戻すわけにはいきませんからね。

あれはいつでしたか、私はタッチしていなかったときですから、五十年代に入つてからです。その結果、税収見積もりが非常に難しくなつてしまった。あんな無茶なことをどうしてしたのかな、と思いますけれどね。公債を出せばよかったのに、そういうことでごまかしをやつたことが後々まで「響く」。つまりその年は、法人税が三期分入つ

ているわけですね。前の年の三月決算と九月決算とその年の三月決算ですね。

伊藤 それは次年度繰越をつくつておかないと、その翌年も大変ですね。

小田村 だから翌年は税収が激減するわけですからね。

伊藤 そういふときは予算が締められる、ということになりますね。

小田村 そうですね。

伊藤 概算要求できたものに対して、かなり厳しく査定するということですね。

小田村 かなり厳しくなりますね。ただ、四十一年はそういうことで、かなり景気がよくなりましたものだから。

■ 予算決定の仕組み (4) 族議員、応援団、陳情

伊藤 さつきおつしやいました公共事業というのは、建設省とか農林省だと思ひますが、そういうところは三役折衝まで行くといふことですね。そうするとやっぱり族議員がかなり活躍することになりますね。小田村 割り振りの問題があるんですが、だいたい公共政策事業枠の按分で、道路とか河川はなかなか動かせないんですね。

伊藤 動かせないといふのは、どういうことですか。

小田村 やっぱりそういう既得権になつてしまつていふんです。

伊藤 それはお役所も族議員も絡んでいるわけですね。

小田村 そうなんです、絡んでいるんです。

伊藤 文部の場合は、文教族といわれる人たちがついていますが、これはどなたが有力な議員だったんでしょうか。

小田村 文部関係では、稲葉修さん、坂田道太さん、原田憲さん、それから長谷川峻さんも文教族ですね。長谷川さんなんかは、教科書無償を推進した方ですね。そのほかにも、山中「貞則」さんもそうですね。山中さんは農林族なんです、文部関係でもかなり力がありま

した。族議員といいますが、わりあいみなさん良識的な方でしたから、無茶な要求はあまりなかったと思います。長老格では松田竹千代さんもおられました。

伊藤 文部の予算の中で一番大きいのは国立大学ですか。

小田村 金額として大きいのは義務教育費国庫負担金ですね。

伊藤 それはちよつと動かしようがないものですね。

小田村 動かしようがないです。ただその中で、旅費をどの程度見るかとか、そういうものは査定がありますけれど、給与それ自体はだいたい決まっておりますから。

伊藤 あとはベースアップですね。

小田村 ええ、それは年度途中になってしまいますから。それから標準定数を――。

伊藤 一学級何人というのですか。

小田村 ええ、一学級「の定員」が四十五人だったものを四十人学級にしたように思いますね。それは四十人が限度ということですよ。五十人を四十五人にして、私のときに四十人にしたんじゃないかかと思えます。そのときの理屈付けは、四十五人は多過ぎるというものでした。四十人というのが限度ですから、四十人を超えると次の学級ができるということになります。ですから、四十一人だと二学級で、「一学級あたり」二十人ぐらいになるわけですね。

そのときに日教組などはもつと減らせ、と言っていたわけですが、文部省の立論は、どんどんクラスの規模が小さくなると団体訓練ができなくなるということで、それはもう限度がある、四十人が一番適当なんだ、ということとその当時は言っていましたね。

伊藤 そのあとまた減らしていくんだから、いろいろ理屈はつくんですね。三十人学級とか言っていますからね。

小田村 いろいろ言っていますね、あまり減らすのはどうかと思えますね。しかし私なんかは昔の小学校で六十人ぐらいのクラスでしたからね。

伊藤 本当ですね。ところで、文教族の人たちが、主計官と接触する

ということはあるんですか。

小田村 私のときは坂田さんと原田さんが両方に顔が利いていたんですね。坂田さんは熊本での選挙のときに、私の兄の寅二郎が応援に行っていたことがあるんです。日教組とずいぶん戦ってくださったからね。そんなことで前から親しかったわけです。「私の主計官としての担当が」文部になったときも一回呼んでいただきました。坂田さんの秘書に渡瀬「憲明」さんという方がいましたが、亡くなっていました。

それから原田さんは前に大蔵政務次官もしたこともありまして、そういうことで親しかったんです。大阪の選挙区なんです、私の家内の父が大阪だったものだから、原田さんと前から親しくしていました。そんなことで関係があつたんですが、向こうも大変親しくしてくれました。

それで渡瀬さんと、原田さんの秘書の大桑さん（これも亡くなりましたが）が、文部省の若手のほうと仲が良かったんですね。それで私を呼んでくれたんです。私のときは、会計課長が岩間英太郎、大学課長が井内慶次郎ですね。それから、木田宏さんもいたな。それから、当時施設部長で後に小山高専の校長になられた菅野誠さんという方も一緒に、この方は大変面白い写真をお持ちで楽しませてくれました。やつておられた方で、工業高専の校長先生になった方がいました。渡瀬さんと大桑さんがときどき呼んでくれています、そういう方と一緒に飲んだりしたんです。そういう方とは、ツーツーでした。

伊藤 そういう政治家の方、文部省の幹部の方と、いろいろな形でおつき合いがあるということですね。

小田村 そうですね。

伊藤 それ以外に、例えば大学の関係者がいろいろな縁故を伝って、直接に会いに来るということはあるんですか。

小田村 それはもう、予算が始まりますと年がら年中です。大学の講座の増設は、文部省の会計課の審査をパスしなければいけないわけですね。概算要求に乗りますと、今度は大蔵省ですから、みなさんおい

でになるわけです。これが非常に多かったですね。

伊藤 それは主査が聞くんですか、それとも――。

小田村 主査と主計官の両方に来られます。

伊藤 そうですか。その説明を聞くのは大変じゃないですか。

小田村 いや、そうでもないです（笑い）。勉強になりますからね。

伊藤 こういう新しい分野があるか、というようなことですか。

小田村 そうですね。それから大学も、出張して見させていただきますし。講座の新設については、だいたいどの先生も地元の政治家の方に全部連絡をとられるわけです。そうすると、そういうところからいっぱい電話がかかってくるわけです。ですから主計官の予算折衝というのは、だいたい電話で陳情をお伺いすることで相当時間をとられます。非常に多いですね。大学の先生は電話をしてこられることはないですが、政治家の方はみんなかけてきますね。

伊藤 それは「頼むよ」というのか、「会ってやってくれ」というのか、どちらですか。

小田村 それは両方ございます。こんなに「電話がかかってくるのか」と、私もびっくりしましたね。

伊藤 陳情というのはいろいろな場所であるでしょう。例えば税務署長をおやりのときもいろいろ陳情もあったと思うんですが、主計官のときはまた独特に、いろいろあったんでしょうね。

小田村 そうですね。

伊藤 いろいろな縁故を探すと、あるものだろうと思いますね（笑い）。それで科学技術庁は、応援団が議員さんにいるんですか。

小田村 科学技術関係の応援団もいます。

伊藤 中曽根さんなんか、そうかな。

小田村 中曽根さんはあまり顔を出されません。科学技術庁ではないんですが、糸川「英夫」さんのロケット。これは角さんだったかな、二階堂「進」さんがよく来られたことがあります。

伊藤 あれは鹿児島か。

小田村 鹿児島ですね。二階堂さんは内之浦ですね。種子島はまだで

きていなかったんです。

佐道 そういう関係ですか。いま二階堂さんとロケットが全然結びつかなかったんですが、そういうことですか。

伊藤 やっぱり科学技術庁の応援団もいたんでしょうね。

小田村 科学技術庁は特定の項目の応援団というよりは、科学技術全体についての応援団ですね。あれはどなただったか。はっきり覚えておりませんが、要するに科学技術予算を増やせ、ということですね。

伊藤 社会党の松前「重義」さんなんか当然応援団になるような気がしますね。

小田村 松前さんには言われたことはないですね。

■主計官時代の仕事 (1) 国立大学

伊藤 このころは、大学の学部学科改編というようなことが、ちょうど進んだ頃だと思えますが。

小田村 私のときに一番問題だったのは、いわゆる戦後の文理学部の改編です。

伊藤 だいたい旧制高等学校のあったところですね。

小田村 そうですね。旧制高等学校の文理学部、学芸学部、それをどうするかということが一番の問題で、各大学で案をつくられていた。そうすると、みんな学部が増えるわけです。経済学部をつくったり、工学部をつくったり、理学部に分けるとか、そういう案をそれぞれつくられる。それが一つです。もう一つは「タコ足大学」ですね。例えば信州大学とか福岡教育大学、広島大学もそうでしたか、あちこちタコ足になっていましたね。これを統合するという問題がありました。

伊藤 統合するということは、敷地の問題、建物の問題ですね。

小田村 そうです。施設の問題が全部絡んでくるわけですね。埼玉大学も一回あったかな。あれは新しく工学部をつくったのかな。文理学部、学芸学部、それからもう一つ大きいのは教育学部です。それまで

は学芸学部でしたか、それを全部教育学部に名称変更する。そして、教育大学を一つつくるという話で、宮城教育大学をつくることにしたんですね。これは教員養成学部の改編の問題で、教員養成課程審議会が何かから答申があつて、いままでの学芸学部とかのわからない名前を、はつきりと教員養成に名称変更しようということでした。これはだいぶ反対が多くて、文部省は相当の覚悟でやっただけです。そういうことで仙台に、東北大学から分離して（伊藤 東北大学の教育学部をつくるのではなくて）、宮城教育大学を別につくったんですね。福岡も教育大学を統合しましたね。札幌もそうかな。北海道教育大学もタコ足だったのを統合したんじゃないでしょうか。そういう問題がありました。

伊藤 学部学科を再編しますと、結局予算がふくらみますね。

小田村 ふくらみますね。それはまあしょうがないですね。当時、私がやったときは、高校急増問題が一段落して、今度は大学急増になってきたんです。文部省は「一万人増員」ということを言いました。一万人なんてとんでもないということだったんですが、いずれにしても大学の窓口を広げなくてはいけないということから、ある程度、学部学科が増えてもやむを得ないということでした。

伊藤 国立大学を新たに作るということではなくて――。

小田村 既存の大学の再編ですね。医科大学はもつとあとですね。

伊藤 あれは田中内閣のときでしたか、一県一医科大学というのは。

小田村 はい。それから、もうひとつ東大の法学部がだいぶ改編を要求してまいりました。

伊藤 それは講座増ですか。

小田村 講座増と、なんだったかな。団藤「重光」さんが法学部長だったんですか。加藤一郎さんが中心になってやっておられたと思います。加藤さんはまだ法学部長になっていないですね。加藤さんがよく来られました。

伊藤 東大で学部学科の改編があつたかな。

小田村 私もよく覚えておりません。これは中尾次長のところに行つ

て、中尾さんは「それならそれはいい。けれども学生定員を増やせ」ということで、学生定員を増やして、その代わりそれを認めるという形にしたいですね。

伊藤 今度は学生定員を減らすとかいっていますね。

小田村 宮城教育大学はせっつかくつくったんですが、あれは校長さんの人選が間違っただけじゃないでしょうか。ちよつと、あとあまりパツとしません。

それからもう一つ、二年目だったかな、新潟大学の移転で土地を購入するという問題がありました。しかし金額も未確定だし、全体構想がまだできていなかったんです。ちよつと忘れましたが、予算折衝の一番忙しい最中に、佐藤内閣の幹事長だった角さんに呼び出されました。私と「文部省の」会計課長の岩間さんで行って、三十分ぐらい――。よくわからないんですが、いずれにしても呼び出されて時間をつぶされたんですが。結局、しょうがないから、用地取得費を一億円でしたか、つけておいて、細かい話は実行段階で、ということにして、角さんに了承してもらったことがあるんです（笑い）。

伊藤 大学の敷地取得、校舎新築とか移転、また大学だけではなくて小学校、中学校等、こういうものは公共事業ではないんですか。

小田村 公共事業ではないんです。

伊藤 公共事業であるのとならないのでは、どういうふうに違うんでしょうか。

小田村 それは特に関係ないです。文部省は自分で施設関係の技術者を持っていますから、自分で設計するわけですね。一般の官庁営繕も公共事業ではないんです。あれは各省の予算につくんです。ただ各省の官庁営繕は、全部建設省で設計をするわけです。昔は官庁営繕は大蔵省が持っていたんです。だから例えば、いまの国会議事堂は、大蔵省の営繕部で設計してつくったものです。その設計者が誰になるかというのが大変なことで、いろいろあつたようですが。

伊藤 それが建設「省」に移ったわけですか。

小田村 はい。

伊藤 文部省の建物は？

小田村 学校の建物は、文部省に施設部がありますから、そこで全部見ているわけです。

伊藤 文部省自体はどうなんですか。今度建て替えるようですね。

小田村 今度建て替えるようですね。あるいは建設省かもしれませんが。学校の建物は各県あるいは市町村ですね。これは公立文教施設といっています。

伊藤 国立大学の建設や修繕等を含んだ金額はかなりの額になるのではないでしょうか。

小田村 ええ、相当な額ですね。ただ、これはだいたい前年度の予算がありますから、それを枠として増額してやってくれということで、実行段階では、それぞれです。だいたいのことは決めてありますが、最終的には実行段階で決めていきます。

伊藤 この大学の何をやるかというのは、予算が決まってからですか。

小田村 だいたいの内訳はメドをつけてあるんです。

伊藤 予算書の中に出てくるんですか。

小田村 予算書の中には出ていなかったと思います。積算基礎の中に入っているんですね。

伊藤 積算基礎と実行段階では、違っても構わないわけですか。

小田村 構わないわけです。予算の実施計画を各省が大蔵省に提出してきました。そこで審査をして最終的に決めるということです。予算の中には、そういう枠で決まっているものがあるわけです。公共事業はだいたいそうで、道路をどこどこということは決まっていますが、最後の金額は実行段階で、ということになります。

■主計官時代の仕事 (2) 核燃料再処理施設

伊藤 大学の予算はそういうことなのでしょうが、科技厅のほうは大

学とも関係があるんでしょうね。ただ、科学技術関係の大型の施設をつくる、新しいプロジェクトを行なうという場合、一件あたりの単価がものすごく大きくなると思います。ちょうどこのころ、科学技術振興ということで大型のものがあつたと思いますが、そういうものの審査はなかなか大変だったんじゃないですか。

小田村 そうですね。科学技術庁の中に調整局とかいくつかの局があつたんですね。原子力が一番大変でしたね。質問項目に書いてある高速増殖炉はまだですが、再処理問題をどうするかというのが最大の問題でした。これは科学技術庁の原子力局から予算要求が出ておりました。当時は東海村で実験的な原子炉ができて、実用炉が電力会社で少しずつ増えてきていたと思うんですね。そうしますと、そこから出てくる核燃料の廃棄物を再処理して、プルトニウムを抽出することが必要だというわけです。いままではこれを全部イギリスに送りまして、再処理してもらっていました。そして再処理されたプルトニウムがまた戻ってくるわけです。それをどうするかということで、核燃料サイクルをやりたいというのが原子力委員会の意向だったわけです。それで再処理施設を東海村につくる。それは原子力研究所ではなくて、当時原子燃料公社（後の動力炉核燃料事業団）という特殊法人がありました。そこでやるという話でした。その予算要求が出て来ていました。これについては中尾次長が大変熱心で、興味を持ちまして「これは国費でやるのはおかしいじゃないか」というわけです。つまり民間の電力会社が原子炉をつくって、原子力発電をやっている。その残り滓です。それから「それは当然電力会社でやるべき問題ではないか、なんで国がやらなければいけんのか」ということを自分で口述筆記させまして、向こうに突き付けたわけです。そうはいっても、科学技術庁にすれば、プルトニウムを取り出して、高速増殖炉というウランを節約できるものをつくるんだから、それは国策としてやるべきであるということ、で、ずいぶんすったもんだいたしました。

結局、最終的には東海村の原燃公社でつくることにしたんですが、フランスの会社の技術を導入してつくることにいたしました。

これは当初の計画で、その後出てくるものは民間でやるというような形にされたのではないかと思います。これは東海村につくって、いま下北の六ヶ所村のほうでやっていますね。あれはたしか国ではなくて民間でやっているはずですよ。東海村の方は年産〇・七トンつくる、ただし必要があれば一トンまで増やせるような施設にしましょうということ、これは片付けました。

これを原子力委員会で考えた頃は、ウランが将来枯渇するという話だったんですね。ところがその後ウランは余ってきたわけです。だから、核燃料サイクルというのはおかしいじゃないかという議論のほうで最近では強くなってきました。したがって高速増殖炉は非常に影が薄くなってきましたね。むしろプルトニウムを一般のウラン燃料に混入して使うというほうが正道になってきたということだろうと思います。いずれにしても再処理しなければいけないんですね。

ただこのとき、プルトニウムなり核燃料の廃棄物が非常に危険だということを科学技術庁はもう少しPRすべきだったと思うんです。村田「浩」さんというのが原子力局長だったんですが、そのことをあまり言わなかったんですね。キャスクという容器物に入っていて、非常にこれは大変なんだ、怖い物なんだ、ということとはちよつと言われたんですが、もうちよつと核燃料が公害になるということとPRしておけば、あまり揉めないで済んだのではないかという気がちよつとしております。

伊藤 いまおっしゃった「すつたもんだした」というのは、どことどここのあいだで揉めたんですか。

小田村 科学技術庁とのあいだです。

伊藤 大蔵と科学技術庁ですか。

小田村 そうです。これは結局、何が問題かというと、電力会社がやっている民間の原子力を担当しているのは通産省なんですね。科学技術庁原子力局というのは、原子力の開発と安全審査なんです。ところが民間の施設については、通産省が審査もするわけです。そこで二元化しているんです。ですから本当を言いますと、これは通産省で一括

して扱っていれば、もうちよつとスムーズに物が進んだのかもしれない。いわゆる省が分割しているために、民間企業とその後始末、ということと二元化しているものですか。

伊藤 それは科学技術庁と通産省の権限の問題もあるんですか。

小田村 あると思いますね。そこには原子力委員会というのがありまして、これは科学技術庁についているわけですね。原子力委員会が原子力の総合管理をすることになっているものですから、初めはいいとしても、だんだん時代に取り残されてきたのではないかという感じがいたします。

伊藤 そういうお話を伺っていると、大蔵で予算を見ているといういろいろな問題が全部わかる、という感じがですね。

小田村 もともと科学技術庁は、通産省の中の技官の反乱なんですね。通産省は、それで技官がいなくなったわけではなくて、工業技術院とというのがちゃんとあるわけですけどね。それがどうも、技術屋の処遇がよろしくないということで、科学技術庁ができた。中曽根さんはそれに乗ったんです。

伊藤 技官と普通の文官との対立というのは戦前から非常に根強いものがあるわけですね。

小田村 ええ、農林省もそうです、建設省もそうです（笑い）。

伊藤 戦前で言うところ、松前さんなんかがそういうものの親方ですね。

小田村 そうですね。

佐道 ということは、科学技術庁と通産省はどうしても折り合わないんですね。

小田村 ところが、設計ができてしまえばルートは同じですから、人事交流もあるし、協力してやることになります。

武田 主査の方が通産から来られたというお話ですね。

小田村 そうですね、通産から来ていたんです。

武田 難しいんじゃないですかね。

■主計官時代の仕事 (3) ロケット、原子力船

伊藤 あとはロケットですか。

小田村 科学技術庁のほうはロケットは航空宇宙技術研究所。むかしの航空研究所なんですが、「宇宙」を入れて、航空宇宙技術研究所という名前になって、ロケットの研究も始めたんです。仙台の近くの角田にそういう実験場を一つ買ひまして、つくることにしたんです。まだ科学技術庁自体で打ち上げるということにはなっていないかっと思ひますね。調整局でやっていたんです。構想としては通信衛星や氣象衛星が考えられていましたが、具体的な予算要求にはまだなっていなかったと思います。種子島はまだできておりませんから、発射場は東大の内之浦だけでした。

いずれにしても科学技術庁のロケットの開発は計画段階だったと思ひます。内之浦のほうはλ(ラムダ)の打ち上げをやっていました、μ(ミュー)の予算要求が出て来ていたかと思ひますね。μもやってくれということ、認めていたんです。

伊藤 それは宇宙開発事業団が――。

小田村 まだできる前です。

伊藤 そうすると、どこがやるんですか。

小田村 これは東大の宇宙「航空」研究所ですね。代々木にある研究所です。昔の航研ですね。高木「昇」先生がたしか所長だったと思ひますね。

伊藤 そうすると、そういう予算は大学予算になるわけですか。

小田村 大学予算です。東大だったんです。共同研究所になる前からです。

伊藤 何か東大というのは、そういう大きなプロジェクトの研究所がたくさんありますね。

小田村 それで予算を食われて困るというので、共同研究所にしたわけですね。

伊藤 見かけ上は、東大が国立大学の何十%とかなるんですね(笑い)。

小田村 そうなんですよ(笑い)。

伊藤 そんな大きなプロジェクトをやっていたら、それは予算を食ひますね。

小田村 この宇宙ロケットの問題は、東大はずっと固体燃料だったんですね。科学技術庁のほうは液体燃料なんです。糸川さんがあいう方ですから、だいたい敵が多くて、特に朝日新聞の木村という記者だったと記憶しますが、糸川さんに反対の記事を新聞に書いたりしておりました。

伊藤 記者ですか。

小田村 記者ですね。科学技術担当の記者です。ですからそんなことで、宇宙ロケット開発の問題が科学技術庁と東大とのあいだでぎくしゃくしたことがあるんです。まだ私の頃はそれほどなかったんですが、その後だんだん――。それが結局、宇宙事業団になっていったんですね。

それから原子力船は、私が主計官になる前年度の予算でついておりまして、もう建造に取りかかっていた段階なんです。それはいいんだけれど、船ができたなら、いったいどこで所管するのか。科学技術庁で運行するわけはありません。船の予算は科学技術庁についているんですが、できたらどうするんだ、港はどこにするんだ、運行はどこでやるんだ、ということ、これはだいたい向こうとやり合ったわけです。

向こうも、だんだん船が完成に近づいてきますから、それまでに固めなければいかん、ということになって、やつと本腰になった。そういうところがおかしなところで、もともと原子力船は、造船工業会でつくれ、つくれと言っていたんですね。それと政治家とが組んで、無理やり予算に押し込んだわけです。だから、できてからのことは何も考えていないんですね。

佐道 そうだったんですか。

小田村 あの頃の雰囲気は、原子力船は将来一般的に普及・普遍化する

る、いまの通常燃料の船はなくなってしまう、というような考え、空気がたつたんですね。それで押し込んだんですが、だんだんそれは無理だということになってきたんです。いま原子力船は世界でも潜水艦しかありませんからね。結局、これは科学技術庁ではどうにもならないので、海上保安庁にお願いして、海上保安庁が「それじゃあ引き受ける」ということになったんですね。ただ母港をどこに置くかというのは、最後まで揉めたんです。

伊藤 そうですね、漂流したままだったんですね。

小田村 漂流したままなんですよ。

伊藤 とりあえず仮に、ということであちこち移転して歩いて、最後は廃船になっちゃうんですね。

佐道 ずいぶん継子扱いされたんですね。

小田村 継子扱いになっちゃうんですね。海上保安庁の長官が枅内さ「一彦」さんでした。高橋幹夫さんのあとの防衛課長になった枅内さんが海上保安庁の長官になっていまして、枅内さんが威張っていましたよ。「武士の情を出して原子力船を引き受けてやったんだ」といってね。

伊藤 あとの苦労も知らずに（笑い）。

小田村 原子力委員会とは、そんなことで揉めたことがあります。

■主計官時代の仕事 (4) 大学移転、教科書無償など

小田村 もう一つ大学関係で、大阪大学の移転の問題がございました。吹田に移転するので、その土地の問題をどうするかということです。用地の購入費ですね。もう一つ申し忘れましたが、国立学校特別会計は、私が法規課にいたときにつくったわけです。その法規課で、国立学校特別会計をつくれといったのは、相沢さんなんです。相沢さんは予算のことは非常に詳しいし、学校のこともむかし文部省を担当しているの、いろいろな案がありました。初めは、収入がありますから、

付属病院だけやろうかという話もあったんです。ところがこのとき文部の主計官は赤羽「桂」さんだったんですが、相沢さんが、「それだったらいっそのこと全部学校を移してしまえ」ということで、特別会計をつくりました。

「大阪大学移転問題は国立学校特別会計が」できてから最初の予算だったんですが、国立学校特別会計というのは非常に学校に有利にできています。学校が財産を受け入れるのはただでよろしい。ただし学校が財産を譲り渡すときは無償ではできない、ということになっていくんですね。それで、大阪大学が土地を購入する問題を佐藤局長に報告したときに、局長が「一時的な資金繰りのために一般会計から繰り入れまでする必要はないじゃないか、巨額の財投資金があるじゃないか」と言われて、財投の借り入れを主計局として主張したんですね。

財投を主管しているのは理財局ですから、理財局が真っ赤になって怒りました。財投資金を、土地のスペキュレーションじゃないんです。が借り入れて、移転したあとの土地が売り払って返すということなんです。から、立替払いみたいなものですね。そういうことに金を貸すわけにはいかん、ということです。

どこで喧嘩になったのかな、省議の席上でしたか、大臣折衝だったかな。佐竹「浩」さんという方が理財局の次長だったんです。佐竹さんと中尾さんは十五年で同期生ですが、同期生同士で大喧嘩になりました。結局、大臣としてもお金を使うのはいやでしょうから、財投を理財局に認めさせたんですね。これが立替払いみたいなことに財投を使った最初なんです。その後いろいろなものが出て来まして、例えば関東地区の開発計画ですか、六本木の防衛庁を移転するのに、あちこちやっていましたね。あれもみんな財投を使うようになったんですが、これが最初です。

伊藤 しかし移転して、跡地がうんと高ければいいですけど――。

小田村 そうなんです。だからいまのように地価が下がると、あとでどうするんですかね。このころはまだ良かったわけですよ。

伊藤 たぶん移転して跡地を売ったら、儲かるぐらいだったんじゃない

いですか。だいたい都心地から辺鄙なところに移転するわけですからね。

佐道 土地の値段が下がるということは発想していない時期ですね。

小田村 まったく発想していないですね。ただ、医学部だけは病院がありますので、急には行けないということでしたね。

伊藤 あまり遠くに行ってはまずいんですね。

小田村 それからもう一つ、教科書の無償供与が実行段階になったんですが、そのときに、無償措置を学年別に、一年生からだんだん増やしていくという形にしたと思うんです。そのとき一次内示でちよつといたずらをしまして、半分認めて、半分認めないような内示をしたんですね。そうしましたら、長谷川峻さんなんかが真つ赤になって怒ってこられました、「何事だ！」と言うわけです。それはもともとあとで認めるつもりだったんですが。

大臣に査定案の重要問題をご進講するときに、「とにかく無償は本来認めるべきものではないんだ」ということを角榮さんにご進講したんですね。角榮さんは、「それはまあそうなんだけれど、まあしかし、これは君、いずれまた教科書を国定にするための段階なんだから、だからまあ我慢しろ」と言っていましたよ。本当にやってくれるのかな、と思いましたけれど（笑い）。

伊藤 とんでもない、全然違いましたね。

小田村 それから、教科書を無償にするので、国家ということを考えてもらうために、配る袋を工夫しようということで、袋に日の丸を印刷しまして、第一回目の無償のときは配るようにさせました。その後それはなくなってしまうらしいですけど。それは文部省もやってくれたんです。

伊藤 文部省としては、無償配布の予算は結局教科書会社に払うということなんです。

小田村 そうです。教科書会社に払うわけです。高等学校以上は、定価については認可制になっていますが、小中学校は全部文部省がお金

を直接払いますので、したがって査定も厳しくなるわけですね。厚さもあまり厚くできないということになってきますね。これはもったいない話だと思うんですね。

伊藤 そうですね。子供が習う教科書ぐらい、親が自分で払った方がいいと思いますけれどね。

小田村 本当ですよ、大したお金じゃないんですから。それでも何百億になりますからね。

伊藤 しかしいずれこれは元に戻す以外になくなるんじゃないでしょうかね。

小田村 もうひとつ面白い問題として、巨大加速器という問題があったんです。素粒子ですか、私はよくわかりませんが、ぐるぐる回すものですね。ヨーロッパでつくって、日本はそれに入れないものだから、それに対応するようなものをつくらなければいけない。そして予算要求が出て来ました。五億円でしたか。こんな大きな額を取られて、将来またどんどん増えてきますので、これは大変だということでしたが、ノーベル賞の朝永「振一郎」さんまでわざわざおいでになりました。

佐道 大先生も予算の獲得に（武田 駆り出されたんですね）。

小田村 結局、とにかく上まであげようということで、大臣折衝まで上げたんです。あのときは、「蔵相が」角榮さんだったから、「文部大臣は」愛知「揆一」さんでした。愛知さんがいろいろ勉強して説明されたんですが、とにかく角さんは、そんなことを聞いたってわからないわけです。「よしわかった、これは足して二で割るので半分だ」といって、この数字はあるいは違っているかもしれない。たしか、要求が三億円に下げ、大蔵が一億円を出していて、中間の二億円ということで最終決着したと思います（笑い）。

伊藤 それはそれなりにできるものですか。

小田村 あれはまたさらに研究しまして、もう少し合理的なものになったはず。当初の構想ではなくなっただけですね。

伊藤 それでも十分に用が足りたのなら、いいわけですね。

小田村 そうですね。いろいろなことがあります。

伊藤 どうもありがとうございました。

佐道 勉強になりました。

武田 勉強になりました、本当に。

伊藤 私もいつか主計の方にお話を伺いたいと思っていました。文部省は文部省の側で、主計官とやり合ったとか、そういう話はよく聞くんですが、主計の方はどういうふうに見ているのか、ということは初めて伺ったものですから、これは非常に面白いお話でした。木田さんとか天城「勲」さんとか、みなさん文部省では、予算折衝のときにいかに変であったかという話をされます。それで、大蔵の方は実によく勉強なさっておられて、という話ですね。本当に大変だったという話をされていました。しかし査定するほうも勉強するのは大変だと思いますね。

小田村 査定するほうもそうですが、各省の会計課長が大変ですね。最近になりますと、事前に全部調整財源みたいなものをつくって、官房調整費というのが出てくるわけです。官房調整費というのはそれぞれ各省の官房で調整していくことになりますので、会計課長はなかなか大変ですね。

伊藤 会計課長は官房ですね。

小田村 そうです。

伊藤 各省とも会計課長というのは大事なポストなんです。名前だけ聞くと、会計というのは大したものではない感じですね。

小田村 よそで見ますと、そういう感じなんですけどね。

一同 どうもありがとうございました。

（以上）

小田村 四郎

オーラルヒストリー

第 8 回

主計局法規課長～大臣官房調査企画課長（1966～1970）

【2003年10月10日（金）15:00～17:20】

（於：政策研究プロジェクトセンター）

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

記録・編集：丹羽 清隆

第8回質問項目

1. 前回、先生が主計官時代に文部・科学技術担当として扱われた諸問題についてうかがいました。前回うかがった問題以外で、ほかに印象に残っておられる事項がありましたらお願いいたします。
2. 先生が文部・科学技術担当だった当時、文部大臣は灘尾弘吉、愛知揆一、中村梅吉と変わりましたが、それぞれについてどのような印象をお持ちでしょうか。また、先生と予算折衝を行った文部官僚について、とくに印象に残る方がおられましたらお願いいたします。
3. 1964（昭和 39）年 11 月、池田首相が病気で辞任し、佐藤政権が発足します。蔵相は田中角栄氏の留任でした。佐藤内閣について先生はどのように見ておられたのでしょうか。また、田中蔵相は、山一証券危機では評価されていますが、先生はどのように見ておられたか。
4. 1966（昭和 41）年 8 月、先生は法規課長に就任されます。当時主計局総動員で財政硬直化問題に対応され、その結果、総定員法もできたとのことですが、総定員法成立の経緯、意義などお願いします。
5. 法規課長時代には、在外財産補償問題も担当されたとのことですが、この問題の経緯や内容・結果などについてお願いします。
6. 法規課長時代で、ほかに何か印象に残る問題がございましたらお願いします。
7. 1968（昭和 43）年 6 月、大臣官房調査企画課長に就任されます。就任の経緯についてお願いします。
8. 調査企画課の業務内容はどのようなことだったのでしょうか。「調査」とはどういった内容で、「企画」とは大蔵省全体の政策にかかわる問題ということでしょうか。また、蔵相の財政演説の草稿もここで書かれるということを聞いておりますが、それは具体的にはどのような手順になるのでしょうか。

9. 先生が調査企画課長を努めておられたときは蔵相は福田赳夫氏でした。福田氏は財政通で知られる方ですが、蔵相としての福田氏をどのように見ておられましたか。
10. 先生は調査企画課長時代、1969（昭和 44）年に経団連の東欧視察団とともに東欧を、1970（昭和 45）年 4 月にはバンコクで開催されたエカフェ総会に出席された機会に東南アジアを回られたということです。当時の東欧および東南アジアの印象をお聞かせください。
11. 先生は 1970（昭和 45）年 5 月、名古屋国税局長に就任されます。就任の経緯等お願いします。また、国税局長の業務などについてもお願いします。
12. 先生が名古屋国税局長時代、税務機構の大改革があり、先生は国税局長としてそれに対応されたとのことですが、改革の内容や先生がご苦労された点などお願いします。
13. 1971（昭和 46）年 8 月、内閣官房内閣審議室長に就任されます。就任の経緯や内閣審議室の業務等についてお願いします。また、審議室長は、官房長官と総務長官の両方に仕えるということですが、それはどうしてそうなっているのでしょうか。
14. 上の質問に関連しますが、当時官房長官は竹下登氏、総務長官は山中貞則氏でした。それぞれについてどのような印象をお持ちですか。
15. 内閣審議室長時代で、特に印象に残っておられる問題はございますか。
16. 先生の内閣審議室長時代は、長く続いた佐藤政権の、いわば末期にあたり、後継問題が取りざたされるとともに内閣の求心力は急速に低下したと言われていています。内閣官房の中におられて、なにかお感じになったことはございますか。

※今回は以上のような問題を中心をお願いします。

■「補」特殊法人、財団法人

伊藤 この前は主計官時代のお話を伺ったんですが、主計官時代のお話で、つけ加えることはございますか。

小田村 あまりないと思いますが、あのころ特殊法人がたくさんできてきました。国立教育会館はもうできていましたか、ちよつとはつきりしませんが、国立劇場は私のときに法案を提出したんです。完成いたしました。ですから国立劇場の初めての公演を見せてもらいました。だいたい、国立劇場が何だかわからなかったんですが、宮下「創平」君が「いや、あれは歌舞伎座ですよ」というので、なるほどと思いついてね（笑い）。それで見せていただいたりしました。

伊藤 それで新しいほうの「演劇の」人たちが不満で、新国立劇場、ということになるわけですね。

小田村 そういうことですね。

伊藤 あれは特殊法人なんですか。

小田村 特殊法人です。いま独立行政法人になりますね。

伊藤 その当時は財政的な余裕も少しあつて、特殊法人をつくることのできたんですね。

小田村 各省庁があちこちにつくっていましたね。

伊藤 文部省はそんなに多くはございませんか。

小田村 文部省は、あとは学校給食会。これは前からありましたけれどね。そうそう、オリンピック記念青少年センター、いまでも代々木にあります。あれもあのときですね。オリンピックのあとで特殊法人にいたしました。それから国立競技場も特殊法人でした。オリンピックの時に代々木に新しい施設をつくりました。

伊藤 先生の時代にできたのは、さつきおっしゃったものだけですか。小田村 国立劇場と青少年センターぐらいだったと思います。既設のものに国立競技場のほか、教育会館、学校給食会、私学振興会などがありました。

伊藤 特殊法人というのはどういう仕掛けになっているわけですか。

小田村 特殊法人というのは、国が設立いたしましたして、国が監督をするということですね。

伊藤 直営ではないんですね。

小田村 ええ、国営ではなくて、国から独立した法人ではあるけれど、設立は国がやる。特別の法律に基づいて設立委員を政府が任命してつくて、役員の任命は大臣が行なう。それから国の監督がありますから、財務諸表の報告とか監査とかがあつて、会計検査院も入ります。そういう意味で、半分国営企業ということになると思います。

これがあるために、たいへんいろいろな問題が生まれてくるわけですね。例えば労働省なんていうのは、本省の規模は小さいですね。それから建設省も小さいです。ところが外郭団体である特殊法人は、「労働省では」雇用促進事業団とか労働福祉事業団とか、建設省では住宅公団とか道路公団とか首都高、阪神高速などという特殊法人がありまして、そっちのほうは膨大な人員を抱えているということ、一種の抜け穴になっていたようなところもありますね。

伊藤 財団法人の中には、ほとんど補助金でやっているところもありますね。

小田村 そうですね。

伊藤 財団法人といつても、まったく国から――。

小田村 独立しているものもあります。

伊藤 ありますね。かなり特殊法人に近いような財団法人もございましてね。

小田村 そうですね。

伊藤 同じ財団法人といつてもまったく違うものだな、と思ったんですが。

小田村 内容的にはかなり違うものが多いと思いますね。一般に財団というと、国からは少し離れたものだと思います。

伊藤 特殊法人よりは離れているんですね。

小田村 そうですね。それから特殊法人類似のもので、認可法人とい

うのがありまして特別の法律で設立されますが、国が任命しない設立委員によって設立され、政府が認可するという方式ですね。これは特殊法人がどんどん増えて批判されるものですから、その抜け穴として出て来たものなんですね。

伊藤 予算の編成の場合、そういう特殊法人の予算は、予算として出してくるわけですか。

小田村 予算としては補助金の中に入ります。だから例えば、原子力研究所は特殊法人ですが、原子力研究所に対する出資金と補助金が予算に計上されることになります。原子力研究所の収支は研究所それ自体の会計になります。

伊藤 そうすると、国が事実上行なっている行政のすべてが大蔵省の表向きに出てくる予算と一致しているわけでは必ずしもないわけですね。

小田村 そういうわけですね。

伊藤 猪瀬「直樹」氏が最近さかんにそのことを言っていますね。

小田村 そうですね。

伊藤 僕はあれが正しいのかな、と思ったんですけど。

小田村 正しいんですが、初めの意図はそうでもなかったんですけれども。戦時中からですね、営団からですね。

伊藤 地下鉄の帝都高速度交通営団ですか。

小田村 あれは戦前から続いているので営団という名前になってはいるんですが、やはり特殊法人です。総裁は運輸大臣の任命で運輸省のOBが多いですね。実態は労働基本権がありますし、普通の会社と同じような運営になっています。そのための補助金はもらっておりません。

伊藤 補助金はないんですか。

小田村 営業に対する補助はないと思います。地下鉄整備事業に対する特別な補助金は、他の地下鉄と同様に受けています。

伊藤 公社とか営団というのは特殊法人なんですか。

小田村 特殊法人の中に入ります。

伊藤 戦争中の食糧営団とかもそうなんですか。

小田村 あれもいまから範疇を考えれば、やっぱり特殊法人の一種だと思いますね。

伊藤 あの食糧営団というのは、営団としての実態があつたのか、ちよつとよくわからないんですが。

小田村 あれは米の配給が中心だったんじゃないでしょうか。

伊藤 そうですね。実際にお米の流通をやっていたんですかね。

小田村 そうですね。

伊藤 でも農林省の仕事だと思いますが。

小田村 農林省の仕事ですね。

伊藤 農林省は自分でやらないで、そういうところにやらせるわけですね。文部省では今度、全国の国立大学が全部独立行政法人になりますから大変な数の法人を持つわけですが、あの法人が一体どんなものになるのか、僕らも実際よくわからないんですが。

小田村 本当にわからないですね（笑い）。

■主計官から見た人物像 (1) 文相（灘尾、愛知、中村）

伊藤 先生が主計官の時代は、文部大臣が、灘尾「弘吉」さん、愛知「揆一」さん、中村「梅吉」さんという顔ぶれなんですが、先生は大臣とはあまり接触はないわけでしょう。

小田村 やつぱりありますね。灘尾さんは、私が予算の主計官になったときはもう替わっておられたと思います。法規課にいたときに一回、予算担当と一緒に呼ばれたことがありますが、この方は本当に立派な方ですね。

それから愛知さんは、文部大臣と科学技術庁長官を兼務されたんです。ですから大臣が一人になりました。そういう意味では二つの大臣と折衝しないで済んだわけです。しかし直接愛知さんとお目にかかるということは比較的少なくて、一回愛知さんに呼ばれたことがありましたが、これは何だったか——。この前お話しした原子力の再処理の

話ではなかったかと思ひます。ちよつとはつきり覚えておりません。文部関係ではなかったと思ひます。

伊藤 灘尾さんとか愛知さんはもととお役人の出身ですが、中村さんは――。

小田村 中村さんは純粹の党人ですね。お目にかかったことはなかったんですが、大臣折衝の時「が初めて」でした。当時、二度目の予算の時は「大蔵」大臣は福田「赳夫」さんになっておりました。大臣折衝というのはまことに残酷なもので、向こうから出て来られるのは大臣一人なんです。それで大蔵省のほうは、大臣と次官と局長と次長と主計官まで陪席するんです（一同笑ひ）。

武田 知らなかった（笑ひ）。

小田村 その大臣折衝に上がった問題につきまして、中村大臣が滔々と整然と話されたんですね。すっかり感心しました。それで福田さんが、「いやわかった。ちよつと待ってくれ」ということで、解決をどうするかと局長以下にお尋ねになって、「こういうことで」ということになって収まったことがあったと思うんですが、本当に私もびつくりしました。素晴らしい方ですね。あれだけ滔々と堂々とやられる方はいないんじゃないかと思ひました。

伊藤 党人の方で、そういうことをおやりになるといふのはね。じゃあ、ちよつとぐらひは相手方の大臣と触れることもあるんですね。

小田村 でも大臣と直接やり合うというようなことではないですね。その警咳に接する機会があったということですね。

■主計官から見た人物像 (2) 佐藤内閣・田中角栄蔵相

伊藤 昭和三十九年に池田さんが辞任されて佐藤政権になります。大蔵大臣の田中角栄さんはそのまま留任しますが、その池田内閣から佐藤内閣への転換は、みなさんどんな気持ちで迎えられたんでしょうか。小田村 私の個人的な感じでは、池田さんのあとには佐藤さんになって

欲しいなと思つていました。というのは、あのとき、「池田・河野」対「佐藤」という対立だったんですね。河野「一郎」さんでは具合悪いな、という感じがしておりましたからね。あのときは、池田さんの遺言で佐藤さん、ということになりましたね。

伊藤 遺言ということになっていますが、本当なのかどうか、よくわかりませんが。

小田村 よくわかりませんけれどね。まあ、佐藤さんになってよかったという感じでございました。

伊藤 やつぱり、よかったという感じですか。

小田村 はい。

伊藤 田中大蔵大臣についてはいかがでございましたか。

小田村 田中さんはいまでもいろいろ言われていますが、山一証券の時は私はよく知りません。これは証券局でやっておったんですね。ただ田中さんは、あの直前に証券局をつくったと記憶しますが、そのことを後々までも自慢にしておられました。山一証券の問題はきれいにぐぐり抜けたと思うんですが、結果的にあとで株が上がって、国費もほとんど使わないで済んだんです。結局、山一証券のあれを「累積赤字を特別融資で」肩代わりしておいて、株がその後上がりましたから、それを売ったので、日銀もほとんど損をしていないわけです。

伊藤 二度目は駄目でございましたけれど（笑ひ）、このときは非常にうまく行った。

小田村 ただ、一般論で言えば、事務方としては、事務的な主張がなかなか通らない。通らないというか、あのときはまだ資金的に余裕がありましたから、どんどん認めてしまふ。米価などもどんどん上げられるだけ上げるといふことで、中の評判はあまりよくなかったと思ひますね。

それからもう一つは、新聞記者を非常にうまく利用されましたね。

記者にかなり現ナマも行っていたんじゃないかと思うんですが。

伊藤 新聞記者の人たちがそう言っていますよ。

小田村 そうでしょう。しょっちゅう会食みたいなパーティを開かれ

ていました。ですから、新聞雑誌に出る田中評は非常にいいわけですよ。まく短時日のあいだに大蔵官僚を信服させたと書いてある。それからもう一つ、田中さんは餅代を課長以上みんなにくれたんじゃないでしょうか。

伊藤 前例のないことですか。

小田村 前例がないですね。とにかく私が主計官のときにいただきましたね。

伊藤 直接くれるんですか。

小田村 直接ではありません。これは総務課長を通じて、ですね。

伊藤 総務課長も変な任務ですね（笑い）。

小田村 どの辺までやっていたのか、そのところはわからないんですけれど。

伊藤 僕が聞いたのは、衆議院の職員にまで、「ほう、元氣か」といつてこうやっていた「懐から金を出して渡す」そうです。

小田村 すぐ出されるんですね。私は役人を辞めたとき、退官の挨拶に――。私の父が、私の主計官のとき亡くなりました。田中さんにはお花までいただいているものですから、本当は挨拶に行かなくてはいけないんですが、行くとまた何かもうので（笑い）、それはちよつとお断わりすることができませんから、とうとう田中さんのところにはご挨拶に行かなかったんです（笑い）。

伊藤 どうしてそんなにお金がいっぱいあるのか知りませんが、とにかく人を見たらお金を渡すというんですから。

佐道 それはしかし直接的な手法ですね。

小田村 それは断われないですからね。

佐道 餅代だということで、課長さんから降りてきたわけですか。

小田村 餅代という名前ではなかったかもしれませんが、大臣から、ということでした。本当は所得申告しなくちゃいけないんですけれどね。（一応笑い）

武田 大蔵省ですからね（笑い）。

小田村 所得申告するわけにもいきませんからね（笑い）。

伊藤 そうですね。なんという名目にするのか（笑い）。

佐道 田中さんだって、お一人ずつから領収書をとるわけではないですから（笑い）。

伊藤 やっぱり、省内にはそれで信服する人もおられたんですね。

小田村 政治的な力は持っておられましたから、そういう意味では、大臣にお願いした方たちもおられると思いますね。

伊藤 そうでしょうね。でも省内に田中派というようなものは――。

小田村 そういうものはありません。やはり省内では、この人なら、という方は、前尾「繁三郎」さんも評判がよかったと思うんですが、大平「正芳」さんと福田さんだと思いますね。

伊藤 じゃあ、「田中さんに」信服するという感じではないんですね。

小田村 そうではないです。そういうことはありません。

伊藤 ただ、この方は党内で非常に力のある方ですから、何かしようと思つたら、この人をお願いすると非常に役に立つわけですね。

小田村 そうですね。

■主計官から見た人物像 (3) 選挙に出馬する官僚

小田村 それから選挙に出ようとする人は、田中さんのところに行きますね。海堀「洋平」さんなんかは、やめて選挙に出ましたね。これは失敗したんですが、やはり田中さんにずいぶん応援をもらったようですね。

伊藤 大蔵もだいたい何人かは「国會議員を」出すんですか。

小田村 あの頃わりあいに出たんじゃなかったでしようか。あまり若いところからは出ませんでしたけれどね。それでも近藤鉄雄君なんかは計画的なんでしょうね。早くから出ましたからね「一九五三年大蔵省入省、一九七二年衆議院当選」。

伊藤 やはりある程度早く出ないと当選回数が稼げませんからね。

小田村 そういうことですね。

伊藤 大蔵は人材が多いわけですから、政治の世界に行こうと思う人がある程度いてもおかしくはないですね。

佐道 ある年次になると、誘いもかかるといことですか。

小田村 それもあると思います。ただ、都会育ちは出にくいわけですね。

伊藤 ああ、そうですか。郷里がありませんからね。

小田村 私の同期生では、嶋崎均というのが、たしか文書課長をやめたときに出たと思います。

伊藤 それは郷里からですか。

小田村 そうです、石川から出ました。小松、金沢だったかな。

伊藤 小田村先生には、そういうお誘いは。

小田村 それは全然。

伊藤 ご自分でそういう気持ちは全くなかったですか。

小田村 全くなかったですね。第一、出る地盤がありませんしね。

伊藤 長州があるじゃないですか（笑い）。

小田村 長州も、もう縁はほとんどないですからね。いつだったかな、都知事に出ろということをお勧められたことがありました。民社党に、私の小学校の同クラスのものがありましたね。

佐道 いづごろの時代ですか。

小田村 いづごろでしたかね。春日「一幸」さんか塚本「三郎」さんの頃ですね。

武田 八〇年代ですね。

小田村 その頃に、東京都の民社党の本部にいた人が話をしてきた。あの頃は美濃部「亮吉」さんの後でしたかね。民社党と自民党はツーでしたから、民社党さえ「都知事候補を」出せば、自民党はそれです承るから、という話でした。

佐道 じゃあ、場合によっては、鈴木俊一さんの代わりに小田村先生が都知事になったかもしれないですね（笑い）。

小田村 昭和五十九年でしたかな。

伊藤 そういう気には全然おなりにならなかったんですか。

小田村 ええ、全然ありませんでした。

■主計官から見た人物像 (4) 文部省官僚群像

小田村 それからここ「質問項目」にございますが、文部官僚についてですね。私の「主計官をやった」最初の時は、次官は小林行雄さんでした。この方は非常に温厚な方で、真面目な方でした。大学局系統だったと思います。二年目が福田繁さん。この方は一回選挙に出られて失敗しました。この人はなかなか豪放な方で、考え方も非常にしっかりしておられた。当時、科学研究費は全部、学術会議がコントロールしていたんですね。私は、これは具合が悪い、文部省が主導権を持つてやってくれということ、そのために科研費をずっと引き延ばしておきまして、次官折衝で福田さんをお願いしたら、福田さんはわかったということがありました。

伊藤 それはたいへん結構なことですよ。

小田村 それで学術振興会を改組して、充実させてくださったんです。伊藤 学術会議がある限り、私どもは絶対に科研費がもらえない（笑い）。

小田村 福田さんのお婿さんが、「大蔵省から」防衛庁に行った秋山「昌広」さんで、彼が女婿になるんですね。その次「の事務次官」が、福田さんの下で初中局長をしておられた斎藤「正」さんという方で、これは非常に立派な方です。この方は高文ではないんですが、次官になられました、非常に人望のあった方です。

私は、斎藤さんが最後に送別会をしてくださったので、学制改革のことで、少し学校制度を変えたらどうかということをお話を斎藤さんに話したんです。その時に斎藤さんがこういうことを言われました、「小学校は、自分としてはなるべく動かしたくない。つまり六・三制になったが、小学校は昔の伝統があつて、教育内容が一番整備されている」。それを次官から言われて、それはなるほどと思ったんですね。いろいろ

ろなことが言われておりますが、いまの小学校制度はなるべく残したいと思っているわけです。それは斎藤さんに教えていただいたことです。

伊藤 そういう方以外に、いろいろな形で文部官僚とおつき合いがあったのではないかと思います。

小田村 あと、この前申し上げました岩間「英太郎」さんとか、井内「慶次郎」さんとか、木田「宏」さんとか、安嶋「弥」さん、そういう方々と一番親しかったですね。

伊藤 木田さんはその後も縁ができたわけですね。

小田村 そうですね。また拡大にも来ていただきましたし。

伊藤 それは主計官としての時代にお知り合いになったということですか。

小田村 そうですね。

■法規課長 (1) 財政硬直化問題

伊藤 それで「昭和四十一年八月に先生は」法規課長におなりになります。そこで、さつきもちよっとお話がございました財政硬直化問題ですね。これはだいたいどんな事態という認識なんですか。

小田村 これは、村上さんの本「『村上孝太郎一巻集』」に書いてあるわけですが、村上さんが四十一年に主計局長になられて、四十二年度予算を手がけられたわけですね。ところがどうも、財政が動きがとれなくなってきた。

伊藤 既定経費で。

小田村 既定経費で、ですね。そういうものを四十二年度はかなり抑えたんですが、それでも少し膨らんでしまったし、国債も増えてしまったということ、なんとかしてもう少し財政の柔軟性を取り戻さなくてはいいかん、というのが財政硬直化問題です。

これ「『村上孝太郎一巻集』」を見ますと、いわゆる義務的経費、

つまり前年度から既定経費を、四十二年度から四十三年度の見通しをすると、グッと膨らんでいる。この悪弊を直さないといけない。そのためには、一つは国債発行をできるだけ抑えて、義務的経費が予算を圧迫しないようにしなければならない。

例えば毎年補正予算を組むわけですが、その補正予算をやめようという。「総予算制度」と村上さんは言っておられます。そのためには一つには予備費をたくさん積んでおく。結局、なんで補正予算が起くるかという、一つは給与のベースアップですね。それからもう一つは米価です。食糧繰り入れも初めから少し膨らませて予算を組んでおく。そしてその範囲内で米価問題を片付ける。もし米価がそれ以上に上がるのであれば、消費者米価を上げてバランスをとっていい、という考え方だったんですね。

それで、財政の現状がこういうことですよということで、村上さんは、これはすごいことだと思うんですが、毎日毎日、国会の議員会館に、与党の代議士を全部回って、自分で説明に行かれたんですね。それは大変なエネルギーだったと思います。

伊藤 それは大変なエネルギーですが、議員さんたちもびつくりしたでしょうね。

小田村 議員さんたちは、そういうことか、ということで理解していただいたということのようです。それで公共事業費を減額とまではいかなかったんですが、かなり抑えました。このことも、村上さんは予算ができたときに非常に言っておられましたね。「公共事業費を抑えるなんていうことはいまままでできなかったんだ」ということですね。

伊藤 よく党が、言うことを聞いてくれましたね。

小田村 そうですね。それだけ根回しを懸命にやられたわけですね。

伊藤 当時は国債がだんだん溜まっていくといっても、いまのことを考えたら微々たるものだと思いますけれど（笑い）。

小田村 大したことはない（笑い）。四十年に福田さんが国債発行をされて、四十一年度予算から、国債が当初予算に入ったんですね。四十年年度の国債発行は、補正予算なんです。それが四十一年度から当初

予算に入って、四十二年度も増えた。このまま進んだら大変だ、ということを抑えたんですね。

伊藤 義務的経費というのは、さっきおっしゃったもののほかに、福祉関係で医療費とかもありますね。

小田村 そうです。医療、年金がだんだん膨らんできますが、そういうものが全部入るわけですね。

伊藤 文部省でいえば、学齢の児童が増えるとか。

小田村 そうですね。それは教員定数の増ということになってきます。ただあのときは、児童はどうでしたかね。高校急増が終わりまして、児童はむしろ減ってきたと思うんですね。

伊藤 それで学級を増やすんですね。

小田村 それで四十五人学級から四十人学級に直したんですね。そうしないと先生を減らさなければならぬわけですから。

伊藤 救済策だな。

小田村 いや、それが多いんです。

伊藤 じゃあ日教組のせいもあるな。

小田村 「主計官時代のことで言い」落しましたが、一番困ったのは、学校給食の栄養士なんですね。これはいままでも地方交付税で見えていたんです。どうしても補助金をくれというけれど、そんなものは交付税で見れば十分なんだということで抑えていたんですが、まあ女の人はずいいですね。毎日毎日陳情に押し寄せてくるわけです。それで文部省もほとほと困って、文部省の体育局長の西田剛さんが来まして、「いや、夜討ち朝駆けで、文教関係の先生方が全部まいっている。なんとかしてやらないと治まりませんよ」と言うんですね。それで、もったいないと思ったんですが、とうとう最後には補助金をつけさせられた。ただこれは禍根を残しましてね。人間を雇ってしまうと、あと事業それ自体の動きがとれなくなるんです。私も大変な大失策だったんですけれど。

伊藤 それでまた昇級がございますし、自然増でどんどん増えていく。小田村 予算についてはそういうことでした。

■法規課長 (2) 総定員法

小田村 それから定員と機構も考えなくてはいけないということで、これは法規課というより総務課で対応いたしました。総務課は定員をもっているものですから、総務課が行政管理庁と相談しまして、行政管理庁のほうで法律を出したわけです。機構のほうは、一省一局削減ということで、各省とも文句を言ったんですが、横並びならしやうがないということで、全部一局削減いたしました。これがまた後々問題になってくるわけですけれども。

それから総定員法は、いままでは全部各省別に定員が決まっていたわけですね。各省設置法で、毎年法律改正を出すんですが、それを総定員ということで、自衛官を除く定数を決める、各省別の人員は政令で決めるということにしたんですね。これはたいへん厳しかったんですが、各省は喜びました。というのは、毎年毎年設置法の改正を内閣委員会に出していたわけですね。これはなかなか成立させるのが大変なんです。これは与党ではなく、野党の餌食になるんです。ですから、社会党が各省に対して力を持っていたのは、内閣委員会を設置法の審議をやるからです。そうすると各省はなんとかして通してもらわないと困りますから、社会党に頭を下げてはいけないということで、これは一つのガンになっていたんです。

伊藤 それは知らなかったな。

武田 いや、初めて聞きましたね。

小田村 その代わり総定員法をつくって、一律削減、五年間で五%でしたか、定数を減らす。これは無条件ですね。その代わり、増やすべきものは増やす。ただしシーリングは変えないということです。

伊藤 増やすものは増やすというのは、総定員は変わらないけれど、その中でやれということですか。

小田村 ええ。各省別にも、減る省と増える省が出てくるんですね。

伊藤 どこかの省が減って、どこかの省が増えるというのは、政令のレベルでできるわけですか。

小田村 はい。

伊藤 そうすると閣議で決めればよろしいということですか。

小田村 閣議で決めればいいわけです。閣議と予算ですね。予算では審議になりますが、これは全体ですから。

伊藤 内閣委員会ではないんですね。

小田村 個別ではない。

伊藤 内閣委員会ではいろいろ吊されるんですね。

小田村 そうです。各省にしてみれば大変だったんです。防衛庁の自衛官は別になりましたが、自衛官の定員は三年に一回しか通らないという状況だったんですね。

伊藤 自衛官を増やすのも大変なんだ。

佐道 それは本当にそうです。

伊藤 いまのようなことは、法規課としても参画するわけですね。

小田村 それは参画しますが、だいたい主務は行政管理庁、窓口は総務課ということですから、こちらは法令を審査するという程度のことです。

伊藤 具体的に総定員法を通すためにいろいろ議会で働きかけるというようなことはないんですね。

小田村 それはありませんでした。それは行政管理庁に全部任せておりました。

伊藤 ということは、行管庁とのあいだに協議事項みたいなことがあるわけですね。

小田村 定員については、行政管理庁と予算の主計局と、両方で査定するんですね。だから主計局が査定をするときには、行政管理庁の査定案を先に知らされるわけです。その範囲内で主計局のほうは査定をする。そういうことをやっていました。

伊藤 その連携はうまく行っていたわけですか。

小田村 ええ、連携はうまく行っていたと思います。

伊藤 ただ財政硬直化というのは、それだけではどうにもならないですよ。

小田村 ただ、このころは、神武景気が終わって岩戸景気ですか、昭和四十年からどんどん経済成長が高くなりまして、自然増収がどんどん出たんです。したがって国債を減らすこともそれほど苦しくなかったんですね。

伊藤 でもあまり減らさなかったんじゃないでしょうか。減らしたんですか。

小田村 発行の絶対額は若干減らした程度だったと思いますが、国債依存度は5%近くまで減らしたと思うんですね。

伊藤 大蔵省としては、とにかく国債が膨らむということは好ましくない事態ですね。

小田村 そうですね。

伊藤 自然増収があるというのは、議員さんに狙われたらどうにもならない。

佐道 絶対に狙うでしょうしね。

小田村 自然増収は一種の前提のようになっていましたね。

佐道 5%まで抑えたというのは、かなり抑えたことになりますね。

小田村 かなり抑えたということです。

■法規課長 (3) 在外財産補償問題

伊藤 法規課長の時代に、この前もちょっとお話が出ましたが、在外財産の補償問題がありましたね。これは補償するといっても、在外財産というのは証明できるんですか。

小田村 できないです。ただ、引き揚げてきたときに申告書を出させただけです。

伊藤 自分が放棄してきたものは何であるか、ということですか。

小田村 ええ、それが大蔵省に残っておりまして。あれは当時の管理

局でしたか、その書類が残っていて、どんなものを残してきたかというはある程度わかったわけです。けれども、それが本当かどうかということは証明のしようがないですね。だから誰がどれだけ残してきたか「わからない」。高倉（建）君という補佐が調べたところによると、初めはまともに申告してきたらしいんですが、だんだん膨れあがってきた。当時日本はインフレでしたから、申告書の金額もインフレになって収拾がつかなかったという状況ですから、いくらだったかということは、本当にわからないんですね。

伊藤　むかし村田五郎さんという国民協会をやっておられた方がいますが、あの方はお父さんが台北で都市の中に大量の土地をもっていて、すごい財産があったそうです。それが全部没収されたけれど、取り返す、とか言っていましたけれど（笑い）。それはどうやって、各個人の補償をしたんですか。

小田村　補償はやらないわけです。補償ではなくて見舞金です。昭和三十年代の中頃に在外財産問題に対して引揚者交付金というのをを出しまして、それは交付公債で渡っていたわけです。

伊藤　それは一律ですか。

小田村　はい、一律で渡っていました。それがだんだんなくなってきましたんですね。それもありますし、相沢「英之」さんが法規課長のときですから、二年ほど前に農地報償が成立した。農地がお金をもらえらんだつたら、われわれも補償しろということで、また盛り上がってきました（笑い）。

伊藤　農地の場合は、はっきりとどれぐらいの土地だったかわかりません。在外財産はどうやったのかな、と思っただけです。

小田村　結局、これが政治問題になってきたんですね。

伊藤　これは圧力団体がございましたね。

小田村　在外財産補償期成同盟でしたかね。

伊藤　議員さんもたくさん入っていますね。

小田村　そうです。

伊藤　誰が親分だったのか知りませんが、相当強い圧力だったようです。

すね。

小田村　大変な圧力でした。これも窓口は総理府なんです。結局お金の問題ですから、大蔵省に回ってきて、大蔵省でも所管するところがありませんから、法規課だ、ということになったんですね（笑い）。

伊藤　法規課というのはそういうものなんですか（笑い）。

小田村　なんらかの法律を作らなければいけませんからね。それから補償問題をどう捌くかということについても法律的な解釈が必要ですから、それで法規課ということなんですね。

伊藤　でも、なんでも法律の問題じゃないですか（笑い）。それで、なんらかの根拠をつくったんですか。

小田村　ええ。前に交付金を渡してありますから理屈のつけようがないんですが、総理府審議室に向向しておりました長村（輝彦）君が、「理屈をつけるのは難しいんだけど、こういうことにしたい」と言ってきたんです。それは、「引き揚げ者は向こうで営々として築き上げてきた財産を全部捨てて、着の身着のまま帰ってきた。要するにハイマート・ロスですね、故郷がなくなっちゃったんだ。それは日本で戦災を受けた人とはちよつと違うんじゃないか」というようなことで、理屈になるのかわからないのかわからないんですが、そんな理屈をつけまして、こういうことでなんとかしたいということですね。そのへんは一つの考え方として、政治的にはなんとか片付けなければなりませんからね。

これは予算のときではなかったんですが、三役折衝まで上がりまして。主計局長も出られて、党のほうとも話をつけて、結局交付公債で、一人いくらでしたか――。いろいろ交付公債がありまして、戦没者の妻に対する弔慰金とかいろいろなものがありましたから、それと同じような形の交付公債を出すということにして片付けたわけです。

伊藤　それは一律ですか。

小田村　これは一律です。そうしないと、誰がいくら残してきたかという個別の事情の判定はできませんし、財産をなくしたというのはみな同じことですからね。要するに引揚者交付金を二度出したというこ

とになるんですね。

ただこのときに、水田「三喜男」さんが大蔵大臣で、党のほうから「これをもって、在外財産問題は一切解決した」という一札を取って、それでおしまいにしたんですね。

伊藤 補償問題というのはいろいろあると思いますが、いまちよつとお話が出ました戦災の補償というの、たしか問題にはなったんじゃないでしょうか。

小田村 なりましたけれど、最高裁の判決があつたかどうか、ちよつと私も記憶がないんですが、裁判があつたと思うんですね。裁判で、それはできないということで片が付いていたと思うんです。だから在外財産についても農地にしても、そういうときに比べるのは全部戦災の問題なんですね。戦災に対してそういう措置は一切講じていないのに、特別扱いするのは難しいというのが初めの立論だったわけです。伊藤 ただ在外財産の場合は、講和条約その他で請求権の放棄をしたわけですので、それは国の行為としてやったわけですね。

小田村 そういうことです。それを向こうは問題にしているんですね。あの講和条約というのは、日本側と交渉の結果できたものではない。条約は条約だけれど、あれは条約として認めざるを得なかった、それ以外に選択の余地はなかったのだ、そういう意味で補償の対象にはならない。これは判例が出ていたと思います。

伊藤 法的に申しますとかなり難しい問題ですね。請求権の放棄というのは双方でやったはずですね。例えば朝鮮半島の場合も、ですね。

小田村 朝鮮の場合は、日韓基本条約に基づく請求権協定で双方が放棄したんですね。

伊藤 そうですね。

小田村 ただ朝鮮の場合は、日韓交渉で、こちらもこれだけの財産の補償を請求いたしましたから、

伊藤 請求したんですが、最終的には全部放棄したと思いますけれど。小田村 仰せのとおり、日韓基本条約のときに最終的に決めたんですね。サンフランシスコ平和条約は連合国との条約ですから、朝鮮は放

棄対象には入っておらず、その地域の施政者と特別取極をすることになっていました。それで日韓交渉で請求できたわけです。しかし条約の中で占領した米国政府の財産処分の効力を承認していますから、最終的に放棄することになりました。満州は、連合国の領域とされまして、サンフランシスコ平和条約で請求権を放棄しています。その関係で請求はできないということだったと思います。

■法規課長 (4) 国債整理基金、国庫債務負担行為

伊藤 法規課長時代というのは二年ぐらいおありですが、その間、だいたいいまのお話のようなことが主な出来事でございますか。

小田村 そうですね。あと、細かい問題ですが、国債整理基金特別会計というのがございました。昭和四十一年から本格的な国債発行に踏み切ったんですが、国債整理基金を整備しなくてはいかん、ということとで、初めの年に整理基金特別会計法の改正をやりました。要するに、戦時中は国債がどんどん出て行きますから、整理基金に国債残高の1%だったか「を繰り入れる」という規定があつたんですが、それは停止されました、停止されたままになっていったんです。戦後は国債がなくなりましてから、その交付公債程度、あるいは昔の外貨債で残っていたものに対する召還だけになっていましたので、実際には整理基金にその都度繰り入れるだけでよかった。

ところが国債が今後だんだん増えてくると、なんらかの措置をしなければいけないということで、整理基金の繰り入れを考えたんですね。何%にするかということで、いろいろ計算をしまして、総務課とも相談しました。結局、公共事業でつくるいろいろな施設の耐用年数ほどのくらいだろうということで、道路その他を含めて六十年というのを一応の目安にして、六十年なら一・六%ずつ積み立てればいだろうということとで、一・六%の繰り入れ規定をこのときに作りました。これはその後国債がどんどん出て、いまは止まっているか実行している

か、存じません。いずれにしても、そのときの整理基金の特別会計の改正が一つありました。

伊藤 その特別会計は、そこに繰り入れて、そこから償還するということですか。

小田村 そうです。だから毎年一般会計としては、そこに一・六%ずつ繰り入れていく。

伊藤 いまは膨大な量の国債があつて、それを借り換えということをしていくわけですね。これはその特別会計と関係があるんですか。

小田村 特別会計で借り換えをやっているわけです。ただ、利払いがありますので、利払いは毎年毎年繰り入れております。

伊藤 利払いを止めるわけにはいかんですからね。

小田村 あと、償還も一部やっているとします。償還しながら発行していくということをやっていると思いますが、詳しいことは最近知りません。

伊藤 先生がやったときといまでは――。

小田村 全然違います（笑い）。

あとはそう大した問題はありますが、社会党が国庫債務負担行為について質問をしました。北山愛郎さんという岩手県から出ていた人ですが、何を質問するかわからないけれど、予算の爆弾質問をするという。なんだかよくわからなかったんですが、私が参議院のほうから聞きますと、どうもこれは国庫債務負担行為のことだという。その国庫債務負担行為というのは、何年間にわたる契約をするわけですが、初めはその頭金を外したものを債務負担行為として予算に計上していたんですね。

伊藤 頭金は予算に入っているわけですね。

小田村 予算に入っています。それで両方集めて契約すればいいということだったんです。どうもこれはおかしいというので、方式を変えまして、頭金はつける。頭金を含めた分も全部債務負担行為として計上するというに切り換えたんです。それがけしからんという質問だったんです。北山さんと村上さんはずいぶん押し問答をしまして、

予算委員長が、もういい加減に止めてくれということだったんですが、そんな話がありました。これはたいへん局長に喜んでいただいたんですが。

伊藤 債務負担行為というのは多いんですか。

小田村 多いですね。防衛庁なんかは本当に大きいですよ。契約が長期にわたるものですから。それから公共事業でも、よく公共事業促進というときに、前年度に国庫債務負担行為を補正予算でつけるんですね。そうすると契約ができるものですから、それで工事の発注ができる。いろいろな点で使えるわけですね。

伊藤 防衛庁は逆に、契約はしたけれど、事柄が進まず支払はできないということもあるんじゃないですか。

小田村 それは、工事が進まない場合。

伊藤 工事というか、軍艦なら軍艦を発注して――。

小田村 それはあまりないと思いますね。

伊藤 あれはどうやって支払うんですか。

小田村 軍艦はだいたい国庫債務負担行為は使わないで、継続費を使います。

伊藤 継続費というのはまた別なんですか。

小田村 別なんです。継続費は帝国憲法のとときは憲法にありましたが、削られてしまつて、長期の船を造るのに困るというので、財政法に規定したんです。それが昭和三十何年かだったと思います。継続費の場合は、継続費に計上してある金額はいつでも使えるんです。そういう便利さがあるわけです。前倒しして使うこともできるし、繰り越してもいい。

伊藤 しかしそれは大蔵省としては困るんじゃないですか。

小田村 でも総額は決まっていますから。

伊藤 総額は決まっているでしょうが、前倒しで使われてばかりだと（笑い）。

小田村 そんなに使うことはないですね。前倒しは減多にないですね。伊藤 予算というのは、予算案を見るだけでは何のことやらよくわか

らないですね。

小田村 いや、わからないように書いてあるんです（笑い）。

武田 それを聞いて少し安心したような（笑い）。

伊藤 書いている人はわかってるんだろ（笑い）。いま国会に出る予算案を先生がごらんになったら――。

小田村 最近予算書を見ていないから、わからないですね。

伊藤 本場に議員さんで、隅から隅までわかる人はいるのかしら、と思いますね。

小田村 あれではなくて、別の説明書その他でしょうね。防衛庁にいたときは、「〇〇年度防衛予算の説明」という、あの当時はガリ版だったんですが、いまは印刷物になってると思います。そういうものをつくって説明に使ってありました。そういうものがないとわからないですから。

伊藤 議員さんが一番関心があるのは個所付けの問題ですよ。

小田村 個所付けの問題は積算基礎の中に入ってしまうものですから。

伊藤 それは「説明」の中には入るんですか。

小田村 例えば先ほど申し上げた国庫債務負担行為の場合には、それもつけないとわからないんですが、通常の予算ですと、中には書いてないですね。

伊藤 例えば国道の改修とかいう場合は、どこをやるのかということ予算ではわからないですね。

小田村 予算ではわからないですね。

■法規課長 (5) 国会説明員、国立病院特別会計

伊藤 法規課長というのは、ほとんどデスクワークでございすか。

小田村 国会のときは、特別会計法とか財政法とか、そういうことがあるときには所管の法律ですから出て行きますが、その他はだいたいデスクワークですね。各省との話もちろんあります。

伊藤 議会にお出になつてゐるというのは、説明員とか、そういうことですか。

小田村 課長は説明員です。

伊藤 説明員として手を挙げることはあるんですか。

小田村 ありますが、そんなに指名されることはないですね。だいたいは次長が政府委員でした。それぞれ所管がありますからね。例えば国債整理基金は大蔵で全部やらなくてはいいませんが、学校とか病院とかいうのは、それぞれ各省がおりますから。

伊藤 主計局長がいろいろ答弁をして、自分がやらなくてはいいけないと思うときには手を挙げるんですか、それとも向こうから指名するんですか。

小田村 こちらが手を挙げます。それから主計局長は、予算委員会しか出ません。予算委員会ではもっぱら主計局長の責任なんですね。ほかの、大蔵委員会とか内閣委員会は、次長がやります。

伊藤 課長は？

小田村 課長は両方とも行かなくてはなりません。

伊藤 予算委員会の分科会はどうですか。

小田村 分科会は主計官、課長。分科会の場合は説明役は課長クラスです。

伊藤 予算委員会というのはほとんど予算が関係ない委員会ですが、分科会は――。

小田村 非常に細かくなりますね。その代わり、分科会というのはぎゅうぎゅうとつちめることにはないんです。むしろ陳情的な質問が多いんです。各省に対してもそうですね。

伊藤 要するにアドバルーンを上げておきたいということですか。

小田村 そうですね。選挙区向けの質問が多いんです。

伊藤 そうですか。議事録があるんですね。

小田村 議事録はあります。

伊藤 それを「地元」に配らなくちゃいけないんだ（笑い）。わかりました。

小田村 それからもう一つ、面白い話なんです、国立病院特別会計というのがございました。前から議論があったんですが、それまでは療養所は一般会計で、病院だけが特別会計だったんです。それで、療養所を「特別会計に」入れることにしたんです。これは厚生省の予算の関係で、そういうふうにしてもらいたいということでした。ですから、療養所の職員の給与は全部特別会計の予算に乗ったわけですが、特別会計改正法が成立しないと給料が払えないんです。

ところが療養所の組合が非常に強くて、それが「特別会計絶対反対」ということで、社会党にネジを巻きまして、審議をできるだけ遅らせていたわけです。そうすると結局給与が払われないから自分が困るわけですが、特別会計法をつぶしてしまえば今度は政府のほうに支払の義務がありますから、とにかくいじめてやろうということでした（笑い）。

それで結局、当時人事院総裁が佐藤達夫さんだったんですが、佐藤さんがたいへん困って、これは身動きがとれないということで、答弁にも困っておられました。なんとか最後に、いろいろ手を回したんでしょう。やっと社会党も採決に応じました。あれは一時、給与の支払がストップしたかもしれませんがね。成立しなければ給料を支払わないぞ、ということにして、やっと成立した、そういうことがありました。伊藤 いまも特別会計はあるんですね。

小田村 あると思いますが、みんな独立法人になるんですね。だから最近のことはよくわからないですけれども。

伊藤 けっこう議会ではいろいろなことがあるものですね。社会党の時代ですからね。

小田村 そうなんです。

伊藤 何も防衛庁に限ったことではないんですね。

■調査企画課長 (1) 大臣官房調査企画課の仕事

伊藤 それで二年後「昭和四十三年六月」に、大臣官房調査企画課長になられます。これは二年経ったからということですか。

小田村 そういうことです。

伊藤 だいたい既定のコースですか。

小田村 既定のコースですね。各局の総務課長になるか、官房の課長になるかというのがだいたいコースです。ただ、この前に局長から呼ばれて、「茨城県の副知事にならんか」という話がありました。あのときは、青鹿「明司」さんという方が大蔵省から出向して副知事になっておられたんですね。それで、二年でこちらに戻られるので、その後任にどうかということだったんです。私もいろいろ考えたんですが、単身で行っては副知事の仕事はできないだろう。家庭の事情からいって妻が家を離れるわけにはいかないし、行くとしたら単身でなければいけない。青鹿さんにも電話をして伺って、家族同伴でないと具合が悪いということだったものですから、お断わりいたしました。

伊藤 副知事というのはよく自治省から行かれますが。

小田村 ええ、自治省が中心です。

伊藤 大蔵省からも行かれるんですか。

小田村 大蔵省からも行っていたことがありまして、例えば三重県なんかはわりあいにかかったですね。それから茨城県も青鹿さんのときからですかね。青森県にも出たことがあります。あと、県の会計課長、財政課長に出たこともありますね。

伊藤 それは出向で、また戻って来るというものです。

小田村 戻ってきます。全部そうですね。副知事もそうです。

伊藤 よく、副知事から知事になる方もいらっしゃいますね。

小田村 そうですね。特に自治省の方が多いですね。

伊藤 そうですか、大蔵の方はだいたいお戻りになるんですね。

小田村 大蔵はだいたい戻るんですね。

伊藤 そういう選択肢もあったのかもしれませんが、調査企画課長というのは、これで自然の成り行きということでございますか。

小田村 そうですね。

伊藤 「調査」「企画」と二つくつついているわけですが、これはもともとそうなんですか。

小田村 もとは調査課とおったんです。私が役所に入った頃は理財局にあつて、理財局調査課といていました。それが、調査部に昇格し、昭和二十何年でしたか、官房のほうに替わりまして、官房調査部になりました。その後部を廃止して、部長の代りに財務調査官という肩書きを置くことにしました。いづれにしても実質的な部になっていたわけですね。企画課になったのは――。

伊藤 別に企画課というのがあつたわけではないんですね。

小田村 そうではありません。今まで文書課でやっていたのを、少し調査課に分けて、企画課にした。例えば財政演説の草稿は昔は全部文書課で起案していたわけですね。それを調査企画課に移したと思います。

伊藤 これは先生が初めてというわけではないんですね。

小田村 初めてではなかったですね。私の前任者のときも調査企画課でございました。林大造という方で、この人が財務審議官になりました。ですから調査部長ですね。そのまま課長から上に上がったので、私がそのあとに行ったわけですね。

伊藤 大蔵の場合、審議官というのはどういう「位置づけですか」。

小田村 審議官というのはだいたい次長クラスです。次長というのは法律上、設置法に書かなくてはいけないですね。審議官ですと「設置法に書かなくても」いいわけです。だから次長があるのは主計局と理財局だけなんですね。主税局にはないですから、審議官です。官房審議官がそれぞれの局に配置されることになるわけです。

伊藤 調査企画課というのは官房の中にあるわけですから、官房長が上司ということになりますか。

小田村 官房長が上司です。

伊藤 官房の中には、人事とかいろいろありますね。

小田村 官房は、文書課と秘書課、調査企画課、会計課、もう一つ地方課というのがありました。地方課というのは財務局の統括ですね。

伊藤 人事はどこでやるんですか。

小田村 人事は秘書課です。秘書課が全部やります。まあ、秘書課というのは人事課なんですね。

伊藤 もちろん秘書業務もやるわけでしょう。

小田村 秘書業務は秘書官がおりますから。秘書官を含めての人事は秘書課でやりますが、直接秘書業務をやるわけではないんです。

伊藤 そうですか、変な秘書課だな。

小田村 昔から秘書課とっております（笑）。

伊藤 「調査」ということと「企画」ということは、「調査企画課の」中では分かれているんですか。

小田村 分かれていません。内国調査と外国調査とございまして、外国調査が昔は調査課の主流だったんですね。だいたい外国調査というのは古い方が多くて、内国調査のほうはあまりパツとしていなかったんですが、内国調査のほうがどちらかというと企画をやるという関係になってきたと思うんですね。

これはいつごろからでしょうか、林さんの頃か、その前からかもしませんが、「天上がり」がありました。要するに銀行から出向させて手伝わせるんですね。それを始めたんです。私が行ったときも、銀行からは、富士と住友と三和と三菱も来ていたかな。それから東京銀行ですね。そういうところから若い人に来てもらいました。

伊藤 調査部のような人ですか。

小田村 普通の銀行マンですが、まあ調査ができる人ということでしょうね。そういう人はかなり戦力になっていました。これは大蔵省だけではないんです。経済企画庁なんかにはたくさんいます。通産省にもいたと思います。

伊藤 僕の学生で、普通の会社に入ったのに、いつのまにか〇〇省という名刺を持つて来たので、「これは何だ」と聞いたたら「出向だ」というので、「出向というのは、役所から役所に行くんじゃないんですか」と言ったことがあるんですね。これは、誰が給与を払うわけですか。

小田村 弁当持ちなんです。ただ超勤が非常に多かったですから、それはどうしたかな。超勤はある程度見たのかな。しかし原則として弁当持ちですね。

伊藤 じゃあ役人の数が減って、戦力をそういうところで補うということですかね。

小田村 そうですね。ああ、興銀からも来ていましたね。

伊藤 そういうものは職員録にもちゃんと出るんですか。

小田村 職員録には出ないんです。

佐道 あとからの記録だと、そういう方がいらつしやったのか、実態がわからなくなりますね。

小田村 そうでしょうね。昔はそれぞれ、例えば調査企画課でも、調査企画課のOB会がありまして、そういうのにはちゃんと入っているわけです。ところが、官庁の癒着問題から、OB会が禁止されたというわけではないんでしょうが（伊藤 自粛ですか）、自粛というのか、このごろ開いていないものですかね。しかしそれぞれの課にはあるかもしれませんね。

■調査企画課長 （2）経済企画庁、日銀との連携

伊藤 調査という場合、何を調査するんですか。

小田村 調査は、外国のほうは「調査月報」という、古くからずっとあるものがあります。

伊藤 それは外国のものですか。

小田村 だいたい外国です。内国関係は少ないです。ただ昔の「調査月報」というのは非常に貴重なもので、この前申し上げたケインズの『一般理論』などは、「調査月報」に載っていたわけです。それからドイツのインフレーションの問題なども「調査月報」に載っていたことがありました。そういう伝統があるものです。だんだん専門的になってきて、それはそれということ、当面のことには直接の役には立

たない。ということで調査企画課の一番の作業は、経済見通しなんです。

伊藤 それは経企庁と非常に関係しますね。

小田村 そうなんです。経済企画庁が政府としての経済見通しをつくりませんが、その大蔵省側の窓口が調査企画課なんです。

伊藤 両方ですり合わせるわけですか。

小田村 突き合わせるわけです。調査企画課としては、いろいろデータを取りまして、それをもとにして、年に何回ぐらいつくりましたか、二、三回見通しを立てるんです。これはGNP（国民総生産）の見通しと、国際収支の見通しと、財政の見通しがありました。税収と支出ですね。この見通しをつくりまして、官房長のところで見ていただいて、それから次官に報告して、省議でも報告したと思います。これをもとにして、大蔵省として政策を立案するということになります。

伊藤 それは速報で出すものですか。

小田村 これは全部、部内資料ですから、外に出さないんです。

伊藤 何か速報的なものは——。

小田村 速報的なものは単なる統計です。それは毎月一枚紙にして配っておりました。

伊藤 それも調査企画課ですか。

小田村 はい、調査企画課でやります。

伊藤 よく新聞で大蔵省の速報で云々という数字が出て来ますね。

小田村 その大蔵省の速報というのは、例えば国際収支などは日銀と一緒につくるわけですが、これはいまでもいうと国際局ですね。それから企業統計は理財局でしたかね。それぞれの現局でそういう統計は出すわけです。

伊藤 日銀との連携は——。

小田村 日銀とはしょっちゅう連携します。ですから毎月、日銀とは昼食会をやっています。向こうの調査局長は、私が課長になったときは吉野俊彦さんでしたか。次長は呉文二さんという方で、課長は石川通達さんで非常によくできる方でした。局長は出て来ませんが、次長

以下と昼食会をやりまして、いろいろ雑談をして情報交換してしました。それから毎年見通しをつくりましますので、その時には企画庁と交渉するわけです。

伊藤 それはこの課ですか。

小田村 はい、この課でやります。

伊藤 翌年度の見通しというのは財政見通しで、財政を組むときの基礎になりますね。それがどうなるかということは非常に大きな問題ですが、うまく経企庁とのあいだで調整がつくんですか。

小田村 それは見通しですからね。

伊藤 見通しですが、政治がある程度反映しませんか。

小田村 それがあるわけです。一番問題なのは経済の見通しに依じて税収見通しが変わってきますので、そこところが微妙なんですすが、私どものときは成長一本のときでしたから、それほど大きな違いはなかったんですね。

伊藤 実際はだいたい見通しよりも上に行くということですね。

小田村 そうです。それから企画庁でつくる「経済白書」ですが、あれも大蔵省側の窓口は調査企画課です。

伊藤 あれも調整するわけですか。

小田村 調整するわけです。各局に配りまして、各局の意見をもらって、企画庁のほうと調整します。

伊藤 経企庁は大蔵省とだけやっているわけではないんですね。

小田村 各省とやっています。それから経済審議会というのがございまして、ここで経済計画をやりましますから、それとの窓口も調査企画課になるわけです。

伊藤 そうするとかなり忙しいお仕事ではあるわけですね。

小田村 結構忙しかったですね。大蔵省では、主計局は予算をもっているものですから、超勤が多いんですよ。たっぷりついています。調査企画課は、昔の調査課時代は非常に静かな課で、あまりそういうことがなかったんですが、調査企画課になってからは夜勤が非常に多かったですね。国会質問なんかは各局同じですが、質問が出て来ますの

で、夜ずいぶん遅くなりました。超勤を会計課から取るのも課長の一つの仕事だったんです。

伊藤 超勤はいいですが、体がもたないですね。

小田村 そうですね。それはどこの課も同じでしょうね。

伊藤 同じですかね。役所の中でも部署によって違うと思いますけれども。

小田村 昔は静かな課だったんですが、調査企画課になってからはそういう点では忙しくなりました。

伊藤 僕らがこのへんで夜遅く飲んで帰ると、「大蔵省には」煌々と電気がついていきますからね。特に年の暮れとかはそうですね。

小田村 そうですね。

伊藤 企画ということの意味は、大蔵省全体の政策に関わるということですか。

小田村 大蔵省全体ですね。

伊藤 すると各局などと調整が必要ですね。

小田村 各局との調整もございしますが、それはそれぞれ各局がやっておりますので、直接ということは比較的少ない。見通しは各局に全部渡しますが、むしろ次官、官房長に対する政策判断の資料という面が大きかったと思いますね。

■調査企画課長 (3) 円切り上げの研究

小田村 林さんは私の高等学校の一年上の人で、私が役所に入るときに相談した人なんですすが、ドイツに駐在しておりました。ドイツはマルクが非常に強くて、マルクの切り上げをやったんですね。そのマルクの問題もあって、当時「日本の」国際収支も非常に好調で、成長率も高いということから、為替をいじらないといけないんじゃないかというところで、円切り上げ論というのがかなり強くなりました。表面的には大蔵省は反対していたんですが、裏で勉強しなくてはいけないと

いうことで、林さんが「アルファ作業」という名前をつけて、円も現状のままではいけないから、少し上下帯を広げるとかなんらかの切り上げのなことを考える必要があるということで作業をやったことがあるんです。これは次官、官房長止まり、ということだったんですけれど、それは大変勉強になったと思います。

このとき次官は澄田「智」さんですね。大臣は福田さんでした。官房長が近藤道生さんで、博報堂の社長になりました。

林さんという人はわりあい子供っぽいところがありまして、これで大臣まで行くんだというふうなつもりだったらしいんです。僕は、それはちよつとおかしい、だいたいの為替の問題は、所管は為替局だから、官房がそこまで口を出しちゃいかん、という気持ちがあったので、それには適宜おつき合いをしていた程度だったんですけれどね。これは一つの勉強になりましたし、澄田さんも大変喜んでおられましたね。

伊藤 その話をするときには為替局の人は入っていないんですか。

小田村 入っていないんです、全然。だからそれはおかしい。もし本当に実行するんだったら、当然責任者は為替局ですから。

伊藤 じゃあこれは勉強会みたいなものですね。

小田村 次官も官房長も勉強会のつもりだったんです。ところが林さんが一人で張り切っちゃったわけです。そういうことがありました。伊藤 でもこのとき、円を切り上げることには、外からのプレッシャーもずいぶんあったわけでしょう。

小田村 そうですね。学者の先生方はそういう意見が強かったですね。ただ当時、延べ払い輸出等で契約している会社がたくさんありますから、政府がそれをやると、その補償措置の問題が出てくる。だからこれはよほど慎重にやらないといけない、ということを私は考えていました。

伊藤 だけどまだ固定相場場で考えているわけでしょう。

小田村 固定相場場で考えていました。だからブロードバンドにして、もう少し上下帯を広げようというところがせいぜいだったんだろうと思うんですけれど。

伊藤 「ドル」三六〇円のときに、上下はあったんですか。

小田村 上下一%でしたかね。それをもうちよつと広げる方がいいんじゃないかという話だったと思います。

伊藤 三六〇円ですものね。いまは――。

佐道 一〇八円とかいっていますからね（笑）。

伊藤 一時そういうことがありましたけれど、また再現するとは思いませんでした。何の要因で上がっているのかさっぱりわからないですね。私は経済はわかりませんが、いまの状態の中で、なんで円が上がるのか。

佐道 いまのお話は六八、六九年ですから、あと数年で「変動相場制」になってしまいうわけですね。

伊藤 あれは驚きだったと思いますね。

■調査企画課長 (4) 福田蔵相「財政演説」原稿

伊藤 大蔵大臣の財政演説の草稿もここで書かれるということでしたが、そうするとこれは各局から集めるわけですか。

小田村 各局から財政演説に盛りたい希望はもらっておきます。ただ、総体の考え方というのはなかなか一方的に決めることはできませんから、次官、官房長にも相談するんです。このときは大臣が福田さんでしたから、福田大臣にお伺いを立てたわけです。福田さんはそういうことに詳しい方ですから、「こういうことを盛り込みたいんだ」と自分で言われました。

伊藤 それは基本的な考え方ですか。

小田村 基本的な考え方です。福田さんが言われたのは、「いま非常に成長率が高い。それは結構なんだけれど、量的に走りすぎているのではないか。『質的成長』ということを言いたい。『質的成長』という言葉を使っても問題はないか」ということでした。「質的成長」というのは大変結構ではないかということで、このときの財政演説には、

質的成長に努めようということを骨組みとして入れることにしました。そういうことが大臣からご指示があると非常に演説が書きやすくなりますね。

伊藤 「質的成長」ということは、物を生産する場合でも、より付加価値の高いものをつくれということなんですか。

小田村 そういう意味もあるんですが、例えば環境問題ですね。環境がかなり悪くなっておりますから、それを防ぎたい。環境に対して優れた、生活のしやすいものですね。

伊藤 公害が少しずつ出て来ているんですね。

小田村 公害がだんだん激しくなってきたんですね。

伊藤 あとで公害が産業になる。あの時代に、そういうことが起こるとはついぞ思いませんでしたけれど、公害で儲かる。いま外国にどんな出していますからね。

小田村 福田さんは円の切り上げには反対だったと思います。大臣は挙げていませんけれど。大臣は戦前から、戦後ずっと経済を見ておられましたから。ロンドンにも駐在しておられましたし、国際収支には非常に敏感だったんですね。だから輸出を抑制するようなことは好ましくないと考えていたと思います。一回、輸出が伸びすぎて困るということに近いような原稿を出したところが、「輸出を抑えるようなことを書くな」と言われました。天皇陛下に内奏するときでしたかね。

伊藤 もうこのころになつてくると、そろそろ貿易摩擦もいわれてきていますね。

小田村 言われていますね。でもやっぱり輸出は重要だというお考えでしたね。

伊藤 そうですね、福田さんあたりの世代だと、外貨の壁みたいなものが念頭にあるんでしょうね。

小田村 そうですね。

武田 「質的成長」という言葉は、安定成長ということとは違うんでしょうか。

小田村 安定成長というと、成長率を少し抑えるような感じがします

ね。福田さんは物価に厳しかった方ですが、生活の中味とか環境問題を重視した成長という意味だったと思います。

佐道 福田さんは、その前の池田内閣のときの高度経済成長を「昭和元祿」と言ったり、ただ成長すればいいものではないんだ、ということと言っているんですが、それが背景にあるんですね。

小田村 ええ、それが背景にあるんですね。そうだと、それで一つ申し落としたんですが、文部を担当しているときに、国立大学の授業料が、たしか一万二千円だったと思いますが、ずつと据え置きになっていたんです。これがこのままではどうにもならないし、上げたいと思つて、文部省とも話をして、文部省も了承したんですね。ところが、大臣のところを持つていったら駄目だということですね。あのとき企画庁長官は三木さんだったかと記憶しますが、その企画庁長官のことを配慮されたということもあったようですけれど、福田さんも公共料金の引き上げには反対だったんですね。それで授業料「値上げ」がどうしても通りませんでした。

伊藤 国立大学の授業料と、私立大学の授業料の格差がものすごく大きかったんですね。いまだいぶ正されていますけれど。

小田村 いまはだいぶ変わってきましたね。

伊藤 じゃあ、福田さんに対しては、省内では非常に――。

小田村 そうですね、だいたい信服しておったんですが、このときは、角福対立というのがありまして、角さんの意見に対しては、内容の如何を問わず対立されるということがあったようですね。私は経験しておりませんが、省内ではそういうことから、「もう少し度量を広くしてもいいんじゃないか」と言っていた人もありました。

伊藤 さつきの為替相場の問題ですが、そういう問題についてもかなり前からの意見を固持されるということで、少し変えていった方がいいんじゃないかという意見も省内にはあったんじゃないでしょうか。

小田村 省内では林さんはそうですが、どうでしょうか。あのときは財務官は柏木「雄介」さんになっていましたか、為替局の意見は、切り上げについては反対だったと思いますね。一つには、切り上げとい

つても、切り上げの基準がないんですね。いくらにしたらいいか。また、それをするための根拠をどうするかということも、相当練らないといけません。さつき申し上げた補償の問題もありますからね。

伊藤 いま「中国の人民」元の問題が出ていますが、あれもなかなか大変な問題ですね。しかしいくつかの国が切り上げをしているわけですね。もともと、切り下げもありますが。

小田村 それまでは切り下げが中心だったんですね。切り上げたのはマルクぐらいだったんです。

伊藤 マルクは強かったんですね。円は非常に弱いというイメージがあるんですね。

小田村 あるんですね。

佐道 為替局はどちらかというと反対だったということですが、大蔵省全体として為替の問題を取り上げるのはまだ早いという雰囲気だったんですか。

小田村 そうですね。でも世間では円の切り上げ論がずいぶん強かったですから、そういう風潮が一般的になりましたね。将来、具体的にどうするかというところまでは行っていないかと思えますね。

伊藤 さつきおっしゃっていたように、円の切り上げをすれば、延べ払いその他に影響がある。逆にこのまま置いておいた場合、デメリットになるということが強くあったんでしょうか。

小田村 デメリットは――。

伊藤 輸入するものは高くなりますね。そうすると、日本が一番たくさん輸入している石油、食料といったものが高くなる。

小田村 そうですね。国内価格は高くなりますね。

伊藤 切り上げの圧力は外からもあったんですね。

小田村 切り上げの圧力はそんなになかったです。

伊藤 そうすると、中もそんなにないですね。輸入業者ぐらいですね。

小田村 学界とマスコミ界ぐらいだったんじゃないですかね。

伊藤 何か利害があるのかな。

小田村 切り上げる方が競争力がついていいんだ、ということですか

ね。

伊藤 そういうことですか。今のままで安住してはまずい、ということですね。

小田村 いけない、ということですね。

伊藤 福田さんの事務所はたしか赤坂プリンスでございましたね。

小田村 ええ、赤プリです。

伊藤 ああいうところにちよつと来い、と言われることはなかったんですか。

小田村 それはありませんでした。全部大臣室です。

■調査企画課長（5）経団連東欧視察団同行

伊藤 そろそろ時間ですので切り上げたいと思いますが、「質問項目の」10番の話「先生は調査企画課長時代、一九六九（昭和四十四）年に経団連の東欧視察団と共に東欧と、七〇（昭和四十五）年にはバンコクで開催されたエカフェ総会に出席された機会に東南アジアを回られたということですか。当時の東欧および東南アジアの印象をお聞かせください」は一〇分とか一五分でお話しできますでしょうか。そうするとちょうど、名古屋の国税局長に行かれる前までできますので。

小田村 はい、わかりました。私が外国に行ったのはIMFの会議で行っただけで、あとヨーロッパには行っておりませんでした。ちょうど、経団連の会長の植村甲午郎さんが団長で東ヨーロッパを視察するから、大蔵省からもどうかという話がありまして、林さんから「おまえどうだ」といわれたものですから、「それはぜひ連れていっていただきたい」ということで、ヨーロッパに行きました。

伊藤 これは東欧視察団ということですが、なんで東欧なんですか。このときはまだ――。

小田村 このときまだ共産圏ですが、だいぶ貿易関係が進んできたと思うんですね。このとき行きましたのが、初めドイツに行って、それ

からチェコに行つて、ユーゴスラビア、ブルガリア、ルーマニアでした。

伊藤 そうすると、ハンガリーとかポーランドは――。

小田村 ハンガリー、ポーランドは行きませんでした。それからオーストリアにも寄りませんでした。このときユーゴは、曾野明さんが大使をしておられたときですね。まだチトー大統領が健在のときでしたから、共産圏の話をいろいろされましたね。まだ経済はだいぶ遅れているな、という感じでした。

それからブルガリアも大変面白い国ですが、これもそうですね。大きなレーニンの絵が描いてあつて、大変なものだな、と思いました。ブルガリアもユーゴもそうですが、夕方になるとぞろぞろ「人が現われて」街が膨れてくるんですね。モスクワもそうだったらしいんですが、やることがないものですから夕方になると散歩に出かける。それが街の夕方の風習になっていたらしいんですね。ブルガリアはもっと遅れていました。ルーマニアはもうちょっと開明的でしたね。

伊藤 ルーマニアのほうがよくつたんですね。

小田村 ええ、まだチャウシエスクですけれどね。ブルガリアというのは土着なんです、ルーマニアというのはローマ系なんです。イタリア系なんですかね。

伊藤 ラテン系であることは間違いないですね。

小田村 ルーマニアもチェコもそうなんです、かなりドイツの影響が大きいんですね。

伊藤 東ドイツのことですか。

小田村 ドイツ一般ですね。オーストリアを含めてそうかもしれないんですが、わりあいドイツ語が通用するようでした。これはちよつと面白かったですね。

伊藤 ドイツの経済圏ですね。

小田村 ドイツの経済圏ですね。チェコは、前年に「プラハの春」があつて、まだその時の記憶がたいへん強く残っていました。東京銀行の堀江「薫雄」さんも一緒にいたんですが、チェコの方が一晩呼んで

くれて、「チェコは何も悪いことをしていないんだ。悪いことをしていないのに、ソ連にいじめられた」ということで非常に憤慨していました。銃弾の跡が城壁に残っておりました。

伊藤 チェコというのは昔は精密機械「が有名」ですね。

小田村 それでチェコの工場を見せてもらつたんですね。三菱重工から、守屋「学治」さんという重役の方が一緒におられました。機械をごらんになって、「本当に羨ましい」というんです。「こんな高級な機械があるのは羨ましく感じた」という。ところが、その機械は動いていないんですよ（笑い）。要するに、工作機械は立派なものがあるけれど、稼働率が非常に低かった。ちよつと羨ましかったと三菱重工が言うんだつたら、日本の工業もまだまだ成長する余裕があるなという感じを受けましたね。びっくりしました。

伊藤 まだ昭和四十四年ですからね。やつぱり行かれたところの中ではどこが一番経済的にはいいな、とお感じになりましたか。

小田村 経済的にはチェコでしょう。

伊藤 やはり伝統があるんですね。

小田村 伝統がある国ですね。プラハもきれいな街ですし。

伊藤 ちよつと西欧風な感じなんでしょうね。

小田村 そうですね。

伊藤 ドイツはただ通過しただけですか。

小田村 ドイツは通過しただけです。ボンで大使館にお世話になりました。ボンの大使館には寄っていませんでした。吉岡（一郎）さんが参事官でしたか。歓迎してくださいましたけれどね。

伊藤 これは何日ぐらいいらしてたんですか。

小田村 全部で二週間ぐらいでしたか、私はあとでイタリアに寄ったんです。ローマにちよつと寄りました。パリにOECDの会議がございまして、それに出てくれと言われました。そうしたら、ボンにも寄ったかな。ローマに寄つて、それからボンに行きまして、大蔵から行つていた安原（正）君にボンでドイツの経済の話を聞いて、それからパリに寄つたと思いますね。パリでOECDの会議に出まして、パリ

から帰ったと思います。だから全部で二週間ぐらいになったと思います。

伊藤 OECDの会議というのは何ですか。

小田村 何だったかな、ちよつと私も記憶してないんですが、経済見通しのことだったかも知れませんが、ちよつと忘れしました。

伊藤 思い出されたら、この次にでも触れてください。

小田村 まあ、そう大きな問題のある会議ではありませんでした。昼飯を日本料理屋で食べました。そうすると簡単なんです。パリは料理屋に行くと昼飯が長いですから。日本料理屋だとすぐ終わりますから、そこで打ち合わせができるわけです。

■調査企画課長 (6) E C A F E総会出席

伊藤 次の年には、バンコクでE C A F E「国連アジア極東経済委員会 (Economic Commission for Asia and Far East)」の総会に行かれますね。

小田村 ええ、E C A F Eです。東南アジアには行っていないものから、E C A F Eの総会がバンコクでございまして――。

伊藤 これは何か大きな問題がございましたか。

小田村 これもそう大きな問題はございません。たしか朝海「浩一郎」さんが団長だったと思います。大蔵省からは私が行きまして、毎日、アジェンダというんですか、ペーパーがたくさん出まして、それについて検討して、日本の態度を話す。朝海さんは何でもご存知でしたから、ほとんどお一人でやっておられたと思います。

E C A F Eに行く途中で、台湾に一度も行ったことがなかったので、本当はよくないんですが、一晩早めに行かせてもらって、台湾で一晩泊まってきました。

伊藤 いいんですか。

小田村 許可を得て、ですね。

佐道 まだ大丈夫です、このころは国交がありますから。

小田村 まだ大使館があったときですから。そういう意味では構わないわけです。大蔵省からは「中華民国大使館に人が」行っていないなかったので、濃野「滋」君という通産省から来ていた人――次官になりましたけれど――に案内してもらいまして、台北をちよつと見せてもらいました。私の祖父が学務部員として戦死した芝山巖と故宮博物院を案内してもらいました。

伊藤 台北からバンコクですか。

小田村 そうですね。台北からバンコクに行ったわけです。

伊藤 会議は何かかかるとですか。

小田村 会議は一週間ぐらいだったと思います。

伊藤 そんなにあるんですか。

小田村 ええ。ただ、日曜を挟んでいました。日曜日に、タイの大使館駐在の大蔵省の人や、バンコクのJ E T R Oに大蔵省の調査企画課のベテランの人が行っていましたので、そういう人に世話をしてもらって、アユタヤの遺跡を見せてもらいました。アユタヤには、私の府立高校時代の恩師・東恩納寛淳先生が昭和初年に実地測量をした解説板が立っていて大変懐かしかったです。それからもう一回日曜日があつたのかな、その時はマレーシアとシンガポールにちよつと行ってきました。マレーシアは前の年に例の騒動がありました。あのときはマハティールの前だったかな。華僑がやられたときですね。

伊藤 華僑とマレー人のあいだの対立ですね。

小田村 ええ、政府がそれを弾圧しまして、その痕跡がまだ残っていました。

伊藤 たしか、マレー人優先政策をやっているんですね。

小田村 そうですね、それを始めたときですね。シンガポールは奈良「靖彦」さんが大使でしたかね。

伊藤 このときはシンガポールは相当成長していましたか。

小田村 成長していました。きれいになっていました。帰りにインドネシアに回らせてもらって、インドネシアから帰ってきました。

伊藤 インドネシアは少しお回りになったんですか。

小田村 インドネシアではあまり時間が過ぎませんでしたので、昼間に、ジャカルタから避暑地まで行ってもらいました。

伊藤 もうそろそろ、そのころはそれらの地域に日本の企業が出て行っていましたか。

小田村 ずいぶん出て行っていました。インドネシアはスカルノが倒れてスハルトになっていった時代です。ですから、スカルノのときにくりかけたビルがまだ裸のまま残っていたりして、面白かったですね、輪タクというんですか。ペチャというんですか、あれが全盛のころでした。それから百貨店があるんです。百貨店にエスカレーターがありまして、エスカレーターで子供が昇ったり降りたりして遊んでいたんです。しかしインドネシアで養ましかつたのは、子供が多かったことです。日本はそのころから少子時代になっていましたから。

伊藤 そろそろですね。しかしインドネシアはその人口圧力でいま大変じゃないですか（笑い）。

小田村 大変は大変ですけどもね。

伊藤 いま日本の倍ぐらいかな。

小田村 二億ぐらいですから、倍までは行っていないと思いますけれどもね。

伊藤 あんたたくさんさんの島にそんなに住んでいるんですから、統治するのが大変だと思いますね。

佐道 家の中にじっとしていませんからね（笑い）。一九七〇年という年ですが、ベトナム戦争の影とか影響は、東南アジアにはございませんでしたか。

小田村 ベトナム戦争の影は、あまり残っていないかと思うんですが、台湾の影がかなり薄くなっていました。バンコクでの台湾（中華民国）のスピーチは、もっぱら「中共（大陸）の文革で経済が何十年も遅れた。非常に悲惨な状況だ」という演説だったんですね。各国が毎日パーティを開くんです。他の国のパーティにはかなりたくさん

「の国から人が」出てくるんですが、台湾のパーティのときは出席者

が少なかったですね。ということ、あれは誰だったか、外務省の人でしたか、「やっぱり台湾の影は薄いな」と言っていましたね。だから、文革で痛めつけられていながら、中共の存在が国際的には大きくなってきていたんですね。

伊藤 東南アジアの地域はだいたい華僑が経済を押さえているわけですが、華僑の連中は大陸のほうを見ていたということですかね。

小田村 そうかもしれませんね。

伊藤 そうですか、そういう観察ですか。このときはフィリピンは――。

小田村 フィリピンは行きませんでした。フィリピンはちょっと治安が悪いという話を聞いていましたので、時間的なこともありますし、やめました。

それから行く前に、澄田次官に呼ばれて、「実はおまえは、今度の名古屋に行かせる」と言われました。

伊藤 もうその時に言われていたんですか。

小田村 ええ。「しかし帰ってすぐに発令ではびっくりするだろうから、行く前に言っておく」という話でした。だから「東南アジアに行ったのが昭和四十五年の」四月から五月にかけてだったと思うんですが、発令になったのは五月九日で、帰ってすぐ、ということだったと思います。

伊藤 そうですか。妙なことです。では時間がだいぶ過ぎましたが、キリがきましたので、このへんにしたいと思います。

これからいろいろございまして、内閣審議室長などについてもいろいろ伺いしたいところですが、それから防衛庁ですね。

小田村 防衛庁はちょっと大変だと思います。

伊藤 ここが一つのヤマだと思えますので、この次はそこまでかかるぐらいのところまで行ければと思っておりますので、ひとつよろしくお願いいたします。今日は本当にありがとうございました。

（以上）

小田村 四郎

オーラルヒストリー

第 9 回

名古屋国税局長～内閣審議室長（1970～1972）

【2003年11月10日（月）14:00～16:00】

（於：政策研究プロジェクトセンター）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

記録・編集：丹羽 清隆

第9回質問項目

1. 先生は1970（昭和45）年5月、名古屋国税局長に就任されます。就任の経緯等お願いします。また、国税局長の業務などについてもお願いします。
2. 先生が名古屋国税局長時代、税務機構の大改革があり、先生は国税局長としてそれに対応されたとのことですが、改革の内容や先生がご苦勞された点などお願いします。
3. 1971（昭和46）年8月、内閣官房内閣審議室長に就任されます。就任の経緯や内閣審議室の業務等についてお願いします。また、審議室長は、官房長官と総務長官の両方に仕えるということですが、それはどうしてそうなっているのでしょうか。
4. 上の質問に関連しますが、当時官房長官は竹下登氏、総務長官は山中貞則氏でした。それについてどのような印象をお持ちですか。
5. 内閣審議室長時代で、特に印象に残っておられる問題はございますか。
6. 先生の内閣審議室長時代は、長く続いた佐藤政権の、いわば末期にあたり、後継問題が取りざたされるとともに内閣の求心力は急速に低下したと言われています。内閣官房の中におられて、なにかお感じになったことはございますか。
7. 先生は1972年6月、防衛庁経理局長に就任されます。田代前局長が官房長に就任された後任ですが、就任の経緯等お願いします。また、先生が防衛庁を離れられてから十年以上経ったわけですが、もどられて防衛庁内の変化など、何かお感じになったことはございますか。
8. 先生が防衛庁に移られてすぐ、長く続いた佐藤政権が終わり、田中角栄氏が総理となりました。田中政権は当初、大変な話題・人気で登場したわけですが、佐藤政権の終焉と田中内閣の誕生、福田氏との対立など、当時どのように見ておられましたか。

9. 先生が経理局長に就任されたのは、4次防の策定が大詰めになった時期でした。2月に4次防の大綱が先に決まっており、10月9日に「主要項目」が国防会議・閣議で決定されました。先生が移られた時期での4次防の策定状況についてお願いします。
10. 10月9日には、「文民統制の強化に関する措置」も国防会議・閣議で決定されました。これは沖縄返還にともなって、予算の先取りが問題とされたものですが、予算ですから経理局も関係していたと思います。この問題についてご記憶の点をお願いします。
11. 4次防策定の紛糾から、田中首相は防衛力増強を4次防で打ち止めにしようとし、「平和時の防衛力」構想策定に踏み切ります。実際は、久保卓也防衛局長がこれにあたるわけですが、この「平和時の防衛力」は一度発表されましたが、野党の反対により現実化しませんでした。先生はこの「平和時の防衛力」構想について当時どのように考えておられましたか。
12. 上の質問にもある久保氏は、その後「基盤的防衛力構想」を考案し、それを土台に「防衛計画の大綱」を作成しました。久保氏および「基盤的防衛力構想」「防衛計画の大綱」について、当時どのように見ておられましたか。
13. 1973年5月、山中貞則氏が防衛庁長官に就任されます。内閣審議室時代以来ですが、防衛庁長官としての山中氏についてのご印象などをお願いします。
14. 1973年10月、石油ショックがあり、日本も低成長時代に入るとともに、防衛予算も削減を迫られます。石油ショック後の防衛費問題についてお願いします。

※今回は以上のような問題を中心をお願いします。

■「補」大蔵省百周年 (1) 百周年記念講演

伊藤 それでは始めさせていただきます。前回、名古屋の国税局長になりますよ、ということでお出かけになったというところでお話が終わりました。今日は国税局長のところからお話を伺うことになりませんが、名古屋の話は、前の名古屋時代のときにもちよつとお伺いしたところがありますね。

小田村 直税部長をしておりましたからね。

伊藤 それで、また後で来ることになった。そのときは自分が多少希望したとおつしやつたように思うんですが。

小田村 そうですね。今度出すときはまた名古屋に行かせてくれ、と言いました(笑い)。

佐道 名古屋というのはいいところだったんですか。

小田村 いいところでした。非常に暮らしやすいところでした。

ちよつとその前に、調査企画課長時代のことで、大事なことを忘れていたものですから、追加をしたいと思います。

一つは、大したことではないんですが、福田さんの財政演説のことです。福田さんという方の性格が出ているのかもしれませんが、言い回し、格調を非常に丹念に吟味する方なんです。それで、私がつくった原稿にまず最初に手を入れられるわけです。それでまたタイプを打ち直して、お届けしますと、また手を入れられる。自分で読んで、読みながら手を入れられるんですね。しかしまあこれでよからうということ、全部印刷をいたしまして、国会、衆参両院に配ったわけですね。

ところが財政演説の前日に、またお宅に帰られて、手を入れたんですね。それで、ずっと続いているところを途中で切つて、また言葉を入れて続けるとか、いろいろやられたんです。だから内容的には全く変わらないんですが、議員さんが字を見ていて、どうもこれは違う、配り直すべきではないか、という声がちよつと上がったという話があ

ります。

伊藤 「書かれたものと演説とは」同じでないといけないものなんです。

小田村 いや、そういうことはないと思います。思いますが、あまり違いすぎても(笑い)。それぐらい、自分の演説については、言い回しや格調を大事にされる方だったんですね。

それから大事なことで申ししたのは、昭和四十四年が大蔵省の百周年だったんです。官房各課で手分けをいたしまして、例えば会計課は環境の整備とか、文書課は諸々の展示とか、そういうことを手分けしてやつておりました。それで記念講演と『百年史』の編纂を調査企画課でやつたんですね。記念講演のほうは、三島由紀夫と高橋亀吉さんにお願したんです。

三島さんはその前の年に「楯の会」を結成いたしましたして、国立劇場の屋上で発会式をやったんですね。閲兵と行進です。そのときに、できれば自衛隊の音楽隊を入れてもらいたいという話を私は伊沢「甲子鷹」さんから聞いたんですね。当時防衛庁の広報課長は伊藤圭一君がやつておつたものですから、伊藤君に電話をしまして、「ひとつこれ応援してくれ」という話をしたんです。たしか出てもらえたと思うんです。そんなことで、その頃から三島さんともつき合いができました。三島さんが百周年で講演に来たときには「講演の前に秘書課長室でお話をしました」。安川七郎さんは学習院で三島さんの先輩なんです。七年か八年違うかな。ただ安川さんは長い間病気をしていましたから、遅れて、入省は昭和二十年だったんですが、当時は保険部長でした。三島さんの同期生が私の一期下で、長岡実君なんですね。長岡君が秘書課長をやっていたものですから、秘書課長室に集まりまして和やかに話して、三島さんも大変喜びました。それから講演をしてもらったんです。

講演の内容ですが、ちよつどその年の春に、「三島さんは」東大の全共闘と討論集会をやったんですね。その話をされました。その前に、「自分が入ったときはインフレの真っ最中で、大内兵衛が戦時補償を

全部切れと言っておったときであつた、しかしすっかり情勢が変わつてしまつた」という話をされました。それで全共闘との話がたいへん面白かつたのは、パリの解放広場（伊藤 カルチェ・ラタン）、ええ、カルチェ・ラタンの話を学生のほうがしたんですね。それで三島さんは、「わかつた、それはしかし横の話だろう、縦の話があるじゃないか。長い歴史の伝統をどういうふうに考えるのか、それを断ち切つてはいけないんだ」ということを主眼にして討論をされたという話で、たいへん面白いものでした。高橋さんの話も大変面白かつたんですが、そんなことで喜ばれました。

伊藤 これは先生が人選などのご担当だったんですか。

小田村 人選は、最終的には官房長のところで決めたと思うんです。文書課長と相談してやつたと思うんです。文書課長が吉瀬維哉さんですね。

■「補」大蔵省百周年（2）『百年史』編集

小田村 それはそれで一つの事業として終わつたんですが、もう一つございましたのが『百年史』なんです。『百年史』は調査企画課の担当だったわけです。ここに担当が書いてございます「『百年史』のコーピーを示す」。

伊藤 ああ、大森とく子さん、山村勝郎さん、

小田村 西村（紀三郎）さんもありますね。川上（秀正）さんというのがベテランだったんですが、この人の原稿ができませんで、寸前になつて駄目だということがわかりまして、大あわてになつて、結局ほかの大森、山村、西村の三人が加勢いたしまして、なんとかまとめたという経緯があるんです。

伊藤 この『百年史』と『財政史』との関係はどういうふうになるんですか。

小田村 財政史は正規の財政史で、『明治財政史』と『明治大正財政

史』がございます。それから『昭和財政史』というのが戦後できたわけです。この財政史は大蔵省の正史になるわけです。『百年史』は、それを概観するということで、むしろそれをコンパクトにしたものと考えていただいいていいかと思ひます。

一つ問題がございましたのは、戦争の呼称なんです。これは私が強く主張したんですが、「民間で一般に出ている分にはどんな名前を使おうと構わないけれど、いやしくも政府の発行物であれば、当然正規の名称を使用すべきである。したがって、支那事変は支那事変、大東亜戦争は大東亜戦争と書かなくてはいかん」ということを強く主張したんです。ところがこれは文書課が反対したのかな、若い方だと思いますが。それで調整ができませんで、結局谷村「裕」さんが編集顧問でいろいろな面で采配していただいていたものですから、谷村さんに裁定をお願いいたしました。結局、「文部省が検定している教科書でも一般的な名称を使っているから、それにしよう」と谷村さんが決められたものですから、それならしょうがないということでした。

例言の一番下に書いてありますね。「この百年間に起こつた戦争、戦役、事変、事件等については、今日一般に用いられている呼称を採用することとし、公式の呼称である大東亜戦争、支那事変も通例に従つてそれぞれ太平洋戦争、日華事変とした」と注をつけるということで妥協したわけです。ところが、「百年史」が校了してから大臣に序文をお願いしました。その序文で福田大臣が「遂には大東亜戦争の敗戦という未曾有の破局的事態に直面いたしました」と書いて堂々と「大東亜戦争」を使われたのです。大臣の直筆ですから誰も異議を挟む者はなく、私もホッとして溜飲を下げたわけです。

伊藤 『日本海軍史』の場合も、谷村さんの裁定で同じようなことになつています。

小田村 じゃあ、谷村さんがそういうふうにされたんですね。まあ海軍の場合は、もともと太平洋戦争という案を出したことがありましたからね。

伊藤 そうなんです、自分たちがそれを主張していたということが一

つの理由になっていました。

小田村 それからもう一つ、文章の中で、谷村さんがザッと百年史の概観を背景を含めて書かれたんですが、その原稿を書いた調査企画課の沢口君だったか、それを少し手入れして谷村さんにお届けしたんですね。その中に原子爆弾のことがあるんです。私は、「多くの無辜の人間を殺傷した非人道的な行為だ」ということをちよつと入れておいたんです。そうしたら文書課の若いところからクレームがつきまして、「いやだ」というんですね。「なんだ」と言ったら、結局対米関係なんだそうです。

なんでそんなことに気を遣うのかと思っただけなんですけれどね。それは終戦の詔書にも「残虐ナル爆弾ヲ使用シテ」頻ニ無辜ヲ殺傷シ」とありますから、なんでもないじゃないか、当たり前のことじゃないかと言っただけですが、そういう意見がありまして、私はちよつとびつくりしました。これは『百年史』の本質的な話ではありませんから、ソ連参戦と原爆投下ということだけにいたしました。一応そういうことで収まったということです。そういう事情がございました。それがだいたいの百年事業の関係ですね。

伊藤 この百年事業全体の統括はどこがやったわけですか。

小田村 統括は官房長です。この『百年史』が終わった後、今度は

『戦後財政史』をつくらなければいけないということで、どうしようかということになって、林「大造」審議官とも相談したんですが、これはいろいろ意見がありました。というのは、『明治財政史』と『明治大正財政史』は非常に文献に忠実に書いてあるんですが、『昭和財政史』は全部大内さんのグループに丸投げしたんですね。ですから資料はいっぱいあったんですが、それを必ずしも全部活用してもらっていない。ご本人の主観による部分が非常に多いので、これはもう一回作り直した方がいいんじゃないかという意見もあったようなんです。しかしそれは、『昭和財政史』ができてからそんなに時間も経っていませんし、書く人もやりにくいわけですし、書く能力がどれだけあるか、ということにもなります。

ですから『戦後財政史』はとりあえず占領期間というのを書くということになりましたが、林さんが、「これを調査企画課でやるのはちよつと荷が重すぎる。これは外部の専門家に任せたいと思う」ということで、当時まだ大蔵省の官房にいた秦郁彦君に編集のプランニングをやってくれ、ということでも頼んだわけです。秦は喜んで引き受けてくれました。『戦後財政史』はわりによくできていると思います。秦君もそのためにわざわざアメリカに行って調査をしたりしていました。ただ、秦が専横だということ、あとで議論になったらいいですね（笑い）。

伊藤 いろいろな噂がたくさん流れました（笑い）。

小田村 ですから『戦後財政史』の着手は、私のところでやったんです。

伊藤 とにかく、いいものができましたね。

小田村 そうですね。内容的にはいいものができました。

伊藤 さらにその後が続くということになりましたのですね。

小田村 はい。

■名古屋国税局長 (1) 国税局機構改革

伊藤 それで、前回の続きで、先生は「昭和四十五年五月に」名古屋国税局長におなりになったわけですが、先生がお書きになったものによると、税務機構の大改革があって大変だったということございます。具体的な内容はどういうことでしょうか。

小田村 どうも初めは、何のための改革かよくわからなかったんですね。丸山「英人」君が国税庁の総務課長になりまして、吉国二郎さんが国税庁長官だったわけです。丸山君が吉国さんと非常に近くなって、彼が主として東京国税局の状況を見て発案したんですね。最後の狙いは――。要するに機構を拡充しようと思ってもうまく行かない。当時は税務署長の下に副署長というのが少しずつできていたんです。その

下に課長がおりまして、課長は昔から総務課、直税課、間税課、徴収課と四つに分かれていたんですが、直税課がその後、所得税課と法人税課に分かれたということです。ところがこれ以上課長を増やすことも難しいので、副署長を増やそうということが狙いだっただと思うんですね。

課長の下に係がありまして、係長の下に上席調査官がおったんですね。その上席調査官の下にまた数人のメンバーがついて、それがグループとして活動するということがあったんです。しかし、どうも東京国税局の上席調査官があまりよく働いていないということで、それをやめることにしたのかな。むしろ調査官は単独で独任的な官職なんだという思想を打ち出したんです。私どもは、それはちよっとおかしいと思った。

上席調査官の下に七、八人のグループがあるわけですが、名古屋の場合は、上席調査官というのが非常によくできる人たちだったんですね。だからそこでよくまとまっていた。それをつぶしてしまうことは非常にやりにくい。だいたい、人事を完全に掌握できるのは十人ぐらいまでだろう。そうだとすれば、その組織をつぶしてしまうのはおかしい。それから、独任制の調査官というのはどう考えてもおかしい。裁判官や検察官とは違うので、組織の中で署長なり課長なりの指示に従って事務を執るというのが役所の常識です。専門職的な面は多分にありますが、組織を壊すような言動をするのはけしからんということで反対したんですね。

その頃の「税務広報」を見ますと、調査官というのは裁判官や検察官に近いようなものだということが書いてあるものですから、それはおかしいといったわけです。しかし彼らの描くところは、副署長をたくさん増やすことだったようです。そしてその下に課長がつくわけですね。副署長はいままで、直税担当とか総務担当という形であったわけですが、それを細かくするわけです。その図を見ると、昔の署長の下に課長がいる。副署長が昔の課長になったと思えばいいのか――。しかし結果的にはいまの組織はそういうようになってい

です。だから結果的にはよかったんでしようが、立論の過程がおかしかったし、その真意があまりよくわからなかった。

吉瀬さんがちょうど大阪の国税局長で、安川さんが東京の国税局長だったんですが、東京と大阪と名古屋の三局長が、局長会議の前には事前に協議をいたしまして（笑い）、それで局長会議に出るというようなことをたびたびやってあったわけです。

それから国税庁の組織の中で特異だったのは、次長が下条「進一郎」さんだったかな。この人は税の内容に詳しくありませんから、実質的にやるのは総務課長でした。直税部長が江口「健司」さんといって、私より一期上なんです。丸山君は一期下ですから、二期違うんです。二人とも二高の出身なんです。総務課長の丸山のほうが二高では直税部長よりも一年上なんです。だからどうしても総務課長の意見のほうが、直税部長より強いんです（笑い）。間税部長は私と同期の塚本「石五郎」君で、彼は亡くなりましたが、病気になるまで、充分な動きはとれなかったんです。そんなことで、丸山が一切やっていったんですね。

どうも意思の疎通ができなかったところがあるんですね。結果的にはあまり変なことにはならないで、税務機構としては整備されたと思うんですが、もう少し初めに、外向きにはこうなんだけれど、内向きにはこうだと言ってくれば（笑い）。

伊藤　そうですか、大改革だというから、何かすごいことだと思ったんですが。

小田村　法律ではありませんのでね。

伊藤　そういうことは何で決めるんですか。

小田村　政令と、省令以下になりますね。

伊藤　局を何かするといったら大変なことでしょうけれど。

小田村　局は設置法には書いてなかったと思いますね。中央機構は全部法律事項ですが、地方支分部局の設置は法律ではなかったはずですから、地方部局の中の税務署をどうするか、統廃合するとか、こういうことはみんな省令です。

■名古屋国税局長 (2) 国税不服審判所

伊藤 名古屋国税局長、あるいは東京、大阪の国税局長というのは、中央のランクでいうと何に当たるんですか。

小田村 本省の課長が終わってから局長に出ますから、部長クラス。いまでいえば審議官クラスということでしょうか。ただそれは、東京、大阪、名古屋の三つで、あとは課長クラスの上席ということになると思います。私のときは、しかし同期生が広島と関東信越局に出ていましたから、課長と部長のあいだぐらいですかね。間税部長だった塚本君はたしか銀行局の中小金融課長から札幌の国税局長に行きまして、一年で当然帰れると思ったのが二年になって、そのあいだに体を壊したんですね。課長経験者で、部長なり審議官にちよつと入ったところではないでしょうか。

伊藤 それは必ず本省にまた戻るわけですか。

小田村 だいたい戻ります。

伊藤 だいたいというと、戻らないこともあるんですか。

小田村 「国税」局長で辞めるという人もたまにありますがね。

伊藤 全国の国税局長で、そこが「あがり」のポストになるようなことはないんですか。

小田村 ベテランの方はそうですね。

伊藤 そういうこともあるんですか。

小田村 それはあります。

伊藤 それはノンキャリアの方ですか。

小田村 ノンキャリアの方です。

伊藤 よほどできる方なんです。

小田村 そうですね。金沢や熊本、四国の局長はそういう方が多かったですね。金沢「国税局の管轄」は、福井、石川、富山の北陸三県ですからね。

伊藤 国税局長時代には、機構改革のほかになにか大きな出来事はございましたか。

小田村 局の事務としてはそれほど大きなことはございません。

伊藤 前に行かれたときとの違いというのはいかがですか。

小田村 それは前よりもずっと整備されておりましたね。

伊藤 税収も増えたでしょうし。

小田村 ええ、税収も増えました。それからこれは私が局長になったときですか。この前、協議団とは何かという質問がございましたが、それが廃止されまして、国税不服審判所というのができたんです。これは国税庁長官直轄で、国税庁の中ではありますが、国税局とは独立の組織で、一種の不服裁判所ですね。これが名古屋でも発足いたしました。

伊藤 それは局とは別に、ですか。

小田村 局とは別なんです。建物も別にしたと思います。それで、職員からこういう要望が出ました。「実はわれわれは最後まで税務署、国税局で生涯を終えるつもりで入ったんだ。ところが不服審判所に回されて、不服審判所長から退職の辞令をもらうのは甚だ本意である」というんです(笑い)。永年勤続表彰がございますね。それも、審判所からではいやだというんですね。しかしそれはしょうがないので、じゃあ国税局の局長からも表彰状を差し上げるということで、表彰状は紙一枚ですから、みなさんに差し上げました。

伊藤 やつぱりみなさん、不服審判所に行くのがいやなんです。

小田村 まあ、やつぱりいやなんでしょうね。もう、そういう雰囲気はなくなつたかもしれないけれどね。そのときはできたばかりでしたからね。

■名古屋国税局長 (3) 対組合交渉

小田村 あと、国税局長「の仕事」は外部との交際ですね。いろいろ

な会合がございましたから、そういうところに出るということと、管内の税務署を視察して監督をするということですね。もう一つは組合交渉がありました。

伊藤 全国税ですね。

小田村 全国税です。当時は全国税から分かれて国税職組というのができており、加入者数はこちらのほうが圧倒的に多かったのですが、交渉に当たって神経を使ったのは少数組合だった全国税のほうでした。これがいいたいマル共系だったものですから、作戦も巧妙でございまして、これは年に二、三回はやらないといけないですね。しかし管理運営事項には触れるわけにはいきませんから、一般的な問題が中心なんです。まあ、変な質問が出た場合には、あまり正面から叩くとまた揚げ足を取られるおそれがあるから、そういうときは「局長、黙っていてください」というんですね。面白いんですね。組合が何か言っても、こちらは何も言わない、沈黙していますね。そうすると、組合の局長交渉についての組合員への広報があるんですね。そこには、「局長は沈黙」ではなくて、「局長は絶句！」と書かれるんですよ。

佐道 沈黙が絶句ですか（笑い）。

小田村 うまい言葉を使うな、と思いましたね。

佐道 それだけを読むと何か追いつめられたような感じですね（笑い）。

小田村 そうなんですよ。

伊藤 これは公務員の組合ですから、団結権はあるわけですね。

小田村 団結権はあります。

伊藤 団体交渉権は――。

小田村 団体交渉権はないんです。団体交渉と言っているんですが、団体交渉に必要な要件はないんです。だからあらかじめ時間も制限いたしませんし、交渉する人員も制限します。議題も打ち合わせておきますから、そういう意味では労働組合の団体交渉とはちよつと違いますね。

伊藤 話し合いみたいなのですね。

小田村 ある人は、一種の陳情のようなのだと言っていました。

伊藤 だけどもあの人たちは、実際には団交だと思つてやっているわけですからね。そこで譲歩すれば、法に反するようなヤミ給与とか、そういうことにはならないんですね。

小田村 そうです、変なことで譲歩すればそういうことになりますね。

伊藤 それがけっこう、あちこちで実はあつたといろいろ言われていますけれど。

小田村 そうなんです。それを是正しようとなると、今度またストライキをしたりする。私のころは税関がひどかったですね。国税のほうは、国税庁長官と全国税の交渉がありますから、それを全部資料として送ってきますので、それに反しないような範囲でしかできません。

■名古屋国税局長（4）三島由紀夫事件

小田村 それからもう一つ、大きな事件といたしましては、国税の事件ではないんですが、三島事件が起こったんですね。そうそう、『百年史』の時に申し落としましたが、三島さんに来ていただいて講演してもらったあとのことです。楯の会については、三島さんが全部ポケットマネーで出していたんですね。いくら著作の収入が多くても、それは相当な負担ではないか。楯の会で自衛隊に派遣して訓練するということとは、作家活動と関連ができていて、だからある程度まで所得計算の経費で認められるのではないか、ということになりました。そのとき、安川さんが東京の国税局長をしておったわけですね。長岡君と相談しまして、安川さんをお願いしてその点を検討してもらいました。うということ、東京国税局で検討していただきました。どの程度まで認めていたかわかりませんが、翌四十五年三月の申告の時には、多少の経費を認めてもらうようにしたんです。

そうしましたら、三島さんはとても喜んでくままして、長岡君と私と、伊沢さんも一緒だったと思うんですが、神楽坂の料亭に招待して

くれました。あの人の話は面白いものですからさんざん笑わせたのですが、最後に自衛隊で感激的な話をしましょうということで、レンジャー部隊でレンジャー訓練をやって、精一杯やって帰ってきたときの話をされました。助教の人にも指導していただいて、みんな帰ってきたら、とにかくみんなポロポロ涙を流して泣いたという。私どももちよつと涙が出るような話だったんですが、大変感動的な話をしてくださいました。

三島さんは「命日が」十一月二十五日ですね、今月です。名古屋の地方局の局長で、検察と警察と国税と税関と海上保安庁、そういうところで治安対策協議会といましたか、そういう会が毎月一回ございまして、集まることになっていたんです。「ちあん会」というゴルフの会もあったんですが（笑い）、それは遊ぶほうです。その昼の会合が法務局ビルでございまして、そこで昼飯を食べました。そのときは海上保安庁からの報告があったと思います。十二時から昼飯を食べて、一時に帰るときに秘書が迎えに来ていまして、「今日、三島由紀夫が市ヶ谷の自衛隊に突っ込んで血を流して大変なんだ」というものですから、びっくりして、すぐ近くでしたから局へ戻ってテレビをつけたら、もう三島さんは割腹して、介錯をされた後なんです。森田「必勝」さんも割腹した後だと思えます。

それでさっぱりわかりませんので、東京の伊沢さんに電話をして「どういふことなのか」と聞いたたら、「全く自分でもよくわからない」といふことでした。とにかく、「もし来られたら東京に出て来い」といふことでした。しかし私は岐阜で岐阜県内の署長会議があったんです。それが二時から三時からでしたので、しょうがないので岐阜に行きました。それが終わってから、今度は酒造組合の大会がありまして、それも一応お務めをしたんですが、お酒は全然うまくありませんでした。それが七時半か八時に終わって、名古屋から八時半か九時の新幹線に乗りました。新幹線で二時間ですから、十時半か十一時頃に東京駅について、それから家に戻りました。

そうしたら伊沢さんが「もう三島邸に來ているから、おまえも來

い」といふので、場所を聞いてタクシーで三島さんのお宅まで行きました。いちおう白い花が飾られていました。本当になんといいますが、突然のことでした。伊沢さんが私が紹介するからといって、お父様とお母様に紹介してくれたので、ご挨拶しました。お父様は、「何か夢のような話で」と言っておられました。

翌日、名古屋に帰るつもりだったんですが、国税庁に行きまして、長官に挨拶をしました。長官のところでもその話ばかりしているわけです。長官が「あれは少し気がおかしくなったのか」と言われて、それに対して丸山君が「いやそういうことは絶対にない。完全に計算し尽くしてやったんだ」と言っていました。私もそうだと思ったんですが、しかしよくわからない。安川さんも「今日ぐらい飯がまずかったことはない」と言っていました。ですからあれは大変なショックだったんです。

考えてみますと、九月の初め頃に局長会議があったんです。伊沢さんから電話がありまして、今度東京に出てくる機会があったら「三島さんと会おうという話がありました」。私は新幹線で近いものですから、土曜に帰って、月曜の朝出てくるということをやっていたんですが、局長会議があったわけですね。それで九月の初めに、伊沢さんと三島さん「と私」の三人で、ホテルオークラのロビーの隣の食堂で、晩飯だったと思いますが、一緒にしたんです。そのときに三島さんは楯の会の制服を着て来ていました。「実は今日は高崎に行ってきたんだ。高崎の中曽根さんの後援会で話をしてくれと言われたので、自分としては本当にいやなだけけど、これはしょうがない（楯の会は自衛隊にお世話になっていて、中曽根さんは防衛庁長官だったわけですから）。大変いやだったけれど、とにかく行ってきた」といふことでした。この日も時局談が中心だったんですが、そんな大事件を起こすといふことは全く考えていなかった。

しかし、どうも後で聞きますと、三島さんは知っている人にそういう挨拶をずつとしておったんじゃないかと言うんですね。そういうえば、三島事件の直前、十月に池袋の西武で三島由紀夫展がございました。

自分で何々の世界といって、いくつかの自分の世界を自分でつくったんですね。それを生涯の締めくくりとして考えたのではないかという気がしました。

名古屋には二村化学という会社がありまして、化学関係の製造会社だったんですが、二村富久という社長さんが「三島事件に」非常に感激いたしました。頭を刈って丸坊主にして、自分で三島記念館というのを会社の隣につくって、一回見てくれと言うんです。この人は憲法をなんとかして改正したいというんですね。またこの人は野球が好きで、若い学生が会社の連中と野球をするから、おまえもちよつと来てくれと言うので、庄内川の河原でしたか、野球をやったんです。これが日本青年協議会、桃島君の、まだ始まりの頃なんです。二村さんはそういう面倒もかなり見ていたようです。そういう人もいましたね。

それから当時、電波監理局長に渡辺正一郎さんというのが来ておりまして、これがなかなかの学者で、名古屋大学の総長をしておられた方と一緒に、名古屋テレビの方がスポンサーになって会がありました。これもいろいろなお話を聞くことができて、たいへん勉強になりました。そんなことで、国税局長時代は、別に大きな問題はありませんでした。

伊藤 いまの事件のことについてですが、いったいあれは何だったのか。いまでもいろいろ議論があるように思いますが、先生としてはあの三島事件というのはいったい何だったんだろうとお考えですか。

小田村 わからないんですね。ただ、伊沢さんがそう言っていますし、このまえ森田さんの本を書いた中村彰彦さん「『烈士と呼ばれる男

森田必勝の物語』」もそうだと思いますが、要するに西郷「隆盛」さんだということですね。西郷さんの場合は、私学校が暴走したわけですね。自分はそれに殉じた。三島さんの場合も、森田君たちに突き上げに突き上げられて、いろいろ悩んだんでしようが、結局最後に死ぬときにはそれを決断したんじゃないか。だからあれでクーデターを起こすとか、そんなことはあり得ない。要するに一緒に死のうという言葉ですから。それによって、世の中に衝撃を与えるということだったの

ではないかということなんですけれどね。しかし詳しいことはわかりません。

■内閣審議室長 (1) 総理府と内閣官房

伊藤 それでは、内閣審議室長のことなんですが、どういう経緯でこういうことになったわけでございますか。

小田村 内閣審議室長には、代々大蔵省から行っていたんです。もうずいぶん前からですね。内閣審議室というのは、私も知らなかったんですが、もともと企画院の後身なんだそうです。しかし企画院はバラバラになりましたから、その後いつごろからでしょうか、審議室長は大蔵省から出向するといういきなりになっておったようです。みんな一番いやがるところなんですね。その頃は総理府とっていましたが、総理府ではなくて「掃除府」だという。ですから、わけのわからないごちゃごちゃした問題がみんな舞い込んで来るわけですね。

伊藤 企画院の後身だとすれば、比較的大きなものですが、縮小して目的は大きいはずじゃないですか。

小田村 本来からいいますと、内閣官房あるいは総理府の中心になるべき存在なんじゃないかね。

伊藤 現実はどうではないわけですか。

小田村 現実には、いろいろ分かれましたからね。企画院的なものは、経済安定本部から経済企画庁になりますね。それから関係するところとしては、国土庁は後からできたんですが、あれは内務省の系統ですね。経済企画庁が外に出てしまうと、動員的なものはなくなりますね。物価も物価庁ができて外に出ましたし、そういうものができてくると中味は小さくなって、あとは結局雑物だけが残るということではないかと思えます。

伊藤 その仕事の内容はどういうふうに変遷されているわけですか。

小田村 内閣官房が内閣の「総合調整」という言葉で言われていたと

思うんですが、総理府の場合は「連絡調整」でした。総合調整と連絡調整で、総合調整のほうがちよつと力があるんだろうと思います。その事務方が内閣審議室だということだと思います。

伊藤 そのへんはよくわからないんですが、内閣官房と内閣総理大臣「総理府」はどういうふうに違うシステムになっているわけですか。両方に属しているわけですね。

小田村 内閣官房というのは、本来に内閣の調整役だけですね。

伊藤 官房長官がトップにいるわけですね。

小田村 そうですね。官房長官が国務大臣になったのは――。

武田 このころですね「昭和四十一年六月から」。

小田村 総理府総務長官は、その少し前から国務大臣ではなかったかと思うんですが「昭和四十年五月から」。総理府というのは、内閣の中の各省と同列の省なんです。ですから内閣総理大臣が長であつて、総理府総務長官というのは、その下の次長格、それが総理府なんです。内閣官房というのは、内閣の首班としての内閣総理大臣の調整機構ということなんです。だけれども、各省大臣としての内閣総理大臣の仕事というのは、内閣官房の仕事と非常に密接な関係にあるものですから、それで両者を同一の人間が兼務する。ただし上は二つあるわけです。総務長官と内閣官房長官の二つです。

伊藤 でも降ってくる仕事は同じなんですか。区別があるんですか。

小田村 だいたい閣議に上がる案件は内閣官房ですね。閣議の事務方は内閣官房で、内閣参事官室でやるわけです。ところが内閣参事官室長は総理府の総務課長であるわけですね。だから両方なんです。閣議案件は内閣、というのが一番大きなメルクマールだろうと思います。

伊藤 具体的なイメージが浮かばないんですが、内閣に直属している部局というのがございますね。北海道開発庁とか――。

佐道 あれは総理府ですね。防衛庁にしろ、何にしろそうですね。

伊藤 宮内庁もそうですか。

小田村 宮内庁もそうです。全部総理府の外局です。そういう具体的

な実務は総理府になるんですね。ただし、その外局の長に国務大臣を充てるところ、つまり経済企画庁や防衛庁や環境庁と、宮内庁や警察庁は違うわけです。また警察庁は総務長官ではなくて国家公安委員会が監督します。

伊藤 内閣官房というのはなんだろう。

小田村 内閣官房は閣議のお膳立てをするということと、直属の機関として、内閣調査室、内閣法制局があります。これは法律上もはっきりしているんです。内閣法の内閣官房の規定の中に「調査を担当する」ということがあつたと思うんですが、それは内閣調査室のことを言っているんです。それから広報は、初めは総理府に広報室があつたんですが、その後内閣広報室と兼務することになりました。内閣の広報室になります。だから総理府だけではなくて、内閣全体の広報をしようということ、ちよつと格上げされたことになりましたね。

伊藤 これはこの前もいろいろ改革がありました。あれを読んでもよく僕にはわからなかつたんですが。

小田村 今度は内閣府にいろいろなものを取り込んだんです。昔の総理府と内閣官房が一緒になって内閣府ができたような感じ。総務省というのは、総務庁（総務庁は総理府と行政管理庁のくつたものですが）と、郵政省と自治省とわけのわからないものになったんですね。

伊藤 そうですね。なんで総務なのかよくわからない。

小田村 内閣官房が総理府と分かれて、官房として純粹化されたんですが、それがまた一緒になったという感じですね。経済企画庁なんかは内閣府に移りましたからね。

佐道 総理府は内閣総理大臣に直属するわけですね。

小田村 ええ、直属するわけです。だけど、総務長官がいるわけです。佐道 総務長官がいて、実質的にはそれが動かすことになるんでしょ。うが、首相官邸、官房の機能は官房があるわけですが、例えば先ほどの広報を、官房と総理府と両方といわれましたが、総理府にあれば官房は必要ないのではないかという気がしたりするんですが。

小田村 官房長官も広報に関与するためには、内閣も兼務させた方がいいわけですね。

佐道 総理府だと、官房長官はそれには関与しにくいわけですね。

小田村 口を出せないわけです。

伊藤 しかし官房長官はスポークスマンですからね。

小田村 そうですね。

佐道 官房長官と総務長官の関係というのはかなり微妙なんですか。

小田村 これはなかなか難しいところがございます、私が審議室にいたときは、総務長官は山中「貞則」さんで、官房長官は竹下「登」さんでしたから。

伊藤 それは面白い組み合わせですね。

小田村 総務長官の山中さんは、副総理みたいな感じでおりますからね。

佐道 ご自身の気持ちとしてですね（笑い）。

小田村 だから、「おい、官房長官」と言っていました（笑い）。

佐道 山中さんだけだろうな。

伊藤 竹下さんだから、堪え忍んだんだろうな（笑い）。

佐道 そうですね、気配りされたんでしょうね。

伊藤 このお二人はだいたい対照的な方ですね。ごらんになっていかがでしたか。

小田村 まあ、そのへんはよくわかりませんけれどね。

伊藤 それぞれ上司のわけですね。

小田村 そうですね。それで「官房」副長官に、私のときは小池欣一さんがなりまして、総務副長官は栗山「廉平」さんという方で、二人とも厚生省なんです。栗山さんのほうが先輩じゃないでしょうか。栗山さんというのは真面目な事務方の人ですから、副長官同士は特に問題はなかったですね。三室長会議というのがあって、官房副長官と総務副長官と、調査室長、審議室長、広報室長の三室長で、月に一回朝飯を食っていたんです。そこでいろいろな情報交換をしました。調査室長が川島「広守」さんでした。

伊藤 内閣審議室というのは、具体的に何をやるわけですか。

小田村 審議室には各省から来ておりました。大蔵から石川周君が来ておりました、これがだいたいまとめ役をしておりました。あとは厚生、文部、労働、自治、検察（法務）、建設、通産、運輸。そんなところから審議官が来ておりました。郵政はなかったかもしれないですね。その総括を、室長がやるということです。特別に何かあるときは、そういうところに頼みに行くわけですね。

伊藤 外務からは、いないわけですね。

小田村 外務はいなかったですね。対外経済協力審議会というのがありまして、審議会のお世話はずいぶんいろいろやるわけです。これは総理府のほうですね。それは農林省出身の審議官が経済協力のことをやっていました。外務からは来ていなかったと思いますね。

■内閣審議室長 (2) 災害対策基本法

小田村 一番時間を取られたのは災害問題なんです。災害が起こりますと、国会に呼び出されるんですね。災害対策基本法がございまして、激甚災害法というのがありました。これは大蔵省の法規課が実質的に中心になって作ったもので、私が法規課に来たとき、昭和三十七年に成立したんです。しかし所管は総理府になりました。それまではいろいろな災害が起こりますと、激甚指定をその都度法律を作ってやっていたんです。それはかなわんから、こういう場合は激甚災害にしますということをやります、という法律をつくりました。だから、災害が起ると激甚災害に指定しろというわけです。そうすると補助率がかさ上げになるわけですからね。それがしょっちゅうあった。総務長官は内閣委員会にはほとんど出ません。内閣委員会では砂田重民さん（総務副長官（政務））がもっぱらそれをやっておられました。あの方は非常に答弁もお上手ですし、非常によく勉強されていましたね。それが一番の問題で、私の前任者の青鹿「明司」さん（茨城県の副

知事をやられた方ですが、）が、「いつでも問題になるのは個人災害だ。個人が災害に遭って、家が倒壊したり流されたり、死者が出たりする。そういうことに対する補償制度が国としてできないか。共済制度を適用したらどうか。個人災害共済制度を考えたい」という構想を持っておられたんです。それがかなり具体化してきて、来年度の予算要求に出したいということだったんですね。私は名古屋で内命をいただいたものですから、審議室に電話して石川君に聞いたところが、「一番大きな問題はこれで、室長の指示を仰ぎたい」ということだったので、「できるものであれば、よいことだからやっておいてくれ」というふうに言っておいたんです。それができれば、画期的なことになるわけです。

ところが、だんだん検討していきますと、掛け金の額にもよるんですが、税金と同じようなもので、こんなもの出す人がいないんですね。結局いろいろ計算してみると、これは税金と同じように強制しなくては駄目だということになったんです。ところが今度は強制できるかということですね。法務省から来ていた栗田「啓二」君が内々に内閣法制局に打診したわけです。そうしたら、それは憲法上無理だということになりました。強制できなければ駄目だということで、どうやって收拾するか。青鹿さんがだいたい山中さんにも吹き込んであったものから、山中さんも国会でしばしば答弁しておったわけです。これはどうしようかということになって、おそろおそろ山中さんのところに戻りました。「これこれこういう次第で駄目になりました」「おまえ、どうするつもりなんだ」、しょうがない、それじゃあ調査費でもつけておけ、ということでも収めたんですけれどね。これにはだいたい苦労しました。

伊藤 しかし損保の問題のような気がしますが。

小田村 本来は損保なんです。損保と、死んだ場合は生保ですね。そうなんです、やっぱり国会はうるさいですから。それで結局どうにも收拾がつかなくなつて、死んだ人には災害の弔慰金を出したらどうか、ということにしたんです。それを厚生省に無理やり押しつけまし

た。厚生省は災害救助法を持っていますから、厚生省に頼みまして、弔慰金をやってくれということになりました。初めは小さな額だったんですが、だんだん大きくなつて、いまどうなっていますか、私は知らないんですが、これは失敗例ですね。

私は一年で替わつて亘理「彰」君になりましたが、亘理君も個人災害のようなことにかかずに合っているのは面倒くさいと思つた。そのときは官房副長官が後藤田「正晴」さんになっていました。田中内閣になつて官房長官からいろいろ「仕事」が出てくるから、そんな「災害対策のような」ものに関わっているのは面倒くさいので、これは外に出したいというところに、ちょうどたまたま国土庁ができたんですね。それで災害対策の問題は国土庁に放り込んでしまったんですね。その後は国土庁が災害対策をやることになったんです。

私はこれは間違いだつたと思つています。たしかに災害が起こつてからの復旧とか救援は国土庁でもいいかもしれないけれど、問題は防災ですからね。防災の問題は、消防も建設も警察も全部含まれますので、総理府で持つておくべきではなかったかといまでも思つていゝんですけれどね。国土庁は、いまでも国土交通省で持つていゝんですよ。自衛隊も当然関係してくるわけですね。

伊藤 いまおっしゃつたことは要するに、災害というのは各省庁にまたがる問題であるから、その総合調整を内閣審議室でやる、ということですね。

小田村 そういうことです。

伊藤 それに類することがいろいろあるわけですね。

小田村 災害の問題は、災害救助法が基本法だったんです。これは厚生省が持つていたわけですね。ところが災害対策基本法ができたわけです。災害対策基本法は事実上は自治省が作ったと聞いていますが、所管は総理府に持つてきたんですね。ですから総理府が災害関係を全部やることになった。それを国土庁に持つていったわけです。ただ、災害対策基本法は基本的な法律ですから、総理府で持つのが正しかったのではないかと思つていゝんですけれどね。

佐道 自治省で起案して、主管が総理府になったということですが、それは自治省がそもそも総理府が主管すべきだということで起案したということですか。そうではなくて審議の過程で、これは総理府が主管しろ、ということになったんですか。

小田村 自治省がもともと案を作つて総理府にやらせたのではないでしょう。私はちよつとそのへんはわからないんですが。

伊藤 そういうことつてあるんですか。

小田村 あると思います。

伊藤 だいたい自分のところで法律を作つたら、その法律の主管は自分たちがやると思うんですが。

小田村 そうですね。でもこのあいだお話しした農地報償とかは、法律は農林省と大蔵省で作つたんですが、総理府にやつてもらわうわけですね。先程の激甚災害の法律もそうですが、そういうケースがたくさんある。要するに掃除府ですから、各省にまたがるものは持ち込まれるわけですね。

佐道 自治省がそれを起案するにあつては、何か経緯があつたんでしょうね。

小田村 何かあつたんだろうと思いますね。だから災害対策基本法ができたために、災害救助法の中の相当な条文が削除になっています。だから基本的な問題については、災害救助法から災害対策基本法に移したんですね。

伊藤 そうすると、厚生省に少し残つたということですか。

小田村 厚生省には残っています。災害救助法を発動する場合は、厚生省ですね。

武田 「今度の行政改革で」国土庁の機能が少し内閣に行ったんですよ。だからまた内閣に戻つたのかもしれないですね。

小田村 戻つたかもしれませんがね。

佐道 いま内閣には危機管理監がありますからね。

小田村 そこに行っているかもしれない。それからその亘理君がもう一つ放り出したのは同和問題です。同和問題も審議室でやっていた

んです。これはその後、同和对策室が総理府の中にできまして、そこで取り扱うことになったわけですね。これはなかなか厄介な問題で、同和对策審議会というのを審議室で持っていました。

伊藤 もともとは、ですね。

小田村 もともとです。

佐道 たしかに放り出したくなるようなしんどい問題ではありますね。

■内閣審議室長 (3) 公式制度問題の研究

小田村 あとは例えば毒ガスだとか、いろいろな問題を審議室で処理する。いわゆる戦後処理問題ですね。それからもう一つは公式制度問題研究会です。これは内閣のほうですが、むかし公式令というのがありました、あの関係ですね。一番大きな問題は年号問題です。公式令は法令の基準が書いてあるわけです。そういういろいろなものが全部なくなつていて、慣例でやっているものが多いということです。皇室令もなくなつていますし、大半はなくなつていますね。そういう研究会がありまして、これは審議室と法制局と、宮内庁に出てもらいました。これは、少し年号問題を勉強しようということ、前にも審議室で研究したものがあつたんですが、これからだんだん問題になってくるだろうということで、研究を始めたんです。外に出ると大変なことです。だから、全く極秘の裡にやっていました。石川君が、昭和の時のご大葬などの儀式がどういうふうに行なわれたかなど、いろいろ調べました。これは宮内庁でもずいぶん研究しておられたと思うんですが、政府としてはほかに手を着けているところがなかったもので、そういうことをちよつと勉強させたんです。これはそのままになりました。そのうちに元号法制定の問題が民間運動で起こりましたから、そこで片づいたわけです。それからご大葬からご大典に至るまでのことも、だんだん宮内庁を中心にやられたんだろうと思います。

佐道 そういう問題、例えば元号の問題を研究しようというのは、室

長のイニシアチブでできることなんですか。

小田村 これは前からあったんです。ただ眠っていたわけですよ。

佐道 それを起こして、新たに始めたのが先生ということになるわけですか。

小田村 ええ。書類だけは前からたくさん残っていたわけですから、これに手を着けたほうがいいんじゃないか、ということで始めてみたんです。

伊藤 仕事としては、前からの継続のほかに、上から降ってくるというものもあるわけですか。

小田村 上から降ってくるものは、竹下さんが四十七年度の予算の概算要求について「どんな内容で、どんな重点事項があるかということをおまえのところで調べて報告してくれ」ということで、審議官に割り振りました。出身省から聞いてもらって、官房長官に報告を始めたんです。ところが、二、三回やりましたら、官房長官のほうで忙しくなつて、時間がとれなくなつた。途中で中断のまま、ということになりました。だいたいそれは、いままで官房長官の秘書官がやっていたんです。秘書官は藤井裕久君でした。今度当選しましたね。大蔵大臣もやりましたね。彼がやっておりました。

伊藤 それは何のためなんですか。内閣としての――。

小田村 官房長官の勉強だと思えます。予算折衝が始まりますから、そのあいだに、総理にどういう姿勢で行くか相談するということがあったと思います。

■内閣審議室長 (4) 沖繩返還とニクソンショック

佐道 この質問要項の中に入れ忘れたんですが、このとき沖繩返還が問題になりまして、沖繩開発庁が総理府の外局について、山中さんが初代の長官になれるわけですが、この沖繩の問題について、審議室のほうで何かございましたか。

小田村 沖繩は、あのときはまだ開発庁ではなくて、沖繩対策庁といっていたと思うんですが、そこが中心になつてやっておりますので、審議室としてはほとんどタッチしておりません。ただ、山中さんはもっぱら沖繩問題に集中していましたので、むしろそういう意味で、長官の時間をとることがなかなか難しかったということがありますね。もっぱら沖繩でした。それで面白いのが、沖繩の概算要求なんです。私も一回列席させてもらったんですが、沖繩の概算要求を出すときには、各省の補助率の中で何でもいから最高の補助率のものを持っていけということなんです。予算要求だったか、法律だったか忘れませんでしたけど、だいたい事務方は苦労しておったようです。

伊藤 山中さんは沖繩問題を半端じゃなくおやりになつたわけですからね。

小田村 そうですね。翌年の五月が返還でございましたからね。それからドルの切り換えの問題もそうですね。あれは初めいろいろ考えて証紙を貼るというような話もあったんですね。結局、日銀券を自衛艦で送ったんです。あれは内密に送りました。そういうことで、沖繩問題はなかなか大変でしたね。

伊藤 そうですか、沖繩問題はもっぱら山中さんの対策庁のほうで引き受けていたんですね。

小田村 対策庁のほうでやっていました。

伊藤 結局沖繩返還ということが佐藤内閣の終わり、というふうになつても認識されていたし、事実そうだったわけですが、そんな雰囲気がありましたか。つまり内閣が交替するぞ、という雰囲気ですね。

小田村 そうですねえ、内閣が交替するということとは――。沖繩返還の法律が四十六年の暮れの臨時国会で最終的に通つたんですね。それで、佐藤さんもぼつぼつ退陣という空気にはなつてきたんじゃないでしょうか。法律が通りましたからね。

それからもう一つ、ニクソンショックがありました。審議室長と首席参事官の二人は、いつも次官会議に陪席することになっていたんです。八月の中頃、私がこちらに到着した直後だったと思うんですが、

次官会議で鳩山「威一郎」さんが、アメリカから非常に大きな問題が出たという。そこで金の交換を停止して、ドルの実質上の切り下げが起きたということで、為替が大揺れに揺れることになったわけですね。もう一つ、その以前に例のキッシンジャーの中国訪問とニクソン訪中も発表されましたし、二重ショックがあつたわけですね。

それで結局、これは大変な問題だから大蔵省の柏木「雄介」さん（もう財務官を辞めて顧問だったと思うんですが）に、外国に行つて状況を聞いてもらつたらどうかという話があつて、柏木さんもすぐ行かれたと思います。大蔵省は従来の情性がありますから、あくまでも「一ドル＝三六〇円を固守するということでした。しかしそれも一週間ぐらいで持ちこたえられなくなつて、結局変動相場に移行したわけですね。それで円が切り上がつて、十二月に水田「三喜男（蔵相）」さんが向こうに行きまして、三〇八円という新レートを決めたわけですね。これが大騒動になつたんですね。

そのときに、これは面白い事件なんです。円の切り上げと同時に国内の金利を下げなくてはいけない。景気を落とさないためには、金融を緩和したいということだったんですね。ところが郵便貯金がネックになるわけです。日銀が公定歩合を下げようとしても、郵便貯金が増えてくれないと、銀行は下げられないわけですね。そこで、次官会議が終わるたびに、鳩山さんが郵政次官を呼び止めて、一つなんとかしてくれと毎回毎回陳情していました。だから郵貯がいかに金融政策の障害になっているかということが、あのときはつきり出しましたね。

■内閣審議室長（５）次官会議

伊藤 次官会議には必ず陪席することになっていたんですか。

小田村 はい。

伊藤 次官会議で決まったことが閣議に持ち込まれて、そのときは根

回しが終わっているから、閣議はほとんど議論なしにサインだけする、ということをよく聞きます。その前の次官会議もすでにその前の事務方のレベルですつかり根回しができていて、次官会議でも特に議論はないと――。

小田村 そうです。

伊藤 本当にそうなんです（笑い）。

小田村 そうです。だから次官会議をやめたって同じことなんです。ただ、次官会議というのは、次官同士の接触の場なんです。

伊藤 そういう意味ですか。そこで正式に議題になっていることではなくて。

小田村 議題になつていなくてもありますが、もろもろ各省で問題がありますね。なかなか相手の省とうまく行かない場合がある。そういうとき、次官会議のあとなどにちよつと話をするには一番いいんです。

伊藤 外にもわからないし。

小田村 外にもわからない。だから、ああいう会議を目的かたきにする必要は全くないんです。自分の省の案件で次官会議にかかるようなものは、あらかじめ全部大臣に報告してありますから、大臣が駄目だと言われるようなものは次官会議にかかりませんから。

伊藤 逆にそういうことになるわけですね（笑い）。出てくるものは関係各省との調整ももう済んでいるということですね。

小田村 そうです。次官会議では各省の案件が出ますね。次官の仕事は、次官会議が終わつたあと、自分の省の関係でないものを大臣に報告することなんです。翌日閣議がありますからね。そこでもし大臣からクレームがきますと、ほかの省に連絡して、それをもう一回抑えるかどうかしなければなりません。

伊藤 すつかり根回しが済んだのに。

小田村 自分の省の関係は根回しが済んでいます。ほかの省のものですからね。

伊藤 ほかの省との関係ですか。

小田村 ほかの省庁との関係ではなくて、ほかの省の政令が上がると

いうことがありますね。それは自分の省と関係がないかもしれませんが、それも大臣には報告しておくわけです。閣議案件として、ですね。伊藤 自分の省と関係があるものは事前に事務方で調整が済んでいるわけですね。

小田村 調整は済んでおりまして、大臣にも報告してあるわけです。しかし関係のない問題がありますから、そういうものは次官会議が終りますと、大臣に「あしたはこういう案件が出ます」ということをご報告するわけです。

伊藤 そうすると、自分の省には関係ないけれど、大臣がこれはちょっとどうかということを言う可能性はあるわけですね。

小田村 可能性はあるわけです。しかし実例としてはほとんどなかったと思います。ご説明すれば納得してもらえたと思います。

伊藤 次官会議で、議題について激論になるということはまずないわけですね。

小田村 ほとんどありません。

伊藤 ほとんどというか、全く、といってもいいですか。

小田村 ええ、そうですね。ただ各省の説明でわからない点について、もうちよつと説明してくれという質問はありますが。

伊藤 なんとなく質問というのはいやがるという印象を受けますが（笑）。

佐道 次官会議というのはどれぐらいの時間でやるものですか。

小田村 昼飯を食べて、十二時から十二時半ですが、昼飯が二〇〜三〇分ですね。それが終わってからですから、三〇分ぐらいで終わることもあれば、一時間かかることもあります。例えば白書のようなものがございますね。こういうものは説明をします。それからこういう統計が出て来たという場合には説明しますから、それはちよつと時間がかかりますので、それによつて長いときもありますね。

■内閣審議室長 (6) 雫石事故と生田の崖崩れ

小田村 それからもう一つ、七月に国税局長会議が慰労を兼ねて箱根でありました。そのときに、例の雫石事故が起こったんです。

自衛隊と全日空ですね。それでこれは大変だということで、増原「恵吉（防衛庁長官）」さんがお辞めになったんですが、その雫石の慰霊祭をやってくれということになりました。

【雫石事故】昭和四十六（一九七二）年七月三十日、千歳発羽田行き全日本空58便ボーイング727型機と、訓練飛行中の航空自衛隊第一航空団松島派遣隊所属F86ジェット戦闘機が、岩手県雫石町上空で空中衝突し、両機とも墜落。全日空機の乗務員、乗客一六二名全員死亡。自衛隊機乗員二名は降下脱出、七月三十一日逮捕。八月一日、増原恵吉防衛庁長官辞任。

これもやる場所がないので、総理府でやってくれというわけですね。それで総理府でやりました。ただこのときは、自衛隊がすっかり悪者になっていたわけですね。増原さんが、辞めたあとなんですが、慰霊祭にはひとつ出席させてもらいたいという話だったんですね。それをどうしても全日空がいやだと言うわけです。そんなこと言わなくてもいいと思ったんですが、結局増原さんは出席できなかったのではないでしようか。

伊藤 それは何の意味ですか。

小田村 いや、加害者だというわけでしょうね。

伊藤 加害者だからといって、別に慰霊祭に出席をしても関係ないと思います。

小田村 そう思いますけれどね。そういう事故が起こりますと、みんな総理府にかかってくるんです。雫石事故も、事故調査委員会ができました。あのころはまだ航空事故の調査委員会という常設のものはありませんでしたから、交通対策室がありましてそこで先生方に依頼したわけです。先生といつてもみんな運輸省ですけれどね。そこで事故

調査、原因調査をする。

伊藤 内閣にその室があるんですか。

小田村 総理府にあるんですね。これはまた「私が」防衛庁に行つてから、事故調査委員会の報告が出て問題になるわけですが。

それから私のときに、崖崩れ事故がありました。生田で崖崩れの実験をやっていたんですよ。そうしたら本当に崖崩れが起こっちゃつて、そのときに来ていた人たちが崖崩れに巻き込まれて死んでしまったわけですね。その原因の調査も、やはり総理府でやりました。そういう突発事故があるとみんな来るわけです。

【生田の崖崩れ】昭和四十六（一九七二）年十一月十一日、川崎市の生田緑地内で、科学技術庁国立防災科学技術センターを中心に、通産省・工業技術院地質調査所、建設省・土木研究所、自治省・消防研究所が協力して、人工降雨による崖崩れ実験を実施。しかし事前の予測以上の土砂が事前の予測以上の速度で突然崩落し、実験斜面の防護柵を越えて流下し、研究者・報道関係者ら二五名が生埋め、一五名が死亡。平泉渉科学技術長官辞任。

伊藤 じゃあ、ときどきは忙しいわけですね。

小田村 そうなんです。

佐道 雫石の飛行機事故なんていうのは、単純に考えればすぐに運輸省でやっていいんじゃないかと思うんですが。

小田村 民間飛行機だったら運輸省でいいわけですが、自衛隊が絡んでいましたからね。

伊藤 それで各省庁にまたがるんだ（笑い）。

佐道 各省庁にまたがるから総合調整しなくてはいけない（笑い）。

伊藤 それで、佐藤政権はこれで終わりにするという雰囲気は感じられましたが。

小田村 そういう雰囲気はありました。二月頃から田中さんがどんどん派閥を拡大して、木村「武雄」元帥なんかもずいぶん暴れていました。佐藤さんがもう今回限りということ、あるいは言われたんじゃないで

ないでしょうか。そうすると総裁選があるということですね。

■内閣審議室長（7）海原治氏と防衛庁人事

小田村 それからもう一つ、これは海原「治」さんの『オールヒストリー』を読んでおりましたらあつたんですが、海原さんが辞めると言われた話がありますね。私も防衛庁のことは気になっていたの、伊藤君からときどき話を聞いていたんです。伊藤君の話ですが、内海「倫」さんが当時次官ですね。島田「豊」さんが次になるんですが、そのあとが大蔵省から行った田代「一正」さんが非常にいいというんです。評判がいい。「久保「卓也」さんはどうなんだ」と言ったら、「もちろん久保さんもいい。だから次官には二人になつてもらった方がいい」と伊藤君は言っていました。

それから「海原さんはどうだ」と言ったら、伊藤君だったと思うんですが、「あれ困るんだ」と言うわけです。それで私は小池さんに、「防衛庁は、海原さんをなんとかしないと事務が進まないようにですよ」という話をしたんです。そうしたら小池さんは、「いやそれはわかってる。いづれ官房長官からそういうことで話をするはずだ」と言っていました。それでその後首席参事官だった翁さんに聞いたところ、「官房長官・竹下さんがいろいろ説得したんだけど、どうしても言うことを聞かなかった。竹下さんも呆れかえっていた」という話をしていました。ああ、これは駄目だと思いました。

伊藤 なんとなく海原さんのお話だけ伺っていると、当然の成り行きにならなかった、という感じですね。

小田村 そうですね。あのとき早く辞めておかれればよかったと思うんですけれどね。そうすればあまり傷つかないで済んだと思いますけれど。

伊藤 そうですね。結果としては非常に傷ついたということですね。

小田村 あとでいろいろ傷ついたんじゃないでしょうか。また防衛庁

のところでお話しします。やはり防衛庁というのは、みんな行くのをいやがるところなんですね。川島さんが内閣調査室長だったんです。誰が流したかわからないんですが、川島さんが防衛庁へ、という話が流れまして、川島さんは非常に心配して（笑い）、竹下さんに陳情したんですね。絶対いやだというんですね。竹下さんが何の機会だったかな、「川島君、あれはないから安心してくれ」と言っていた。あれは竹下さんだったか小池さんだったか、「どうしてみんな防衛庁に行くのをいやがるんだろ」と言うんですね。「それは要するに、あそこに行ってもいじめられるだけで、役人としての面白味がないからじゃないか」と僕は言ったんです。

佐道 いじめられるというのは、誰にですか。

小田村 国会からです。

伊藤 ああ、それはわかります（笑い）。

小田村 それは例えば、警察庁長官とか国税庁長官というのは、国会には絶対に呼ばれないんですよ。怖いですから。（一同笑い）

武田 それは面白い見方ですね（笑い）。

伊藤 それは腑に落ちる話だ（笑い）。

小田村 川島さんは警察の出身ですから、それはよくわかるわけです。佐道 いままでいじめられずに済んでいたものを（笑い）。

伊藤 そのいやがるところに、小田村先生はその後また行かれたわけですね。いやはや。

伊藤 内閣官房というか、総理大臣の周辺にいますと、佐藤政権が急速に終わりに近づいているということは、雰囲気として感じるんですか。小田村 中の雰囲気ですか。中の雰囲気ではそういうことはありません。それは佐藤さんもああいう方ですし、竹下さんも山中さんもそうですね。山中さんなんか本当に佐藤一辺倒で、佐藤総理は非常に信頼していましたから。中はそういうことによって動かされるということはないかなかったですね。

伊藤 一般的な情報として、ですか。

小田村 新聞情報ですね。

佐道 総理ご自身にお会いになることも結構多かったですか。

小田村 いや、ないですね。だいたい官房長官または総務長官止まりですね。総理からお話を伺うことはほとんどなかったと思いますね。

伊藤 ちよっと来い、なんていうことはないですか。

小田村 ないですね。

伊藤 竹下さんとはかなり接触されるんですか。

小田村 そうですね、竹下さんはわりあい次官なりを呼んでご馳走されることが好きでしたから。「十年経ったら竹下さん」という歌を歌っていました。

佐道 その当時ですか。

小田村 ええ、その当時です。

伊藤 やっぱりお呼ばれになることがあるわけですか。

小田村 そうですね。

佐道 さっきお話に出た海原さんは国防会議の事務局長で、首相直属のポストにいるわけですね。これとは接触はないわけですか。

小田村 私のところは接触はなかったです。

■内閣審議室長 （8） 山中貞則総務長官

伊藤 山中さんはなかなか個性的な方だということですが、山中さんとの接点も相当あるんですか。

小田村 山中さんとの接点があります。総理府の大きな問題は山中さんに報告しなければなりませんから。それから、総理府というところとあちこちにあるわけですね。例えば恩給局とか統計局。それは若松町にありますし、学術会議もありますね。

伊藤 お互いに関係ないようなものばかりじゃないですか。

小田村 宮内庁もありますしね。ですからそういうところを集めて、週に一回昼食会があったんです。そこで、そういうところの状況を山中さんに報告する。私なんかがしゃべると叱られるんです。「おまえ

なんかしょっちゅう会っているんだから、いつでもできるだろうけれど、ここに来ているのはみんな遠くから来ているんだから」という（笑い）。

伊藤 これは誰が主宰するわけですか。

小田村 それは長官、山中さんです。

佐道 それは定例というか、ずっとやっているんですね。

小田村 定例です。

伊藤 その間のいろいろな出来事について報告するわけですか。

小田村 そうです。特に報告することがなければ何もないんですが。

伊藤 黙っていればいいんだ（笑い）。

佐道 先ほどのお話で、審議室長は朝食会をおやりになつていらっしゃるんですね。

小田村 それは三室長会議で、月に一回でした。

佐道 これは場所はどういうところでやるんですか。

小田村 場所は官邸です。官邸の小食堂でした。

伊藤 官邸といえば、見事に動きましたね。僕はびっくりしました

「二〇〇三年十月、旧首相官邸を公邸にするため、曳家工事によって、五十メートル移動させた」。

小田村 そうですね。ああいうことができるんですね。

伊藤 行つてみたら動いて、なくなつていた（笑い）。

佐道 例えば総理の秘書官の方とはあまり接触はないですか。

小田村 総理の秘書官とはあまり接触がありませんでした。誰だったか、あのとき大蔵から行つていたのは、福島「譲二」だったかな、熊本県知事になりましたね。

伊藤 副長官はどうですか。

小田村 「内閣官房」副長官は小池さんと、三原「朝雄」さんだったかな。総理府「総務副長官」が砂田さんですね。

伊藤 そこの接点は非常に多いわけですか。

小田村 それはときどきあります。特に砂田さんは国会にしょっちゅう呼ばれますので、お供しなければなりませんので。

伊藤 それは国会の何委員会ですか。

小田村 内閣委員会が災害対策委員会かどちらかですね。

伊藤 接点は官房長官のほうが多いわけですか。

小田村 接点はどちらかというと総務長官のほうが多いでしょうね。

伊藤 官房副長官よりも多いですか。

小田村 そうですね。

伊藤 山中さんという人については、どんなご印象でございましたか。

小田村 山中さんは前から大蔵政務次官をやられましたし、その後も、政調会長ではありませんが、政調会のなんというんですか、重鎮というのかな。

伊藤 会長代理みたいなものかな。

小田村 そうですね、もう政調会を牛耳つておられましたから。ですから法案関係でお願いするときには、山中さんのところをお願いに行くわけです。各省ともみんなそうです。ですから、前から存じ上げておりました。

佐道 この当時から政策通で通つていたということですか。

小田村 そうですね。なかなか毀誉のいろいろあつた方ではあります。そういうところに陳情に行くときと見返りを要求するとか、そういう話も聞いたことがあります。私はそういう経験はなかったですけどね。

佐道 山中さんといえば、自民党税調のドンという感じですね。

小田村 特に税調はご熱心でした。

佐道 この当時からそんな感じでしたか。

小田村 そんな感じですよ。私なんか馬鹿にされるんです。「おまえがやっていたのは税の執行で、本当の税制じゃないんだ」といって（笑い）。

佐道 言いそうだな（笑い）。

伊藤 それは長くやつておられるわけですから、下手な役人よりよっぽど知識があるんでしょうね。

小田村 それはよくわかっていますね。

佐道 絶対的な自信がおりなんでしょうね。

伊藤 しかも力があるときたら、威張られても、なんともしようがないですね。

佐道 でも「佐藤さん、佐藤さん」とおっしゃっていたわけですか。

小田村 ええ。もう佐藤総理のことは口を極めてほめていましたね。

佐道 いちおう中曽根派なんですけれどね（笑い）。

小田村 それで、絶対に中曽根派とは言わないんですよ。あれは何会だったかな、新政策研究会といったかもしれないですね。正式の名称を言うんです。それで「中曽根の子分じゃないんだ」と言うわけです。

佐道 その会にはいるけれど、子分じゃないということですね。

小田村 そういうことですね。だから中曽根さんの悪口は平気で言われるんです。

伊藤 中曽根派の人はみんなそうです（笑い）。いや、おかしい。

小田村 山中さんは昔は大酒飲みだったらしいですね。ところが糖尿病になりまして、いまでも足はちよつとご不自由なんです。酒を一切やめられたんですね。ところが、これは田代さんに聞いたんだったか、また飲んだことがあって、それでちよつと具合が悪くなって、中曽根さんが駆けつけたことがあったらしいですね。そのことはあまり詳しいことは知りませんが、酒は一切やめておられた。

伊藤 酒をやめると、あれはなんとか大丈夫なものですかね。

小田村 そうなんでしょうね。

■内閣審議室長 (9) 防衛庁への異動

伊藤 あと五分というところですが、さつき皆さんが行くのをいやがる防衛庁にまた行くことになりますね。昭和四十七年に経理局長に就任されますが、先生はおいやじゃなかったんですか。

小田村 私は特にいやではなかったですね。

伊藤 「特に」というのは、一般的には――。

小田村 田代さんが経理局長から替わるので、そのあと、ということなんです。ちよつと探しても、代わりになるような人はあまり見当たらなかったんですね。そうだとすると、私が行かないと具合が悪いかな、という感じがいたしました。だから冗談で言うんです。一切黙

っていたんですが、新聞に出たらしくて、栗田（啓二）君に「ここに出ていないじゃないか」と言われて、「白状する」と言ったんです。総理府にいたのが十月十日（とつぎとおか）なんですよ。八月十日から六月二十日までですから、ちよつと十月十日（とつぎとおか）なんです（笑い）。

武田 めでたい（笑い）。

佐道 めでたいと言えるのか（笑い）。

伊藤 これは行ってくれないかと打診されて、ということですか。

小田村 そうですね。行ってくれということでした。これは田代さんが希望されたんですね。

伊藤 前任者が、ですか。

小田村 田代さんが引つ張ったんです。

伊藤 その人事を決めるのは、次官ですか。

小田村 ええ、次官ですが、山中さんと竹下さんだっただと思います。

両方に。あのときは、防衛庁長官は江崎「真澄」さんですね。副長官には、内海さんか島田さんかどちらから話があったと思うんですが、大臣同士の話だろうと思います。

佐道 実質的に防衛庁の経理局長の場合は、ずっと大蔵から来ておられたということですからね。

小田村 そうです、防衛庁発足以来そういうふうになっていましたね。

伊藤 誰が行かなければならないわけですね。

佐道 うすうす、とは思っておられましたか。

小田村 それは全く考えていなかったです。というのは、慣例からいえば審議室長は二年が原則でしたからね。だからたぶんもう一年はやらなくてはいけない、と思っていたものですから。

伊藤 じゃあ、ちよつと思いがけなく、ということですか。しかしよく考えてみたら、代わりといったら、自分が行く以外にしようがない

だろうなというさっきのお話のようなことなんです。

小田村 はい。

佐道 防衛庁のこととか、防衛の問題をご存知の方のほうがより良いわけですね。

小田村 そうですね。

伊藤 この間に十年あるわけですね。やっぱり防衛庁もだいぶ変わって、ということだろうと思いますが。

小田村 昭和三十四年から四十七年ですから、十三年ですか。ずいぶん変わっていると思います。しかしあのころ仕事の相手をしていただいた方が、幕僚長前後になっていたわけですね。海の石田「捨雄」さんが海上幕僚長になっていたかな。陸は曲「寿郎」さんでしたから、曲さんは外国にいたときだったと思いますが、だいたいあの前後の方は、むかし親しくした方でしたから。

伊藤 それは制服の方ですね。内局のほうはガラッと変わっていたということですか。

小田村 島田さんは前に人事課長をしていましたから、島田さんは知っていました。あとはだいたい替わっていましたね。久保さんは別のところで知っておりましたけれどね。官房長は――、田代さんがなつたんですね。内局はかなり替わっておいりましたね。昔親しくしていた玉木（清司）君は滋賀の県警本部長に出ていましたが、伊藤（圭一）君は残っていました。また若いところは、防衛庁で採用した人たちが中心でした。

伊藤 そういう人たちは上がってきているわけですね。

小田村 ええ、上がってきて、だいたい課長近くになっているわけですね。

伊藤 じゃあまあ、元いた古巣にという感じは多少あるわけですか。

小田村 そういう感じはしますね。

伊藤 わかりました。この次、経理局長の時代のお話を伺いたいと思います。この経理局長もなかなか大変だったと思います。

小田村 これは大変だと思います。時間がかかると思います。

伊藤 四次防から始まって、そのお話を是非お願いしたいと思います。防衛政策が変動する時期ですので、そのへんのことをいろいろな方から伺うと、それぞれちよつと違った感触ですから。

小田村 まだ私は外にしやべったことがないことがあるんです。特に、PXLをなぜやめたかということですね。

佐道 それは謎の一つになっているんですね。

小田村 そうでしょう。あの実態をお話しします。

伊藤 お願いいたします。

佐道 先生は退官されたあとも、日本戦略研究センターの理事をされたり、防衛問題にもずっと関与されておられるので。

伊藤 同じところにおいても、見えないこととか、そういうことはあるんですね。

小田村 そうですね。

伊藤 ちよつとした角度の違いで、見えないということですね。ですから私どももいろいろな方からお話を伺わないと。微妙に違ってきて、どの辺があれなのかな、ということが研究なんですね。

小田村 夕べ三時頃まで起きていたものですから。選挙速報を見ていました「前日（二〇〇三年十一月九日）、第四十三回総選挙があり、即日開票された」。

佐道 予想されておられましたか。

小田村 だいたいいい人が落ちちゃったんで、がっかりしているんです。

伊藤 例えばどなたですか。

小田村 東京では山谷えり子が落ちてしまいました。

武田 相沢「英之」さんも。

小田村 相沢さんが落ちましたね。それから米田建三が落ちた「山梨」。一番大きいのは、高市早苗が落ちたことでしょうね。

伊藤 奈良だっけ。

小田村 ええ、奈良です。

佐道 山中さんは最長十九回「当選」ですね。

小田村 新潟では吉田六左エ門が落ちたし、なかなかやりにくくなります。静岡の城内「実」君が通りましたからね。熊谷「弘」のところ「静岡七区」ですね。

伊藤 いずれ伺いますが、小田村先生も政治家になろうという気は全然なかったのか。

小田村 全然なかったですよ。

伊藤 全然ないんですか。

小田村 あんな朝早くから起きてね（笑い）。

伊藤 議員さんの姿はよくごらんになっていたと思いますね。そういうのを見て、なりたいたいと思う人と、なりたくないと思う人の差ですね（笑い）。どうもありがとうございました。

〈以上〉

小田村 四郎

オーラルヒストリー

第 10 回

防衛庁経理局長時代（1972～1974）

【2003年12月11日（木）14:00～16:00】

（於：政策研究プロジェクトセンター）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

記録・編集：丹羽 清隆

第 10 回質問項目

1. 今回は先生が 72 年 6 月、防衛庁経理局長に就任された時代のお話をお願いします。先生が経理局長に就任されたのは、四次防の策定が大詰めになった時期でした。2 月に四次防の大綱が先に決まっており、10 月 9 日に「主要項目」が国防会議・閣議で決定されました。先生が移られた時期での四次防の策定状況についてお願いします。
2. 同じく 10 月 9 日、主要項目が決定されると同時に、それまで国産化の方針であった、次期対潜機 PXL について国産化方針が「白紙撤回」されるという事態が起きました。これには大蔵省の意向もあったという話もありますが、不明なところも多いこの問題についてお願いします。
3. 10 月 9 日には、「文民統制の強化に関する措置」も国防会議・閣議で決定されました。これは沖縄返還にともなって、予算の先取りが問題とされたものですが、予算ですから経理局も関係していたと思います。この問題についてご記憶の点をお願いします。
4. 四次防策定の紛糾から、田中首相は防衛力増強を四次防で打ち止めにしようとし、「平和時の防衛力」構想策定に踏み切ります。実際は、久保卓也防衛局長がこれにあたるわけですが、この「平和時の防衛力」は一度発表されましたが、野党の反対により現実化しませんでした。先生はこの「平和時の防衛力」構想について当時どのように考えておられましたか。
5. 上の質問にもある久保氏は、その後「基盤的防衛力構想」を考案し、それを土台に「防衛計画の大綱」を作成しました。久保氏および「基盤的防衛力構想」「防衛計画の大綱」について、当時どのように見ておられましたか。
6. 1973 年 5 月、山中貞則氏が防衛庁長官に就任されます。内閣審議室時代以来ですが、防衛庁長官としての山中氏についてのご印象などをお願いします。

7. 山中防衛庁長官は長官就任後の6月、四次防以降の防衛計画を長期計画とせず、単年度方式に切り替えるという方向を打ち出したと伝えられています。これは防衛計画のあり方や防衛力整備の進め方に大変大きな影響を及ぼす問題だと思いますが、内部的にはどうだったのでしょうか。
8. 1973年10月、石油ショックがあり、日本も低成長時代に入るとともに、防衛予算も削減を迫られます。石油ショック後の防衛費問題についてお願いします。
9. 1974年2月、防衛庁は、防衛装備品の輸入で発生する為替リスクを、従来の業者負担から防衛庁負担へと切り替える方針を打ち出したと伝えられています。だとすると予算的にはかなりの負担を伴うことになると思うのですが、防衛庁内部ではこの為替リスクの問題はどのように議論されていたのでしょうか。
10. 1974年に入っても、73年度予算で計上されている主要装備品の契約が、資材高騰などの影響で大変難航しました。山中長官は、防衛産業側の狙いは物価スライド制でそんな契約は考えないと表明します。しかし予算計上したものが契約できないというのも異常事態だと思いますが、この問題についてはいかがだったのでしょうか。

※今回は以上のような問題を中心をお願いします。

■「補」三島由紀夫と福田赳夫

伊藤 前は、一九七二年六月に防衛庁の経理局長に行かれた、というところまでお話をいただきました。ちょうど経理局長になられた年の二月に、すでに四次防の大綱だけが決まっております、十月に主要項目等が国防会議と閣議で決定がされるわけですが、ちょうどそういう状況の時でしたが、その段階では四次防の策定状況がどうなっていたのかということをお伺いしたいと思います。

その前に、補充されることがございましたら、お願いします。

小田村 前のところで申し落としたんですが、三島「由紀夫」さんの話をしましたが、三島さんが政治家で一番好きだったのは福田さんなんです。

伊藤 好きというのは、ただ好きというだけではなくて、おつき合ひもあったということですか。

小田村 そのようですね。そんなにしょっちゅう会っていたわけではないでしょうが、憲法問題などで非常に共感したという。その前に、竹下「登」さんの前の官房長官が保利茂さんだったと思うんですが、保利茂さんの秘書官が宮下創平君で、宮下君が伊沢「甲子麿」さんと同郷で親しかったので、そんな関係で三島さんは保利さんのところにもたびたびご進講していたようです。それだけ申し落としました。三島さんに、「なぜ福田さんが好きなんだ」と聞きましたら、「いや、なんとなく気が合うんだ」と言っていましたね。

伊藤 人間関係というのは、そういうことがよくありますよね。なぜ好きだと言われてもちよつと困る（笑い）。

■防衛庁経理局長 (1) 四次防1——防衛庁原案策定

小田村 本日の本題ですが、六月に「防衛庁経理局に」まいりまして、「七月に」総裁公選で田中内閣が成立いたします。江崎真澄さんが防

衛庁長官だったんですが、増原恵吉さんに替わります。江崎さんの送別会の時に、政局の問題を座談で話されました。そのとき福田さんが負けて、党を割るかどうかという話があったんです。江崎さんはそのとき、「いや、それはもうできない」と言っていました。というのは、「昔と違って自由民主党の下部組織を今では全部固めてしまつてある。だから新しく党を作つて下部組織を作っていくことはほとんど不可能だ。だから福田さんが党を割ることはあり得ない」ということを言っておられました。これはたいへん面白い話だと思います。江崎さんは田中さんに投票したわけですからね。

それから増原さんは、久しぶりに防衛庁に戻られたわけですが、昔ほどの力はもうなくなっていましたね。昔は、いわゆる「天皇」と言われて大変信望もありましたし、力もあつたんですが、ちよつと衰えておられました。

伊藤 それはお歳のせいですかね。

小田村 そうですね。そのときに記者会見で、「どうも専守防衛というのはよくわからん」という発言をされたんですね。それで新聞にでかでかとお出ました。それで増原さんはもう一回記者会見をして釈明をされました。「いや、専守防衛というのは専守防衛というのを間違えておつたんだ。専守防衛だけでは防衛は全うできないので、そういう意味で言つたんだが、専守防衛というのは新しい用語で、昔の専守防衛とは違う」。当時防衛庁では専守防衛というのはよくわからないものですから、戦術用語でいえば戦略守勢のことなんだ、と解釈しておつたわけですね。だからそのへん、増原さんは自分で間違えたんだというところで釈明された。そういうことがございました。

伊藤 格好のエサになりましたね。

小田村 そういうことです。それで当時四次防について私が言われたのは、経費の計算をもう一回見直してもらいたいということなんです。『国防』という雑誌がございまして、十二月号に久保「卓也」さんが四次防が出来上がつてからのことを書いているんですが、そこにそれまでの経緯がちよつとございます。中曽根さんのときに、次期

計画ということで、たしか累計で五兆八千億という数字が出たと思うんです。当時中曽根さんが、「陸は八〇%、海空はまだ四〇〜五〇%」といったように記憶しています。

伊藤 充足が、ですね。

小田村 充足というんですか、本来のものより、ですね。その頃の五兆八千億が、私が行きましたときにだいぶ縮まってきたいて、五兆二千億ぐらいになっていたと思うんですね。中味はいままで防衛庁で練り上げたものですから、そう大きくいくる必要はないということとで、その経費の積算をもう一回見直してほしいということでした。そこで、私は精算の単価を統一する必要があると思って、昭和四十七年度予算の予算単価の基準でやってもらいたいということとで、もう一度はじき直してもらったんです。したがって、給与ベースも四十七年度プラス定期昇給だということとで全部やってもらいました。中味で多少いじくったものがあるかもしれませんが、あまり大きな修正はしておりません。それを計算した結果、たしか四兆八五〇〇億ぐらいになったと思うんですね。ただし、今後物価の変動、あるいは人件費の変動は枠外だという原則にしておこう、ということにしたわけです。それができたのが八月頃だったと思います。ちよつと私は時期を忘れたんですが、一応防衛庁の原案ができたということで、国防会議と大蔵省に持っていくって、これでひとつ四次防の作業をしてくれということとを、国防会議に依頼しました。

■防衛庁経理局長 (2) 四次防2——大蔵・防衛合意案

小田村 ところが、例の田中訪中の問題が表に出て来ましたから、それどころじゃないということで、ずつと延びてしまいました。結局、田中さんが「九月」二十九日に調印をして、二十九日か三十日に帰って来られるわけですね。前から官邸のほうに陳情していたと思いますので、九月三十日(土)に田中さんが日本に帰ってきて、じゃあ四次

防やろうということを決断されて、事務局のほうにそういう指示をされました。

そして十月一日(日)に、大蔵省から連絡がありまして、「これから四次防の査定の原案の内示をするから取りに来い」という。すでに大蔵省はつくってあったと思うんですね。しかしマスコミを避けなければいかんということで、大蔵のほうには内示を貰いに行かせました。が、帰ってきてから、作戦を防衛庁の中でやっていると非常に目立つから、島田「豊・防衛事務次官」さんが、じゃあ、あそこに頼もうということとで、六本木の近くの旅館だったか料亭だったか、島田さんが知っているところがありまして、そこにみんな集まりまして、そこで受け取った内示に対する方針を決めて、復活をやるということにしました。幸いに、これは全くマスコミに知られませんが、内密にやることができました。

そうこうするうちに、新聞でもやつとわかってきました。何が問題なのかというと、結局飛行機を輸入するか国産にするかという問題でもっぱらそれが表に出て来たわけです。実はこの国産問題は、こういうことなんです。国防会議に提出をいたしましたから、海原「治・国防会議事務局長」さんを一回ご招待したんです。そのときに海原さんが言っておったのは、「いま総理の頭の中にあるのは四次防の内容と金ではないんだ。問題は日米関係だ。日米関係の貿易摩擦、貿易黒字をどうするかということなので、日本は極力輸入を優先するという姿勢を示さなくてはいいかん。したがって飛行機については、総理は必ず輸入にしろと言われるはずだ」ということなんです。そういうことをさかんに海原さんは言っていました。海原さんと総理の関係がどれぐらい親しいかはよくわからなかったんですが、その当時、そんなに親しいということを知らなかったものですから、海原さんが想像で言っているんだらう、というふうに軽く考えておったわけです。

ところが、十月一日から始まって、三日(火)だったと思いますが、相沢「英之」主計局長から私のところに電話がありまして、「実は四次防の査定について、総理から飛行機を輸入にならんかと言われた」

と言うんですね。何が問題かというと、T2という練習機と、それを改造した戦闘爆撃機（支援戦闘機といっていますが）F5T2改、のちのF1ですが、これが輸入にならんか、ということでした。相沢さんは「しかし君のほうとしては、これは輸入では困るんだろう」という。というのは、T2はすでに試作機を発注してあったわけですね。ですから、それをいまからF5に換えろと言われてもしょうがない、それは困るだろうというので、「それは全く困ります。あくまでも国産で行きたい」ということを相沢さんに話しました。相沢さんは、「それはよくわかる。しかし総理もそう言われるけれど、そんなに固いあれではないと思う」と言われたんです。つまり応援してくれたわけですね。

そういうことで、いずれこれは総理の了承を得られると思っていたわけですが、大蔵省としてはちよつとわからないから、一応ペンディングにしておく。予算経費としてはとりあえず輸入のF5の価格で計上しておく、という話で、だんだん金額を詰めていきました。

四日（水）ぐらいには、だいたい骨格が固まってきたんですね。それで大蔵省の査定で、多少装備品等で数を減らされたりしたものがありました、四兆六三〇〇億というところで、田代「一正」官房長も「もういいだろう、このへんで手を打とうじゃないか」と言い、久保さんも同じような意見でした。それじゃあそういうことで合意しましょうということ、大蔵省との内々の合意はできたわけです。

当時大蔵省は、「主計」局長が相沢さんと、次長は長岡「実」君でしたか、それから主計官が宮下君です。ですからそのへんは話がすぐ通じますね。そこで最終的な手打ちとして、四日（水）の夜だったと思うんですが、増原大臣と大蔵大臣との会談をやりました。これはどこだったか、ホテルオークラだったかと思うんですが、そこで大臣同士の間談をやりました。要するに事務的に合意はできていますから、手打ちだけだからすぐ終わると思ったんですが、なかなか終わらないんです。植木「庚子郎・蔵相」さんも往年の面影はありませんで、話が非常に長いんですね。それでいろいろなところに話が飛ぶんです。

植木さんはたしか法務大臣をおやりになったと思うんですが、「私は法務大臣をやって、検察というのは実に素晴らしいところだ」という話をしたり、いろいろなことがありまして（笑い）、結局二、三時間かかりました。増原さんはイライラしているわけですよ、いつまで経っても本論に入れないものだから。でも結局、そこで合意できました。伊藤 その場合は、「小田村先生は」同席なさっているわけですか。

小田村 そうです、同席しております。向こうも主計官がおりましたし、次長は来ていたかな、「大蔵・防衛の」両方とも同席しております。これで一応終わったということですが、あとに残ったのが、飛行機の国産問題なんですね。

伊藤 それはまだペンディングのままなんですね。

小田村 ペンディングのままです。これは国防会議に納得してもらって、いずれにしても総理のご了承を得なくてはなりません。それが最後に残っていました。

それでいちおう大蔵省関係は終わったわけです。大蔵省も国産であろうと輸入であろうとどちらでもいいと言うんです。それは防衛庁に任せるといいます。ですから反対しているのは海原さんだけなんですね。そういう図式でした。ただ新聞では「大蔵・防衛対立」ということで毎日毎日報道されていました。大蔵省は輸入を主張し、防衛庁が国産を主張しているという図式で、新聞には毎日出ていたわけですが、裏はそうではなくて、「輸入を主張していたのは」海原さんだけなんです。

■防衛庁経理局長（3） 四次防3——PXLの中止

小田村 それで、大蔵省にはいろいろ面倒を見てもらったから、手打ちの宴会をやるということ、大蔵省を招待したんです。これは大臣招待で、大蔵大臣は出ませんが、向こうは鳩山「威一郎」次官と主

計局長と次長、主計官を招待して慰労したわけです。大変和やかに進みまして、だんだん座が乱れてくるわけですが、そこで私と相沢さんと宮下主計官が、机から離れた畳のところで飲んでいたわけです。そのときに、「ところで例の飛行機の問題はどうするか」ということですね。「それはもう、絶対に防衛庁としては従来の線以外には考えられない」とこちらは言っておったわけです。そうしたら相沢さんが「わかった。ついては、もう一つ問題があるんだ。それはPXLだ」と言うわけです。要するにFST2改を認める代わりに、代償としてPXLの開発をやめるか、ということなんです。

実は私も防衛庁に行きましてから部隊視察をやりました。岐阜にまわりまして、川崎重工も見せてもらったんです。そうしたら、川崎の岐阜ではPXLの木型ができあがっているんです。それで、ここまで進んでいるのかとびっくりしたんです。

ところがどうも海幕では、斎藤（國二朗）さんが防衛部長でしたが、何度PXLの話聞いても、どうもよくわからない。要するに海幕が説明するのは、対潜作戦がいかに重要であるか、ということばかりなんです。それはわかっていながら、いまのP2JないしP3Cでは駄目で、国産が必要なんだという説明が聞きたいんですが、よくわからない。何が違うかという、結局PXLはジェット、P2JもP3Cもプロペラなんです。それしか違いがないんじゃないか。だけど、相手は潜水艦ですから、何もジェットである必要はないわけで、どう考えてもよくわからない。川崎でそんなところまで進んでいるのはかわいそうですが、私は、FST2改の重要性に比べれば、PXLは問題にならない。それは結構ですよ、という返事をしたわけです。相沢さんは、「よし、わかった」と言われました。これがPXLの問題なんです。

伊藤 それをやめないか、というのは、もっと上の方からのあれ「指示」なんですか。

小田村 そうではないです。ですから、主計官と次長、主計局長、そのラインです。もっぱら性能あるいは金額の問題です。PXLは四次

防ではどうなったのか、全部ペンディングのままだったと思うんですね。まだ開発段階ですからね。

伊藤 だけど川崎が木型をつくっているということは――。

小田村 ということは、海幕と密接にやっているわけです。

伊藤 しかし出来上がってからでないとお金は払わないわけですね。

小田村 当然そういうことです。だから川崎が危険負担をしているわけです。そういうことはよくあるんです。

伊藤 海幕は大変だな。

佐道 あとでなにがしかの面倒を多少見てあげるということになるんじゃないか。

小田村 何か見てやらないとかわいそうですね（笑い）。

佐道 そうですよ、やりつ放しというのも（笑い）。それでは海幕は、国産化の意味をあまり明確にできなかったわけですね。

小田村 少なくとも私が聞いただけでは、納得できるような説明はありませんでした。ところが不思議なことに、いままで海幕はP3Cについてはほとんど研究していなかったんです。これも怠慢だと思うんですが、ですからP3Cを見せてもらってびっくりしたんですね。特に内蔵機器が素晴らしいということでした。翌年か、もう少しあとですか、坂田（道太）さんになってからですか、P3C一辺倒になりました。坂田さんにちよつと「海幕はなんでP3Cにそんなに執着するようになったんですか」と聞きましたら、「中味を見て、それでびっくりしたんだと思う」と坂田さんは言っておられました。要するにPXLなるものは、そこまで固執するような代物ではなかったんですね。

伊藤 海幕自体も、そのことがだんだんわかってきたわけですね。

小田村 あとでわかるわけです。P3Cを見せてもらって。

佐道 いまのお話のように、対潜哨戒機というのは、飛行機の外側だけつくっても、探査探知をするレーダーとか、そういうものがないと役に立たないわけですね。ガラだけつくっても中味がないとあまり意味がないものです。海幕は木型段階まで行って、P3Cの中味を見てびっくりしたということは、中味についてどの程度考えていたんで

しょうか。

小田村 そこは、私は不思議でしようがないんですけれどね。

佐道 不思議ですね。

小田村 もうそのとき私はいなかったものですから、聞くわけにもいかなかったんですが。

佐道 PXLは国産が白紙還元とか白紙撤回とかいって、それが大きく言われますが、中味はいまのような話だったんですね。

小田村 そういうことです。中味はそういうことです。あと残すところは飛行機の国産問題だけになった。そのほかは、情勢判断も防衛構想も全部、国防会議とすり合わせが済んでいる。

■防衛庁経理局長

(4) 四次防4 — 10・7 国防会議幹事会

小田村 そして七日(土)に、国防会議の幹事会を開いたわけですね。幹事会というのは次官級の会ですが、土曜日「の午前中」に開催いたしました、そこでみなさん異論がない。ただし、飛行機の国産問題が残る。これは時間を改めて今日午後やろう、ということになりました。午後、場所はどこのホテルでしたが、そこで海原さんと防衛庁との対決をやったわけです。

このときに、田代さんが素晴らしいなと思ったんですが、海原さんは非常に技術方面が詳しいですから、これに太刀打ちできるのは幹部にはいない、したがって空幕の専門家か、あるいはほかの人間を、ということでしたが、田代さんは筒井良三君にやらせよう、と言われたんです。のちに技術研究本部長になりました。これが内局の装備局の航空機課の部員でおったわけです。彼なら大丈夫だと思うということで、海原氏の追及に対する答弁を筒井君に任せたいんです。

それで、ずいぶん鋭い質問が海原さんからございましたが、筒井君は一步も譲らないで、てきぱき答えたんですね。その前に私は空幕の

防衛課長が横田君という一佐だったんですが、その横田氏に、「いたいF5はどうなんだ」と話を聞いたんです。そうしたら、「私もF5は操縦しました。操縦したけれど、どう考えてもT2のほうがいい。F5は発展性がない。T2はまだいろいろ使いようがある」という。この人は非常に真面目な人でしたが、わりあい早く亡くなりました。これはとてもF5にするわけにはいかん、と思っていたんですが、筒井君は見事でした。

私は筒井君に、あのときの記憶はその後何か書き留めてあるかと聞いたら、持っていると聞いていました。ですからいまなら筒井君にお聞きになれば、そのときの資料、応答要領があると思います。

伊藤 その対決で、海原さんは認められたわけですか。

小田村 いや認めないんです。一応そこで終わって、それではこういうことで、国防会議に任せるということになったんでしょうね。

その会議の時に、官房副長官だった後藤田「正晴」さんが感心しまして、「なかなかよく勉強しておる。ところで君の階級は航空自衛隊のどのくらいのものなのか」と聞いたんです。そうしたら筒井君が「いえ、私は東京工業大学出身の工学士でございます、制服ではございませぬ」という答弁をしました(笑い)。

帰りがけに歩きながら、後藤田さんが「いや、防衛庁もよく頑張るな、これはおまえたちの勝ちだよ」と言われました。それで安心して帰ったわけです。それで国防会議は九日(月)に開催されることが決まっていたものですから、これで一応終わった、あとは書類の整備その他をやるということで、翌日の日曜日もつぶしてやっていたわけです。

■防衛庁経理局長(5) 四次防5 — 10・8 国防会議前日

小田村 ところが日曜日にまた混乱があるわけです。あのときは防衛課長は伊藤「圭一」君だったかな、海原さんがまた防衛庁に來られて、

「昨日いろいろやったけれど、とにかく総理の決意は固いぞ。ついてはF5をなんらかの形で入れておかないと、あしたの国防会議で決定できないぞ」ということをさかんに言いふらしたわけです。誰のところにやってきたのかな、伊藤君か久保さんか、あるいは島田さんかわかりませんが、そういうことをさかんに言ってきた。それでまた混乱しまして、それじゃあ一応案だけでもつくっておこうということで、また空幕の横田君に言いまして、一部、練習段階か装備段階かどうか忘れましたが、F5を若干入れる、FST2改と共用するような形の案をとりあえずつくってもらいました。訓練体系から変わってきますのですね。そんなことをどうしようかということで、いろいろ協議しておったんです。

そして、明日国防会議があるから、ほかの大臣にも応援してもらわなくてはいいかんということになりましたが、通産大臣は中曽根さんだったんですね。中曽根さんはもとも国産論者で四次防の発案者ですから、大臣から中曽根さんに電話をしてもらって、応援してくださいと言いました。あと二、三の大臣に根回しをもらいました。

それから官邸のほうはどうしようかということで、どうにもならない。官房長官は二階堂「進」さんですね。二階堂さんではどうにもならないので、やっぱり後藤田さんかな、ということ、後藤田さんのお宅に、島田次官と私が伺ったんです。ところが後藤田さんというのはああいう人ですから、絶対に言質を与えないんですね。のりくらりと言っていて、さっぱり要領を得ないわけです。これもよくわからん、とにかくお願いしますということだけで帰ってきたわけです。どうも、いろいろ議論したけれどもなかなか結論が出ずに、だんだん遅くなってきたわけです。

そうしましたら、何時頃だったか、十時か十一時頃だったと思いますが、宮下主計官から電話がありまして、「どうも今日の海原さんの動きはおかしい。この問題は増原さんが直接田中総理に申し上げるべきだ。そうすれば必ず国産で行けると思う」と言ってきたわけです。「それはありがたい、じゃあ大臣に話をします」と私は答えたわけ

です。そのときに宮下君が念を押したのは、「それは大蔵省も全面的にバックアップするけれど、PXLはやめてくれる「だろう」な」ということだったんです。

それで、前の宴会の時の相沢さんとの内約束は誰にも言っていないかったものですから、そこに増原さん、次官、防衛局長みんなおりましたので、その趣旨を伝えました。そうしたら増原さんは「わかった、PXLの問題についても、それはやむを得んだろう」と言われました。海幕長はいませんでした、まだ予算措置にも入っていない開発段階の問題ですから、やむを得んだろうというふうに増原さんが裁定を下されたわけです。

■防衛庁経理局長（6） 四次防6——10・9国防会議当日

小田村 それで翌日、増原さんが会議の始まる前に総理に会われて、それで国産ということを確認された。そのときにたしか後藤田さんが代わりに「PXLはその代わり白紙に戻す」と言われた。国防会議の決定のところではもう一つ早期警戒機の国産白紙還元も載っています、これはもつと弱かったんです。E2Cになるわけですが、E2Cというのはお椀を上にかぶせてありますが、そうではなくて、僕はよくわかりませんが、技本のほうはフェーズドアレー方式ということで新しいものをつくりたいといっていました。ただこれは海のものとの山のものともわからなかったもので、これも併せて、とりあえずは輸入でいこうということになるわけです。この二つが白紙還元になったわけ

です。ただ不思議なのは、私が翌朝起きたときに、石田「捨雄」海幕長から電話がございまして、「PXLが駄目になったという話じゃないか」ということを聞かれたんです。「その話はまだ直接聞いていませんが」ということで、そこは過ぎしたんです。石田さんにその後、「あの朝、そういうお電話をおかけになったじゃないですか」と聞いて

たんですが、石田さんはすっかりそれを忘れちゃっているんですね。私は確かに石田さんの声で伺ったんですね。みなさんもうくたびれていたものですか（笑い）、忘れちゃったのかもしれないけれどね。それで、国防会議で一応決定になったということです。

伊藤 国防会議の席上では、議論にならなかったんですね。

小田村 ならなかったんです。その前に総理は了承しておられた。

伊藤 海原さんはそこでは何も――。

小田村 何もおっしゃいません。後藤田さんから、もうそういうふう

に伝わっていたと思います。国防会議の前日までそうやってワーツとやっていて、国防会議というのは儀式じゃないかと思っていたものですから、前の日には――。

小田村 これはちよつと、事務局長がそこまで頑張るといふのは異例なんです。普通は、中曽根さんというお茶汲みではありませんが、そういうことは所管省の自主性を認めるというのがあり方で、あそこま

でちよつかいを出すのは異常だと思えますね。

伊藤 それを田中総理の意志として言ったということは、どうなんですかね。

小田村 田中さんに吹き込んだらと思うんですね。これもあとでわかりましたが、海原さんは小佐野「賢治」さんと非常に近かったんですね。大蔵省の為替局にいたベテランで、小笠原君というのがしばらく国際興業に行っていたことがあるんですが、「国際興業にいたときに、海原さんはよく来たのか」と言ったら、「いや、しょっちゅう来ていましたよ。役人であんなに何度も来ていいのかな、と思つた」という話をしていました。だから小佐野さんを通じて、田中さんともわりあいに接触する機会があったんじゃないかな、という感じはいたします。ですからPXLは、そういうことで全く政治的な問題ではなくて、事務的な問題なんですね。

伊藤 でも問題としては、非常に大きく新聞その他で取り上げられましたね。

小田村 あと、ロッキード事件はトライスターではなくてP3Cじゃないかとか、これは全く関係ありません。私もこの話を外にするのは今日が初めてです。いままでしゃべったことはないです。特にこれは私が張本人ですから。相沢さんと酒の席で話をして、その結果また宮下君から電話があったということです。

■防衛庁経理局長（7） 四次防7―― 後日談

伊藤 当時もそうですし、そのあとでも、新聞記者からのインタビューでそのことを聞かれたことはないんですか。

小田村 ありません。ただ、こういう事件があるんです。久保さんはそれで次官を棒に振っちゃったんですが、五月頃、四次防のときにPXLが白紙還元されたということは、その後もいろいろ新聞沙汰で、それはどういふことかといふいろいろ模索する人たちがおりました。新聞記者からいろいろ聞かれていたんでしょう。それで久保さんが記者会見の時に、「君たちはPXLのことをいろいろ言うけれど、僕が真相を教えややる。あれは後藤田副長官から言われたんだ」ということをしゃべっちゃったんです。

そのとき私は行政管理庁におりまして、その日はわりあいに早く家に帰ったんです。六時前に帰っていて、六時のニュースだったと思うんですが、テレビを見ておりましたら、久保さんがそういうことをしゃべったと言っているんです。しかし人間の記憶というのは不思議なもので、二、三年経つと全部忘れてしまう（笑い）。しかもあのときは、真夜中までみんな徹夜続きの時ですからね。だから、確かにそう言われればそうだったかな、と思つたんですが、それから風呂に入つて、風呂の中で考えていましたらだんだん思い出してくるんですよ（笑い）。いや、これは久保さん、とんでもないことを言つたと思つた。

それで風呂から上がったから、早速防衛庁に電話をしたんです。そうしたらもう駄目なんです、通じないんです。久保さんの次官室に新聞記者が入り込んで、取り巻いていて、とても話がでるような状態ではない。官房長は玉木「清司」君だったと思うんですが、これもつかまらないですね。みんなその問題でんやわんやになっちゃって、誰もつかまらない。これは困ったな、と思ったんですが、まあしょうがない。

そして翌日だったかな、結局それが大騒動になりました、久保さんが国会に喚問される。次官は慣例として国会に行かないんですが、あのときは特別に出られました。増原さんも忘れていまして、増原さんに聞きましたら、自分はそういうことで、「その時の防衛庁長官は」坂田「道太」さんですか、坂田さんに話をしてきたということです。私は増原さんをお訪ねして、それから坂田さんにもご説明しました。それから後藤田さんにも手紙を出したか何かしました。これはあなたの責任じゃなくて、防衛庁と大蔵省のあいだでまとまっていたことだといいました。後藤田さんはメモを送って、絶対にそんなことはありません、得ないということを言っておられました。要するに後藤田さんはそういうことを伝達しただけですね。総理の決断として伝達した。そのために久保さんは、次官を一年ぐらいでお辞めになったんだと思いますね。ちよつと口を滑らせたのが、あとで大事件になっちゃったんですね。

伊藤 その問題は、それでケリがついたということで、その後はあまりないわけですか。

小田村 ないですね。その後は出ておりません。

■防衛庁経理局長（8） 「文民統制の強化に関する措置」

伊藤 四次防というのは四十七年から五十一年度までですか。

小田村 それで、なんで困ったかといいますと、まだ四十七年二月、

三月には、国会の予算委員会でいろいろ問題が出て来ました。一つは、沖縄の鍋釜事件です。沖縄返還前に国防会議に附議しないで自衛隊の生活物資を持ち込んだということなんですが、これは叱られて、結局貴重な国費を使って送り戻し、次官以下譴責を受けているんですね。

それからもう一つが四次防先取り問題です。予算はもう閣議決定してあるわけですから、国防会議はインナーキャビネットなので問題ないと思うんですが、とにかく国防会議にかけていなかったのはけしからんということで、国会がストップしてしまいました。しかし、これは削るわけにはいきませんから、TCRと申しまして（FST2改にはまだ入っていません）、T2練習機とC1輸送機、RF4E偵察機、この三種を野党は当然削れというわけです。それは困る。そこで、田代官房長が、「これは前金だけ削ろう」という。前金は大了したことがないんです。ほんの僅かですから。

それから国庫債務負担行為、これが大変なんです。これを凍結するというところで手を打ったわけです。その凍結は、四次防を策定してから解除する。これを早く解除しないと、会社のほうはその準備ができないんです。ちよつとでも準備をすると、まだ鍋釜と同じで、先取りだといわれる。ですから、手が打てない。とにかく四次防が通って、契約を終わらせないとできない。それが防衛庁としては一刻も早く四次防を決めてほしいという理由だったんですね。それは政府のほうもある程度知っていたわけですが、日中の問題が片づいて、それでやつと田中さんも踏み切ってくれたということのようです。

伊藤 国防会議を通してないということは、四十七年度予算の中に

小田村 四十七年度予算に計上して、第四次防衛整備計画の大綱もつくったんですが、その中に新機種の内容まで書いてないわけですね。伊藤 そうですか、それが「主要項目」の中に入ることなんですね。

小田村 そうなんです。そのときに、例の「文民統制強化措置」ということになったわけです。それを今後国防会議に乗せるんだというこ

とを、そこで決めたわけですね。

伊藤 それは、かけなくてもいいと考えてやった行為なんでしょうか。
小田村 そこがよくわかりませんが、大綱だけ決めておけば――。それまでもバッジ・システムなんかは国防会議にかけていたんでしょうか。ちよつとわかりませんが、本来装備品の機種をどうするか。ファントムの場合は、日米協議がありますから必要ですから、バッジもそうかもしれません。そういう意味でかけていたのかもしれませんが。ですけれども、いまから言えば、国防会議にかけないでも、閣議で決まれば、私はそれはいいんじゃないかと思うんですが、考えようによつては国防会議で十分に吟味してやるべきだという議論があったんだろうと思います。

伊藤 成り立ち得るわけですね。

小田村 成り立ち得るわけですね。私は、本来そういう機種の問題は、軍事専門家に任せるべきだと思います。あと金の問題がありますが、金とか防衛産業の問題は大蔵省、通産省と協議すればいいので、そこで両方が了承すれば、それはそれでいいんじゃないかと思います。しかしこのときは、どっちにしても予算委員会がストップしたものですから、そういうことになったんだろうと思います。

伊藤 その場合、「文民統制の強化」というのは具体的にはどういう意味なんでしょうか。

小田村 具体的には国防会議にそういうものをかけます、ということだけです。いままでも入っていたんですが、通産大臣と科学技術庁長官と官房長官、それから国家公安委員長、この四人を正規の委員とする。いままで国家公安委員長は入っていなかったかもしれませんが、通産大臣と科学技術庁長官は従来から入っていたと思います。正規の構成委員以外に、必要があれば大臣が列席できるようになっていますから、入っていたと思います。それを明文化したということが一つ。

あと、自衛隊法の改正を要する部隊の組織編制の変更と自衛官定数の変更、装備の内容は、いずれも防衛計画ができておれば、国防会議にかけなくてもよかったんですが、これもかけろ、ということになり

ました。というのは全部法律改正を要しますからね。部隊の組織編制の変更、自衛官定数の変更は法律改正を必要とするものですから、それで各省との調整が必要なのですね。ですからそこまでのことは必要なかったんですが、全部これを国防会議で議論しろ、ということになったわけですね。

伊藤 それで国防会議の権限が強化されたかという点、そうはならなかったように思いますけれど。

小田村 国防会議の事務局自体は、強化されたとは思っていないでしょうね。面倒くさい事務が一つ増えたということでしょう（笑）。佐道 結局国防会議にそれらのことをかけるといだけで、実際に制服組が独走して内局の許可なくいろいろなことをやったというわけでは全然ないわけですね。

小田村 そんなことは全然関係ありません。

伊藤 ただ法律の名前だけ読むと、そう読めるんですね。

佐道 「文民統制の強化に関する措置」ということですから、これだけ読むと、何かそんなことがあったのかなと思いますが、中味は全然違いますね。

小田村 そういう問題ではないんです。国防会議の陣容を強化して、諮問事項を明確にしたという点が増やしたという点、そういうことだけです。

伊藤 沖縄のお話ですが、これは返還以前に物を送り込んだという問題だと思ふんですが、予算的な問題としてはどうなんですか。

小田村 予算的には、本土から向こうに移駐するわけですから、自分の持っている物を向こうに送っておいたということです。あそこには混成団をつくりましたね。混成団の装備といっても、武器はまだ送っていないから、医療関係とか、備品関係とか、そういう物を送っておいたんですね。それが叱られた。それは自分の部隊の物ですから、なんら予算的に増やさなくてはいかん、というものではないわけですね。

伊藤 新規の物ではないんですね。

小田村 新規の物ではないんです。

伊藤 国防会議の「文民統制の強化に関する措置」というのも、社会党に対する言い訳ですか。

小田村 はい、言い訳です。

伊藤 しかしこの問題がそもそも出て来たというのは、社会党が問題にしたんでしょうか。

小田村 社会党が問題にしたんです。揚げ足取りだと思うんですが、国防会議にかかっていないで、予算に乗っけるとは何事であるか、ということだったんです。

伊藤 海原さんは社会党に強い方だと伺っていたものですからね。ご自分もそれを非常に誇りとしておられたので、どなたかがマツチポンブだという話をされたので（笑い）。

小田村 そこまでは考えていなかったと思いますよ。

佐道 四次防策定からあまり日を置かずに、海原さんは国防会議の事務局長をお辞めになりますね。

小田村 そうですね、これで自分の仕事は終わったということですね。海原さんは、どうしてあそこまでF5に執心されるのかわからなかったんですが、例のFX問題のときからなんです。あのときに、結局グラマンF11-1Fに決めましたが、海原さんはまだできていないF5をあのときから主張しておられたんです。これはアメリカが後進国向けに開発した飛行機なんだから、これが日本には一番いい、ということ、それが十年以上経って四次防のときにも、それを今度こそ実現するということですね。どうしてだか、よくわかりませんけどね。四次防の最大の問題はこの問題だったんです。PXLに隠れちゃいましたけどね。

佐道 PXLの白紙還元の話はいまだに、なぜそうなったんだろうということを含めて、いろいろ話題になります、いまのお話は、その陰に隠れていたことなんです。

小田村 そうなんです。

■防衛庁経理局長（9）「平和時の防衛力」

伊藤 四次防策定でもめて、もめて、ということから、総理は防衛額の増強の歯止めをかけようということなんでしょう、久保さんの「平和時の防衛力」というような考え方に田中さん自身も賛成しておられたんでしょうか。

小田村 田中さんは、四次防それ自体に不満ということではなくて、お金の問題で毎回毎回こういう議論が起こるのはもうかなわん、という気持ちですね。実は私もそういう気持ちでした。というのは、だいたい物価、人件費はみんな上がっていますから。

伊藤 決めた予算で執行できないわけでしょう。

小田村 ええ。ですから、当然五年経ちますと、予算額はうんと膨らんでいるわけですね。だから何度ものときに説明したんですが、当時、四十七年度防衛庁予算は八千億円なんです。八千億円を五年間で、四兆円になりますね。だから三次防の二兆いくらと比べて、四兆何千億になるというのは当たり前のことなんです。当たり前のことが当たり前に見られない。それは、維持費も含めて、全部累計して出すというはじき方が私はおかしいと思っているわけですが、そんなことを言ってもしょうがない。それは、四次防というような計画をつくるのがあまり好ましいことではない。むしろ、ある程度の予算の枠と、防衛庁自体が長期計画を持つのは当然ですが、内閣レベルまで持つて行かないで、毎年の予算でやったらどうだろうかという感じを持つていたんです。そういうことを考えろ、というお気持ちは田中さんにあったと思うんです。ただ、「平和時の防衛力」構想というのはちよつと違うんです。

これは当時四次防ができて、臨時国会がございまして、そこで一回、「防衛力というのはどこまで増えるんだ。防衛力の限界はどこにあるんだ」という質問が社会党から出て来たわけです。しかし、そもそも防衛力に限界なんかないというのが従来の防衛庁の姿勢だったわけで

す。とにかく防衛というのは相手があることで、こちらが一方的に限界をつくつたら、第一次大戦後のドイツみたいなこともあります。それはどうにもならないわけです。そういうことはあり得ないので、相手方の軍事力に応じて、我がほうも考えていくというのが正論で、従来の通説だったわけです。

ところがその質問が出たときに、久保さんが「この話は乗ってもいいじゃないか」ということを言い出されたんです。私は大変疑問に思ったんですが、防衛局長は久保さんですから、それで質問に対する答弁要旨をつくりますね。答弁要旨を大臣、総理にも届けるわけです。そういう内容で、それは検討いたしますということを、長官も答弁されましたし、総理もそういう答弁をしたわけです。その答弁をした結果、これについて検討しろという指示があったわけです。もともと田中さんが言い出したことではなくて、久保さんが言い出したことなんです。

伊藤 それも、触発されたのは社会党の質問ということですね。

小田村 はい。久保さんは前から「脱脅威論」ということを言っておられまして、お酒の席なんかでもよく言われるんですが、脅威対応型ではない防衛力のあり方を考えたいということをいつも言っておられたんですね。ご自分でもある程度考えていたのかもしれないけれども、そういう気持ちがあつて、これを表に出そうということではなかったかと思えますね。

伊藤 相手に対応するといつても、対応するのは日本が独自でやるわけではないわけですから、どうやって測定するのかよくわかりませんけれど。

小田村 日本独力で対応できるわけではないですが、どの程度の軍備があればどの程度対応できるか、というある程度のデザインがあつて、この分はできないからアメリカに頼むとか、これは当面無理なので今後の問題にするとか、そういうことで、相手を無視した防衛はあり得ないだろうと思います。そのことについては、書いたものがありました。〔抜き刷り『防衛計画大綱の基本的欠陥』を示す〕

伊藤 これは抜き刷りですね。

小田村 これはたしか、堀江「正夫」さんがやっていた戦略研究センターの本の中に入れたものだと思います。これに類したものはたしか前に『国防』にも書きました。ここに、平和時の防衛力のことを一番初めに載せてあります。

武田 これはいつごろ書かれたんですか。

小田村 これを書いたのはだいぶあとです。

武田 久保さんがもう亡くなられていますね。「故久保卓也氏」と書いてありますね。

小田村 じゃあ、亡くなってからですから、五十六年ぐらいではないでしょうか。五十五年の『防衛白書』のことも書いてありますから。

伊藤 一番おしまいのところに、「防衛力はどこまで必要なのかという国民の素朴は疑問に対しては、政府当局は答える必要があるであろう。一体、防衛力は脅威に対して備えるものであり、相手国の脅威が増大すればこれに対抗して増強しなければならぬ。その意味で、いわゆる『防衛力の限界』なるものは存在のしようがない。しかし、現時点の情勢下において国防上必要な防衛力の規模については、これを明らかにすべきであろう」と書かれていますね。

小田村 だから、所要防衛力と現在のものとは違いますが、ということですね。

伊藤 当然そこにはギャップがありますからね。

小田村 ええ、ギャップがある。

■防衛庁経理局長（10）兵力定員とインフレ

小田村 このときに、防衛力の整備で一番問題だったのは、一つはお金ですね。あともう一つは施設です。施設の取得がほとんど限界に達していた。もう一つは人間なんです。募集が非常に苦しくなりました。このときは高度成長の時ですから、地方連絡部とか陸上自衛隊の方面

隊もあちこち駆け回って、変なものまでかり集めるといふ状況でしたから、人的な限界がある。ですから、いくらつくろうと思っても、現実問題としてできない。制度をよほど変更しない限り、ですね。ですから、そういう頭がみなさんにあるわけです。

伊藤 実際に主要兵力として規定されたものが充足できたことがないんですね。

小田村 そうなんです。ところがまた定員の問題が非常に難しく、その年の暮れに予算の概算決定があるんですが、今度は自民党のほうからクレームがきました。海上自衛隊、航空自衛隊は当然増員しなければいけませんし、陸上自衛隊も、防衛庁設置法の改正がだいたい三年に一度ぐらいしか通らないわけです。ですから、だんだんたまってくるわけです。結局海、空の定員増の問題と、陸上自衛隊十八万の分がまだいくらか残っています。法律上の増員はうんと増えるんです。予算定員はとくについていますから、予算定員としてはわずかなんですが、法律定員として増えるものから、そんな大幅な増員を国会に出すのは世論対策として適当でないという意見がありました。このときは幹事長が橋本登美三郎ですよ。これがそういうことを言い出したんですね。いままで自民党から防衛関係の問題についてマイナスの議論が出ることはなかったんですね。抑えるのは大蔵省で、大蔵省さえ通れば、社会党は別にして、自民党は通るわけです。国防部長を源田「実」さんがやっていました。源田さんが嘆いていました。「私はいままで天皇陛下以外に頭を下げることはないんだ。今度はどうかがないから、自民党の執行部に対して頭を下げて回ったんだ」と言っていましたね。（一同笑い）

佐道 天皇陛下以外に頭を下げることはないというのは、それはちょっと、と思いますけれどね（笑い）。

伊藤 ちょうど田中内閣になった頃、すごいインフレが起こって、大変なことになりますね。

小田村 大変なことになるんです。そのときに予算的にはかなり逼迫してまいりまして、契約ができなくなってきましたね。特に装備品関

係の維持費系統が難しくなってきました。数量等がある程度抑えなければならぬ。それから船は減らすわけにはいきませんので、結局装備品を落とすんです。とにかく船だけはつくる。装備品は後日装備ということで、あとの修理費等から捻出して装備していく。これが従来の常套手段だったわけです。しかしそれもやっておれないので、このときは実際の予算執行に非常に困りました。翌年にオイルショックが起こってさらにひどいことになるんですが、それは四十八年から、列島改造の時からすぐ始まりました。

伊藤 予算で決められた金額ではとても物の調達もできない。そういうときは減らすとかどこかを削るという形でやる以外にないわけですね。

小田村 それ以外ないわけです。

伊藤 でも予算の使途が決まっていれば、そう簡単に動かすことはできないですね。

小田村 ですから、外せるものだけしか外せません。修理費なり維持費系統は圧縮して、後回しということに持つていくわけですね。新規装備のほうは、武器関係ですが、後日装備にするというようなやり方をとっていましたね。

伊藤 それは防衛庁内部だけでできるわけですか。

小田村 そうですね。これは防衛庁内部だけでできます。

伊藤 大蔵とは何もしなくてもいいわけですね。

小田村 ええ、大蔵には説明していたのか、いなかったのか。あまり説明していないのではないのでしょうか。聞かればもちろん説明はしていたと思います。

伊藤 実際に現場からは、相当困る、という話が出てくるんでしょうね。

小田村 出て来ますね。修理費が足りないために、結局船なんかでも人間でやらなければいけないから、そのために隊員の労働が過重になるという声も聞かれました。

■防衛庁経理局長 (11) 山中防衛庁長官

伊藤 翌「一九七三」年になりますが、山中さんが防衛庁長官になってこられます。山中さんはこの前の先生のお話で、総務長官のときにお仕えしたという関係ですね。ですから、気が知れているといえは知れているわけですか。

小田村 そうですね。ある程度知れているわけですが、なかなか独特の方ですから。山中さんは防衛庁に來られて、初めはちよつと馴染みにくかったようですね。というのは、あの人は何でも自分が聞いて了承しなければ納得しない方なんです。だから何かあったときには、何でも長官のところに報告しておかないといかんわけです。報告してあれば、それについてはそう大きな問題にならない。何も知らないで、事件なり問題が起りますと、たいへんお怒りになる。それと、山中さんの評判がひとつあれだったのは、あの方は全部呼び捨てにするんですよ。

伊藤 ひとを、ですか。

小田村 ひとを、です。例えば前に大蔵政務次官をしておられました、そういうときでも、局長、課長等は全部呼び捨てです。防衛庁に來られても、それをやられたんですね。そうするとやはり、制服の偉い人というか、制服の下の方もそうなんでしょうが、長官といえは閣下ですから、直立不動になるわけです。そういうときに呼び捨てにされるということは大変面白くない。これは山中さんがご自分で気づかれて、あとで、「これはどうもよくないようだから、変えることにした」と言われました。それで「〇〇陸将」とか、そういう言葉で言われるようになりました。

伊藤 前々からの長官は、小田村さんと呼ぶときには、「小田村」というふうに呼ぶんですか。

小田村 歴代長官は、「局長」とか、名前を呼ぶときには「〇〇君」と呼びますね。

伊藤 普通そうだと思いますね。「〇〇君」とか「〇〇さん」とか、いろいろ呼び方があると思いますが。「山中さんは」珍しい方ですね。よほど親しい間柄で、かつある程度対等な感じだったら、呼び捨てということもありますけれどね。ちよつとこの方は、テレビなんかで見ても、怖そうですね。

小田村 ええ、怖いですよ。

佐道 怖い人から呼び捨てにされたら、余計いい気持ちはいらないですね。

武田 もつと怖いですね。

小田村 もうひとつ、山中さんの問題としては、図書の問題があったんです。これは共産党の松本善明が「自衛隊で持っている図書は偏向図書ばかりではないか」という質問をしまして、二、三の本を出して、「こういうことが書いてある。こんなものを隊員に読ませるとは何事であるか」という質問をしたんですね。それに対して山中さんは、引き受けちゃったんです。それで結局、そういう本を全部廃棄させたんです。これは制服のあいだでは非常に評判が悪かった。私もそこまでやるとは思わなかった。まあ、そんなものは国会対策なんだから、一時的にしまっておくとかすればいいと思ったんですが、本当に廃棄したらしいんですね。だから焚書坑儒だといって、だいぶブツブツ言っていましたね。

伊藤 山中さん自体は、防衛問題についてはご自身の独自の考え方とか意見をお持ちだったんでしょうか。

小田村 あの方は、支那で中隊長をやっておられましたからね。だから軍隊のことはわりあい知っておられるほうなんです。ただ、やはり思い込みがありますから。でも実態をご説明すれば、よくわかる方なんですけれどね。

伊藤 最新の兵器まで。

小田村 最新の兵器になると、そこまでは――。

伊藤 これは難しいですね。実際に経理局長であられる小田村先生も、本当に詳しいことになったら、ちよつとわからないでしょうね。

小田村 駄目ですよ。私のように技術の知識のないものはわからないですね。だから前のバッジのときに、空幕の高木（作之）さんが、このバッジは神棚にしまっておけ、ということだったんですね（笑い）。高木さんもわからなかったんでしょう。

■防衛庁経理局長（12）防衛庁の意志決定

佐道 最初にちよつとお話しされていましたが、経理局長に就任されるときに、各部隊に視察に行かれるわけですか。

小田村 はい、行きます。だいたい全国を回ります。

佐道 全体を見て回るわけですか。

小田村 全体を見て回ります。

佐道 陸海空三幕僚監部とかと、いろいろお話をされるわけですね。

小田村 ええ、しょっちゅうやります。参事官会議というのが毎週、週一回か二回あったと思います。これは統幕事務局長、陸海空幕僚長が出られます。あとは参事官、内局の局長が出ます。これは次官室でやります。

伊藤 制服組も出るんですか。

小田村 はい。

伊藤 でも彼らは参事官ではないわけですね。

小田村 参事官ではありません。

伊藤 先生は参事官なんですね。

小田村 はい、参事官です。

伊藤 そこでいろいろな報告があつて、情報がわかるわけですか。

小田村 はい、そこで情報もわかるし、そこで防衛庁としての問題を議論するわけです。

伊藤 そうすると、だいたいそこで物事が決まるんですか。

小田村 だいたいそこで決まるわけですね。

伊藤 じゃあ、言ってみれば省議みたいなものですね。

小田村 ええ、省議と考えていただいていいと思います。それは毎週定例的にやつておりました。

伊藤 それは誰が主宰するんですか。

小田村 これは次官です。

伊藤 長官はその報告を受けるだけですか、

小田村 長官にはそれをご説明するということですね。ですから予算なんかでも、従来の大臣、増原さんのときもそうですが、問題点だけをご説明しておったわけです。しかし山中さんはああいう方ですから、総理府のときもそうだったんですが、沖繩の予算なんというのは事細かに全部見て、自分でやつておられたんですね（笑い）。

佐道 すごくこだわりますね。

小田村 ですから、今度の大臣は全部初めから終わりまで説明しないと具合が悪いということで、予算の内容を、全部幕僚監部を集めて説明しました。特に概算要求のときですね。ただ、大臣もだんだんくたびれてこられた。とにかく非常に複雑ですからね。だんだん、「もう少し簡単にしろ」ということになってきたように記憶しています。

伊藤 それは紙では駄目なんですね。

小田村 いや、紙も含めて、です。なかなか下の方は大変だったと思いますね。

佐道 山中さんは、しょっちゅう先生を呼び出されたりするタイプですか。

小田村 必要があればいつでも呼び出しますね。でもそんなに呼ばれたことはない。こちらから持っていく方が多いと思いますね。

伊藤 そうでしょうね、言っておかないと危ないですから。

小田村 山中さんのときは、秘書官が大変です。

佐道 秘書官はどなたがついておられましたか。

小田村 誰がついていたかな。月原君だったかもしれません。

伊藤 大変だというのは、どんな感じなんですか。

小田村 だから大臣は秘書官に命じますから、担当局のほうに説明させる、ということになるわけです。事故がありますと、「どうしてこ

んなに酒ばかり飲むんだ」ということを言っていましたね。酒を飲んだ上での事故というのがよく隊員にありますね。それで、事故を飛ばうことがお嫌いでしたね。「それは厳正にやれ」ということでした。それは本当にそうなんですけどね。

伊藤 山中さんは酒を飲まないのかどうか知らないけれど、酒飲みに対してはあまり同情的ではないんですね。

小田村 そうですね。

伊藤 酒税のもとだから（笑い）。

■防衛庁経理局長（13）単年度主義と長期計画

伊藤 結局、四次防は四次防で決定したわけですが、そのあとは、さつき先生がちょっとおっしゃいましたが、単年度主義で行くという考えかたがだんだん固まっていくわけですか。

小田村 山中さんもそういう感じだったんですね。それから山中さんはもう一つ、GNP比というのがお嫌いでしたね。「予算総額に対する比率とか、そういうもので考えるべきで、GNPというのは計算上もいろいろ問題があるし、その何%ということはどうも嫌いだ」と言っておられましたね。あの頃にGNP-%ということを僕らも言っていたんですが、それはやめろと言う。そうかといって、ほかになかなか尺度の取りようがないので、どうしようかと思っていたんですね。

佐道 いまの-%の問題は、坂田長官のときに閣議ですったもんだの末、-%をメドとするという形で決まっていってわけですね。この当時も、歯止めとして-%論というのが大勢であつたわけですか。

小田村 そうですね。だいたい-%。あのときはほとんどGNPが伸びていたものですから、-%を超えることはちょっと難しいのではないかという感じがしておりました。だから-%程度で、ある程度のこととはできる。それ以上のことは先ほど申し上げた施設や人員の制約か

らすると、なかなか難しいのではないかという感じであつたわけですね。

伊藤 単年度主義というのは、防衛庁の内部ではどうだったんですか。小田村 長期計画とせずという意味は、政府の長期計画としないという意味で、防衛庁としては当然長期計画を持たなくてはいけない。これはみなそういう意見だと思っています。

伊藤 政府レベルに上げていくことと、防衛庁内部のものとするというのと、どういうふうに違うんですか。閣議決定にすればかなり拘束力があるということですか。

小田村 閣議決定にすれば拘束力がありますが、上限になつてしまうわけですね。

伊藤 逆に言えばそうなりますね。

小田村 ええ。必ずしも達成されていません。達成状況がありますけれどね。ただ、閣議決定しておけば、少なくともそれについては、異議を差し挟まれることはないというメリットはあるわけです。ただ、それを世論がどういうふうに受け取るかというと、先ほど言つた防衛力の限界はどうだこうだ、という問題が起りますから、私どもの当時の空気としては、閣議決定するメリットはどこまであるのか、という感じがありました。

佐道 閣議決定をしたものですら、なかなか達成できない。そうすると、閣議決定ではなくて、防衛庁内部のものだったら、なおさら厳しくなるのではないか、という考え方もできると思うんですが。

小田村 でも私は当時、これは同じことではないか、という感じがしていましたけれどね。長期計画を発表して物議を醸すよりは、内部資料で（これも発表して悪いわけではないし、発表しますが）いろいろ批判を受けて、それに基づいてやるというほうがいいのではないか。「防衛計画の大綱」ができてからは、一時、中期業務見積りという制度になつたんですね。私はその方がいいんじゃないかと思うんです。ただ、あとで中曽根内閣のときですか、また政府計画に戻ります。政府計画に戻したためにあとスムーズに行つたという意見もありまして、

両方ですね。

伊藤 大蔵省の側から見ると、どうなのでしょう。ある程度長期計画があつて、財政見通しができるというのは――。

小田村 大蔵省としては、政府計画があつたほうがらくでしょうね。

というのは、政府計画があれば、与党とか大臣とか、そういうところに説明しないで済みますからね。「この中でやります」ということであれば、毎年毎々がそんなに作業になりませんからね。それから事務方から言いますと、主計官あたりのところでは、もう政府計画になつていれば、次長、局長まで説明しないで済むわけです。そういう意味では、大蔵省としてはむしろ政府計画のほうがらくじゃないでしょうか。

伊藤 最終的に復活していくのは、そういうことがあるんじゃないですかね。

小田村 そういうこともあつたかもしれませんが。それからあのときは、大平内閣ですか、山下「元利」さんが防衛庁長官で、九・七％という数字がありましたね。アメリカが九・七％をさかんに持ち出して、それは防衛庁の概算要求の数字ですが、それをアメリカが出して、要求してきたものですか、大蔵省としては非常に困った事態だったんじゃないでしょうか。そういうこともあつたと思いますね。

伊藤 結局、同じことなんですね（笑い）。

佐道 この長期計画を、政府のものにするか、防衛庁内部にとどめるかという問題と、計画の立て方として、これまでの年次防はだいたい五年計画で、五年ごとにということですが、三年ぐらいで見直していく「ローリング方式」も検討されていたと思うんです。これは先生はどういうふうに見ておられましたか。

小田村 内部でつくるときにはローリング方式がいいということですが、ローリング方式で、五年計画でも六年計画でもいいんですが、三年までを正式の計画にする、そして四年目、五年目はわかりませんが、これは少しザツとしたものにしておく。ですから経費の計算等は、三年ぐらいの単位でやった方がいいのではないかと。それで毎年ずらして

いく。そういうことを私としては考えておつたんです。実際に業務見積りのときも、おそらくそういう方式だったと思いますね。それからもう一つのメリットは、五年から三年計画になりますと、経費見積りの額が少なくて済むということですね。

伊藤 そうですね、五年というのはすごく大きく見えますからね。それに技術開発がテンポとしてはだんだんアップしてくるのではないのでしょうか。そうすると、五年先のことは実はよくわからない。

小田村 そうなんです。だから五年というのは、固定式の計画にするのはちよつと無理ではないかという気持ちもありましたね。

■防衛庁経理局長（14）継続費と総額変更

伊藤 戦前の軍艦建造費なども継続費ですが、しょっちゅう途中で改定していますね。軍艦の型式が新しくなってきましたし。

小田村 でも海幕は、そういうところはなかなかやりかたして、私が四次防を詳しく聞いて初めてわかつたんですが、同じ艦種でも少しずつ改善を入れていくんです。質的改善ですね。これは表にはわからないですが、なるほど、こういうことをやっているな、とわかつたんです。

伊藤 飛行機だとそういうことができないですね（笑い）。

小田村 そうです。

佐道 予算の問題になるんでしょうか、例えばいまの海上自衛隊の船を造るときに、だいたい二年か三年かけて一隻造っていますね。

小田村 そうですね。

佐道 いくらなんでも、あのくらいの船をつくるのに、ともにやつたら、そんなに時間がかからないのではないかと思うんですが、後年度負担していくという感じでやるから、ずっと船台に乗せておくということになるんでしょうか。

小田村 現実には発注してから取りかかりますからね。そうすると、

例えば護衛艦、二五〇〇トン型でこういうものだと思定型式のものにすれば、もっと早くできると思うんですが、これを多少いじくると、その時その時で変わってくるのではないかと思うんですね。それと、装備品のほうも、中には輸入するものもありますからね。そういうものを含めると、あのような形なのかな、と思うんですが、あるいはおっしゃる通りかもしれません。それは金が増えますから、あまり検討したことがないんです。

佐道 一年で造るとなったら、一年間でその分のお金をつけないければならないわけですね。

小田村 一年ではちよつと無理でしょうね。海上保安庁の巡視船は一年ですが、軍艦の場合は難しいかな、という気がしますね。

伊藤 単年度主義の場合は、いまのような軍艦建造は継続費になるわけですか。

小田村 軍艦だけ継続費なんです。

伊藤 そうですか、戦前からの伝統かな。

小田村 そうですね。まだ国庫債務負担行為をそれほど活用していなかったときですね。これがまたつまらん話なんですが、一番初めに自衛隊が発足したときに、軍艦を「警備艦」といつていたんです。予算書では、「何年度警備艦」と書いてあるんですね。警備艦というのはもう使っていないんだから、護衛艦に変えようじゃないか、という意見がありまして、そうしたいと思ったんですが、継続費が、名称を変更するとまた一つ問題になるんですね。だからいまはどうなっているのか、予算書では警備艦を使っているのか、あるいは護衛艦に変えたのか、よくわからないんですが。

佐道 何十年來、護衛艦ではなくて警備艦になっているんですね。

小田村 ええ。新しいものだけでも護衛艦にすればいいと思うんですね。

伊藤 それは継続費にする場合には、三年でこの軍艦を造る、トータルでいくら、今年度はこれだけ、ということになるわけですね。

小田村 はい。

伊藤 実際はインフレがあったり、技術革新があったりして増えていくわけですね。そうすると単年度主義ですから、翌年に――。

小田村 それは、翌年に予算の変更をやります。

伊藤 そのときは、二年分を認めてもらうわけですか。

小田村 二年分というか、総額を変えます。総額を変えて、二年度分、三年度分の割り当てをもう一度するわけです。

伊藤 またその二年度が終わったときに、三年度の分が足りなくなったら、またそこで総額の変更をするわけですか。

小田村 そうですね。変更をします。

伊藤 このときはインフレですから、そういう問題が頻繁に起こるということですかね。

小田村 頻繁に起こりました。四十七年度予算の時はまだだったんですが、石油ショックになりましたからは、大幅に発注件数が減られました。例のDDH「IIヘリコプター搭載の護衛艦」も、一年先送りしたと思います。それから四次防の変更はあとでやります。それは年が替わってからあとです。そのときに、変更したということをもう一回国防会議にかけます。

伊藤 落としていくんですね。

小田村 落としたんです。『防衛ハンドブック』に書いてあると思います。潜水艦と護衛艦と、飛行機もF1、FST2改、そういうものがかなり減らされました。それから陸上の戦車なんかもかなり落ちています。

伊藤 石油ショックで、オイルの値段がガッと上がりますね。そうするとガソリン、航空用燃料とか船の燃料の値段がガッと上がるわけですね。これはどういうふうに措置をするわけですか。

小田村 いや、どうにも処置できなかったですね。ですからあのときは、訓練時間も減らしましたし、ずいぶんいろいろな無理をさせられることになりました。

伊藤 自衛隊としての石油の備蓄もあるわけですか。

小田村 あります。特に船は、昔から油が大事ですから、海上自衛隊

は前から燃料庫に相当備蓄はしてありました。だからある程度はそれを使つたと思います。航空機のほうは、それほど備蓄がなかったものですから、訓練時間に影響したと思つております。

伊藤 これは相当大きなショックだったんでしょうね。

小田村 ええ、大変なショックでしたね。

伊藤 こういふときは、補正か何かでやるんですか。

小田村 あのとときは、補正をやってもえなかつたんじゃないですかね。一応全部、装備のほうに影響が来たということだと思いますね。

■防衛庁経理局長 (15) 日商岩井との契約問題

伊藤 為替の変動の問題ですが、これはこのときに始まつたわけではなくて、前からあつたわけですね。

小田村 為替の変動は前からございまして、円高になつていたものですから、むしろ差益が出ていたんですね。ですからその分は、予算的には余裕が出て来たわけなんです。そういう意味で、装備品としてはらくなときだったんですけれどね。

伊藤 いまみたいな円高の時はいいわけですね。

小田村 そうです。ところがこのときはどうにもなりませんで、実は為替リスクの問題ではこういう事件がございました。四十七年度予算の実行ですから、四十八年の三月です。田代さんが「防衛庁に来て初めて、年度末が大変だということがよくわかつた」と言っていましたけれど、契約を三月末までに実行しないと、予算は不用に立つてしまふんですね。使えなくなるんです。だからどうしても三月いっぱいには契約をしなくてはいけない。そこで、あのととき、RF4Eだったかと思うんですが、これは輸入ですね。この担当の商社が日商岩井だったんです。為替の問題で、予算的に限度がありますから、これ以上は出せない。その範囲内で、商社のほうでやるという契約条項が前からあつたわけです。それを今度の輸入の時もそれでやろうということ

交渉しておつたわけですね。

それは調達実施本部がやつたんです。ところが日商がグズグズ言つておつて、なかなか交渉に応じないんです。それでどうにもならない。三月三十一日になる。その頃になると、新聞も感づいたと見えて、かなり聞いてきました。それは従来どおりやるんだ、と言つておつたんですね。その時の副社長が海部八郎という男で、これが責任者なんです。が、こいつが出て来ない。とにかく三月三十一日の十二時までに契約をしなければ、国庫債務負担行為が全部飛んでしまいますから、役所としてはどうしても契約しなければいけない。

最後になりました、次官、官房長とも相談して、しようがない、向こうが作つてきた案で、そのままはんこうを捺そうということにして、調印したんです。調本がやつたわけですが。それでまことにけしからんやつだと思ひまして、翌日、増原大臣に報告したんです。「今後出入り禁止だ」と増原さんは言われましたが、出入り禁止と言われても、昔はそれでよかつたんでしょうけれど(笑い)。まあ、このときは本当に癪に障つたですね。

伊藤 それは駆け引きなんですか。

小田村 駆け引きです。向こうは何から何まで知つておつて、要するに放つておけば防衛庁は困るんだから、必ず防衛庁は降りてくると踏んでいた。本当にけしからん男で、初めからそういう説明をすればいいんです。どうしても困りますから、と言えればいい。そういうことをやらないで、とにかくいくら呼び出して来ないんですから。これは本当にひどい男でしたね。

そうしたら例のロッキードの時に証人喚問されて、手が震えて署名が書けなかつたでしょう。あれはまあ、こんな男だったのかなと思つて、呆れ返りましたね。でも役所にはかなり顔が利いているらしくて、大蔵省のOBなんかとも友達づきあいのような形でしゃべつていましたからね。これは別の宴会の時でしたけれど。だから、そういう男だったんでしょうね。本当にひどかつたですね。

伊藤 契約できない場合は、どういふことになるんですか。

小田村 契約できないと全部飛んじやいます。

伊藤 飛ぶということは何？

小田村 飛ぶということは、もう一回予算に計上しなくてはいけない。

伊藤 現に予算が組まれているわけですね。

小田村 組まれていても実行できなかったわけですから、不用ということになる。

伊藤 戻すわけですね。

小田村 戻すというか、これは国庫債務負担行為ですから現金は払う必要はないわけです。国庫債務負担行為の契約ができなくなったということ、四十七年度が駄目ですが、四十八年度はもう予算ができていますから、四十九年度予算でも一回計上しなくてはならなくなる。だから二年遅れるということになるわけですね。

伊藤 現に予算に組まれたものが実行できないという場合はどうなるんですか。

小田村 それは予算は返上するわけです。

伊藤 そうすると、大蔵としては次年度繰越ですか。

小田村 明許繰越費の場合には次年度に繰越はできるわけですが。

伊藤 それがなければ、もう一般会計——。

小田村 不都合でしたら、事故繰越と申しまして、特別の事故があったために前年度使えなかったが今年度使います、というのが事故繰越で、これは大蔵大臣の承認が要るわけです。

伊藤 それがなければもう使えないんですね。

小田村 はい、使えません。

■防衛庁経理局長 (16) 為替リスク負担の問題

伊藤 為替リスクの問題は、いまのような事件があつて、誰が為替リスクを負担するのか、という問題になっていくわけですね。

小田村 これは私ははっきりした記憶がないんですが、日商の事件で

そういうことになった関係で、ある程度いままでのやり方では無理だということになったのかもしれない。ちよつとはっきりした正確な記憶がないんですが、七四(昭和四十九)年ですから、ちょうど石油ショックでインフレで、為替レートがガタガタになっているときなので、これ以外になかったのかもしれない。ちよつと私もはっきりとした記憶がないんですが、やむを得なかったんじゃないでしょうか。

伊藤 契約をする場合は、円で契約をするわけでしょう。

小田村 円でします。

伊藤 ですから差益が出た場合には、予算が少し残る。

小田村 差益が出た場合は、その予算は防衛庁に返上する。差益がマイナスになった場合は業者が負担する、というのが従来のやり方だったわけですね。

伊藤 このときはちよつとでかかった、ということですね。

小田村 でかかったということだと思えますね。

伊藤 それで日商が頑張っちゃった。

小田村 頑張っちゃった。それは石油ショック前ですから、その時にそういうことをしたということですね。

伊藤 これは「一ドル」三六〇円の時代には考えられない事態ですね。

小田村 そうです。

伊藤 これは防衛庁だけではなくて、国家予算全体で、輸入するところは大きいですね。

小田村 なんとと言っても輸入が大きいのは防衛庁ですね。あとはそんなに——。

伊藤 文部省も結構大きいんじゃないですか。

佐道 単価が違ふんじゃないでしょうか。飛行機を入れたりするわけですからね。

小田村 文部省ではそんなに大きなものはないですね。コンピュータもこのころは国産でしたからね。あれはレンタルですし。

伊藤 契約すること自体が、予算を決めたときと契約の時で状況が違

ってきているということで、なかなか契約が結べないという事態になるわけですね。

小田村 そうですね。

伊藤 その時にはどうするんですか。

小田村 その時は大蔵省と相談しなくてはいいんですが、例えば船の値段が上がってできないというときには、先ほど申し上げましたように装備品を落とすというのが一つの方法ですね。もう一つの方法は、一隻を断念して、ほかの船にそれを使うというやり方です。

伊藤 それは大蔵の了解が必要なのですか。

小田村 大蔵の了解が必要ですね。だからあのときに船ができなかったんですが、その予算はどうしたかな、ほかのものに予算変更をしたかもしれません。いろいろやりくりがあつて、大変でしたね。

伊藤 このときは一般的には補正か何かで、かなりやったんじやないかと思いますが。他省庁はそうではないですか。

小田村 あるいは補正でそれをやったのかもしれませんが。石油ショックが十月ですから、一月頃の補正でやったかもしれません。四十九年度予算と合わせて、一緒に出したかもしれませんね。

伊藤 しかし防衛庁も大変だったでしょうけれど、大蔵も大変だったでしょうね。

小田村 大蔵も大変だったと思いますね。

伊藤 ということでちょうど四時ですが、次回は来年ということになります。まだ経理局長の時代のお話があると思うんですが。

小田村 あと訴訟があるんです。雫石と例の長沼ですね。

伊藤 ナイキですね。

佐道 そのあと行管庁ですね。

伊藤 その間に日銀がありますね。

小田村 日銀がちよつとありますが、これはほとんどなかったんですが。

伊藤 何のことやらよくわからないような人事ですね。このへんの経緯もお願いいたします。

「資料紹介」

抜き刷り『文民統制論』（戦略センター）

抜き刷り『四次防』（時事問題研究所、「国防」五十五年）

坂田道太『小さくても大きな役割』（基盤的防衛力の話）

伊藤 先生は非常に記憶がよろしいですね。

武田 感動しますね。

小田村 いや、忘れちゃいます。さっきの訴訟でも、雫石の事故報告書がいつ出たのか、このあいだから考えているんですが、思い出せないでおるんです。調査委員会の報告書が出るんですね。

伊藤 そういうものの経理局長の担当なんですか。

小田村 訴訟は、なんで担当になったのかわからないですね。経理局の中に監査課というのがございまして、会計検査院関係なんです。その関係か。あるいは施設課も経理局がもっていたものですから、施設関係の訴訟ということで来たのか。わからないんですが、とにかく訴訟だというと全部経理局にきちやうんです。金の問題があるからかもしれませんけれどね。

伊藤 金の問題があるといったら、みんな金の問題ですからね（笑い）。

佐道 よろずそういうものは官房とかでやると思いますけれどね。

伊藤 普通はそうですね。

小田村 どういうわけか、抱え込むことになりました。

伊藤 この前のお話で、前の時もそういうお役目でしたね。総務局ではなくて雑務局だと。

佐道 防衛庁の建物の管理も経理局ですか。

小田村 経理局です。会計課がやっています。ですから、猶崎（泰昌）くんといって、あとで参議院に出た彼が、後半会計課長をやってくれまして、その時に少し金が残ったということで、赤坂に武道場を造りました。というのは、コンクリートの上で空手なんかをやっている。

たものですから、かわいそうだということですね。

伊藤 危ないですね。

小田村 ええ、危ないですしね。武道場を造りまして、あとで坂田さんが長官になつてから、大変喜んでくださったんですね。

伊藤 喜んでいただいてよかったですね。怒られたら大変だ（笑い）。だいぶ夕方になつてくると冷えてまいりますので、お風邪を召しませんように。本当に今日はありがとうございました。

佐道、武田 ありがとうございます。

（以上）

小田村 四郎

オーラルヒストリー

第 11 回

防衛庁経理局長Ⅱ ～ 日銀 ～ 行政管理庁Ⅰ（1972～1976）

【2004年1月22日（木）14:00～16:00】

（於：政策研究プロジェクトセンター）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

記録・編集：丹羽 清隆

第 11 回質問項目

1. 今回は防衛庁経理局長時代の続きからお願いします。経理局長時代の仕事として裁判への対応があったと前回触れておられました。その例として雫石と長沼をあげておられましたが、まず雫石事件についての具体的な対応などについてお願いします。
2. 長沼裁判ですが、これは地裁の判決とは言え自衛隊が違憲とされてしまったわけですから隊員への影響なども懸念されると思いますがいかがでしたか。また防衛庁としてのこの裁判への取り組みなどについてお願いします。
3. 防衛庁経理局長時代で他に印象に残っておられる問題がありましたらお願いします。
4. 1974 年 6 月、日銀の政策委員に就任されます。就任の経緯などお願いします。また、日銀政策委員の仕事についてもあわせてお願いします。
5. 同年 10 月、行政管理庁行政管理局長に就任されます。日銀政策委員に就任後約三ヶ月ほどで替わられたのは異例のことではないかと思われそうですが、その経緯などについてお願いします。
6. 行政管理庁はこれまで先生ご自身も経験のない役所だと思いますが、中に入られてどのような印象をもたれましたか。また、戦後の役所ですから寄り合い所帯だと思いますが、役所の雰囲気などはいかがでしたか。
7. 行政管理局長が主管する業務の内容はどういったものなのでしょう。また、局長を支える組織はどのようになっていたのでしょうか。
8. 当時、「国家公務員数の縮減」や「特殊法人の整理合理化」が重要課題として挙げられていたということですが、それが上ってきた背景や取り組み方などについてお願いします。また、それらの課題は各省庁にまたがり、それぞれ消極的に対応することが予想さ

れる問題で実現にはかなり政治力が必要となると思いますがいかがでしたか。

9. 先生の局長時代は大臣が最初は細田吉蔵氏（田中内閣）、ついで三木内閣の成立で（1974年12月）松澤雄蔵氏となりました。両大臣についての印象などお願いします。

10. 1976年5月、先生は行政管理事務次官に就任されます。次官就任に当たってどのようなことをお考えになりましたか。また、とくに重視されていた課題としてはどのような問題がありましたか。

11. 先生の次官時代の長官は、最初は松澤氏、ついで1976年9月から荒舩清十郎氏、同年12月の福田内閣成立によって西村栄一氏、翌77年11月からふたたび荒舩氏となりました。それぞれについてのご印象などお願いします。

※今回は以上のような問題を中心をお願いします。

■防衛庁経理局長 (17) 雫石事件1——対応

伊藤 それでは始めさせていただきます。今日は前回の防衛庁経理局長の続きということでお話しただきたいと思っています。前回触れておられましたが、裁判の關係がいくつかあったということです。まず雫石事件のことについて、具体的にどういう対応をなさったのかということをお話しただけるとありがたいんですが。

小田村 雫石事件が起こったのは昭和四十六年七月三十日ですから、私は名古屋におりました。その事件が起こった時はちょうど箱根で局長会議があった時で生々しく記憶しておりますし、追悼式の時も総理府に来ていました。総理府主催でやったと思います。

雫石事件が起こりましてから、総理府の中でいったいどこで担当するか、という話になりました。通常であれば運輸省の中に事故調査委員会を作るんですね。いまは常設になっていますが、当時はつくってなくて、その時その時でつくっておったんですね。ただこの場合は民間機ではなくて自衛隊機であつたということで、これは運輸省で調査するのはちょっと不適當だろうということで、総理府に持つてこられたわけです。総理府のどこでやるかということについてですが、総理府に交通安全対策室というのがございました。室長はだいたい警察庁から来ているんですね。

伊藤 それは常設なんですね。

小田村 これは常設です。そこに置くことにしようということですが、事故調査委員会を総理府の交通安全対策室に置いたわけです。しかし、交通安全対策室では飛行機のことばかりじゃないので(笑い)、結局、人選は運輸省に頼んで、運輸省で人選をしたということです。その時の文献があつたんですが、ちょっと見当たりません。事故調査委員会とか裁判についての批判は、松原正さんが詳しく書いています。「『自衛隊よ胸を張れ』地球社、一九八六年」。そのほかにも本箱を探した

んですが、見当たりません。『ジェットルートJ11』という本が、四十七年か八年頃出たと思うんですが「白金書房、一九七五」。

伊藤 それは関係者がお書きになったんですか。

小田村 これは関係者ではなくて、たしか須藤朔という海軍出身の方です。その方だと記憶しているんですが、ちょっと見当たりません。この方は、公判等が始まってからまた新しい本をお書きになっています。「『恐怖の空中接触事故』圭文社、一九七八」。前の本を土台にして書かれたのではないかと思います。

それで、あとは結局、百六十二人が亡くなったものですから、その遺族の弔慰金等ですね。これは全部防衛庁で片付けました。その模様も、野呂さんの本の中で上田「泰弘・航空」幕僚長が辞任をされて、ずっと遺族を巡回して、みなさんにお詫びの行脚をしたことが書かれています。

それはずっと防衛庁でやっておったわけですが、私が着任しましてから、事故調査委員会の報告が出てきたんです。ちよつとその時期が、この本「松原氏の本」にも書いてないので、はっきり記憶がないんですが、四十七年の夏頃だったように記憶しています。その事故調査委員会の報告は、松原さんの本でも批判しておりますし、須藤さんの本でも批判しています。結局、全日空機、ボーイング727が飛行しておった。天気は快晴です。前方に自衛隊機を認めて、それが調査委員会の報告では七秒前という推定だったと記憶しています。いろいろ計器等から推測したんだと思います。七秒で回避の余裕がなかったということが小説風に書いてあります。

これは防衛庁として直接採り上げるということではないんですが、一応考え方を決めなくてはいいけない。参事官会議にその報告がありました。そのとき幕僚長が石川貫之さんでした。この方は上田さんが辞任したとき幕僚副長だったものですから、そのまま幕僚長になったんですが、石川さんが「七秒あれば回避操作は十分できますよ」というんですね。そのことはパイロットとしての経験から言っているわけですから、自衛隊機の一方的な責任にはならない、というふうに思った

んです。

ところがその事故報告書が出てから、全日空の若狭「得治」社長が防衛庁の次官のところに来られた。私が予算関係を持つていたものから、島田「豊」次官に「同席してくれ」と言われました。それで島田さんのところに若狭さんが来られたんです。若狭さんは、「事故報告が出て責任の所在が明確になった。ついでには飛行機の損害、弔慰金（これはもう出していたわけですが）その他の損害賠償を要求する」という話だったんですね。「責任の所在というのはこれから検討しなければならぬことで、到底認めるわけにはいかない」ということで、私は直ちに蹴飛ばしたわけです。そうしましたら、若狭さんは憤然として帰ったんですが、どれぐらい経つてからでしょう、全日空から損害賠償請求の民事訴訟が出てきました。

その前に、刑事事件のほうは進行しておりました。教官の隈「太茂津」一尉と候補生の市川「良美」二曹の個人的な容疑とされていましたから、防衛庁として弁護士費用を出すわけにはいかないんですね。それで、航空自衛隊の中で支援の会を作りまして、みんなポケットマネーを出したんです。これは、業務上の事故ですから、本来であれば防衛庁が考えてやらなければいけないんですが――。

伊藤 そんな気がしますね。

小田村 個人の罪名ですから。業務上過失致死ですか。そういうことになりますと、国費を出せないんです。警察の場合もそうだと思うんですが、事件が起こって刑事事件になりますと、国が出て行かれないということがあるわけです。今度のイラクでも――、そういうことは絶対にはないと思うんですが、小泉さんが全部責任をとると言えбайいわけですからね。仮にこの問題が出てきたとしますと、役所がどこまで関与できるか微妙な問題なんですね。防衛庁としても、被告の公式的な支援はできないんです。

■防衛庁経理局長（18） 雫石事件2―― 論点

小田村 ただ、民事事件は国を相手の訴訟ですから、これは正面からやらなくてはいけないわけですね。

伊藤 それは被告ですからね。

小田村 ええ、被告ですから、逆に言えば私どもとしてはやりやすかったわけです。結局、この雫石事件というのは、野呂さんの本にも書いてありますし、松原さんの本にも書いてあるんですが、当時の新聞がめちゃくちゃに一方的に書いていた。それには、石川幕僚副長の失言もあるんですね。「航空路を直角に横切らなくてはいけません」とそこで訓練して旋回飛行をしていたのは間違だった」と初めに自分で誤りを認めたような発言をしたんです。それが最大のネックになったと松原さんは批判しています。

いろいろな混乱は、一つはスピードにあるんです。自衛隊機F86Fの速度と、全日空機727の速度では、全日空機のほうが速いんです。それが、新聞を読んでいたのでは、国民はわからんわけです。当然戦闘機である自衛隊機のほうが速いだろうと思う。

伊藤 それは誰だってそう思いますよ。

小田村 誰でもそう思うわけですが、全日空機の方が速いんです。それをあまりPRしていかないということがありました。それから航空路というのは運輸省で告示されて、はつきり場所が決められている。高度、経路、両脇の幅も告示されておりまして、そこで訓練はできないことになっているわけです。横切るとすれば直角に横切らなければならぬ。ところが、その航空路というのはプロペラ機なんですね。

ジェット機については、運輸省の告示はないんです。そしてジェットルートというのが別に設定してありまして、航空関係者だけしか知らない。ジェットルートというのは一本の線なんです。航空路は幅があるんですね。ジェットルートの場合もその線の両側に、保護空域ということ、何メートルでしたか、とつてあるんです。しかしそれも、告示されているわけではない、関係者だけが知っているということなんで。訓練空域はもう少し左の方に設けてあったんですが、

その訓練空域から多少ずれて、ジェットルートに引つかかっても、それは違法にはならないんです。それも混乱している一つの原因です。

結局、公判で進められていたのは、自衛隊機に視認義務、目視義務があったことなんです。ところが全日空機は計器飛行をやっていた。松原さんの本を読みますと、快晴の天候ですから、計器飛行であっても、目視義務はどんな場合でもあるんだということなんです。目視義務というのは、自衛隊機だけではなくて、全日空機にもあったはずだということです。

市川二曹の訓練機はそんなことを見ている暇は全くありません、自分の訓練で精一杯ですから。教官機の限一尉の飛行機が後ろから来る全日空機を後ろから見えたかどうかということなんです。ただ後方何度と書いてありましたが、ミラーがあるわけではありませんから、目が回転して見えるものかどうかという問題があるわけです。実際上、目視するのは不可能だったのではないか。それに対して全日空機は前を見ているわけですから、当然見えたはずだということで、まず目視義務の問題から反論しようということにしたわけです。

その反論を航空幕僚監部がやる、これが空幕で一佐だった東條「敏夫」さんなんです。東條さんが法規班長でしたか、東條さんが相手になりまして、それに対して対応策を考える。

その前に、全日空が提訴いたしましたときに、私は朝日新聞から感想を求められたんです。その朝日の記者が、田岡俊次君なんです。

田岡君というのはご承知だと思いますが、田岡良一先生の息子さんです。前に広報課で新聞記者を招待した時に初めて会ったんですが、田岡君というのはもともと非常に機械が好きで、兵器、特に飛行機に興味があった。それで本当であれば、例えば東工大あたりの航空機学科にでも行きたかったんだけど、新聞記者になっちゃった。なってみると、非常に勉強に向いているところだ、何でも勉強できる、というわけですね。こないいいところは無いと喜んでいました。防衛庁へ来たときは、まだ若い時でした。

それで田岡君に「事故調査委員会の報告の件について」話したんで

す。私が非常に感心したのは、夜に電話がかかってきまして、「実は局長の談話を明日の朝刊に出そうと思うんだけど、それはこういう文章でいいか」と言ってきたことなんです。それを聞きまして、「それはちよっと困る。僕が言ったのはこういう意味だ。つまり事故調査委員会の報告は、事故の原因についての調査なんだけれど、法的責任がどこにあるかということについては全く触れていないんだ。だからこれに対して、すぐに請求に応じるというわけにはいかない。これは十分に検討して、公判で裁いてもらいたい」ということで、ちよっと修正してもらいました。

そうしましたら、法務省の訟務部長が貞家「克己」さんで、大変喜んでいただきました。貞家さんは最高裁の判事もやられて、たしか去年亡くなられたと思うんですが、国側の代理人としてやっていただくわけです。「これは非常にいいコメントだ、大変やりやすい」ということで、法務省も喜んでくださったんです。

僕はそのときは田岡君に感心したんです。わざわざ問い合わせてくれましたからね。だからまあ、あの頃は入り立ての頃で、非常に良心的だったと思うんですね（笑い）。そういうことがありました。それで東條さんが技研のほうに行って、目がどこまで後ろを見られるかということを証拠として出したいというようなことで、初めはそこから入ったわけです。要するに視認義務ですが、視認義務は両方にあるじゃないかということを中心にして、もっていったわけです。

それから、口頭弁論は四十八年で、「防衛庁長官は」山中「貞則」さんになっていったと思うんですが、山中さんは総理府当時に雫石の事故をやっておられましたから、これは大臣に説明しておかないと、またあとで問題が起ころうというかんというところで、口頭弁論の要旨を東條さんと一緒に大臣のところに行ってご説明しました。普通はこういうものは大臣まで行かないんですけれどね（笑い）。まあ、大臣にも了承していただいて、それから始めたんです。

■防衛庁経理局長（19）雫石事件3——展開

小田村 ところがだんだん調べていきますと、これは刑事裁判のほうですが、別のことが出てきました。技術研究本部の立川の第三研究所でしたか、航空関係で海法「泰治」さんという方がその研究所長で、この方が実は私の高等学校の先輩なんです。いろいろな住民の目視情報があるんですね。これは須藤さんの本にもいろいろ書いてあったんですが、「海法さんが」どうも全日空機の飛行経路が少しおかしい。ジェットルートから外れていて訓練空域に近いほうを飛んでいた、という証明を出されたんですね。リーダーサイトが函館等で、経路をある程度捕まえているわけです。それからずっと辿っていきますと、ジェットルートを外れていたという証明を刑事裁判のほうで出していたんです。それも民事裁判で使おうということなんです。〔東北地方北部のジェットルートと、該当全日空機の飛行経路を描いた地図を示す〕これがジェットルートです。どうもこの飛行機はこっち「西側」にずれていた。

伊藤 訓練の空域は、北に向いて左側にあるわけですか。

小田村 そうです。

伊藤 これはリーダーサイトのデータでわかるものなんですか。

小田村 そうですね。それからもう一つ、これはずっと後なんです。全日空は民事裁判の途中で、乗客がカメラで撮っていた写真があったというんです。だからこれは初めからわかっていたんじゃないかと思うんですが、それを十年ぐらい経ってから出してきたんですね。それによると、飛行機はまっすぐ飛んでいたという類推になるんですが、どうもその推定はおかしい。というのは、その写真に田沢湖が見えているんです。田沢湖が見えているということは、もっと西に寄っていたはずだということで、もう一回別の会社で計測をさせました。そうすると、だいたいこれ「地図に示された飛行ルート」に一致する。

伊藤 そうですね。田沢湖は秋田県ですからね。

小田村 ですから、訓練空域を逸脱してジェットルートの保護空域に入ってから衝突したというのはいじやないかということをも、もう一つ証明しようとしたわけです。そういうことで、これは争いまして、最終的には六十年頃までなかったと思うんですが、自衛隊にも一部の責任はあるけれど、全部ではないということで、民事訴訟では全日空側の責任も認めたんですね。〔国側過失割合六、全日空側過失四として判決、ならびに和解〕。

そんなことで、この問題は私としては世論の動きが大変残念でした。市川二曹のほうは結局二審の仙台高裁で無罪になったんですね。これは訓練生ですから、当然だと思います。市川二曹まで犯罪人にされたら訓練はできませんから。限一尉は結局、実刑判決が最終的に確定したと思います。〔禁固三年執行猶予三年〕。いまは福岡で焼き鳥屋か何かをやっているようです。

ただこの事件は後まで尾を引きまして、田岡君が攻撃する材料にしました。いつ頃だったか忘れましたが、日航機が御巢鷹山で落ちた事件の頃だったと思うんですが、隈君の刑期が終わって、その歓迎会を福岡のほうでやったんですね。そのときに、慣熟飛行と称して航空自衛隊の連中が福岡まで行った。これは、パイロットは勤務地がどこでも、年間一定時間飛行義務が課せられているんです。ところがこれは公私混同だということで、だいたい新聞で叩かれたことがあったんですね。すけれど（笑い）。そういうことまで後を引いたんですね。すけれどね。

伊藤 おまけがついちやったんですね（笑い）。

小田村 この雫石が、自衛隊にとって一番痛かったのは、その結果、訓練空域を全部外に出されたことです。

伊藤 外というのは海の上ということですか。

小田村 ええ、海です。米軍はできるんですけど、自衛隊機は訓練を全国的にほとんど海上に追い出されたんですね。ですから訓練空域まで飛ぶのに燃料が十分でないですから、訓練時間が減ってしまう。それが自衛隊としては痛かった事件ですね。雫石の事件は非常に残念な事件でした。

伊藤 変な話ですが、全日空のほうに責任があるということになった場合は――。

小田村 全日空が賠償はしないんです。ただ、向こうが機体の損失はいくらということで賠償請求をしていますからね。それに対する負担割合です。全日空側にもこれだけの責任があるということになるんですね。だから防衛庁が儲かるわけではないんです。

伊藤 そうでしょうけれど、被害に遭われた方への補償の問題はどうなるんですか。

小田村 それもひっくり返して計算したと思うんですけどね。補償は、とりあえずは防衛庁が立替払いで、全部防衛庁が回って慰霊をしたということですよ。それを含めての負担割合を争ったわけです。海法さんと言っていました。「できるだけのことはやるんだけど、しかし無罪になることは難しい。やはりあれだけの大事件を起こせば、理論的に責任があつてもなくても、なんらかの責任はとられるだろう、やむを得ないだろう」ということで、海法さんも諦めておられました。

それから全日空の事故については、私が名古屋にいた時に中部管区の局長をしていた関根「広文」さんが「警察庁」刑事局長になつてたものですから、「ひとつこれで判決が確定するのであれば、その前に全日空のパイロットを刑事送検をしておいてくれないか。亡くなった方ですけれど、そうしてもらえれば、大変将来のために助かるんだ」ということをお願いしたんですが、ちよつと無理だったようですね。

伊藤 裁判というのは、世論に非常に大きな影響を受けるんですかね。

小田村 大きな影響があるんですね。雫石事件の最終確定は私が辞めた後でした。

伊藤 さつきおっしやつた、ジェットルートを外れているのではないかとすることは、多少は取り上げられたということですね。

小田村 取り上げられたと思いますね。特に写真で田沢湖が写つていたということは大きな証拠ではないかと思えますね。

伊藤 でも十年経ってから出てくるということは、全日空側が何かや

つたんでしょね。

■防衛局経理局長（20）長沼ナイキ裁判1――経緯

伊藤 それから、もう一つの長沼裁判のほうは、自衛隊としてはもっと痛い問題ですね。

小田村 これは、私も忘れていたので思い出したんですが、北海道の千歳の長沼地区にナイキ施設をつくったんですね。そのナイキ施設をつくる場所が保安林になつていたので、保安林の指定の解除を農林省にお願いして、県知事からも同じような同意の趣旨をもらつて、農林大臣が保安林の指定を解除したわけです。それに対する訴訟なんです。ですから被告は農林大臣なんです。保安林の指定を解除した行政処分を取り消せという訴訟です。

これは実体に入る前に、原告適格その他の問題がございまして、そもそも保安林の指定というのは住民に対して法律的な利益を与えたものであるかどうか。保安林の指定は水源涵養のためにやっているわけですね。水源の調節のためにやっていることで、それが法律上の利益と言えるかどうか。国のほうは、要するに反射的な利益に過ぎないのだから、法的な利益とは言えない、ということが一つですね。

それから、まず先に保安林解除取り消しの執行停止の申し立てがあつたわけです。「札幌地裁の」裁判長は、ご存知の通り福島重雄という札幌の裁判長でした。これが、保安林解除処分の効力を停止すると原告の要求を認める決定を出したんですね。これに対して、国側は直ちに高裁に抗告をいたしました。四十五年一月に、今度は高裁は地裁の取り消しの決定をもう一度取り消しまして、住民の執行停止申し立てを却下するという決定をくだしたわけです。そこで国のほうは、これで指定の取消処分が解除されたから、ということで、保安林を全部伐採いたしました。恒久的なナイキ施設をつくったわけですね。もうつくってしまった以上、保安林は元に戻らないので、これについて

訴えても訴えの利益がないではないか、ということが二番目の国側の主張です。

それからもう一つ、水源涵養ですから、洪水調節と渇水対策という効果があるんですが、それに対する対応策は、ちゃんとダムを造って、百年に一度ぐらいの大雨が降らないと洪水にならないし、ダムは造っているから、渇水対策にもなる。したがってこれも十分に対応できているということで、違憲問題に入らないで処理しようというのが国側の対応だったわけです。

札幌地裁の判決がありましたのは四十八年九月ですね。福島さんは、判決に全部書いてありますが、国側の主張を認めないで、保安林の指定解除が公益上の理由にあたるかどうかという実体論に入ってきたわけです。

その前にもう一つ、ご記憶かもしれませんが、平賀書簡事件というのがあったんです。これは、札幌地裁の所長が平賀健太さんという裁判官でした。この二月に亡くなられたと新聞で報道されています。この方が、執行停止申し立てに関連して、四十四年八月に裁判長に対して先輩のアドバイスだということで、判断の一助になるならばと考えて、これについての平賀さんの見解を私信で送ったわけなんです。その内容は、「保安林伐採に伴う危険だとか損害がどれくらいあるか、その証明の責任は申立人のほうにある。被告なり裁判所が判断するというよりは、申し立ての内容についての証明を申立人のほうでやるべきだ」という趣旨の書簡だったようです。ところが、福島さんはこの書簡を受けてひと月ぐらい経ちましてから、公表したんですか。

伊藤 相手に断わりなしに、ですか。

小田村 相手に断わりなしに公表いたしました。

伊藤 それは法的な問題になるんじゃないですか。

小田村 ええ、そうです。それでマスコミに取り上げられまして、大変な騒ぎになって、結局最高裁では九月になりましたから、平賀所長を注意処分いたしましたして、東京高裁への異動を発令した、ということなんです。

一方、十月に入ってから、平賀さんと福島さんそれぞれに対して、別のほうから罷免訴追請求がออกมาして、国会の訴追委員会で検討したんですね。その結論は、平賀さん是不訴追、福島判事は私信を公表したという責任があるので訴追猶予にする、という決定になったわけなんです。

それを受けまして、札幌高裁は福島判事に対して口頭による注意処分を通告した。これに対して福島さんはこういう談話を発表して、辞表を提出した。これがすごいんです。「今回の処分は裁判所自らが司法権の独立を放棄し、時の政治権力に進んで迎合したものである。この意味でも『平賀書簡』は万難を排しても公表するに値するものだった。私はこの状態の下ではもはや国民から委ねられた裁判官としての仕事を果たすことは不可能と考える。今回の私に対する処分は、裁判所が自ら憲法を足で踏みじったものであり、もはや裁判所は国民に対し、憲法上の権利を保障することができなくなっている」という談話です。これを発表して辞表を出したわけです。

ところが二日経ちまして、同僚の裁判官や弁護士、学者等々から辞意を撤回しろといわれて、「裁判所に引き続き留まり、裁判官として良心に従って職責を全うする」という談話をまた発表しまして、辞表を撤回したということです。

しかし札幌地裁のほうは裁判官会議を開いて、福島さんが発表した談話はやはり裁判に対する国民の信頼を損なう、しかしその後これを撤回したので、同判事を注意処分にしたという事件がありました。

その後、福島さんのほうはほとんど自衛隊の能力等の調査、審査を始めているものですから、国側に対して、自衛隊の規模、装備、能力と、自衛力はどこまで進むのかということを具体的に示して、いまの自衛隊の内容が憲法で認める自衛力の限界の中にあるということを釈明しろという釈明命令も出しました。それから証人申請も、全部原告の言う通り認めまして、源田「実」さん以下、九人の証人を認めるという採用決定をする。等々の訴訟指揮があったものですから、国側は四十五年四月に裁判長の忌避申し立てを出したんです。

その理由は、「裁判長の所属している青年法律家協会（青法協）は、安保廃棄、自衛隊反対等の政治活動をやっている、長沼訴訟にも支援活動を行なっている。裁判長が青法協の有力な会員であることから、裁判が公正を保たれない」ということでした。これに対して、二週間ほど経ちましてから札幌地裁は、「福島裁判長は青法協の一会員に過ぎない。青法協の活動方針に心理的な拘束を受ける立場にはない」というようなことで、忌避申し立てを却下した。

そこで国は札幌高裁に即時抗告をしたんですが、高裁も同じような理由で抗告の棄却をいたしました。したがって福島さんはそのまま裁判を続ける。この事件は副産物としていろいろなものが出て来ているわけです。

■防衛局経理局長（21）長沼ナイキ裁判2——判決

小田村　そしてだんだん審理が進んでいきまして、結審になって、四十八年九月に判決が下ることになりました。そうすると私も憲法の問題を研究しておかなくてはならないと思いました。当時『法律時報』という雑誌がございました。その『法律時報』に長沼裁判の特集がございまして、国側の主張と原告側の主張が詳しく載っていましたので、それを一所懸命勉強いたしました。九条についての政府の解釈も、憲法制定以来の推移等をわかりやすく、成立当時の吉田さんの頃からの解釈をずっとトレースしている清水伸さんという方の『憲法と自衛隊』『朝雲新聞社、一九六九』で、『国防』に連載したのかな。それから林修三さんが書かれた自衛権についての解釈も勉強しました。「『自衛隊と憲法の解釈』林修三、中村菊男編著、有信堂、一九六七」。僕は松本蒸治さんではないんですが、本当に憲法を読む気がしなかったんですね（笑い）。今回はしょうがないですから、勉強いたしました。

それで結局、四十八年九月七日、札幌地裁で判決が出ることになり

ました。だいたい、いままでの経緯からいって、自衛隊違憲論で原告勝訴になることはほぼ見通しがついていました。しかし、単に防衛庁だけの問題ではない、国家全体にとつての大きな問題なので、内閣官房のほうでぜひ取り上げてもらいたいということで、官房長官談話のようなものを出してもらいたいと思つたわけです。それで副長官が後藤田「正晴」さんと、亘理「彰」君が内閣審議室長をやっておりますので、後藤田さんをひとつなんとかしてくれということで亘理君に頼んで、後藤田さんに面会の約束をとり、後藤田さんのところに陳情したわけです。二回ぐらい陳情しましたかね。後藤田さんは初めなかなかウンと言わなかったんですが、「たしかに大変なことだから、それじゃあ、おまえの言う通りにしよう」ということで官房長官談話をこのとき出してもらったと思います「官房長官は二階堂進氏」。いまちよつと手元がないんですが。

それから防衛庁長官「山中貞則氏」のほうは、私が起案いたしましたので、特に昭和三十四年の砂川事件の最高裁判決が出ておりますから、これを引用して、「憲法九条は決して無防備・無抵抗を認めたものではない」ということをはっきり打ち出し、「これは一審判決に過ぎないのだから、隊員はこういう判決に惑わされることなしに、従来通り真剣に服務してくれ」という長官訓辞を布告することにしたわけです。これはわりあい、制服のほうには評判がよかったと思います。いずれにしてもそこまではです。

ただそこで、私は訟務部長のところに行きました。前の砂川事件は刑事事件ですが、高裁を飛ばしまして跳躍上告したんですね。民事訴訟も飛び越し上告というのがあるんです。それをひとつやってくれないか、ということをお家さんをお願いしたんですが、お家さんは、「刑事はそれができるんだけど、民事は相手方の同意が必要なんだ。だからそれはなかなか難しいんじゃないですか」ということでした。たしかに原告のほうは、最高裁に直接ということについてはやはり抵抗があつて無理だろう。最高裁に行けば「国側が」勝てることは間違いないので、向こうはそれよりも長引かせてPRに使うことが目的で

すから、なかなか無理だなんて思って、飛び越し上告はやめたわけです。それで普通の控訴ということですが、法務省も一所懸命やってくださいまして、結局二審はもつと後になります。例の統治行為ということで原告が敗訴になって、最高裁まで行かなかったと思いますね。

伊藤 やはり青法協という背景があるということですか。

小田村 青法協の背景はよくわからないんですが、この裁判の弁護士はほとんど青法協ですね。忌避申し立てにもあるように、青法協が支援していたことは間違いないですね。ただ青法協が音頭をとってどうこうということはあまりなかったと思うんですが、支援団体と見ていいのではないのでしょうか。

伊藤 原告は住民なんですか。

小田村 原告は住民です。長沼町にほとんど住んでいるんですが、ひとりだけ隣の人がいました。全部で二百七十一人ですか。これは自民党にも報告したんですが、この内訳を内閣調査室から聞いて持っておったんです。この中かなり教員がいるんです。この内訳は内閣調査室では全部分類して調べてありました。その内訳を自民党で報告いたしましたら、森山欽司さんが喜んで、もう一回言ってくれと（笑い）。

伊藤 それは日教組だというわけですか。

小田村 日教組、もろもろですね。

伊藤 自治労もあるかもしれない。社会党はどうですか。

小田村 代議士は入っていませんが、下部組織はみんな応援していると思いますね。

伊藤 あまり政治色を明確に出した運動ではないんですね。

小田村 やはり政治色をはっきり出していますね。

伊藤 それにそういう裁判官がおったということですね。

小田村 そうです。この判決の要旨で、九条の解釈は、昔の金森「徳次郎」解釈ですね。憲法一項では自衛戦争を放棄していないけれど、二項で軍隊を禁止し、交戦権を放棄しているから、実質的に自衛のためといえども軍隊を持てないということですね。それで自衛隊が軍隊であるかどうかということを一所懸命調べたわけですね。「これは明ら

かに軍隊である、したがって軍隊あるいはその他の戦力に該当するので違憲である」ということなんです。

ここで、それじゃあ一体どうすればいいかということなんです。自衛権は否定していないんですね。軍事力によらない自衛措置ができるんだ、ということを行っています。それは警察をもって排除する方法、民衆が武器を持って抵抗する群民蜂起の方法、それから侵略国国民の財産没収とか侵略国国民の国外追放、そんなことが例示してあるんです。これは政務次官だった箕輪登さんがすっかり喜んでいまして、「これは面白い、飛行機に対して竹槍で戦っている漫画をつくってPRしろ」と言っていました（笑い）。そういうことがありましたが、これに対する反論とPRはかなりやりました。

伊藤 海原「治」さんの言う郷土防衛隊みたいですね。

小田村 それまでに、野呂さんの本にも書いてありますが、非常にマスコミとの関係が難しかったものですから、広報課長にエースを持つてこいということを田代「一正・官房長」さんが言われまして、西広「整輝」君を広報課長にしました。彼が広報課長になってから、新聞記者との関係も非常によくなりました。彼は広報課長としては本当によくやったと思いますね。

伊藤 この地裁判決で、向こう側が大いに意気が上がって、というふうにはならなかったですね。何か変な判決が出たという感じで、新聞でもそんなに、やった、やったという感じではなかったように思うんですね。

小田村 そうですね。判決が出た時は大きく報道されましたが、その後は、社会党が言っているのと同じものですからね。しかしこの長沼裁判は、私としては大変勉強させてもらいました（笑い）。

伊藤 でも直接の当事者になったわけではないんですね。

小田村 ええ。これは全部法務省が法定代理人として出ました。被告

はなんといつても農林大臣ですからね。

伊藤 判決ではナイキ基地をどうしろというんですか。

小田村 いやナイキ施設のことは言っていないんです。要するに保安

林の指定解除を取り消すということです。取り消しますと、判決でいっているのは、「もう回復不可能だということはないんだ、原状回復できるんだ」ということです。だからナイキ施設を壊して、また植林しろということになるんでしょうね。

伊藤 いかに新左翼っぽい話だな。わかりました。非常に面白いお話でした。これは経理局長時代の終わり頃ですね。

小田村 終わり頃です。四十八年九月ですから、二年目になっていましてね。

伊藤 経理局長としてのお仕事の中で、かなりウエイトがあつたわけですか。

小田村 この裁判の問題はかなりありましたね。

伊藤 そういう時はご自分でももちろんおやりになるんでしょうが、どなたがサポートするわけですか。

小田村 サポートは監査課でやっていましたね。監査課長、それから法規関係で石毛君という部員がいて、この人がやっていましたね。

伊藤 法の専門家なんですね。

小田村 専門家というほどではないですね。結局、雫石の場合は空幕です、東條さん。それから長沼の場合は、私がやったようなものです。

■防衛庁経理局長 (22) F4 空中給油装置問題

伊藤 いままでだいぶお話を伺ったように思いますが、そのほかに経理局長時代のお仕事で、ご記憶にあるところはございますか。

小田村 私の直接の担当ではないんですが、フアントム、F4の空中給油装置の問題が出ました。これはたしか榑崎弥之助の質問ですね。

このとき、榑崎が空中給油装置を問題にするという話が出て来たので、これにどういふふうに対応するかということでした。空中給油というのはキャップといって、空中待機をするのに使うわけですが、あるい

は航続距離を伸ばすためにも使います。しかし当時は給油機がありませんから、この装置を活用したことはありませんでした。

その対応の仕方を防衛局と装備局で検討いたしました。回答は、

「自衛隊機が基地に着陸してからすぐに出勤しなくてはいけないという状況が想定される。給油時間はできるだけ短縮しなければならぬ。通常の給油、一点給油では時間的に間に合わないおそれがある。この場合、給油装置を使って二点給油でやれば、もっと短縮できるんだ」という理屈にしました。装備局長は通産省から来た山口「衛一」君でした。山口君はちよつと疑問を持っていたらしいんですが、久保「卓也・防衛局長」さんはそれで行くという事になって、久保さんが答弁要旨をつくらせて家に帰ったんですね。

翌日、榑崎の質問がやはりその問題が生まれて、久保さんは、いざれ今日の質問に出てくるだろうというようなことを答弁の中でしゃべって大見得を切ったんですが、「二点給油になれば時間が短縮できるというのは本当か」と榑崎からたまたみ込まれて、「それなら実地見学させろ」ということになったんですね。

ところが実際には、短縮になっていないらしいんですね。二点給油であろうと一点給油であろうと、同じことらしいんです。その晩、山口装備局長のところへ「これはもう駄目だ、早く謝ったほうがいい」という話になりました。実際に実験をやったかどうか、ちよつと記憶にないんですが、いずれにしても架空の話だったものですから、事実と相違するわけで、「それではやむを得ません、給油装置は取り外します」ということで、全部F4フアントムからこれを取り外すことにしてしまつたんです。射撃照準装置のほうはフアントムを導入した時に、初めからつけないということだったので、だんだん丸裸になってしまつたんです。

空中待機は爆撃ではありませんので、敵機が飛んでくるのを待機するわけですが、なんであのときに久保さんはそれを言わなかったのかな、と思つたんですが、これはしょうがない。何か戦争もしないのに武装解除されたということ、全く馬鹿馬鹿しい結果だったんですが、

そういう事件がありました。

伊藤 空中給油ができなければ、滞空時間が非常に少なくなるということですね。

小田村 そうです。ただ、空中給油機を日本は持つておりませんから、当然米軍に頼らなくてはいけないんですね。それから空中給油の訓練をしなければならぬので、実際にそれを動かすということはなかったんでしょけれど、なぜつけているかという根拠としては、空中待機だといって差し支えない。これは長沼裁判の判決にも、キャップとということが出ています。だから別におかしいことではないので、そこまで言うてよかったと思うんですが。

伊藤 何かビビッたんですかね。それで足が長くなって、かなり遠方まで攻撃できるじゃないか、ということですか。

小田村 それが怖かったのかもしれませんがね。

伊藤 可能性としてはありますね。いまの日本の航空自衛隊では、遠方まで行つて相手を攻撃するということはできないんですね。

小田村 ええ、できないです。だから北朝鮮までも行けない。だからファントムを導入した時には、ファントムの航続距離は非常に長くて、爆弾の搭載をしていなければいぶん足も長くなりますからね。それを社会党にさんざん言われたところですよ。

伊藤 社会党に武装解除されたんですね。

小田村 そういうことですね。

■日銀政策委員会大蔵省代表委員

伊藤 だいたいそんなところですか。昭和四十九（一九七四）年、日銀の政策委員「日本銀行政策委員会大蔵省代表委員」に就任されますが、経理局長から日銀の政策委員というコースは何なんですか。

小田村 これはちよつと私も、こういう経緯だというのはつきりしたことはわからないんですが、昔は経理局長に行つて、だいたい本省に戻

つていたんですね。本省に戻らないで防衛庁に留まったのは田代さんが初めてだと思います。部内の空気としては、小田村も当然防衛庁に残るだろうと、新聞記者なんかもさかんにそういつていましたし、それでもいいのかな、という感じは僕はちよつとしておつたんです。

それともう一つは、田代さん、久保さんが次官になって、防衛局長は丸山「昂」さんが当然なる。丸山さんの後は防衛局長を私がやらなければならぬだろう。そうすると、野呂さんの本にも出ていますが、当時の国会、マスコミというのは本当にきつかつたんです。何か失言でもすると、いろいろな迷惑がかかる。そういうことで、私としてはそうなるつもりはないよ、なんていうことを新聞記者には言っていたんですね。

私の家内の父親は野田孝と言いますが、わりあい福田「赳夫」さんと親しかつたんですね。それで、今度福田さんと会う機会があるという。父親はなんとかして大蔵省に帰つてもらいたいという気持ちがあつたんでしょけれど、「防衛庁に残るといふ気持ちがなければ、福田さんに頼んでみるよ」ということを言われまして、「それはどちらでもいいんだけど、防衛庁に残りたいという気持ちではありませんか」ということはおやじに言つておいたんです。

そうしたら、福田さんは大蔵大臣でしたが、そういうことで福田さんをお願いしたらいいんですよ。そういうことですよ。ただ局長ポストはいまほとんど詰まっているから、ということとで政策委員。政策委員は当時私の同期生の大谷「邦夫」君というのがやつていたんです。大谷君は一年で替わるといふことで、その後に行くことになったんです。

伊藤 日銀の政策委員というのは、大蔵の大きな人事のネットの中に必ず入っているわけですね。

小田村 そうです。これは大蔵省代表委員です。大蔵省と経済企画庁から来ているわけですが、この二人は政策委員の中で表決権がないんです。政策委員会のメンバーとして発言権はあるんですが、表決権はないんです。

伊藤 すみません、そもそも政策委員会というのはどういう組織なんですか。

小田村 これは日本銀行の中に作られている組織なんですね。アメリカに連邦準備委員会というものがありますが、それに類した組織を、司令部がつくれと言ってきたわけなんです。当時の日本銀行は一万田さんでしたが、「そういうものを作られると日本銀行の理事会との関係が非常におかしくなる」ということで抵抗いたしまして、日本銀行の中に政策委員会をつくることになったわけです。

伊藤 GHQが言っているのは、行政委員会みたいなものをつくれということなんですか。

小田村 そういうことだったんですね。

伊藤 じゃあ、中につくったから諮問委員会みたいな形になったわけですか。

小田村 決定委員会です。日本銀行の中で理事会で審議して、それを政策委員会に上げて、政策委員会の委員長は日銀総裁ですから、そこで決定する。だから公定歩合の引き上げ、引き下げなどは全部、政策委員会で決定するわけです。

伊藤 理事会の上にあるわけですか。

小田村 理事会の上にあるわけです。理事会はマルタクと称しまして、定例的にやっているんですが、そこでだいたいこなしの上で、政策委員会に上げてくるということです。

伊藤 政策委員というのは常勤のポストでございしますか。

小田村 常勤のポストです。

伊藤 委員会がないときはどうするんですか。

小田村 委員会のないときは、来てもいいし、来なくてもいい。大変ありがたいポストです。

伊藤 いいポストですねえ。

小田村 大変いいポストです。総裁、副総裁は当然委員ですが、あと都市銀行の代表と地方銀行の代表、それから商工団体の代表、農林関係の代表だったかな。

伊藤 学識経験者は入っていませんか。

小田村 それが学識経験者なんですね。あと大蔵省の代表と、経済企画庁の代表ということです。毎週二回定例の会議がありました。

伊藤 そんなにあるんですか。でも毎回議題があるわけではないんでしょう。

小田村 議題がない時は情勢の報告です。日銀の理事会でこういうことをやっています、という報告が各局長から毎週上がります。

伊藤 例えば日銀のかなり大きな政策問題になってくると、大蔵省との関係が非常にございますね。

小田村 あります。それは政策委員会にかける前に、日銀と大蔵のあいだで調整をするわけです。

伊藤 そのときは委員はどういう関係になるわけですか。

小田村 委員は何も関係ないです。

伊藤 そうするとずいぶん楽な仕事ですね。

小田村 こんなにありがたい仕事はないですね。

佐道 大蔵から来ていらっしゃる先生も、事前段階での大蔵との折衝には関係しないんですか。

小田村 ええ、全然関係しません。それはおそらく、銀行局が窓口で十分に協議するわけです。

伊藤 しかしそういう楽な仕事は長くはさせてくれない(笑い)。

小田村 そういうことですね(笑い)。経済企画庁の代表というのは、だいたい通産省から経済企画庁にいつている人がなっていますから、まあ通産省の代表ですね。農林関係の代表も元農林省の方がだいたいなっていましたね。私のときには東畑四郎さんでした。この方はなかなか素晴らしい方ですね。

伊藤 私も昔インタビューをさせていただいたことがあります。

小田村 政策委員会が終わってから、昼飯と一緒に食べるんです。これは雑談ですけども、そのときに東畑さんの話が一番面白かったですね。仕事自体は大変楽なんです、一番ためになることは、昼飯のときに東畑さんのお話を聞くことでした。

伊藤 それは面白い仕事でしたね。でも四ヶ月程度ですか。

小田村 そうです。政策委員になるときに、先輩と前任者の大谷君から話を聞いたんです。安川「七郎」さんが大谷君の前の政策委員だったと思うんですが、安川さんのところに行きまして、「心構えを教えてください」と聞きましたら、「とにかくあそこでは黙っていただくしかない。絶対に発言してはいかん」という。「それじゃあ、わからんことがあった時に、質問してもいいかん」「質問してもいいかん」、それが安川さんの話なんです。質問したいことがあったら、政策委員会担当の参事といいますか、事務局があるから、それを選んで詳しいことを聞け。あそこの席上ではいいかん」というんですね。

大谷君はそこまで厳しいことは言わなかったんですが、「とにかくあまりしやべるな」という。それはなぜかと聞きましたら、当時総裁が佐々木「直」さんなんです。佐々木さんという方は非常に実力者であつて、日銀の理事、局長はピリピリしているわけですね。「だから、おまえがもし質問をして、局長が答弁でしくじったら、日銀と大蔵との関係からいってよろしくない」というんですね。静かにしている、ということでした。

そういう空気ですから、企画庁から来た原山「義史」君はときどき質問していましたけれど、あまりみなさんご発言がないわけです。それで都銀代表の方、勧銀でしたか、武田さんという方で、この方が大變フラストレーションが溜まってきまして、終わってからの昼食会にも出て来られない。非常に硬い方だったんですね。それで日銀としてもだいたい手こずったことがあったようですが、私も詳しいことは知りません。ポリシーボードというんですが、新聞記者連中はスリーピング・ボードと言っていました（笑い）。

伊藤 何も言えないというのもちよつと辛いことですね。

小田村 ちよつと辛いですね。石野「信一」さんなんかは政策委員をやっておられたことがあったので、「昔はしやべられたんですか」と聞きましたら、「いやあ、どんどんしやべったよ」と言うんですね。だから佐々木さんがなつておられたことが、非常にそういう雰囲気

をつくったんじゃないかと思うんですね。

佐道 通常任期は一年ぐらいですか。

小田村 だいたい一年か二年ですね。政策委員会での決定事項は大蔵は知っていますが、報告があつた事項はメモをつくつて、大蔵に帰ってから各局にばらまくということですね。

伊藤 その都度ですか。

小田村 ええ、その都度です。

伊藤 日銀の政策委員ということは、日銀の中にオフィスがあるんですね。

小田村 部屋があります。私の部屋は原山君と二人だけですが、それぞれの政策委員の方は一室を持つておられました。

伊藤 そこで執務するわけではないでしょう。

小田村 執務してもいいんですが、しなくてもいいわけですね。迷惑になりますからね。大蔵省のほうにもちゃんと政策委員室があるわけです。ですから、定例日に行きまして、帰ってきてレポートを書いて、あとは大蔵省のほうの政策委員室に座っていればいいわけです。そうすると、新聞記者が来たり、お客さんがあつたりして、その程度のこととで、ありがたいことです。

伊藤 経理局長時代とはうって変わったわけですね（笑い）。

■行政管理庁行政管理局長 (1) 行管庁の組織と権限

伊藤 だけど一年も経たずに異動なさるわけで、行政管理庁の局長に就任される。この局長ポストは、防衛庁の経理局長のように、大蔵のポストなんですか。

小田村 そうではありません。行政管理局の管理官は前から大蔵が出していました。行政管理庁は、むかし行政管理部というのが内閣にありまして、それが行政管理局の前身です。一方経済調査庁といったかな、価格統制の監視役の役所があつたんですね。それが、統制がだん

だん解けてきて仕事がなくなつて、一緒になりました。経済調査庁関係は行政監察局。だから行政監察というのがその頃から始まったわけですね。行政監察局と行政管理部が一緒になって行政管理庁になった。

もう一つ統計基準委員会という行政委員会がありました。行政委員会の整理で統計基準局となり、行政管理庁の中に入りました。この局は四十三年の一局削減で行政管理局の部になりました。大蔵省からは行政管理部の時代の頃から管理官として派遣しておったんです。局長（以前は部長）は、その管理部におった方とか、各省から出向していた方がなりました。自治省から来た方とか、監察局を経験した人たちがなつていたわけですね。

私がなぜ行つたかという、ちょうどその前に、十九年の方で平井迪郎さんという方が行政管理局長になつたんです。

伊藤 それは大蔵の人ですか。

小田村 大蔵の人です。平井さんは主計局次長から、銀行局が先だったか、いずれにしても管理局長になりまして、初めて大蔵から行政管理庁の次官になつたんです。というのは、古手の方は外地からの引き揚げの方が多かったんですが、そういう方がだんだん引退されて、跡継ぎがなくなつてきたということです。それで前任者は河合三良さん（小松製作所の河合良成さんの令息）でしたが、平井さんのところに話があつて、管理局長に行つて、それから次官になるんですね。平井さんの後は、木下「薫」君といつて、自治省から来た人が管理局長になつた。ところがその人が病気で倒れたんです。それで、平井さんが困つた。

というのは、「昭和四十九年」七月に異動があつて「木下氏は」管理局長になつたんですが、二、三ヶ月で仕事ができなくなつた。今度十月から機構定員の各省要求に対する査定が始まるわけです。これはある程度経験者でないといけないということで、平井さんが困りまして、探してみたら、小田村が政策委員でいるから、こいつがいいということになつた（笑い）。

伊藤 遊んでいる、と言われたんでしょう（笑い）。

小田村 私はせっかく政策委員で、こんなにいいポストはないと思つて喜んでいたわけですから、初めてのところに行くのはかなわんということでお断りしたんですが、平井さんの事情を聞いてみますと、本当にお気の毒で、考えてみたら、行政管理庁の中にほかにそういう人がいなければ仕方がないかな、と思ひまして、それでお受けすることにしたわけです。

伊藤 行政管理庁というのは元がない、戦前にはこういうものはないわけですね。

小田村 戦前は機構定員の査定は内閣法制局がやっていたんです。だから法制局の権限は絶大だったんです。

伊藤 そういう意味で法制局の強い面があつたんですね。

小田村 そうなんです。主計局がもちろんやりますが、同時に最終的には法制局なんです。

伊藤 いまは大蔵と行管と両方ですね。それを引き継いだわけですか。

小田村 それを引き継いで、行政管理部ができて、内閣法制局は一度なくなつたというか、法務なんかがありましたね。

武田 法務庁になりますね。

小田村 何かになつてバラバラにされたんですね。それで内閣に行政管理部ができて、そこでやつていたわけです。そこには大蔵省からも出向しておりまして、管理官として行つていたんですね。

伊藤 これは人事院のようにGHQがつくつたものではないんですか。

小田村 そうではありません。その前からです。

伊藤 行政管理庁というのはあまりわかりやすい組織ではないですね。一般の国民にしてみれば、行管とはいつたい何をやっているのかわからない。人事院だと勧告が出ますから、新聞にも出ますけれどね。

小田村 そうですね。だいたい役所の中の組織ですから。局としては管理局と監察局の二つです。管理局というのは機構定員の管理と、もう一つ統計基準をもつていたんです。昔は統計基準局といつておりまして、例えば美濃部亮吉さんは統計基準局長だったんですね。それはまた機構の整理で、行政管理庁の中に統計基準部をつくつて、そこに

入れたわけなんです。

伊藤 もう一つの監察局というのは。

小田村 監察というのは行政監察といって、具体的には全国に組織を持つているわけです。関東、東海等、全部ブロックごとにありまして、これを監察局というんですね。さらに府県単位の監察局があったんです。府県単位あるいはブロック単位の監察局が、実際に各省の行政の状況を調べて、それに対して勧告を出す、こういう仕事をやっていたわけです。

伊藤 それは地方自治体に及ぶわけではないでしょう。

小田村 地方自治体には及びませんが、地方自治体の中の機関委任事務とか、補助金が行っている事務がありますね。そういうものに対しては監察できるわけです。

伊藤 要するに、国のお金の行っているところですね。

小田村 そうです。

伊藤 各省の出先はどうなんですか。

小田村 各省の出先は当然対象になります。

伊藤 県の中にある場合、ですね。

小田村 そうですね。

伊藤 そうするとかかなり大きな組織ではあるんですね。

小田村 そうなんです、地方にございますからね。だから民間に対しては直接ということはありませんね。ただ行政相談という仕事がありまして、これは民間から相談委員になっていただき、行政に対する苦情を聞いて各省や自治体と相談して処理します。これも監察局の仕事になっていきます。私も役所によって、どんな監察をしているかというのは知らなかったんですが、いい監察もあるんですね。例えば先ほど申し上げました雫石の問題、航空行政の問題も一回監察局で取り上げているんです。これは事故が起こるといけないから、整理しておかなくてはいかん、という勧告を出したことがあるんですね。あまり知られませんでしたけれど。

伊藤 「行管に」行かれる前に、だいたいどういう仕事をするかとい

うことはご存知であったわけですか。

小田村 それは知らなかったんですが、主計局におりましたときに定員の査定は行政管理庁から資料をもらって、その範囲内で査定するということになっていましたので、それは知っていたわけです。それからこの前申し上げました、総定員法とか一局削減、あれは全部行政管理庁でつくっているわけですから、そういうことは知っていたわけですが、具体的な機構定員の査定は、向こうに行きましてからヒアリングをして、査定するということをしました。

伊藤 大蔵にいらした頃は、「行管のことを」けしからん役所だと思っておられたわけではないでしょう。自分たちと権限が重複するわけですね。

小田村 重複するんです。私も行って、これは重複行政じゃないかと思っただんですが、役所の後ろには政治家がついておりますね。この要求を抑えるのは大蔵だけでは難しいなという気がいたしました。あとでも申し上げますが、例えば局の増設のようなものは、直接金の問題ではありませんから大蔵はもう放っちゃうんです。特殊法人もそうですね。

伊藤 じゃあとりあえず、行管がOKとさえいいたいという感じですか。

小田村 そうそう、そういう感じなんです。大蔵自身も、局の増設なり特殊法人の増設にはそれほど抵抗感がなかった時代ですからね。

■行政管理庁行政管理局長 (2) 行管庁の人員

伊藤 われわれが大学の定員増の場合、文部省に認めてもらっても、大蔵省に求めてもらっても、行管で駄目、と言われたらアウトですからね。ですから、これは大変な役所だな、と思っておりました。やはり行管自体として新人を採用しているんですね。

小田村 新人を採用しています。いまだいぶOBになっていますが、いま大学教師が多くなってきたんですよ。増島「俊之」君とか八木俊

道君とか、みんな行管で採用した連中ですね。拓大で私が来てもらった田中一昭君、今度道路公団の民営化委員会で座長代理をやっていたが、彼は初め島根県庁に入って、それから行管に来了。そういう人たちでいたい行管プロパーですね。

伊藤 そうですか。先生がおいでになった頃は、いろいろなところから来ていたんですか。

小田村 いまでも管理局のほうには各省から来てもらっていると思います。僕が行った時には、大蔵省から高倉君といって、私が法規課長時代に法規課の補佐をしていたのが管理官でおりましたし、あとは外務省、郵政省、厚生省、そういうところから来ておりました。管理官で来ている場合と、補佐で来ている場合と両方ですが、各省から来てもらっていました。

伊藤 それは行政管理庁の総務みたいなところと各省との間でやり取りしているわけですか。

小田村 やり取りしているわけですね。逆に向こうにも行っています。農林省、通産省からも来ていましたね。

伊藤 ほかのところがわからないと、この仕事はできないわけですね。小田村 できないわけです。

伊藤 小田村先生がいらつしやった頃は、まだ直接採用した連中が上の方にいるわけではないでしょう。

小田村 まだ管理官まで来ていなかったと思いますね。伊藤 幹部はどういうところから来ていたわけですか。

小田村 行政監察局のほうはだいたい行管でとった人、それから経済調査庁から来た人、それから外地帰りの人、そういう人たちでしたね。管理局のほうは、そういう人たちと各省から来た人で、寄合所帯という感じでした。まあ管理官としてはみんな一所懸命やっていましたけれど。

伊藤 局長さんとしては、下に課があるわけですか。

小田村 いや、課はないんです。全部管理官です。主計局みたいな感じですよ。

伊藤 そうですか、それぞれの管理官が独自に仕事をする。

小田村 管理官がそれぞれ各省を分担して、そこで査定をするわけですよ。主計局と似たような形ですね。

伊藤 そうすると、各省についてよく知っていないと具合が悪いわけですね。

小田村 ええ。だから、私のときには加地「夏雄」君は審議官をやっていましたかね、彼なんかは厚生省から来たんですが、管理官の頃は自分の担当の役所に入り浸りに行っていたという話もありましたね。

伊藤 出身の省をやるわけではないんでしょう。

小田村 出身の省はやりません。それは具合が悪いですから。文部省関係は通産省から来た管理官がやっていましたね。

佐道 管理官というのは何人ぐらいいたんですか。

小田村 何人いたかな。七、八人いたと思いますね。

伊藤 だいたいランクとしては課長なんですか。

小田村 課長クラスです。

佐道 局のナンバーツとして、次長さんがいらつしやるんですか。

小田村 次長ではなくて審議官として加地君がいました。また総括の管理官がいました。

伊藤 総括の管理官が局長を補佐するんですね。

小田村 そうですね、それが行管生粋の人と、大蔵から来た人と二人いまして、それでやっていました。

伊藤 大蔵から来た人は先生が連れて行ったわけではなくて、前から配置になっていたわけですか。

■行政管理庁行政管理局長 (3) 国家公務員数の削減

伊藤 この当時、公務員の数の削減とか、さつきちよつとお触れになりました特殊法人の問題がありますね。これがかなり大きな問題だと

思います。国家公務員数の縮減ということは当時からかなり言われていたと思いますが、実際問題、行政の範囲を広げれば広げるほど、公務員の数が増えるのは必然ですね。

小田村 そうですね。そこで、それがうまくできないものですから、また一律方式を使うわけなんです。四十三年に総定員法ができてから、三年間五%の削減をやったんですね。それが二回続きました。三年間に五%ずつ一律に削減して、若干の配慮はするんですが平均して五%ですね。その片方で、増員要求を出させるわけです。その増員要求を査定していくわけですね。増員要求の数が、削減の数を上回らないようにしないといけない。

私が行った時は、ちょうど二回目の削減の最後で、今年は何%削減するか決まっていたんですね。片方で定員増の要求がありますから、それはそれで見ていく。しかし翌年には切れますから、そこで新しく削減計画を立ててはいけません。これが大変でした。各省もだんだん定員が減ってきていますので、抵抗が強くなってくるわけです。結局五%というのはとても無理だったので、三%ということで手を打ったんですが、三年間三%で次の計画をつくって、閣議にかけるということ、やっと落ち着いたんですね。

伊藤 われわれは大学において、ちょうどその頃に定員削減でいろいろやりました。まずは用務員がいなくなつて、これは非常に危ないということで、警備会社に依頼するということで外注に替えたんですね。それからあとは助手ポストを減らしていくということで、助手のやっていた仕事が先生の仕事になったというようなことで、これはたくさん恨みがあるところなんですけれど（笑い）。教官を減らすのはなかなか難しいものですから、結局そういうところに行くんですね。小田村 そうですね。ただ私が次官になってからですが、医科大学増設の問題が出てきて、これはいままでの削減の中ではとても捌き切れない。私の後任に、経済企画庁に行っていた辻敬一君に来てもらったんですが、辻君がこれを眺めまして、「国立大学を総定員法から外してしまおう」ということを提案いたしました。私も、それしかな

いだろうな、ということ、大臣が荒船「清十郎」さんだったんですが、荒船さんに話したら、「いや、それはいい考えだ、ぜひそれでやろう」ということでした（笑い）。医科大学があるので、あそこは国立大学を全部外したのかな、法律上別枠にしたんですね。伊藤 そうですか。いま、四月から国立大学法人をつくるということがありますね。

小田村 独立行政法人ですね。

伊藤 独立行政法人の一種ですが、たしか国立大学法人というんですね。これは文部省に言わせれば大学改革なんです。だから政府全体としては、これはたしかに行政改革なんですね。ですから、いまおっしゃったことの流れの中にあつて、公務員の定数からは外れるんです。

小田村 今度は公務員でなくすわけですね。

伊藤 ええ。だけど、ここが不思議なんです。が、「じゃあ共済組合はどうなるんだ」と聞いたら、「いや、いままで通り、国家公務員共済だ」ということで、何かこれは形を作ったな、という感じなんです。ですから将来は行政改革なんだろうが、ソフトランディングでやっている。いまのお話とつながるんですね。別枠になったんですか。

小田村 あのととき別枠にしたはずなんです。医学部だけではなかったと思うんですね。国立大学を全部外したのではなかったかと思ひます。

伊藤 そうしませんと、あれは一県一大学ですからね。

小田村 ええ、大変ですよ。

伊藤 お医者さんの数を考えて、県の数をかけたら、大変です。本当に国家公務員を減らすためには、行政の仕事の整理をしなければ、人を減らすわけにはいかんですね。だけど、仕事を減らすということは、同時に各省の権限を削るということですから、これはものすごく抵抗があるわけで、とても行管でやれる仕事ではないですね。

小田村 そうなんです。そこで一律削減ということになるんですね。そうすると各省横並びだ、それじゃあしょうがないだろう、ということに泣き泣きなるわけですね。しかし個別的にもやらなくてはいいかなと思つて、まず農林省の食糧検査員、それから統計調査、これが昔

の統制時代の名残で膨大な人員を持っていたわけですから。これをどうするかということで、行政監察の対象にしたんですね。そして仕事をどこまで減らせるかということも監察させたいですね。これは次官になつてからですが、かなり効果が上がったと思います。

他省の検査検定事務についても監察しました。その後、第二次臨時行政調査会ができたときに、かなり役に立ったんじゃないかと思えます。それに類したものがあちこちにあるんですね。つまらない仕事なんです、結構それで人員を抱えているという仕事があるんですね。伊藤 抱えている方は離したくないわけですね。いろいろなことに使えますから。

小田村 東畑四郎さんに一回これを頼もうと思つて接触させたら、東畑さんが言っていました、むかし美濃部さんが基準局長から行政管理局長になりました、そのときに食糧検査員のことがあったそうなんです。それを美濃部さんがこれだけ削れと言つたので、それに対してひとつずつ積み上げて反論していった。そうしたら前より膨れちゃつたので、美濃部さんが諦めた、と東畑さんは言っていましたけれどね(笑い)。

伊藤 これは内閣が本当にやる気にならなければ、できることではありませぬ。あれだけ臨調をやり、行政改革でさんざん騒いだけれど、結局実効は上がっていないですね。

小田村 そういうことを推進するために監理委員会というのがつくつてありまして、学識経験者で、林修三さんと大槻文平さんなんかにもやっていたいたんですが、そういう有力者の方になつていただいで、そこで行政監察の必要とか、管理局の機構定員の問題とか、そういうことを議論していただいたんですね。それだけでは足りないということ、中曽根長官のときに、第二次の臨時行政調査会をつくつて大々的にやることになったんです。行政監理委員会も、むかし太田薫氏が入つておつたものですから、労働組合代表も入つていましたので、そういう点では必ずしも実効は上がらなかったと思います。

■行政管理庁行政管理局長 (4) 特殊法人の問題

伊藤 国家公務員もそうですが、特殊法人はもつと厄介ですね。

小田村 特殊法人はもつと厄介です。田中内閣ができた時に、平井さんがずいぶん苦労されたようですが、都市整備公団でしたか、何か新しいものを一つ作らされたことがありましたね。列島改造関係です。つくれ、つくれということは言うんですが、毎年毎年出てきていたのが、東京湾横断道路も特殊法人で、ということでした。その都度これはつぶれていったんですけれどね。そういうものだとか、さまざまものが出てくるわけです。特殊法人のほうは、とにかく一つつくるためにどこかつぶせということでやっています、増やす方は抑えられたんですが、減らす方はなかなか簡単にいきませんでした。だからいろいろなものをくつつけたりしてはおつたんですね。

それから、特殊法人について、整理しろ、整理しろ、と言われて、自民党の玉置和郎さんですね、彼なんか大変熱心になりました、門田「英郎」君という管理官が一所懸命玉置さんへの対応をやっていました。しかし実際に何かできるかというと、なかなかできないですね。

伊藤 それぞれの特殊法人にそれぞれの役所が監督についているという、養っているといった方がいいのかもしれない、それにまた国会議員がくつついていてはいますね。

小田村 国会議員が全部くつついてはいますからね。

伊藤 いまの道路公団の問題でも、あれだけ大騒ぎになる。とても手をつけられない。猪瀬「直樹」君がずいぶん頑張っていますけれど。

小田村 あれもおかしいんですね。田中一昭君を度外視して、勝手に動いているものですかね。

伊藤 でも彼がその前にやった調査で、実体はかなりわかつてきましたね。彼の『日本国の研究』は非常に面白いな、と思つたんです。

小田村 そうですね。彼は目立ちたがり屋ですね。だから、組織というものがどういふものかということがわかつていないですよ。委員会

であれば、勝手に行動しないで、委員長と相談してやるのが筋なんですけれど。

伊藤 しかし委員長が、やってられないと言って、辞めちゃいましたね。この時点では、特殊法人として特に問題になっていたことは何かございますか。

小田村 削減できたものはないですね。例えば環境衛生金融公庫とか、そういうものを国民公庫と統合したらいいじゃないかということも言い出したこともあるんですが、それぞれできた経緯がありまして、政治家がついているわけですから、つぶそうとすると、なかなか簡単に行かないですね。

伊藤 みんな選挙の集票組織とつながっていますからね。

小田村 そうなんです。

伊藤 環境衛生というのは何ですか。

小田村 実際には国民公庫が代理してやっているわけですから、本当は統合しても構わないんですけれどね。北海道東北開発金融公庫を開銀と統合するとかあるんですが、それも北海道開発庁とかいろいろな関係がありまして、それぞれの地元の代議士がいるものですから。

伊藤 行管として何かやるということとはちよつと無理ですね。

小田村 無理ですね。第二次臨調でだいぶよくやってくれたと思うんですが、私が局長時代には、増やすのを抑えることで精一杯でしたね。伊藤 財政的にも非常に苦しいという状況ではないですかからね。

小田村 そうですね。石油ショックがありまして、福田さんが「全治三年」ということで多少抑えたんですが、いまのようなことはなかったですからね。

伊藤 そうですね。景気がよくなればまたぞろ、もつとつくれという要望が出てくるわけですね。

小田村 つくれということになってくるわけですね。

■行政管理庁行政管理局長 (5) 局の増減問題

小田村 特殊法人のほうは比較的抑えやすかったんですが、一番苦勞したのが局の増設ですね。何か事件があると局が増えてくるんです。あのときは何だったかな、原子力船むつの事故でしたか。私が局長になって予算折衝がありまして、最後に残ったのが局の増設問題です。

一年目は、一つは科学技術庁から原子力安全局です。これは森山さんが大臣だったんです。「三木内閣では佐々木義武」。それからもう一つが法務省の訟務局。これは稲葉「修」さんが法務大臣だった。それで幹事長は中曽根さんですね。総理は――。

伊藤 中曽根さんが幹事長なら三木内閣ですね。

小田村 三木内閣でしたかね。それじゃあ田中さんが四十九年の暮れに辞めて、三木内閣になったんですね。それで「行政管理庁長官も」細田「吉蔵」さんが辞めて、松沢雄蔵さんが大臣になっているんですね。三役が中曽根幹事長と、政調会長、総務会長は誰だったかな。

武田 総務会長は松野さんですね。「政調会長が松野頼三、総務会長は灘尾弘吉」。

小田村 結局、特殊法人はそれまでに片づいたんですが、局の増設問題が最後まで残って、三役折衝になったんです。次官が平井さんで、相談したんですが、平井さんは、「いまの大臣ではちよつと抑えるのは無理だろう。しかしどちらかを入れるとすれば、原子力安全局のほうに筋がいい」という。というのは、訟務局は一局削減のときに減らした局なんです。それを復活させると、ほかのものが続々と出て来てあとの動きが取れなくなる。外務省からは中南米局の要求が出ていましたから。原子力安全局というのはたしかむつの事故があつてからだと思うんですが、こちらの方があとの影響が少ないだろうということになりました。

松沢さんが大臣として出るんですが、三役折衝というのは大臣一人なんです。事務方は後ろに控えてはいなくてはいけません。三役と官房長官ですね。長野出身で三木さんの――。

佐道 井出「一太郎」さん。

小田村 ああ、井出さんが官房長官ですね。大臣は松沢さん一人で、松沢さんは怒っちゃったんです。「おれ一人をつるし上げるのか」というんですね。松沢さんは、昔は勇ましかったんですが、病気をしまして、脳梗塞か何かをやられたあとですから、昔のようではなくなっていた。人は好い方なんですが、とにかく頑張ってくださいということとで、後ろに控えていました。原子力安全局だけで、法務省の訟務局はつぶしたんです。中曽根さんに非常に叱られてね、「稲葉君の身になって考えろ」と言われたんですけれどね。たしか一つだけで済んだと思います。

ただ安全局をつくるにしても、科学技術庁のほうの部を少し整理させました。事務方としては、局を作るのはいいけれど、あとでしつぺ返してほかの局の組織を減らされるのが痛いんです。だからあまり喜ばないんです。訟務局をつくってもらいたいのはやまやまだけれど、法務省としてはあまりありがたくない。われわれが法務省に言ったのは、保護局と矯正局ですね。矯正は刑務所の中ですし、刑務所を出てからが保護局なんですね。「これを一緒にしたらいいじゃないか、そうしたら訟務局ができるから」と言ったんですが、官房長がいつていました、「それは保護と矯正というのは絶対に駄目なんだ、これは中にいる人でないとわからないでしょう」。犬猿の仲なんですよ。これは中伊藤 似ていれば似ているほど駄目なんですよ（笑い）。

まだしばらく行政管理庁のお話があるでしょうし、さらに事務次官になられますので、次回はそのへんのお話を伺いたいと思います。だいたい、行政管理庁の事務次官で官歴としては終わりになるんですね。

小田村 ええ、終わりです。

伊藤 これからあとは、拓大に行かれるまで、何かございますか。

小田村 あとは農林漁業金融公庫の副総裁をしまして、それから日本銀行の監事をやりました。両方ともかなり長かったですね。日銀の監事を辞めて、東京短資という会社の顧問を二年ほどやりました。それから拓大に行きました。

伊藤 その間はいわゆる天下りでございますか。

小田村 全部天下りです。

伊藤 その天下り先のこともちよつとお話を伺いたいですね。

小田村 そうすると、あと二回ですね。

伊藤 あと二回ぐらいはお願いしたいと思います。そこで終了したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

〈以上〉

小田村 四郎

オーラルヒストリー

第 12 回

行政管理庁時代Ⅱ（1974～1978）

【2004年2月24日（火）14:00～16:00】

（於：政策研究プロジェクトセンター）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学元助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

記録・編集：丹羽 清隆

第 12 回質問項目

1. 今回は 74 年 10 月に就任された行政管理庁行政管理局長時代の続きからお願いします。
前回、局長時代の大臣として松澤雄蔵氏のご印象はうかがいました。田中内閣時代の細田吉蔵氏についてはいかがでしょうか。
2. 先生の局長時代の問題として、国家公務員第三次定員削減計画の取りまとめはかなり御苦労されたということですが、この問題について少し詳しくお願いします。
3. 先生は 76 年 5 月、行政管理事務次官に就任されます。次官就任に当たってどのようなことをお考えになりましたか。また、とくに重視されていた課題としてはどのような問題がありましたか。
4. 先生の次官時代の長官は、最初は松澤氏、ついで 76 年 9 月から荒舩清十郎氏、同年 12 月の福田内閣成立によって西村栄一氏、翌 77 年 11 月からふたたび荒舩氏となりました。それぞれについてのご印象などお願いします。
5. 次官に就任された後の 8 月、公務員第四次定員数削減計画が閣議決定されています。第三次と比べてこの第四次の計画についてはいかがでしたか。
6. 1977 年 9 月、府県単位機関などについて省庁別に見直し、整理統合を行うという行政改革についての閣議了解が行われます。この計画の内容や具体的進捗状況についてお願いします。
7. 1977 年 12 月、地方支分部局の整理再編成、国家公務員の定年制導入、地方事務官制度廃止などを内容とした行政改革についての閣議決定が行われています。この計画の内容とその意味、具体的な進展具合などについてお願いします。

8. この頃、防衛庁から先生に丸山事務次官の後任として戻ってきてほしいという要請があったということですが、その経緯についてお願いします。

9. 先生が行政管理庁事務次官をお辞めになり退官された直後、福田内閣が倒れて大平内閣が成立します（78年12月）、先生は福田首相を高く評価しておられたと思いますが、福田内閣から大平内閣へという政局の展開についてはどのように見ておられたのでしょうか。

10. 78年10月、先生は農林漁業金融公庫副総裁に就任されます。就任の経緯及び農林漁業金融公庫の業務などについてお願いします。

11. 先生は金丸信元防衛庁長官が中心になってつくられた日本戦略研究センターにも参加しておられます。その経緯などについてお願いします。

12. 1985年7月、総務庁による「行政機関における個人情報の保護に関する研究会」が発足し、先生はそのメンバーに就任されます。この研究会は当時、衆議院でも国家秘密法法案の審議が継続審議となるような状況があったわけですが、こういった問題が背景にあって作られたのでしょうか。また、先生がメンバーとなられた経緯などもお願いします。

13. 1986年12月、「行政機関における個人情報の保護に関する研究会」は個人情報保護、本人訂正制導入などの提言を発表します。その経緯や研究会での討議内容などについてお願いします。

※今回は以上のような問題を中心にお願います。

■「補」日米同盟という言葉

小田村 はじめに、防衛庁時代のことと言いつれ忘れたことをお話しします。たしか鈴木善幸内閣のとき、鈴木さんが渡米されて、「日米同盟」という問題が出ましたね。

伊藤 軍事同盟ではない、という話ですね。

小田村 そうです。その「日米同盟」という話を聞いたのは、私が防衛庁にいたときです。これは角田順さんが一回講演に来られまして、「アメリカの国防省の高官がはつきり『同盟』ということを言っていた」という話をされたんです。当時、「同盟」というのは日本ではもちろん発言しませんが、アメリカでもそういう言葉はなかったと思うんですね。ですから、それが非常に新鮮に聞こえた記憶があります。当時、アメリカは同盟関係だと思っていたんだろうと思いますが、それははつきり言っていたということ、わざわざ角田さんがお話になったんですね。われわれもちよつとびつくりした記憶があります。

伊藤 そうですか。そういう背景があるんですね。

武田 それは昭和四十年代ですね。

小田村 そうですね。防衛庁にいたときですから、昭和四十八年か四十九年だと思いますね。

伊藤 それまでは「日米同盟」という言い方をしないで――。

小田村 「日米安全保障体制」ですね。

伊藤 といっても、同じことだと思えますが。

小田村 「同盟」といいますと、日英同盟とか三国同盟の記憶がありますからね。攻守同盟ですから、そういう感じで、ちよつとびつくりした記憶があります。

伊藤 たしかに片務的ではありますが、同盟ではあるんでしょうね。

小田村 そうなんですね。同盟なんです。

伊藤 いまその同盟の実証を迫られているわけですね。

■行政管理庁行政管理局長 (6) 行管庁長官の印象

伊藤 それでは始めさせていただきます。前回は昭和四十九(一九七四)年十月に行政管理庁の行政管理局長になられてからのお話でした。大臣だった松澤「雄藏」さんのお話は伺ったんですが、「その前の」田中内閣時代の大臣は細田吉蔵さんでした。細田さんについて何かご記憶、ご印象はございますか。

小田村 それで、私は十月に行管庁にまいりましたが、そのときは田中内閣の末期ですね。田中さんが例の田中金脈事件で退陣したのが十二月の初めでした。

佐道 はい、十二月の初めに三木さんに替わります。

小田村 そうですね。ですから細田さんにお仕えたのはごく短いんですね。十月、十一月と二ヶ月ぐらいですね。細田さんはむかし総務副長官をしておられたときからよく存じ上げておりました、大変気さくに、いろいろなことをやってくださったと思います。もともと運輸官僚ですから、役所のことでもよくおわかりになって、役所としてはいい大臣だったと思います。

伊藤 先生は、お人柄としてはお好きな方ですか。

小田村 そうですね。前から存じ上げていましたので。

伊藤 細田さんは、政治家としてはそれほど大物にはならなかったと言つてもいいんですかね。

小田村 そうかもしれませんね。人柄が非常にいい方でしたから、積極的に自分の我を主張するということとはなさらなかったんじゃないかと思えますね。

伊藤 行管庁の大臣というのは、大臣としては伴食のほうになるわけですか。

小田村 大物が来たことも少なくありません。川島正次郎さんや木村元帥「木村武雄」なんかが来たことがありますし、田中内閣時代は福

田「起夫」さんが行管庁長官ですね。それからその次に、官房長官をやった保利「茂」さんもやりましたね。保利さんが七月の内閣改造でお辞めになって、そのあとで細田さんが来られたんですね。細田さんは大臣としては短かったわけです。平井「迪郎」さんが次官に就任したとき、保利さんが替わられてからですが、保利さんにひとつ揮毫をいただきたいとお願ひしたことがありました。

伊藤 むかし、戦前期でいいますと、党の実力者で党をいろいろ動かすけれど、大臣にはなる。そのためには通信大臣がいい、通信大臣になつているとあまり仕事はない。そういう大臣ポストというのがあつて、行管庁というのはそういうところかな、とちよつと思つたものから。

小田村 比較的新しい方が来られた時代が多かつたように思いますが、大物を処遇するときにも使われたんでしょうね。福田さんも保利さんもそうだと思うんですが、「重要ポストはいやだ、自分で自由に動ける比較的軽いポストがいい」というときにお使いになつたところはあると思いますね。

伊藤 ほかの省庁、例えば防衛庁なら、大物の大臣が来てくれていろいろ頑張ってくれると助かるということですが、行管庁の場合は、そういうわけでもないんですか。

小田村 いやそれはあります。それはこれからお話ししますが、西村さんのときは本当に楽でしたね。また私がやめてからあとですが、中曾根さんが長官になられたときは、土光臨調をつくつて画期的な行革をやられました。

■行政管理庁行政管理局長 (7) 国家公務員定員削減計画

伊藤 次の質問ですが、国家公務員第三次定員削減計画というのは、この前ちよつとお話くださった三％のときの話ですか。

小田村 第二次削減計画は昭和四十七年度から四十九年度まで三年間

で五％の削減をいたしました。そこで五十年以降の削減計画を決めなければならぬのですが、これが非常に難航しました。これは私の着任する前で、平井さんが行政管理局長で各省と折衝されたのですが、各省の抵抗が強く非常に苦労されたようです。大臣だった保利長官にも動いていただき、平井さん自身も次官会議当日の朝、山中防衛庁長官を訪ね、膝詰め談判でやつとご了解をいただいたほどでした。四十九年七月にようやく三年間三％ということで閣議決定に漕ぎつけたわけです。ですから、私が行管に来る前に、第三次計画は決まっています。

伊藤 しかし一方で、増員要求も出てくるわけですね。

小田村 出て来ます。

伊藤 その増員も含めて三％減ですか。

小田村 いや、違います。増員は増員で別なんです。例えば農林省なんかは少し人間が多過ぎるということで、増員のほうは非常に厳しいわけです。ほとんど認めない。ところが増やさなくてはいけないところ、医科大学は別ですが、そういうところもあるんですね。航空管制とか、看護婦はどうでしたか、だいたい抵抗が強かったんですが、そういうところに色をつける、というようなことですね。国税庁も少し増やしたかな。そういう現業的なところを増やしました。

伊藤 そうすると、プラスマイナスですか。

小田村 プラスマイナスで、とにかく膨れないように、マイナスにしないではいけません。

伊藤 例えば農林省なら農林省で、これをこれに振り替えるということもあり得るわけですか。

小田村 あり得るわけです。

伊藤 それは片方が削減で、片方が増員なんですか。中の操作ですか。小田村 中の操作です。だから削減は削減で、中の振り替えは各省の自由です。

伊藤 行管庁の場合には、例えば組織の変更などもかかるわけですか。小田村 そうです、組織の変更も全部かかります。

伊藤 それは局のレベルなのか、課のレベルなのでしょうか。

小田村 全部かかります。

伊藤 係もかかりますか。

小田村 係も一応かかっていたと思いますが、係のところはそれほど重くは見ません。というのは、課は政令職ですから、閣議を通すことになりましたね。ですから係までは見ませんが、管理職として政令に関わるところは全部見ます。省令職の管理官というのは、その頃から少しずつ出て来たと思います。しかしこれも一応審査することにしていました。

伊藤 そうすると、けっこうしょっちゅう起こってくる問題ですね。

小田村 やはり予算の時です。

伊藤 そうするとかなり季節労働的なことですね。

小田村 そうですね。そういうことになります。

伊藤 大蔵省の予算査定の問題とくっついていてるわけですね。

小田村 主計局とくっついていてるわけですね。

伊藤 そうすると年末が忙しいんですね。

小田村 年末が忙しいわけです。

■行政管理庁行政管理局長 (8) 訟務局

伊藤 そして昭和五十一年五月に行管庁の事務次官になりますが、その前にほかに何かございますか。

小田村 ええ、局長時代の問題として、この前たしか原子力安全局の話をしたと思いますが、それは五十年度予算のときの話で、五十一年度予算のときにまたいつぱい出て来ました。このときは、前年からの引き続きで、法務省の訟務局のほかに、新しく外務省の中南米局が出て来ました。これはどちらも四十三年の一省一局削減したものの復活だったわけです。それで、「長官は」松澤さんから荒船さんに替わりましたか。

佐道 荒船さんに替わったのは、五十一年九月ですね。

伊藤 「小田村」先生が次官になってからですね。

小田村 そうすると松澤さんが二回予算をやられたのかな。松澤さんは四十九年の暮れですね。そうすると二年やられたことになりますか。

佐道 そうですね。

小田村 そうですか。じゃあ松澤さんが引き続きやられたんですね。その処理をどうするかということですが、両方とも蹴飛ばすことは難しいだろう。平井次官もそういう感じでした。そうして、仕方がないから訟務局を認めるか、ということになったわけです。これは中曽根さんと、稲葉「修」さんが引き続き「法務大臣」やっておられたように思うんですが、稲葉さんのラインですから、今回は認めないとまづいかもしれないということでした。その代わり、何をつぶしたか、ほかの代償を出させまして、訟務局を認めました。これも三役折衝でやりました。その代わり外務省「の要求」はつぶしたということですね。

■行政管理庁行政管理局長 (9) 週休二日制問題

小田村 それからもう一つ、申し落しましたが、週休二日制の問題があつたんです。これはちよつと私も、人事院勧告が出たのか出なかったのか、はつきり覚えていないんです。週休二日制の話は、私が防衛庁にいた頃に、各省の意見を聴くということで、総理府人事局が人事院が労働省か、どこかよくわかりませんが、照会があつたらしいんですね。参事官会議にかかりましたが、そのときの参事官会議には、私は防衛研究所で講義をしてくれといわれておつたので、出られなかったんです。私は会計課長に「防衛庁としては非常に影響が大きいから反対の意見を言っておいてくれ」と言ったんです。島田「豊」さんが次官だったんですが、これはもうやむを得ないというような感じで、「週休二日制にするのであれば、自衛官もそれから除外されないように」という返事することに決めてしまったらしいんですね。

私が行管に行きましてから、なんでこんなふうになったのか調べてみたところ、四十八年の経済審議会の答申の中に出ているんです。官庁にも週休二日制を導入する、ということですね。これを推進していたのはもちろん労働省です。労働省は前から強く主張していました、人事院も同調していたんですね。総理府人事局は特に意見がなかったようです。どうしてそんなことになったのか。経済審議会の答申は当然各省とすり合わせをした上で出しているわけですが、平井さんも行管の局長をしておられて、知らなかったわけですね。その答申を見せられてびっくりしまして、「いったいこれはどういうわけなんだ」ということで追及したところが、これは各省から来て、行政管理局にも来ていたんです。それを行政管理庁の中の官房でそうしたらいいんですが、定員査定の局ではなくて、統計基準部があったので、経済のことだから統計基準部のほうに回してしまっただけですね（笑い）。それから、そのままOKの回答をしたんです。

それはけしからんということで、行政管理庁としては、とにかく週休二日制にすれば定員に当然影響してくるということで反対だ、ということをはっきり打ち出したんです。平井さんにもOKしていただきました、大臣にもご報告したと思います。

そうしたら人事院が困っちゃったんですね。人事院は尾崎「朝夷」さんが総長をしておられたかと思いますが、尾崎さんが二、三回平井さんのところに陳情に來られました。勧告を出したあとだったのかも知れません。だから人事院としては退けなくなったわけですね。ただ、考えてみますと、このときは、田中・福田内閣当時ですが、総理大臣はこんなことを知らないはずなんです。田中さんも決して賛成とは言わないだろうし、福田さんに至っては組閣した内閣のスローガンが「さあ働こう内閣」でしたから、そういうところで休みを取るような話を受け付けるはずがないと思っていたものですから、これは突っ張ってもいいだろうと思っていたんです。しかし当時労働省は労働時間が長過ぎるということをさかんに言っていたんですね。

伊藤 国際比較をやっていましたね。

小田村 国際機関で、「ワーカホリック」という言葉がやりました。「働き中毒」というんですね。これはとんでもない話だといっていたんですが、平井さんは人事院の立場があるから、トライアル（試行）なら認めようかということ、たしか初めは月一回だったと思います。月一回の土曜休日の試行をやってみる。一番困るのは二十四時間態勢のところなんです。運輸省とか防衛庁、警察というところは困るわけです。警察の意見を聴きましたら、「警察としては、ここまで来ているから全然反対というわけにはいかないけれど、やるんだったら閉庁にしてくれ」ということでした。つまり当時のトライアルは窓口は開けてあったんですね。それでは事務に負担が重くなる。閉庁ならば当直だけになりますから、ということ警察は主張していました。一回目はたしか月一回のトライアル、しかも閉庁態勢でいくということが始まったと思うんですね。

これがその後、月二回（伊藤 隔週ですね）、隔週になりました。しかしまだ閉庁だったと思います。その後だんだん、だいぶあとになります。五、六年経ってから完全実施ということになったと思います。週休二日制はその前に金融機関が始めていたんですね。これはけしからんじやないか、銀行は胡座をかいている上にサービスまで薄めるのはけしからん。これも労働組合の関係なんです。大蔵省がさきにそれをやってしまったので、役所のほうも並ぶということになってきたのではないかと思います。それは私が辞めてからなので、詳しい状況はわかりません。

伊藤 先生がおやりになったときは、一日試行ということですか。

小田村 一日試行で、それを二回にしたと思います。

伊藤 そこまで行ったら、あとは行きますね。

小田村 まあ、そういうことなのでしょうね。初めにちよっとボタンの掛け違いで統計基準部に行っちゃった、ということが残念なんですけれどね（笑い）。

伊藤 実際に二十四時間態勢のところは、交替勤務でやるほかないですね。

小田村 そういうことですね。だから結局定員が増えるんだろうと思うんです。

伊藤 増やさないことにはちよつとやっていけませんね。増やさないとしたら、サービス残業をやらせるとか、そういうことをする以外にないですね。

小田村 それ以外にないんですね。

伊藤 二十四時間勤務でかなり緊張を強いられるところに、しわ寄せが行くということになりますね。

小田村 もう一つ、その当時は文部省も反対だったんです。文部省は、例えば土曜日を休日にしてしまうと、みんな塾に行ってしまう。だからどうにもならないということで、文部省も反対だったんですね。だけど結局、それがやられたのは、日教組なんですね。

伊藤 実際、その通りになったんですね。

小田村 その通りになったわけです。文部省は最後まで週五日制に反対していたんですけれどね。

伊藤 その後、「ゆとり教育」なんていうことを言いましたからね。

小田村 ええ、「ゆとり教育」と一緒になっちゃったんですね。

伊藤 そうですか、そういう問題がちょうど起こっていた時期なんですね。

■行政管理庁行政管理局長 (10) 個人情報保護問題

小田村 それからもう一つ、個人情報保護の問題がありました。当時からプライバシー保護問題というのがだいぶやかましくなってきました。行政機関は個人情報管理している。しかもだいたい前からあるんですが、国民総背番号制という問題がありまして、行政管理庁も大蔵省も、それは大変事務の効率化にいいということで賛成の立場だったんですね。ところが、国民総背番号制に反対する会がありました。これはだいたい社会党・総評系が中心で、共産党もそうでしたかね。反

対運動がだいぶ強くなってきました。他方、アメリカにしてもヨーロッパにしても、個人情報保護の問題だんだんやかましくなってきました。それぞれ法律を作っていたんです。

行政機関の問題ですから、行政管理庁としても考えておかななくてはいけないことですが、当時行政監理委員会というのがございまして、委員長は大槻文平さんがやっておられました。平井さんが次官のときに、そこに行政機関の個人情報管理の問題を検討していただきたいと諮問したんです。そこから個人情報保護の問題が始まったんです。いま出ているのは、一般の民間の個人情報全部含めてですが、

民間の問題は行政管理庁の守備範囲ではない、行政機関の問題だ。行政機関の問題も、文書情報ならいままでと何も変わらないし、個人の権利を侵害することもなかった。電算機が出て来て、コンピュータによって管理が非常に効率化され、その結果個人情報が悪用される心配があるから、電子計算機に基づく個人情報の管理の問題に局限しようということで検討を始めたわけです。

これは平井さんのときから始まって、私のときもまだ立法化ということまでまいりませんでした。初め中間報告みたいなものを出したことはあると思いますが、外国の法制の調査と、それを日本で適用する場合にはどうなるかという研究という段階で、ずっと過ぎていったという感じがします。

これを一番心配したのは警察庁です。あそこは全部データベースを持っていて、それがなければ犯罪調査はできませんからね。

警察とよく相談しながら、ということは考えていました。

伊藤 警察は個人情報の保護について、むしろ一番関心があるのではないでしょうか。

小田村 そうですね。外に漏れると困りますからね。同時に収集と利用の問題がありますから、その制約を受けると支障が生じるという問題もあります。

伊藤 これまたいろいろな側面があるから、一概にどうこう言えないですね。

小田村 言えないんですね。それが局長時代の問題です。

伊藤 このあいだ情報公開の問題で、財務省の人にお話を伺ったんですね。そのときに文書がありまして、公開するのは係長まででしたかね。起案した人間や課員の名前は墨消しをして見せる、というんですね。やはり個人情報なんですね。

小田村 個人情報というか、課員に至るまでその問題についての責任を取らせるのは具合が悪い。あくまでも最終決裁者の責任だということとが役所の定石ですから、そういう意味ではないかと思えますね。

伊藤 そうかもしれません、そういう仕事に関わったという名誉もあるのではないかと思っただけですが。

小田村 ちょっと内部文書についてまで公開するということはなかなか難しいと思うんですね。役所というのは、会社もそうでしょうが、物事を決定するまでの間にはいろいろな意見があるわけですね。その結果一つの意見に集約されてくるわけです。そのとき、必ずしも意にそぐわない場合でも、そういうふうな決定がくだされば、みんなはんこうを捺すわけです。そのはんこうにまで責任を負わされることになる、それはちょっと酷だということではないでしょうか。

伊藤 アメリカの行政文書などは、全部プロセスが出て来ますね。日本の場合、なぜそれを消すのか、という感じで見ていたんですね。それもプライバシーの問題なのかな、と思っただけですが。

小田村 ある程度時間が経てば公開するという期限がアメリカの場合ございますね。歴史的な問題になってしまえば、それはおそらく構わないと思うんです。

伊藤 財務省は財務省で、いつになったら現用文書でなくなるのかという規定がないわけです。

小田村 そのへんでしょうね。歴史的な研究として、どの程度公開できるか、ということだと思います。

伊藤 わかりました、ちょっと余計なことを申しました。

■行政管理事務次官 (1) 事務次官として

伊藤 それで、事務次官におなりになるということですが、管理局長から次官へということは、かなり自然なことですか。

小田村 だいたい自然なことですね。これも後ほど申しますが、行政管理庁というのは自分で採用した若い人たちがまだ十分に成長していなかったわけですね。こういうところでは、外から入れる以外にない。それが非常に難しいんです。昔は外地帰り、朝鮮総督府、台湾総督府に勤めていて帰って来られた方がおられたのでよかったです。そういう方はもうほとんどいなくなっちゃった。平井さんの前が河合三良さんといって、河合良成さんのご令息です。この方は統計出身で管理局長になられて、次官になられたんですね。そういう方が少しずつ育ってきているんですが、どうしても段差がありますからね。

それで、次官はいいけれど、「行政管理」局長をどうするかということで、平井さんも苦心されたんですね。結局、平井さんが大蔵省の竹内「道雄」次官と同期だったものですから、竹内さんと相談して、誰かいい人ということになりました。そうしたら、経済企画庁の官房長をしておった辻敬一君という人がいました。これはおそらく二十三年の前期でトップの人だと思うんですが、当然大蔵省に戻るものだとばかり思っていたところ、平井・竹内会談で、大蔵省として出してもいいという話になったんですね。平井さんは大変喜んで、「辻君を出してくれるそう。それじゃあ彼に跡を継がせるようにしよう」ということで、安心して辞められるということになったわけです。辞めることもなかなか簡単にはいかないわけです。

伊藤 それでその方が局長になられるんですね。

小田村 辻君は、私のあと局長になって、次官になりました。

伊藤 そうするとずっと大蔵が続くわけですか。

小田村 そうですね。辻君まで大蔵が続きました。彼はその後会計検査院の検査官になって、検査院長をやりました。その検査院長のとき

に亡くなったんです。

伊藤 現職で、ですか。

小田村 ええ、現職で。早く亡くなったんです。

伊藤 局長から次官へ、ということですから、特別なことはないのかもしれませんが、次官というのは、役人のトップですから、そこで自分はいくうふうにやっていくという心構えみたいなことはあったんでしょうか。

小田村 特に心構えということはないんですが、管理局だけしか見ておりませんでしたので、次官としては監察局、行政監察のほうも見てみようと思いました。これは地方局がありますから、地方をずっと回りました。監察事務の中には行政相談事務というのがありまして、行政相談委員というのを民間から委嘱していました。福田さんのときにこの制度をつくって大変好評だったんですが、そういう方との接触もしようというようなことでした。管理局は辻君がいますから、だいたいい任せておいて、監察のほうを少し意欲的に見ようというつもりでおいりました。

伊藤 監察は全国にネットワークがあるわけですね。いまおっしゃった相談委員はそこにくっついていくわけですか。

小田村 ええ、くっついていくわけです。

伊藤 有給ですか。

小田村 有給です。もちろん全部非常勤ですが、謝金を出していたと思います。

伊藤 一般の人々が行政について相談に行くところですか。

小田村 そうです。行政の苦情相談所です。

伊藤 それが地方の監察局にあがってくるわけですか。

小田村 そうです。いまは監察事務所（行政改革で現在は行政評価事務所）といっていますが、当時は県の監察局といっていました。相談委員の方は自宅におられるわけですが、相談を聴いてくると、監察局に持ち込む。そのお話を聞いて、もし行政側に問題があるとすれば、そこに取り次いで解決に当たるといことです。地方自治体の問題も

あるんですね。ただこれは放っておきっぱなしというわけにもいかなないので、一応取り次ぐことは取り次ぎますが、役所として積極的に解決に乗り出すというわけにはいかないんですね。機関委任事務のようなものになりますと、ある程度発言できるんですけれどね。

伊藤 普通の人から見たら、市役所や県庁のやっていることが委任事務なのかどうか、わかりませんからね。

小田村 わかりませんね。

伊藤 すると、かなり大量の人間を抱えている役所ですね。管理局は下がないわけですね。監察局は全国にそういう事務所があるわけですから、役人の数としては圧倒的に多いわけですね。

小田村 役人の数としては圧倒的に多いですね。監察局のほうも、監察官が各省を担当してやっているわけです。

伊藤 農林省の出先とか、建設省の出先とか。

小田村 そうです。建設省で思い出しましたが、松澤さんが大臣で、平井さんが次官のときですが、田中金脈問題が出て来たんですね。その田中金脈を共産党が突つきまして、「例の信濃川の河川敷問題で行政管理庁は何をしておるんだ。ひとつ監察しろ」という質問がありました。松澤さんが「やります」と答弁しちゃったんですね。それで困ってしまいました。何を監察するのかわかりませんが、とにかく大臣が答弁したわけですから、やらなければ片が付きません。関東管区と新潟なんです。両方で河川敷の監察をやったんです。別に、それ自体について適切だとか不適切だとかという判定は、政治問題ですからできないんですが、たまたま文書の不備があったんだそうです。それで、この文書が不備であるという指摘をすることができまして、いちおう顔が立って終わったということですよ（笑）。あれは、よく聞いてみますと、たしかにおかしいことはおかしいですね。全部河川敷を買い占められたわけですからね。

伊藤 これは行政というより政治の問題ですね。

小田村 政治の問題ですから、政治でやることについては、別に非合法のことをやっているわけではないんですね。河川敷の払い下げを受

けて、それを投機した。それがあとで開発されて大儲けしたということです。先見の明があったのか、内部情報があったのはよくわかりませんが、そこまでは警察でないと調べられませんかね。

伊藤 監察局はなんらかの強制力を持つんですか。

小田村 監察権限はあるわけです。

伊藤 例えばこういう書類を出せということは言えるんですね。

小田村 それは言えるんですね。

伊藤 でもありませんと言われたら、搜索するわけにはいかないでしょう。

小田村 はい、強制捜査はできないんです。

伊藤 行政監察というのは、われわれにはあまりよくわからないですね。

小田村 これはこのあいだも申し上げましたが、農林省の調査統計と食糧検査、これを一回監察してくれということで、だいぶ役に立ったと思います。実際に食糧検査というのは米の検査ですから、年に一回しか働かないわけです。それで相当の人員を抱えているわけです。検査それ自体が必要かどうかという問題もありますしね。

それから検査検定事務というのは各省でみんなやっていまして、通産省でもたくさん検査検定事務があったんですね。そういうものは、もう民間に任せていいじゃないかということで、かなりそういう方面の検査については監察をやってもらったんです。

伊藤 そういう検査も、財団法人をつくったりして天下りの巢になったところもあると思うんですね。

小田村 そうですね。ただ財団法人で検査料を取ってやればいいわけです。役所がやると、検査料を安くするんです。だから、それを高くすれば、要らないものは民間のほうでやめてしまおうでしょうしね。

伊藤 監察局と管理局と、その二つですか。

小田村 その二つです。官房がありますが。

■行政管理事務次官 (2) 松澤、荒船、西村長官の印象

伊藤 次官時代の「行政管理庁」長官が、先ほどお話が出ましたが、松澤さん、荒船さん、そして福田内閣で西村さん、また荒船さん、ということでもかなり短い期間で相当替わりますね。

小田村 荒船さんの初めが短かったんです。これは「昭和五十一（一九七六）年」九月に「三木」内閣の改造がありまして荒船さんになって、「同年十二月に」三木内閣が退陣して西村さんになったんですね。西村さんの名前は質問票にある「栄一」ではなくて、「英一」です。西村大臣の名前を決裁書類の起案者が書き間違えて、大臣のところに持ってきたことがあるんです。大臣は怒りまして、「おれはいつ死んだんだ」と言うんですね。

伊藤 西村栄一というのは――。

小田村 民社党の二代目の委員長です。今度、生誕百年記念があるようです。来月の八日ですか。西村眞悟さんのお父さんですね。西村「英一」さんは約一年間「行政管理庁に」おられたわけです。

伊藤 一年というのは長いほうですか。

小田村 そうですね。あの頃はちよくちよく替わりましたからね。

伊藤 この三人とも、ご接触なさってかなり違う感じを受けられましたか。

小田村 なかなか面白い人ですね。それぞれみんな特色がありました。松澤さんという方は、むかし満州国軍にいたんですね。

伊藤 軍人として、ですか。

小田村 満州国軍の軍人だったんです。脑梗塞を起こしてからちよつと前後がわからないところが多いんですが、昔話をするみたいへん面白い話がありました。ドイツのUボートをスエズのほうに迎えに行っていたことがありますね。そのこともいろいろ知っているようなことを言っておりましたね。たいへん面白い方なんです。それから「真室川音頭」というのがありますね。「あれは「山形県」真室川町長をして

いたときに、おれがつくったんだ」と言っていました。松澤さんは米議員ですね。米価問題のときには先頭に立って暴れていたものです。伊藤 むしろ旗の先生か。

小田村 なかなか風格のある方でした。松澤さんも荒船さんも川島派で、川島さんのあとは椎名さんの椎名派ですね。荒船さんという方は秩父の方で、深谷の特急ですね。

伊藤 特急を止めたということですね。

小田村 これもなかなかうるさいんです。荒船のフネは「船」ではなくて「船」でないと怒られるんです。

佐道 パソコンだとすぐには出て来ないんです（笑い）。

小田村 布団屋さんですか。とにかく大変な山持で、陶山「皓」君というのが秘書官をやっていました。選挙資金で、山をずいぶん売ったらしいということですね。しかし昔の党人としてはたいへん面白い方ですね。

伊藤 名前からして、ちょっと古風な名前ですし、特急を止めたというところで有名になって、それ以外全然語り草にならないですね。

佐道 ロッキード事件のときの予算委員会の委員長をされていて、それで話題になりましたね。

小田村 そうでしたね。あれは大変有名になりました。一度読売新聞に変な記事が出るということで、非常に心配されました。管理局長になった辻君が渡邊恒雄さんと同級なんですね。辻君が苦労して、渡邊さんをお願いしたこともありました。なんの事件か忘れましたが、大したことではないけれど、新聞に出ることは非常に神経質でしたね。伊藤 たいへん豪胆な方というイメージですが、そうではないんですね。

小田村 そういうところもあるんですが、新聞などには非常に繊細な人でしたね。

■行政管理事務次官 (3) エネルギー省構想

小田村 それから西村さんは国鉄の出身ですね。本当にこの方は、田中さんの直系なんです。性格は正反對なんです。福田さんから「今度はおまえのところには最長老が行くからな。でも彼は、自分を青年と言っておるから、決して老人扱いしてはいかん」と言われました。本当に質素というか、清貧というんです。秘書官が行ってびっくりしたんですが、お宅でも実に質素だそうです。粗末な家に住んで、電気もあまり好きでない、いつも火鉢を使っているということでした。自民党でも経理局長が長かったんですね。

伊藤 そうです。長くおやりになりました。

小田村 ですから、そういうことについては、細かくご覧になるんですね。

伊藤 田中派の幹部だと思っていたらそうではなくて、田中さんの家事使用人みたいな長老ですね。

小田村 しかし田中さんが非常に好きらしいですね。だから田中さんの話になると顔色が変わってくる、と秘書官は言っていました。行政管理庁としては大変ありがたい大臣で、なんでも増やすことは嫌いなんですね。減らすほうがお好きな方ですから。行管に来られる前に国土庁長官もやられたんです。そのときの国土庁の人に聞きますと、

「あの人は行管に逃え向きだ」と言っていました。

西村さんのときの一つの大きな問題は、大臣に来られたら、一つ大きな仕事をしたというお気持ちがあったんですね。いまの行政組織の中で、何か手を着ける必要がないか。つまらないことをやってもしょうがないので、大きいことが欲しいということで、大臣が目をつけられたのはエネルギーなんです。

当時通産省は機構改革をいたしまして、局をつぶして資源エネルギー庁というのをつくったんですね。そのエネルギーを省として独立させるべきではないかと言われました。たしかにそれも一つの考え方で、当時石油ショック以来、エネルギーは大変な問題になっていましたからね。科学技術庁の原子力関係を一緒にして、エネルギーの総合政策

をつくるというのは一つの考え方ですね。そこで、その案を考えましようということ、つくったんですが、辻管理局長は「それはちよつと無理ですよ」と言っていました。それは通産省の政治力を決して馬鹿にしてはいけませんよ、ということでした。

当時、「通産省の事務」次官は和田敏信君だったんですが、和田君もこれは絶対に困るということでした。結局、西村さんから福田さんに話をして、西村さんは党の山中行財政調査会長とたびたび極秘裡に会談して、ある程度まで進んだんですが、通産省は河本「敏夫」さんですか、絶対に反対で、結局これは実りませんでした。西村さんも「昭和五十一年」暮れ頃からこれに動き出して、翌年のお辞めになる少し前、八月か九月頃には、もうこれはやめた、ということ諦められました。西村さんとしては、それが一番心残りだったと思います。

伊藤 その考え方は、その後は継承されていないんですね。

小田村 継承されていません。これは通産省があれだけ反対するんだから無理だ、ということだったと思います。

伊藤 いまおっしゃった通産省の政治力というのはどういう意味ですか。

小田村 やはり政治家に対する働きかけが強いだろうと思いますね。田中さんも通産大臣をやったことがありますし、それはいろいろなルートがあると思いますね。

伊藤 通産省というのは、政治家との関わりが非常に深い官庁でございますか。

小田村 いや、必ずしもそうではなかったですね。このとき通産省が言っていたのは、「役所の機構というのは公のものなんだ、公器なんだ。その公器を勝手に動かすということはけしからん」ということでした。大臣もかなり有力大臣が通産省に行っていますから、それは相当な力があると思いますね。

■行政管理事務次官 (4) 外務省中南米局

伊藤 いま伺って、エツと思っただんですが、各省庁が自分はどうこうするということではなしに、行管のほうから、こういうふうにしたらどうかと言ひ出すこともあり得るわけですね。

小田村 それはあり得ます。

伊藤 さきほども外務省に言ったというお話でしたね。

小田村 報道官ですね。あれは中南米局の要求が出て来たからです。出て来なければ、そんなことには手を着けません。

伊藤 でもこちらから代案として提案するわけでしょう。

小田村 そうですね。だから訟務局のときも、「矯正「局」と保護「局」とを一緒にしたらどうだ、そうしたら一局削減にはならないよ」というような話はするわけですね。

伊藤 まったく新しいものを立ち上げるといふ提案は可能なんですね。

小田村 それは可能です。

伊藤 実現は難しいかもしれませんがね。それは行政管理庁の長官が非常に政治的に強力で、総理とがっちり組んで――。

小田村 しかも党のほうも全部根回しできるという方でない。だから、西村さんの力を持ってもできなかったということは、非常に難しかったということだと思いますね。

ということ、福田さんが「五十一年」十二月に総理になって、「行管庁長官に」西村さんがなりまして、そのときも概算要求では中南米局が出て来ていたわけです。そしてこのときの組閣で、外務大臣は鳩山「威一郎」さんになりました。官房長官は園田さんで、「中南米局なんて絶対に認めない」と言っていました。

しかし中南米局の要求はまだ降りていませんでしたから、予算の骨格は、大臣折衝が終わりますとだいたい固まりますが、当然最後に恒例の三役折衝があるんだろうと思っただけなんです。ところが、西村大臣にそのことをもうしあげると「ワシはそんなものには出んよ」とおっしゃるのです。そして官邸のほうからも、何も言っていないんです。今年はいったいどうしたのかなと思つて、官邸の副長官にどうなっ

たのかと聞いてみたんです。そうしたら、「いや、そういう話はまったくありません」ということで、この年は三役折衝がなかったんです。ということは、要するにあのじいさんを相手にしたんじや駄目だ、ということなんですね。私は本当にびっくりしました。実力者というのはこういうものか、と思いました。いやあ、驚きましたね。三役折衝がなかったのは、本当に久しぶりなんです。西村さんというのはそういう方で、大変厳しい方であつたんですが、役所としては大変ありがたい大臣でした。

このときの外務大臣の鳩山さんは、役所でも、私の高等学校でも先輩であつたものですから、鳩山さんとしてはたいへん不本意だったろうと思うんです。予算が終わつてから、一回お詫びにあげました。何か慥然とした顔をしておられましたかね。このときに、うちのほうとしては少しこういうことを考えられたらどうかということで、「中南米局をつくるのはいいけれど、情報文化局を一回考えたかどうか。内閣に広報官がありますから、報道官のようなものを作つて、局を振り替えたかどうか」という意見を言つたことがあります。それは外務省は全然受け付けません。そんなことで、それじゃ駄目だということ、要求は拒否したわけです。

伊藤 元来が行管庁は大いに発展しようということではありませんから、いいんですね。それでまた七七年になつて、荒船さんになりますね。

小田村 このときは、中南米局は取られてしまいました。

伊藤 やつぱり相手を見るんですね。

小田村 相手を見て、なんですね。このとき（昭和五十二年）の内閣改造で、官房長官の園田さんが外務大臣になります。ところが、官房長官時代あれほど反対していた園田さんが、今度は「中南米局をぜひ頼む」と言うわけです。一方、党のほうは行政改革関係は、山中貞則さんが行財政調査会長として頑張つておられたんです。ですからたいがい山中さんのところに報告してお願ひしておつたんですが、このときは山中さんがひっくり返つちやつたんですね。

それがよくわからないんですが、ブラジルとの修交というか、笠戸丸「一九〇八年の第一回ブラジル移民船」の七十周年か何かで、皇太子殿下がブラジルご訪問になるという日程が翌年にあつたんですね。

「そういうことがあるので、自分は中南米局には反対はしない」ということになつてしまつたんです。まったく、まいりましたね（笑い）。荒船さんも、とにかく党のほうがそんな状況ですから。辻君も、どうも諸般の情勢を見てみると、これは頑張り通すのは無理だということ、結局二、三の代償を取つて、中南米局を認めることになりました。どうも政治家は変幻自在なものですからね（笑い）。このときは、大蔵大臣は村山「達雄」さんでしたかね。

伊藤 そういう新しい局をつくるということ、予算問題はこういう前後関係になるんですか。

小田村 予算のほうが先なんです。というのは、局が一つできても、金の面ではほとんど関係がないわけです。局長が増えるわけですが、局長の給料と審議官の給料はそんなに変わるわけではありませんので、そんなものは金としては問題になりません。

伊藤 そうすると大蔵は了解して、そこから行管に来るわけですか。

小田村 大蔵は三役折衝にも出て来ません。松澤さんなんかは、当然大蔵大臣が味方してくれるんだろうと思ひ込んでおられたらしいですね。「おれ一人で吊るし上げられるのか」と怒っていましたね。

■行政管理事務次官 (5) 国立学校定員の除外

小田村 第三次定員削減計画は、初年度（昭和五十年）一・二%、五十一及び五十二年は〇・九%ずつ削減することになっていました。五十年度は予定通り一・二%削減したのですが、五十一年度は前年度より削減計画が減ることになりました。当時われわれの頭が痛かった問題は田中内閣で決定された一県一医科大学設置の問題です。医科大学や医学部は附属病院等が必要ですから、学年進行に伴つて定員需要

がどんどん増加していきます。そこで問題はこの増加要員を含めて、増員分が削減分で賄えるかどうかということです。われわれとしては、総定員法の枠を突破することは絶対に避けたいと思っていましたから、とりあえず五十一年度の削減率を前年度と同じ一・二％とすることとしました。各省ともかなり抵抗はありましたが、一応了承してくれました。

五十一年に入りますと、五十二年度の削減率は〇・六％と前年度の半分に減ってしまいます。これでは到底増員分を賄えませんので、第三次削減計画は五十一年度をもって中止することとし、五十二年度から新しい計画を策定することにしたわけです。このときも各省の抵抗は非常に大きく、ずいぶん難航しましたが、私が次官になってから辻君が管理局長として引き継いで、四年間三・二％ということで第四次削減計画としてようやく五十一年八月に閣議決定に漕ぎ着けてくれました。

国立学校や防衛庁は数が多いので、財源として貴重なのですが、それだけに反対も強く、国大協を代表して林東大総長と岡本京大総長が揃って次官室に陳情にお見えになったこともありました。

これで一応定員削減計画はできたのですが、今後のことを考えると到底医科大学を含む増員には対応できない。この問題は当初全く予測されなかった新しい事態だから、これはむしろ総定員法の枠外にすべきではないか、という意見が辻管理局長から出されました。私ももっともだと思い、当時大臣は松澤大臣から荒船大臣に替わっていました。その結果、昭和五十二年に総定員法を改正して、国立学校定員を除外するとともに、国立学校の定員は国立学校設置法に定めることにしました。これで医科大学問題は解決したわけです。もちろん国立学校定員の削減計画や増員に対する査定権については、全く変わっていません。

■行政管理事務次官 (6) 府県単位機関

伊藤 あと、府県単位機関というのは、各省庁の出先だと思いますが、その見直しとか整理統合をするということについて、ご記憶はございますか。

小田村 何かあったと思いますが、行政管理庁も引つかかっておりまして、県に置いていた行政監察局を監察事務所にするという問題がありました。これは初めてではなくて、以前にもそういう閣議了解か閣議決定があったんですね。しかしこの問題は今後の検討課題にすることにし、その代わり、北海道に管区監察局のほかに三つあった地方監察局（函館、旭川、釧路）を廃止し、管区の支署にするということで簡素化をはかりました。これはだいたい監察局のほうから強い反対意見がありました。とにかく行政管理庁は元締めですからやらざるを得ないだろう、ということと説得したと思います。

伊藤 農林省とか、すべての省庁ほとんど地方に出先がございましてね。
小田村 出先として県にあるのは農林省（伊藤 食糧事務所とか）と、労働省の基準監督局ですね。

武田 建設省は――。

小田村 建設は県にはなかったと思います。

伊藤 ブロックですか。

小田村 ブロックですね。通産もブロックですね。それぞれ、建設にしても通産にしても、主な県の土木部とか商工部には部長を出してありますからね。

伊藤 文部省はないですか。

小田村 文部省はないですね。

伊藤 大蔵はもちろんございますね。

小田村 大蔵にはあります。大蔵も財務部というのがありまして、これもだいたい整理しろ、ということ強く言って、地方課長が陳情に来たことが記憶にあります。

伊藤 あれは国有財産の管理ですか。

小田村 国有財産の管理と地方の金融機関、信金、相互銀行等の監督ですね。これと銀行局の検査部とがタイアップしている。その出先ということですね。

伊藤 農林省も、食糧事務所だけではなくて林野庁がありますね。

小田村 それは営林署ですから各地にあるわけで、府県とは必ずしも決まっていないわけです。営林局はブロックにありまして、その下に営林署があちこちにあるわけです。だから山の多いところにはいくつもあるんですね。

伊藤 税務署と同じですか。税務署もブロックがありますね。

小田村 ただ営林局は、昔は御料林と国有林とがあつたんですが、御料林がなくなつて一緒になつたわけですね。ですから、ごく近接したところに営林局が二つあるとか、そういうことがございましたので、こんなものは一緒にしろということを言ひまして、このときに北海道の営林局を四つ整理することにしました。そのほか、職安や法務局などの出張所もかなり整理しました。

伊藤 そういうものの整理はなかなか大変でしょうね。実際問題として、それをやるとすると人員削減ということになるんでしょうか。

小田村 必ずしもそれに直結はしないですね。機構の簡素化ということとです。ひいては定員の問題にも響いてくると思いますが、それによつてすぐ人間が減るわけではありません。

伊藤 あまり行政整理の即効性はないわけですね。

小田村 即効性はないですね。簡素化という意味で重要なことではあります。

■行政管理事務次官 (7) 定年制の問題

伊藤 本当は減らしたいんだけど、身分保障があるから、ということでしょうか。

小田村 そうですね。それもあるんですが、それはその次に出てくる定年制なんですね。地方支分部局の整理再編成というのは、いま申し上げた営林局みたいなところであつたと思うんです。

定年制については、このときまで定年制がなかったんです。

伊藤 それは上級職だけではなくて、すべての役人についてですか。

小田村 ええ、定年制がなかったんです。

佐道 質問を書きながら、こんなことがあるのかな、と思つていたんですけれど。

小田村 これが大変だったんです。要するに定年制がないから、どうやって老人を辞めさせるか、各省みんな苦労していたんです。例えば農林省の食糧事務所なんかもそうなんです。なかなか辞めない。辞めさせるためには納得させなければいけない。一番ひどかったのは北海道開発庁です。ここには七十歳になつても辞めない人がいまして、それにああでもない、こうでもないといつて辞めさせる。結局これは全部組合問題なんですね。これは定年制をとにかく入れないと駄目だということをや前から言つていました。これは山中さんがずいぶん頑張つてくれたと思います。

伊藤 党の側ですか。

小田村 ええ、党のほうで強く言つていただいて、各省とも、じゃあそういうことでやむを得ないということになりました。

伊藤 六十歳定年にしたわけですか。

小田村 実際に法律になつたのはもうちよつとあとだと思ひますが、方針としてはここで固めたということです。

伊藤 もちろん移行期間があつたわけでしょう。

小田村 移行期間というか、法律をつくらなければなりませんからね。

伊藤 法律をつくつてからの移行期間ですね。

小田村 それはあつたと思ひます。

伊藤 いま逆に定年制を取つ払えという動きが強いように思ひますが、年齢による差別はいけないとか(笑い)。

小田村 定員管理の問題で、あとで行政管理庁と総理府が一緒になつ

て総務省になりますが、私は人事局と一緒に定員管理ができないよ、ということの前から言っていたんです。ですから人事局だけは一緒にして欲しいなと思っていたんですが、定年制などもそういう関連なんですね。定年制というのは人事局の問題ですから、定年をつくらない駄目だということだったんですね。

伊藤 定年制は行管庁の仕事ではないんですか。

小田村 これは人事局になります。行管庁ではありません。人事の問題ですから、人事院、人事局ですね。わがほうとしては、定年制がないと定員管理ができません。一律三%削減とやっても、とにかく各省が抵抗するのは、根っこにこれがあるからなんですね。自由に人事管理ができないわけです。辞めさせられない。北海道開発庁というのは、北海道庁と機構的にもダブるし、どうかと思っていたんですが、それだけではなくて、やっぱり組合問題で大変な役所だったんです。それが誰もわからなかったんです。

伊藤 これは各省職員組合ですか。

小田村 そうです。各省の職員組合です。まあ官公労になりますけれど。

■行政管理庁事務次官（8）地方事務官制度

小田村 次の地方事務官制度も同じ問題です。

伊藤 すみません、地方事務官というのは、少しご説明いただけますでしょうか。

小田村 これは昭和二十二年ですか、地方自治法ができたときに、むかしの市町村制、府県制がなくなつて、地方自治法になりますね。そうすると、都道府県は国の出先機関でしたから、職員は官吏だったわけですが、新しい制度で官吏は府県の吏員になったわけです。ところが、そのときに附則がありまして、「政令で定める職については、当分の間これを官吏とする」となっていたんです。それは何かと

ますと、労働省の職安、厚生省の社会保険事務所、運輸省の陸運事務所です。これが全部官吏で、国家公務員ということにしたわけです。それが「当分の間」で、昭和二十二年の地方自治法施行以来ずっとそのまゝになっていたわけです。だから県庁の職員なんだけれど、身分は国家公務員。それは警察でも、警視正以上は国家公務員ということになっていますから、不思議ではないんですが、そういうことになっていた。

ところがもう一つ附則がついていまして、翌年でしたか、「職員団体については、付則何項の規定に関わらず、本則を適用する」。つまり、労働組合の中には一緒に入つてよろしいということです。地方公務員の県庁の職員組合に入つてよろしい、というわけです。

伊藤 国家公務員が自治労に入つてよろしいということですか。

小田村 はい、みんな自治労の組合員になっているんです。そこで、自治労からの突き上げが非常に強かったんです。県とか自治省も、その突き上げによつて、地方事務官制度を廃止して地方公務員にしろというのをずっと言ってきたわけです。ところが厚生省も労働省も運輸省も、それは絶対駄目だ、ということ、できなかったわけです。このときの地方事務官制度廃止は、私も決定の中味がよく記憶がないんですが、運輸省の陸運事務局は国の出先機関にし、厚生・労働両省については二年以内に廃止するというものでした。しかしまだまだ後に尾を引いて、十年ぐらいかかって結局みんな国の機関になったのではないかと思います。

伊藤 逆になったんです。労働省の機関になったんですね。

小田村 逆になった。労働省などは、地方事務官というのは非常にいい制度だと言っています。それは県と密接な連絡をとらないと職安行政はうまく行かないし、そうかといって、これは県限りのものではなくて、全国的なものであるから、ということですね。

伊藤 そうですね、全国のネットになっていますからね。

小田村 そうなんです。ですから、非常にいい制度だから残しておいていいじゃないか、という意見なんです。厚生省は、社会保険事務

所は国の事務だから、絶対に県に任せるわけにはいかないということ
で、やめるんだったら国の機関にしてみえという。

運輸省はもとと庁舎もちよつと離れていたうえに、自治労にも入
っておりませんでしたから、これは問題なく、国の機関にすることに
決まりました。しかし厚生・労働両省は簡単にはいきませんでした。
そういう問題でございました。非常に根深い対立でした。

例えば、社会保険料の一括納付という問題があるんですね。大きな
会社ですと、工場の分も含めて、社会保険料を一括して東京なら東京
で納付するというにすれば効率的なんです。社会保険事務所の
場合は、みんな県に納めなくてはいけないということで、人事異動の
たびにそれを持って歩くということをやっているわけです。なんでこ
んなつまらんことをやるのかというと、要するに社会保険事務所の事
務が減ると困るということらしいんですね。これはみんな組合問題な
んです。いまはどうなっているか知りませんが、労働組合という問題
を理解しないと、何のことかわからないんですね。

伊藤 自治省とか農水省とかから県庁に行つて戻ってくる人は、これ
とは別なんですか。出向みたいな形なんですか。

小田村 別ですね。だからその中で、県の保険課長なんかは国家公務
員だったわけです。保険課の職員も国家公務員。県庁の中に机があり
ながら、そういうことになっていったようですね。

伊藤 それはいまはどうなっているんですか。

小田村 いま、どうなっていますかね。

伊藤 何か不思議なことですね。

小田村 だからこれはあえて廃止しなくてもよかったんじゃないかと
思うんですが。

伊藤 国家公務員が自治労に入っているというのも、またすごいで
すね（笑い）。

小田村 そこがおかしいんです。ですから、おそらく組合との交渉で、
県のほうが給与ベースが高かったですから、なんらかの加算したペイ
を県が出してははずなんです。そのへんにも問題があったんですね。

伊藤 国家公務員と地方公務員の関係も、ちよつと面倒くさい話です
ね。このときにそういう方向が打ち出されたけれど、実現ということこ
ろまでは行っていないということですか。

小田村 直後ではなくて、少し時間をかけてやった、ということだろ
うと思います。

■行政管理事務次官 （9）事務次官人事1

伊藤 伺っていると数限りなく問題があるとおもいますが、先に進ま
せていただきます。防衛庁から、丸山「昂」次官の後任として戻つ
てきて欲しいというお話があったそうですが、これはどういう意味で
すか。

小田村 これは丸山次官の後任ではなくて、丸山防衛局長の後任です。
丸山さんが次官になれる前、経理局長には亘理君になってもら
ったんですが、まだ私が管理局長のときですね。次官になる前です。

伊藤 それはそうでしょうね、次官になってから「局長に來い」とい
うことはありませんね。

小田村 ですから、昭和五十年ですね。防衛庁の官房長が玉木清司君
だったと思います。防衛局長が丸山さんで、まだ次官は田代「一正」
さんでしたか。

佐道 久保「卓也」さんですね。

小田村 久保さんになっていましたか。施設庁長官が「斎藤一郎」。

丸山さんのあとに防衛局長がいなかったこと、玉木君が、「もう
一回戻つてくれないか」という陳情に來たことがあるんです。私は
「それは駄目だ、私が日銀政策委員のままであれば行かれないこと
はないけれど、こつちに來たら、こつちの後がいらないんだ」と言いま
した。玉木君は、「どうしても來てもらえなければ、伊藤圭一君をもつ
てくるしかない。だけど自分としては、なんとかして小田村に帰つて
きてもらいたいんだ」ということを頼みに來たんです。「ちよつとこ

つちに來たら動けなくなっちゃった」ということで、それは駄目だとお断わりしたんです。

伊藤 行管の管理局長になられたときは、当然あと次官になるという含みですね。

小田村 そうです、含みです。あと、人がいませんでね。要するに、大蔵、農林、通産のような大きな役所は、まだいくらでも人間がいるわけですが、こういう小さな役所は、とにかく後継者を育てることが非常に難しいわけですね。だから動けなくなっちゃうわけですね。

伊藤 先生は特別なことがない限り、防衛庁に戻ってこいと言われたら、特別に拒否しなければならぬ理由はないわけですね。

小田村 防衛庁自体ではなくて、行政管理庁のほうの事情でお断わりしたんです。

伊藤 しかし防衛庁の防衛局長で戻られたら、また非常に面白い展開になったかもしれないね。

小田村 それはよくわかりませんけれどね。

伊藤 そういうふうに誘われたということは、そういう可能性があると思うことは思っていますね。

小田村 そうですね。政策委員が続いているときでしたら、それはできないことはなかったと思うんですね。

伊藤 いったん防衛局長に就いてしまえば、今度は行管庁のほうからは声がかからないということになるわけですね。

小田村 それは当然ですね。防衛庁も人繰りが困っているわけですからね。

伊藤 これは運命ですね。

佐道 次官になれる年齢がありますね。

小田村 年齢があります。

佐道 先生は行管庁の次官には、一九七六（昭和五十一）年になられたわけですね。丸山さんが防衛局長をお辞めになって次官になられたのが同じ五十一年ですね。

小田村 そうです。玉木君が頼みに來たのは、五十年です。

佐道 そうすると、丸山さんが防衛局長を辞められて次官になれる。その後任に、例えば先生が入られて、一年ないし二年そこでやりになって、次官という話になったときには――。

小田村 ええ、次官になるのか施設庁長官になるかわかりませんけれどね。

佐道 行管庁だったら、昭和五十一年、五十三歳で次官におなりになるわけですが、防衛庁だったら、それから一、二年ずれますね。そのへんの理屈は、あまり関係ないでしょうか。

小田村 それはあまり関係ありませんね。もうあの頃になると、ごちやごちやしていますからね。年齢というより入省年次で数えるわけですが、私が次官をやったときは、外務、大蔵、法務は、少し年次が上の人がなっていましたね。例えば法務省は安原「美穂」さんでしたかね。外務省は大河原「良雄」さんでしたか。

佐道 昭和五十一年でしたら、有田「圭輔」さんか東郷「文彦」さんですか「注・佐藤正二次官」。

小田村 有田さんがやっていたかもしれないですね。ですから外務省はずいぶん上でしたね。大蔵は「竹内道雄氏から」吉瀬「維哉」さんに替わっていたと思いますね。

伊藤 なんてそういうところだけ年齢が高くなるんですか。

小田村 やっぱり詰まっているんです。

伊藤 採用した人員が多い役所だということですね。

小田村 ええ。そういうところはだいたい一年なんです、そういう中で二年やりますと、困るわけですね。

伊藤 バーンとすつ飛ぶわけですね（笑い）。

小田村 そういえば、私の前任者の田代さんですが、山中さんが大臣のときに、大蔵省の吉国「二郎」次官が山中さんのところに來たんです。あとで田代さんに教えてもらいましたが、あれは実は、吉国さんが田代さんをお願いに來たんだというんですね。国税庁長官ということで頼んだけど、結局山中さんに断わられたという。やっぱり防衛

庁みたいなどころでは、本当に人繰りが大変だったんですね。

佐道 田代さんご本人は、どちらがよかったんでしょう。

小田村 それは国税庁のほうですよ（笑い）。

佐道 そうですよ（笑い）。

小田村 残念がっていましたけれど（笑い）。

佐道 そうすると行管庁だと、比較的年次が若い方が「次官に」なるということですね。

小田村 そうですね。辻君が来てくれたので、安心して、この次は辻君に頼むということになりました。

■行政管理事務次官 （10）事務次官人事2

伊藤 事務次官というのは、役人としては上がりですね。これ以上はないわけですから。

小田村 上がりです。これ以上はないわけです。ただ、官房副長官は別ですね。官房副長官は、道正「邦彦」君にしても梅本純正さんにしても、みんな厚生次官や労働次官をやってからですからね。

伊藤 事務方の官房副長官は次官経験者ですね。

小田村 ええ、次官経験者です。

伊藤 そうすると、副長官が、役人としての最終になるわけですか。

小田村 そうなりますね。梅本さんはどうだったかな、小池「欣一」さんのあとが梅本さんですね。そのあと道正君だったかな。「小池↓

後藤田正晴↓川島広守↓梅本↓道正」

伊藤 先生はまだ五十歳代の前半でしょう。そこで登り詰めて、終わりますか。役人の生活はそんなものですか。

小田村 そんなものです。

伊藤 定年法も何も関係ないじゃないですか（笑い）。行管庁の事務次官をお辞めになるということになりますと、その後の処遇を誰が考えるんですか。大蔵が考えるんですか。

小田村 大蔵が考えてくれるわけですね。平井さんもそうですね。平井さんは国民公庫の副総裁にされました。私は農林公庫に行ってくれということでした。辻君は会計検査官ですね。これはだいたい出身省で考えることです。そこがまた難しいところで、防衛庁にしても行政管理庁にしても、あまり民間との接触がない。防衛庁は多少ありますが、なかなかないですね。

伊藤 防衛庁も少ないですね。

小田村 少ないんです。それから警察も、いまはだいぶ楽になりましたが、昔は捌け口に苦労していましたね。

伊藤 五十歳代前半ないし後半といっても、本当はまだ働き盛りですね。

小田村 そうですね。働き盛りです。

伊藤 そこから先、どうやって生きていくかというのは、なかなか大変な問題ですね。

小田村 そういうことです。だから天下りの問題が出てくるわけですね。そうかといって、だんだんやめる年齢が長くなりますと、今度は下の方が上に行かれないわけですね。だからこれはなかなか難しい問題ですね。

行政管理庁のあとをずっと見ていますと、だいたい次官、あるいは局長をやってから、大学に行く人が多くなりましたね。ただ、大学もそうたくさんあるわけではありませんので、これからはなかなか難しくなるだろうと思うんですが。

佐道 いまの行政管理庁「総務庁↓総務省」の次官の方は、だいたいこのぐらいのお歳でなっておられるんでしょうか。

小田村 もう少し上になってきたかもしれませんね。

伊藤 行管庁の生え抜きの方はどうするんですか。

小田村 生え抜きは、河合さんは経済関係がありました。門田「英郎」君は河合さんのあと、国際経済関係でしたか、そっちのほうをやっていました。

佐道 いまは行管はないんだ。総務省ですね。

小田村 だいたい大学ですね。ずっと若くなって、増島「俊之」君とか八木「俊道」君は大学に行っています。私が引つ張って来た田中「一昭」君もいま大学でやっていますね。だいたい行政学、行政論に行く人が多いですね。

佐道 実際に行管庁にいらつしやると、さまざまな役所の実態を全部ご覧になるわけですからね。

小田村 そうですね。

伊藤 ある程度表面的かもしれませんがね。

小田村 表面的ですけどね。

■農林漁業金融公庫副総裁（一九七八～一九八五）

伊藤 ちょうど先生が事務次官をお辞めになった後で福田内閣が倒れて大平内閣ができるということになります。先生は福田さんを高く評価されておられるという話があったと思いますが、この政局についてはどういうふうにお考えでございましたか。

小田村 当然私は福田さんがもう一期やられるものだと思っていたんですが、元時事通信におられて、当時『言論春秋』というミニコミ誌をやっておられた川井行雄さんという方が、選挙予測に非常にお詳しいんですね。一度お会いしたときに、「福田さんは自信たっぷりだけれど、危ないよ」と言われました。あのときは党员投票ですね。それほど失政があったわけでもないから、福田さんになるんだろうと思っていたんですが、危ないよと言われました。何かのパーティがありまして、越智通雄君が秘書官「注・官房副長官（政務）」をしていたものから、越智君に「福田さんは気をつけないと危ないよ」という話をしたことがあるんです。そういう話があるよと言ったら、「まさか」という感じだったんです。でもやっぱりあれば、なんといつても後藤田さんなんでしょうね。

伊藤 要するに田中派ですね。やられちゃったわけですね。「天の声

にも変な声がある」といって（笑い）。そういうこともあり得るかな、と思ってご覧になっていたわけですね。

小田村 そうですね。

伊藤 事務次官をお辞めになると、先生は農林漁業金融公庫の副総裁になりますが、いままでの仕事とはバツと切れてしまうということですね。

小田村 切れます。いちおう次官をしていましたから、その後の情勢については、ときどき報告を受けていましたけれど。

伊藤 そういうものですか。

小田村 ええ、説明に来てくれたりしました。私が引つかかっていたような問題ですね。懸案になっていたことがありますからね。でも仕事それ自体は、全部あとに任せるようにいたしました。

伊藤 農林漁業金融公庫副総裁ですが、この公庫は、もちろん金融ですから大蔵の管轄なんだろうが、農林漁業ですから農水省も関わっているんですね。

小田村 ですから、総裁は農水省から来るわけです。

伊藤 そういうふうに分けているわけですか。

小田村 そうです。だいたい大蔵からは歴代副総裁ですね。

伊藤 これはどういう仕掛けなんですか。

小田村 一番初めは土地改良資金のうち、農家負担の部分がありますね。それを低利で融資する。それから自作農維持資金というのがありまして、これは短期なんです。災害などのときに低利で融資する。要するに一般の金利では農業関係は採算が取れないものですから、低利で出すことにしています。当時は三分五厘だったと思います。一般の金利水準から見れば二・三％低いということをやっていました。林業もそうです。これは長期間ですから、それだけの長い期間お金を貸してくれるところはありませんか、長期低利ということがスローガンだったわけです。

伊藤 これは担保をとるわけですか。

小田村 担保はもちろん取ります。

伊藤 実際のお金のやり取りは銀行ですか。

小田村 農林中金に委託する場合と、公庫も支店が各地につくってありますので、そこで直接やる場合と、両方です。

伊藤 ほとんど銀行と同じようなことをやるわけですね。

小田村 銀行と同じようなことです。銀行にも委託いたします。

伊藤 資金は政府ですか。

小田村 資金は政府です。全部、資金運用部です。財投資金です。

伊藤 いかがですか、副総裁というお仕事は。

小田村 農林関係はあまりわからなかったものですから、そういう点を少し勉強させてもらいましたが、やはり難しいですね。

伊藤 先生のいままでのご経歴で金融はないですね。

小田村 金融はないですが、金融はそれほど難しいことではありません。農業自体が難しいですね。いろいろな補助金がたくさん行っているわけですね。補助金をつくったり、農林省のいろいろな行政指導がたくさんありまして、そういうものと絡み合わせながら融資しているものですからね。

伊藤 農林中金とかですね。

小田村 農林中金は一般の金融機関ですから、農協の資金ですね。ところがこれも政府はやらないんですが、各県が利子補給をしまして、安い金利で貸している場合があるんです。そうすると農林公庫と競争になる場合があるんですね。そのへんがなかなか難しい。だから例えば支店を出そうとすると、だいたい農協系統は反対するんです。それでも私のときに、中野「和仁」さんという方が総裁で、二つ三つ支店をつくりましたね。長野支店と宮崎支店でしたか、つくりましたが、なかなか農協との関係が微妙なところがありました。

伊藤 お役人の時代に比べれば、ずいぶん楽ですか。

小田村 それは楽です。まず毎朝、新聞を見なくていいわけですからね。役所にいるときは、とにかく新聞を朝見ないと、何が起ったかわかりませんからね。何か変なものが出ていると大変ですから。だからこのときは、土曜日はほとんど休みました。週休二日ですね。

伊藤 ここは何年ぐらいおいでになったわけですか。

小田村 ここはわりあい長かったですよ。私は「昭和五十三（一九七八）年」七月に「行管庁を」辞めまして――。

伊藤 十月に「農林漁業金融公庫副総裁に」就任されますね。

小田村 すぐ、という話だったんですが、ちよつと休ませてくれといつて、ふた月ほど休ませてもらいました。それで五十三年から六十年まで、丸七年ですね。ずいぶん長かったですね。

伊藤 じゃあだいたい農業、漁業についてお詳しくなりましたね。

小田村 あちこち見せてもらいました。だけど、やはりわからないですよ。本当に農林行政というのは微に入り細を穿ってやっていますから。

伊藤 農林族の先生たちからいろいろお話を伺いまして、補助金の付け方とかお聞きしましたけれど、よくそんなものに補助金がつけられるな、というような感じがですね。

小田村 そうでしょうね。もう少し自由にした方がいいように思いますが、ですね。

伊藤 一方で補助金をやって縛っているわけですね。

小田村 そうなんです。

伊藤 さて、四時を過ぎました。この次で一応終わりになるのではないかと思います。お仕事だけではなくて、ご自身のおやりになったことで、多少運動的なこともございますね。そういうことにも触れていただけて、少し大きく日本の現在と将来についてのお考えもお聞かせいただければ、それを結びにしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

小田村 わかりました。

（以上）

小田村 四郎

オーラルヒストリー

第 13 回

一九八〇年代から現在まで（1978～2004）

【2004年4月5日（月）14:00～16:40】

（於：政策研究プロジェクトセンター）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（中京大学助教授）

武田 知己（大東文化大学専任講師）

記録・編集：丹羽 清隆

第 13 回質問項目

1. 先生は金丸信元防衛庁長官が中心になってつくられた日本戦略研究センターにも参加しておられます。その経緯などについてお願いします。
2. 1985 年 7 月、総務庁による「行政機関における個人情報の保護に関する研究会」が発足し、先生はそのメンバーに就任されます。この研究会は当時、衆議院でも国家秘密法法案の審議が継続審議となるような状況があったわけですが、こういった問題が背景にあって作られたのでしょうか。また、先生がメンバーとなられた経緯などもお願いします。
3. 1986 年 12 月、「行政機関における個人情報の保護に関する研究会」は個人情報保護、本人訂正制導入などの提言を発表します。その経緯や研究会での討議内容などについてお願いします。
4. 1985 年 8 月、先生は日銀の監事に就任されています。1993 年まで監事を務められるわけですが、監事の役割や就任の経緯等についてお願いします。また、この時期はバブル経済による好景気とバブル崩壊による不況の開始という、現在まで続く日本経済の曲がり角の時代に当たっています。当時の経済状況などについての日銀内の意見（たとえば「護送船団方式」などについて）はどのようなものだったのでしょうか。
5. 先生の日銀監事在任中の総裁は、澄田智氏と三重野康氏でした。お二人の総裁のご印象などお願いします。
6. 1992 年の天皇訪中に際して、先生は政府から意見を聞かれたとのことですが、どのような点が問題にされていて、先生のご意見はいかがだったのでしょうか。
7. 1994 年、「戦没者追悼平和祈念館を考える会」の呼びかけ人になられています。この会をおつくりになった経緯などお願いします。

8. 1995 年 6 月、拓殖大学総長に就任されています。就任された経緯などについてお願いします。
9. 先の「戦没者追悼平和祈念館を考える会」もそうですが、先生はさまざまな会に関係されています。「日本会議」（副会長）、「『昭和の日』推進国民ネットワーク」（副会長）、「日本の建国を祝う会」（会長）、「日本女性の会」などですが、それらの会の目的や関係された経緯などについてお願いします。
10. 最後に、これまでのご活動を振り返られてのご感想、さらに現在および将来の日本に対するお考えなどお聞かせいただければ幸いです。

■「補」防衛庁時代、行管庁時代

伊藤 この前は、官僚としての履歴が終わったところまでお話を伺って、そのあとのお仕事についても多少伺ったような気がします。農林漁業金融公庫の副総裁等ですね。

小田村 ちよつと追加を申し上げたいと思います。防衛庁時代に、内閣委員会の出張にお供をして、対馬・壱岐に行ったことがあるんです。このときは、自民党は誰だったか忘れたんですが、民社党は受田新吉さん、社会党が大出俊さん、共産党が横須賀から出ておられた中路「雅弘」さんでした。なかなか面白かったんですが、ひと晩一緒に酒を飲みました。受田さんという方は元教員なんです。それで壱岐に行かれましたら、むかし山口県で教員をしていたときの教え子がお迎えに来ていて、とても懐かしいと、受田先生は大変喜んでおりました。それから酒の席では、中路さんが大出さんに向かって「いったい社会党は本当に軍備をいつまでも否定するのか」という質問をしましてね（笑い）。

伊藤 それはいい質問ですね（笑い）。

小田村 それで大出さんが、「いや、必ずしもそういうことでもない」とか、ごまかしていたという記憶があります。これはちよつと面白い話です。

伊藤 あの人たちは、個人的に本音を聞くと、そうなんです（笑い）。

小田村 大出さんは、たしかお兄さんが海上自衛隊ですね。それから福田内閣の行政改革については、この間ちよつと申し上げましたが、西村英一さんが行管庁長官で、五十二年十二月に閣議決定をしているわけです。それで資源エネルギー省がつぶれたという話はこのあいだ申し上げましたし、定年制導入のお話も申し上げました。これは山中「貞則」さんが行財政調査会長で、これを突っ込んでくださったということですよ。

それから、その一年前だったと思いますが、三木内閣のときに玉置和郎さんが非常に熱心で、特殊法人改革をずいぶん強く言われました。このときに党のほうからの要請で、特殊法人の役員を減らそうということになりました。五十一年五月ですから、まだ私が次官になる前ではなかったかと思いますが、「十名以上の特殊法人は一名減らす、十六名以上の特殊法人は二人減らす」という閣議了解をしたんです。全部で三十何人が減らしたと思います。十名以下の特殊法人はそのままということでした。さらに役員の年齢制限と在任期間の制限も、福田内閣になって五十二年に出しました。それから退職金を二〇%削減するというのもやっております。地方事務官はこの前申し上げました。あと事務・事業の関係で、補助金の整理は毎年やっていたんですが、補助金申請・交付の事務手続が非常に煩雑なので、この手続を改善する、ということを開議決定いたしました。いくらかよくなったと思います。検査検定の事務の整理はこの前申し上げました。

それから、行政管理庁としては直接タッチしなかったんですが、五十三年六月に公共企業体等基本問題会議ができておりまして、加藤寛さんが中心になってやってくださったんです。川島「広守」官房副長官が事務方のとりまとめをやっています。これが臨時行政調査会で国鉄・電電等の改革になる一つの前触れになっていたわけです。このときにこれに反対して、例のスト権ストがありました。むしろスト権ストから始まった、といった方がいいかもしれません。これは一つ、その後の布石になるものでした。行政管理庁としては直接はタッチしませんでした。側面からある程度応援したということがございます。

■個人情報保護問題の推移

小田村 それから今日のご質問にも出てくるんですが、個人情報保護の問題があります。これは昭和六十三年に成立した法律ですが、この前哨戦が、この前申し上げました行政監理委員会で審議されました。

これは昭和四十九年五月頃ですが、私が行政管理庁に行く前で、平井「迪郎」さんが行政管理局長、河合「三良」さんがまだ次官だった頃だと思っています。そのときに行政監理委員会に、行政機関の電子計算機に関わる個人情報保護についての諮問をしているわけです。その諮問に対する中間答申は、各国の法律制定の状況等を調べた上で、今後さらに検討する必要があるということでした。

それを受けて、昭和五十一年に事務次官会議申し合わせということで、行政機関の電算機に係る個人情報についての管理準則を作りました。要するに各省でバラバラに管理されているものから、一定のルールを作って、その管理を適正にしようということで、次官会議申し合わせをいたしました。

その後だんだん事態が進展していきまして、OECDから昭和五十五年に勧告が出ています。それを受けて、昭和五十八年の臨時行政調査会の第五次（最終）答申で、行政機関のコンピュータに係る個人情報保護についての法制を、法的措置を含めて制度的方策について積極的に対応しろ、ということが出ています。それを受けて、今日のご質問にあります「行政機関における個人情報の保護に関する研究会」が発足いたしました。

伊藤 これはどういふところが参加している研究会ですか。

小田村 これは総務庁です。このときはもう行政管理庁が総務庁に変わっているわけですね。総務庁で、従来からの引き続きで、この研究会を発足させたわけです。

伊藤 庁内における研究会ですか。

小田村 庁内における研究会です。林修三さんを座長にいたしました。昭和六十一年十二月に、行政機関における個人情報の保護に関する研究会意見ということで、最終的なとりまとめを行いました。私も前にタッチしていたものですから、委員になってくれと言われました。林修三さんと、法務省の官房審議官。それから林忠雄さん、亡くなりましたが、自治省の次官をしていた方です。あと学者の方で、東大の塩野「宏」さん、大森「彌」さん。これも亡くなりましたが、経済企

画庁長官をされた高原須美子さん、横浜国大の成田頼明さん、一橋の堀部「正男」さん。あとマスコミの方、そういう方が研究会の委員で、報告を出しました。この法律は関連法が非常に多く、統計関係がありますから、統計のほうは統計法で規定するというところで、そのほかの個人情報についての保護措置ということで法律をつくりまして、昭和六十三年に施行されたということになっています。

伊藤 その場合の個人情報というのは具体的にどういふものですか。

小田村 いろいろあるわけですね。ただこれも適用除外項目がありました。例えば外交・防衛とか、犯罪捜査とか、税務署の課税情報ですね、これは公示なり開示請求、訂正請求から除外するというものになっているわけです。そのほかの一般的な個人情報ですから、大きなものとしては、例えば社会保険関係の情報が対象になるわけです。そのほか、それぞれの役所でいろいろなものを持っておりますからね。

伊藤 本場にさまざまなことから、例外規定をたくさん作らないといけないわけですね。

小田村 そういふことですね。それから地方公共団体はこれに準じて条例を作る、ということになっていったと思います。

伊藤 それはコンピュータとの関連なんですか。

小田村 コンピュータとの関連です。

伊藤 ということは、ハッカーに入られると困るということですか。

小田村 そういふことです。ハッカーに入られると困りますし、それが間違つて利用されると、本人に対して非常に迷惑がかかるということです。

伊藤 それは文書のほうは規定していないわけですか。

小田村 文書のほうは規定しておりません。文書情報は従来からやっておったし、それで特別に大きな問題はありませんでした。ただ電算機で一括して迅速に大量処理できるということになると、いろいろなところに利用されますので、そこに誤った情報が入ってしまうと困るし、また外に漏れても困るものがありますので、そういうものについての保護をなささいということだったわけです。

ですからこのご質問にありますような国家秘密法案、スパイ防止法とは直接関係がないんです。スパイ防止法のほうは、議員提案で森清さんが起草されたと思うんですが、むしろ情報公開の問題と関係があるんです。ですから個人情報保護の保護は、それとは全く別立てで、前から、むしろ諸外国のほうで立法化され、OECDからも勧告されていたというので、できたものです。

伊藤 コンピュータで大量につくられているものが流出したら非常に大きな影響がありますからね。

小田村 そうですね、はい。

伊藤 でも実際には、各省庁の中にハッカーが入って――。

小田村 このときはまだハッカーの問題はそれほど大きな問題にはなっていないでした。いまではそれが最大の問題ですけれどね。

伊藤 そうすると内部の規律の問題になるわけですか。

小田村 本来、役所には守秘義務がございしますので、守秘義務があればいいじゃないかというのが従来の考え方だったんですが、それだけでは国民が依然として不安だということで、こういう特別の法律をつくったんですね。当初は、この間もちよつと申し上げましたが、総背番号制で社会保険関係も税務関係も一本化してしまえば非常に効率的になるということ、国税庁あたりが言い出したんでしょうか。

行政管理庁もそれに呼応して、電算機の活用と事務の効率化という点でむしろ旗を振ったほうなんです。旗を振ったところが、それに対する反発が非常に強くなりまして、それなら電算機のほうは今後いつそう活用していかなくてはいけない。しかしそれに対して不安が起るのであれば、その保護の必要が出てくるだろうというところが、そもその発端なんです。そして外国を見たら、各国ともいろいろ法律をつくっているということだったんです。

伊藤 この法は罰則があるんですか。

小田村 罰則はあったと思います。「偽りその他不正の手段による十三条三項（開示）を受けたものは十万円以下の過料に処する」ということです。非常に緩い罰則ですね。地方公共団体についてはこの

法律では規制しないで、これに基づいて適切な取扱いを確保するために必要な施策をやりなさいということです。ですから、条例を作れということですね。

■日本戦略研究センター (1) 活動

伊藤 それでは、「日本戦略研究センター」の問題に入らせていただきますと思います。これはどういう経緯ですか。そもそのメンバーでいらつしやいますか。

小田村 そうですね。だいたい始まりから入っていたと思います。

伊藤 金丸「信」さんが――。

小田村 防衛庁長官を辞めてからです。金丸さん「が防衛庁長官だったの」は福田内閣でしたか（佐道 はい）。ですから、大平内閣になってからです。そうすると昭和五十四年頃からだと思います。

伊藤 金丸さんという人自体はアバウトな方ですから、戦略とかにはあまりそぐわない感じがするんですが（笑い）。

小田村 そぐわないですね。

伊藤 どうしてこういうことになったのか、誰か担いだ人がいるわけですか。

小田村 ええ、担いだんです。これをつくったのは堀江正夫さんなんです。堀江さんが参議院議員でいろいろ活動しておられたわけですが、一つシンクタンクをつくらうということになりました。ブレーンには角田順さんで、角田先生とご相談されました。あとはだいたい防衛庁OBですね。それで、金丸さんのあと「防衛庁長官」は山下「元利」さんだったかな、防衛費の問題、防衛力の今後のあり方等についていろいろ議論が出てきたときでした。それからソ連が大軍拡をしていた頃なんです。そういうことで、一つシンクタンクをつくって政策提言をやりたい、ということのでつくったわけです。私にも、「今度こういうものを作ったから、おまえも入ってくれ」という依頼があったも

のですから、それで私も中に入りましょうということになりました。

伊藤 金丸さんからですか。

小田村 いえ、堀江さんからです。金丸さんはよく知りませんからね。「キヤップに金丸さんを持つてきた」と堀江さんが言っていました。これはどういうことでしょうか、防衛庁長官をやったということと、金集めに便利だったということじゃないでしょうか。

伊藤 そうでしょうね。

小田村 ですから、何か金を集めようと思うときには、本を作りまして、出版記念会をやるんです。それを金丸信の名前で配りますと、企業も買ってくれるわけです。

佐道 便利な名前ですね。

小田村 便利な名前ですね。

伊藤 便利はいいけれど、金丸さんが死んだらおしまいですね（笑い）。

小田村 それで、金丸さんが幹事長になったときかな。だいたいアバウトですから、要するに彼が言っていることは、「アメリカと日本は運命共同体だ。日米関係を大事にしなくてはいけない」ということで、それ以外にはあまりはつきりしたものはなかったんですが、台湾とはわりあい親しかったんですね。ですから、日華関係のシンポジウムをときどきやりましたね。まだ国民党政府の時代ですから、蒋緯国とか、当時の台湾の国民政府の將軍たちが来たこともありました。そういうときもパーティをやりましたが、金丸さんがやったんでしょうね。

それから角田さんが「戦略情報」を書かれました。これは当時の外国の文献を克明に調べられて、だいたい時事問題ですが、こういう状況になっているというのを刷り物にして、代議士さんたちに配っていたと思いますね。それは全部角田さんが書かれたんですが、名前は全部金丸信になっています。角田さんは名前を表に出されません。だけど金丸さんがそんなことを書く力があるはずがありませんから、全部角田さんです。

伊藤 それは何か定期刊行物のような形になっているんですか。

小田村 定期刊行物というより、その都度つくっていました。ずいぶんたくさん書かれましたよ。

伊藤 ニューズレターみたいな形になるんですね。

小田村 そうですね、そんな形です。

武田 結構厚いものなんですか。

小田村 集めると多くなつて、だんだん厚くなつてきます。

伊藤 一回はそんなに多くはないでしょう。

小田村 一回はそんなに厚くはないですね。

伊藤 議員さんに配るわけですか。

小田村 議員さんに配ります。

伊藤 先生はどういう役割なんですか。

小田村 私は、そこで会議をやりますから、それに出てくれということとで、出ていました。そうしたら角田さんから「おまえも一つ文民統制のことを書いてくれ」と言われて、シビリアン・コントロールのことで、それを一回書きました。前に差し上げましたね。それからこれはまだあるので差し上げてもしょいんですが、自衛権の問題を書きました「戦略研究シリーズ11「憲法と自衛権」昭和五十九年十一月、日本戦略研究センター」。これを書いているうちにだんだん長くなったんですが、角田さんからいろいろ教えていただきました。あの人は国際法の専門家ですから、非常にお詳しくて、いろいろ教えていただきました。『だいたい内閣法制局は国際法を全く知らないから困るんだ』ということをおっしゃるに言っておられました。

田岡良一さんの『国際法上の自衛権』という本がありますが、これを読みなさいと言われました。ちょうど改訂版が出たところでしたが、これは大変勉強になりました。だいたい私が書いたことは、田岡さんの言っていることが中心になっています。ただこのときには問題把握がまだ不十分なので、あとで『諸君！』などで、集団的自衛権のことを別に書いていますが、この自衛権の論文が走りなんです。

それからもう一つは、六十三年に最後になりますが、安全保障政策全般について書いてくれと言われました「戦略研究シリーズ28「安全

保障政策の抜本的見直し」昭和六十三年七月」。このときはまだ米ソ対立時代ですから、いまのように中国が中心ではなくてソ連が中心ですが、そういうことでだいたいこれを書いておきます。

ただ、この前申し上げましたように、防衛庁というか自衛隊は、カネの面の制約と、特に人の面の制約があるわけですね。カネはある程度なんとなかるとしても、人の面の制約はどうにも動かないものです。そうするとOBの人達や角田さんがさかんに言っておられる所要防衛力というのは到底達成することは不可能だ、ということになるんですが、しかしそれを言い出しても意味がない。所要防衛力はこれぐらいだけれど、実際にはこれぐらいしかできませんという意味では、そういうものを考えるのもいいかなという感じで、つき合っておったわけです。その「冊子「安全保障政策の抜本的見直し」の」一番終わりに、どんなものを「戦略研究シリーズとして」出しておったか、出ています。

伊藤 これで終わりになるんですか。

小田村 これが終わりに近い頃で、あと二年ぐらいあったかと思うんですが。

伊藤 これは昭和六十三年七月ですからね。

小田村 ええ、その次がもう平成元年になるので、その頃でほぼ終わりではないかと思えます。

■日本戦略研究センター (2) 功績

伊藤 これは事務局はどこにあったんですか。一応事務局はあったわけですか。

小田村 ありました。

伊藤 事務員もいたんですか。

小田村 事務員は自衛隊OBの方と、女性が一人おったと思います。小林「正信」さんという方が事務局をやっていましたね。陸上自衛隊

の方でした。いま永野「茂門」さんが、これと似たようなもので「日本戦略研究フォーラム」というものをつくって、いま市ヶ谷に事務所を持っています。

伊藤 これ（日本戦略研究センター）自体は解散したんですか。

小田村 ええ、解散したんだと思います。堀江さんも参議院を引退されました、永野さんに引き継いだわけです。

伊藤 じゃあ一応つながりはあるわけですね。

小田村 永野さんが戦略フォーラムをつくったのは五、六年前ですが、こういうものを今後もやっていく必要がある、ということであつたんです。

伊藤 これ「戦略シリーズの冊子」も議員さんに配られたわけですか。

小田村 これは議員さんに配っていると思います。

佐道 防衛庁から資料を届けてもらうとか、そういうことはあるんですか。

小田村 それはやっていたと思いますが、公式のものではなくて、だいたい自衛隊のOBが入っていますから、そこから情報は入ってきていたと思います。

武田 こういうものを配ると、それなりに反響はあるものですか。

小田村 あまりなかったように思いますね。だいたい議員さんはあまり読みません。

伊藤 ちょうど昭和から平成という時期は、ソ連圏が崩壊していつて、日本の戦略が非常に大きく変わっていく時期ですね。

小田村 そうですね。崩壊する直前だったわけですね。「ソ連共産党の書記長が「ゴルバチョフになりましたからね。まだここ」「安全保障政策の抜本的見直し」を書いた時点」では、そのところの予兆は把握していなかったと思います。

伊藤 予測していたという人はたくさんいますけれどね、あとになつてから。

佐道 あとから出てくるんですね。曾野明さんなどは、ゴルバチョフのペレストロイカとグラスノスチは共産主義体制にとって非常に危険

だと当時から言っておりましたが。この研究センターができた当初は、大平内閣、鈴木内閣の時代で、ソ連の軍事力増強、アフガン侵攻などがあると同時に、日米関係がかなりぎくしゃくした時期だと思っています。

小田村 日米関係は、一つはカーター政権時代、山下防衛庁長官のときだったと思うんですが、たしか山下さんが訪米して、防衛庁の中期業務見積りを向こうに説明したんだと思います。たしか概算要求が九・七%増額要求でした。その九・七%という数字が一人歩きしまして、アメリカから日本に圧力がかかってきた。

伊藤 約束だ、ととられたわけですね。

小田村 約束というか、ぜひ実現しろということなんでしょうね。そこで、政府や防衛庁ではかなり困ったという事態になりましたが、これはむしろ防衛庁に対する一つのバックアップだったわけですね。その結果、九・七%までは行かなかったけれど、かなり予算の伸びが確保できました。これは非常に大きかったと思いますね。その後は、例のイラン・イラク戦争が始まりました。その前に、鈴木さんの訪米がありました。伊東正義さんが外務大臣で、鈴木さんが向こうに行つて、「日米同盟」ということを発言されて、飛行機に乗つてから新聞記者にいろいろ言われて撤回する、という事件がありました。しかし日米関係に直接影響を及ぼしたということはないと思いますね。

むしろイラン・イラク戦争になつて、中曽根さんが向こうに行つて「不沈空母」発言をして、向こうは喜んだわけです。イラン・イラク戦争で、一回アメリカが軍艦がタンカーがやられたことがありましたね。そのときは中曽根内閣になっていましたが、日本もペルシヤ湾の防衛に参加してくれと言われて、自衛艦を派遣するわけにもいかないし、海上保安庁から巡視船を出そうかというような議論が出て、後藤田さんが官房長官で反対したというようなことがありましたね。日米関係にどこまで影響したか。たしかこのときにはレーガンが大統領になつていたと思いますから、それほど日米関係が悪くなったという感じはないと思います。

佐道 戦略研究センターが出した単行本があるんですが、それに箕輪登さんのお名前が出ているものがあつたと思うんです。金丸さんと箕輪さんはかなり親しいという話もあるんですが、この箕輪さんは、センターにおいてどういう位置におられたんでしょうか。

小田村 箕輪さんもセンターの応援団でした。箕輪さんは、私が防衛庁で経理局長をしていたときの政務次官です。もともとあの方はお医者さんなんです。それ以来、厚生族から防衛族のほうにも入られます。金丸さんと同じ田中派ですから、ある程度親しかつたと思いますが、それほどくっついていたという記憶はないですね。

伊藤 総じて、日本戦略研究センターというのは、防衛関係についてある程度の影響力を持ったと言えるでしょうか。

小田村 どれほど「影響力を」持ちましたかね。

伊藤 日本でシンクタンクというのは非常に難しいといわれていますね。

小田村 防衛庁は、はっきり一線を画していました。例の制服が統幕的な感覚で言っているんだろう、という感じでいましたからね。ただ、金丸さんというのはとにかく実力者でしたから、そういう意味では、直接なりマスコミなり、ある程度の影響力はあつたかもしれません。私も、これによつてどれだけプラスになったかということについては、はっきりした記憶がありませんね。

伊藤 堀江先生は一応自分としての仕事はできたという感じだったんでしょうか。

小田村 そうでしょうね。それから対外的には、台湾との関係をつくつたりしたので、そういう意味ではある程度の功績はあつたと思うんですけれどね。

それから韓国が朴正熙から全斗煥に替まりました。それまでの朴正熙時代はよかつたんですが、全斗煥になつてから、角田さんとどなたかが韓国に行かれたんですね。角田さんが帰つてからおっしゃっていたのは、「むかし韓国で日本と密接だった人が全部政府から追い出さ

れてしまった、それで全部替わってしまった。全斗煥になってから韓国の姿勢が変わった、ちよっと心配だ」ということでした。例の教科書事件のときも、韓国の陣容がすっかり替わったということが影響したのかもしれない。

■日銀監事 (1) 日銀の監査役

伊藤 個人情報保護の問題は先ほどお話しくださいました。その次に昭和六十「一九八五」年から平成五「一九九三」年まで日銀の監事をおやりになりますが、日銀の監事はどういう役割なんでしょうか。

小田村 監事というのは監査役ですから、決算の監査と、各支店を回りにまして支店の監査をいたします。何が中心かと言いますと、日銀券なんです。日銀券の金庫とあって、大きな地下倉庫の中に積んであるわけですが、その収納状況と、それが正確に計算と合っているかどうかということを実地に検査するということで、手分けして、決算期に各支店を回るということです。

あとは特別の仕事はありませんで、週に二回でしたか、各局の局長から二時間ぐらい情勢について進講してもらおうということでした。政策問題はマルタクという理事会のほうで検討いたしますから、そういう大きな問題については発言をしません。ただ情報を聞いて、質問をして、多少の意見は言うということでした。

伊藤 なんとなく、あまり実質的な仕事ではないように思うんですが。

小田村 実質的な仕事ではありません。監査役と見ていただければよろしいわけです。

伊藤 監査役というのはつまりそういうことですか。

小田村 そういうことです。決算監査が一番問題です。

伊藤 決算監査といっても、そこで問題が起るような決算があるわけではないでしょう。

小田村 そうではありません。益金の処分とか、そういう問題はある

わけです。

伊藤 かなり閑職ではあるんですね。

小田村 閑職です。本当は週に二回出るだけでもいいんですが、そういうわけにもいきません。毎日、局長以上の食堂で会食がございまして、そういうところでいろいろみなさんの話が聞けます。それから理事との昼食会が月に一回ぐらいございましたね。

伊藤 景気の状態とか、そういうことと関わることはないんですね。

小田村 状況は聞いていますが、それに対して日銀がどうしろ、こうしろということはありません。だから公定歩合の問題も、私が在任中数回ございましたが、全部事後報告です。事前にはありません。「政策委員会にかけて、そこで決定いたしました」ということで、その前後の状況を報告してくれることになっていました。

伊藤 だいたいこの組織でも、監事というのはそういう感じだと思えますけれどね。だから逆に言えば、いてもいなくても変わらないというか。

小田村 「いないと」どうしても困るというものではないですね。ただ決算についての責任はとらなくてはいけません。

佐道 ほかに何人かいらっしゃるわけですか。

小田村 いまは減ったと思いますが、当時は五人いたんです。五人で手分けするものですから、大変楽でした。いまは三人ぐらいだと思いますので、手分けして行くのは多少きついかもしれません。でも大変楽な仕事ですね。

伊藤 これは大蔵のOBが歴代なさっているんですか。

小田村 そうですね。歴代行っていました。

伊藤 ほかから来ているんですか。

小田村 ほかからは来ていません。あとは日銀出身のOBです。局長を辞めてから、あるいは局長から外に出て民間に行っていて、また戻ってくる方もあります。民間というか、まあ関連会社ですね。

伊藤 ということは身内の会みたいなのですね。

小田村 身内の会ですね。

伊藤 総裁とお会いになることはあつたんですか。

小田村 総裁とは支店長会議のときですね。それから昼食会が毎日ありますから、総裁も副総裁も出て来られるわけですね。そういうときにご一緒することもあります。

伊藤 でもそんなに深いつき合いになるわけではないでしょう。

小田村 そんなに深いつき合いになるわけではないですね。年に一、二回、総裁のご招待というのがあります、夕食をご馳走していただくということがあります。

■日銀監事 (2) プラザ合意、バブル崩壊、BIS規制

小田村 私が行ったときは昭和六十年ですが、九月か十月に総裁のご招待というのがありました。そのときが例のプラザ合意があつた直後でした。昭和六十年九月でしたか、円買いを始めたのが九月二十四日と書いてありますので、その当日ぐらいがご招待だったんです。ちょうど総裁が竹下大蔵大臣と一緒に向こうに行きまして、帰ってきた直後だったんですね。澄田「智」さんが総裁、三重野「康」さんが副総裁だったんですが、「今日から猛烈な円買いを始めたんだ」という話を伺った記憶があります。当時二三〇〇二四〇円だったものが、一日で二一〇〇二二〇円に上がったと思いますね。それからだんだん上がっていった。

伊藤 凄まじい勢いでしたね。そういう説明も聞いておられるわけですか。

小田村 いえ、その時まで知らなかったんです。

伊藤 そのあとずっと、聞いておられたわけですね。

小田村 そのあとは聞いています。

伊藤 どういう説明をされるんですか。

武田 上がりました、とか(笑い)。

小田村 そうではなくて、円レートを是正しようという。これはアメ

リカの要請もあつたし、日本側もこの機会に円のレートを見直したほうがいいということですね。というのは一時、二四〇円ぐらいまで上がっていたのが、石油ショックの前あたりからまた円安になってきまして、その後もだいたいそんな水準で落ち着いていたわけです。これはちよつとおかしいんじゃないかという気持ちはみんな持っていましたからね。

伊藤 円が安すぎるということですか。でもプラザ合意で始まって、一〇〇円を切るところまで行くという予測はなかったでしょう。

小田村 そんな気持ちには全然ありません。ただ、だんだん上がって、一八〇円ぐらいまでいったときに、これは少しきついな、と思いました。当時澄田総裁は、「円高基調はあくまでも維持する」ということを繰り返して言っておられたんですが、ちよつと言い過ぎじゃないかということで、少しトーンダウンしておられました。その頃から同時に円高によるデフレ回避のために、公定歩合を少しずつ下げていったわけですね。一八〇円前後で一時止まったと思うんですが、その後じりじり上がっていきました。ところが一八〇円ぐらいになっても、日本の景気はほとんど影響を受けなかったものですから、かえって日本経済にとつてはプラスではないかという意見のほうが強くなってきました。

それが落ち着いてから、まず株が上がりました、次に土地が暴騰する。土地騰貴ですね。これはいろいろな要因がありますが、日銀としてこれに対してどうするかということで、ずいぶん議論したんだろうと思います。少なくとも物価は安定しているわけです。地価と株は上がっています。卸売物価は安定している。物価が安定していれば、特に抑制的に動く必要はないのではないかと意識していましたが、これが少し甘かったのかもしれないですね。それからぼつぼつ抑制策で公定歩合もいじろうという機運になってきたんですね。

そのときに、ブラックマンデーといって、アメリカの株が暴落したんです。八七年の秋だったと思いますが、それで公定歩合の是正ができなくなつた。それがあとまで尾を引いたということですね。

伊藤 レートは非常に大きく変動して、景気も非常に変動するという、とんでもない時期ですね。

小田村 景気は非常によかったですね。支店長会議で各支店長が景況報告をやるんですが、それを聞きますと、どこも悪いところがない、という状況でした(笑い)。シーマという豪華な車がありました、
「シーマ現象」というんだ、という話もありましたね。本当にみんな浮かれていた時代です。それが日本経済の強さを示すものだという感じのほうで、地価をなんとしても抑えなくてははいけないということから、例の地価税とか、土地取引の規制とか、銀行の総量規制ということで抑えたところが、抑え過ぎて動きが取れなくなってしまったんですね。

伊藤 バブル崩壊、ですね。

小田村 ええ。もう一つ、あまり日本の経済が強くなったので、外国から妬まれました、BIS規制というのがこのとき始まったわけです。私はおかしいと思いました。だいたい市場経済優先ということを言いながら、自己資本を基準にして規制するということは、非常に将来に禍根を残すのではないかと、監事の報告会ときに「問題だ」という話をずいぶんしたんですが、これは大蔵と日銀とが、アメリカ、イギリスに強く言われて、結局BIS規制が導入されました。

ただあのときは株の含み益がたくさんあったものだから、それを逃げ道にしたんですね。ところがその株が下がったものだから、今度はそれがかえってガンになったということです、やはりあれは向こうにしてやられたんだと思います。というのは、あれは自己資本との対比でいうんですが、もともと日本では、貸し出しが増えるから資本を増やそうという気持ちにはなかったんですよ。だからそれは将来ガンになると思ったんですね。でもいまはあれが金科玉条になってしまっていて、どうかな、と思っているんですね。

伊藤 そういうことについて、積極的に意見を言えるような場ではないんですね。

小田村 ないんです。それはお任せしていたわけです。それから、バ

ブルが崩れてきまして、不良債権が出てきたときには、日銀も本格的に取り組んでいました。信用機構局という局も改正して新しくつくりました。大蔵省では検査というんですが、日銀では監査というんですね。各銀行の経営状況を調べるんです。その実地監査をしまして、貸出先の状況もある程度調べていたわけです。そうしますと、非常に貸し付けの内容が悪くなっていた。特に、日債銀と拓銀が悪かったと思います。長銀はまだそんなに悪いとは思っていなかったんですが、どこか信託で悪いところがありましたね。そういうことで、これは将来非常に禍根になるということは、もう気がついていました。ただ、どういう手を打ったかという点、早く不良債権を償却しなさいというだけで、具体的にどうこう、というところまではいかなかったですね。当時としては、長銀がつぶれたり日債銀がつぶれたりというところまでの予測はしていなかったと思います。長銀や日債銀の前に住専問題があるんですが、住専はどちらかというと大蔵省の問題だったわけですね。

伊藤 結局それは、土地の価格が下がって、担保能力がなくなったということですね。

小田村 担保不足になったんですね。

伊藤 それは土地の値段を抑制したからなのでしょうね。

小田村 そうなんです。あれほど下がるとは思わなかったわけですね。ある程度ストップできればいい、ということだったと思います。

伊藤 かしこいずれにしても、放っておいても下がることは下がったんでしょうね。

小田村 そうでしょうね、下がることは下がったんでしょうね。

伊藤 いまやと都心で地価が少し上がったと言われていますが。

小田村 いま少し上がってきましたね。

伊藤 しかし地方はおしなべて下がっていますからね。銀行も、株が少し上がったので、一息ついているという感じですからね。

■天皇「訪中反対運動（一九九二）」

伊藤 先生は平成四（一九九二）年の天皇訪中問題に関して、多少なりともお関わりがあったんでしょか。

小田村 これはご訪中反対運動をいたしていました。八九年が天安門事件で、それから一年か二年経って、日本は制裁を解除したんですね。そしてある程度、日中関係も普通の状況に戻ってきた。中国と外国との関係も正常化の方向に向かっていた。それでもまだ人権問題については、外国は非常にシビアな姿勢をとっていたと思うんです。そして例の国交正常化二十周年というのが一九九二（平成四）年です。たしかその前の年の暮れに、国会でしゃべったのかな。渡辺美智雄さんが外務大臣で、「国交正常化二十周年で中国政府から陛下のご訪中の招請を受けている。できるだけ実現するような方向で検討したい」という国会答弁があったんです。

それで私はびっくりしまして、それについて反対運動をやっておりました。三月三十一日に東條会館でしたか、国民集会をやっていますし、七月十七日には産経新聞に意見広告を出しています。それから八月七日、十五日にも国民集会をやっています。これは、党内でも非常に反対が強くて、三月頃は非常に心配していましたが、板垣「正」さんなんか聞きますと、いま党内ではその議論は消えちゃったぞ、というような話だったんですね。ですから、それならなんとかやめる方向で進むかな、と思っていたんですが、政府のほうは着々とやっていたんですね。

伊藤 政府のほう、というのは外務省ということですか。

小田村 ええ、外務省と官邸ですね。官邸は、官房長官が加藤紘一です。それで、宮澤さんはその年「一九九二年」の一月に韓国に訪問しまして、例の慰安婦で大失態をしたわけです。

六月十何日に、会期が終わるわけです。それでこの年は、七月が参議院選挙なんですね。その会期が終わる直前、六月十五日前後だった

と思うんですが、政府がご訪中を決定したということで、進めることを発表したんですね。それでびっくりしたんですが、会期が終わりますと選挙ですから、国会議員はみんななくなってしまうんです。参議院は当然自分の選挙ですからやらなければいけません。衆議院も応援しなければいけませんので、みんな散らばってしまつて、動きが取れなくなつたんです。これは非常に巧妙な作戦だと思いました。私は、こういうことをやるのは宮澤さんではないだろう、加藤紘一だろうと思ったんですけれどね。そんなことで、たびたび反対の運動をやっていたわけです。

政府のほうでは、十月の訪中だったんですが、八月二十五日が閣議決定で、その前に有識者の意見聴取をやるということになりました。八月十七日に十人ぐらい反対論者を呼んだわけです。このときは総理はもちろん出ないんですが、官房長官・加藤紘一と、陪席していたのは、石原信雄官房副長官、小和田「恒」外務次官、谷野「作太郎」外政審議室長でした。一人三十分ぐらいずつですから、十人だと五時間になるから、だいぶ長いですね。私が意見を言ったのは、午後三時から約三十分。メモでしゃべったんですが、正式の文書は作っていないかったです。帰ってから、しゃべった内容を記憶を辿って書いたのが、これに載せてあるわけです。国民文化研究会で出したもので、「占領後遺症の克服」です。

武田 その本が探せなかったんです。

小田村 これは店に出していませんからね。国文研にはまだあると思います。これには、帰ってから書いた「天皇「ご訪中」」反対の文章と、ご訪中が終わってから書いた文章を載せております。私は一月に協和協会で新年会がありましたときにも言ったんですが、一番わかりやすいのは、昭和天皇のご大葬のときですね。ご大葬のときに各国の元首がみんな来られました。そのときに韓国からもたしか大統領が来られたと思いますが、中国は楊尚昆が主席でしたか、鄧小平は元氣ではなかったかな、江沢民になっていたかもしれないが、そういうのが来ない。首相は李鵬だったと思いますが、それも来ませんで、来たのは

銭其琛です。外務大臣ですね。それしか来なかつたんです。

それから翌年に今上陛下のご大典がありました。ご大礼のときも、ほかのところは例えばブッシュ大統領も来しましたし、元首格の方がほとんど来りましたが、このときも中国から来たのは呉学謙です。だいたい、皇室に来てくれと言いなから、非常に軽視しているのも甚だしいじゃないか。インドはご大葬のときに、国民に三日間の服喪をさせたんですね。それほどどの国と、一衣帯水とか言っているのと違うじゃないか。そんな国に、なぜ天皇陛下がおいでになるんだ、ということなんです。

あとはいろいろありますが、本来私としては、天皇陛下は国民と共に、ということをおつしやっておられるので、外国にたびたびお出かけになることはやめたほうがいいという感じです。「剣璽渡御」と申しましたか、天皇陛下が行幸になるときは、必ず宝剣と勾玉をお持ちになって、帯同される。そういう神器をお守りするというお務めもあるわけですから、外国に、ましてご即位以後、アメリカより先に中国においでになるのはおかしい、というのが基本的な考え方です。そのあとは、お言葉の問題とか、いっぱいあるわけです。

それからもう一つ、もしどうしてもおいでになるということだったら、このときに靖国神社への行幸をしてもらいたい。これは、いまおいでになれば、中国は絶対に文句はつけない。総理大臣が参拝して、陛下がおいでになれば、中国は文句のつけようがないわけですから、それもやってくれというようなことも話したんですけれどね。

伊藤 これ「天皇訪中」を推進したのは、親中のなグループと言っているんでしょうね。

小田村 そうです。あのときの北京の大使が橋本「怨」さんで、橋本さんがずいぶんあちこち根回しされたんじゃないでしょうか。それから橋本さんの前「々」任者が、私は嫌いな人なんですが、中江「要介」さんで、中江さんなんていうのは、「中国の恨みは永久に消えない」なんていうことを自分で書いてるんですけれどね。

中国は、日本の侵略を「百年の侵略」といつていましたから、日清

戦争からそうなんです。ですから私は、お言葉に際しては、明治・大正・昭和の三代のご詔勅を十分読んでいただく必要があると言いました。だいたい天皇陛下がご訪中になるときは、宮中三殿に御拝礼、昭和天皇御陵に御参拝になり、神武天皇の橿原の御陵、伊勢神宮、神武天皇山陵には御代拝になっていきますね。そういうところをお詣りになった上でいらつしやつたんですね。そういう皇祖皇宗の気持ちをも十分お汲みになった上で行かれるので、お言葉についても、決してそれを貶めるようなことはやらないで欲しいということも言っておいたんですが、結局聞く耳は持つてくれなかったということだと思います。

伊藤 日米関係が基軸だと言いなから、他方で日本と中国の結びつきのほうがより優先するという考え方のかたもかなりいらつしやるわけですね。

小田村 そうなんです。よくわかりませんが、加藤さんなんかはそうじゃないでしょうか。

伊藤 そういう感じですね。

小田村 宮澤さんもそのへんは怪しいですからね。

伊藤 宮澤さんはどういうお考えなのか、ちよつとよくわからないですね。

小田村 わからないですね、あの人は。宮澤さんが鈴木内閣の官房長官になられたときに、あの人は国際感覚が豊かな人だし、私も役人の頃からお目にかかっていたし、対米関係について、特にあのときは防衛力のことが問題になっていたもので、真剣に考えていたんだろうと思うて、そういう手紙を出したこともあるんですが、ご返事は通り返の書類だったので、がっかりした記憶があるんです。

■戦没者追悼平和祈念館を考える会（一九九四）

伊藤 そのあと、平成六「一九九四」年ですが、先生は「戦没者追悼平和祈念館を考える会」の呼びかけ人になられていますね。

小田村 これはいま九段にございます昭和記念館のことなんです。厚生省があとに戦没者追悼の祈念館を作りたいということで、いろいろございました。橋本龍太郎さんが厚生大臣をしていたときですが、橋本さんは以前から遺族会のメンバーとして戦没者の遺骨収集等に行っておられたんですね。そういうご遺品がたくさんある。そこで、何かそういうものを収納するところがあってもいいし、戦没者追悼の意味で、いわゆる歴史館をつくったほうがいいのではないかという発想をされて、その検討のために調査会か懇談会のようなものができたんですね。

はじめは児島襄さんが委員になりました。児島さんは非常に乗り気になられて、歴史博物館のシナリオをつくられたんです。これは大変立派なシナリオで、これができるのであればよかったと思うんですが、その後、構想が大きすぎるということになりました。どこの国にも戦争博物館というのはあるんですが、東京では場所的にもなかなかないということ、それが駄目になりました。

それから、あとの詳しいことは知らないんですが、厚生省のほうでそういう祈念館をつくるということで、「丹青社」という会社に委託をしました。歴史博物館のようなものを考えさせたんですね。そして平和祈念館についても、まだ建設費にはなっていなかったと思うんですが、調査費のような予算がついて、そこで検討しました。問題は二つありまして、一つは展示の中味、もう一つは建物の規模と形です。

その建物設計は有名なところでやっただんですが、振り返ったような近代的な建物で、九段下の九段会館や靖国神社等にはそぐわない建物なんです。住民のほうも、それでは困るという反対がありました。

問題は中味でありまして、その業者は、前に長崎の平和祈念館で歴史のことでおかしいものを出して、問題を起こしています。大阪でもやっただんじゃないでしょうか。大阪ではいまでも問題になっていますね。その会社なんです。だから当然その中味は、反目的な展示になってしまう。それが九段にできるのは大変困るということで、これはどうしてもつぶさなくてはいけない。しかも国費でつくるわけですから

ね。それで、中心はどなただったか、そんなことで呼びかけ人になりまして、反対をしました。橋本さんがもう一回厚生大臣になっていたんじゃないかな。厚生省や厚生大臣にも伺いまして、反対をして、結局、厚生省は構想をまったく別にしました。

もともと橋本さんの初めの発想は、遺児記念館ということだったんですね。戦没者遺児の記念館です。それに戻ろうということで、歴史博物館をやめまして、いまの平和館になりました。戦後の遺族の苦難の状況を展示しようということになったんです。ただ文献だけはそこに全部収納するというところで、いろいろ場所も案がありまして、市ヶ谷につくつたらいいじゃないかという案もあったんですが、九段下で、建物もそうおかしなものではなくなりました。それができたということです。

伊藤 なかなかいい建物ですよ。

小田村 そうですね。

伊藤 一時期、厚生省が変な業者に委託したというのは、厚生省が政治的な感覚が何もなくやったことですか。

小田村 そうだと思います。

伊藤 ちよつとびっくりしましたね。

小田村 そうなんです。丹青社という会社で、札付きの業者なんです。伊藤 どうもお役所というのはそういうことがよくわかっていないようですね。

小田村 いや、そこは非常に感覚が鈍いですね。

伊藤 これはおそれく、遺族たちに対する補償を個々にできないから、まとめてこういう格好でやろうというのがそもそもの出発点だと思うんですが。

小田村 そうですね、そのところは。戦没者の遺族、遺児から初めの要望があつたのは事実なんです。それが補償金なのか、こういうもののなか。あるいは先生がおっしゃる通りかもしれせん。

伊藤 引き揚げ者などに対しては、いろいろな補償をしたりしたんですが、戦没者に対しての補償は――。

小田村 戦没者は、戦没者の妻に対する弔慰金とか、恩給、遺族年金その他もございますし、一応の金銭的な措置はしてあったと思います。何か記念碑的なものが欲しいということではなかったかと思えますね。伊藤 このあいだ私も行ってみましたが、なかなかいい展示でございました。それから収集している資料も、われわれにとつて非常に便利なもので、よくできたな、と思いました。下手をすると、長崎のあれと同じようになるところだったんですね。

小田村 同じようなものができるところだったんですね。でも厚生省も考え直してくれたんです。

伊藤 橋本さんがついていてそういうことじゃ困りますね。

小田村 頼りないですよ（笑い）。

■拓殖大学総長 （１）就任の経緯

伊藤 さて、そして平成七「一九九五」年に拓大の総長にご就任になります。先生はこれまで拓大と何かご関係がございましたか。

小田村 拓大は全く関係ありません。

伊藤 なぜ先生が総長になるということになったんですか。

小田村 この四年前、九一年に遡ります。

伊藤 総長の任期は四年ですか。

小田村 四年です。理事の任期も四年なんです。陸軍のOBというか、五・一五事件で辞められた吉原政巳さんという方がおられるんです。この方は五・一五に連座して、たぶん士官学校生徒だったと思います。が、お辞めになって、その後陸軍中野学校の教官もやっておられた方です。この方が、その後拓大に行かれまして、拓大の海外事情研究所の所長をされたんです。吉原さんは前から私の兄、寅二郎も泰彦も懇意にしていたいたんですから、そんなご関係で存じ上げておったんです。

それで九一年の前の年になりますが、吉原さんから、一回飯を食い

たいということでお電話がございました。吉原さんと戦前からずっと懇意にしておられた椋木瑳磨太さんという方が拓大の理事長だったんです。吉原さんと椋木さんと、京橋か日本橋の小料理屋で夕食をいたしました。椋木さんにはそのとき初めてお目にかかったんです。椋木さんから、「ひとつ拓大の評議員になつてもらいたい。評議員というのは年に二、三回評議員会があつて、そのとき出ていただければいいので、あまり仕事の負担にはなりません。好きなことを言っていただければいいんだ」と言われまして、「別にお役に立たないけれど、それくらいならいいですよ」とお話ししておいたんです。そして評議員になりました。

ところが翌九一（平成三）年に、ちょうど理事の任期で改選になったわけなんです。その時に椋木さんは理事長を退任されまして、総長も替わりまして、一騒動あつたんです。それは私は全然知らなかったんですが、そのときに理事にさせられちゃったんですよ。これもひどい話で、何も連絡がないんですね。私は日銀で、ちょうどアメリカに出張していたような気がします。ですから臨時評議員会に出なかつたんですね。そこで理事の改選と総長・理事長の選任があつたわけです。それで帰つてきたら、おまえは理事になった、ということ、ひどい話だと思つたんですけれどね。

それで、非常勤ですが理事になりました。理事は月に一回理事会があります。それから理事会の前に打合わせ会があるから、どちらかに出てくださればよろしいというので、それならどちらかに出れば、毎月一回であればいいだろうと思つて、理事になつておつたわけです。このときは、総長は小村「康一」君と言ひまして外務省の人ですが、その前が高瀬侍郎という方で、大変な豪傑なんです。この高瀬さんが亡くなって、しばらく総長は欠になつていたんじゃないでしょうか。そして小村君がなるときに――。

伊藤 小村さんというのは寿太郎さんの関係なんですか。

小田村 関係ありません。前に私が大蔵省で、大阪から帰つてきて為替局に戻ったときに、外務省から同じ資金課に来ていました。そんな

ことでちょっと知っていたんですが、「小村君が総長になるときに」もう一人の専務理事の小川哲雄さんという方が、林健太郎さんを担いだんです。あとで小川さんから話を聞きますと、とにかく雨の中をお宅に訪ねていたりして、林さんの了承を得たということで、林さんの推戴をした。

ところが小村君も私と同じぐらいに評議員になっておりました。高瀬さんがおそらく呼んだんだろうと思うんですが、ブラジル大使をやっておりましたからね。高瀬さんの意向が小村君だったと思うんですが、それで小村さんが総長になる。総長の選考委員会というのがあったんですが、そこで小村さんに決まっていたんですね。

ところが小川さんは不満がありまして、林さんを担いだ。そこで臨時評議員会で投票になって、結局小村さんになったんですが、その前にぎくしゃくして、暴力とはいかないまでも、剃刀がどうだこうだ、という話もありますが、よくわかりません。小川さんが自分で切ったという話もあってよくわかりませんが、それがあとに尾を引きまして、OBと大学とが対立したんですね。だから小村さんの時代は本当にお気の毒で、年がら年中そういうゴタゴタが続いていたらしいんですね。伊藤 OBのほうは、林健太郎さんというほうだったんですね。

小田村 OBの中も分かれていたんですね。OBの中の対立もいろいろありまして、私立大学というのはなかなか大変ですね。そんなことで、小村さんも嫌気が差したんでしょうね。初め、「総長に」なったときははいぶん張り切って、いろいろ授業も参観したりして頑張っておられたんですね。そんなごちゃごちゃしているところではとても総長も務まらんということなんでしょうね。それで一期で辞めることにされたようです。

それで次の総長のことで、椋木さんのあと理事長になっていた今の理事長の藤渡「辰信」さんから連絡があつて、ちょっと昼飯を一緒にして欲しいということでした。それで椋木さんと吉原さんと私とで東京会館で食事をしたんですが、そのとき、平成七年の二月か三月だったと思うんですが、次の総長を引き受けてくれないかという話が出て

きたんですね。

私は日銀の仕事も終わって、やっとゆつくりしたときだし、東京短資という会社の顧問になっていたんですが、これもあと一年で終わるものですから、「少しのんびりしたいし、なんといつてももう七十歳を過ぎていて、とても体力的にももつかどうか自信がないから、勘弁してくれ」ということで、お断わりしていたんです。しかし椋木さんが非常にご熱心で、「なんとしてもひとつなってもらいたい。日本のためにやってくれ」と言われまして、「それじゃあちよつと考えさせてください」ということで、一、二ヶ月少しづつ考えていたんですが、それじゃあ引き受けてもいいかな、ということになりました、お引き受けしたわけです。

伊藤 その段階では、前に評議員、理事をおやりですから、拓大の状況というのはおおよそわかりだったんですね。

小田村 そういうゴタゴタとか、学校内の規則の改廃とか、そういうことは理事会に上がってきますが、学内の教学関係はほとんど上がってこないんです。ですから新規採用の教員の承認と、助手から助教、助教授から教授への昇格、これは全部理事会承認事項なのでわかりませんが、その程度のことで、細かい内容はわかりません。ですからそれについては、総長になってから初めていろいろ聞いたということです。伊藤 経営状態はわかっておられたわけですね。

小田村 経営状態はある程度わかっていました。まだあの頃は授業料がどんどん入ってきますし、学生も応募が多かったときですから、問題なかったわけです。ただ藤渡さんは繰り返しいつも言っていました、「これから大学は冬の時代になる」ということでした。それはその通りになったわけです。

伊藤 すでに八王子はできていたんですね。

小田村 八王子はもうできていたんです。工学部を新しくつくりまして、十年は経っていませんでしたが、だいたい揃ったところだったんですね。

伊藤 経営的には、借金があつたということはなかったんですね。

小田村 そういうことはありません。借金は私学振興財団から前に借りていましたが、だんだん返していった、非常に少なくなっていました。

伊藤 大学の中でのゴタゴタも、それほどでもなくなってきたわけですか。

小田村 大学の中は、学友会（OB会）も役員がだんだん替わってきますし、私も別にOB会と喧嘩をするつもりは全くありませんでした。むしろOB会のほうが、拓大の伝統という意味ではよくわかっている人が多いので、そういう意味では円滑にいつていると思います。

■拓殖大学総長 （2） 拓大創立百周年

伊藤 結局、二期おやりになったんですか。

小田村 二期やったんですね。本当は一期で辞めたかったんですけどね。

伊藤 二期という八年ですから、かなりいろいろなことができるわけですね。

小田村 そうですね。しかし二期目の終わり頃になりますと、あまりできなくなってきました。一期で、歳のこともあるので辞めたかったんですが、ちょうど創立百周年というのがあったんです。百周年は兩陛下の行幸啓もお願いしておりましたし、百周年が終わるまでは途中で辞めるわけにもいかないと考えたので、もう一期続けましょう、ということになりました。

伊藤 やはり一番大きな仕事は百周年でございいますか。

小田村 百周年ですね。記念事業として、例えばむかし、恩賜記念講堂というのがあったんですね。それが空襲でやられて、老朽化して駄目になっていたの、その建て直しをしました。

伊藤 あれは八王子に持っていったんですね。私は見に行きました。

小田村 なかなか風格のあるいい建物です。あれは妻木頼黄さんとい

う方が設計されたんですね。

伊藤 だいたい元の形を復元されたわけですか。

小田村 外観はそうです。中味は全く違います。それから国際開発学部というのをつくりました。これは東工大の渡辺利夫さんに学部長に来ていただきました。学部を新しくつくるときは、理事者のほうで自由に採用できるものですから、そういう意味ではわりあいいい方に来ていただいたと思っています。教授会がありませんからね。

伊藤 やはり私立の大学でも教授会の力というのはある程度強いわけでございますか。

小田村 教員の採用、昇任は非常に問題が多いんですね。私が大学で一番苦労したのはその二つです。いい人を探ろうと思っても、教授会とうまくやらないとなかなか通らないし、昇格人事でも、変な者を持つてくるわけです。学部長がしっかりとしていればいいんですが、学部長が頼りないというにもならない。

伊藤 学部長は選挙でしょう。

小田村 選挙です。私はああいう学部長選挙をやめないと駄目だと思っています。私が来る前にずいぶん変な人事でいろいろなものを入れているものですから、あとが大変です。

伊藤 かつて、いわゆる右だと言われていた大学が、急速に教員の問題でいつのまにか左翼の大学になっていたという事態もよく起こっていますね。

小田村 あちこちで起こっているでしょう。拓大は完全に左になっていたはずなんです。いまでも左翼は強いですから。

伊藤 相当強いですか。

小田村 強いです。昔の古い学部はそうです。

伊藤 学部によって、ですか。

小田村 古い学部のほうが強いです。前に副学長、理事もやられた方で少し左の方がおられて、そういう方がどんどん引張ってくるものですからね。だから例えば秦郁彦君なんか、拓大から千葉大に替わりましたが、彼も嫌気が差したんだと思います。「その後、左翼はどう

していますか？」なんて言っていました（笑い）。

伊藤 秦君が嫌気が差すようでは相当だな。

小田村 相当なものです。

伊藤 秦君は強気な人ですから、断固戦う、ぐらいやりそうだけれど（笑い）。私は百周年に伺いましたが、両陛下がおいでになったので、実はびつくりいたしました。かなり大きな私立大学の創立百周年で、そういう前例があるんですか。

小田村 前例がなければ無理だったんですが、前例としては、調べますと、むかし慶應が昭和天皇御在世中で、創立何周年だったか、行幸啓をいただいています。それから日大は九十周年と百周年に行幸啓をいただいています。日大は非常に自慢にしています。それからもう一つ、拓大の直前のこととしては、東京農大においでいただいています。東京農大においでいただけたら、「拓大にも」おいでいただけるのではないかと思っただんです。

伊藤 これは宮内庁と掛け合うということになるわけですか。

小田村 そうです、宮内庁です。これに非常に努力してくれたのは、仲山順一さんという理事で、これは警察庁の出身ですが、非常に真面目な方で、尊皇思想の非常に強い方です。寛克彦さんを尊敬している方なんですが、仲山さんが宮内庁の鎌倉「節」長官にたびたびお願いしていただいていたんですね。ところが仲山さんが平成十一年でしたか、突然亡くなられて、そのあとまた私も鎌倉さんにととききお願いしておったんですが、そんなことで、鎌倉さんのご了承をいただいて、実現したということです。本当は大学も、それが大変な光栄だということをもうちよつと感じてくれないと困ると思っっているんですけれどね。

伊藤 「百年史」のほうもちゃんと進んでいるようすし。

小田村 「百年史」も最近は見えていないんですが、池田「憲彦」君のところまでやって来ています。

■拓殖大学総長 （3）教科書正常化国民会議

伊藤 総長のあいだにおやりになったことで、百周年以外にお話しいただけるようなことは何かございますか。

小田村 もうちよつと前なんですが、「教科書正常化国民会議」というのがございまして、気賀健三さんが始められたんですが、これを私もそのメンバーとして、だいぶお手伝いいたしました。気賀さんが会長で、森本眞章さんという方が一所懸命やっていました。あとマスコミ評論家の片岡正巳さんとか小堀桂一郎さんにもお願いしましたし、村尾次郎さんも側面からお手伝いしていただきました。しかし例の教科書事件以後、ますますひどくなっていた。これは「教科書を考える会」ですか、自民党の中につくってもらいまして、林健太郎さんに座長が会長になっていただいて、少し党のほうで活動していただいたものですから、「新編日本史」の騒動のときも少し動いていただきました。それから学習指導要領の改訂ですね。

そうそう、党は森山欽司さんです。森山欽司さんは非常に熱心で、この人が中心になって動いてくださいました。文部省のほうにもある程度強く働いて、例の小学校で人物を二十何人が必ず載せろということとで、東郷平八郎を挙げて、文部大臣がだいぶ躊躇したんですが、とにかく押し切って入れた。学習指導要領がある程度よくなったものからすからね。私は「公民」の防衛問題も学習指導要領ではつきり書くように言ったんですが、「『防衛』という字を入れるだけでも精一杯だった」とか、文部省の審議官は言っていました。防衛問題はまだアレルギーが強く、そんな状況でした。

伊藤 私は「新しい歴史教科書をつくる会」でやっていて、中学の「歴史」も学習指導要領は非常によくできているんですね。

小田村 今度の学習指導要領でしょう？

伊藤 いえ、前からです。前からといっても、ちようどあれをつくる前後からです。

小田村 少しよくなったんですが、一番よかったのは、「歴史」は、昭和四十三年の学習指導要領です。これは大変よくできていました。

それが昭和五十二年の時に大幅に圧縮されたんですね。それで重要な言葉がなくなったものですから、そこで左翼につけいられた。つまり小山常実さんの『歴史教科書の歴史』という本にも出ていますが、その頃から少し教科書の記述がおかしくなっているということです。あの頃から「ゆとり」の始まりがあつたと思うんですが、あの指導要領の改訂による簡素化、教育課程審議会で圧縮されたということなんです。ですから、それが少しよくなって、今度の指導要領ではもうちよつとよくなったと思います。それでも一番よかったのは昭和四十三年のものです。

伊藤 そうですか。私が教科書をつくるときに、学習指導要領に忠実につくればいい教科書ができるはずだと。

小田村 そうなんです。おっしゃる通りなんです。要するに文部省が検定をやめちゃったんですね。

伊藤 ですからわれわれは、まったく学習指導要領に準じてつくったんです。それで文句のつけようがないわけなんです。ちゃんと学習指導要領に書いてあるんですから。

小田村 そうなんです。文部省がおかしくなって、やはり教科書事件以後、文部省も検定を放棄したし、検定官自身がだんだん変わってきましたね。

伊藤 それに近隣諸国条項などで、外務省がものすごく発言権を持つようになったということですね。

小田村 最近はどうかわかりませんが、「新編日本史」のときは明らかにそうですね。

伊藤 われわれのときも多少それがありました。文部省があまりにも外務省に干渉されるというので、少し抵抗したということで、なんとかなったんです。それでもいぶん直させられましたね。

小田村 教科書図書検定審議会に外務省からも必ず入っていたんですね。昔はそれほどいろいろなことを言われなかったんですが、むしろ

官邸筋のほうからじゃないかな、だんだんそういう雰囲気が強くなってきましたね。

伊藤 ちょうど外務省から来ている人が北朝鮮派だということが暴露されて、それでだいぶ改善されたんですね。

小田村 そうです、インド大使をやった（佐道 野田英二郎さん）、そう、あの人は変な人じゃなかったんです。彼は内閣調査室に行っていたんです。内調にいたときにお会いしたことがありました。それからわりあい国語問題にも関心があつて、あの人があんなことをやるとは全く思いもしなかったですね。だからあの人はどちらかというと無思想なんじゃないでしょうか。

伊藤 無思想であれだけできるかな（笑い）。

■拓殖大学総長 （４）大学内の諸問題

伊藤 では拓大総長としては、比較的平穩にやることができたと言ってもいいんですか、それともやはりゴタゴタがあつたんですか。

小田村 やっぱりゴタゴタは続きますね。

伊藤 あまりいまおっしゃるわけにはいかんでしょうけれど、私立の大学はそういう内紛があるんでしょうね。

小田村 やはり全部が全部というか、教授会は難しいわけですから、少なくとも事務のほうが全面的にバックアップしてくれないと駄目なんです。初めが全部そうだったので、かなり思うようになりましたが、そのへんがだんだんおかしくなってきたんじゃないかな、という感じがしますね。

伊藤 事務局ですか。OBもかなり力を持っているんでしょう。

小田村 事務局はほとんど全部OBです。OBから理事になつている人が真剣に考えるだけの識見がある人でないと、なかなかうまく行かないということだろうと思いますね。

伊藤 やはり野心を持つている理事さんもいるわけでしょうから。

小田村 そうですね。野心があつたり、地位にしがみついたり、なかなか理事の取り合いも大変なものらしいです。

伊藤 そうですか。直接には総長に見えないのかもしれませんが。

小田村 わかりませんね。

伊藤 理事長と総長との関係は微妙な関係ではないんですか。

小田村 これもなかなか難しいところがございましてね。どちらかというと理事長が経営面、総長が教学面ということなんですが、その棲み分けがちゃんとできていないとなかなかうまくいきませんね。私は経営面はほとんど理事長に任せておりましたが、やはり理事長が教学面でもバックアップしてくれないと難しいですね。

伊藤 それはそうですね。だから新しい学部をつくるというと、両方に関わることですからね。

小田村 そうですね。むしろ理事長からそういう意見が出て、私もそれはいいじゃないか、ということと賛同したわけです。

伊藤 いま拡大は私学の中ではかなりいいほうのランクにいるわけですか。

小田村 そうですね、なかなか難しいところがございまして、例えば偏差値でいうと、やはり「中の下」ぐらいではないでしょうか。一度、試験科目を三科目から二科目に減らしたんです。これはやはり具合が悪いという教授の意見もありまして、私もやはりこれは三科目に戻した方がいいんじゃないかと二、三回言ったんですが、事務なり理事者側としては、増やしたために受験生が減るようなことがあってマイナスになると、また評価に影響するということで、なかなかそれが踏み切れないらしいんですね。今度国立大学は五教科七科目に戻しますが、ああいうことがこれからやっていかないといいけないんじゃないかと思うんですね。どうも応募者の数を気にしすぎるところがあると思うんです。それから、なんといっても教員の質をよくしないと駄目ですね。

伊藤 テレビなんかを見ていると拡大の先生がかなり出てきていますね。

小田村 ええ、特に国際開発関係の人が出るようになりましたね。

伊藤 あと海外事情「研究所」の方も――。

小田村 海外事情は、教授会がございまして、理事者の直轄ですが、それだけにわりあいいい人を引っ張って来られたんです。所長が総長任命ですから、前の井沢「正忠」さんという方が所長だったんですが、これは日経の方でロシアが専門の方だったんですが、その方が辞められたあと、佐瀬「昌盛」先生に来ていただきました。それから木村汎さんにも来ていただきましたし、内容的には大変よくなっていると思うんですね。ただ、なかなか私立大学での研究所というのは予算の制約でいぶ難しく、経営側のほうはなるべく給与も人員も減らそうとするものですから、思うようにいかないんですが。

それから日本文化研究所というのをつくりまして、日経の学芸欄の編集をずっとやっておられた井尻千男さんに来ていただいたんです。この方がいろいろやっていただきました。客員教授をたくさん作ってやっていたいていいるものですから、これは若干の謝金を出しています。そのほか、みなさん無給です。ところが、これは大変大学の宣伝にもなるし、ご本人もいいわけなんです。

例えば今度、呉善花さんが正規の国際開発学部の教授になられたんです。重村「智計」さんが替わられたものですから、重村さんのあとの教授になられたんです。呉さんも、客員教授だったんです。客員教授というのは、公開講座に出ていただく客員教授という肩書きを使えるので、日文研の客員教授になっていただきました。そうしないと、韓国では日本にいくらい良い研究をしても駄目なんだそうですね。やはり大学教授という名前がつかないと。そういう意味では大変よかったのではないかと思っています。

■「日本会議」の発足と活動

伊藤 拓大の話はそこまでいたしましたして、そのほかに「日本会議」はかなり前から、立ち上げのときからですか。

小田村 もっと前に「日本を守る国民会議」というのがございまして、もう一つ前に昭和四十八年頃に「日本を守る会」というのがあったんですね。「日本を守る会」は主として宗教団体中心に作られた会なんです。それが初めにできて、その後「元号法制化」が実現し、このような国民運動を進める会としてつくりたいということで、「日本を守る国民会議」ができました。このときは加瀬俊一さんに議長になっていただいて、できたわけです。

私は直接タツチはしていなかったんですが、寅二郎がずっと関与しておりまして、日本を守る会と国民会議の両方をやっていたんです。私には、憲法の問題をやってくれという話が梶島「有三」さんからございまして、僕は憲法をやるほどの力はないと言ったんですが、ぜひやってもらいたいということで、これは、村尾次郎さんや村松剛さんにご指導をいただいて、大原康男さんと百地章さん、早稲田の小林昭三さんとか、そういう方に集まっていたいて、憲法の研究会をやることにいたしました。どういう名前にするかというときに、憲法改正というのもあまり適当ではないということで、新憲法という言葉を使ったらどうだということにしまして、「新憲法研究会」をつくりまして、『新憲法制定宣言』という本を一度作りました。これはたしか徳間書店から出したと思います。それがとっかかりですね。

新憲法について、平成四年でしたか、加瀬先生がご老体だということとで引退されて、黛「敏郎」さんが議長になられたんですね。平成五年ぐらいだったと思うんですが、総会で新憲法の本を出版して、お披露目をやりました。このときはいろいろな方に来ていただいて、村上正邦さんが一所懸命やっていました。中曽根さんもしか挨拶に来られたと思います。今度国連大使になった北岡伸一さんなんかも来てくださったんです。北岡さんの論文は新憲法制定宣言に収録してあります。もともと、あとで聞きますと、それほど積極的ではなかったようだ、という話でしたが。

伊藤 そんなことはないと思いますけれどね。彼は憲法改正論者ですからね。

小田村 そんなことから、日本会議というのは五年ぐらい前にできたんですが、日本を守る会と日本を守る国民会議というのはどうも紛らわしくて、構成員も共通の人が多いし、別々にやっているのは非効率で、一緒にした方がいいんじゃないかという議論になりました。

伊藤 人間的にも少しかぶっているんですか。

小田村 だぶっているんです。日本を守る会のほうは、だいたい明治神宮の崇敬会のほうである程度面倒を見ておりましたし、国民会議のほうは梶島君なんかが中心になってやっていたんですが、同じ目的だし、人間も一緒ですから一緒にしましょうということで日本会議をつくったわけです。それでこのときは、結局黛さんをそのまま会長ということでお願いをいたしました。副会長を、私と軍隊で一緒だった石井公一郎君と小堀さん――。

伊藤 石井さんとはそういう関係なんですか。

小田村 石井は軍隊で一緒だったんです。溝の口ですね。それからこの前もちよつと話しましたが、軍隊の仲間で勉強会を昭和五十年頃から始めたというのは、石井が発起人といいますが、その頃からまた元に戻して、そういう連中と一緒に勉強会をやっていたんです。

伊藤 日本会議はいまもかなり積極的に活動しているんですか。

小田村 そうですね。いろいろな団体が中に入っています。副会長に山本卓真さんにもなっていたいただきました。山本さんには会長をお願いしたんですが、会長は困るということで、副会長ということでお願いをいたしました。

それで黛さんが日本会議の発足の直後、設立総会をやる直前にお亡くなりになりました。いろいろ探したんですが、なかなか適当な方がおられないので、京都のワコールの塚本幸一さんに会長をお願いいたしました。この方は黛さんと非常に親しかったんですね。そんな関係があったものですから。インパールの生き残りでもありますし、塚本さんをお願いした。ところが塚本さんは、やっぱりガンだったんです。

ね。お引き受けいただいたときは大変元気になりました。ガンで一度駄目だったんだけど、プールを一日に何百回も歩いて、元気が出て来たんだというお話で、すっかり元気だったんですが、しばらくしてからまた倒れたんですね。

それからあと、日商の会頭をしていた稲葉「興作」さん、石川島播磨の方をお願いをしました。この方は日商会頭を終わると同時に自分も退きたいということで、いまは最高裁長官だった三好「達」さんにお願したんですね。

伊藤 日本会議は事務所をどこかに持っておられるんですか。

小田村 事務所は玉川線の大橋にあります。

伊藤 これはいろいろな団体が加盟している連合体みたいなものですね。

小田村 そうです、連合体みたいな感じですね。

伊藤 日本会議主催で各地で講演会などをずいぶんやっていますね。

小田村 はい、それもやっています。県ごとにいろいろつくってもらっていますね。

■「昭和の日」「建国記念日」関係の活動

伊藤 あと「昭和の日推進国民ネットワーク」というのは――。

小田村 それは、いまのまどりの日ですね。まどりの日を昭和の日に変えようという運動です。いまのままでいくと、昭和という時代が忘れられてしまう。いまでもわからなくなっている人がだんだん増えてきたんですが、やはり昭和を残したいということで、こういうネットワークをつくりました。

伊藤 うまくいきそうですか。

小田村 もう二、三回やっているんですね。三年前でしたか、参議院を通りまして衆議院に行ったんですね。衆議院でも通る直前だったんですが、通る直前に朝日新聞が暴露をしました。暴露してもどうとい

うことはなかったんですが、その直前に森総理大臣に「神の国発言」というのがありまして、野党側が硬化してしまって、衆議院が流れてしまったんです。参議院は通っていたんですがね。

それで去年は、衆議院先議で衆議院を通りまして参議院に行ったんですね。衆議院は民主党も全部賛成しまして、参議院も当然通ると思っていました。所功さんが日本の祝日についての新書の改訂版を出されたんですが、それには昭和の日が入っているんです（笑い）。ところが内閣委員会の民主党の理事だったか、国対の委員長だったか、これが日教組なんですね。それで抑えられてしまいました。参議院がどうしても通らないんです。それで継続審議になって、秋に解散がありましたから、解散で全部流れてしまったんですね。

今年はこのあいだ提案いたしましたので、衆議院が早く行けば、今年度は行けるんじゃないかと思っているんですが、参議院選挙がありますから、それまでに通さなければいけないということです。

伊藤 なんとか行きそうな感じではありませんね。

小田村 ええ、順調にいけばできるんじゃないかと思えますけれど。

伊藤 民主党が反対しなければ大丈夫なんですけれどね。

小田村 そうなんです。ただ民主党は衆議院では賛成してもらえたのですが参議院は社会党系が多いので、それがちよつと心配なんですけれど。

伊藤 このあいだ民主党は参議院でミソをつけましたからね。「日本の建国を祝う会」のほうはどうですか。

小田村 私もぼつぼつ誰かに替わってもらいたいと思っていますんですが、実は建国記念の日が制定されてから、建国を祝う会というのをやっていたわけです。主体は日本会議の人たちと神社本庁が主体ですね。これはぜひ政府の後援が欲しいということで、政府の後援を一回もらったと思うんです。国立劇場でやることが多いですね。ところが、あれは中曽根内閣のときだったか、私は直接タッチしていないので知らないんですが、後援をとるについて、いろいろ条件がだんだん厳しくなってきたんです。自民党の広報本部長でしたか、中山正暉

さんが、例えば橿原神宮の遙拝はいかんとか、紀元節の歌を歌ってはいかんとか、神武天皇の名前を出してはいかんとか、だんだん厳しくなってきました。これは大変おかしいじゃないかということで、中正暉とこちらの黛さんとが正面から対立しまして、それなら別にやろうということで、政府のほうは勝手にやりなさいということで、やめたんですね。

それで政府のほうは結局「日本の祝日を祝う会」でしたか、財団法人をつくりまして、そこでいまでもやっているんです。ですから政府でやっているのは、その財団法人ですね。それは財界にも呼びかけてつくらせたんですが、それではほかの祝日をやっているのかというと、ほかの祝日はやっていないらしいんですね。建国記念日だけらしいんです。私も一回行ったことがあるんですが、がっかりしたのは、先人の努力に感謝するということをさかんに言うんですが、神武天皇の名前が一つも出て来ないんですよ。だって二月十一日ですから、そんなのはおかしいということで、私もびっくりしたんです。そんなことで別々に分かれました。

初めは村尾次郎さんが会長をやってくださっていたんですが、村尾さんが体をこわされたし、歳も行ったから、「私に」「おまえ替わってくれ」と言われて、お引き受けることにしてもうだいぶになりますから、誰かにお願いしたいなと思っているんですが。本当は政府と一体にならないといけないと思うんですね。

伊藤 そうですね。政府が決めた祝日ですからね。

小田村 そうなんです。だいたいあのときに政府がもつとはっきりした態度をとってくればよかったんですが。

■「日本女性の会」の活動

伊藤 それから、いままでのものとちよつと毛色が違うんですが、「日本女性の会」というのは――。

小田村 これは日本会議関係です。例のジェンダーフリーの問題が非常に深刻になってきました。夫婦別姓の問題とかですね。それで、どうしてもまともな女性の声を出さなければいけないということで、二、三年前にできた会なんですね。やはり女性の方は非常に活動力がありますね。本当にすごい量ですね。ですから代議士さんなんかのところも、議員会館なんかもずっと回って、活動される。ただ男女共同参画基本法ができてから、いよいよおかしくなってきたんです。このほうがいま一番深刻な問題かもしれません。

伊藤 そうですね。これは先生、何か役職についておられるんですか。小田村 どうでしたか、私もちよつと忘れましたが、特別の役職ではないと思うんですが。

伊藤 これは誰が代表されているんですか。あるいは代表的な方は、先生がご存知の方ではどなたですか。

小田村 誰だったでしょうか。理論的なことは長谷川三千子さんとか、山谷えり子さんとか、いろいろおられるんですが、中心は誰だったか。伊藤 女性が活動的だということは、ジェンダーフリーのほうもものすごく活動的ですからね。

小田村 そうです。両方でやっているわけですね。これは大変なんです。

伊藤 あれは日教組のある部分と密着していますからね。男女共同参画云々から始まって、あれで錦の御旗をとったような感じで、それを乗り越えてやっていますからね。

小田村 そういうことですね。あの参画法ができて、男女共同参画局ですか、役所までつくって、あの審議会がそういうグループの巢窟になったわけですね。だから八木秀次君に聞きますと、あそこで作戦会議をやっているという話ですね。

■最後に――来し方行く先

伊藤 最後に、これまでの総括的なご自分の生きてこられた道、あるいは将来の日本について、お考えとか、多少一般的なお話を伺えればと思いますが、いかがでございましょうか。

小田村 私がだいたい戦前から戦後と役所の終わりまでやっていた時代は、いやなこともしばしばありましたが、それでも役人として過ごしていた時代は、やはりやりやすかったと思うんですね。だいたい昔の記憶なり習慣なりをそのまま残していた時代ですから、特にこれは不愉快だとか、体を張ってもどうこうしなくてはいけないということと比較的少なかった時代だと思います。それから先輩も、政治家の方たちも、戦前派が非常に多かったものですから、だいたいお話はよくわかっていただいたし、よかったと思います。むしろ私が役人を辞めてからの方が、社会情勢が非常に悪くなってきたなと思っております。伊藤 それは立場が変わったということではなくて、状況が変わったということですか。

小田村 状況が変わったということでしょうね。昔の時代の人が少なくなりました。残っている人も、例えば後藤田さんとか宮澤さんとか、私はちよつと特異な人だと思えます。それから野中広務さんあたりになると、昔々というんですが、あの人は戦後派であって、本当のことはわかっていない。そんなことで、すっかりそういう時代が変わってしまったな、という感じがします。

一番の転換点になったのは教科書事件だと思っています。昭和五十七年ですね。それまでは例えば教科書なんか、まず公民の教科書から始まって、歴史教科書も少し見直そうという空気が出てきておったときなんです。そのときにやられたのが、あれなんです。あの責任は非常に大きいと思うんです。ただ、最近十年ぐらいになって、経済的には不況になりましたが、国民意識は少し変わってきていると思います。憲法についての考え方もだいぶ変わりました。最近産経の社説だけでなく、読売の社説が非常によくなってきましたね。結局、これも一つの転機になったのは拉致事件です。要するに「平和を愛する諸国民の公正と信義」という言葉が全く架空のものであるということ

が、やつと国民にわかってきたということだと思っています。

ただ、何と申しまでも戦後六十年の日教組教育、マスコミの活動という情性はなかなか払拭することは難しいものですから、果たしてどうなりますか。ジェンダーフリーの問題のように、ますます悪くなっていることもありそうですし、特に女子教育ができておりませんので、子供を産むのがだんだん少なくなってくるということになると、これは大変なことだと思います。これからはやはり大変だと思っています。

将来の問題としては、一つは憲法ですね。できれば本当は帝国憲法を土台にしてそれを作り直すというのが一番いいと思うんですが、それはちよつと無理でしょうから、とりあえず第九条関係を直して、国家の自立といいますか、国防問題をはっきりさせるということですね。

もう一つは、やはり歴史認識で正確な歴史を覚えてもらいたい。自分の国の悪口を言う歴史を教える必要はまったくないんですね。これはもちろん光も影もあります。公平に判断すれば、世界に恥ずかしいくない歴史であるわけです。特に最近のデマ、捏造だけはやめてもらいたい。

このあいだ朝鮮総督府におられた大師堂「経慰」さんという方とお会いしたんですが、とにかく慰安婦問題の河野談話を撤回してくれないと、死のうと思っても死ねないと言っておられましたけれどね。本当にそうだと思いますけれどね。このあいだも、例の村山談話の廃棄を永野さんの機関誌の巻頭言に書いたんですが、そのところをはっきりさせないと駄目だと思います。今度の尖閣の上陸問題にしても情けない対応です。法治国家としてなっていないですね。そのへんから手始めに少しずつやっていかなくてはいけないと思っているわけです。

伊藤 先生、まだこれからもご活躍だと思いますので、頑張ってください。

小田村 ありがとうございます。しかしだんだん体力的には弱ってきていますから。

伊藤 別に精神的に弱っておられるわけではないですから。

小田村 できるだけ無理をしないように。

伊藤 どうも本当長いこと、ありがとうございます。

小田村 先生もどうぞお元気で、よろしくお願いいたします。

一同 どうもありがとうございました。

〈以上〉

■追記「台湾との交流」

(小田村四郎)

御質問にはありませんでしたが、最近かなり時間と力を割いているものに台湾との交流があります。

もともと台湾は私の祖父の楫取道明（楫取素彦の次男で楫取家を相続。母治子の父）が、領台直後の明治二十八年に台湾総督府学務部員として渡台し、学務部長伊沢修二（元東京音楽学校長、友人伊沢甲子麿氏の祖父）の下で台北市郊外士林の芝山巖という丘の上に学堂を設け、台湾人子弟の教育を始めました。ところが、伊沢部長が教員募集のための内地に渡っていた留守中、明治二十九年元旦に楫取以下教員六名が新年参賀のため総督府に向かう途中で、土匪に襲われて小使を含め七人が惨殺されました。これが「芝山巖事件」で、ここに「芝山巖神社」が建立され、六人の教員のほか、その後台湾教育で殉職された方々もお祀りし台湾教育界の聖地とされました。時の首相伊藤博文の揮毫になる学務官僚遭難碑や殉職教員の氏名を刻んだ碑も建てられていましたが、国民政府時代には神社は破壊されて碑も横倒しになっていました。この碑は数年前に復元されました。

そんな関係があつて私共の一家は台湾に特別の親近感を持ち、兄寅二郎は台湾の切手を収集していましたし、三兄の泰彦は海軍時代高雄に勤務したこともあり、日華断交後に設立された日華交流教育会の理事としてその研究会には毎年参加し、一年おきに台湾に出かけていました。寅二郎は多年にわたって収集した切手を台湾政府に寄贈することを希望し、その斡旋を交流教育会の事務局長の草開省三氏にお願いし、平成八年に白金の台湾代表処で贈呈式が行われ、そのあと近くの中華料理店で当時の林金莖代表の御招宴があり、私もそれに列席しました。

このような経緯はありましたが、わたしが直接台湾と交流を持つようになったのは、二つのルートです。一つは、芝山巖学堂の後身が士

林公学校となり、現在士林国民小学となっています。その同窓会が

「士林会」として昭和六十年頃から復活し、日本と台湾で懇親会を開いている由で、戦前の卒業生だった台北の陳絢暉さん（台北で日本語の「友愛グループ」を主宰しておられます）から連絡があり、「士林会」の会合を今度千葉でやるのでは是非出席して欲しい、と依頼がありました。陳さんのお話により士林公学校の元訓導をしておられた久住正司先生（船橋在住）からもお誘いを受け、平成六年十月だったと思いますが、寅二郎夫妻と私共夫婦、それに伊沢甲子麿氏を誘って参加しました。その翌年が日清戦争百年で士林國小としては芝山巖学童以来の創立百周年に当たりますので、百周年記念行事が行われることになり、士林会もそれに合わせて台北で行われ、私共も御招待を受けました。これには寅二郎夫妻と共に夫婦で参加しましたが、士林國小では当時の陳水扁台北市長も来校し、校庭では児童達の各種の演技が行われ、大変盛会でした。また展示室には浅井忠の「湯島聖堂」の絵をはじめ往時の卒業証書、成績表などが展示され、また歴代校長の写真は伊沢修二以下日本人の校長も順番に掲額されていて、歴史の古さと保存の努力に深い感銘を受けました。

いま一つのルートは、前述の日華交流教育会で、その活動に熱心だった三兄の泰彦が脳梗塞を患って参加できなくなった関係で、代わりに私が行くことを草開さんから説得されて、平成六年十二月に台南で行われた研究会に参加しました。この時は許国雄さんの高雄工商専科学校を見学し、台南で研究会の後、八田興一さんが建設した嘉南大圳（烏山頭ダム）や台中の宝覺寺を訪ねて台北から帰国しました。その後台湾での研究会は平成八年には嘉義、平成十年には基隆、平成十三年には彰化で行われ、毎回参加することになりました。その折に台湾各地を見学できましたので、台湾の地理もかなり知ることができました。

平成七年に拓殖大学に参りましたが、拓大の前身は台湾協会学校でしたから、ここでもまた一つ台湾とのつながりができたわけです。台湾出身の卒業生も多く、中には一九四七年の二・二八事件で国民党軍に

殺害された先輩もいます。平成十年夏に交流教育会の研修会が基隆であつた時には、台北、台中、高雄を廻って拓大OBの方々と交歓して来ました。平成十二年が拓大創立百周年で、その記念行事として外国の要人をお招きしたいとの議が起こり、その前々年にイギリスのサッチャー元首相にシンポジウムの御出席を頂いたのですが、拓大と関係の深い台湾の李登輝総統をお招きできないかという声が起こりました。李登輝さんはこの年で総統を退任されると言明しておられましたので、私人になれば来日もできるのではないかと思つたのですが、政治情勢は容易ではありませんでした。駐日代表処と相談して名誉博士号を百周年記念として贈呈し、その機会に記念講演をお願いするという案を考えたところ、総統在任中に一度お会いして欲しいということでしたので、この年の四月に渡台し、総統府で李登輝さんにお目にかかりました。李総統は後藤新平民政長官の施政や八田與一氏の烏山頭ダムの建設、また日本の教育事業など日本統治を絶賛されていました。

ところが、李総統が総統職を退任され、国民党主席を辞任された後でも、日本政府の姿勢は頑ななままで、九月に行われた中嶋嶺雄先生のアジア文化フォーラムでも李登輝さんのビザは発給されず、到底来日は無理だと判断しました。しかし名誉博士号の贈呈は既に約束していましたので、現地で行うことにし、この年の十二月に台北で私から贈呈する贈呈式を行いました。李登輝さんも大変喜ばれ、これは日本のためにも拓大のためにも大変良かったと思っております。

このような関係で台湾との交流を行っている団体に度々顔を出すようになり、交流教育会のほか、日華文化協会、亜東親善協会、マスコミ総合研究所、アジア問題懇話会、日台関係研究会、高座日台交流の会などに関係しています。また平成十四年の暮に阿川弘之さんを会長にして発足した日本李登輝友の会の副会長になったのですが、この五月に阿川さんが高齢を理由に辞任され、私が会長にさせられました。このほか学習院女子大の久保田信之さんのアジア太平洋交流学会の会長も勤めています。昨年九月に李登輝さんの主動で行われた「台湾正名運動」には日本側の代表として参加して来ました。猛暑の中、二十

万人を超える大集会で大変な熱気でした。

台湾は近隣諸国の中では最も親日的な国であり、また日本の安全保障にとって不可欠な地域です。昭和四十四年の佐藤・ニクソン共同声明の内容は、今日といえども全く変わらないばかりか、益々重要になって来ていると思います。幸いに今年の総統選挙で陳水扁総統の再選が確定しましたので、台湾が大陸に吸収される心配はまずなくなりました。今後、日台の正規の国交関係が確立するために努力していきたいと思つています。これは我が国にとって北朝鮮との国交正常化よりも遥かに重要なことと確信しています。

小田村 四郎

オーラルヒストリー

著 述 ・ 寄 稿 目 録

【小田村四郎 著述・寄稿目録】

〈作成 小田村四郎〉

〔注記〕

- 一、退官後の昭和五十三年から平成十六年七月までの寄稿・著述を収録したが、整理不良のため漏れたものがあり、未定稿とした。
二、年代順に列記したが、後に著書に収録したものはその旨記した。

著書

単著

- 「憲法と自衛権」（日本戦略研究センター、昭和五十九年、「どう守る、日本の安全」に一部収録）
「情勢の変化に対応する安全保障政策の抜本的見直し」（日本戦略研究センター、昭和六十三年）
「占領後遺症の克服」（社）国民文化研究会刊、平成七年）

共著

- 「こうすれば日本は守れる」（日本戦略研究センター編、原書房、昭和五十六年、所収論文「防衛論議の初歩的誤りを正す―防衛に対する政治姿勢について―」）
「タブーへの挑戦」（日本戦略研究センター編、日本工業新聞社、昭和五十八年、所収論文「文民統制論」、「防衛計画大綱の基本的欠陥」）
「どう守る、日本の安全」（日本戦略研究センター編、PHP研究所、昭和六十年、所収論文「憲法と自衛権―政府解釈の非合理性批判」）
「さらば決断なき国家」（日本政策研究センター編、オーエス出版社、平成三年、所収論文「政府は憲法解釈をあらためよ（憲法の制約）は存在しない」）

「日本国新憲法制定宣言」(日本を守る国民会議、徳間書店、平成六年)

「夫婦別姓大論破!」(八木秀次、宮崎哲弥編、洋泉社、平成八年、所収論文「ソ連の『革新的』実験の大惨事」)

「新憲法のすすめ」(大原康男、百地章編、明成社、平成十三年)

「日本人はなぜ戦後にたちまち米国への敵意を失ったのか」(西尾幹二十路の会編、徳間書店、平成十四年)

「今、この国を救うもの―教育改革―」(日本の教育改革を進める会編、善本社、平成十四年)

「平成新選百人一首」(宇野精一編、普及版文藝春秋、正統表記版、明成社、平成十四年)

「こんな憲法にいつまで我慢できますか」(小田村四郎、大原康男他、明成社、平成十六年)

寄稿・講演録

「学徒出陣のこと―東大緑会「出陣賦」について」(国民文化研究会、月刊「国民同胞」昭和五十三年十月号、「占領後遺症の克服」に補筆収録)

「八月十五日を想う」(週刊「言論春秋」昭和五十四年八月六日)

「『町人国』論」(「言論春秋」昭和五十五年四月二十八日)

「奥野法相の涙」(「言論春秋」昭和五十五年十二月二十九日)

「制服はなぜ政治不信か」(「言論春秋」昭和五十六年三月二日)

「行政改革と防衛問題」(週刊「朝雲」昭和五十六年四月二十三日)

「『逃げ』の姿勢と『国民合意』」(「朝雲」昭和五十六年五月二十一日)

「憂うべき防衛問題」(「言論春秋」昭和五十六年五月二十五日)

- 「行財政改革の理念」(旬刊「言論人」昭和五十六年六月十五日)
- 「八月十五日のことろ」(「朝雲」昭和五十六年八月二十日)
- 「『総合安全保障論』の破綻」(「朝雲」昭和五十六年九月十七日)
- 「護るべきもの」(「朝雲」昭和五十六年十月十五日)
- 「『脅威』不感症」(「言論春秋」昭和五十六年十一月九日)
- 「必要『最大限』の防衛力」(「朝雲」昭和五十六年十一月十九日)
- 「開戦記念日に想ふ」(「朝雲」昭和五十六年十二月七日「占領後遺症」に収録)
- 「過ちを繰り返すな―斉藤(隆夫)代議士の勇氣と卓見―」(「防衛政策の具体的内容を示せ」「言論春秋」昭和五十七年一月四日)
- 「防衛費の歯どめ」(「朝雲」昭和五十七年一月二十一日)
- 「『脱脅威論』のまぼろし」(「朝雲」昭和五十七年二月十八日)
- 「憲法『改正』是非論」(「朝雲」昭和五十七年三月十八日)
- 「国家と教育」(「学校経営」昭和五十七年五月号)
- 「戦没者追悼の日」(「言論春秋」昭和五十七年五月二十四日)
- 「『占領時代』に逆戻り―奇怪な教科書問題政府見解―(許し得ぬ教育マル生)」(「言論春秋」昭和五十七年十月四日)
- 「痛恨極まりない第二の敗戦―奇怪な教科書問題政府見解―」(「国民同胞」昭和五十七年十一月号、「占領後遺症」に収録)
- 「シーレーン防衛と集団自衛権」(「言論春秋」昭和五十七年十二月二十日)
- 「侵略戦争史観批判―歴史を教へるとは―」(週刊「月曜評論」昭和五十八年四月十一日)
- 「『守るべきもの』について」(「国民同胞」昭和五十八年七月号、「占領後遺症」に収録)
- 「教科書を国定化せよ」(「言論春秋」昭和五十七年七月九日)

- 「行革は自己責任原則で―元凶は『滅公奉私型』精神―」（『世界日報』昭和五十八年七月三十一日）
- 「戦後とは何か―祖国生命への回帰を―」（国民文化研究会昭和五十九年八月夏季研修合宿講義、同会刊「日本への回帰」第二十集昭和六十年に収録）
- 「郵政省廃止論」（『言論春秋』昭和五十九年九月十七日）
- 「靖國神社問題」（『言論春秋』昭和五十九年十月二十九日）
- 「『大東亜戦争』を復活せよ」（『言論春秋』昭和五十九年十二月二十四日）
- 「教育自由化論の虚妄」（『言論春秋』昭和六十年三月四日）
- 「『祖国防衛義務』を教育基本法に明記せよ」（教科書正常化国民会議隔月刊「教育正論」第九号、昭和六十年三月）
- 「教科書国定制度を採用せよ」（『教育正論』第十号、昭和六十年五月）
- 「占領政策と現代日本」（昭和六十年八月国民文化研究会夏季研修合宿講義「占領後遺症」に収録）
- 「教育自由化論と日教組（臨教審答申批判）」（『言論春秋』昭和六十年九月九日）
- 「自民党護憲論者に問ふ」（『言論春秋』昭和六十年十二月六日）
- 「教科書国定論」（『教育正論』第十四号、昭和六十一年一月）
- 「教科書から『日本』の呼称を追放せよ」（『教育正論』第十五号、昭和六十一年三月）
- 「中国の内政干渉は条約違反だ―」A級「靖國合祀は当然の行為」（『言論春秋』昭和六十一年三月十七日）
- 「『増岡陸将処分事件の愚を繰返すな』―自衛隊広報、公務員の発言規制、軍隊の指揮統率及び軍人の名誉等々、OBとして防衛庁に要望する―」（『月曜評論』昭和六十一年六月十六日）
- 「歴史を流冒流する中曽根発言」（日本青年協議会「祖国と青年」昭和六十一年六月号）
- 「外務省の越権行為を糾弾する」（『教育正論』第十八号、昭和六十一年九月）
- 「国家主権を放棄してよいのか―土下座外交を批判す―」（『言論春秋』昭和六十一年九月二十九日）

「国家存立の基盤を破壊する土下座外交」（『国民同胞』、昭和六十一年十一月号、「占領後遺症」に収録）

「観念的平和論の元凶・文部省『学習指導要領』―防衛を否定する中学校社会科教科書」（『教育正論』第二十号、昭和六十二年一月）

「先人の志を裏切る亡霊・東京裁判史観の呪縛を打破せよ」（『言論春秋』昭和六十二年二月九日）

「教科書検定の堅持、強化を―臨教審第一部会案は日共の思う壺」（『世界日報』、昭和六十二年二月二十一日）

「誰が東條英機を裁けるのか」（『諸君！』、昭和六十二年三月号）

「所謂“戦犯”は犯罪者ではない―西義之氏の批判に答へる」（『言論人』昭和六十二年四月五日）

「靖國議論を深めるために」（『諸君！』昭和六十二年五月号）

「“A級戦犯”の刑死は『戦死』と異ならない」（『祖国と青年』昭和六十二年九月号、「“A級戦犯”の刑死は『戦死』である」と改題して「占領後遺症」に収録）

「『終戦の詔書』こそ戦後再出発の原点」（『祖国と青年』昭和六十二年十月号、「占領後遺症」に収録）

「防衛を否定する亡国教科書の実態―六十三年度高校『現代社会』の安保・防衛問題の記述―」（『教育正論』第二十五号、昭和六十二年十一月）

「祖国防衛義務の教育を」（旬刊『世界と日本』内外ニュース・特集国防論、昭和六十二年度版）

「情民奨励の大合唱」（『言論春秋』、昭和六十三年四月十八日）

「歪められる愛国の歴史―父祖の業績正しく評価を―」（『世界日報』、昭和六十三年五月二十八日「占領後遺症」に収録）

「『侵略』問題を論議せよ」（『言論春秋』昭和六十三年七月二十五日）

「文部省は毅然として対処せよ」（『教育正論』第二十九号、昭和六十三年七月）

「小・中学校 社会科指導要領改正の問題点」（『教育正論』第三十号、昭和六十三年九月）

「共産党の天皇誹謗と教科書―学習指導要領改正の重大性―」（『言論春秋』、昭和六十三年十二月十二日）

「今上陛下の御聖徳を仰ぐ」（昭和六十三年十月三十一日記、（財）修養団「向上」平成元年二月号、「占領後遺症」に収録）

「政府・文部省の責任を問ふ―なぜ『国を守る』教育を拒否するのか」(「言論春秋」、平成元年三月二十七日)

「旧態依然たる安保・防衛問題の記述―国を守る心を忘れた空想的平和主義―」

(「教育正論」第三十三号、学習指導要領改正案特集、平成元年三月)

「日教組ブックレット『総論篇』批判」(「教育正論」第三十五号、平成元年七月)

「『公民的分野』安保・防衛問題の記述について」(「教育正論」第三十六号、新中学校社会科教科書特集、平成元年九月)

「戦争責任論に対する疑問―国民は自国の戦争を裁くことができるのか―」(平成元年十月記、「占領後遺症」に収録)

「消費税論議に思うこと」(財)「行政管理研究センター」季刊行政管理研究」第四十八号、平成元年十二月)

「なぜ教育政策で論争しないのか」(「教育正論」第三十六号、平成二年三月)

「歴史認識の共有はあり得ない―盧大統領の訪日問題について―」(「国民同胞」平成二年七月号、「占領後遺症」に収録)

「NOと言へる日本―NOは中国と韓国に―」(「言論春秋」平成二年七月二十三日)

「一九九〇年代の安全保障―普通の国家になること―」(防衛学会「新防衛論集」、第十八卷第二号、平成二年九月)

「日教組は教育団体ではない」(「教育正論」第四十二号、平成二年九月)

「憲法と集団的自衛権」(防衛法学会「防衛法研究」第十四号、平成二年十月 内外出版)

「天下に恥を曝すなかれ―愚劣極まる『国連平和協力法』―」(「言論春秋」平成二年十月二十九日)

「『集団的自衛』は国際的義務だ」(「諸君!」平成二年十一月号)

「即位の礼と大嘗祭の盛儀を迎えて」(全国自衛隊父兄会「おやばと」平成二年十一月十五日)

「年頭に当たって思ひつくこと」(日本を守る国民会議「日本の息吹」平成三年一月号)

「理性の喪失」(「国民同胞」平成三年三月号)

「憲法と国連憲章」(「言論春秋」平成三年三月四日)

- 「国民と自衛権―祖国防衛義務―」（明治神宮崇敬会「代々木」平成三年三月号）
- 「『特殊国家』から脱却せよ―独断的憲法解釈の是正を―」（『日本の息吹』平成三年四月号）
- 「掃海艇派遣に思ふ」（『言論春秋』平成三年五月二十七日）
- 「国民道徳の体现者としての自衛隊」（『おやばと』平成三年七月十五日）
- 「自衛の戦としての大東亜戦争」（『代々木』平成三年九月号）
- 「旧態依然たる社会科教科書―憲法の記述について―」（『教育正論』第四十八最終号、平成三年十月）
- 「大東亜戦争の真義」（『日本の息吹』大東亜戦争五十周年記念、平成三年十一月号）
- 「激動する世界と空論に溺れる日本―PKO法案と憲法解釈の非常識―」（『国民同胞』平成三年十二月号）
- 「陛下の御訪中に反対する―悔いを千載に残すなかれ―」（『言論春秋』平成四年二月十日）
- 「安易な対中迎合を戒める―天皇訪中論争に寄せて―」（『月曜評論』平成四年三月九日）
- 「独立主権回復四十周年」（『代々木』平成四年三月号）
- 「『準禁治産商人国家』からの脱却」（『祖国と青年』平成四年四月号）
- 「恒久的従属国家の危険―御訪中要請に隠された中国の意図―」（月刊『カレント』平成四年五月号）
- 「帝国憲法への無理解を憂ふ―誤解に充ちた小林節氏の論―」（『月曜評論』平成四年六月一日）
- 「天皇陛下御訪中問題について―官房長官への意見陳述要旨―」（平成四年八月、「占領後遺症の克服」に収録）
- 「『精神の自由』の回復を」（『国民同胞』平成四年八月号、「占領後遺症」に収録）
- 「対中外交は毅然たる姿勢で―天皇陛下御訪中決定―」（『世界日報』平成四年九月五日）
- 「残された『戦争責任』（『代々木』平成四年九月号）
- 「天皇陛下の御訪中決定を悲しむ」（『国民同胞』平成四年十月号、「占領後遺症」に収録）

- 「再論・帝国憲法と立憲君主制―小林教授の反論に答へる―」（『月曜評論』平成四年十月十九日）
- 「許し難き中国政府の非礼―御言葉の真義と併せて国辱外交の責任を問ふ―」（『国民同胞』平成四年十二月号、「占領後遺症」に収録）
- 「国威失墜の一年―平成四年回顧」（『おやばと』平成四年十二月十五日）
- 「『家』と『国』を崩壊させる夫婦別姓」（『代々木』平成五年三月号）
- 「美を感じる心と皇室祭祀―皇太子殿下の御婚約を祝ぎ奉る」（『言論春秋』平成五年二月十五日）
- 「皇太子殿下の御婚約を祝ぎて」（月刊『カレント』平成五年三月号）
- 「最近の憲法論議に寄せて―改憲の本義を忘れてはならない―」（世界経済調査会『世界経済』平成五年五月号）
- 「日本国憲法の前文について」（『国民同胞』平成五年六月号、「占領後遺症」に収録）
- 「学徒出陣五十年」（『代々木』平成五年九月号）
- 「祖国を辱めた逆臣細川首相―許されない歴史の歪曲―」（『日本の息吹』平成五年九月号）
- 「許されぬ歴史の歪曲―細川首相に問ふ―」（『月曜評論』平成五年十月十一日）
- 「祖国の将来を深く憂へる―平成五年の回顧―」（『おやばと』平成五年十二月十五日）
- 「歴史に対する誇りと確信の回復―祖国の名誉を護るために―」（『日本教育』平成六年一月号、「占領後遺症」に収録）
- 「憲法第一条は『天皇』でなければならぬ―『国民主権』規定の有害無益性―」（『国民同胞』平成六年二月号）
- 「国家の名誉を守ること」（『代々木』平成六年三月号）
- 「大東亜戦争に“侵略意志”はあったか―宣戦の詔書と大東亜共同宣言―」（『正論』平成六年三月号）
- 「憲法改正問題について」（平成五年九月十二日講演録。「動向」平成六年四月号）
- 「『特攻隊慰霊顕彰会』始末記」（『文武新論』平成六年四月十日）
- 「『戦没者追悼平和祈念館』の危険性」（靖國神社『靖國』平成六年六月号）

「自虐史観の行きつくところ」(「日本の息吹」平成六年八月号)

「八月十五日の心に還れ」(「代々木」平成六年九月号)

「国家存立の基盤を破壊―謝罪不戦決議―」(「国民新聞」平成六年九月二十五日)

「日本はドイツではない―ヴァイツェッカー演説について―」(「国民同胞」平成六年十月号)

「最後に守るものは何か―三島由紀夫を乗り越えられない平成の政治家たち―」(「祖国と青年」平成六年十一月号)

「共和制志向と自衛権の否定―読売改憲試案の危険性―」(「月曜評論」平成六年十二月五日)

「戦後最大の危機となる平成七年」(祖国日本の会「日本」平成七年一月十日)

「『不戦』の濫用を戒める」(「代々木」平成七年三月号)

「避けられなかった日米開戦」(産経新聞「アピール」欄、平成七年三月十七日)

「不戦決議の標的は『天皇制』の否定である―『反省』『謝罪』の欺瞞性―」(「国民同胞」平成七年四月号)

「『反省』『謝罪』の偽善性と欺瞞性」(日本世論の会「世論」平成七年四月号)

「侵略戦争断罪への反証―刊行された『東京裁判却下・未提出弁護側資料』―」(時事評論「石川」、平成七年四月二十日)

「なぜ反省・謝罪決議をいそぐのか―自民党よ国を滅ぼすことなかれ―」(「日本の息吹」平成七年五月号)

「『教育責任』について」(大川周明顕彰会「秋霜」第二十一号、平成七年十二月)

「戦後体制からの脱却―二十一世紀へ向かふ日本の条件」(岡山国民文化懇話会「まほろば」(上)平成七年十二月号、(下)平成八年一月号)

「日本の『独立』を組むこれだけの条件」(月刊「次代人」、第三通信社、平成七年十二月号)

「建国記念の日と独立国家の条件」(橿原神宮「かしはら」平成八年一月一日)

「夫婦別姓法案の上程を阻止せよ」(「日本の息吹」平成八年一月号)

「家庭崩壊招く夫婦別姓法案」(産経新聞「アピール」平成八年二月二日)

- 「社会の頽廢を招く夫婦別姓」(産経新聞「談話室」平成八年二月二十日)
- 「夫婦別姓は国家を崩壊する」(「日本の息吹」平成八年三月号)
- 「大日本帝国憲法と日本国憲法」(「明治聖徳記念学会紀要」復刊第十七号、平成八年四月)
- 「インタビュー―大東亜戦争、憲法、三島由紀夫、現代日本の病巣のことなど―」(四宮政治文化研究所「政治文化情報」平成八年四月号)
- 「言うべきを言つて親善を」(平成八年三月二十九日、竹島問題緊急国民集会での発言、「動向」平成八年五月号)
- 「危機管理内閣は」内務省「の復活で…」(平成八年四月二十五日、今井久夫氏インタビュー、月刊「官界」平成八年六月号)
- 「自衛権行使は憲法の正しい解釈」(産経新聞「アピール」平成八年五月十一日)
- 「歴史の真実―昭和史私観」(平成八年五月十五日拓殖大学公開講座講義、拓殖大学「世界の中の日本」XVI平成九年三月)
- 「昭和史をどうみるか」(平成八年二月十四日「坂垣正議員を励ます集い」講演、「坂垣正後援会報」第二十二号、平成八年六月十一日)
- 「夫婦別姓は家庭を崩壊する」(平成八年七月十九日交詢社常例午餐会講演、「交詢雑誌」第三八九号)
- 「文部省の検定能力を復活させよ」(産経新聞、「アピール」平成八年八月五日)
- 「忍耐も限度の」反日・自虐外交」(細川隆一郎時事対談、「ゼンボウ」平成八年九月号)
- 「東京裁判の傷痕」(「国民同胞」平成八年九月号)
- 「拓殖大学と大陸政策」(「社」国際善隣協会講演平成八年五月二十四日、「善隣」平成八年十月号)
- 「領土問題と教科書問題」(平成八年十一月二十一日記、「全国自衛隊父兄会二十年史」に所収)
- 「極東有事への対応と集団的自衛権」(平成八年十一月二十日、「財」日本国防協会講演、「安全保障」平成九年一月号)
- 「『亡国教科書』正常化の方途」(「正論」平成九年一月号)
- 「講演録・日本人と承認必謹」(平成八年十二月八日大詔奉載五十五年祭講演、「アジアの風」アジア・フォーラム、平成九年一月号)
- 「『国籍条項撤廃』は国家の自殺行為ではないか」(産経新聞「問題提起」平成九年一月二十七日)

- 「独立主権を喪失した日本」(「国民同胞」 平成九年三月号、「カレント」 平成九年三月号)
- 「航空碑前祭懇親会祝辞」(航空碑奉賛同人会「鎮魂」 第四号、平成九年四月十八日第二十一回全陸軍航空部隊・碑前祭懇親会)
- 「占領政策と戦後民主主義」(平成九年五月十四日拓殖大学公開講座講義、「世界の中の日本」^{XVI}、平成十年三月)
- 「国家意識を喪失した最高裁―矛盾と偏見と傲慢の判決―」
(「国民同胞」 平成九年六月「国民同胞」 附録、政教関係を正す会編「愛媛玉串料判決批判」 平成九年七月、所収)
- 「教科書問題について」(平成九年六月二十八日、日本協会講演、「国乃礎」 平成九年八月号)
- 「祖国存亡の危機に松陰を憶ふ」(「月刊日本」 平成九年八月号)
- 「国籍条項撤廃を放置するな」(「日本の息吹」 平成九年九月号)
- 「独立主権回復の道」(「日本の息吹」 平成九年十二月号)
- 「行革原案は白紙撤回せよ」(「カレント」 平成十年一月号巻頭言―無記名)
- 「私の防衛論・先ず国家の独立を」(航空自衛隊連合幹部会「翼」 平成十年新春号)
- 「当用憲法としての日本国憲法」(平成十年五月二十七日拓殖大学公開講座講義、「世界の中の日本」^{XVII}、平成十一年三月)
- 「史実を正しく実証する場に」(拓殖大学創立百年史編纂室、拓殖大学百年史研究1・2号合併号発行の辞、平成十一年三月)
- 「対談・戦後思潮を糺す」(井尻千男対談、拓殖大学日本文化研究所「日本文化」 創刊号、平成十一年秋)
- 「『志』ということ」(日本の教育改革を進める会「啐啄」 第七号、平成十一年二月)
- 「日本は属国か―独立主権を回復せよ―」(「自由」 平成十一年二月号)
- 「夫婦同姓でも『家』存続可能」(産経新聞「アピール」 平成十一年三月三十日)
- 「現代日本の『病根』と戦前の思想問題」(「国民同胞」 平成十一年五月号)
- 「ナショナル・アイデンティティの構築と明治国家―特に教育勅語について―」
(平成十一年五月二十六日拓殖大学公開講座講義、「世界の中の日本」^{XIX}、平成十二年三月)

- 「対日外交姿勢の禍害」(平成十一年六月二十五日関東日華親善協会講演、「日華親善」第二五号、平成十一年八月)
- 「日本は再生できるか」(平成十一年十月十三日南方陸軍経理教育部同窓会講演、「顕誠」第四六号、平成十一年十二月)
- 「外国人の地方参政権法案を阻止せよ」(「漁火新聞」平成十一年十一月号)
- 「主権回復へ前進の年」(「日本の息吹」平成十二年一月号巻頭言)
- 「憲法論議で忘れられているもの——大日本帝国憲法について——」
(平成十二年五月二十四日拓殖大学公開講座講義、「世界の中の日本」XX、平成十三年三月)
- 「亡国の違憲立法——外国人参政権を阻止しよう——」(「日本の息吹」平成十二年十月号巻頭言)
- 「日本の台湾統治と建学の精神」
(平成十二年六月二十四日拓殖大学政治経済研究所講演、
同研究所紀要「政治経済・法律研究」拓殖大学百周年記念特別号、平成十二年十月)
- 「安全保障軽視許されぬ日台両国」(日華文化協会「桜梅通信」平成十三年夏季号)
- 「日本の憲法はいかにあるべきか——明治憲法の功罪——」
(平成十三年五月二十三日拓殖大学公開講座講義、「世界の中の日本」21、平成十四年三月)
- 「『国体』か『天皇制』か——松本健一氏の言語感覚を問う——」(「発言者」読者投稿欄、平成十三年六月号)
- 「大日本帝国憲法について(1)——憲法論議で忘れられているもの——」(「国民同胞」平成十三年十月号)
- 「旧態依然たる欠陥国家曝す」(「国民新聞」アフガン問題と日本、平成十三年十一月二十五日)
- 「随筆・相撲と私」(「財界」平成十四年新春特別号)
- 「義兄の呟き」(「諸君!」大東亜戦争開戦六十周年、平成十四年一月号)
- 「なぜ『自衛権』を認めないのか」(「諸君!」平成十四年三月号)
- 「国立慰霊施設の建設を阻止せよ」(興亜観音を守る会「興亜観音」第十五号、平成十四年四月)
- 「随想・昭和二十年八月十五日前後」(日本戦略研究フォーラム季刊「J F S S」平成十四年十月)

「主権回復五十周年を迎えて」(平成十四年四月十七日、日本国防協会講演、「安全保障」平成十四年七月号)

「八月十五日のころ—国家生命の連続性の回復—」(「靖國」平成十四年八月号)

「有事諸法制と自衛権について—政府解釈は無知と独断にすぎない—」

(平成十四年七月四日講演、(財)国際東アジア研究センター、「東アジアへの視点」二〇〇三年三月号)

「靖國神社の危機—亡国的『追悼懇』を即時解散せよ—」(祖国日本の会「日本」平成十四年八月)

「伝統文化の危機と母性の復権」(日本弘道会「弘道」平成十四年十月号、「国民同胞」平成十五年三月号に転載)

「宮沢官房長官談話は無権限の違法行為である」(「正論」平成十四年十二月号)

「大日本帝国憲法について(2)—諸批判の吟味(1)—」(「国民同胞」平成十四年三月号)

「大日本帝国憲法について(3)—諸批判の吟味(2)—」(「国民同胞」平成十四年四月号)

「大日本帝国憲法について(4)—諸批判の吟味(3)—」(「国民同胞」平成十四年五月号)

「大日本帝国憲法について(5)—帝国憲法の欠陥—」(「国民同胞」平成十四年六月号)

「主権回復五十周年と占領による歴史の歪曲」

(平成十四年六月二十六日拓殖大学公開講座講義、「世界の中の日本」22所収、平成十五年三月)

「自虐史観の克服」(平成十五年一月八日拓殖大学公開講座講義、「世界の中の日本」22、平成十五年三月)

「季登輝氏の『武士道』論」(「啐啄」第二十九号、平成十五年三月)

「日米台同盟論」(「桜梅通信」平成十五年春号)

「追悼懇『報告書』批判—内政干渉に屈伏し、英霊を侮辱し、国防を否定する謝罪施設—」

(首相の靖國神社参拝を求める国民の会「靖國神社を守ろう!—国立追悼施設に反対する」所収、平成十五年七月)

「対談：主権・尊厳・国益を保守する国策を追求せよ」

(対談者井尻千男、拓殖大学日本文化研究所季刊「日本文化」平成十五年春号、平成十五年四月)

「三瀦信吾先生の御遺徳を偲ぶ」(「三瀦修学院」八重垣「第六号、平成十五年七月」)

「国士椋木瑳磨太先生の遺徳を偲ぶ」（『秋霜』第三十六号、椋木瑳磨太追悼特集、平成十五年七月）

「学徒出陣」当時を回想して」（『祖国と青年』学徒出陣六十周年、平成十五年十月号）

「論外の合祀取下げ論―浦田雅治氏『いわゆるA級合祀考』批判―」（『日本郷友連盟「郷友」』平成十五年十月号（上）、十一月号（中）、十二月号（下））

「村山談話を速やかに廃棄せよ」（『日本戦略研究フォーラム季刊「JFSS」』平成十六年一月号）

「『A級』分祀論といふ亡霊」（『日本』平成十六年四月）

「靖國神社問題」（『アジア太平洋交流学会』会報、平成十六年二月号）

「依然として続く対中屈従外交」（『アジア太平洋交流学会』会報、平成十六年四月号）

「大失敗の小泉再訪朝」（『アジア太平洋交流学会』会報、平成十六年六月号）

「日本の対アジア外交のあり方」（平成十六年五月八日アジア問題懇話会講演、問題と研究出版（株）「問題と研究」平成十六年七月号）

小田村 四郎

オーラルヒストリー

登場人名一覧

登場人名一覧

(数字はページ数ではなく、何回目のオールラブルヒストリーに登場したかを示す)

【あ】

阿南 惟幾	1
愛知 揆一	2、7、8
芦田 均	2
荒船清十郎	11、12
秋山 昌広	8
青鹿 明司	8、9
青木 盛夫	5
赤羽 桂	6、7
赤城 宗徳	4、5、6
赤沢 璋一	5
相沢 英之	4、5、6、7、8、9、10
朝海浩一郎	1、8
天城 勲	7
天川 勇	5
天野 貞祐	4
有田 圭輔	12

【い】

伊沢 修二	4
伊沢甲子麿	4、6、9、10
伊東 正義	13
伊藤 隆	11
伊藤 圭一	12
伊能繁次郎	5
井尻 千男	13

井沢 正忠	13
井内慶次郎	8
磯村 応	1
磯村 音介	1
磯村 秀策	1
磯村 利水	1
一万田尚登	3、11
稲葉 修	11
稲葉 興作	13
岩間英太郎	7、8
岩動 道行	4
岩尾 一	4、5、6
市川 良美	11
糸川 英夫	7
石井公一郎	13
石橋 湛山	4
石原 周夫	4、5、7
石原 信雄	13
石川 周	9
石川 貫之	11
石川 達三	1
石田 正	4
石田 捨雄	10
石毛 昭	11
石野 信一	11
池田 憲彦	13
池田 満枝	7

岡田 啓介	奥野 誠亮	奥村 喜和男	越智 通雄	【お】	江藤 淳	江川 卓	江崎 真澄	江口 健司	遠藤 三郎	【え】	梅本 純正	内海 倫	植木 庚子郎	植村 甲午郎	植松 守雄	上田 泰弘	上田 克郎	受田 新吉	浦 茂	宇野 喜代之介	【う】	飯島 宗一	板垣 正	猪瀬 直樹	池尾 芳蔵	池田 勇人
-------	-------	--------	-------	-----	------	------	-------	-------	-------	-----	-------	------	--------	--------	-------	-------	-------	-------	-----	---------	-----	-------	------	-------	-------	-------

							9、						7、			3、		4、						8、		2、
2	6	1	12		5	4	10	9	1		12	9	10	8	2	11	6	13	5	1		12	13	11	1	8

大内 兵衛	大島 寛一	大槻 文平	大塚 久雄	大谷 邦夫	大倉 真隆	大森 とく子	大森 彌	大出 俊	大原 康男	大河内 一男	大河原 良雄	大井 篤	太田 薫	小和田 恒	小野田 寛郎	小野清 一郎	小田村 有芳	小田村 寅二郎	小田村 篤太郎	小田村 泰彦	小田村 治子	小田村 五郎	小田村 希家	小田村 嘉穂	小田村 たか	小川 哲雄	小佐野 賢治	沖 武夫	岡本 道雄
-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	------	------	-------	--------	--------	------	------	-------	--------	--------	--------	---------	---------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	-------	--------	------	-------

																		1、											
		11、															1、	7、		1、									
9	4	12	2	11	2	9	13	13	13	2	12	5	11	13	1	2	2	13	1	13	2	1	2	1	2	13	10	1	12

川上秀正	川井行雄	菅野誠	神川彦松	上林英男	春日一幸	香川鉄蔵	金森徳次郎	金丸信	鎌倉節	梶島有三	海堀洋平	海法泰治	海部八郎	海原治	河合良成	河合三良	加藤陽三	加藤紘一	加藤一郎	加藤寛	加地夏雄	加瀬俊一	【か】	尾田源行	尾崎朝夷	尾崎英二	尾崎護	大平正芳
------	------	-----	------	------	------	------	-------	-----	-----	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	-----	------	------	-----	------	------	------	-----	------

9	12	7	6	7	8	7	11	13	13	13	8	11	10	11	12	13	7	13	7	13	11	13							

木内信胤	木田宏	木村篤太郎	木村武雄	木村汎	木下薫	北島武雄	北村謙一	北山愛郎	北岡伸一	賀賀健三	岸本謹之助	岸信介	【き】	賀屋正雄	賀屋興宣	箕克彦	楫取美寿子	楫取久米次郎	楫取道明	楫取素彦	片山哲	片桐良雄	片岡正巳	柏木雄介	川島正次郎	川島武宜	川島広守
------	-----	-------	------	-----	-----	------	------	------	------	------	-------	-----	-----	------	------	-----	-------	--------	------	------	-----	------	------	------	-------	------	------

3、	7、		9、			3、																							
4	8	4	12	13	11	4	5	8	13	13	2	6																	

[illegible][illegible]

佐藤喜一郎 佐藤喜一 佐藤毅 佐藤喜一 齋藤正 齋藤國二朗 坂田道太 堺利彦 酒井俊彦 西郷隆盛 沢田廉三 沢木正男 迫水久常 里見岸雄

【し】

塩見俊二 塩野宏 塩野谷九十九 下条進一郎 下村治 下村海南 志垣民郎 汐見三郎 柴田護 重光葵 重村智計 城内実 清水伸 椎名悦三郎 島田豊

9、
10、
11、 6、 3、 4、 3、 7、
12 12 11 9 13 5 6 2 5 1 7 9 7 13 3 4 2 5 4 9 4 4 10 10 8 5 5 7

島田喜仁 嶋崎均 嶋中鵬二 嶋中晨也 幣原喜重郎

【す】

砂田重民 住田正二 須藤朔 杉寿 杉文 杉千代 杉滝子 杉道助 杉丙三 杉梅太郎 杉山知五郎 杉百合之助 澄田智 陶山皓 末弘嚴太郎 末次一郎 鈴木一 鈴木英 鈴木孝雄 鈴木俊一 鈴木善幸 鈴木貫太郎 鈴木哲太郎

12、 1、 8、 1、 1、 4、 2、
2 2 13 8 2 2 2 4 2 12 13 2 7 2 2 2 1 2 1 1 11 5 9 2 1 1 8 3

[illegible][illegible]

堤 康次郎
筒井 良三

【て】
寺本 熊市
貞家 克己

【と】
所 功

朝永振一郎

東郷 文彦

東郷 平八郎

東条 猛猪

東畑 四郎

東畑 精一

東條 英機

東條 敏夫

栃内 一彦

堂場 肇

道正 邦彦

【な】

永野 茂門

夏目 晴雄

成田 頼明

中井 亮一

中山 正暉

中山 伊知郎

中西 一郎

中川 正義

10 7

11 1

13

7

12

13

4

11

2

2

11

7

4

12

13

1

13

5

13

2

4

5

12

5、
6、
7、
9、
10、
11、

11 13

7

9

5

8

7

12

13

13

2

8

6

4

8

11

10

11

5、

8、

11

12

13

11

6

12

9

8

11

4、
6、
7、
8、

12

5、

4、

7、

10、

11

2、
9、

7、
10、

中曾根 康弘
中村 菊男
中村 守孝
中村 彰彦
中村 梯次
中村 梅吉
中尾 博之
中野 和仁
中路 雅弘
仲山 順一
長岡 実
長沼 弘毅
長村 輝彦
長野 士郎
奈須田 敬
奈良 靖彦
灘尾 弘吉
榑崎 泰昌
榑崎 弥之助

【に】

西広 整輝

西村 栄一

西村 英一

西村 直己

西村 友晴

西村 眞悟

西村 紀三郎

西田 剛

二階堂 進

【の】

乃木 希典

野中 広務

野田 孝

野田英二郎

野呂 恭一

【は】

羽仁 五郎

橋本登美三郎

橋本龍太郎

原 純夫

原 文兵衛

原山 義史

原田 憲

秦 郁彦

長谷川 峻

長谷川三千子

鳩山 一郎

鳩山威一郎

林 修三

林 大造

林 忠雄

林 健太郎

【ひ】

久光 重平

東恩納寛淳

平井 迪郎

平賀 健太

11、 2、 4、
12、 12、 8、 11、 9、 3、 9、 6、
11 13 8 6 13 13 9 13 10 5 13 7 13 7 11 6 7 13 10 2 11 13 11 13 2

平出 英夫
平松 守彦
平田敬一郎

【ふ】

船後 正道

船田 中

藤井 貞文

藤井 裕久

藤渡 辰信

藤波 孝生

二村 富久

福田 繁

福田 赳夫

福島 重雄

福島 讓二

【ほ】

細田 吉蔵

星野 直樹

保科善四郎

保利 茂

堀 太郎

堀江 薫雄

堀江 正夫

堀田 政孝

堀部 正男

本間 英郎

本田 早苗

8、 9、 10、 11、 12、 3、 4、
5、 10、 10、 11、 12、
3 2 13 7 13 8 3 12 4 4 12 9 11 13 8 9 6 13 9 2 4 5 7 3 1

宮川新一郎 宮崎清文 宮崎勇 宮下創平 【み】 眞鍋十藏 黛敏郎 増島俊之 増原恵吉 増原恵吉 前尾繁三郎 前田多良夫 前田多聞 前原一誠 松澤雄藏 松野頼三 松本善明 松本蒸治 松沢雄蔵 松前重義 松原正 松金久知 松橋忠光 松永勇 曲寿郎 丸山真男 丸山英人 丸山昂 【ま】

7、 3、 8、 11、 10、 2、 11、
 3 8 7 10 1 13 12 11 4 8 2 4 2 12 11 10 11 11 7 11 5 5 4 9 2 9 12

椋木瑳磨太 武藤謙二郎 村尾次郎 村田五郎 村田博 村田浩 村上倫太郎 村上信二郎 村上孝太郎 村上正邦 村松剛 村山富市 村山達雄 村井順 【む】 箕輪登 美濃部亮吉 美濃部達吉 水野成夫 水田三喜男 三木武夫 三島由紀夫 三重野康 三好達 三原朝雄 三ヶ月章 宮澤喜一 宮沢俊義

5、 4、 11、 6、 12、 9、 7、
 13 6 13 8 4 7 8 6 8 13 13 13 12 4 13 11 2 1 8 13 10 13 13 9 1 13 2

矢崎 新二
 八木 俊道
 八木 秀次
 山本啓志郎
 山本 卓眞
 山本 勝市
 山中 貞則
 山谷えり子
 山村 勝郎
 山口 二三
 山口 衛一
 山下 武利
 山下 元利
 安嶋 弥
 安川敬一郎
 安川 七郎
 安川 壮
 安原 美穂
 安原 正
 【や】
 門田 英郎
 百地 章
 森脇 将光
 森本 眞章
 森田 必勝
 森山 欽司
 森永貞一郎
 守屋 学治
 【も】

7、
 9、
 11、
 11、
 11、
 5、
 11、
 5、
 12、
 9、
 4、
 10、
 9、
 11、
 11、
 12、
 13、
 7、
 13、
 9、
 13、
 2、
 8

我妻 栄
 【わ】
 笠 信太郎
 【り】
 米田 建三
 吉野 俊彦
 吉本 宏
 吉田六左エ門
 吉田大次郎
 吉田小太郎
 吉田 茂子
 吉田 松陰
 吉田 庫三
 吉田 基子
 吉田 茂
 吉田 武
 吉村 真一
 吉瀬 維哉
 吉国 二郎
 吉原 政巳
 吉岡 一郎
 横田喜三郎
 【よ】
 湯本 武雄
 【ゆ】
 矢部 貞治

2
 1
 9
 8
 6
 9
 2
 2
 7
 9
 7
 2
 2
 2
 2
 5
 12
 9、
 9、
 12
 13
 8
 2
 3
 2、
 5

亘理	和田	和辻	渡邊	渡邊	渡邊	渡邊	渡邊	渡邊	渡部	渡瀬	若泉	若狭
彰	敏信	哲郎	恒雄	美智雄	正次郎	利夫	利亥	武誠	信	憲明	敬	得治

5、												
6、												
7、												
9、								2、				
11、								3、				
12	12	4	12	13	9	13	5	7	4	5	7	5 11

あとがき

本冊子は小田村四郎氏の平成十五年一月から平成十六年四月まで行われたオーラルヒストリーの記録である。

私が小田村氏に見知って頂いたのがどのような経緯でいつ頃であったか記憶が薄れているが、平成四年に兄上の寅二郎氏に、同氏が預かって整理をされていた「山本勝市関係文書」を国会図書館憲政資料室に寄贈してほしいとお願いした段階で、すでに小田村氏と知り合っているから、それ以前からであったろう。その後いろいろな機会にお目にかかっていたが、同氏が拓殖大学総長となられ、私を拓殖大学創立百年史編纂の顧問に依頼されたので、お目にかかる機会も増えた。そんなときには是非我々のオーラルヒストリープロジェクトに協力してほしいとご依頼して、ご快諾を得ていた。実際には平成十四年十一月にお伺いして、翌年一月から始めることのご了承を得た。

聞き手は私の他、佐道明広氏、武田知己氏とし、そして速記は丹羽清隆氏に依頼した。初回は別として、その後の質問項目の作成は、初期は武田氏が、そして小田村氏が防衛庁に向われた時代をお聞きした第四回以降は佐道氏が担当した。場所は政策研究大学院大学の虎ノ門にあるプロジェクトセンターの会議室。

一月二十二日の第一回はお生まれ（楫取素彦の子孫で、従って吉田松陰ともつながる家系）から白金小学校・府立高校、戦時の短縮で昭和十七年九月にそこを卒業し、東京帝国大学法学部に入学したが、十八年には陸軍に召集され、翌年陸軍経理学校で学んだ上で、航空本部のち航空総軍司令部で経理将校として働かれ、二十年の敗戦で召集解除になられるまでのことがらを伺った。第二回は三月七日で、二十年十月に復学、高文に合格し、翌年大蔵省に採用され、理財課、国庫課、外資課、為替第三課に配属され、更に東京財務局経理部徴収課勤務を経て、昭和二十四年主税局（後国税庁）からGHQに派遣され、GHQの中で働かれたという珍しい経験をお伺った。

四月二十五日の第三回では、昭和二十五年からの天王寺税務署長時代、二十七年からの為替局資金課課長補佐、そして三十年八月のIMF関係でのアメリカ訪問を経て、三十一年防衛庁経理課への出向というところまでのお話を伺った。六月四日の第四回では、前回の補足の後（この時、香川鉄蔵という大蔵省の方の追悼録をお持ち下さったが、その後も大蔵省・防衛庁関係者の追悼録をお持ち下さり、非売品のそれらはなかなか手に入らぬもので、お貸し頂いてコピーさせて頂いた）、防衛庁会計課の筆頭部員として概算要求を作って大蔵省と交渉する仕事について、防衛予算の実態について、MSAについてお話を伺い、更に昭和三

十二年に防衛局第一課に移り、長期計画担当として「防衛力整備計画」（後の一次防）にかかわったこと、更に、上司としての海原治氏（我々のインタビュー記録が刊行されている）についてお話を下さった。

七月七日の第五回では、前回の補足の後、前回の続きとして、「次期防衛力整備計画」（二次防）策定の作業（それが赤城構想として三十四年に発表された）、F X問題について伺った。八月六日の第六回では、例のように前回の補足（安保騒動についても）の後、昭和三十四年に大蔵省に戻られて為替局資金課課長補佐としての仕事、新たな国際収支統計を作ったことなど、そして翌三十五年名古屋国税局直税部長に就任されてのお仕事、更に昭和三十七年主計局の主計官として戻られ、法規課で農地報償問題、義務教育教科書無償問題、特別会計設置問題等への関わりを伺った。

九月十二日の第七回では、主計局時代の上司の方々について、そして三十九年に文部科学技術担当の主計官としての具体的な査定のお仕事の実態、国立大学の文理学部の変更問題、科学技術の大型施設の問題（原子力、ロケット、原子力船、巨大加速器等）について興味深いお話があった。十月十日の第八回では、前回の補足として特殊法人についてのお話の後、当時の政治家のお話、そして昭和四十一年法規課長時代の財政硬直化問題、在外財産補償問題、国債整理基金特別会計問題等について、更に昭和四十三年大臣官房調査企画課長の時期の為替相場問題の研究、福田大臣による「質的成長」の提唱、東欧及び東南アジア視察についてお話し下さった。

十一月十日の第九回では、前回の補足（大蔵省百周年事業、『戦後財政史』のこと）に続き、昭和四十五年の名古屋国税局長としてのお仕事、ちょうどこの時期の三島由紀夫事件のこと、そして昭和四十六年からの内閣審議室長時代のこと、雑多な任務を持っている内閣審議室の位置づけのこと、翌年防衛庁経理局長に就任されるまでのお話を伺った。十二月十一日の第十回では、その経理局長時代のお話を伺った。四次防決定をめぐる諸問題、特に防衛装備国産問題をめぐる混乱について、また四次防先取り問題をめぐる紛乱、「平和時の防衛力」「脱脅威論」という考え方、インフレと防衛費の困難について詳しいお話を下さった。

平成十六年に入って、一月二十二日の第十一回は、前回に引き続き、経理局長時代の、裁判関係（零石事件、長沼裁判）、F 4の空中給油装置問題について伺った。また昭和四十九年日銀の政策委員会大蔵代表に就任されたが、同年行政管理庁行政管理局長に就任された。その機構のこと、その時代の公務員の削減問題、特殊法人の整理問題、局の増設問題について伺った。二月二十四日の第十二回は、行政管理局長時代の続き、そして昭和五十一年からの行政管理事務次官時代にかけての、週休二日制の問題、個人情報保護の問題（国民総背番号制）、監察の仕事、うまくいかなかった資源エネルギー庁の省昇格問題、定年制の問題、地方事務官の問題を伺い、昭和五十三年退官し、農林漁業金融公庫副総裁として七年間を過ごされたが、そのお仕事

の話も簡単に伺った。

四月五日の第十三回は最終回として、行管庁時代の補足に続いて、金丸信氏の日本戦略研究センターへの参加とそこでの活動、昭和六十年から平成五年までの日銀の監事としての仕事、平成四年の天皇訪中反対運動のこと、平成六年の「戦没者追悼平和祈念館を考える会」の呼びかけ人になられたこと、平成七年に就任された拓殖大学総長として拓殖大学創立百周年事業をされたこと、「教科書正常化国民会議」のメンバーとして活動、「日本会議」「昭和の日推進国民ネットワーク」について、最後に総括的なお話を頂いて、終了した。

小田村氏は質問に対して実に誠実に対応して下さっただけでなく、こちらが質問項目に入れ忘れたことにも言及して下さった。我々の知らなかった事柄や細かいニュアンスをも説明して下さい、貴重な証言記録になったものと確信している。大蔵省関係者のお話としては私にとって最初であり、防衛関係ではこれまでの後藤田正晴・海原治・伊藤圭一・夏目晴雄（近く冊子化される）・大賀良平（同じく近く冊子化される）の諸氏の証言と付き合わせる事によって戦後警察予備隊から保安隊を経て今日の自衛隊・防衛庁に至る防衛政策の主要な部分がより明白になったものと思われる。

最後に、ざつくばらんに貴重なお話をして下さいただでなく、私どものお願いに対して快く「著述・寄稿目録」を作成して下さい小田村氏、インタビューとして一緒に進めて下さった佐道明広氏、武田知己氏、そして録音、テープ起しから速記録の編集までをして下さった丹羽清隆氏、連絡や修正の仕事をして下さったプロジェクト勤務の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

政策研究大学院大学教授

伊藤 隆

平成16年度 文部科学省科学研究費補助金 特別推進研究(COE)

研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕

発行：2004年9月30日《無断転載禁》

政策研究大学院大学（政策研究院）

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町2-2

Tel:03(3341)0458 Fax:03(3341)0446